

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第285集

大里郡川本町

如意遺跡 IV

大里農地防災事業六堰頭首工建設工事事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

— III —

<第1分冊>

2003

農林水産省 関東農政局
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



如意遺跡航空写真（平成12年3月撮影）



如意遺跡航空写真（平成12年10月撮影）

発刊に寄せて

埼玉県北部で一級河川荒川の中流域に広がる大里地域は、県下有数の農業地帯です。

六堰頭首工は、大里郡川本町と花園町にまたがり、荒川流域に広がる3,820haにかんがいするための取水施設です。六堰とは、荒川から取水する奈良堰、玉井堰、大麻生堰、成田堰、御正堰、吉見堰の六つの用水の総称です。

大里地域のかんがい用水は、江戸時代から順次開削整備されましたが、早ばつ等による水争いが絶えず繰り返されてきました。このような水利問題を解消させるため、昭和初期に取水堰を一箇所に統合し、現在の六堰頭首工が建設されました。

六堰は、建設されてから既に60年以上が経過し、本体の老朽化と荒川の河床低下等による機能の著しい低下や洪水の危険性が增大していました。また、周辺地域の都市化による土地利用の変化や農業用水の水質悪化等、深刻な問題を抱えています。

そこで、「大里農地防災事業計画」に基づき、六堰頭首工改築と基幹用水路の改修を行うこととなりました。この事業は、用水施設の機能回復と災害の未然防止および農業用水の水質改善を行い、農業用水の合理的利用、管理形態の適正化、農業生産環境の改善を図り、農業生産性の向上によって農業経営の安定化に寄与しようとするものであります。

本事業地内には、古墳時代後期から奈良・平安時代の集落跡である如意遺跡が確認されていました。これらが貴重な埋蔵文化財であるとの認識のもと、やむを得ず現状保存できない部分については、発掘調査を行い記録保存の措置をとりました。

そして昨年度、一昨年度に続き、本年度の調査成果を報告書にまとめ刊行のはこびとなりました。今回の報告書の刊行で本事業に係る発掘調査の最終報告となります。

これらの報告書が、郷土学習をはじめ、生涯学習、学術研究の基礎資料として、地域文化の向上のためにご利用いただければ幸いです。

平成15年3月

農林水産省関東農政局
大里農地防災事業所

所 長 近 村 諄

序

埼玉県の中核部を流れる荒川は、流域の田畑を潤し、伏流水となって各地で湧き出した水は常に人々の生活と密接に関わりをもってきました。

また、毎年冬の到来とともに、川本町の荒川には、数十羽のコハクチョウが飛来し、人々の目を楽しませています。

現在の川本町は、この荒川の恵みによって、首都圏における重要な食糧生産基地として、また観賞用の花などの栽培も盛んに行われ、おいに発展が期待されています。

川本町西部の荒川には、農業用水の取水堰である六堰頭首工があります。昭和14年に建設された六堰頭首工は、老朽化が進み、また周辺地域においては水質悪化や湧水の枯渇などのさまざまな問題が生じてきました。

こうした事態に対応するため、農林水産省が主体となり、基幹土地改良施設と、地区内水利施設の機能回復を目的とした「大里農地防災事業計画」に基づき、六堰頭首工改築工事が計画されました。

事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として、如意遺跡が該当しておりました。これらの埋蔵文化財の取扱いについては、関係諸機関で慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。

発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、農林水産省関東農政局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

如意遺跡は発掘調査の結果、古墳時代後期から奈良・平安時代にわたる大規模な集落遺跡であることが明らかになり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの貴重な埋蔵文化財が発見されました。とくに500軒を越す竪穴住居跡からは、土師器・須恵器などの土器類や金属製品が出土し、当地域の歴史を解明する上で貴重な発見となりました。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財の保護・普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、農林水産省関東農政局、川本町教育委員会ならびに地元関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 桐川卓雄

例 言

1. 本書は、埼玉県大里郡川本町大字畠山に所在する如意遺跡の発掘調査報告書である。本事業における如意遺跡の報告書は、当事業団から以下のように刊行されている。
『如意遺跡』 事業団報告書第264集
『如意Ⅲ／川端』 事業団報告書第276集
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査に対する指示通知は、以下のとおりである。
如意遺跡（NYI）
埼玉県大里郡川本町大字畠山392-2他
平成9年12月5日付け教文第2-147号
埼玉県大里郡川本町大字畠山394他
平成10年5月13日付け教文第2-24号
埼玉県大里郡川本町大字畠山440-1他
平成10年5月13日付け教文第2-25号
埼玉県大里郡川本町大字畠山395他
平成11年9月28日付け教文第2-84号
埼玉県大里郡川本町大字畠山396他
平成12年4月12日付け教文第2-2号
3. 発掘調査は、大里農地防災事業六堰頭首工建設工事事業に伴う事前調査であり、埼玉県生涯学習部文化財保護課が調整し、農林水産省関東農政局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については利根川章彦、剣持和夫、山本 禎、岩瀬 譲、瀧瀬芳之、大谷徹、上野真由美、栗岡 潤、渡辺清志が担当し、平成9年10月1日から平成12年11月30日まで5次に分けて断続的に実施した。整理・報告書作成作業は、岩瀬・大谷・栗岡が担当し、平成14年5月10日から平成15年3月24日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量、空中写真撮影および空中測量は、新日本航測株式会社に委託した。
6. 写真は、発掘調査時の撮影を各担当者が行い、遺物の撮影は大屋道則が行った。
7. 出土品の整理・図版の作成は、縄文土器・石器を黒坂禎二、金属器を磯矢治彦、その他を石塚香、東出多恵の協力を得て岩瀬・大谷・栗岡が行った。
8. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、VII-1を黒坂が、それ以外を岩瀬・大谷・栗岡が協議の上行った。
9. 本書の編集は、岩瀬・大谷・栗岡が行った。
10. 本書に掲載した資料は、平成15年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
11. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御指導を賜った。記して感謝の意を表します。
村松 篤 岡本千里 川本町教育委員会

凡 例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位は、すべて座標北を示す。
2. 遺跡におけるグリッドの設置は、国土標準平面直角座標に基づいて設置しており、10m×10mの方眼である。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向は西から東へ1、2、3…、南北方向は北から南へA、B、C…と付けている。
(例 L-18グリッド)
4. 本書の本文・挿図・付図・表などの遺構の略号は以下のとおりである。

S J 竪穴住居跡	S B 掘立柱建物跡
S K 土坑	S D 溝跡
S F 窯跡	S T 墓壙
S X 性格不明遺構	G P グリッドピット
5. 本文中の挿図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

調査区全測図	1：400	1：800	1：1,600
遺構図		1：60	
土器実測図		1：4	
紡錘車・砥石・土錘		1：3	
石製模造品・金属製品類		1：2	
玉類		1：1	
縄文土器・打製石斧		1：3	
石鏃		1：2	
6. 遺物実測図の須恵器は、断面を黒塗りにした。網は20%が赤彩、40%が黒色処理を、スクリーントーンは釉の範囲を表す。中心線の一点破線は復元実測を示す。
7. 遺構図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。
8. 遺構図中のスクリーントーンは、カマドの焼土化範囲を示す。
9. 遺物観察表は次のとおりである。
 - ・口径・器高・底径は、cmを単位とする。
 - ・（ ）内の数値は推定値である。
 - ・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。
A：石英 B：白色粒子 C：長石
D：角閃石 E：赤色粒子 F：黒色粒子
G：雲母 H：片岩 I：白色針状物質
J：砂粒 K：チャート L：小礫
 - ・焼成は、良好、普通、不良の3段階に分けた。
 - ・残存率は、図示した器形の部分に対して%で表した。
 - ・出土位置の「床」は床面直上、「+5」は床面から5cm上からの出土を表す。
10. 土錘観察表は次のとおりである。
 - ・長さ・径・孔径はcmを、重さはgを単位とし、径は最大径である。
 - ・（ ）は現存長・径・重さを表す。
 - ・胎土の特徴を以下のように区分した。
A：赤色粒子少量+大粒砂粒+小石・片岩
B：白色微粒子多量+小石
C：白色微粒子多量+赤色粒子
 - ・分類は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第241集『如意／如意南』のP.161-162を参照されたい。
11. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図と、国土地理院の承認を受けて作成された川本町地形図1/2,500を使用した。

挿 図 目 次

第1図	調査区と調査年度	3	第36図	第272号住居跡出土遺物	48
第2図	埼玉県の地形	7	第37図	第273号住居跡	49
第3図	周辺の遺跡	8	第38図	第273号住居跡出土遺物(1)	50
第4図	調査区周辺の地形	12	第39図	第273号住居跡出土遺物(2)	51
第5図	如意遺跡全測図	15	第40図	第274号住居跡	53
第6図	如意遺跡E・F・G区全測図	16	第41図	第274号住居跡出土遺物	53
第7図	E区全測図	17	第42図	第275号住居跡	54
第8図	第257号住居跡出土遺物	18	第43図	第275号住居跡出土遺物	54
第9図	第257号住居跡	18	第44図	第276・552号住居跡	55
第10図	第258・259号住居跡	20	第45図	第276号住居跡出土遺物	56
第11図	第258号住居跡出土遺物	21	第46図	第552号住居跡出土遺物	56
第12図	第260号住居跡出土遺物	22	第47図	第277号住居跡	57
第13図	第260・261号住居跡	23	第48図	第277号住居跡出土遺物	58
第14図	第262号住居跡	24	第49図	第278号住居跡	58
第15図	第262号住居跡出土遺物	25	第50図	第278号住居跡出土遺物	59
第16図	第263号住居跡	26	第51図	第279号住居跡	60
第17図	第263号住居跡出土遺物	27	第52図	第279号住居跡出土遺物	61
第18図	第264号住居跡	29	第53図	第389・399号住居跡	62
第19図	第264号住居跡出土遺物	30	第54図	第389号住居跡出土遺物	62
第20図	第265・266号住居跡	32	第55図	第399号住居跡出土遺物	63
第21図	第265号住居跡出土遺物	33	第56図	第390号住居跡出土遺物	63
第22図	第266号住居跡出土遺物	33	第57図	第390・391号住居跡	64
第23図	第267号住居跡出土遺物	35	第58図	第391号住居跡出土遺物	65
第24図	第267号住居跡	36	第59図	第392号住居跡	66
第25図	第268号住居跡	37	第60図	第392号住居跡出土遺物	66
第26図	第268号住居跡出土遺物	38	第61図	第396号住居跡	67
第27図	第269号住居跡出土遺物	38	第62図	第396号住居跡出土遺物	68
第28図	第269号住居跡	39	第63図	第401号住居跡	69
第29図	第270号住居跡	40	第64図	第402号住居跡	70
第30図	第270号住居跡出土遺物	41	第65図	第475・476号住居跡	71
第31図	第271号住居跡	42	第66図	第475号住居跡出土遺物	71
第32図	第271号住居跡出土遺物	43	第67図	第476号住居跡出土遺物	72
第33図	第271・272号住居跡出土遺物(1)	44	第68図	第477号住居跡出土遺物	73
第34図	第271・272号住居跡出土遺物(2)	45	第69図	第477号住居跡	74
第35図	第272号住居跡	47	第70図	第478号住居跡	75

第71图	第478号住居跡出土遺物	75	第108图	第507号住居跡出土遺物	113
第72图	第480号住居跡	76	第109图	第508号住居跡	116
第73图	第480号住居跡出土遺物	77	第110图	第508号住居跡出土遺物 (1)	117
第74图	第481号住居跡	79	第111图	第508号住居跡出土遺物 (2)	118
第75图	第481号住居跡出土遺物 (1)	80	第112图	第510号住居跡	119
第76图	第481号住居跡出土遺物 (2)	81	第113图	第510号住居跡出土遺物	120
第77图	第483号住居跡	83	第114图	第511号住居跡	122
第78图	第484·491号住居跡	84	第115图	第511号住居跡出土遺物	123
第79图	第484·491号住居跡出土遺物	84	第116图	第513号住居跡出土遺物	124
第80图	第486号住居跡出土遺物	85	第117图	第513号住居跡	124
第81图	第486·489号住居跡	86	第118图	第514·515·516号住居跡 (1)	126
第82图	第489号住居跡出土遺物 (1)	87	第119图	第514·515·516号住居跡 (2)	127
第83图	第489号住居跡出土遺物 (2)	88	第120图	第514号住居跡出土遺物	127
第84图	第490号住居跡出土遺物	90	第121图	第496·514·516号住居跡出土遺物	128
第85图	第487·490号住居跡	91	第122图	第514·515号住居跡出土遺物	129
第86图	第492号住居跡	92	第123图	第514·515·516号住居跡出土遺物	130
第87图	第492号住居跡出土遺物	92	第124图	第515号住居跡出土遺物	132
第88图	第493号住居跡	94	第125图	第516号住居跡出土遺物	132
第89图	第493号住居跡出土遺物	95	第126图	第517号住居跡	133
第90图	第496号住居跡	96	第127图	第517号住居跡出土遺物	134
第91图	第496号住居跡出土遺物	97	第128图	第518号住居跡	135
第92图	第498·500号住居跡	100	第129图	第518号住居跡出土遺物	136
第93图	第498号住居跡出土遺物	101	第130图	第519号住居跡	137
第94图	第500号住居跡出土遺物	102	第131图	第519号住居跡出土遺物	138
第95图	第499号住居跡	103	第132图	第519·520号住居跡出土遺物	139
第96图	第499号住居跡出土遺物	104	第133图	第520号住居跡	140
第97图	第501·503·504号住居跡	105	第134图	第520号住居跡出土遺物	140
第98图	第501号住居跡出土遺物	106	第135图	第524号住居跡	141
第99图	第503号住居跡出土遺物	106	第136图	第524号住居跡出土遺物	142
第100图	第502·509·512号住居跡	107	第137图	第525号住居跡	143
第101图	第502号住居跡出土遺物 (1)	108	第138图	第525号住居跡出土遺物	144
第102图	第502号住居跡出土遺物 (2)	109	第139图	第526号住居跡 (1)	144
第103图	第509号住居跡出土遺物	110	第140图	第526号住居跡 (2)	145
第104图	第512号住居跡出土遺物	110	第141图	第526号住居跡出土遺物	146
第105图	第506号住居跡出土遺物	111	第142图	第527号住居跡 (1)	146
第106图	第506·507号住居跡	112	第143图	第527号住居跡 (2)	147
第107图	第506·507号住居跡出土遺物	113	第144图	第527号住居跡出土遺物	148

第145図	第528号住居跡出土遺物	149	第182図	第283号住居跡出土遺物	182
第146図	第528号住居跡	150	第183図	第415号住居跡出土遺物	183
第147図	第529号住居跡	151	第184図	第415・422号住居跡	184
第148図	第529号住居跡出土遺物	151	第185図	第417号住居跡出土遺物	185
第149図	第530・531号住居跡(1)	152	第186図	第417号住居跡	185
第150図	第530・531号住居跡(2)	153	第187図	第418号住居跡	186
第151図	第530号住居跡出土遺物	154	第188図	第418号住居跡出土遺物(1)	188
第152図	第530・531号住居跡出土遺物	155	第189図	第418号住居跡出土遺物(2)	189
第153図	第531号住居跡出土遺物	156	第190図	第419号住居跡出土遺物	189
第154図	第533・534・532号住居跡	157	第191図	第419号住居跡	190
第155図	第532号住居跡出土遺物	157	第192図	第421号住居跡出土遺物	190
第156図	第533号住居跡出土遺物	158	第193図	第421号住居跡	191
第157図	第540号住居跡出土遺物	158	第194図	第423号住居跡	192
第158図	第540・544号住居跡	159	第195図	第423号住居跡出土遺物	193
第159図	第546号住居跡	160	第196図	第424号住居跡	194
第160図	第546号住居跡出土遺物	161	第197図	第425号住居跡出土遺物	194
第161図	第548号住居跡	161	第198図	第424号住居跡出土遺物	195
第162図	第548号住居跡出土遺物	162	第199図	第425号住居跡	196
第163図	第17号堀立柱建物跡出土遺物	162	第200図	第426号住居跡出土遺物	196
第164図	第22号堀立柱建物跡出土遺物	162	第201図	第426号住居跡	197
第165図	第17号堀立柱建物跡	163	第202図	第427・439号住居跡	198
第166図	第22号堀立柱建物跡(1)	164	第203図	第427号住居跡出土遺物	199
第167図	第22号堀立柱建物跡(2)	165	第204図	第439号住居跡出土遺物	200
第168図	第146～156・158号土坑	167	第205図	第428号住居跡	201
第169図	第159～171号土坑	169	第206図	第428号住居跡出土遺物	201
第170図	第172～177・261号土坑	171	第207図	第430号住居跡	202
第171図	土坑出土遺物	172	第208図	第430号住居跡出土遺物	203
第172図	グリッドピット	173	第209図	第431号住居跡出土遺物	203
第173図	グリッドピット出土遺物	174	第210図	第431号住居跡	204
第174図	F区全測図	175	第211図	第432号住居跡	205
第175図	第180号住居跡	176	第212図	第432号住居跡出土遺物	206
第176図	第180号住居跡出土遺物	176	第213図	第433号住居跡出土遺物	206
第177図	第181号住居跡	177	第214図	第433号住居跡	207
第178図	第181号住居跡出土遺物	178	第215図	第434号住居跡出土遺物	208
第179図	第182号住居跡	179	第216図	第434号住居跡	208
第180図	第182号住居跡出土遺物	180	第217図	第435号住居跡	209
第181図	第283号住居跡	181	第218図	第435号住居跡出土遺物	209

第219图	第436号住居迹出土遺物	210	第256图	第455号住居迹出土遺物	243
第220图	第436号住居迹	211	第257图	第456号住居迹	244
第221图	第437号住居迹出土遺物	212	第258图	第456号住居迹出土遺物	245
第222图	第437号住居迹	213	第259图	第457号住居迹	246
第223图	第438号住居迹	215	第260图	第457号住居迹出土遺物	247
第224图	第438号住居迹出土遺物	216	第261图	第458号住居迹出土遺物	247
第225图	第440号住居迹	217	第262图	第458号住居迹	247
第226图	第440号住居迹出土遺物	217	第263图	第459号住居迹	248
第227图	第441号住居迹	219	第264图	第459号住居迹出土遺物	249
第228图	第441号住居迹出土遺物	219	第265图	第460·537号住居迹	250
第229图	第442·443号住居迹	220	第266图	第460号住居迹出土遺物	251
第230图	第443号住居迹出土遺物	220	第267图	第461号住居迹	252
第231图	第444号住居迹出土遺物	221	第268图	第461号住居迹出土遺物	253
第232图	第444号住居迹	222	第269图	第462号住居迹	254
第233图	第445号住居迹	223	第270图	第462号住居迹出土遺物	255
第234图	第445号住居迹出土遺物	224	第271图	第463号住居迹出土遺物	256
第235图	第447号住居迹出土遺物(1)	225	第272图	第463号住居迹	256
第236图	第447号住居迹(1)	226	第273图	第464号住居迹	257
第237图	第447号住居迹(2)	227	第274图	第464号住居迹出土遺物	258
第238图	第447号住居迹出土遺物(2)	227	第275图	第465号住居迹	259
第239图	第448号住居迹	229	第276图	第465号住居迹出土遺物	260
第240图	第448号住居迹出土遺物(1)	230	第277图	第466号住居迹	261
第241图	第448号住居迹出土遺物(2)	231	第278图	第466号住居迹出土遺物	261
第242图	第449号住居迹	232	第279图	第467号住居迹	262
第243图	第449号住居迹出土遺物	233	第280图	第467号住居迹出土遺物	263
第244图	第450号住居迹出土遺物	233	第281图	第468号住居迹出土遺物	263
第245图	第450号住居迹	234	第282图	第468号住居迹	263
第246图	第451号住居迹	235	第283图	第469号住居迹	264
第247图	第451号住居迹出土遺物	235	第284图	第469号住居迹出土遺物	265
第248图	第452号住居迹(1)	236	第285图	第470号住居迹	266
第249图	第452号住居迹(2)	237	第286图	第470号住居迹出土遺物	267
第250图	第452号住居迹出土遺物	238	第287图	第471号住居迹	268
第251图	第453号住居迹	240	第288图	第471号住居迹出土遺物	269
第252图	第453号住居迹出土遺物	241	第289图	第472号住居迹	270
第253图	第454号住居迹	242	第290图	第473号住居迹	271
第254图	第454号住居迹出土遺物	242	第291图	第473号住居迹出土遺物	271
第255图	第455号住居迹	243	第292图	第474号住居迹	272

第293区	第479号住居跡	273	第330区	第560号住居跡出土遺物	297
第294区	第479号住居跡出土遺物	273	第331区	第13号堀立柱建物跡	299
第295区	第482号住居跡	274	第332区	第14号堀立柱建物跡	300
第296区	第482号住居跡出土遺物	275	第333区	第14号堀立柱建物跡出土遺物	300
第297区	第485号住居跡出土遺物	275	第334区	第15号堀立柱建物跡出土遺物	301
第298区	第485号住居跡	276	第335区	第15号堀立柱建物跡	301
第299区	第488号住居跡	277	第336区	第16号堀立柱建物跡出土遺物	302
第300区	第488号住居跡出土遺物	277	第337区	第16号堀立柱建物跡	302
第301区	第494号住居跡	278	第338区	第18号堀立柱建物跡出土遺物	303
第302区	第494号住居跡出土遺物	278	第339区	第18号堀立柱建物跡	304
第303区	第495号住居跡	279	第340区	第19号堀立柱建物跡出土遺物	305
第304区	第495号住居跡出土遺物	279	第341区	第19号堀立柱建物跡	306
第305区	第497号住居跡	280	第342区	第20号堀立柱建物跡	307
第306区	第505号住居跡	281	第343区	第20号堀立柱建物跡出土遺物	308
第307区	第505号住居跡出土遺物	281	第344区	第21号堀立柱建物跡	308
第308区	第535号住居跡出土遺物	282	第345区	第23号堀立柱建物跡	309
第309区	第535号住居跡	282	第346区	第23号堀立柱建物跡出土遺物	310
第310区	第536号住居跡	283	第347区	第88～95・248号土坑	312
第311区	第536号住居跡出土遺物	283	第348区	第249～255・258～260号土坑	314
第312区	第538号住居跡	284	第349区	土坑出土遺物 (1)	315
第313区	第538号住居跡出土遺物	284	第350区	土坑出土遺物 (2)	316
第314区	第539号住居跡出土遺物	285	第351区	土坑出土遺物 (3)	317
第315区	第539号住居跡	286	第352区	第2号溝跡	319
第316区	第553号住居跡	287	第353区	第14号性格不明遺構	319
第317区	第553号住居跡出土遺物	288	第354区	第15号性格不明遺構	320
第318区	第554号住居跡出土遺物	289	第355区	第16号性格不明遺構	320
第319区	第554号住居跡	289	第356区	第17号性格不明遺構	321
第320区	第555号住居跡	290	第357区	性格不明遺構出土遺物	321
第321区	第556号住居跡	291	第358区	グリッドピット	322
第322区	第556号住居跡出土遺物	291	第359区	グリッドピット出土遺物	322
第323区	第557号住居跡	292	第360区	G区全測区	323
第324区	第557号住居跡出土遺物	293	第361区	第280号住居跡	324
第325区	第558号住居跡	294	第362区	第280号住居跡出土遺物	325
第326区	第558号住居跡出土遺物	295	第363区	第281号住居跡	326
第327区	第559号住居跡出土遺物	295	第364区	第281号住居跡出土遺物	327
第328区	第559号住居跡	296	第365区	第284号住居跡	328
第329区	第560号住居跡	297	第366区	第284号住居跡出土遺物	328

第367图	第285号住居迹出土遺物	· · · · · ·	329	第404图	第303号住居迹出土遺物	· · · · · ·	360
第368图	第285号住居迹	· · · · · ·	329	第405图	第303号住居迹	· · · · · ·	361
第369图	第286号住居迹	· · · · · ·	330	第406图	第304号住居迹	· · · · · ·	362
第370图	第286号住居迹出土遺物	· · · · · ·	331	第407图	第304号住居迹出土遺物	· · · · · ·	363
第371图	第287号住居迹	· · · · · ·	332	第408图	第305号住居迹	· · · · · ·	364
第372图	第287号住居迹出土遺物	· · · · · ·	333	第409图	第305号住居迹出土遺物	· · · · · ·	365
第373图	第288号住居迹	· · · · · ·	334	第410图	第306号住居迹	· · · · · ·	366
第374图	第288号住居迹出土遺物 (1)	· · · · · ·	335	第411图	第306号住居迹出土遺物	· · · · · ·	367
第375图	第288号住居迹出土遺物 (2)	· · · · · ·	336	第412图	第307号住居迹	· · · · · ·	369
第376图	第289号住居迹	· · · · · ·	337	第413图	第307号住居迹出土遺物	· · · · · ·	369
第377图	第289号住居迹出土遺物	· · · · · ·	338	第414图	第308号住居迹	· · · · · ·	370
第378图	第290号住居迹	· · · · · ·	339	第415图	第309号住居迹	· · · · · ·	371
第379图	第290号住居迹出土遺物	· · · · · ·	340	第416图	第309号住居迹出土遺物	· · · · · ·	372
第380图	第291号住居迹出土遺物	· · · · · ·	340	第417图	第309·318号住居迹出土遺物	· · · · · ·	373
第381图	第291号住居迹	· · · · · ·	341	第418图	第310号住居迹出土遺物	· · · · · ·	373
第382图	第292号住居迹	· · · · · ·	342	第419图	第310号住居迹	· · · · · ·	374
第383图	第292号住居迹出土遺物	· · · · · ·	343	第420图	第311号住居迹出土遺物	· · · · · ·	375
第384图	第293号住居迹出土遺物	· · · · · ·	343	第421图	第311号住居迹	· · · · · ·	375
第385图	第293号住居迹	· · · · · ·	344	第422图	第312号住居迹出土遺物	· · · · · ·	376
第386图	第294号住居迹	· · · · · ·	345	第423图	第312号住居迹	· · · · · ·	376
第387图	第294号住居迹出土遺物	· · · · · ·	346	第424图	第314号住居迹出土遺物	· · · · · ·	377
第388图	第295号住居迹出土遺物	· · · · · ·	346	第425图	第314·420号住居迹	· · · · · ·	378
第389图	第295号住居迹	· · · · · ·	347	第426图	第315号住居迹	· · · · · ·	379
第390图	第296号住居迹	· · · · · ·	348	第427图	第315号住居迹出土遺物	· · · · · ·	380
第391图	第296号住居迹出土遺物	· · · · · ·	349	第428图	第316号住居迹出土遺物	· · · · · ·	380
第392图	第297号住居迹	· · · · · ·	350	第429图	第316号住居迹	· · · · · ·	381
第393图	第297号住居迹出土遺物 (1)	· · · · · ·	351	第430图	第317号住居迹	· · · · · ·	382
第394图	第297号住居迹出土遺物 (2)	· · · · · ·	352	第431图	第317号住居迹出土遺物	· · · · · ·	382
第395图	第298号住居迹出土遺物	· · · · · ·	353	第432图	第318号住居迹	· · · · · ·	383
第396图	第298号住居迹	· · · · · ·	354	第433图	第318号住居迹出土遺物	· · · · · ·	383
第397图	第299号住居迹	· · · · · ·	355	第434图	第319·321号住居迹	· · · · · ·	384
第398图	第299号住居迹出土遺物	· · · · · ·	355	第435图	第319号住居迹出土遺物 (1)	· · · · · ·	385
第399图	第300号住居迹	· · · · · ·	356	第436图	第319号住居迹出土遺物 (2)	· · · · · ·	386
第400图	第300号住居迹出土遺物	· · · · · ·	357	第437图	第320号住居迹出土遺物	· · · · · ·	388
第401图	第301号住居迹	· · · · · ·	358	第438图	第320号住居迹	· · · · · ·	389
第402图	第302号住居迹	· · · · · ·	358	第439图	第322号住居迹	· · · · · ·	390
第403图	第302号住居迹出土遺物	· · · · · ·	359	第440图	第322号住居迹出土遺物	· · · · · ·	391

第441图	第323号住居迹 (1)	392	第478图	第344号住居迹	422
第442图	第323号住居迹 (2)	393	第479图	第344号住居迹出土遺物	423
第443图	第323号住居迹出土遺物 (1)	394	第480图	第345号住居迹	424
第444图	第323号住居迹出土遺物 (2)	395	第481图	第346号住居迹	425
第445图	第324号住居迹出土遺物	397	第482图	第346号住居迹出土遺物	426
第446图	第324号住居迹	398	第483图	第347号住居迹	427
第447图	第325号住居迹出土遺物	398	第484图	第347号住居迹出土遺物	428
第448图	第325号住居迹	399	第485图	第348号住居迹	429
第449图	第327号住居迹	401	第486图	第348号住居迹出土遺物	430
第450图	第328·330号住居迹	402	第487图	第349号住居迹	431
第451图	第328号住居迹出土遺物	403	第488图	第349号住居迹出土遺物	431
第452图	第330号住居迹出土遺物	404	第489图	第350号住居迹	432
第453图	第329号住居迹	405	第490图	第350号住居迹出土遺物	432
第454图	第329号住居迹出土遺物	405	第491图	第351号住居迹	433
第455图	第331号住居迹	406	第492图	第351号住居迹出土遺物	434
第456图	第331号住居迹出土遺物	406	第493图	第352号住居迹出土遺物	434
第457图	第332号住居迹	407	第494图	第352号住居迹	435
第458图	第332号住居迹出土遺物	408	第495图	第353号住居迹 (1)	436
第459图	第333号住居迹	409	第496图	第353号住居迹 (2)	437
第460图	第333号住居迹出土遺物	410	第497图	第353号住居迹出土遺物	438
第461图	第334号住居迹	410	第498图	第354号住居迹	439
第462图	第335号住居迹出土遺物	411	第499图	第354号住居迹出土遺物	440
第463图	第335号住居迹	411	第500图	第355号住居迹 (1)	440
第464图	第336号住居迹	412	第501图	第355号住居迹 (2)	441
第465图	第336号住居迹出土遺物	412	第502图	第355号住居迹出土遺物	442
第466图	第337号住居迹	413	第503图	第356号住居迹出土遺物	443
第467图	第337号住居迹出土遺物	414	第504图	第356号住居迹	443
第468图	第338号住居迹	415	第505图	第357号住居迹	444
第469图	第338号住居迹出土遺物	416	第506图	第357号住居迹出土遺物	445
第470图	第339号住居迹出土遺物	416	第507图	第358号住居迹出土遺物	446
第471图	第339号住居迹	417	第508图	第358号住居迹	446
第472图	第340号住居迹	418	第509图	第359号住居迹	447
第473图	第340号住居迹出土遺物	419	第510图	第359号住居迹出土遺物	447
第474图	第341号住居迹	419	第511图	第360号住居迹	448
第475图	第342号住居迹	420	第512图	第360号住居迹出土遺物	448
第476图	第343号住居迹	421	第513图	第406号住居迹	449
第477图	第343号住居迹出土遺物	421	第514图	第407号住居迹出土遺物	449

第515図	第407号住居跡	450	第544図	グリッド出土遺物 (3)	481
第516図	第408号住居跡出土遺物	450	第545図	表採出土遺物 (1)	484
第517図	第408号住居跡	451	第546図	表採出土遺物 (2)	485
第518図	第409号住居跡	452	第547図	第Ⅰ期の土器	489
第519図	第409号住居跡出土遺物	453	第548図	第Ⅱ期の土器	490
第520図	第410号住居跡	454	第549図	第Ⅲ期の土器	491
第521図	第411号住居跡	454	第550図	第Ⅳ期の土器	493
第522図	第411号住居跡出土遺物	455	第551図	第Ⅴ期の土器	495
第523図	第412号住居跡 (1)	456	第552図	第Ⅵ期の土器	496
第524図	第412号住居跡出土遺物	457	第553図	第Ⅶ期の土器	497
第525図	第412号住居跡 (2)	457	第554図	第Ⅷ期の土器	499
第526図	第413号住居跡	458	第555図	第Ⅸ期の土器	501
第527図	第414号住居跡出土遺物	459	第556図	第Ⅹ・ⅩⅠ期の土器	502
第528図	第414号住居跡 (1)	459	第557図	第ⅩⅡ期の土器	504
第529図	第414号住居跡 (2)	460	第558図	第ⅩⅢ期の土器	506
第530図	第416号住居跡	461	第559図	第ⅩⅣ期の土器	507
第531図	第429号住居跡	462	第560図	第ⅩⅤ・ⅩⅥ期の土器	509
第532図	第429号住居跡出土遺物	463	第561図	桜沢窯跡・台耕地遺跡遺跡出土土器	512
第533図	第178～181・183～190号土坑	464	第562図	集落の区分	513
第534図	第191～201号土坑	466	第563図	第Ⅰ・Ⅱ期の集落	515
第535図	第202～210号土坑	468	第564図	第Ⅲ・Ⅳ期の集落	516
第536図	第245～247・256～257号土坑	470	第565図	第Ⅴ・Ⅵ期の集落	517
第537図	土坑出土遺物 (1)	471	第566図	第Ⅶ・Ⅷ期の集落	519
第538図	土坑出土遺物 (2)	472	第567図	第Ⅸ・Ⅹ期の集落	520
第539図	縄文時代の遺物 (1)	475	第568図	第ⅩⅠ・ⅩⅡ期の集落	521
第540図	縄文時代の遺物 (2)	476	第569図	第ⅩⅢ・ⅩⅣ期の集落	523
第541図	縄文時代の遺物 (3)	477	第570図	第ⅩⅤ・ⅩⅥ期の集落	524
第542図	グリッド出土遺物 (1)	479	第571図	土錘分類図	527
第543図	グリッド出土遺物 (2)	480	第572図	第440号住居跡出土土錘	531

図 版 目 次

図版 1	E・F・G区 E区南部	第284号住居跡
図版 2	G区航空写真 G区東部	図版19 第284号住居跡カマド 第286号住居跡
図版 3	181号住居跡・第92号土坑 第181号住居跡カマド周辺遺物出土状況	図版20 第286号住居跡カマド 第286号住居跡貯蔵穴
図版 4	第258・259号住居跡 第258号住居跡カマド	図版21 第287号住居跡 第287号住居跡カマド
図版 5	第262・263号住居跡 第262号住居跡カマド	図版22 第287号住居跡遺物出土状況 第287号住居跡遺物出土状況
図版 6	第264号住居跡 第264号住居跡カマド	図版23 第288号住居跡カマド 第289号住居跡
図版 7	第265号住居跡 第265号住居跡カマド	図版24 第290号住居跡 第290号住居跡カマド
図版 8	第266号住居跡 第266号住居跡カマド	図版25 第291号住居跡 第292号住居跡
図版 9	第267号住居跡 第267号住居跡カマド	図版26 第294号住居跡 第297号住居跡
図版10	第268号住居跡 第268号住居跡カマド	図版27 第297号住居跡遺物出土状況 第297号住居跡カマド
図版11	第269号住居跡 第271号住居跡	図版28 第297号住居跡カマド遺物出土状況 第300号住居跡
図版12	第271号住居跡カマド 第274号住居跡	図版29 第300号住居跡カマド 第302号住居跡
図版13	第275号住居跡 第275号住居跡カマド	図版30 第302号住居跡カマド 第303号住居跡
図版14	第278号住居跡遺物出土状況 第278号住居跡カマド	図版31 第303号住居跡カマド 第304号住居跡
図版15	第278号住居跡貯蔵穴 第280号住居跡	図版32 第305号住居跡 第305号住居跡カマド
図版16	第280号住居跡カマド 第281号住居跡	図版33 第305号住居跡貯蔵穴 第306号住居跡
図版17	第281号住居跡カマド 第283号住居跡	図版34 第307号住居跡 第307号住居跡カマド
図版18	第283号住居跡遺物出土状況	図版35 第307号住居跡内1号土坑 第307号住居跡内2号土坑

図版36	第308号住居跡 第308号住居跡カマド	第343号住居跡カマド
図版37	第309号住居跡 第309号住居跡カマド	図版55 第344号住居跡 第344号住居跡カマド
図版38	第310号住居跡 第310号住居跡カマド	図版56 第345号住居跡 第346号住居跡
図版39	第310号住居跡遺物出土状況 第311号住居跡	図版57 第346号住居跡カマド 第348・410号住居跡
図版40	第312号住居跡 第315号住居跡	図版58 第348号住居跡カマド 第349号住居跡
図版41	第315号住居跡カマド周辺遺物出土状況 第316号住居跡	図版59 第349号住居跡カマド 第350号住居跡
図版42	第316号住居跡カマド 第322号住居跡	図版60 第350号住居跡カマド 第351号住居跡
図版43	第322号住居跡カマド 第323号住居跡	図版61 第352号住居跡 第352号住居跡カマド
図版44	第323号住居跡カマド 第323号住居跡貯蔵穴	図版62 第353号住居跡 第353号住居跡カマド
図版45	第323号住居跡遺物出土状況 第328号住居跡	図版63 第353号住居跡貯蔵穴 第353号住居跡遺物出土状況
図版46	第328号住居跡カマド 第328号住居跡貯蔵穴遺物出土状況	図版64 第354号住居跡 第354号住居跡カマド遺物出土状況
図版47	第328号住居跡遺物出土状況 第332号住居跡	図版65 第354号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第355号住居跡
図版48	第332号住居跡カマド遺物出土状況 第332号住居跡貯蔵穴遺物出土状況	図版66 第355号住居跡カマド 第357号住居跡
図版49	第332号住居跡遺物出土状況 第333号住居跡貯蔵穴遺物出土状況	図版67 第359号住居跡カマド 第360号住居跡
図版50	第336号住居跡 第336号住居跡カマド	図版68 第360号住居跡カマド 第391号住居跡カマド
図版51	第337・338号住居跡 第337号住居跡カマド	図版69 第411号住居跡 第411号住居跡カマド
図版52	第338号住居跡 第338号住居跡カマド	図版70 第412号住居跡 第415・422号住居跡
図版53	第339号住居跡 第340号住居跡	図版71 第415号住居跡カマド 第417号住居跡
図版54	第343号住居跡	図版72 第418号住居跡 第418号住居跡カマド

図版73	第419号住居跡 第423・424号住居跡		第466・467号住居跡
図版74	第424号住居跡遺物出土状況 第425号住居跡	図版92	第466号住居跡カマド 第469号住居跡
図版75	第426号住居跡 第428号住居跡	図版93	第469号住居跡カマドA・カマドB 第471号住居跡
図版76	第430号住居跡 第430号住居跡カマド	図版94	第473号住居跡カマド 第474号住居跡
図版77	第431号住居跡 第432号住居跡	図版95	第475号住居跡 第476号住居跡
図版78	第433号住居跡 第434号住居跡	図版96	第478号住居跡 第478号住居跡カマド
図版79	第435号住居跡 第436号住居跡	図版97	第479号住居跡 第480号住居跡
図版80	第438号住居跡 第444号住居跡	図版98	第482号住居跡 第483号住居跡
図版81	第444号住居跡遺物出土状況 第445号住居跡	図版99	第484・491号住居跡 第485号住居跡
図版82	第447号住居跡 第447号住居跡カマド	図版100	第487・490号住居跡 第488号住居跡
図版83	第447号住居跡遺物出土状況 第448号住居跡	図版101	第489号住居跡 第490号住居跡カマド
図版84	第448号住居跡カマド遺物出土状況 第449号住居跡	図版102	第492号住居跡 第493号住居跡
図版85	第449号住居跡カマド 第450号住居跡	図版103	第493号住居跡カマド 第496号住居跡
図版86	第451号住居跡 第452号住居跡	図版104	第498・500号住居跡 第498号住居跡カマド
図版87	第453号住居跡 第454号住居跡	図版105	第498号住居跡遺物出土状況 第501・503・504号住居跡
図版88	第455号住居跡 第455号住居跡カマド	図版106	第502・509・512号住居跡 第号502住居跡カマド
図版89	第456号住居跡 第459号住居跡	図版107	第505号住居跡カマド 第506・507号住居跡
図版90	第459号住居跡遺物出土状況 第460号住居跡	図版108	第506・507号住居跡カマド 第508号住居跡
図版91	第464号住居跡	図版109	第508号住居跡カマド 第514号住居跡

図版110	第514号住居跡カマド A 第515・516号住居跡		第260号住居跡出土遺物 第262号住居跡出土遺物
図版111	第515号住居跡カマド遺物出土状況 第516号住居跡カマド		第263号住居跡出土遺物 第264号住居跡出土遺物
図版112	第518号住居跡 第519号住居跡		第266号住居跡出土遺物 第267号住居跡出土遺物
図版113	第519号住居跡カマド 第524号住居跡	図版129	第270号住居跡出土遺物 第273号住居跡出土遺物
図版114	第524号住居跡カマド 第525号住居跡		第275号住居跡出土遺物 第277号住居跡出土遺物
図版115	第527号住居跡 第527号住居跡カマド A 遺物出土状況	図版130	第278号住居跡出土遺物 第391号住居跡出土遺物
図版116	第528号住居跡 第530号住居跡		第392号住居跡出土遺物 第399号住居跡出土遺物
図版117	第531号住居跡カマド遺物出土状況 第536号住居跡		第476号住居跡出土遺物 第477号住居跡出土遺物
図版118	第556号住居跡 第557号住居跡遺物出土状況		第480号住居跡出土遺物 第481号住居跡出土遺物
図版119	第18～23号掘立柱建物跡 第13号掘立柱建物跡	図版131	第481号住居跡出土遺物 第484号住居跡出土遺物
図版120	第14号掘立柱建物跡 第15号掘立柱建物跡	図版132	第489号住居跡出土遺物 第489号住居跡出土遺物
図版121	第16号掘立柱建物跡 第17号掘立柱建物跡		第490号住居跡出土遺物 第492号住居跡出土遺物
図版122	第18号掘立柱建物跡 第19号掘立柱建物跡	図版133	第496号住居跡出土遺物 第498号住居跡出土遺物
図版123	第20号掘立柱建物跡 第21号掘立柱建物跡		第499号住居跡出土遺物 第499号住居跡出土遺物
図版124	第90号土坑 第93号土坑	図版134	第500号住居跡出土遺物 第502号住居跡出土遺物
図版125	第179号土坑 第180号土坑	図版135	第508号住居跡出土遺物 第510号住居跡出土遺物
図版126	第186号土坑 第246号土坑		第511号住居跡出土遺物 第511号住居跡出土遺物
図版127	第258号土坑 第260号土坑	図版136	第511号住居跡出土遺物 第513号住居跡出土遺物
図版128	第257号住居跡出土遺物		第514号住居跡出土遺物

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-------------------|
| | 第514·515号住居跡出土遺物 | | 第453号住居跡出土遺物 |
| | 第514·516号住居跡出土遺物 | 図版143 | 第453号住居跡出土遺物 |
| 図版137 | 第514·516号住居跡出土遺物 | | 第456号住居跡出土遺物 |
| | 第514·517号住居跡出土遺物 | | 第457号住居跡出土遺物 |
| | 第517号住居跡出土遺物 | | 第459号住居跡出土遺物 |
| | 第518号住居跡出土遺物 | | 第461号住居跡出土遺物 |
| | 第519号住居跡出土遺物 | | 第462号住居跡出土遺物 |
| | 第524号住居跡出土遺物 | | 第469号住居跡出土遺物 |
| 図版138 | 第525号住居跡出土遺物 | | 第482号住居跡出土遺物 |
| | 第526号住居跡出土遺物 | | 第488号住居跡出土遺物 |
| | 第527号住居跡出土遺物 | 図版144 | 第488号住居跡出土遺物 |
| | 第530·531号住居跡出土遺物 | | 第535号住居跡出土遺物 |
| | 第531号住居跡出土遺物 | | 第536号住居跡出土遺物 |
| | 第546号住居跡出土遺物 | | 第538号住居跡出土遺物 |
| | 第548号住居跡出土遺物 | | 第539号住居跡出土遺物 |
| 図版139 | 第548号住居跡出土遺物 | | 第553号住居跡出土遺物 |
| | 第181号住居跡出土遺物 | | 第556号住居跡出土遺物 |
| | 第283号住居跡出土遺物 | 図版145 | 第557号住居跡出土遺物 |
| | 第415号住居跡出土遺物 | | 第92号土坑出土遺物 |
| | 第418号住居跡出土遺物 | | 第254号土坑出土遺物 |
| | 第423号住居跡出土遺物 | | 第258号土坑出土遺物 |
| 図版140 | 第423号住居跡出土遺物 | | 第284号住居跡出土遺物 |
| | 第424号住居跡出土遺物 | 図版146 | 第284号住居跡出土遺物 |
| | 第427号住居跡出土遺物 | | 第286号住居跡出土遺物 |
| | 第428号住居跡出土遺物 | | 第288号住居跡出土遺物 |
| | 第430号住居跡出土遺物 | | 第294号住居跡出土遺物 |
| | 第432号住居跡出土遺物 | | 第297号住居跡出土遺物 |
| 図版141 | 第432号住居跡出土遺物 | 図版147 | 第297号住居跡出土遺物 |
| | 第434号住居跡出土遺物 | | 第302号住居跡出土遺物 |
| | 第436号住居跡出土遺物 | | 第303号住居跡出土遺物 |
| | 第438号住居跡出土遺物 | | 第305号住居跡出土遺物 |
| | 第439号住居跡出土遺物 | 図版148 | 第307号住居跡内2号土坑出土遺物 |
| 図版142 | 第440号住居跡出土遺物 | | 第309号住居跡出土遺物 |
| | 第444号住居跡出土遺物 | | 第310号住居跡出土遺物 |
| | 第448号住居跡出土遺物 | | 第311号住居跡出土遺物 |
| | 第449号住居跡出土遺物 | | 第314号住居跡出土遺物 |
| | 第451号住居跡出土遺物 | | 第315号住居跡出土遺物 |

- | | | | |
|-------|----------------|-------|----------------------|
| 図版149 | 第315号住居跡出土遺物 | | 第265号住居跡出土遺物 |
| | 第316号住居跡出土遺物 | | 第273号住居跡出土遺物 |
| | 第319号住居跡出土遺物 | 図版157 | 第275号住居跡出土遺物 |
| | 第322号住居跡出土遺物 | | 第277号住居跡出土遺物 |
| | 第323号住居跡出土遺物 | | 第278号住居跡出土遺物 |
| 図版150 | 第323号住居跡出土遺物 | | 第392号住居跡出土遺物 |
| | 第325号住居跡出土遺物 | 図版158 | 第476号住居跡出土遺物 |
| | 第328号住居跡出土遺物 | | 第478号住居跡出土遺物 |
| | 第331号住居跡出土遺物 | | 第480号住居跡出土遺物 |
| | 第332号住居跡出土遺物 | | 第493号住居跡出土遺物 |
| 図版151 | 第332号住居跡出土遺物 | 図版159 | 第493号住居跡出土遺物 |
| | 第338号住居跡出土遺物 | | 第496・514・516号住居跡出土遺物 |
| | 第339号住居跡出土遺物 | | 第498号住居跡出土遺物 |
| | 第343号住居跡出土遺物 | | 第508号住居跡出土遺物 |
| 図版152 | 第346号住居跡出土遺物 | | 第511号住居跡出土遺物 |
| | 第347号住居跡出土遺物 | 図版160 | 第511号住居跡出土遺物 |
| | 第348号住居跡出土遺物 | | 第515号住居跡出土遺物 |
| | 第349号住居跡出土遺物 | 図版161 | 第517号住居跡出土遺物 |
| | 第350号住居跡出土遺物 | | 第525号住居跡出土遺物 |
| | 第352号住居跡出土遺物 | | 第527号住居跡出土遺物 |
| | 第353号住居跡出土遺物 | | 第531号住居跡出土遺物 |
| 図版153 | 第354号住居跡出土遺物 | 図版162 | 第531号住居跡出土遺物 |
| | 第355号住居跡出土遺物 | | 第181号住居跡出土遺物 |
| | 第360号住居跡出土遺物 | | 第182号住居跡出土遺物 |
| 図版154 | 第411号住居跡出土遺物 | | 第418号住居跡出土遺物 |
| | 第414号住居跡出土遺物 | 図版163 | 第447号住居跡出土遺物 |
| | 第429号住居跡出土遺物 | | 第448号住居跡出土遺物 |
| | 第180号土坑出土遺物 | | 第453号住居跡出土遺物 |
| | 第186号土坑出土遺物 | | 第459号住居跡出土遺物 |
| | 第209号土坑出土遺物 | 図版164 | 第469号住居跡出土遺物 |
| 図版155 | 第246号土坑出土遺物 | | 第553号住居跡出土遺物 |
| | H-24グリッドP2出土遺物 | | 第291号住居跡出土遺物 |
| | H-29グリッド出土遺物 | | 第294号住居跡出土遺物 |
| | I-29グリッド出土遺物 | | 第296号住居跡出土遺物 |
| | L-19グリッド出土遺物 | 図版165 | 第307号住居跡出土遺物 |
| 図版156 | 第263号住居跡出土遺物 | | 第309号住居跡出土遺物 |
| | 第264号住居跡出土遺物 | | 第314号住居跡出土遺物 |

	第315号住居跡出土遺物		第310号住居跡出土遺物
	第323号住居跡出土遺物		第312号住居跡出土遺物
図版166	第323号住居跡出土遺物	図版177	第328号住居跡出土遺物
	第328号住居跡出土遺物		第332号住居跡出土遺物
	第332号住居跡出土遺物	図版178	第332号住居跡出土遺物
図版167	第333号住居跡出土遺物		第333号住居跡出土遺物
	第353号住居跡出土遺物		第354号住居跡出土遺物
	第409号住居跡出土遺物		表採出土遺物
	第93号土坑出土遺物	図版179	第514・515・516号住居跡出土遺物（内面）
図版168	第260号住居跡出土遺物		第480号住居跡出土遺物（内面）
	第263号住居跡出土遺物		第514・515・516号住居跡出土遺物（外面）
	第273号住居跡出土遺物		第480号住居跡出土遺物（外面）
図版169	第273号住居跡出土遺物		第489号住居跡出土遺物（外面）
	第278号住居跡出土遺物		第519・520号住居跡出土遺物（外面）
図版170	第278号住居跡出土遺物	図版180	第354号住居跡出土遺物
	第498号住居跡出土遺物		G-30グリッド出土遺物
	第511号住居跡出土遺物		第315号住居跡出土遺物
	第527号住居跡出土遺物		第440号住居跡出土遺物
図版171	第527号住居跡出土遺物		第480号住居跡出土遺物
	第531号住居跡出土遺物		第506・507号住居跡出土遺物
	第283号住居跡出土遺物	図版181	第481号住居跡出土遺物
	第423号住居跡出土遺物		第418号住居跡出土遺物
図版172	第424号住居跡出土遺物	図版182	第319号住居跡出土遺物
	第441号住居跡出土遺物		第323号住居跡出土遺物
	第447号住居跡出土遺物	図版183	灰釉陶器
図版173	第447号住居跡出土遺物		第271号住居跡出土遺物
	第460号住居跡出土遺物		第452号住居跡出土遺物
	第553号住居跡出土遺物		第509号住居跡出土遺物
図版174	第557号住居跡出土遺物		第464号住居跡出土遺物
	第558号住居跡出土遺物	図版184	第530・531号住居跡出土遺物
	第560号住居跡出土遺物		第297号住居跡出土遺物
図版175	第90号土坑出土遺物		第344号住居跡出土遺物
	第294号住居跡出土遺物		第185号住居跡出土遺物
	第295号住居跡出土遺物		第297号住居跡出土遺物
	第297号住居跡出土遺物		L-19グリッド出土遺物
図版176	第306号住居跡出土遺物		土製小玉
	第307号住居跡出土遺物	図版185	石製品類

石製模造品

図版186 鉄製品 (1)

鉄製品 (2)

図版187 鉄製品 (3)

砥石

図版188 石器 (1)

石器 (2)

遺構別目次

凡例

I…『如意／如意南』第241集

II…『如意遺跡』第264集

III…『如意III／川端』第276集

IV…『如意遺跡IV』第285集（本書）

例：II-12=264集12P，III-16=276集16P

竪穴住居跡（S J）

第1号住居跡	II-12	第29号住居跡	II-57
第2号住居跡	II-12	第30号住居跡	II-57
第3号住居跡	II-15	第31号住居跡	II-62
第4号住居跡	II-17	第32号住居跡	II-63
第5号住居跡	II-17	第33号住居跡	II-63
第6号住居跡	II-20	第34号住居跡	II-63
第7号住居跡	II-20	第35号住居跡	II-69
第8号住居跡	II-20	第36号住居跡	II-70
第9号住居跡	II-25	第37号住居跡	II-69
第10号住居跡	II-27	第38号住居跡	II-70
第11号住居跡	II-27	第39号住居跡	II-70
第12号住居跡	II-30	第40号住居跡	II-70
第13号住居跡	II-30	第41号住居跡	II-75
第14号住居跡	II-30	第42号住居跡	II-75
第15号住居跡	II-30	第43号住居跡	II-79
第16号住居跡	II-35	第44号住居跡	II-79
第17号住居跡	II-35	第45号住居跡	II-79
第18号住居跡	II-39	第46号住居跡	II-83
第19号住居跡	II-43	第47号住居跡	II-83
第20号住居跡	II-43	第48号住居跡	II-85
第21号住居跡	II-45	第49号住居跡	II-85
第22号住居跡	II-47	第50号住居跡	II-85
第23号住居跡	II-47	第51号住居跡	II-88
第24号住居跡	II-50	第52号住居跡	II-88
第25号住居跡	II-50	第53号住居跡	II-89
第26号住居跡	II-54	第54号住居跡	II-90
第27号住居跡	II-54	第55号住居跡	II-92
第28号住居跡	II-54	第56号住居跡	II-92
		第57号住居跡	II-92
		第58号住居跡	II-92
		第59号住居跡	II-96
		第60号住居跡	II-98
		第61号住居跡	II-100
		第62号住居跡	II-100
		第63号住居跡（第10号性格不明遺構Aに変更）	

第64号住居跡	II-100	第101号住居跡	II-175
第65号住居跡	II-104	第102号住居跡	II-175
第66号住居跡	II-107	第103号住居跡	II-175
第67号住居跡	II-107	第104号住居跡	II-177
第68号住居跡	II-107	第105号住居跡	III-16
第69号住居跡	II-110	第106号住居跡	III-16
第70号住居跡	II-116	第107号住居跡	III-18
第71号住居跡	II-116	第108号住居跡	III-18
第72号住居跡	II-119	第109号住居跡	III-20
第73号住居跡	II-121	第110号住居跡	III-22
第74号住居跡	II-123	第111号住居跡	II-177
第75号住居跡	II-123	第112号住居跡	II-183
第76号住居跡	II-123	第113号住居跡	II-183
第77号住居跡	II-123	第114号住居跡	II-184
第78号住居跡	II-129	第115号住居跡	II-189
第79号住居跡	II-132	第116号住居跡	II-189
第80号住居跡	II-137	第117号住居跡	II-190
第81号住居跡	II-142	第118号住居跡	II-192 III-16
第82号住居跡	II-142	第119号住居跡	III-24
第83号住居跡	II-144	第120号住居跡	III-25
第84号住居跡	II-146	第121号住居跡	III-26
第85号住居跡	II-146	第122号住居跡	III-27
第86号住居跡	II-149	第123号住居跡	III-31
第87号住居跡	II-150	第124号住居跡	III-33
第88号住居跡	II-150	第125号住居跡	II-194
第89号住居跡	II-153	第126号住居跡	III-33
第90号住居跡	II-153	第127号住居跡	II-194
第91号住居跡	II-157	第128号住居跡	II-196
第92号住居跡	II-161	第129号住居跡	II-198
第93号住居跡	II-162	第130号住居跡	III-37
第94号住居跡	II-162	第131号住居跡	III-40
第95号住居跡	II-162	第132号住居跡	II-201 III-16
第96号住居跡	II-167	第133号住居跡	II-201
第97号住居跡	II-169	第134号住居跡	III-37
第98号住居跡	II-169	第135号住居跡	III-40
第99号住居跡	II-171	第136号住居跡	II-192 III-16
第100号住居跡	II-173	第137号住居跡	I-16

第138号住居跡	Ⅰ—18	第175号住居跡	Ⅲ—71
第139号住居跡	Ⅰ—20	第176号住居跡	Ⅲ—73
第140号住居跡	Ⅰ—20	第177号住居跡	Ⅲ—74
第141号住居跡	Ⅰ—24	第178号住居跡	Ⅲ—75
第142号住居跡	Ⅰ—25	第179号住居跡	Ⅲ—78
第143号住居跡	Ⅰ—29	第180号住居跡	Ⅳ—176
第144号住居跡	Ⅰ—31	第181号住居跡	Ⅳ—176
第145号住居跡	Ⅰ—32	第182号住居跡	Ⅳ—178
第146号住居跡	Ⅰ—35	第183号住居跡	Ⅲ—78
第147号住居跡	Ⅰ—35	第184号住居跡	Ⅲ—80
第148号住居跡	Ⅰ—39	第185号住居跡	Ⅲ—83
第149号住居跡	Ⅰ—43	第186号住居跡	Ⅲ—83
第150号住居跡	Ⅰ—45	第187号住居跡	Ⅲ—87
第151号住居跡	Ⅰ—48	第188号住居跡	Ⅲ—87
第152号住居跡	Ⅰ—49	第189号住居跡	Ⅲ—89
第153号住居跡	Ⅰ—46	第190号住居跡	Ⅲ—90
第154号住居跡	Ⅲ—40	第191号住居跡	Ⅲ—92
第155号住居跡	Ⅲ—40	第192号住居跡	Ⅲ—92
第156号住居跡	Ⅲ—44	第193号住居跡	Ⅲ—92
第157号住居跡	Ⅲ—44	第194号住居跡	Ⅲ—93
第158号住居跡	Ⅲ—46	第195号住居跡	Ⅲ—96
第159号住居跡	Ⅲ—47	第196号住居跡	Ⅲ—96
第160号住居跡	Ⅲ—47	第197号住居跡	Ⅲ—97
第161号住居跡	Ⅲ—50	第198号住居跡	Ⅲ—98
第162号住居跡	Ⅲ—18	第199号住居跡	Ⅲ—98
第163号住居跡	Ⅲ—50	第200号住居跡	Ⅲ—99
第164号住居跡	Ⅲ—50	第201号住居跡	Ⅲ—103
第165号住居跡	Ⅲ—55	第202号住居跡	Ⅲ—103
第166号住居跡	Ⅲ—57	第203号住居跡	Ⅲ—103
第167号住居跡	Ⅲ—57	第204号住居跡	Ⅲ—105
第168号住居跡	Ⅲ—57	第205号住居跡	Ⅲ—106
第169号住居跡	Ⅲ—62	第206号住居跡	Ⅲ—109
第170号住居跡	Ⅲ—64	第207号住居跡	Ⅲ—110
第171号住居跡	Ⅲ—64	第208号住居跡	Ⅲ—112
第172号住居跡	Ⅲ—66	第209号住居跡	Ⅲ—112
第173号住居跡	Ⅲ—66	第210号住居跡	Ⅲ—113
第174号住居跡	Ⅲ—69	第211号住居跡	Ⅲ—113

第212号住居跡……………	Ⅲ—117	第249号住居跡……………	Ⅲ—213
第213号住居跡……………	Ⅲ—117	第250号住居跡……………	Ⅲ—215
第214号住居跡……………	Ⅲ—120	第251号住居跡……………	Ⅲ—215
第215号住居跡……………	Ⅲ—121	第252号住居跡……………	Ⅲ—218
第216号住居跡……………	Ⅲ—121	第253号住居跡……………	Ⅲ—219
第217号住居跡……………	Ⅲ—121	第254号住居跡……………	Ⅲ—220
第218号住居跡……………	Ⅲ—125	第255号住居跡……………	Ⅲ—220
第219号住居跡……………	Ⅲ—127	第256号住居跡……………	Ⅲ—223
第220号住居跡……………	Ⅲ—128	第257号住居跡……………	Ⅳ—18
第221号住居跡……………	Ⅲ—128	第258号住居跡……………	Ⅳ—19
第222号住居跡……………	Ⅲ—131	第259号住居跡……………	Ⅳ—22
第223号住居跡……………	Ⅲ—133	第260号住居跡……………	Ⅳ—22
第224号住居跡……………	Ⅲ—133	第261号住居跡……………	Ⅳ—24
第225号住居跡……………	Ⅲ—135	第262号住居跡……………	Ⅳ—24
第226号住居跡……………	Ⅲ—128	第263号住居跡……………	Ⅳ—25
第227号住居跡……………	Ⅲ—174	第264号住居跡……………	Ⅳ—28
第228号住居跡……………	Ⅲ—140	第265号住居跡……………	Ⅳ—31
第229号住居跡……………	Ⅲ—175	第266号住居跡……………	Ⅳ—31
第230号住居跡……………	Ⅲ—175	第267号住居跡……………	Ⅳ—35
第231号住居跡……………	Ⅲ—175	第268号住居跡……………	Ⅳ—37
第232号住居跡……………	Ⅲ—179	第269号住居跡……………	Ⅳ—38
第233号住居跡……………	Ⅲ—179	第270号住居跡……………	Ⅳ—40
第234号住居跡……………	Ⅲ—181	第271号住居跡……………	Ⅳ—42
第235号住居跡……………	Ⅲ—181	第272号住居跡……………	Ⅳ—46
第236号住居跡……………	Ⅲ—181	第273号住居跡……………	Ⅳ—49
第237号住居跡……………	Ⅲ—181	第274号住居跡……………	Ⅳ—52
第238号住居跡……………	Ⅲ—194	第275号住居跡……………	Ⅳ—53
第239号住居跡……………	Ⅲ—196	第276号住居跡……………	Ⅳ—55
第240号住居跡……………	Ⅲ—196	第277号住居跡……………	Ⅳ—57
第241号住居跡……………	Ⅲ—199	第278号住居跡……………	Ⅳ—58
第242号住居跡……………	Ⅲ—200	第279号住居跡……………	Ⅳ—60
第243号住居跡……………	Ⅲ—203	第280号住居跡……………	Ⅳ—324
第244号住居跡……………	Ⅲ—204	第281号住居跡……………	Ⅳ—325
第245号住居跡……………	Ⅲ—207	第282号住居跡 (第418号住居跡と同一)	
第246号住居跡……………	Ⅲ—208	第283号住居跡……………	Ⅳ—181
第247号住居跡……………	Ⅲ—210	第284号住居跡……………	Ⅳ—327
第248号住居跡……………	Ⅲ—213	第285号住居跡……………	Ⅳ—329

第286号住居跡……………	IV-330	第323号住居跡……………	IV-391
第287号住居跡……………	IV-331	第324号住居跡……………	IV-397
第288号住居跡……………	IV-334	第325号住居跡……………	IV-398
第289号住居跡……………	IV-337	第326号住居跡 (欠番)	
第290号住居跡……………	IV-338	第327号住居跡……………	IV-400
第291号住居跡……………	IV-340	第328号住居跡……………	IV-401
第292号住居跡……………	IV-342	第329号住居跡……………	IV-405
第293号住居跡……………	IV-343	第330号住居跡……………	IV-404
第294号住居跡……………	IV-345	第331号住居跡……………	IV-405
第295号住居跡……………	IV-346	第332号住居跡……………	IV-407
第296号住居跡……………	IV-347	第333号住居跡……………	IV-409
第297号住居跡……………	IV-349	第334号住居跡……………	IV-411
第298号住居跡……………	IV-353	第335号住居跡……………	IV-411
第299号住居跡……………	IV-354	第336号住居跡……………	IV-412
第300号住居跡……………	IV-356	第337号住居跡……………	IV-413
第301号住居跡……………	IV-357	第338号住居跡……………	IV-414
第302号住居跡……………	IV-358	第339号住居跡……………	IV-416
第303号住居跡……………	IV-360	第340号住居跡……………	IV-418
第304号住居跡……………	IV-362	第341号住居跡……………	IV-419
第305号住居跡……………	IV-363	第342号住居跡……………	IV-420
第306号住居跡……………	IV-367	第343号住居跡……………	IV-420
第307号住居跡……………	IV-368	第344号住居跡……………	IV-422
第308号住居跡……………	IV-370	第345号住居跡……………	IV-423
第309号住居跡……………	IV-371	第346号住居跡……………	IV-424
第310号住居跡……………	IV-373	第347号住居跡……………	IV-427
第311号住居跡……………	IV-375	第348号住居跡……………	IV-428
第312号住居跡……………	IV-376	第349号住居跡……………	IV-431
第313号住居跡 (第408号住居跡と同一)		第350号住居跡……………	IV-432
第314号住居跡……………	IV-377	第351号住居跡……………	IV-433
第315号住居跡……………	IV-377	第352号住居跡……………	IV-434
第316号住居跡……………	IV-380	第353号住居跡……………	IV-435
第317号住居跡……………	IV-382	第354号住居跡……………	IV-439
第318号住居跡……………	IV-383	第355号住居跡……………	IV-440
第319号住居跡……………	IV-384	第356号住居跡……………	IV-443
第320号住居跡……………	IV-388	第357号住居跡……………	IV-444
第321号住居跡……………	IV-386	第358号住居跡……………	IV-445
第322号住居跡……………	IV-388	第359号住居跡……………	IV-447

第360号住居跡·····	IV—448	第397号住居跡·····	III—279
第361号住居跡·····	III—225	第398号住居跡·····	III—280
第362号住居跡·····	III—230	第399号住居跡·····	IV—61
第363号住居跡·····	III—231	第400号住居跡 (第386号住居跡と同一)	
第364号住居跡·····	III—231	第401号住居跡·····	IV—68
第365号住居跡·····	III—234	第402号住居跡·····	IV—69
第366号住居跡·····	III—140	第403号住居跡·····	III—281
第367号住居跡·····	III—235	第404号住居跡·····	III—62
第368号住居跡·····	III—232	第405号住居跡·····	III—281
第369号住居跡·····	III—238	第406号住居跡·····	IV—449
第370号住居跡·····	III—240	第407号住居跡·····	IV—449
第371号住居跡·····	III—243	第408号住居跡·····	IV—450
第372号住居跡·····	III—246	第409号住居跡·····	IV—452
第373号住居跡·····	III—248	第410号住居跡·····	IV—453
第374号住居跡·····	III—252	第411号住居跡·····	IV—453
第375号住居跡·····	III—257	第412号住居跡·····	IV—455
第376号住居跡·····	III—260	第413号住居跡·····	IV—458
第377号住居跡·····	III—260	第414号住居跡·····	IV—459
第378号住居跡·····	III—262	第415号住居跡·····	IV—183
第379号住居跡·····	III—262	第416号住居跡·····	IV—461
第380号住居跡·····	III—264	第417号住居跡·····	IV—185
第381号住居跡·····	III—265	第418号住居跡·····	IV—187
第382号住居跡·····	III—265	第419号住居跡·····	IV—189
第383号住居跡·····	III—268	第420号住居跡·····	IV—377
第384号住居跡·····	III—270	第421号住居跡·····	IV—190
第385号住居跡·····	III—271	第422号住居跡·····	IV—183
第386号住居跡·····	III—273	第423号住居跡·····	IV—191
第387号住居跡·····	III—272	第424号住居跡·····	IV—193
第388号住居跡·····	III—262	第425号住居跡·····	IV—194
第389号住居跡·····	IV—61	第426号住居跡·····	IV—196
第390号住居跡·····	IV—63	第427号住居跡·····	IV—197
第391号住居跡·····	IV—64	第428号住居跡·····	IV—200
第392号住居跡·····	IV—65	第429号住居跡·····	IV—462
第393号住居跡·····	III—249	第430号住居跡·····	IV—202
第394号住居跡·····	III—276	第431号住居跡·····	IV—203
第395号住居跡·····	III—278	第432号住居跡·····	IV—204
第396号住居跡·····	IV—67	第433号住居跡·····	IV—206

第434号住居跡·····	IV—208	第471号住居跡·····	IV—267
第435号住居跡·····	IV—209	第472号住居跡·····	IV—270
第436号住居跡·····	IV—210	第473号住居跡·····	IV—270
第437号住居跡·····	IV—212	第474号住居跡·····	IV—272
第438号住居跡·····	IV—214	第475号住居跡·····	IV—70
第439号住居跡·····	IV—198	第476号住居跡·····	IV—72
第440号住居跡·····	IV—217	第477号住居跡·····	IV—73
第441号住居跡·····	IV—218	第478号住居跡·····	IV—74
第442号住居跡·····	IV—219	第479号住居跡·····	IV—272
第443号住居跡·····	IV—220	第480号住居跡·····	IV—76
第444号住居跡·····	IV—221	第481号住居跡·····	IV—79
第445号住居跡·····	IV—223	第482号住居跡·····	IV—275
第446号住居跡 (欠番)		第483号住居跡·····	IV—82
第447号住居跡·····	IV—224	第484号住居跡·····	IV—83
第448号住居跡·····	IV—228	第485号住居跡·····	IV—275
第449号住居跡·····	IV—232	第486号住居跡·····	IV—85
第450号住居跡·····	IV—233	第487号住居跡·····	IV—90
第451号住居跡·····	IV—235	第488号住居跡·····	IV—276
第452号住居跡·····	IV—236	第489号住居跡·····	IV—85
第453号住居跡·····	IV—239	第490号住居跡·····	IV—90
第454号住居跡·····	IV—241	第491号住居跡·····	IV—83
第455号住居跡·····	IV—242	第492号住居跡·····	IV—91
第456号住居跡·····	IV—244	第493号住居跡·····	IV—93
第457号住居跡·····	IV—246	第494号住居跡·····	IV—278
第458号住居跡·····	IV—247	第495号住居跡·····	IV—279
第459号住居跡·····	IV—248	第496号住居跡·····	IV—96
第460号住居跡·····	IV—250	第497号住居跡·····	IV—280
第461号住居跡·····	IV—251	第498号住居跡·····	IV—99
第462号住居跡·····	IV—253	第499号住居跡·····	IV—103
第463号住居跡·····	IV—256	第500号住居跡·····	IV—99
第464号住居跡·····	IV—257	第501号住居跡·····	IV—104
第465号住居跡·····	IV—258	第502号住居跡·····	IV—107
第466号住居跡·····	IV—260	第503号住居跡·····	IV—105
第467号住居跡·····	IV—263	第504号住居跡·····	IV—106
第468号住居跡·····	IV—263	第505号住居跡·····	IV—280
第469号住居跡·····	IV—264	第506号住居跡·····	IV—111
第470号住居跡·····	IV—267	第507号住居跡·····	IV—113

第508号住居跡……………	IV-115	第545号住居跡……………	III-252
第509号住居跡……………	IV-110	第546号住居跡……………	IV-161
第510号住居跡……………	IV-119	第547号住居跡……………	III-284
第511号住居跡……………	IV-121	第548号住居跡……………	IV-161
第512号住居跡……………	IV-110	第549号住居跡……………	III-286
第513号住居跡……………	IV-124	第550号住居跡……………	III-289
第514号住居跡……………	IV-125	第551号住居跡……………	III-290
第515号住居跡……………	IV-128	第552号住居跡……………	IV-56
第516号住居跡……………	IV-128	第553号住居跡……………	IV-288
第517号住居跡……………	IV-133	第554号住居跡……………	IV-289
第518号住居跡……………	IV-136	第555号住居跡……………	IV-290
第519号住居跡……………	IV-137	第556号住居跡……………	IV-290
第520号住居跡……………	IV-139	第557号住居跡……………	IV-292
第521号住居跡 (欠番)		第558号住居跡……………	IV-294
第522号住居跡 (第389号住居跡と同一)		第559号住居跡……………	IV-295
第523号住居跡 (欠番)		第560号住居跡……………	IV-297
第524号住居跡……………	IV-140	掘立柱建物跡 (S B)	
第525号住居跡……………	IV-142	第1号掘立柱建物跡……………	III-141
第526号住居跡……………	IV-144	第2号掘立柱建物跡……………	III-141
第527号住居跡……………	IV-146	第3号掘立柱建物跡……………	III-141
第528号住居跡……………	IV-149	第4号掘立柱建物跡……………	III-141
第529号住居跡……………	IV-150	第5号掘立柱建物跡……………	III-291
第530号住居跡……………	IV-153	第6号掘立柱建物跡……………	III-291
第531号住居跡……………	IV-156	第7号掘立柱建物跡……………	III-293
第532号住居跡……………	IV-157	第8号掘立柱建物跡……………	III-294
第533号住居跡……………	IV-157	第9号掘立柱建物跡……………	III-297
第534号住居跡……………	IV-158	第10号掘立柱建物跡……………	III-297
第535号住居跡……………	IV-282	第11号掘立柱建物跡……………	III-297
第536号住居跡……………	IV-283	第12号掘立柱建物跡……………	III-141
第537号住居跡……………	IV-250	第13号掘立柱建物跡……………	IV-298
第538号住居跡……………	IV-284	第14号掘立柱建物跡……………	IV-298
第539号住居跡……………	IV-285	第15号掘立柱建物跡……………	IV-301
第540号住居跡……………	IV-158	第16号掘立柱建物跡……………	IV-302
第541号住居跡……………	III-283	第17号掘立柱建物跡……………	IV-162
第542号住居跡 (欠番)		第18号掘立柱建物跡……………	IV-303
第543号住居跡 (第559号住居跡と同一)		第19号掘立柱建物跡……………	IV-305
第544号住居跡……………	IV-160	第20号掘立柱建物跡……………	IV-305

第21号掘立柱建物跡	IV—308	第11号土坑	II—206
第22号掘立柱建物跡	IV—162	第12号土坑	II—206
第23号掘立柱建物跡	IV—310	第13号土坑	II—206
性格不明遺構 (S X)		第14号土坑	II—206
第1号性格不明遺構	II—218	第14号土坑 (A)	II—209
第2号性格不明遺構	II—218	第15号土坑	II—209
第3号性格不明遺構	II—218	第16号土坑	II—210
第4号性格不明遺構	II—218	第17号土坑	II—210
第5号性格不明遺構	II—218	第18号土坑	II—210
第6号性格不明遺構	II—223	第19号土坑	II—210
第7号性格不明遺構	II—223	第20号土坑	II—210
第8号性格不明遺構	II—224	第21号土坑	II—210
第9号性格不明遺構	II—224	第22号土坑	II—210
第10号性格不明遺構	II—224	第23号土坑	II—210
第10号性格不明遺構 (A)	II—227	第24号土坑	II—210
第11号性格不明遺構 (欠番)		第25号土坑	II—210
第12号性格不明遺構	III—165	第26号土坑	II—210
第13号性格不明遺構	III—165	第27号土坑	II—210
第14号性格不明遺構	IV—319	第28号土坑	II—210
第15号性格不明遺構	IV—320	第29号土坑 (欠番)	
第16号性格不明遺構	IV—320	第30号土坑	II—213
第17号性格不明遺構	IV—320	第31号土坑	II—213
第18号性格不明遺構	III—168	第32号土坑	II—213
第19号性格不明遺構	III—168	第33号土坑	II—213
第20号性格不明遺構	III—169	第34号土坑	II—213
第21号性格不明遺構	III—318	第35号土坑	II—213
土坑 (S K)		第36号土坑	II—213
第1号土坑	II—203	第37号土坑	II—213
第2号土坑	II—203	第38号土坑	II—215
第3号土坑	II—203	第39号土坑	II—215
第4号土坑	II—203	第40号土坑	II—215
第5号土坑	II—203	第41号土坑	II—215
第6号土坑	II—203	第42号土坑	II—215
第7号土坑	II—203	第43号土坑	II—215
第8号土坑	II—203	第44号土坑	II—215
第9号土坑	II—206	第45号土坑 (欠番)	
第10号土坑	II—206	第46号土坑	II—215

第47号土坑·····	I — 49	第84号土坑·····	Ⅲ — 152
第48号土坑·····	I — 49	第85号土坑·····	Ⅲ — 152
第49号土坑·····	I — 49	第86号土坑·····	Ⅲ — 152
第50号土坑·····	I — 49	第87号土坑·····	Ⅲ — 152
第51号土坑·····	I — 51	第88号土坑·····	Ⅳ — 310
第52号土坑·····	I — 51	第89号土坑·····	Ⅳ — 310
第53号土坑·····	I — 51	第90号土坑·····	Ⅳ — 311
第54号土坑·····	I — 51	第91号土坑·····	Ⅳ — 311
第55号土坑·····	I — 52	第92号土坑·····	Ⅳ — 311
第56号土坑·····	I — 52	第93号土坑·····	Ⅳ — 311
第57号土坑·····	I — 52	第94号土坑·····	Ⅳ — 311
第58号土坑·····	I — 55	第95号土坑·····	Ⅳ — 311
第59号土坑·····	I — 55	第96号土坑·····	Ⅲ — 152
第60号土坑·····	I — 55	第97号土坑·····	Ⅲ — 152
第61号土坑·····	I — 55	第98号土坑·····	Ⅲ — 152
第62号土坑·····	I — 55	第99号土坑·····	Ⅲ — 152
第63号土坑·····	I — 55	第100号土坑·····	Ⅲ — 155
第64号土坑·····	I — 55	第101号土坑·····	Ⅲ — 155
第65号土坑·····	I — 55	第102号土坑·····	Ⅲ — 155
第66号土坑·····	I — 55	第103号土坑·····	Ⅲ — 155
第67号土坑·····	I — 57	第104号土坑·····	Ⅲ — 155
第68号土坑·····	I — 57	第105号土坑·····	Ⅲ — 155
第69号土坑·····	I — 58	第106号土坑·····	Ⅲ — 160
第70号土坑·····	I — 58	第107号土坑·····	Ⅲ — 160
第71号土坑·····	I — 58	第108号土坑·····	Ⅲ — 162
第72号土坑·····	Ⅲ — 149	第109号土坑·····	Ⅲ — 162
第73号土坑·····	Ⅲ — 149	第110号土坑·····	Ⅲ — 162
第74号土坑·····	Ⅲ — 149	第111号土坑·····	Ⅲ — 162
第75号土坑·····	Ⅲ — 149	第112号土坑·····	Ⅲ — 162
第76号土坑·····	Ⅲ — 149	第113号土坑·····	Ⅲ — 162
第77号土坑·····	Ⅲ — 149	第114号土坑·····	Ⅲ — 300
第78号土坑 (欠番)		第115号土坑·····	Ⅲ — 300
第79号土坑·····	Ⅲ — 149	第116号土坑·····	Ⅲ — 300
第80号土坑·····	Ⅲ — 149	第117号土坑·····	Ⅲ — 300
第81号土坑·····	Ⅲ — 149	第118号土坑·····	Ⅲ — 300
第82号土坑·····	Ⅲ — 149	第119号土坑·····	Ⅲ — 300
第83号土坑·····	Ⅲ — 152	第120号土坑·····	Ⅲ — 300

第121号土坑·····	Ⅲ—300	第158号土坑·····	Ⅳ—168
第122号土坑·····	Ⅲ—300	第159号土坑·····	Ⅳ—168
第123号土坑·····	Ⅲ—300	第160号土坑·····	Ⅳ—168
第124号土坑·····	Ⅲ—303	第161号土坑·····	Ⅳ—168
第125号土坑·····	Ⅲ—303	第162号土坑·····	Ⅳ—168
第126号土坑·····	Ⅲ—303	第163号土坑·····	Ⅳ—168
第127号土坑·····	Ⅲ—303	第164号土坑·····	Ⅳ—168
第128号土坑·····	Ⅲ—303	第165号土坑·····	Ⅳ—168
第129号土坑·····	Ⅲ—303	第166号土坑·····	Ⅳ—170
第130号土坑·····	Ⅲ—303	第167号土坑·····	Ⅳ—170
第131号土坑·····	Ⅲ—303	第168号土坑·····	Ⅳ—170
第132号土坑·····	Ⅲ—303	第169号土坑·····	Ⅳ—170
第133号土坑·····	Ⅲ—303	第170号土坑·····	Ⅳ—170
第134号土坑·····	Ⅲ—303	第171号土坑·····	Ⅳ—170
第135号土坑·····	Ⅲ—304	第172号土坑·····	Ⅳ—170
第136号土坑·····	Ⅲ—304	第173号土坑·····	Ⅳ—170
第137号土坑·····	Ⅲ—304	第174号土坑·····	Ⅳ—170
第138号土坑·····	Ⅲ—304	第175号土坑·····	Ⅳ—170
第139号土坑·····	Ⅲ—304	第176号土坑·····	Ⅳ—171
第140号土坑·····	Ⅲ—304	第177号土坑·····	Ⅳ—171
第141号土坑·····	Ⅲ—304	第178号土坑·····	Ⅳ—463
第142号土坑·····	Ⅲ—304	第179号土坑·····	Ⅳ—463
第143号土坑·····	Ⅲ—304	第180号土坑·····	Ⅳ—463
第144号土坑 (欠番)		第181号土坑·····	Ⅳ—463
第145号土坑·····	Ⅲ—304	第182号土坑 (第288号住居跡貯蔵穴に変更)	
第146号土坑·····	Ⅳ—166	第183号土坑·····	Ⅳ—465
第147号土坑·····	Ⅳ—166	第184号土坑·····	Ⅳ—465
第148号土坑·····	Ⅳ—166	第185号土坑·····	Ⅳ—465
第149号土坑·····	Ⅳ—166	第186号土坑·····	Ⅳ—465
第150号土坑·····	Ⅳ—166	第187号土坑·····	Ⅳ—465
第151号土坑·····	Ⅳ—166	第188号土坑·····	Ⅳ—465
第152号土坑·····	Ⅳ—166	第189号土坑·····	Ⅳ—465
第153号土坑·····	Ⅳ—166	第190号土坑·····	Ⅳ—465
第154号土坑·····	Ⅳ—166	第191号土坑·····	Ⅳ—465
第155号土坑·····	Ⅳ—168	第192号土坑·····	Ⅳ—465
第156号土坑·····	Ⅳ—168	第193号土坑·····	Ⅳ—467
第157号土坑 (第262号住居跡貯蔵穴に変更)		第194号土坑·····	Ⅳ—467

第195号土坑·····	IV—467	第232号土坑·····	III—310
第196号土坑·····	IV—467	第233号土坑·····	III—310
第197号土坑·····	IV—467	第234号土坑·····	III—310
第198号土坑·····	IV—467	第235号土坑·····	III—310
第199号土坑·····	IV—467	第236号土坑·····	III—310
第200号土坑·····	IV—467	第237号土坑·····	III—310
第201号土坑·····	IV—467	第238号土坑·····	III—310
第202号土坑·····	IV—467	第239号土坑·····	III—310
第203号土坑·····	IV—467	第240号土坑·····	III—310
第204号土坑·····	IV—469	第241号土坑·····	III—310
第205号土坑·····	IV—469	第242号土坑·····	III—312
第206号土坑·····	IV—469	第243号土坑·····	III—312
第207号土坑·····	IV—469	第244号土坑·····	III—312
第208号土坑·····	IV—469	第245号土坑·····	IV—469
第209号土坑·····	IV—469	第246号土坑·····	IV—469
第210号土坑·····	IV—469	第247号土坑·····	IV—470
第211号土坑 (欠番)		第248号土坑·····	IV—311
第212号土坑·····	III—307	第249号土坑·····	IV—311
第213号土坑·····	III—307	第250号土坑·····	IV—311
第214号土坑·····	III—307	第251号土坑·····	IV—313
第215号土坑·····	III—307	第252号土坑·····	IV—313
第216号土坑·····	III—307	第253号土坑·····	IV—313
第217号土坑·····	III—307	第254号土坑·····	IV—313
第218号土坑·····	III—164	第255号土坑·····	IV—313
第219号土坑·····	III—307	第256号土坑·····	IV—470
第220号土坑·····	III—307	第257号土坑·····	IV—470
第221号土坑·····	III—307	第258号土坑·····	IV—313
第222号土坑·····	III—309	第259号土坑·····	IV—313
第223号土坑·····	III—309	第260号土坑·····	IV—313
第224号土坑·····	III—309	第261号土坑·····	IV—172
第225号土坑·····	III—309	第262号土坑·····	III—312
第226号土坑·····	III—309	第263号土坑·····	III—309
第227号土坑·····	III—309	沟迹 (SD)	
第228号土坑·····	III—309	第1号沟迹·····	I—58
第229号土坑·····	III—309	第2号沟迹·····	IV—318
第230号土坑·····	III—309	第3号沟迹·····	III—164
第231号土坑·····	III—310		

炉跡

第1号鍛冶炉跡	Ⅱ-230
第1号精錬炉跡	Ⅱ-231
第2号炉跡	Ⅲ-318
第3号炉跡	Ⅲ-318

墓坑

第1号墓坑	Ⅲ-318
近世墓坑	Ⅲ-318

窯跡

第1号窯跡	Ⅱ-228
-------	-------

ピット

P-3G. P1	Ⅱ-231
Q-2G. P1	Ⅱ-231
Q-4G. P4	Ⅱ-231
O-6G. P1	Ⅱ-231
O-6G. P2	Ⅱ-231
K-10G. P3	Ⅱ-231
L-11G. P1	Ⅱ-232
L-11G. P2	Ⅱ-234
L-11G. P3	Ⅱ-234
M-9G. P2	Ⅱ-234
M-10G. P1	Ⅱ-234
M-10G. P2	Ⅱ-234

M-10G. P14	Ⅱ-234
M-12G. P1	Ⅱ-234
J-15G. P1	Ⅲ-169
I-16G. P6	Ⅲ-169
I-16G. P10	Ⅲ-169
I-19G. P3	Ⅲ-169
H-19G. P1	Ⅲ-169
M-18G. P4	Ⅲ-321
P-17G. P1	Ⅲ-321
Q-17G. P3	Ⅲ-321
Q-19G. P9	Ⅲ-321
J-20.P2	Ⅳ-173
J-22.P2	Ⅳ-173
H-24.P2	Ⅳ-322

その他

グリッド・表採遺物	Ⅰ-59
	Ⅱ-236
	Ⅲ-171
	Ⅲ-323
	Ⅳ-478
縄文時代の遺物	Ⅲ-323
	Ⅳ-474

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

県北部に広がる荒川中流域の大里地区は首都近郊に位置し、有望な食糧生産基地として大きな発展が期待されている。しかし、荒川の河床が低下したため洪水の危険性が増大し、また、水質悪化や湧水の枯渇などの問題が生じてきた。こうした事態を受けて農林水産省が主体となり、大里地区において六堰頭首工などの基幹土地改良施設と地区内水利施設の機能回復等の「国営総合農地防災事業」が計画された。これに呼応して埼玉県と川本町でも、[付帯県営農地防災事業]により支線水路の整備を行うこととなった。

平成9年2月21日付け9埼東第72号で関東農政局埼玉東部土地改良事務所長より、六堰頭首工建設工事等用地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会を受けた。文化財保護課では、平成9年2月27・28日に試掘調査を行い、奈良・平安時代の住居跡を確認して平成9年3月5日付け教文1625号で以下のような回答をした。

1 埋蔵文化財の所在

事業地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称	種別	時代	所在地
如意	集落跡	縄文・奈良・平安	大里郡川本町如意地内
川端	集落跡	奈良・平安	大里郡川本町如意地内

2 取扱いについて

上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の3に規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施して

ください。

なお、発掘調査の実施については、当課と別途協議願います。

これを受けて文化財保護課と関係部局・川本町との間で事前協議がなされたが、計画変更が不可能であるため、工事区について記録保存の措置を講ずることとした。

また、六堰頭首工につながる農免道路部分についても試掘調査がなされ、新たに如意南遺跡が新規登録された。道路に施設される歩道については川本事業であったが、これを分離して調査することが不可能であるため、一体化して発掘調査することとなり、実施機関として（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団があたることとなった。

如意遺跡等にかかる文化財保護法第57条の3の通知が関東農政局埼玉東部土地改良事務所長から提出され平成9年9月1日付け教文3-373号で収受した。一方、文化財保護法第57条1に係る発掘届が（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出されて、発掘調査が平成9年10月1日から開始され、平成12年11月30日に終了した。

なお、発掘調査届に対する指示通知番号は、次のとおりである。

如意（2次・3次・4次・5次）

平成10年5月13日付け教文第2-24号

平成10年5月13日付け教文第2-25号

平成11年9月28日付け教文第2-84号

平成12年4月12日付け教文第2-2号

（文化財保護課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

大里農地防災事業六堰頭首工改築工事に伴う如意遺跡の発掘調査は、平成9年10月から平成12年11月まで断続的に実施した。調査面積は18,284㎡である。なお、本書で報告の対象となるのは、平成10年度分から12年度分調査の一部ずつである。

(平成9年度)

平成9年10月から平成10年3月まで実施した。10月から現場事務所設置などの諸準備を行い、11月に調査区の西端から本格的調査に入った。発掘器材の搬入後、調査区域・土置き場に囲柵を設置し、重機による表土掘削を行い、掘削終了範囲より順次遺構確認作業を実施した。表土掘削終了時点で基準点測量を実施し、10m方眼の杭打ち作業を行った。遺構確認作業の結果、西端部では土坑、ピットが僅かに検出される程度であったが、東に進むにつれ堅穴住居跡が多く検出されるようになった。その後、順次東に向かって調査を進め、3月に調査区全景写真と空中写真撮影を実施して調査を終了した。

(平成10年度)

平成10年4月から6月と、10月から12月の2度に分けて実施した。

4月からの調査は、前年度からの継続調査で前年度調査区域の東側の調査を行った。遺構は堅穴住居跡が中心で、密集度が高く、重複する住居跡が多かった。また、住居跡と掘立柱建物跡が重複する例も見られた。6月中旬に全景写真、空中写真撮影を実施し、調査区域の埋戻しと囲柵の撤去を行い、調査を終了した。

10月からの調査は、4月に実施した調査区域の東側に接する地点と、約50m北東で荒川に面した地点の調査を行った。調査区域の設定、囲柵、重機による表土の掘削等を行い、遺構確認作業を実施した。4月の調査区域の東に接する地点は、引き続き堅穴

住居跡が全域にわたって検出され、密集度も高く、重複が多く見られた。荒川沿いの地点は、遺構の密度は低く、住居跡は3軒検出されたのみであった。12月には両地点の全景写真撮影を行った。その後、埋戻し・囲柵の撤去・器材撤収等を行い、調査を終了した。

(平成11年度)

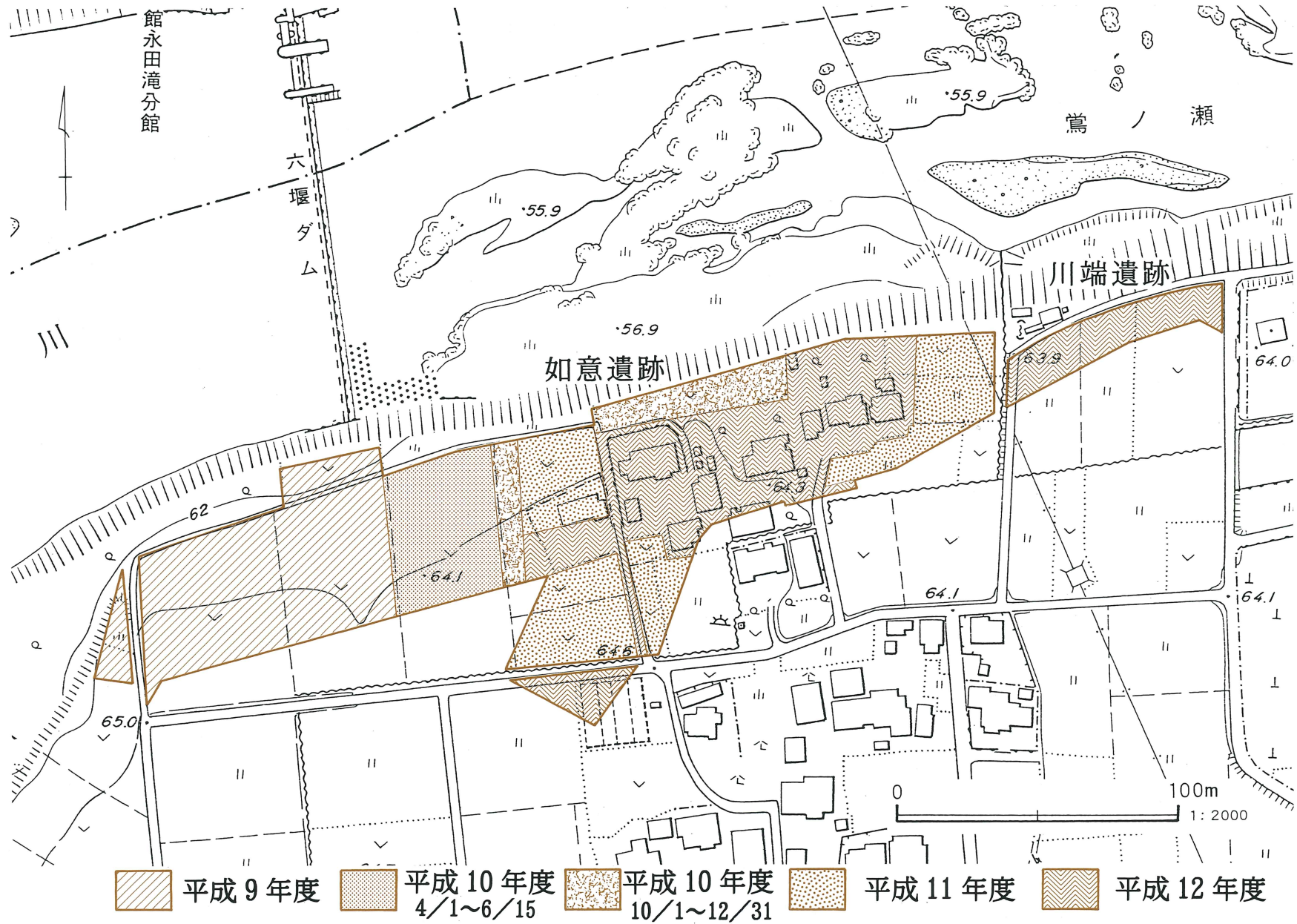
平成11年10月から平成12年3月まで実施した。調査地点は前年度調査地点の東に隣接した荒川に面した地点と、宅地を挟んだ南側の地点、そこから町道を挟んだ東側の地点、そして約100m東の遺跡東端部にあたる地点の計4地点である。

最初に荒川に面した地点から囲柵・重機による表土掘削を開始し、南側の地点、その東側と進め、10月中には3地点の表土掘削は終了した。同時に遺構確認等の作業を開始し、順次北から南へ作業を進めた。12月には荒川に面した地点、南側の地点が終了し、全景写真撮影後、危険防止のため埋戻しを行った。平成12年1月にはその東側の地点の調査に着手し、並行して遺跡東端部の表土掘削を行った。遺跡東端部の地点では、東から西に向かって調査を進めた。何れの地点でも住居跡の密集度が高く、激しい重複が見られた。3月に調査区全景写真、空中写真撮影を行って調査を終了した。

(平成12年度)

平成12年4月から11月まで実施した。発掘調査の最終年度であり、東側に隣接する川端遺跡と、如意遺跡の前年度までに用地等の関係で調査ができなかった調査区東半部や、南端の農道に取り付く地点、町道部分等の調査を行った。

4月に川端遺跡と如意遺跡の中央付近を囲柵、重機による表土掘削、遺構確認、基準点測量を行い、遺構精査を進めた。5月下旬、全景写真、空中写真撮影を実施し、危険防止のため埋戻した。



第1図 調査区と調査年度

6月からは如意遺跡の東半部の調査を開始した。三軒の住宅が東側の家から一軒づつ移動するのに伴い、囲柵・表土掘削・基準点測量・遺構精査等を繰り返し、返すこととなった。まず、前年度に調査した遺跡東端部に隣接した地点から調査に着手し、順次西進した。この地点は、遺跡内でも最も遺構の重複の激しいところであった。並行して、7月に町道部分の調査を行い、10月末、全景写真、空中写真撮影・空中測量を実施した。11月には、遺跡南端部の調査を行った。その後、一部埋戻し、器材の撤収、現場事務所の撤収等を行い、発掘調査の全工程を終了した。

整理・報告書作成

本事業における如意遺跡の整理・報告書作成作業は、既に平成12年度・13年度に調査区の西半部分が実施されており、報告書も刊行されている（事業団報告書第264・276集）。本年度は、東半部分の整理・報告書作成作業を平成14年5月10日から平成15年3

月24日まで実施した。

5月から出土遺物の水洗・注記および接合・復元を行った。これと並行して遺構実測図・写真等記録図面の整理を行った。中旬からは接合・復元が終了した遺物の実測を開始し、大型遺物はスリースペースを使用して実測を行った。また、同時に遺構第二原図の作成を始めた。

6月からはパソコンによる遺構トレースを始めた。8月に遺物の接合・復元が終了し、中旬に拓本を行い、下旬からは遺物のトレースを開始した。9月には遺物観察表の作成を始め、中旬からは遺物の写真撮影用の復元・着色を行い、遺構・遺物の版組と原稿執筆を開始した。

10月には周辺地形図・遺跡全測図等を作成し、11月に遺物の写真撮影を行った。12月に版組・原稿執筆を終了し、下旬には割り付けを行った。

平成15年1月から印刷に入り、3回の校正を経て、3月報告書を刊行した。

発掘調査工程表

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	担当者
平成9年度							■						利根川 山本 瀧瀬
平成10年度	■						■						山本 栗岡
平成11年度							■						山本 岩瀬 大谷
平成12年度	■												剣持・岩瀬 上野・栗岡 渡辺
	■	■											

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成9～12年度)

平成9年度		専門調査員兼経理課長	関野 栄一
理 事 長	荒井 桂	主 任	江田 和美
副 理 事 長	富田 真也	主 任	福田 昭美
専 務 理 事	塩野 博	主 任	菊池 久
常務理事兼管理部長	稲葉 文夫	調 査 部	
管 理 部		調 査 部 長	谷井 彪
庶 務 課 長	依田 透	調 査 部 副 部 長	水村 孝行
主 査	西沢 信行	調 査 第 一 課 長	井上 尚明
主 任	長滝 美智子	統 括 調 査 員	山本 禎
主 任	腰塚 雄二	主 任 調 査 員	栗岡 潤
専門調査員兼経理課長	関野 栄一		
主 任	江田 和美	平成11年度	
主 任	福田 昭美	理 事 長	荒井 桂
主 任	菊池 久	副 理 事 長	飯塚 誠一郎
調 査 部		常務理事兼管理部長	広木 卓
理 事 兼 調 査 部 長	梅沢 太久夫	管 理 部	
調 査 部 副 部 長	今泉 泰之	管理部副部长兼経理課長	関野 栄一
調 査 第 四 課 長	鈴木 秀雄	主 任	福田 昭美
主 査	利根川 章彦	主 任	腰塚 雄二
主 任 調 査 員	山本 禎	主 任	菊池 久
主 任 調 査 員	瀧瀬 芳之	庶 務 課 長	金子 隆
		主 査	田中 裕二
		主 任	江田 和美
平成10年度		主 任	長滝 美智子
理 事 長	荒井 桂	調 査 部	
副 理 事 長	飯塚 誠一郎	調 査 部 長	増田 逸朗
常務理事兼管理部長	鈴木 進	調 査 部 副 部 長	水村 孝行
管 理 部		専門調査員 (調査第二担当)	坂野 和信
庶 務 課 長	金子 隆	統 括 調 査 員	山本 禎
主 査	田中 裕二	主 任 調 査 員	岩瀬 讓
主 任	長滝 美智子	主 任 調 査 員	大谷 徹
主 任	腰塚 雄二		

平成12年度

理 事 長	中 野 健 一
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	広 木 卓
管 理 部	
管 理 部 副 部 長	関 野 栄 一
主 席 (庶務担当)	阿 部 正 浩
主 席 (施設担当)	野 中 廣 幸
主 任	菊 池 久
主 席 (経理担当)	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
調 査 部	
調 査 部 長	高 橋 一 夫
調 査 部 副 部 長	石 岡 憲 雄
専門調査員 (調査第一担当)	坂 野 和 信
統 括 調 査 員	劔 持 和 夫
統 括 調 査 員	岩 瀬 讓
主 任 調 査 員	上 野 真由美
主 任 調 査 員	栗 岡 潤
主 任 調 査 員	渡 辺 清 志

(2) 整理作業 (平成14年度)

理 事 長	桐 川 卓 雄
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	大 館 健
管 理 部	
管 理 幹 事	持 田 紀 男
主 任	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
主 任	菊 池 久
調 査 部	
調 査 部 長	高 橋 一 夫
調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
主席調査員 (資料整理担当)	磯 崎 一
統 括 調 査 員	岩 瀬 讓
主 任 調 査 員	大 谷 徹
主 任 調 査 員	栗 岡 潤

II 遺跡の立地と環境

如意遺跡は、大里郡川本町大字畠山に所在し、町域のほぼ中央を東流する荒川右岸の河岸段丘上に立地する。標高は64mほどである。

如意遺跡は、荒川に面した地点に位置しており、寄居町内を東流してきた荒川が北東方向に流れを変え、再び東流する変換点にある。

遺跡の西側と北側は荒川に面し、遺跡の東は川端遺跡、南には如意南遺跡がそれぞれ隣接している。

如意南遺跡のさらに南には、中世に活躍した武士、畠山氏が居住したと伝えられる畠山館跡がある。

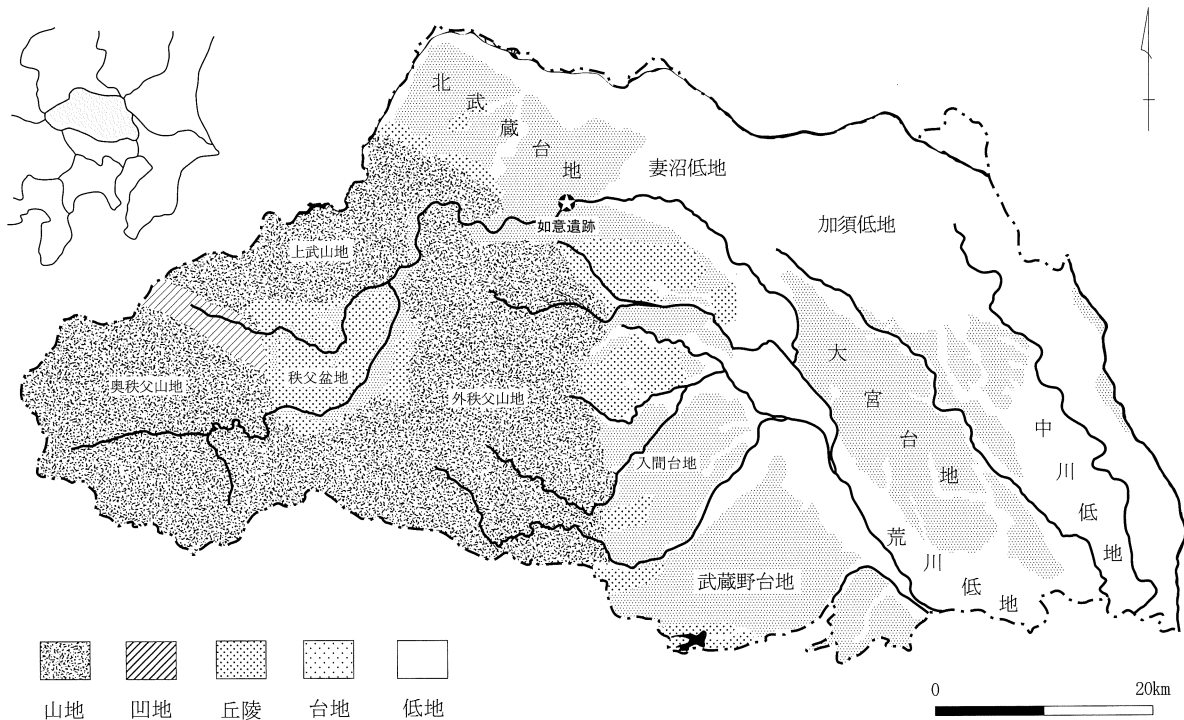
遺跡周辺の地形は、荒川による浸食作用と堆積作用によって形成された河岸段丘であり、最も高位にあるものは南岸では江南面（江南台地）、北岸では櫛引面（櫛引台地）と呼ばれ、関東ローム層が薄く堆積し、最も古い段丘と考えられている。

如意遺跡は、江南面より一段低い寄居面に位置し、遺跡北側の荒川に面した地点は、現在では護岸された急な崖となっている。

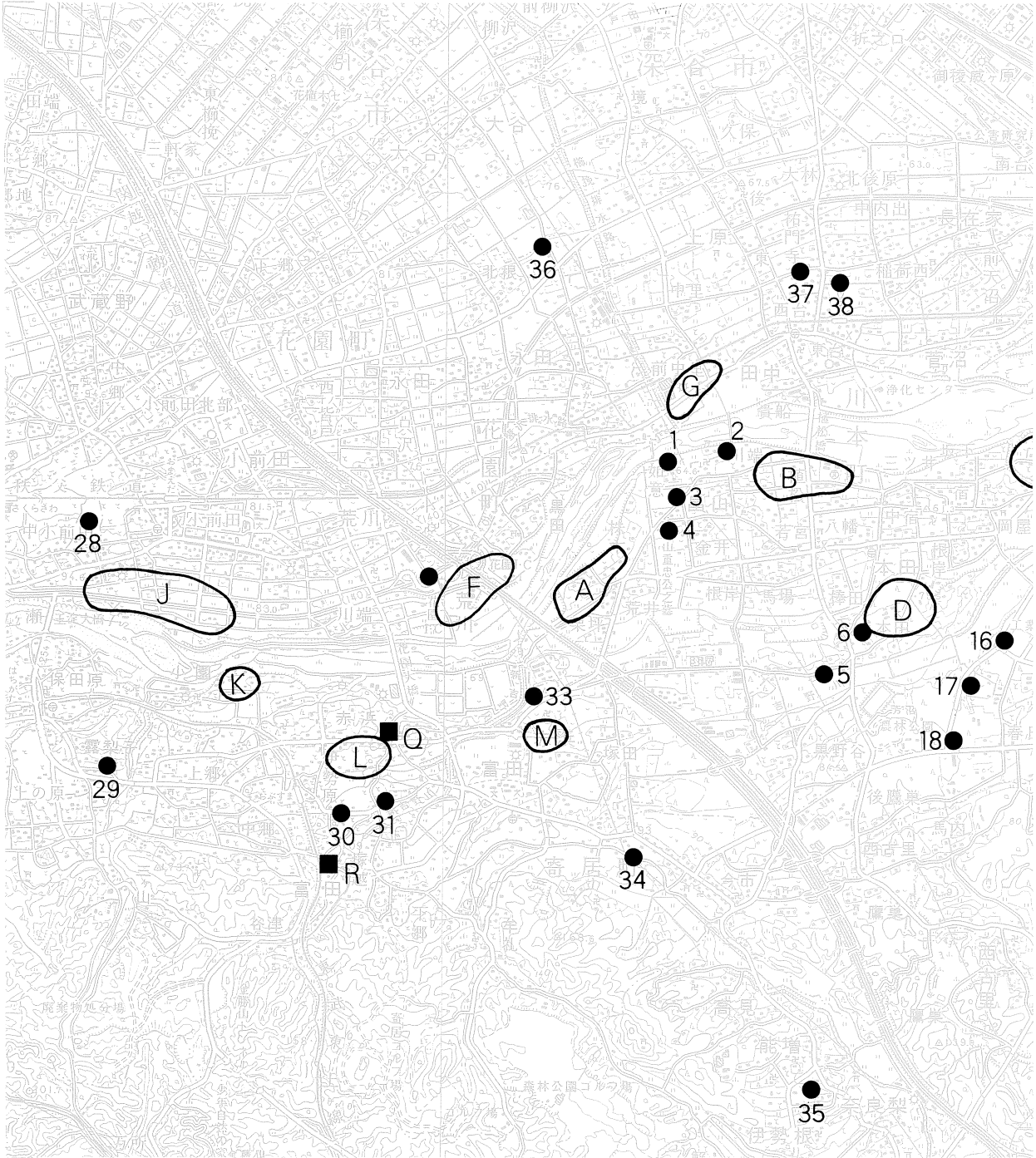
六堰頭首工建設以前の明治18年測量の迅速図では、遺跡北側は荒川との間に寄居面よりも一段低い瀬山面と思われる低地が認められる。また、戦後の圃場整備によって現在は平坦な地形となっているが、かつては浅い谷があり、起伏に富んだ地形であったことが如意遺跡や南側に隣接する如意南遺跡の調査で確認されている。

周辺の遺跡は、荒川右岸の河岸段丘上、江南台地上、左岸の櫛引台地上に分布し、櫛引台地上には遺跡が少ない傾向が見られる。

旧石器時代の遺跡は、江南台地の支谷に面した白草遺跡から北方系細石刃が出土している。縄文時代の遺跡は、江南台地を中心に点在する。草創期では四反歩遺跡で槍先形尖頭器が出土し、上本田遺跡の西側から有舌尖頭器が採集された。櫛引台地の沢口遺跡では厚手の爪形文土器が出土している。早期は、四反歩遺跡で住居跡が7軒調査され、前期では竹之花・田阿弥・権現堂遺跡で黒浜から諸磯a期にかけて

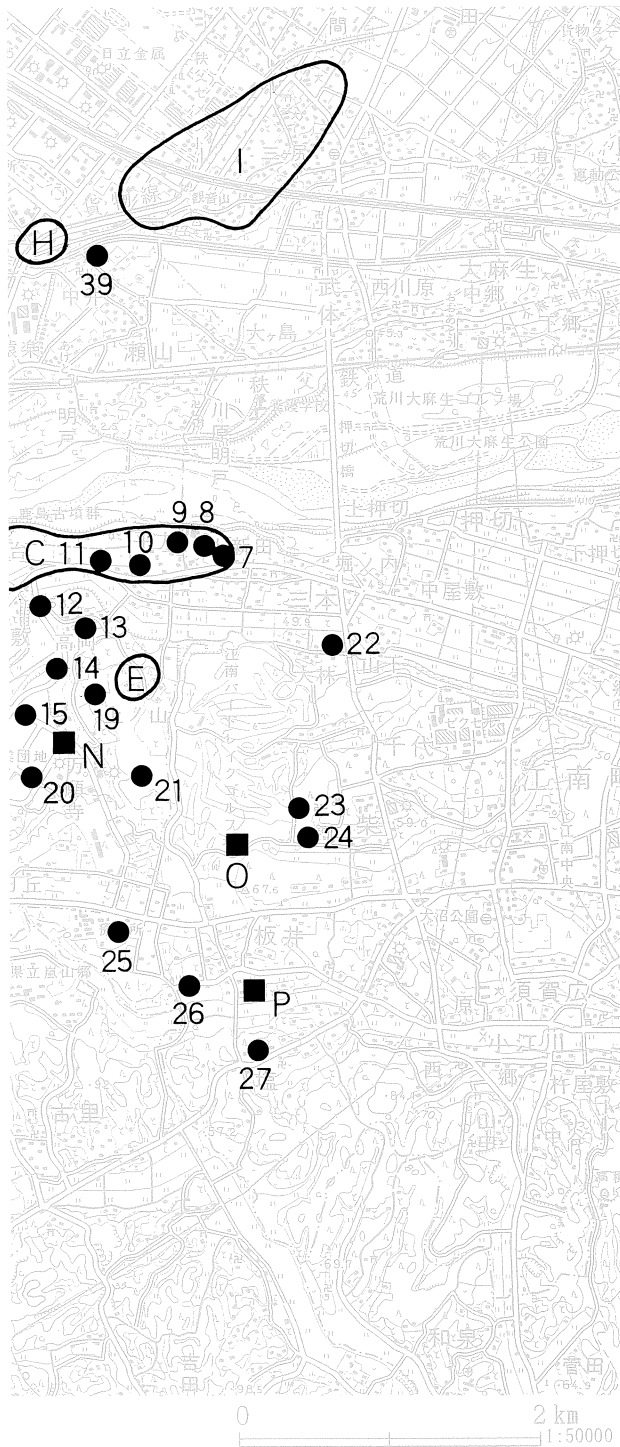


第2図 埼玉県の地形



- | | | | | | |
|------------|----------|----------|-----------|----------|-----------|
| 1 如意遺跡 | 2 川端遺跡 | 3 如意南遺跡 | 4 畠山館跡 | 5 本田館跡 | 6 上本田遺跡 |
| 7 鹿島中世墳跡 | 8 新田裏遺跡 | 9 平方裏遺跡 | 10 鹿島平方遺跡 | 11 鹿島遺跡 | 12 山之越遺跡 |
| 13 舟山遺跡 | 14 竹之花遺跡 | 15 白草遺跡 | 16 円阿弥遺跡 | 17 権現堂遺跡 | 18 焼谷遺跡 |
| 19 荷鞍ヶ谷戸遺跡 | 20 四反歩遺跡 | 21 百濟木遺跡 | 22 権現坂遺跡 | 23 天神谷窠跡 | 24 西遺跡 |
| 25 桜山遺跡 | 26 岩比田遺跡 | 27 塩西遺跡 | 28 桜沢窠跡 | 29 露梨子遺跡 | 30 東伴場地遺跡 |
| 31 庚申塚遺跡 | 32 台耕地遺跡 | 33 赤浜天神沢 | 34 薬師入遺跡 | 35 大杉遺跡 | 36 東原遺跡 |
| 37 沢口遺跡 | 38 亥ノ堀遺跡 | 39 大門遺跡 | | | |

第3図 周辺の遺跡



- | | | |
|-------------|----------|----------|
| A 箱崎古墳群 | B 塚原古墳群 | C 鹿島古墳群 |
| D 上大塚古墳群 | E 清水山古墳群 | F 黒田古墳群 |
| G 見目古墳群 | H 長在家古墳群 | I 三ヶ尻古墳群 |
| J 小前田古墳群 | K 小園古墳群 | L 伊勢原古墳群 |
| M 赤浜古墳群 | N 諱光寺廃寺 | O 寺内廃寺 |
| P・Q 出雲伊波比神社 | R 小被神社 | |

の小規模集落が分布する。中期は、舟山遺跡で勝坂～加曾利EⅡ式の集落が、上本田遺跡では加曾利EⅢ～Ⅳ式の住居跡が50軒調査された。後期になると遺跡数は減少し、山之越遺跡、四反歩遺跡で堀之内式期の小集落が検出されている。弥生時代の遺跡は、島山館跡で前期末から中期初頭とされる壺型土器が単独で出土し、後期では焼谷・白草・荷鞍ヶ谷戸遺跡で調査されている。

古墳時代は、江南台地上の円阿弥・白草遺跡で中期の集落が、権現堂遺跡では後期の住居跡7軒が調査されている。河岸段丘上では、如意・川端遺跡のほか、如意遺跡の南に隣接する如意南遺跡で古墳時代から奈良・平安時代の住居跡42軒、掘建柱建物跡1棟が調査され、土錘や紡錘車のほか帯金具が出土している。また、川端遺跡は川本町教育委員会によって3次の調査が行われ、古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡24軒、掘建柱建物跡1棟が検出され、緑釉陶器や灰釉陶器が出土している。

古墳は、荒川の両岸に群集墳が造られている。左岸には上流から花園町小前田古墳群・黒田古墳群・見目古墳群が、櫛引台地をやや入ったところに長在家古墳群、熊谷市三ヶ尻古墳群があり、右岸河岸段丘上には小園古墳群・箱崎古墳群・塚原古墳群・鹿島古墳群がある。また、江南台地の縁辺には上大塚古墳群、清水山古墳群が造られている。

黒田古墳群は、30数基が確認されており、前方後円墳1基と他は円墳である。埴輪を持ち、6世紀後半から7世紀前半頃の築造と考えられている。見目古墳群は、円墳2基が調査されている。共に横穴式石室を有し、銅製八角稜鈴・刀装具・鉄鏃等が出土し、7世紀代の築造とされている。また円墳2基以外の古墳からは円筒・形象・器財埴輪が多量に出土している。長在家古墳群は、数基の古墳で形成されており、そのうち1基が調査され、横穴式石室を持つことが確認されている。遺物は出土しなかったが7世紀代のものと考えられている。

荒川右岸の箱崎古墳群は、6世紀前半から7世紀

にかけて32基以上が築造され、全長32mの前方後円墳と大型円墳1基を含んでいる。3基が調査され、横穴式石室が検出されており、玉類・耳環・刀子・埴輪等が出土している。塚原古墳群は、前方後円墳の蛤塚古墳を含む円墳十数基が知られていたが、消滅し、現存していない。なお、如意・川端遺跡はこの箱崎古墳群と塚原古墳群に挟まれるように位置しており、集落と古墳群との関連が想定される。鹿島古墳群は、県指定史跡で80基以上の円墳でなる。河原石積みの胴張形石室を特徴とする6世紀後半から7世紀代の築造である。また近年、埴輪の存在が確認された。

江南台地縁辺部に立地する上大塚古墳群は、6基が確認されていた。清水山古墳群は、11基以上の円墳で、詳細は不明だが、埴輪片が出土しており、6世紀前半以降の築造とされている。

奈良・平安時代は、如意遺跡の立地する荒川右岸は、男衾郡に属していたと考えられる。『和名抄』によると、男衾郡は八郷からなる中郡とされている。群の領域については諸説あり、川本町・寄居町の荒川右岸・江南町・小川町・嵐山町の一部を含むとされる。

奈良・平安時代の遺跡は、荒川沿岸部では古墳時代から継続して営まれることが多い。如意・川端遺跡をはじめ、隣接する如意南遺跡、鹿島遺跡、鹿島平方裏遺跡等がある。鹿島遺跡・鹿島平方裏遺跡は、鹿島古墳群と重複し、江南町新田裏遺跡を含めると東西3km、南北1kmの細長い範囲に広がる集落遺跡である。

江南台地では、竹之花遺跡、白草遺跡、円阿弥遺跡、四反歩遺跡の集落や、8世紀前半の瓦が出土した荷鞍ヶ谷戸遺跡、小金銅仏が出土した諦光寺廃寺がある。百済木遺跡では、8世紀初頭に柵列で区画された竪穴住居跡と掘建柱建物跡で構成された建物群が2ヶ所で確認された。青銅製帯金具、銅鈴、墨書土器等が出土し、豪族の居宅と推定されている。また、百済木遺跡の南東の江南町内に寺内廃寺があ

る。寺内廃寺は、南から中門・金堂・講堂の順に南北に直線的に配置され、金堂の東隣に塔が建てられ、回廊が巡るという本格的な伽藍配置を有した寺院跡である。寺地内にあたる集落跡からは「石井寺」・「花寺」・「東院」等の墨書土器が出土している。寺の創建は8世紀前半とされ、9世紀前半に再建され、10世紀末には廃絶したと考えられている。

寺内廃寺付近は、式内社の出雲伊波比神社を含む地域で、他に塩西遺跡・岩比田遺跡等がある。岩比田遺跡からは円面硯が出土している。

如意遺跡西方の荒川上流方向に目を移すと、寄居町内に庚申塚遺跡・薬師入遺跡・東伴場地遺跡などがある。東伴場地遺跡からは、基壇状遺構と8世紀前半の複弁八葉蓮華文軒丸瓦を含めた瓦が多数出土している。複弁八葉蓮華文軒丸瓦は、岡部町岡廃寺・熊谷市西別府廃寺等の郡家推定地に隣接する寺院に供給されていることが知られており、東伴場地遺跡は、郡家あるいは隣接した寺院に関わる遺跡であった可能性がある。また、この地区には小被神社があり、男衾郡に3社あったとされる式内社の一つに比定されている。

中世には、如意遺跡付近は、畠山重忠の本拠地と伝えられ、如意・川端遺跡の南約500mに畠山館跡が、川端遺跡内には重忠と所縁のある満福寺・井椋神社がある。川端遺跡からは、中世と考えられる柱穴群が検出され、青磁片・古銭等が出土した。

館跡の南東1.5kmには重忠家臣の本田親常のものと伝えられる本田館跡があり、百済木遺跡では、14～15世紀の寺院跡が発掘され、古名に残る万願寺と推定されている。

如意遺跡の南西約2kmの寄居町赤浜地区には、伝鎌倉街道上道があり、南東から北東へ直線的に延びる掘割状遺構が現存している。

また、部分的ではあるが、寄居町赤浜天神沢遺跡で、側溝と硬化面を有する道路遺構が検出され、中世の鎌倉街道上道と推定されている。

Ⅲ 遺跡の概要

如意遺跡は、川本町の荒川右岸の河岸段丘上に位置し、昭和14年に建設された六堰頭首工により護岸された急峻な崖上にある。この六堰頭首工は平成13年に解体され、その一部であったトラス橋が川本町出土文化財管理センターに保存してある。現在は、新しい六堰頭首工の建設が着々と進められている。遺跡周辺は、近年の圃場整備により平坦となっているが、埋没谷が数箇所確認されており、旧地形は起伏に富んだ地形であることが明らかになっている。

如意遺跡の発掘調査は、平成9年度から平成12年度まで断続的に行われ、調査面積は18,284㎡となっている。検出された遺構数は、以下のとおりである。

竪穴住居跡	549軒
掘立柱建物跡	23棟
土坑	258基
溝跡	3条
性格不明遺構	21基
須恵器窯跡	1基
炉跡	4基
中近世墓	10基
ピット	多数

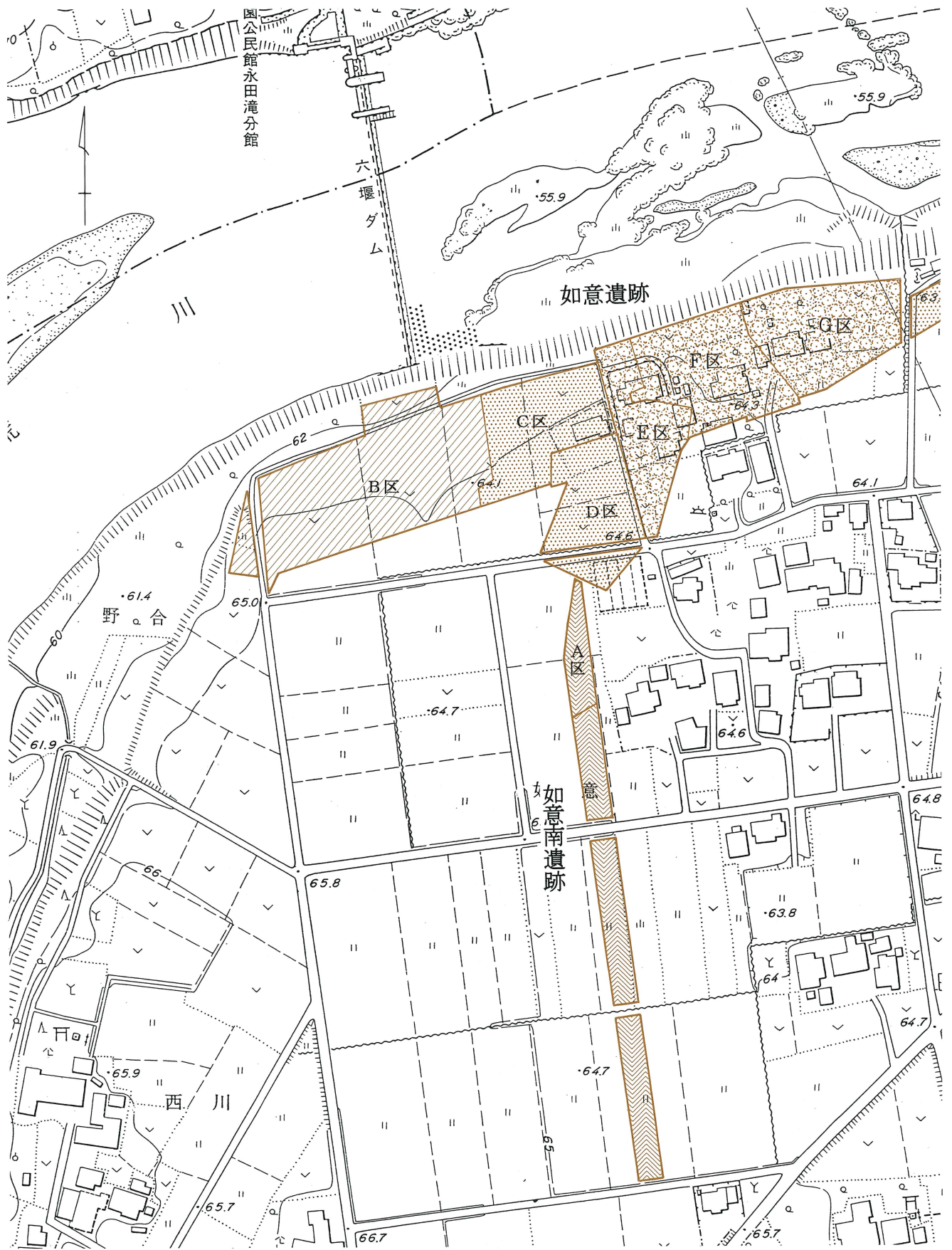
如意遺跡の調査は、平成10年6月から9月にかけて農道関係でも実施されており、如意南遺跡と共に既に報告されている（事業団報告第241集）。また、本事業のうち西側6,000㎡分は平成12年度に報告書が刊行されており（同第264集）、その東側の中央付近4,500㎡も平成13年度に報告されている（同276集）。なお、便宜的に如意遺跡のうち農道で調査された部分をA区、西側6,000㎡をB区、中央付近の4,500㎡のうち北側をC区、南側をD区と呼称した。本書で報告する地区は、調査区の東半部であるが、このなかを西側のC・D区に接する部分から順にE区、F区とし、東端をG区と呼称する。E区・F区・G区の面積は7,784㎡である。なお、A～G区の区分け

はあくまでも便宜的なものであり、集落の構成とは全く関係ない。遺構番号は、基本的に発掘調査時のものを使用しており、A区を含めた通し番号となっている。

A区は、道路建設のために幅12m前後で南北に細長く調査されている。調査面積3,500㎡のうち北端350㎡が如意遺跡で、南側は如意南遺跡となっている。如意遺跡内で検出された遺構は、竪穴住居跡17軒、土坑25基、溝跡1条である。住居跡は、古墳時代後期から奈良・平安時代のもので、重複が激しく見られた。A区北端では北に向かって急激に傾斜しており、A区北側のD区では南端が南に向かって傾斜し、遺構が希薄となっていた。このことからA区とD区の間は埋没谷があったものと考えられている。

B区は、本事業調査区の西側三分の一程である。検出された遺構は、竪穴住居跡118軒、土坑45基、性格不明遺構11基、須恵器窯跡1基、炉跡2基である。住居跡は古墳時代後期から奈良・平安時代のものである。住居跡は大きく3ブロックに別れている。何れのブロックも古墳時代後期の住居跡が多い。特に東側のブロックには多く見られ、中央のブロックは奈良・平安時代のもので多くなっている。須恵器窯跡は平坦地に立地する平安時代のものである。構造は半地下式、灰原は確認されなかった。甕を主体に焼成されているが、焼きは非常に悪い。9世紀末から10世紀第1四半期のものと考えられている。

C区で検出された遺構は、竪穴住居跡90軒、掘立柱建物跡5棟、土坑35基、溝跡1条、性格不明遺構5基とピット等である。D区で検出された遺構は、竪穴住居跡69軒、掘立柱建物跡7棟、土坑65基、性格不明遺構1基、炉跡2基、中近世墓10基とピット等である。両区の住居跡は、A・B区同様、古墳時代後期から奈良・平安時代のものである。住居跡は、C・D区境周辺で密集し、激しい重複が見られる。しかし北端の荒川に近い地点や南端のA区に続く地



第4図 調査区周辺の地形



上川端

井原神社

鶯の瀬公園

川端遺跡

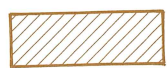
鳥山環境
保全センター

満福寺

荒屋敷



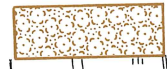
既報告範囲 事業団241集



既報告範囲 事業団264集



既報告範囲 事業団276集



本報告書範囲

200m
1:2500

点は、やや標高が低くなり住居跡も減少する。また、C区内において中世の墓墳が1基検出された。墓墳内からは北頭横臥屈葬で顔を西に向けた人骨が1体分と北宋銭、明銭が合計12枚出土した。

E区はC・D区の東に隣接する地区である。検出された遺構は、竪穴住居跡85軒、掘立柱建物跡2棟、土坑32基である。F区はE区の東の地区である。検出された遺構は、竪穴住居跡81軒、掘立柱建物跡9棟、土坑19基、溝跡1条、性格不明遺構4基である。G区はF区の東で、調査区の東端になる地区である。検出された遺構は、竪穴住居跡89軒、土坑37基である。これら3区の住居跡は、A～D区と同様の時期である。北側の荒川沿いは住居跡の分布が散漫となっているが、南半部分は密集度が高い。特に、E区中央部のC・D区から続く部分やF区東半部からG区にかけては住居跡が激しく重複し、ほとんど切れ目のない状態である。

調査区全体は、遺跡の北側を東西に流れる荒川に沿って長さ約340m、幅約50mで、中央付近で農道に取り付く部分が南に張り出している。地表から遺構確認面までの深さは地点によって異なり、全体的には荒川寄りの北側は浅く、南は深くなる傾向がある。確認面の標高は61.0m～64.0mである。地山の下層は礫層、砂層、黄褐色シルト層と地点により異なり、川の氾濫等で複雑な地形となっていることが窺える。F区からG区の荒川沿いは、礫層が露出していた。

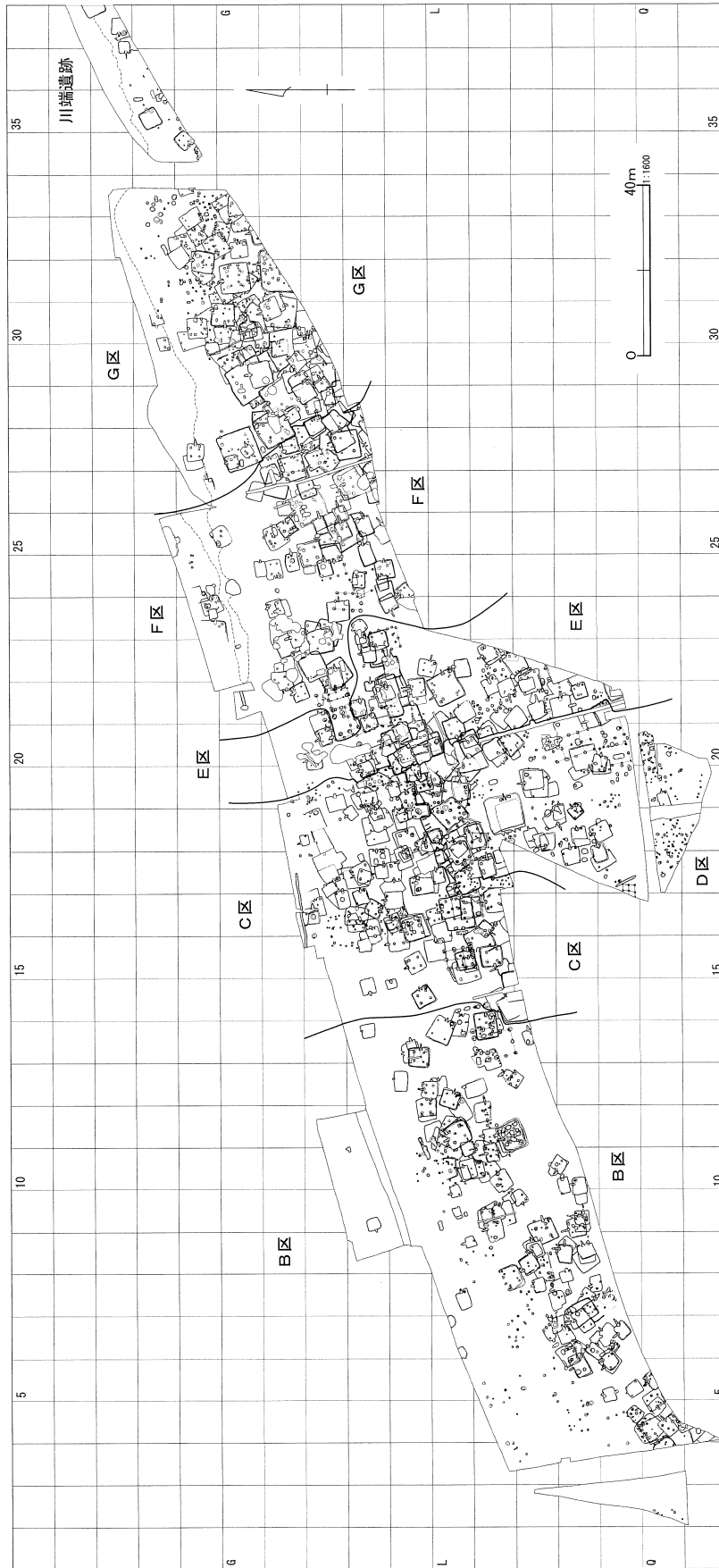
竪穴住居跡は全て古墳時代後期から奈良・平安時代のものである。住居跡は調査区全域に分布するが、西端と荒川沿いは散漫で、南半に集中し、調査区外へ続いている。特にC区からG区にかけては集中度が高い。古墳時代後期の住居跡は調査区全域で多く見られるが、奈良・平安時代の住居跡はA区とE・F区境周辺に多い傾向が窺える。また、如意遺跡の東

に隣接する川端遺跡、南の如意南遺跡とは同一段丘上に連続する集落と考えられる。

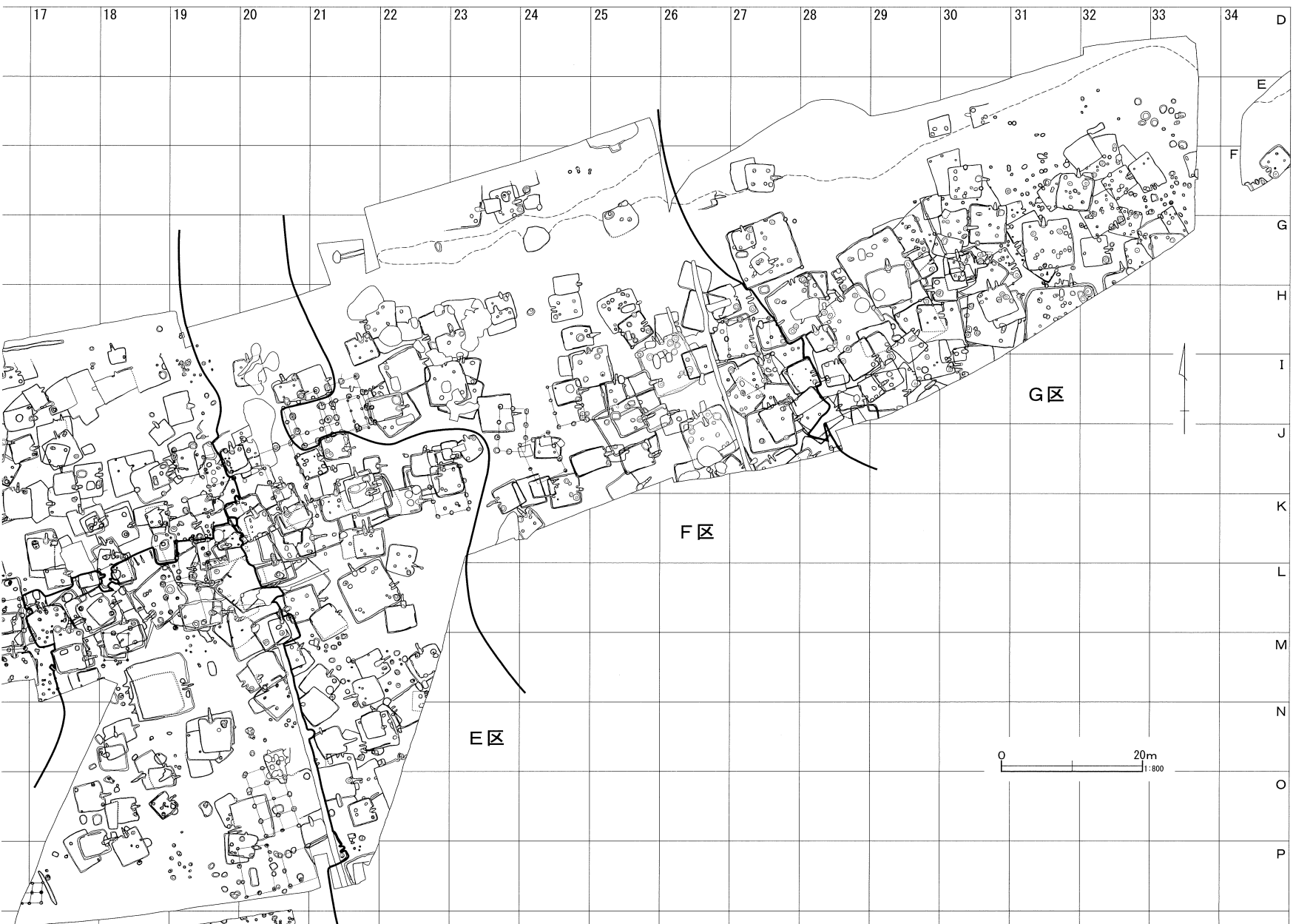
遺物は、土師器・須恵器を中心として多量に出土した。住居跡から出土した須恵器は末野産が主体を占めているが、本遺跡B区で検出された須恵器窯の製品と考えられるものも見られた。また、土錘が3,200点以上出土しており、1遺跡の出土量としては県内において最大量と思われる。

川端遺跡は如意遺跡の東に隣接し、遺跡西端を本事業において発掘調査が行われた。調査面積は962㎡である。検出された遺構は、竪穴住居跡12軒、土坑12基、溝跡1条である。住居跡は全て古墳時代後期のもので、調査区全域に分布する。調査区中央にまとまる傾向は見られるが、如意遺跡ほどは密集しない。北側の荒川沿いは、礫層が露出していた。集落としては、如意遺跡から続く集落の北端が検出されたものと考えられる。詳細は当事業団報告書第276集『如意Ⅲ／川端』を参照して頂きたい。

如意南遺跡は如意遺跡の南に隣接し、農道関係で調査された。この時の調査区の北端が如意遺跡A区である。幅約12m、長さ約230mで調査され、調査面積は3,000㎡である。検出された遺構は、竪穴住居跡42軒、掘立柱建物跡1棟、土坑60基、溝跡4条、ピット群4箇所である。住居跡は、如意遺跡同様、古墳時代後期から奈良・平安時代のもので、調査区全域にわたって分布していた。また、如意遺跡ほどではないものの、住居跡同士の重複が見られた。調査区内で3箇所の埋没谷が検出され、礫層が露出していた部分も見られた。如意遺跡と如意南遺跡の境界付近は、住居跡を中心に遺構が連続して検出されており、集落的には連続するものと考えられる。詳細は当事業団報告書第241集『如意／如意南』を参照して頂きたい。

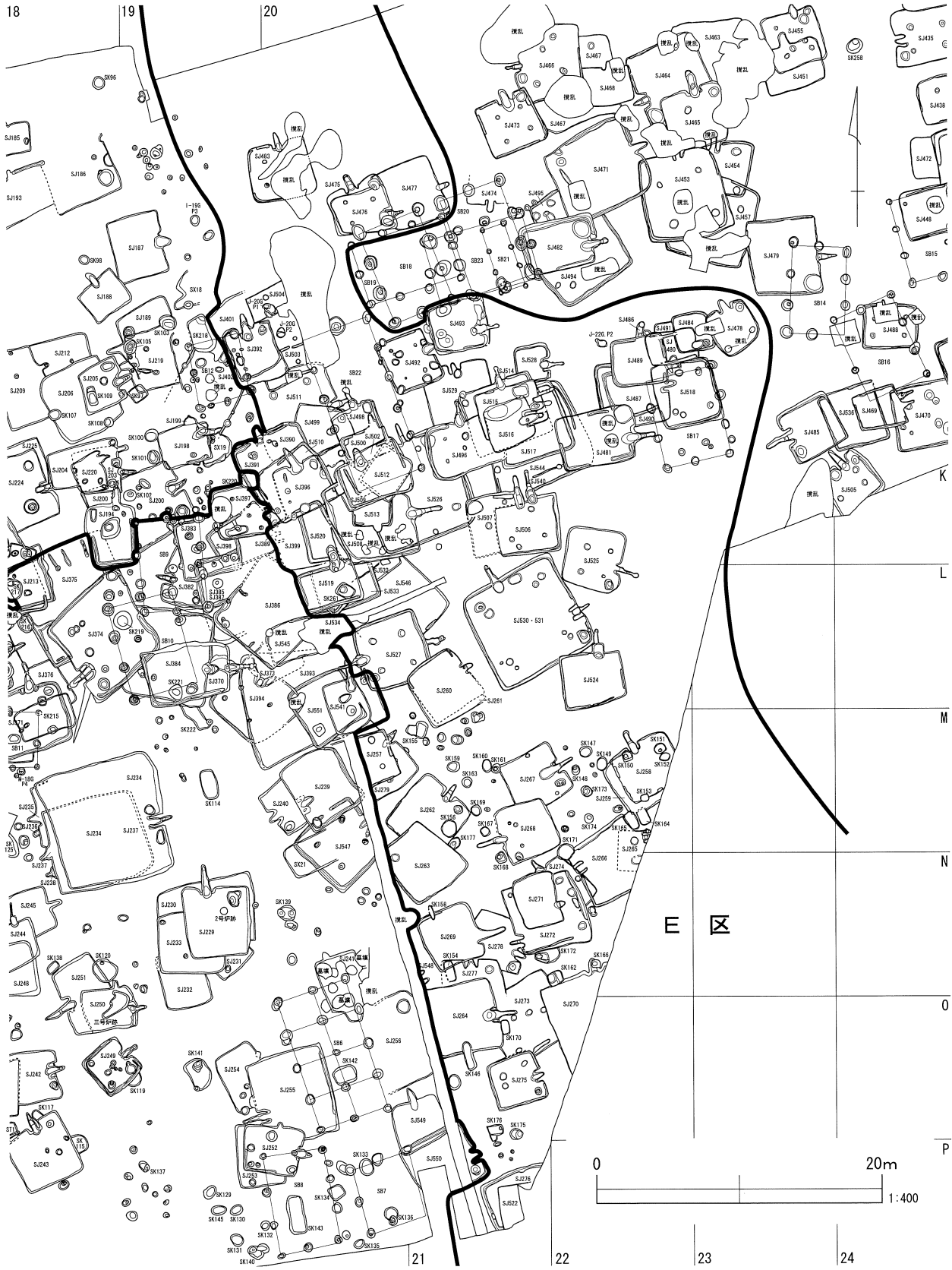


第5図 如意遺跡全測図



第6图 如意遗址E·F·G区全测图

IV E区の遺構と遺物



第7図 E区全測図

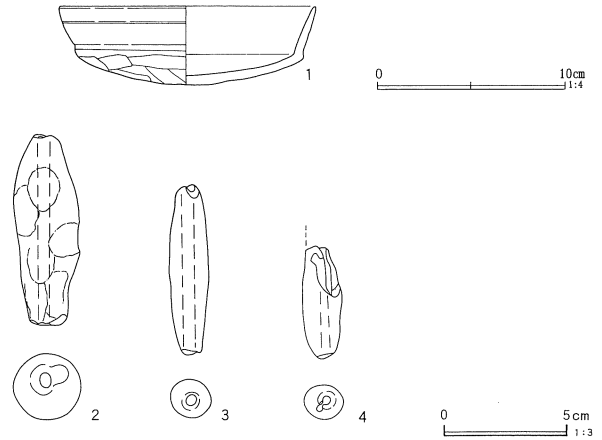
1. 住居跡

第257号住居跡（第8・9図）

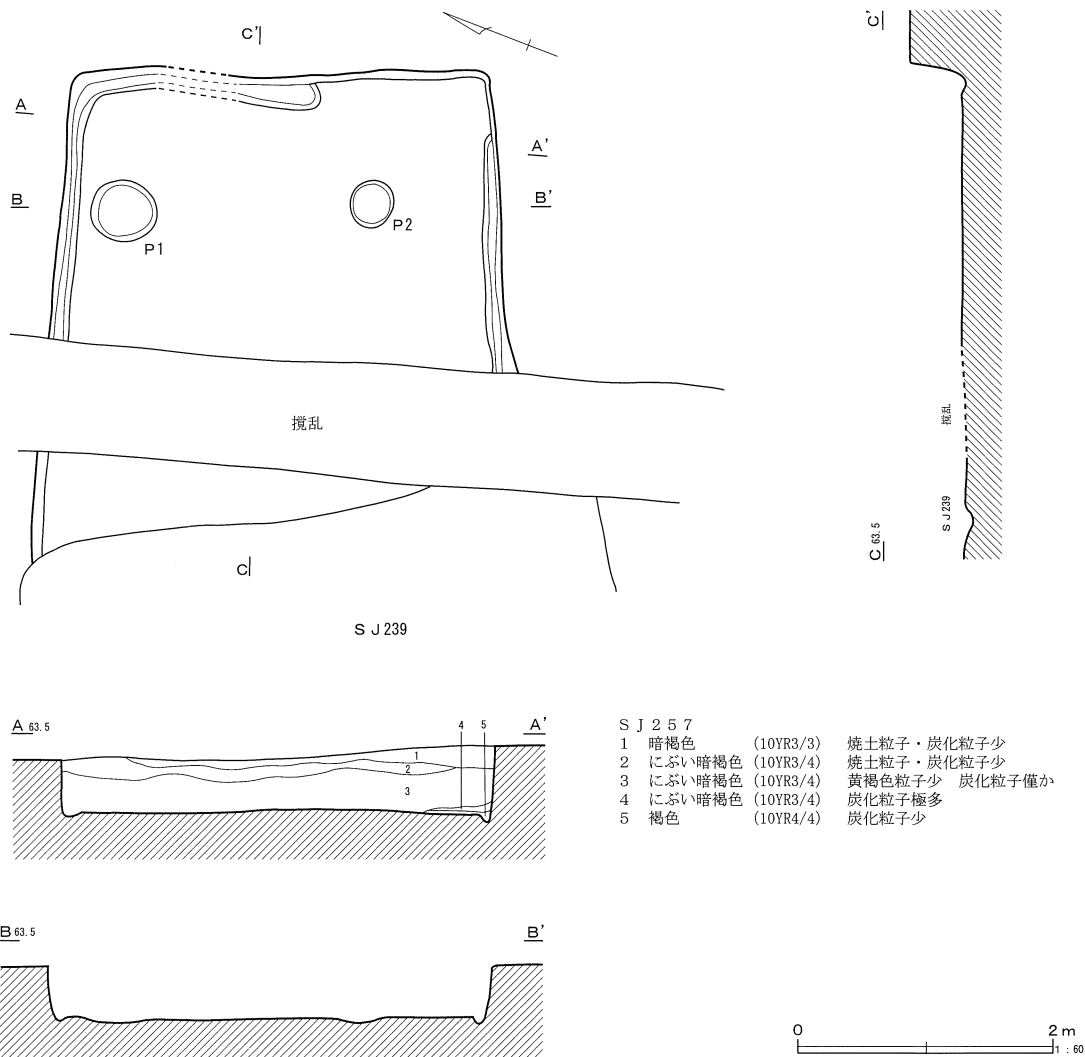
M-20グリッドに位置する。第239号住居跡に切られ、第279号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。平面形は東西に長い長方形と考えられる。検出された規模は、北壁3.84m、南北は3.65m、深さは0.49~0.52mである。住居跡中央付近を南北に攪乱で壊される。主軸方位はN-69°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南東コーナーと北壁の一部を除いて検出され、幅12~28



第8図 第257号住居跡出土遺物



第9図 第257号住居跡

cm、深さ2～6cmである。ピットは2本検出され、深さは共に3cmと浅い。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕・甔の破片が

少量出土したが、図示可能な遺物は、1の土師器坏1点と、土錘3点であった。

第257号住居跡出土遺物観察表（第8図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	13.7	4.2		BDEJ	不良	橙	75	覆土	磨耗著しい

第257号住居跡出土土錘観察表（第8図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	7.60	2.70	0.60	40.96	CbII	C	にぶい黄橙	100	
3	6.70	1.60	0.50	12.90	BaIII	A	にぶい黄橙	100	
4	(4.50)	1.60	0.40	8.00	BaV	A	にぶい褐	75	

第258号住居跡（第10・11図）

M-22グリッドに位置する。第150・151・152号土坑に切られ、第259号住居跡・第153号土坑を切る。南東コーナー付近は調査区域外にある。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.42m、短軸3.39m、深さは0.34～0.38mである。主軸方位はN-28°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土は2層に分かれ、短時間で埋没したと考えられる。

カマドは北壁中央より僅かに西寄りに設置される。

燃焼部は床面から10cm程掘り込み、緩やかに立ち上がりながら煙道部となる。覆土には明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は断続的に検出され、幅12～26cm、深さ2～7cmである。遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器坏・甕、須恵器の破片が出土した。特に土師器の破片は極めて多かったが、摩滅が著しく、接合率も悪かった。

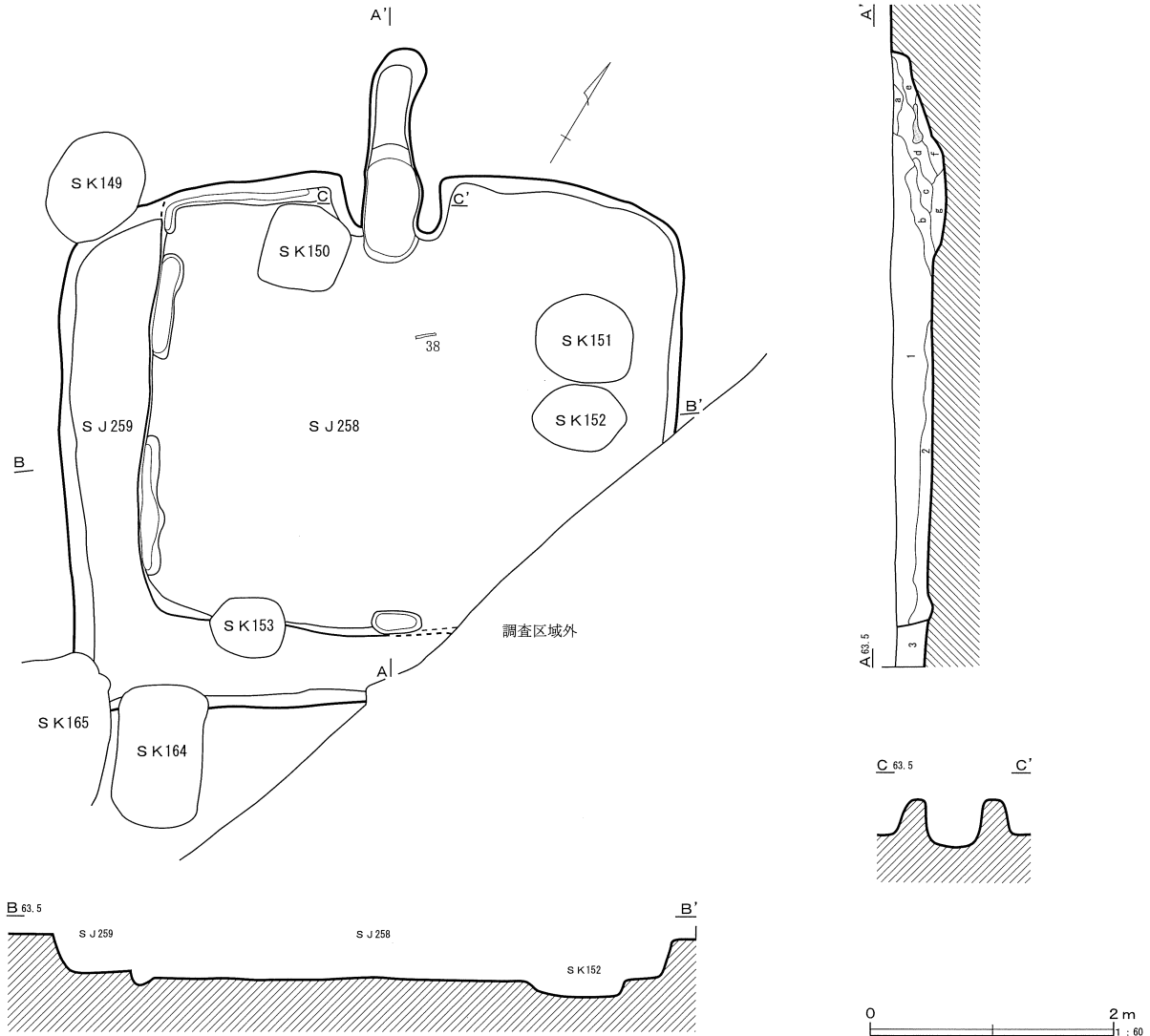
図示可能な遺物は、土師器坏5・甕2、須恵器蓋3、土錘23、棒状の鉄製品1点であった。このうち、須恵器蓋は他の遺物と時期差があり、重複する遺構からの混入と思われる。

第258号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.6)	3.6		ABDJ	普通	にぶい黄橙	20	A・B区	内外面黒色処理
2	土師坏	(10.4)	3.7		BEJL	不良	橙	20	B区	磨耗著しい
3	土師坏	(10.4)	2.8		BJ	普通	褐	25	カマド	
4	土師坏	(13.0)	3.6		ABDEJ	不良	橙	20	カマド	やや磨耗
5	土師坏	(11.8)	3.0		BCJL	不良	にぶい橙	20	B区	磨耗著しい
6	土師甕	(21.0)	9.0		ABDJL	不良	にぶい橙	20	B区	内外面磨耗著しい
7	土師甕		5.8	7.0	BCEHJL	普通	にぶい橙	70	A区	やや磨耗
8	須恵蓋		1.6		BJ	良好	灰	90	A区	末野産 つまみ直径3.5cm
9	須恵蓋		1.5		J	良好	褐灰	90	A区	末野産 つまみ直径3.5cm
10	須恵蓋		1.4		BJL	良好	灰	90	B区	末野産 つまみ直径4.0cm
11	鉄鏃	現存長16.70cm 幅0.68cm 重さ25.94g							床	長頸筥被片丸造柳葉式

第258号住居跡出土土錘観察表（第11図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
12	7.60	2.00	0.55	26.58	BaII	B	灰黄褐	100	B区
13	8.05	1.65	0.50	16.53	BaII	A	にぶい黄橙	100	B区
14	8.75	2.10	0.60	31.13	BaI	C	にぶい橙	100	B区
15	6.80	1.80	0.55	17.04	BaI	A	にぶい褐	100	B区
16	7.90	2.15	0.55	24.53	BaII	B	黒褐	95	B区

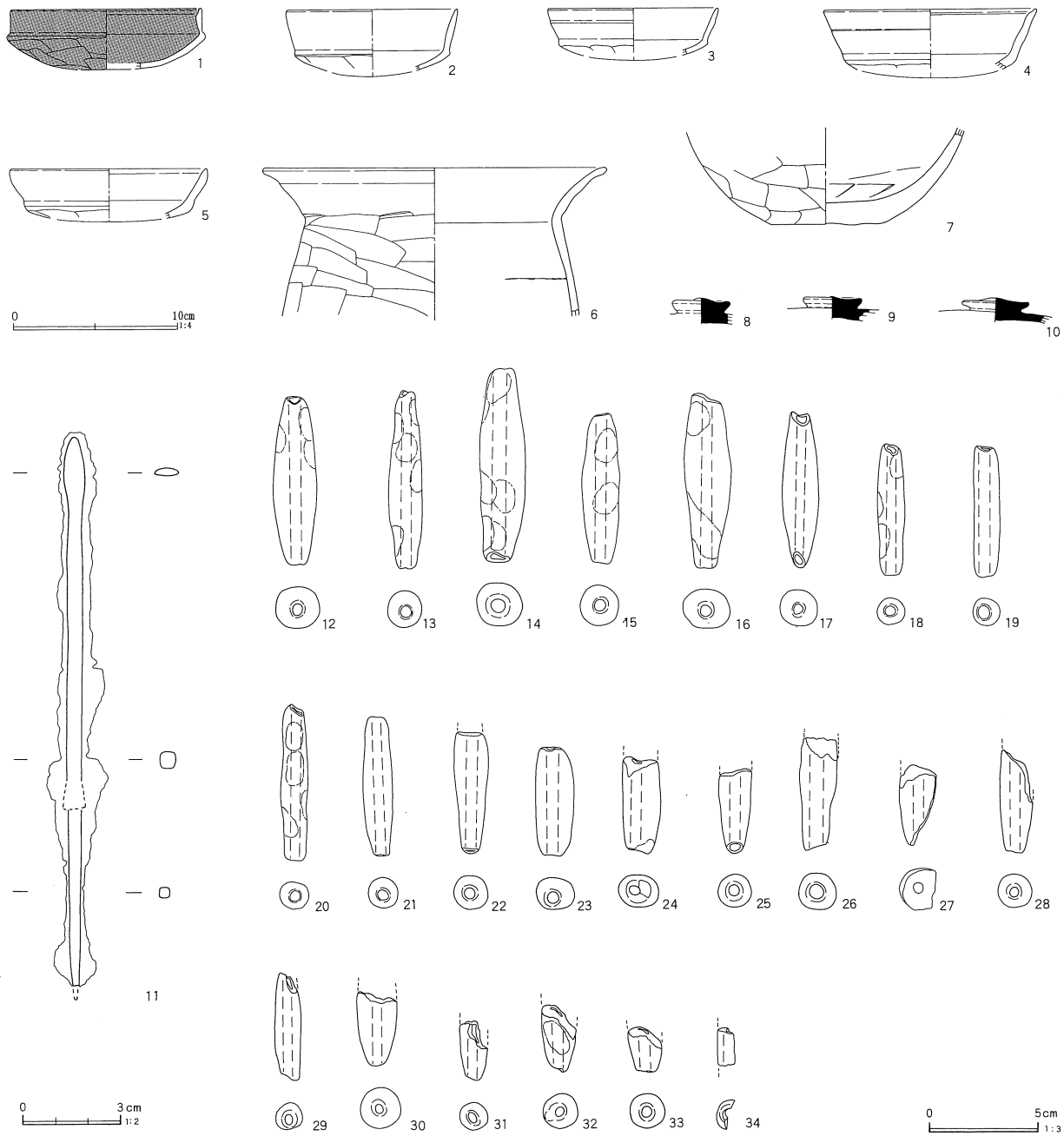


- S J 2 5 8
 1 褐色 (10YR4/4) 黄褐色粒子極多 焼土・炭化粒子・白色粒子少 d 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子・黄褐色粒子多 炭化粒子少
 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色粒子極多 炭化粒子僅か e 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色粒子・焼土ブロック多
 S J 2 5 8 カマド f 黒褐色 (10YR3/2) 焼土ブロック・黄褐色ブロック多
 a 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子極多 g 暗褐色 (10YR3/3) 赤褐色焼土粒子・炭化粒子少
 b 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色粒子多 焼土粒子・炭化粒子少 S J 2 5 9
 c 褐色 (10YR4/4) 黄褐色粒子極多 焼土粒子・炭化粒子やや多 3 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色粒子多 炭化粒子少

第10図 第258・259号住居跡

第258号住居跡出土土錘観察表 (第11図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
17	7.05	1.70	0.50	16.21	B a III	A	にぶい黄橙	100	A区
18	5.95	1.25	0.50	7.92	B a IV	C	にぶい橙	100	カマド右袖
19	5.90	1.20	0.60	7.65	B a IV	C	褐灰	100	B区
20	7.10	1.30	0.50	8.54	B a III	C	にぶい黄橙	100	A区
21	6.35	1.35	0.50	9.83	B a IV	C	にぶい橙	100	A区
22	(5.50)	1.50	0.50	10.45	B a III	A	橙	85	B区
23	4.90	1.75	0.55	11.34	B a V	A	にぶい褐	100	B区
24	(4.40)	1.80	0.50	10.15	B a III	B	黒褐	70	B区



第11図 第258号住居跡出土遺物

第258号住居跡出土土錘観察表 (第11図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
25	(3.85)	1.50	0.50	6.67	B a III	C	橙	50	A区
26	(5.10)	1.70	0.65	12.20	B a III	C	黒褐	75	A区
27	(3.65)	2.00	0.50	8.39	—	A	黄褐	15	A区
28	(4.65)	1.50	0.45	8.48	B a IV	A	褐	70	A区
29	4.90	1.20	0.50	5.89	B a V	C	にぶい黄橙	95	A区
30	(3.45)	1.80	0.40	9.52	B a IV	C	にぶい黄橙	45	A区
31	(2.70)	1.70	0.50	3.16	—	C	にぶい黄橙	30	A区
32	(3.00)	(1.60)	0.45	4.83	—	A	にぶい赤褐	30	A区
33	(2.10)	(1.55)	0.50	3.82	—	C	にぶい褐	25	B区
34	(1.70)	(1.40)	0.45	1.32	—	B	黒	10	A区

第259号住居跡 (第10図)

M-22グリッドに位置する。第258号住居跡・第149・153・164・165号土坑に切られる。住居跡の大半を第258住居跡に壊されており、南西部分は調査区域外となるため不明な点が多い。検出された規模は、東西が3.02mで、南北は4.2m前後になると考えられ

る。深さは0.19~0.33mである。主軸方位は西壁でN-33°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。覆土は観察された部分では1層である。カマド、貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。

遺物は、出土しなかった。

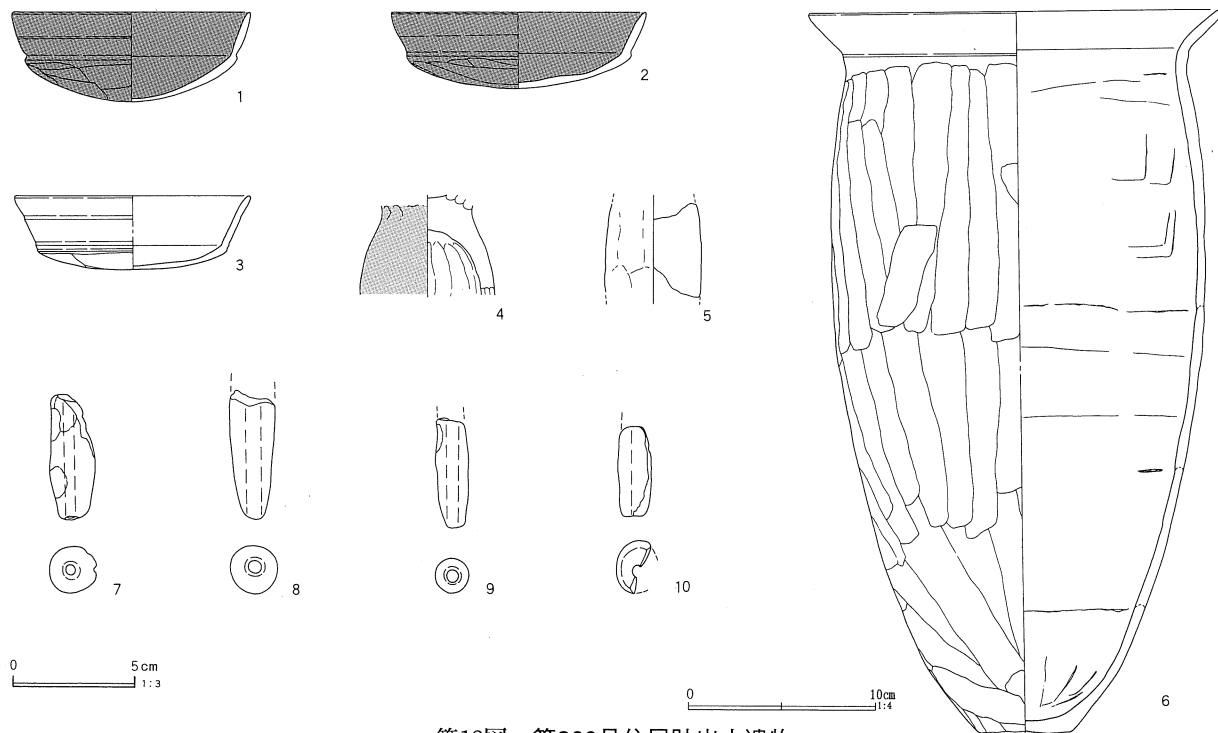
第260号住居跡 (第12・13図)

L・M-21グリッドに位置する。第261・527号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査した。調査当初は第261号住居跡との区別がつかず同時に調査したため、南壁と西壁が検出できなかった。平面形は正方形に近いと考えられ、南北4.12m、東西4.02m、深さは0.42~0.51mである。主軸方位はN-59°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは東壁中央よりやや北に設置される。燃焼部の掘り込みはなく、段を持って煙道部へ続く。また、左袖寄りに径15cm、深さ10cmのピットが検出された。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北壁で検出され、幅11~24cm、深さ1~9cmである。

遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器片が多



第12図 第260号住居跡出土遺物

第260号住居跡出土遺物観察表 (第12図)

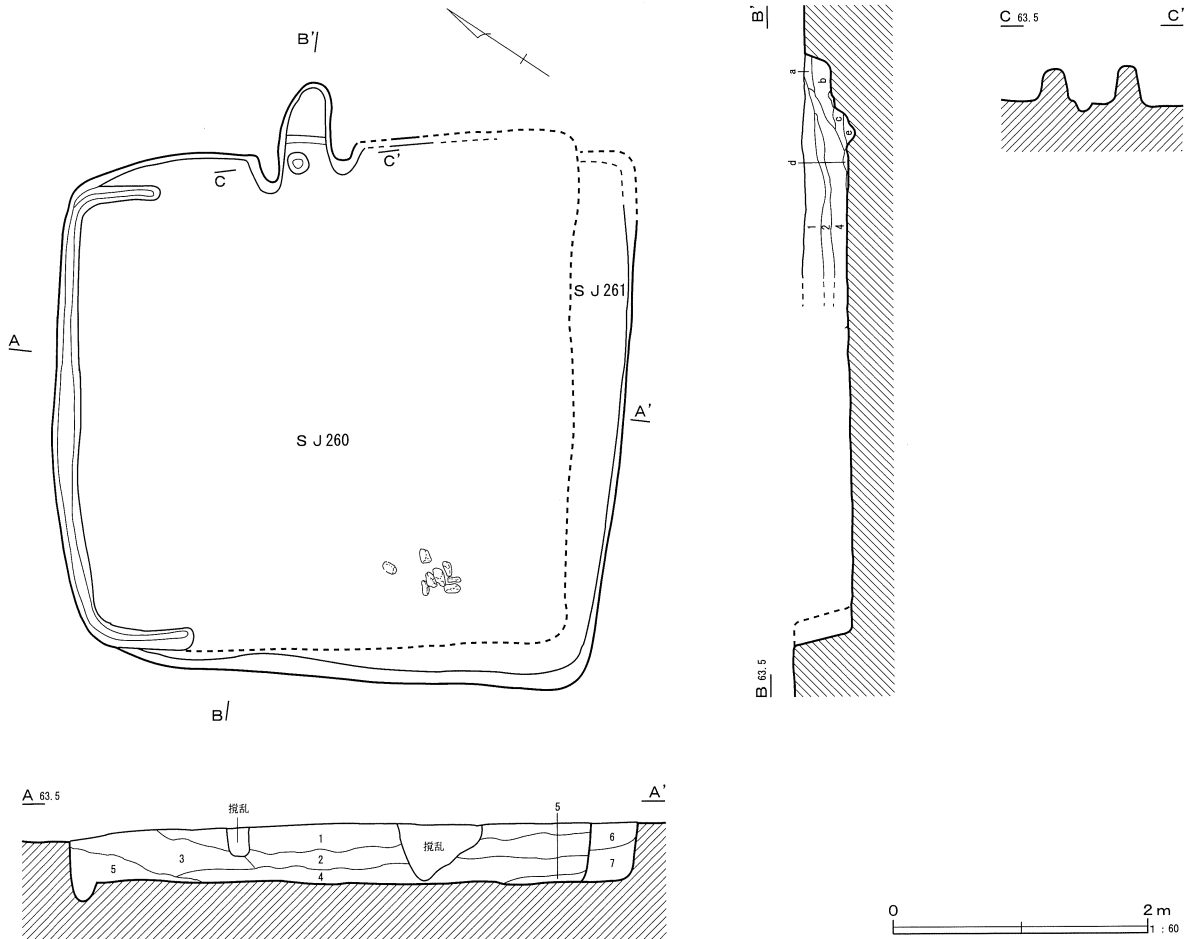
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.6	4.8		BDEJ	不良	橙	75	覆土	やや磨耗 内外面黒色処理
2	土師坏	13.5	4.0		BDEJL	不良	橙	60	カマド	磨耗著しい 内外面黒色処理
3	土師坏	(12.6)	3.9		BEJ	不良	にぶい橙	20	A区	
4	土師高坏		5.3		BEJL	不良	にぶい褐	60	B区	坏部内面・外面赤彩
5	支脚		5.0		BDEJ	不良	にぶい橙	45	B区	
6	土師甕	22.0	38.1	5.0	BEJL	普通	にぶい褐	60	カマド	

く出土した。何れも小破片で接合率は悪かった。

図示可能な遺物は、土師器坏3・高坏1・甕1、土製支脚1、土錘4点であった。2・6はカマドから、

他は覆土から出土した。

5の支脚は、高坏の脚部の可能性もあるが、成型調整が粗雑で、支脚とした。



- S J 2 6 0
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子・炭化粒子少
 - 2 黒褐色 (10YR3/2) 焼土粒子・炭化粒子少
 - 3 黒褐色 (10YR3/2) 2層に似るが黄褐色ブロック多
 - 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子・炭化粒子僅か
 - 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子少 炭化粒子多

- S J 2 6 0 カマド
- a 暗褐色 (10YR3/4) 焼土粒子僅か 白色粒子少
 - b 暗褐色 (10YR3/4) 焼土粒子・炭化粒子少

- c 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子少
- d 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子・炭化粒子やや多
- e にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子・炭化粒子やや多

- S J 2 6 1
- 6 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子極僅か
 - 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少

第13図 第260・261号住居跡

第260号住居跡出土土錘観察表 (第12図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
7	5.00	1.80	0.40	15.76	B a IV	A	にぶい黄橙	80	A区
8	(5.10)	1.90	0.55	15.28	B a III	B	にぶい黄褐	70	A区
9	(4.30)	1.45	0.50	7.72	B a IV	B	にぶい黄褐	70	B区
10	(3.55)	(2.00)	(0.40)	10.54	—	B	灰黄褐	—	A区

第261号住居跡 (第13図)

L・M-21グリッドに位置する。大半を第260号住居跡に切られる。検出された規模は南壁4.18m、西壁3.76mで、深さは0.44~0.56mである。主軸方位は南壁でN-63°-Eを指す。

床面の高さは第260号住居跡と同じで、壁は開き気味に立ちあがる。

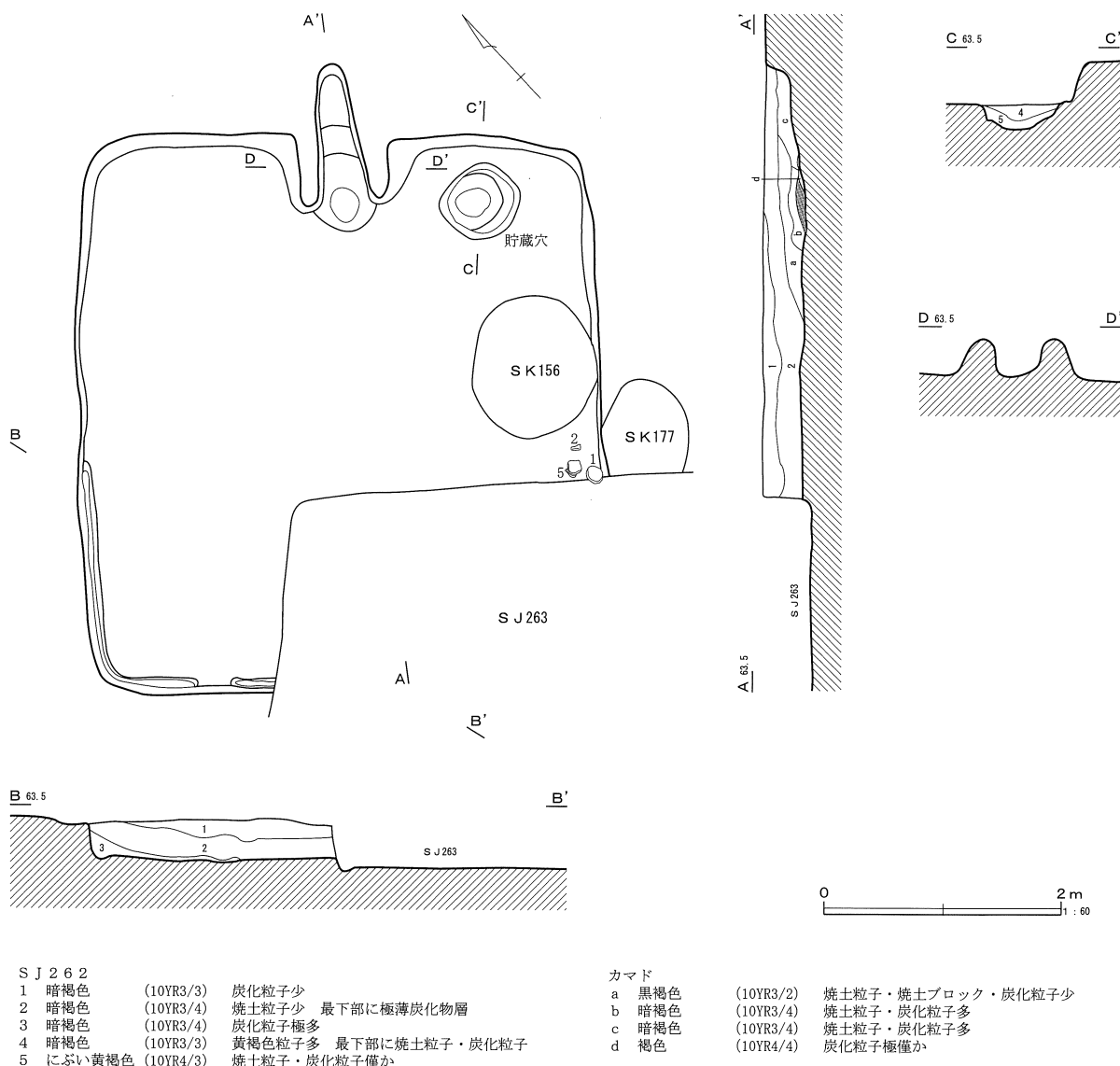
カマド、貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。
遺物は、出土しなかった。

第262号住居跡 (第14・15図)

M-20・21グリッドに位置する。第263号住居跡・第156号土坑に切れ、第177号土坑との関係は不明である。用地の関係で2回に分けて調査された。平面形は正方形で、北東壁から南西壁が4.75m、北西

壁から南東壁が4.54m、深さは0.31~0.38mである。主軸方位はN-43°-Eを指す。

床面は起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。
カマドは北東壁中央に設置される。燃烧部は僅かな掘り込みが見られ、緩やかな段で煙道部へ続く。



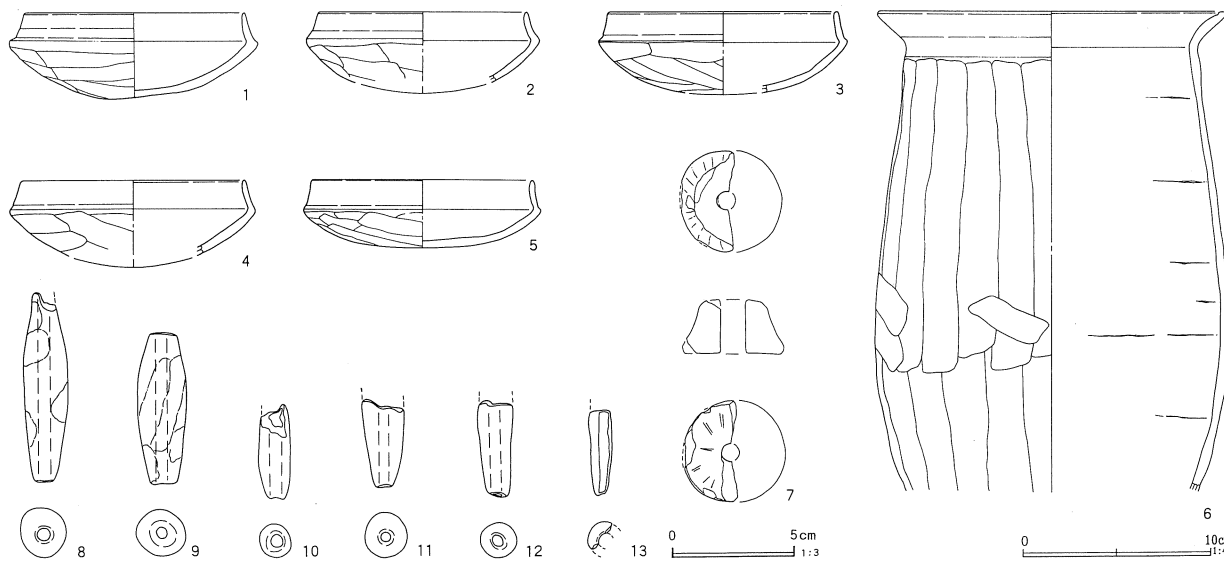
第14図 第262号住居跡

覆土下層近くに明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴はカマド右に設けられ、60×62cmの隅丸方形で、深さは19cmである。壁溝は西コーナー付近で検出され、幅12～16cm、深さ1～3cmである。ピットは検出されなかった。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器片が多く出土した。摩滅が著しく、接合率は悪かった。図示

可能な遺物は、土師器坏5・甕1、石製紡錘車1、土錘6点であった。

土師器坏は身模倣坏で構成され、口径12cm前後である。1・2・5は、床面から10cm前後浮いた状態、重複するSJ263との境界付近で出土した。土師器甕は胴下部以下を欠損するが、下部に張りのあるいわゆる下膨れの形態であったと思われる。



第15図 第262号住居跡出土遺物

第262号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	11.6	4.6		A B D E	不良	橙	95	+13cm	やや磨耗
2	土師坏	(11.0)	3.7		B D E J	不良	にぶい橙	20	+8cm	磨耗著しい
3	土師坏	(12.2)	4.3		A B D E	不良	橙	30	B・カマド	磨耗著しい
4	土師坏	(11.8)	4.0		B D E J	普通	にぶい橙	20	B区	
5	土師坏	(11.8)	3.5		B D E J L	不良	にぶい赤褐	40	+9cm	磨耗著しい 内外面黒色処理?
6	土師甕	(18.6)	25.3		B C E J L	不良	にぶい褐	40	A区	やや磨耗
7	石製紡錘車	長径4.00cm 短径2.60cm 厚さ2.10cm 孔径0.80cm						40	A区	滑石製 重さ20.67g

第262号住居跡出土土錘観察表（第15図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	7.50	2.00	0.50	24.90	B a III	C	にぶい黄橙	95	A区
9	6.00	2.00	0.50	23.16	C b IV	C	にぶい黄橙	100	A区
10	3.75	1.35	0.50	5.62	B a VI	A	赤褐	90	B区
11	(3.50)	1.75	0.35	8.55	B a III	B	褐灰	50	A区
12	(3.85)	1.40	0.50	6.48	B a IV	B	にぶい黄褐	60	B区
13	(3.35)			2.45	B a IV	C	にぶい黄橙	20	B区

第263号住居跡（第16・17図）

M・N-20・21グリッドに位置する。第262号住居跡を切り、第177号土坑との関係は不明である。西

コーナー付近は攪乱で壊される。用地の関係で2回に分けて調査された。長軸4.82m、短軸4.32mだが、北西壁が短く、平面形は台形に近い。深さは0.35～

0.42mである。主軸方位はN-40°-Wを指す。

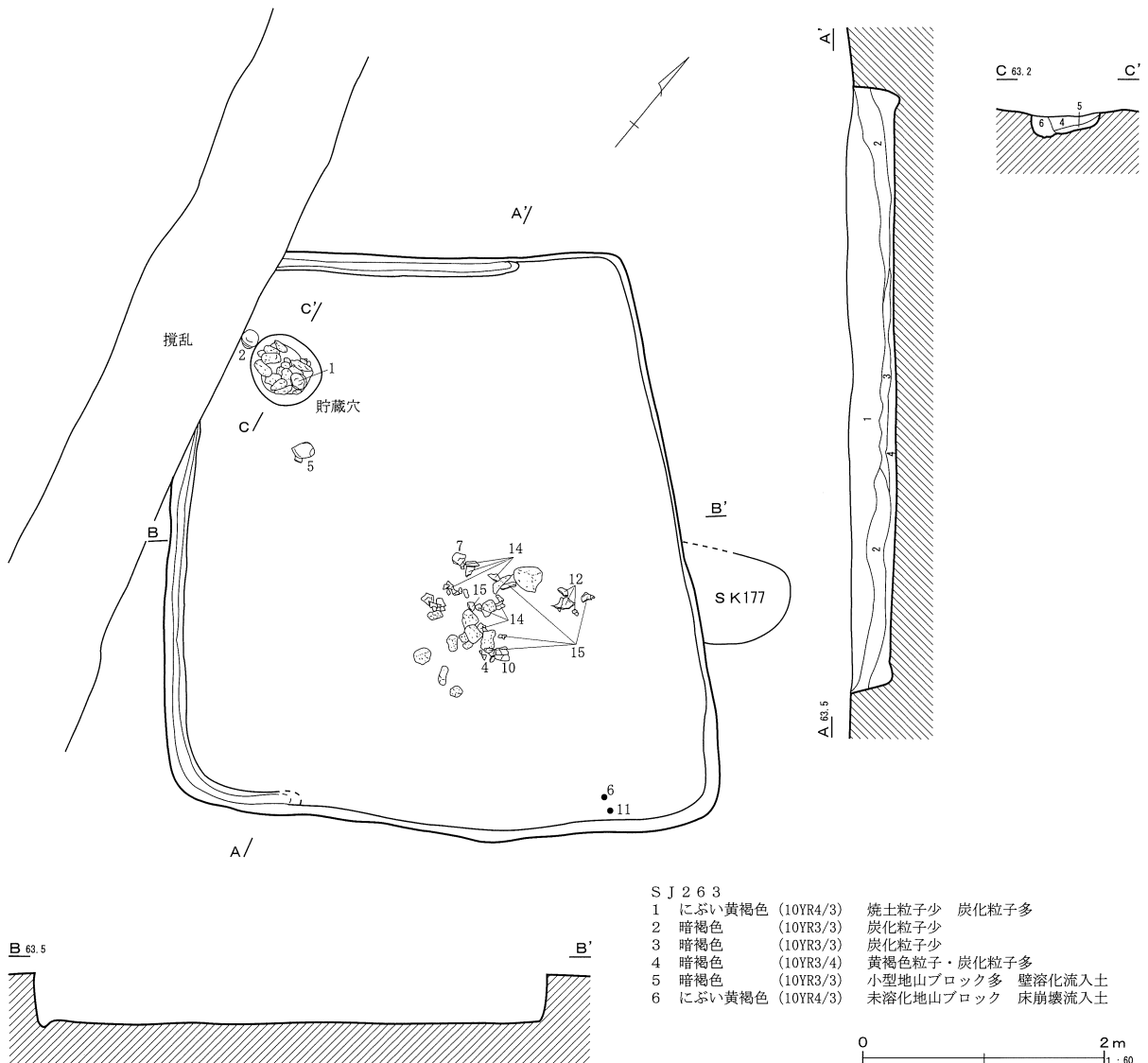
床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは検出されなかった。貯蔵穴は西コーナー近くに設けられ、62×53cmの楕円形で、深さは20cmである。土器と共に多くの川原石が出土した。壁溝は北西壁と南西壁で検出され、幅12~22cm、深さ2~4cmである。

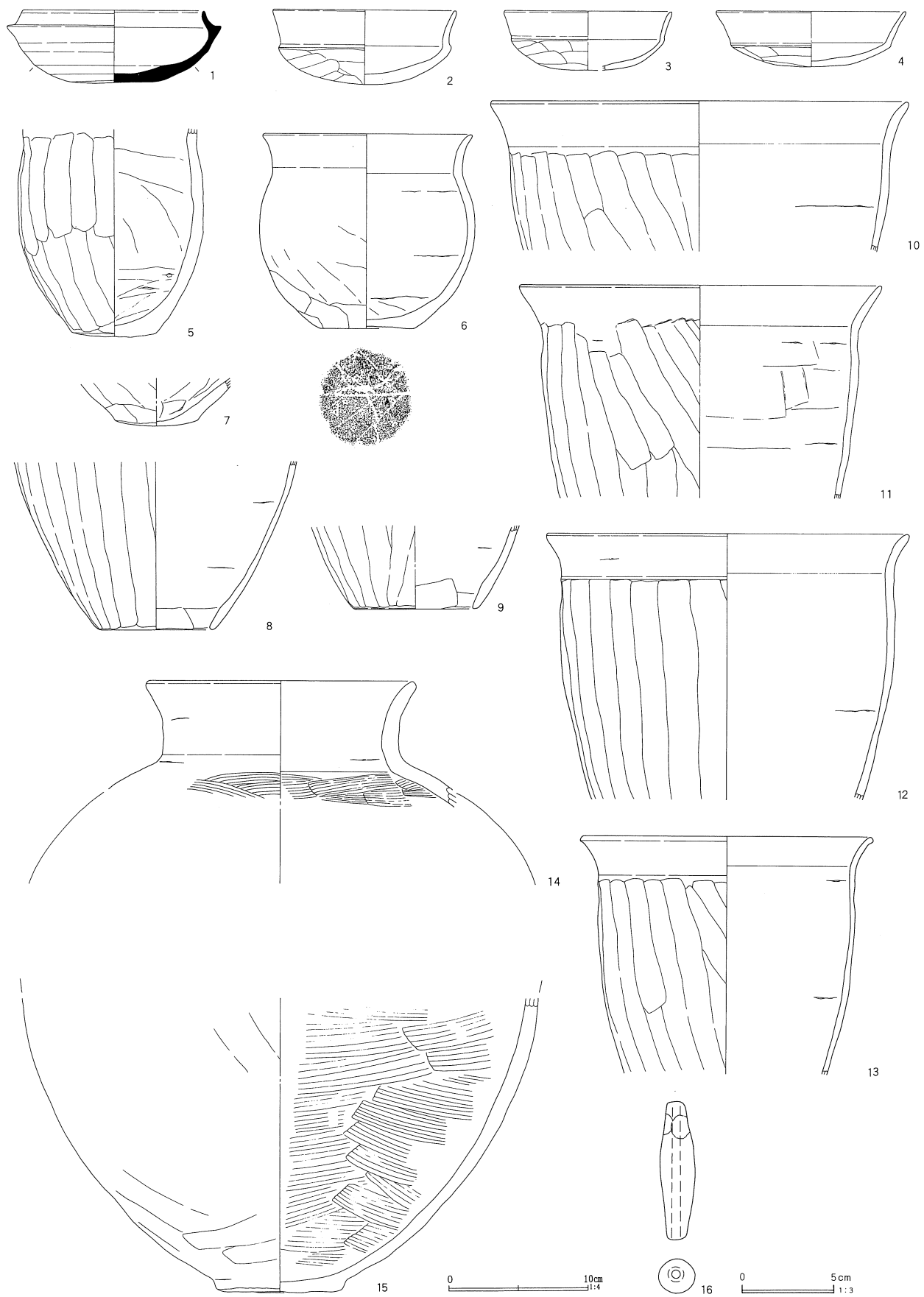
遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器片が多量に出土したが、摩滅が著しい。図示可能な遺物は、須恵器坏1、土師器坏3・甕3・甌6・壺2、土錘1

点であった。

1の須恵器坏は貯蔵穴から出土した。口径13cm。深身で、口縁部は内傾しながら立ち上がる。底部との境界の稜はシャープである。硬質で焼成は良好であった。末野産と考えられる。8・9・13は貯蔵穴、2・5は貯蔵穴周辺から、6・11は住居跡東側コーナー付近から、他は住居跡中央部分から出土した。14・15は、胎土調整の特徴から、同一個体と思われるが、接合しなかった。



第16図 第263号住居跡



第17图 第263号住居跡出土遺物

第263号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	13.0	5.2		J L	良好	灰	95	-8cm	末野産 底部回転ヘラケズリ
2	土師坏	13.0	5.3		B E J L	普通	橙	90	-7cm	磨耗著しい
3	土師坏	(12.0)	4.2		B E	不良	橙	20	覆土	磨耗著しい
4	土師坏	(13.6)	4.0		B E	不良	橙	30	+6cm	磨耗著しい
5	土師甕		15.0	6.0	B E H J L	普通	にぶい橙	60	-3cm	
6	土師甕	15.0	13.8	6.8	B C J L	不良	にぶい赤褐	70	+4cm	内外面磨耗著しい 底部木葉痕
7	土師甕		3.5	6.0	B E J L	不良	にぶい褐	40	+7cm	磨耗著しい
8	土師甕	12.0		(8.0)	B C J L	不良	橙	10	貯蔵穴	やや磨耗
9	土師甕	6.0		(9.0)	B C E J L	不良	橙	20	貯蔵穴	やや磨耗
10	土師甕	(30.0)	10.8		B C E J L	不良	にぶい橙	20	+7cm	内外面磨耗著しい
11	土師甕	(26.0)	15.3		B E J L	普通	にぶい黄橙	30	+2.5cm	外面赤彩か？
12	土師甕	(26.0)	19.0		B C E J L	不良	にぶい橙	20	床	外面赤彩か？
13	土師甕	(21.0)	17.0		B C E J L	不良	橙	30	貯蔵穴	磨耗著しい
14	土師壺	19.0	9.0		B C E J L	不良	にぶい橙	60	床	内外面磨耗著しい
15	土師壺		21.1	(9.0)	B C E J L	不良	にぶい橙	30	-2cm	やや磨耗

第263号住居跡出土土錘観察表（第17図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
16	7.40	2.00	0.50	20.71	B b III	A	明赤褐	100	

第264号住居跡（第18・19図）

N・O-21グリッドに位置する。第146・170号土坑に切られ、第273・277・548号住居跡を切る。西壁は攪乱で壊され検出できなかった。用地の関係で2回に分けて調査された。平面形は正方形に近く、南北4.98m、東西は5.0m前後と考えられる。深さは0.20～0.31mである。主軸方位はN-82°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

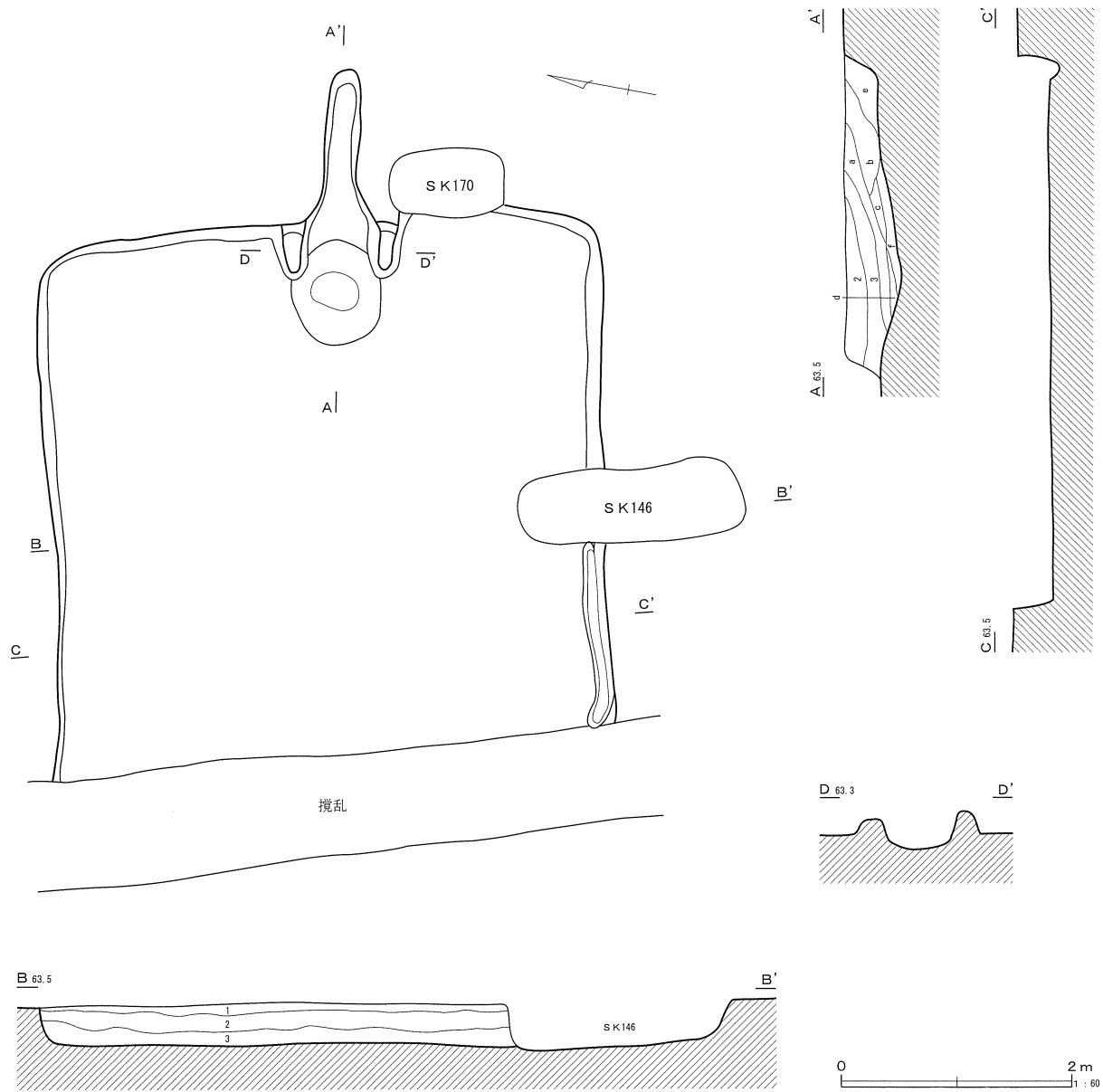
カマドは東壁中央に設置される。燃烧部は床面を20cm弱掘り込み、緩やかな斜面で煙道部へ続く。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南壁の一部で検出され、幅16～22cm、深さ3～6cmである。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が多量に出土したが、殆ど接合しなかった。図示可能な遺物は、土師器坏3・鉢1・高坏1・甕5、須恵器碗1・蓋1・長頸瓶1・甕1、鉄鏃1、土錘18点であった。

遺物には時期差があり、他住居跡からの混入と思

第264号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.6)	4.3		B E J L	不良	にぶい黄橙	30	B区	磨耗著しい
2	土師坏	(11.4)	3.6		A B E J L	普通	にぶい赤褐	45	A区	内外面黒色処理 やや磨耗
3	土師坏	(13.0)	4.5		B D E J L	不良	明赤褐	30	B区	磨耗著しい
4	土師鉢	(14.0)	6.9		A B E J L	不良	明赤褐	30	覆土	磨耗著しい
5	須恵碗	(16.0)	4.5		B F J L	不良	灰	20	B区	末野産
6	須恵蓋	(18.0)	2.0		B J	普通	灰	10	B区	末野産
7	須恵長頸瓶		7.4		B J L	不良	灰	80	覆土	末野産
8	土師高坏		5.2	(14.0)	B C E J L	不良	橙	60	B区	磨耗著しい
9	土師甕	(19.0)	9.6		A B E J L	不良	橙	80	覆土	磨耗著しい やや歪みあり
10	土師甕	(22.0)	5.6		A B E J L	不良	橙	20	A区	
11	土師甕	(16.0)	6.5		B D J L	普通	褐	60	B区	
12	土師甕		5.1	8.6	A B E J L	不良	暗褐	80	覆土	
13	土師甕		2.6	(8.0)	A B J	不良	橙	60	カマド	磨耗著しい
14	須恵甕				B J L	良好	灰		覆土	末野産 外面にツメ痕状の文様あり
15	鉄鏃	現存長5.05cm 幅0.50cm 厚さ0.30cm 重さ5.26g							B区	筈部から茎部にかけての部材 棘筈被を有する



- | | | | | | | | | | | |
|---------|-----|-----------|------------|-----|--------|-----------|-------------------|--|--|--|
| S J 264 | | | | | | | | | | |
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 焼土粒子・炭化粒子多 | カマド | 暗褐色 | (10YR3/3) | 焼土粒子多 炭化粒子少 | | | |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 焼土粒子・炭化粒子少 | a | 黒褐色 | (10YR3/2) | 黄褐色粒子多 焼土粒子・炭化粒子少 | | | |
| 3 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 焼土粒子・炭化粒子少 | b | 黒褐色 | (10YR4/3) | 焼土粒子多 炭化粒子僅か | | | |
| | | | | c | 暗褐色 | (10YR3/2) | 焼土粒子・黄褐色粒子多 | | | |
| | | | | d | にぶい黄褐色 | (10YR3/3) | 黄褐色粒子多 焼土粒子少 | | | |
| | | | | e | 黒褐色 | (10YR3/2) | 焼土粒子・炭化粒子・灰粒子少 | | | |
| | | | | f | | | | | | |

第18図 第264号住居跡

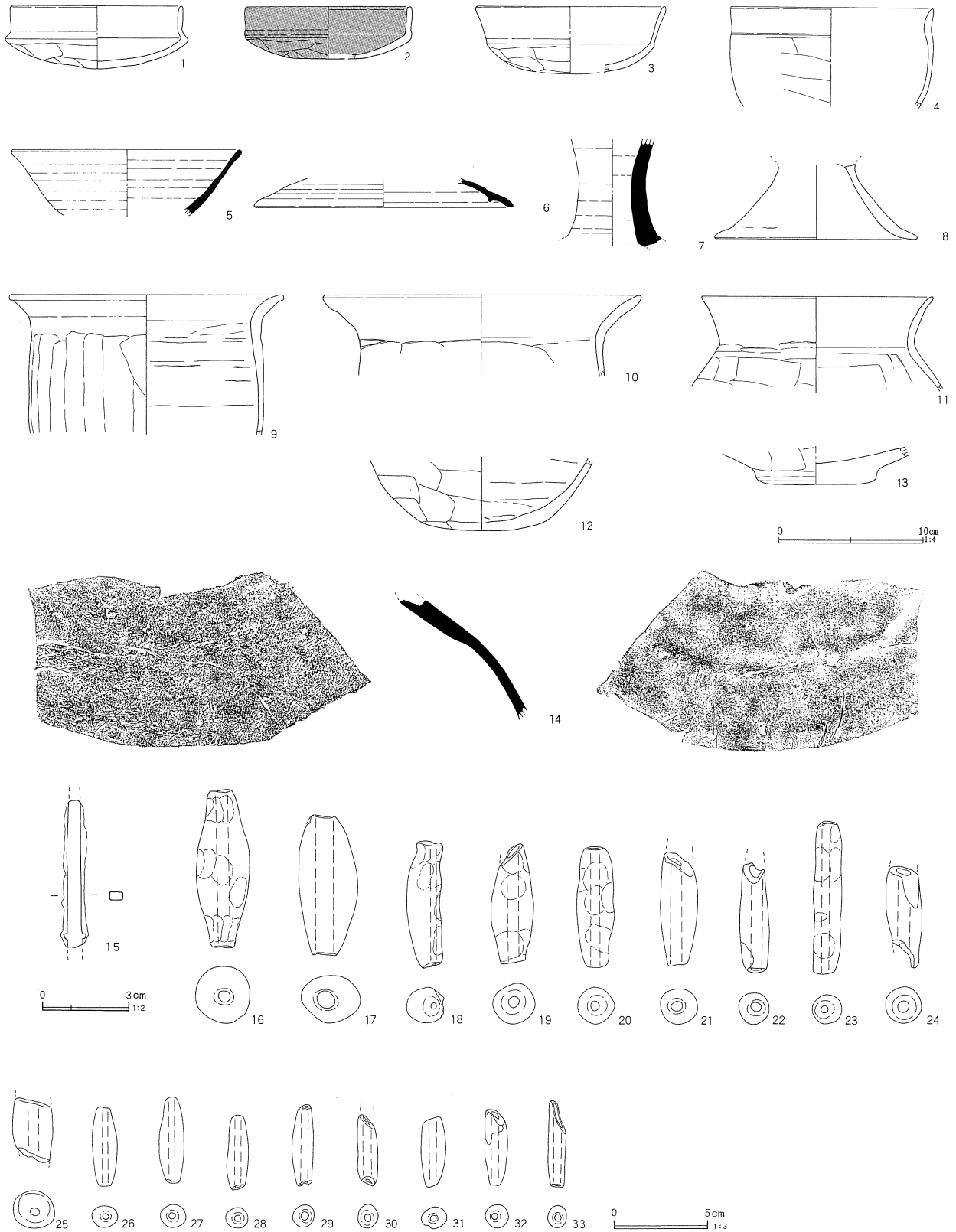
第264号住居跡出土土錘観察表 (第19図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
16	8.10	2.90	0.60	54.18	C b II	C	にぶい橙	100	
17	7.20	3.00	1.00	50.59	B a III	A	赤褐	100	B区
18	6.50	2.00	0.30	18.22	B b III	A	にぶい黄橙	95	A区
19	6.10	2.20	0.60	20.64	B a IV	A	にぶい黄橙	95	A区
20	6.20	1.95	0.50	22.60	B b IV	C	にぶい黄褐	100	A区
21	(5.80)	1.90	0.60	21.75	B a III	C	橙	90	B区
22	(5.60)	1.60	0.55	17.53	B a III	A	にぶい黄橙	90	A区

われる。

篋被を有する。

15の鉄鏃は、篋部から茎部にかけての部材で、棘



第19図 第264号住居跡出土遺物

第264号住居跡出土土錘観察表（第19図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
23	7.80	1.50	0.40	12.84	A a II	C	灰黄褐	100	A区
24	(5.20)	1.85	0.60	12.66	B a IV	C	灰黄褐	—	B区
25	(3.30)	2.10	0.50	12.47	—	A	灰黄褐	—	A区
26	4.00	1.30	0.30	5.17	B a VI	A	明褐	100	A区
27	4.40	1.30	0.30	5.97	B a VI	A	にぶい黄橙	100	A区
28	3.70	1.15	0.30	3.97	B a VI	A	にぶい褐	100	A区
29	4.10	1.20	0.40	4.49	B a VI	A	にぶい黄褐	100	B区
30	(3.60)	1.20	0.35	3.88	B a VI	A	にぶい褐	90	A区
31	(3.60)	1.30	0.30	4.20	B a VI	A	橙	100	カマド
32	(3.90)	1.20	0.30	4.59	B a VI	A	灰黄褐	90	A区
33	(4.40)	1.10	0.30	3.86	B a V	C	にぶい赤褐	80	A区

第265号住居跡（第20・21図）

M・N-22グリッドに位置する。第266号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。第266号住居跡と同時に調査したため壁の大半は検出できず、土層断面から復元した。東側一部とカマド煙道部先端は調査区域外にある。平面形は南北に長い長方形と思われる、長軸2.8m、短軸2.2m程度と考えられる。深さは0.35～0.38mである。主軸方位はN-90°-Eを指す。

床面は小さな起伏が見られ、壁は開き気味に立ちあがるようである。

カマドは東壁の北東コーナー近くに設置される。燃焼部の掘り込みは僅かで急激に立ち上がる。北東コーナーは東に飛び出す形で、先端に径25cm、深さ30cmのピットが検出された。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは13cm、19cmである。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が多く出土した。特に土師器は小片が多く、摩滅が著しく接合率が悪い。須恵器はかえり蓋の破片が目立ったが、図示可能な遺物はなかった。図示可能なものは、土師器坏1・甕5、須恵器長頸瓶1、土錘27点であった。

1～5は覆土、6・7はカマドから出土した。

7は湖西産と思われる須恵器長頸瓶、胴部～底部の破片である、高台はやや幅広で、内側に踏ん張る形態となる、低部は丸くなるが、高台よりは突出し

ない。全面回転ヘラ削りを施した後、高台部を貼り付ける。内面底部に自然釉が付着していた。

第266号住居跡（第20・22図）

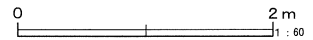
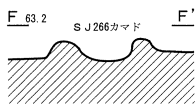
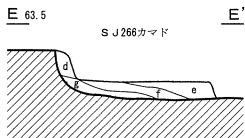
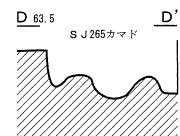
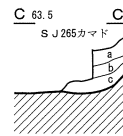
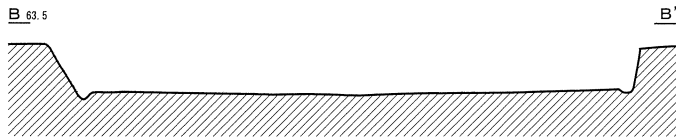
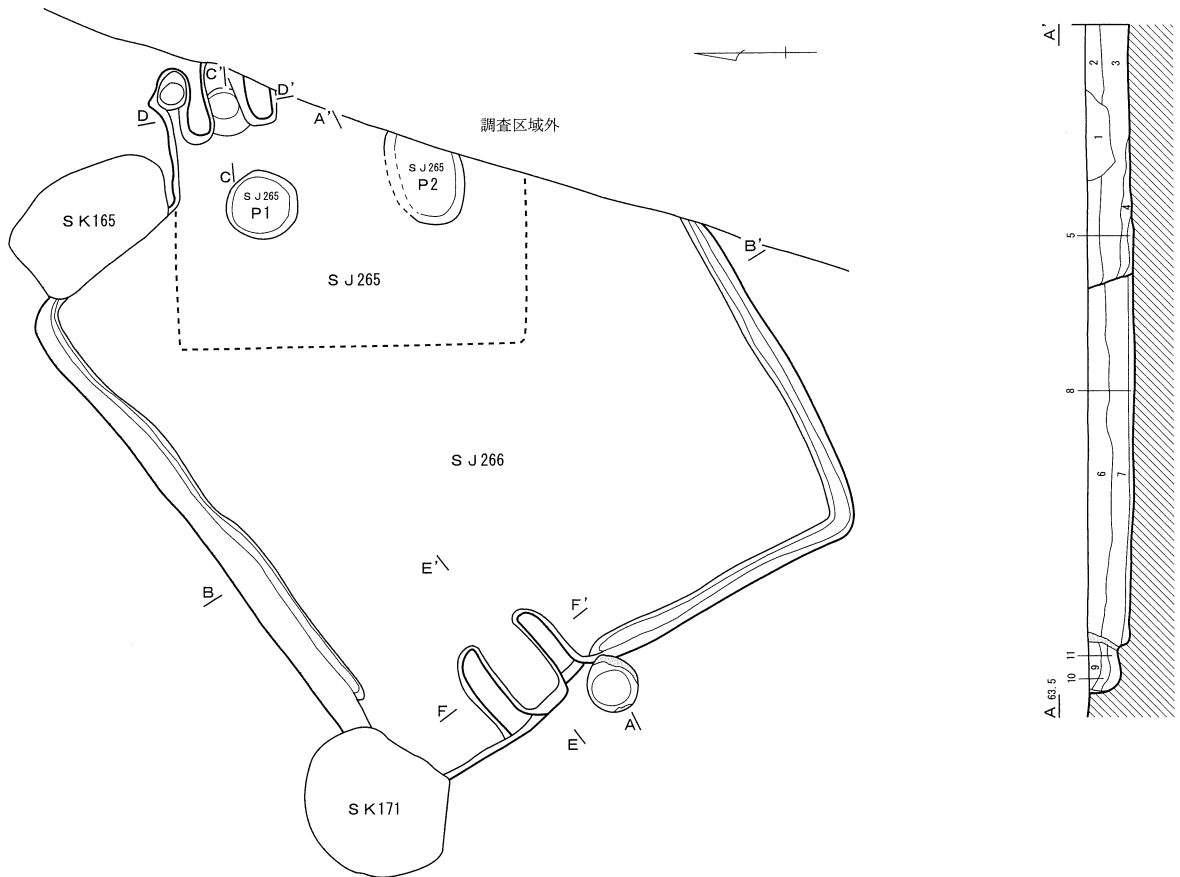
M・N-22グリッドに位置する。第265号住居跡・第165・171号土坑に切られ、第274号住居跡を切る。北東壁は大半を住居跡・土坑に壊されており、東コーナー周辺は調査区域外にある。平面形は南西から北東方向に長い長方形で、長軸5.02m、短軸4.68m、深さは0.30～0.35mである。主軸方位はN-126°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは南西壁の北寄りに設置される。燃焼部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。カマド南側の壁外に径30cmのピットが検出され、内壁が焼土化していたのでカマドに付随するものと考えたが、土層観察で住居跡より新しいものと判断した。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西コーナー以外で検出され、幅16～34cm、深さ3～7cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器片が多く出土したが、摩滅が著しく、殆ど接合しなかった。図示可能な遺物は、土師器坏4・高坏1・甗1、土錘18点であった。

1は、カマドから出土したが、第265号住居跡覆土中の遺物と接合した。



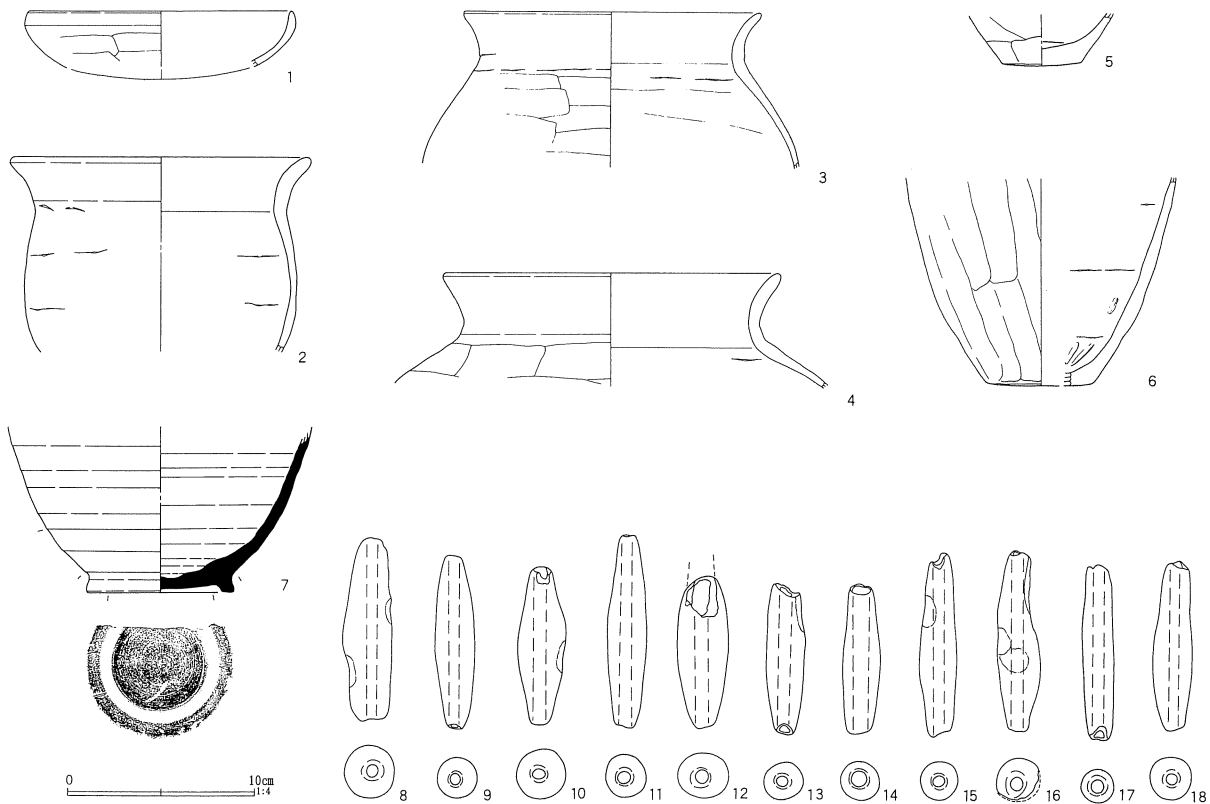
- S J 2 6 5
- | | | |
|---|------------------|---------------------|
| 1 | 黒褐色 (10YR3/2) | 焼土ブロック・炭化粒子多 |
| 2 | 暗褐色 (10YR3/4) | 焼土粒子・炭化粒子少 |
| 3 | 褐色 (10YR4/4) | 黄褐色ブロック多 焼土粒子・炭化粒子少 |
| 4 | 暗褐色 (10YR3/3) | 黄褐色ブロック・焼土粒子・炭化粒子少 |
| 5 | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 焼土粒子・炭化粒子少 |

- S J 2 6 5 カマド
- | | | |
|---|---------------|------------|
| a | 褐色 (10YR4/4) | 焼土粒子・炭化粒子少 |
| b | 暗褐色 (10YR3/3) | 炭化粒子少 |
| c | 暗褐色 (10YR3/4) | 焼土ブロック多 |

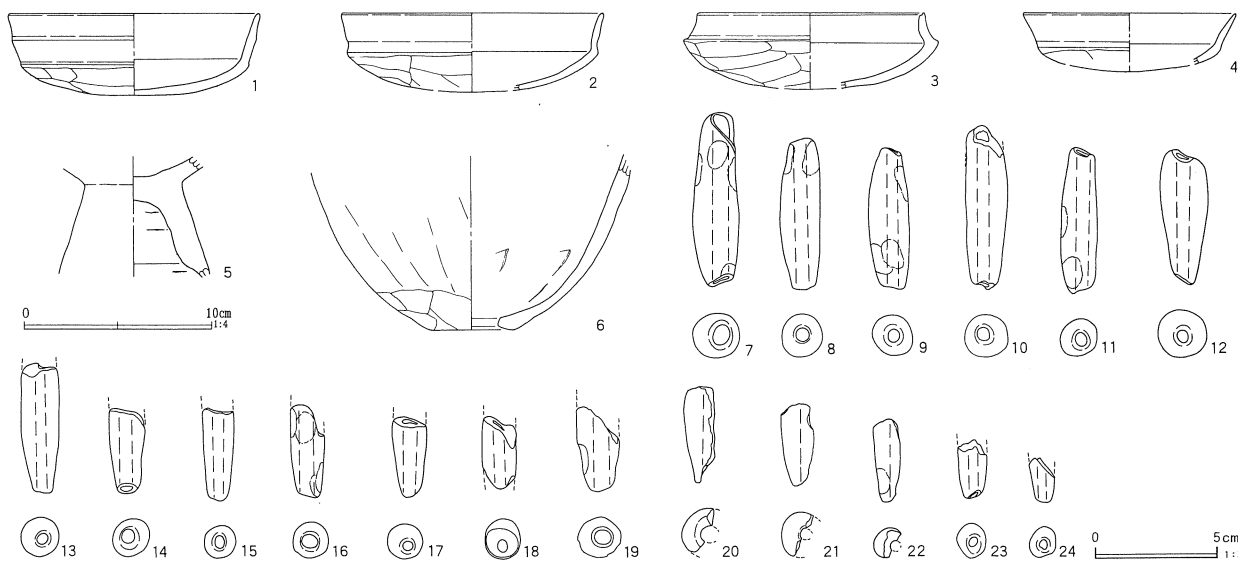
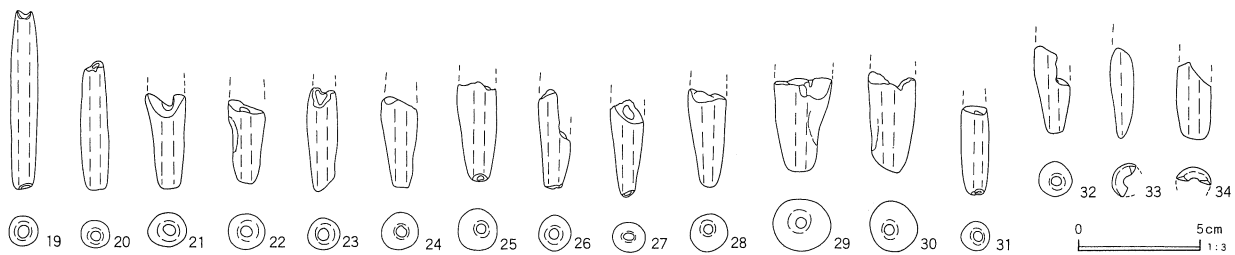
- S J 2 6 6
- | | | |
|----|------------------|------------------|
| 6 | 暗褐色 (10YR3/3) | 焼土粒子・炭化粒子少 |
| 7 | 褐色 (10YR4/4) | 黄褐色シルトブロック・炭化粒子少 |
| 8 | 黄褐色 (10YR5/6) | 黄褐色シルトブロック多 |
| 9 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 焼土粒子・炭化粒子少 |
| 10 | 黒褐色 (10YR3/1) | 炭化粒子多 |
| 11 | 暗褐色 (10YR3/3) | 炭化粒子少 |

- S J 2 6 6 カマド
- | | | |
|---|---------------|------------------|
| d | 暗褐色 (10YR3/4) | 焼土粒子・炭化粒子少 |
| e | 褐色 (10YR4/4) | 黄褐色シルトブロック・炭化粒子少 |
| f | 暗褐色 (10YR3/3) | 焼土粒子・炭化粒子少 |
| g | 褐色 (10YR4/4) | 焼土ブロック多 炭化粒子少 |

第20図 第265・266号住居跡



第21图 第265号住居跡出土遺物



第22图 第266号住居跡出土遺物

第265号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(14.0)	3.0		B J	普通	にぶい橙	20	A区	磨耗著しい
2	土師甕	(16.0)	10.4		B D E J L	不良	赤褐	30	A区	磨耗著しい
3	土師甕	(17.8)	8.3		B E J L	不良	にぶい黄橙	80	B区	磨耗著しい
4	土師甕	(18.0)	6.1		B E J L	普通	にぶい黄橙	40	A・B区	磨耗著しい
5	土師甕		2.8	4.2	B J L	不良	にぶい赤褐	80	A区	磨耗著しい
6	土師甕		10.1	(11.6)	C J L	不良	にぶい褐	30	カマド	磨耗著しい
7	須恵長頸瓶		8.8	7.8	B J	良好	灰白	60	カマド	湖西産 内面自然釉付着

第265号住居跡出土土錘観察表（第21図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	7.30	2.05	0.50	27.00	B a III	C	にぶい黄橙	100	カマド
9	6.90	1.60	0.45	14.33	B a III	A	にぶい黄橙	100	A区
10	6.30	2.00	0.50	18.01	C a IV	C	にぶい黄橙	100	
11	7.70	1.70	0.50	16.09	B a II	A	にぶい黄橙	100	A区
12	(6.10)	2.10	0.55	18.05	B a III	A	にぶい黄橙	90	A区
13	(6.00)	1.60	0.45	13.04	B a IV	A	にぶい黄褐	95	A区
14	6.00	1.50	0.60	9.48	B a IV	A	灰黄褐	100	A区
15	7.30	1.50	0.50	13.96	B a III	A	にぶい黄橙	100	A区
16	7.20	1.70	0.50	14.90	B a III	A	にぶい赤褐	60	B区
17	6.70	1.70	0.40	13.44	B a III	A	にぶい黄橙	100	A区
18	7.00	1.30	0.50	9.04	A a III	A	にぶい褐	100	A区
19	7.10	1.20	0.50	7.55	A a III	A	橙	100	A区
20	(5.10)	1.10	0.40	5.36	A a V	B	褐灰	95	A区
21	(3.70)	1.60	0.45	5.57	B a III	A	浅黄橙	50	B区
22	(3.30)	1.50	0.50	4.62	B a III	A	にぶい黄橙	40	A区
23	(4.20)	1.30	0.50	5.23	—	A	にぶい黄橙	50	B区
24	(3.60)	1.50	0.45	5.35	B a III	A	にぶい黄橙	50	A区
25	(4.00)	1.65	0.40	8.86	B a IV	A	にぶい黄橙	50	A区
26	(3.90)	1.45	0.40	4.67	B a III	A	にぶい黄橙	40	A区
27	(3.80)	1.30	0.40	3.67	B a III	A	浅黄橙	50	B区
28	(3.90)	1.60	0.40	5.78	B a II	A	にぶい黄橙	50	A区
29	(3.70)	2.30	0.45	13.47	C b II	B	褐	50	カマド
30	(4.00)	2.00	0.40	11.52	B a II	B	黒褐	50	A区
31	(3.50)	1.20	0.40	4.07	B a IV	A	にぶい黄橙	50	A区
32	(3.50)	1.40	0.40	3.71	B a III	A	にぶい黄橙	40	A区
33	(3.60)	(1.20)	(0.40)	2.66	—	A	にぶい黄橙	—	A区
34	(3.10)	(1.40)	(0.40)	2.68	—	A	にぶい黄橙	—	A区

第266号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(13.4)	4.3		J	普通	褐灰	30	カマド	
2	土師坏	(14.0)	4.1		E J L	不良	橙	25	A区	磨耗著しい
3	土師坏	(12.0)	4.0		E J L	普通	にぶい褐	30	B区	
4	土師坏	(11.4)	2.7		E J L	不良	橙	15	A区	磨耗著しい
5	土師高坏		6.3		B D E J L	不良	にぶい褐	60	A区	磨耗著しい
6	土師甕		9.2	4.4	E J L	不良	橙	40	A・B区	磨耗著しい

第266号住居跡出土土錘観察表（第22図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
7	6.90	1.85	0.85	21.81	B a III	A	橙	100	A区
8	5.95	1.70	0.55	15.17	B a IV	C	にぶい黄橙	100	A区
9	5.60	1.70	0.50	13.47	B a IV	B	浅黄橙	100	B区

第266号住居跡出土土錘観察表（第22図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
10	6.50	1.70	0.55	17.15	B a III	A	にぶい黄橙	95	B区
11	5.80	1.60	0.55	10.88	B a IV	A	浅黄橙	100	A区
12	5.30	1.90	0.50	17.37	B a V	A	橙	100	A区
13	(5.10)	1.50	0.50	11.83	B a IV	A	にぶい黄橙	85	B区
14	(3.35)	1.60	0.55	6.27	B a IV	A	浅黄橙	50	B区
15	3.70	1.30	0.50	4.36	B a IV	A	浅黄橙	60	B区
16	(3.65)	(1.45)	0.65	6.08	B a IV	C	にぶい黄橙	45	A区
17	(3.20)	1.90	0.40	4.72	B a IV	C	にぶい黄橙	45	B区
18	(2.90)	1.60	0.50	5.34	—	A	にぶい黄橙	30	B区
19	(3.35)	—	0.60	6.17	B a IV	C	黒	35	B区
20	(3.80)	—	—	5.69	—	A	橙	—	B区
21	(3.25)	1.80	(0.45)	5.10	—	A	にぶい褐	—	B区
22	(3.25)	(1.25)	0.40	3.14	—	C	にぶい黄橙	—	B区
23	(2.30)	1.35	0.40	2.95	—	C	にぶい黄橙	—	A区
24	(1.80)	1.25	0.35	1.43	—	C	にぶい黄橙	—	A区

第267号住居跡（第23・24図）

M-21・22グリッドに位置する。南西コーナー付近を第268号住居跡に、北西コーナーを第161号土坑に壊される。平面形は正方形で、東西3.95m、南北3.91m、深さは0.25～0.30mである。主軸方位はN-64°-Eを指す。

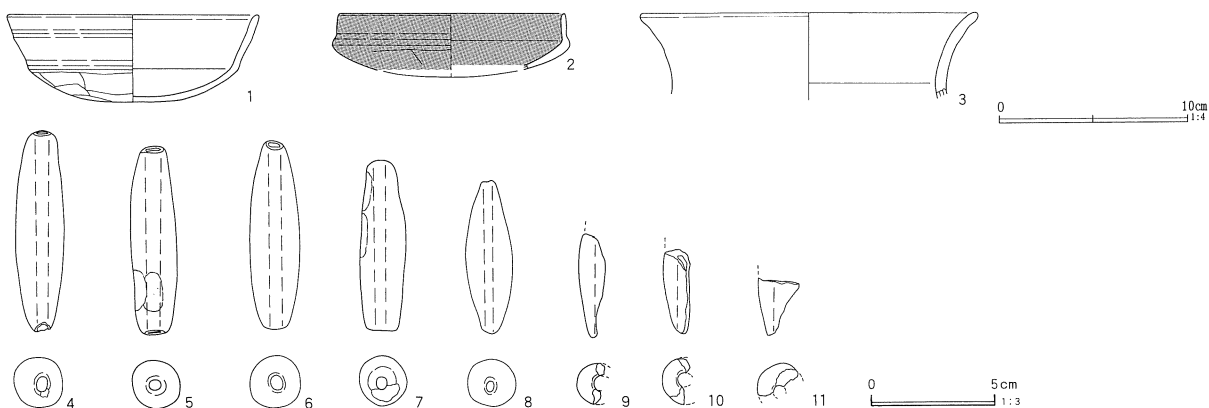
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。覆土は2層で短期間で埋没したと考えられる。

カマドは東壁中央に設置される。燃烧部の深さは5cm程度だが、手前に広く掘り込まれ、段を持って

立ち上がって煙道部へ続く。川原石利用の支脚が出土した。貯蔵穴はカマド右に設けられ、76×50cmの楕円形で、深さは41cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは30cm、26cmである。

遺物は、覆土中から古墳時代の土師器の破片が出土したが、磨耗が著しく接合率は極めて悪かった。図示可能な遺物は、土師器坏2・甕1、土錘8点であった。

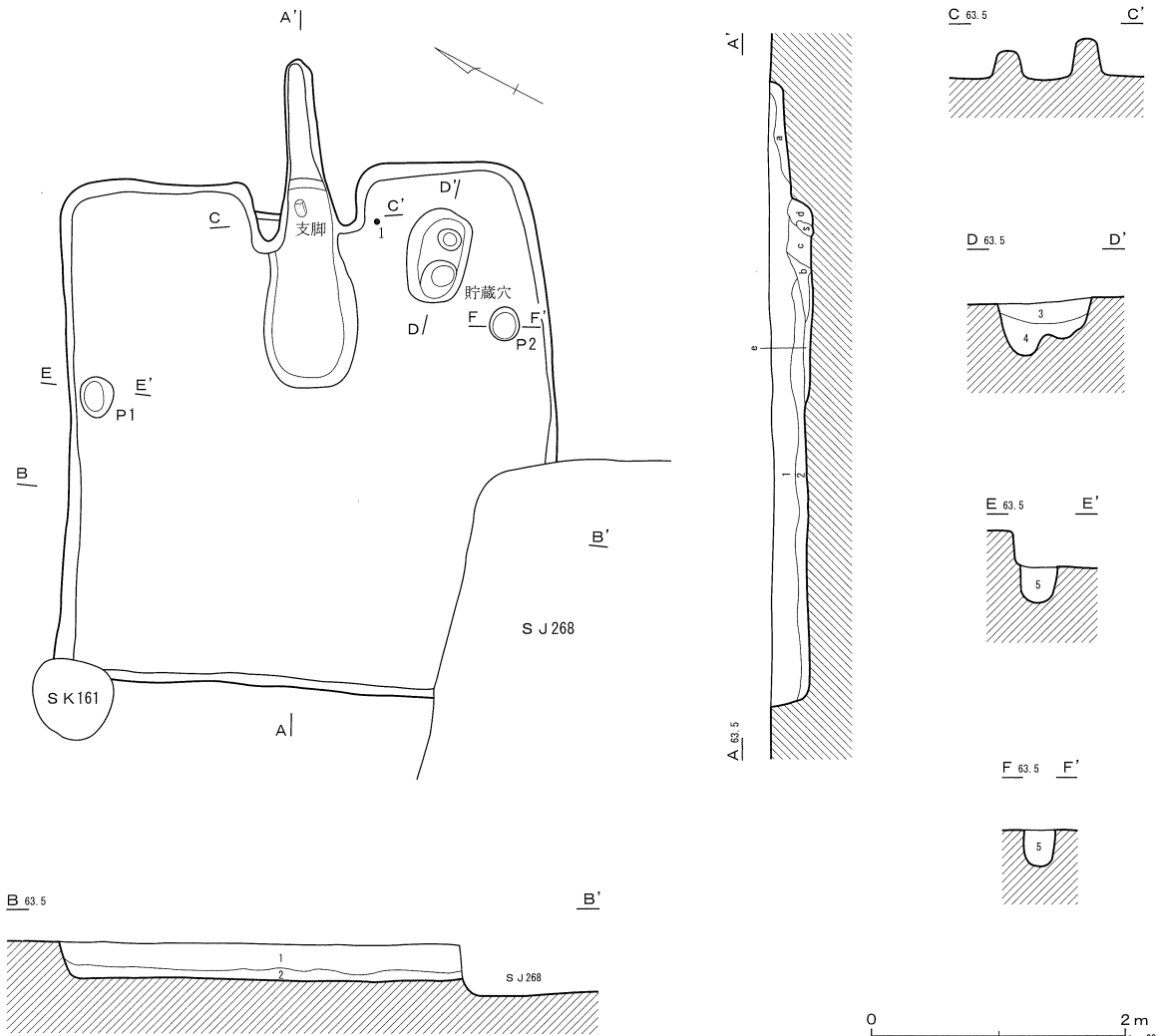
1の坏は、カマド右袖脇の出土で、床面からやや浮いて出土した。



第23図 第267号住居跡出土遺物

第267号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(13.4)	4.6		B D E J L	不良	橙	60	+7cm	磨耗著しい
2	土師坏	(12.0)	3.0		D E J	普通	灰褐	15	B区	内外面黒色処理 やや磨耗
3	土師甕	(18.0)	4.6		B E J L	不良	橙	10	A区	磨耗



- S J 2 6 7
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 白色粒子多 焼土粒子・炭化粒子少
 - 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子・炭化粒子少
 - 3 褐色 (10YR4/4) 焼土粒子・炭化粒子少
 - 4 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色シルトブロック・炭化粒子少
 - 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色粒子・炭化粒子少

- カマド
- a 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子僅か
 - b 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子・炭化粒子多
 - c 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐ブロック多 焼土粒子少
 - d 黒褐色 (10YR3/2) c層に似る 焼土ブロック
 - e にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少

第24図 第267号住居跡

第267号住居跡出土土錘観察表 (第23図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	7.90	2.05	0.60	27.24	B a II	A	橙	95	B区
5	7.35	2.00	0.50	26.33	B a III	A	褐灰	100	B区
6	7.40	2.05	0.60	27.95	B a III	A	明赤褐	100	B区
7	6.70	1.95	0.50	23.01	B a III	A	赤褐	95	B区
8	6.00	1.90	0.40	16.87	C a IV	A	にぶい黄橙	100	B区
9	(4.10)	(1.60)	—	4.68	—	A	にぶい黄橙	35	B区
10	(3.30)	—	—	5.47	—	A	橙	—	B区
11	(2.30)	—	—	2.79	—	A	橙	—	D or B ?

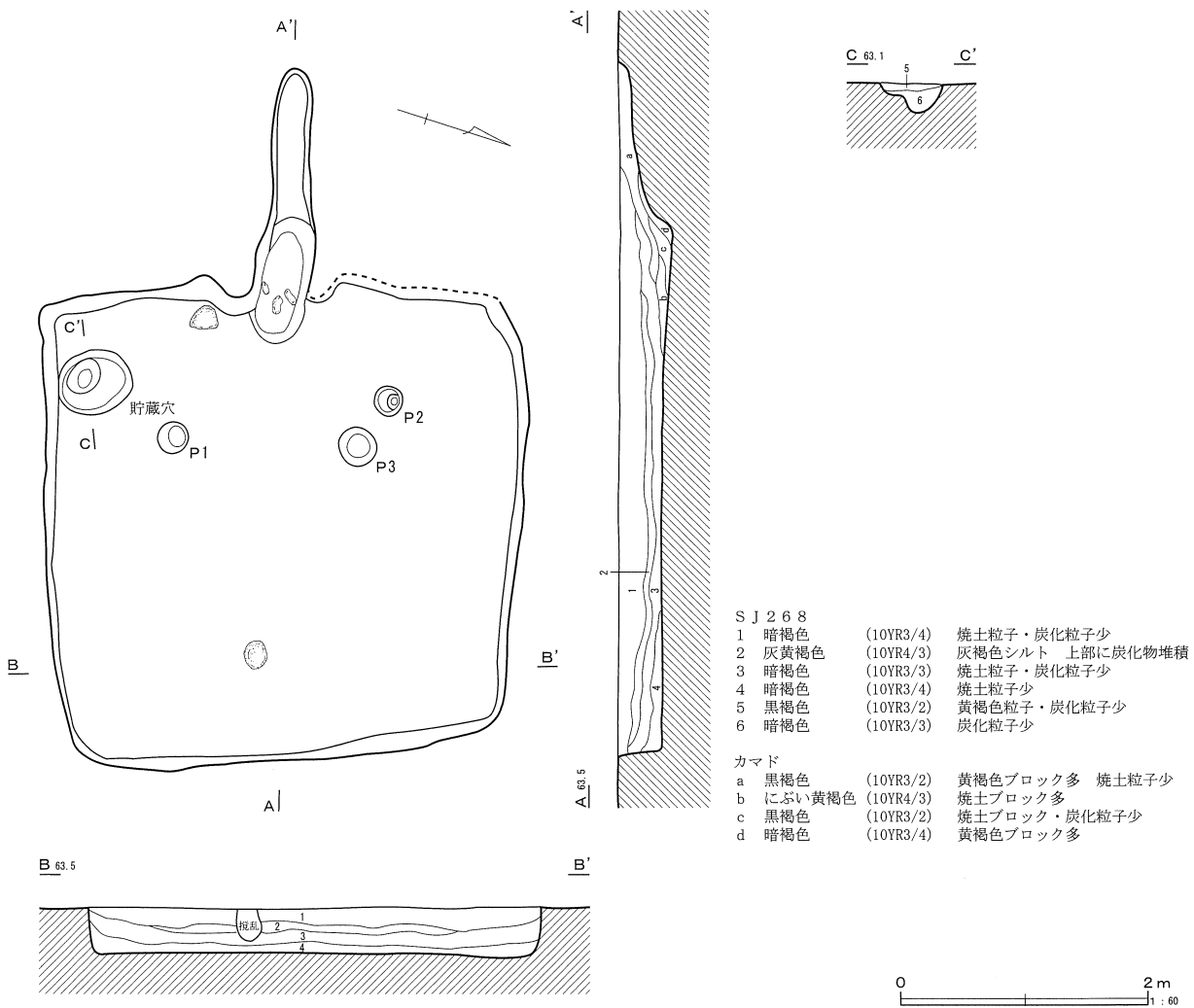
第268号住居跡（第25・26図）

M・N-21グリッドに位置する。第267号住居跡を切る。平面形は正方形で、南北3.93m、東西3.91m、深さは0.28~0.39mである。主軸方位はN-110°-Wを指す。

床面は中央付近が僅かに高くなり、壁は垂直に立ちあがる。カマドは西壁中央に設置される。燃烧部の掘り込みは極僅かで急激に立ち上がり煙道部へ続

く。貯蔵穴は南西コーナー近くに設けられ、76×50cmの楕円形で、深さは23cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは3本検出され、P1~P3の深さは20cm、16cm、10cmである。

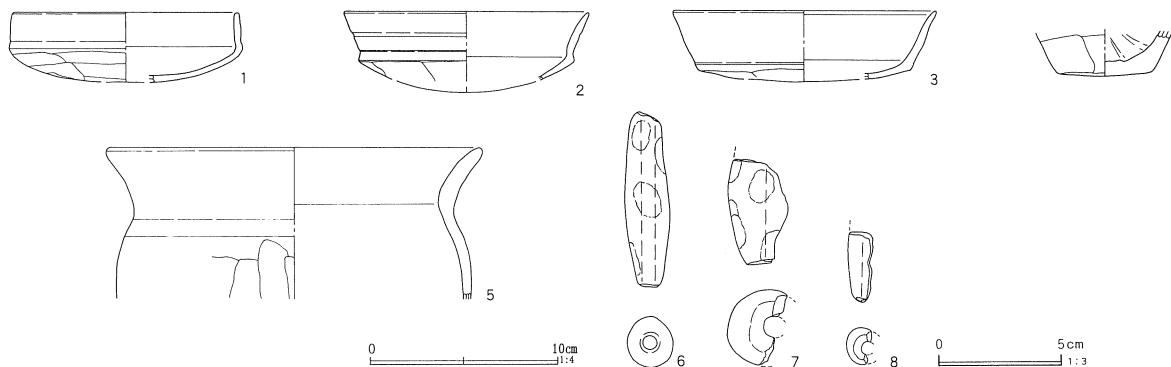
遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器片が多量に出土したが、摩滅が著しく、接合率は極めて悪かった。図示可能な遺物は、土師器坏3・甕2、土錘3点であった。



第25図 第268号住居跡

第268号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.7		ABCDEJL	不良	橙	20	A区	磨耗著しい
2	土師坏	(13.0)	3.6		BDEJ	普通	橙	10	B区	
3	土師坏	(14.0)	3.6		ACDEJL	不良	にぶい橙	20	C区	磨耗著しい
4	土師甕		2.4	5.0	BJ	不良	褐	45	A区	
5	土師甕	(19.8)	8.0		BCJL	不良	橙	20	A区	磨耗著しい



第26図 第268号住居跡出土遺物

第268号住居跡出土土錘観察表 (第26図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	6.95	2.00	0.55	20.94	B a III	A	にぶい黄橙	100	A区
7	(4.15)	(3.10)	0.80	23.17	—	C	明褐	40	A区
8	(2.75)	1.45	(0.50)	3.82	—	A	にぶい黄橙	25	A区

第269号住居跡 (第27・28図)

N-21グリッドに位置する。第154・158号土坑に切られ、第277・278・548号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。平面形は正方形で、東西4.02m、南北3.98m、深さは0.29~0.36mである。主軸方位はN-70°-Eを指す。

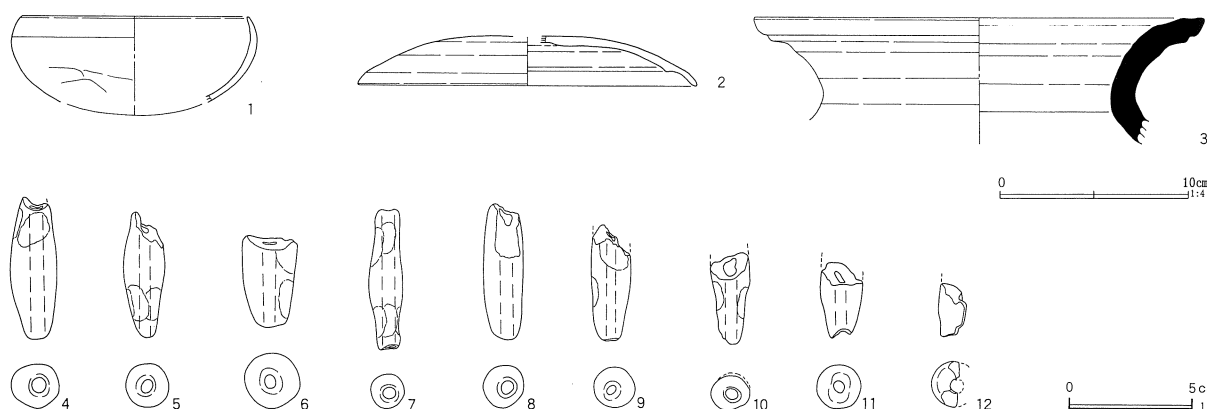
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部の掘り込みはなく、緩やかに立ち上がり煙道部と

なる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西壁から北壁中央および南壁中央まで検出され、幅10~26cm、深さ1~10cmである。

遺物は覆土中から土師器甕・須恵器甕類の破片が出土したが、図示可能な遺物は、土師器坏1、須恵器蓋1・甕1、土錘9点であった。

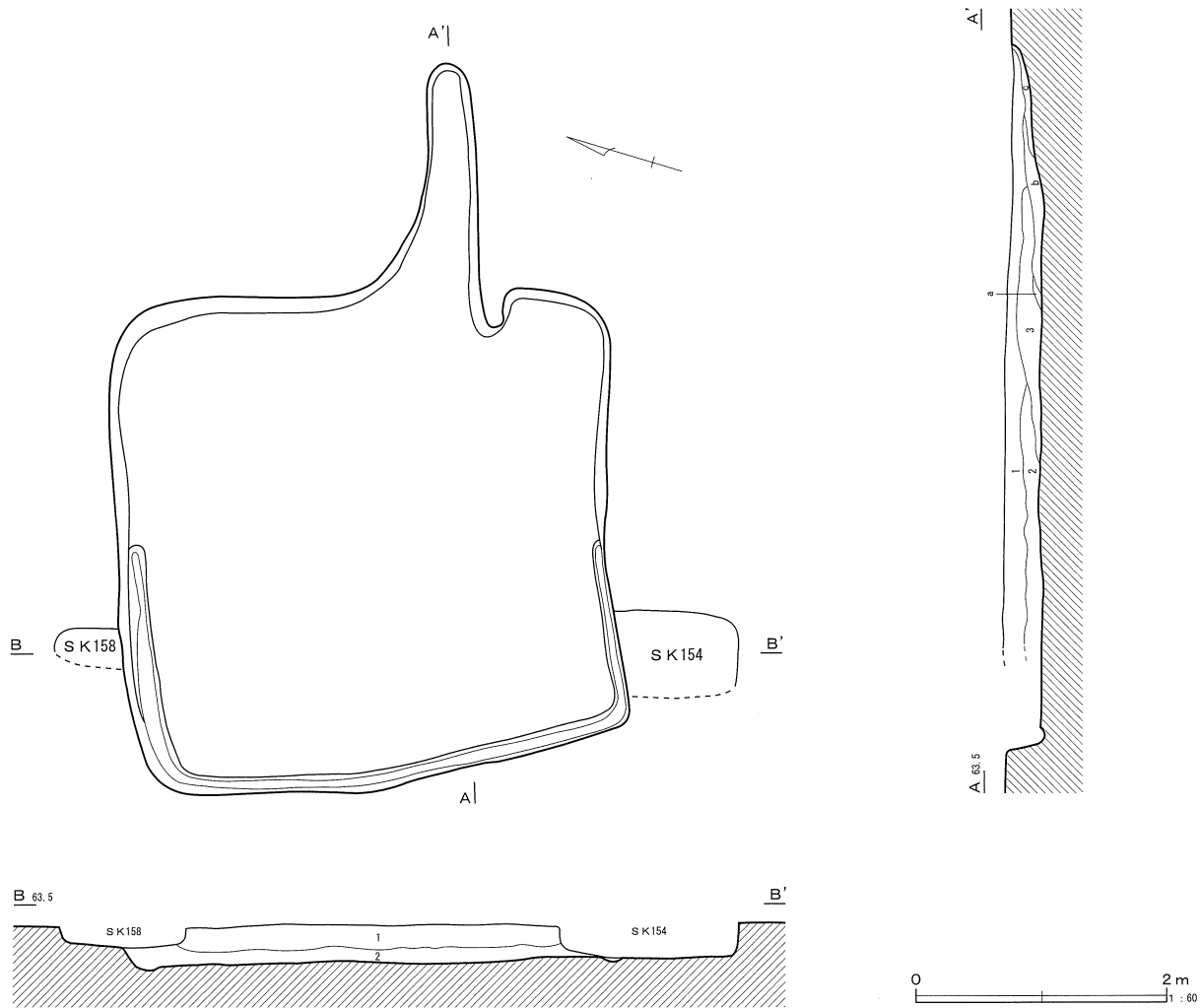
2・3は末野産の須恵器である。2はかえりのある蓋片である。極めて薄いが、焼成不良で、赤焼けとなっている。



第27図 第269号住居跡出土遺物

第269号住居跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師器坏	(12.0)	4.5		A B E J L	不良	明赤褐	20	A区	磨耗著しい



- | | | | | | | |
|-----------|-----------|------------------|----------|-----------|-----------------|--|
| S J 2 6 9 | | | | カマド | | |
| 1 暗褐色 | (10YR3/3) | 焼土ブロック・炭化粒子少 | a 褐色 | (10YR4/6) | 黄褐色粘土ブロック・焼土粒子少 | |
| 2 黒褐色 | (10YR2/3) | 黄褐色シルトブロック・炭化粒子少 | b 暗褐色 | (10YR3/3) | 焼土ブロック・炭化粒子少 | |
| 3 暗褐色 | (10YR3/4) | 焼土ブロック・炭化粒子少 | c にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 黄褐色シルトブロック多 | |

第28図 第269号住居跡

第269号住居跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
2	須恵蓋	(18.0)	2.6		B C E H J L	不良	にぶい黄橙	20	A区	末野産
3	須恵甕	(24.0)	6.7		B J L	良好	灰	15	A区	末野産

第269号住居跡出土土錘観察表 (第27図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	5.65	1.90	0.60	14.28	C a IV	C	にぶい黄橙	95	A区
5	5.00	1.70	0.50	9.97	C a V	C	にぶい黄橙	90	B区
6	(3.65)	2.25	0.55	14.97	B a III	C	橙	50	B区
7	5.55	1.35	0.50	7.85	B a IV	C	にぶい黄橙	100	A区
8	5.40	1.75	0.55	13.03	B a V	A	にぶい赤褐	95	A区
9	(4.60)	1.70	0.40	10.43	B b IV	B	黒褐	75	A区
10	(3.60)	1.60	0.50	5.00	—	C	にぶい黄橙	35	A区
11	(3.00)	1.75	0.45	6.75	—	C	にぶい黄橙	—	B区
12	(2.10)	(1.80)	(0.50)	3.47	—	A	にぶい黄褐	—	A区

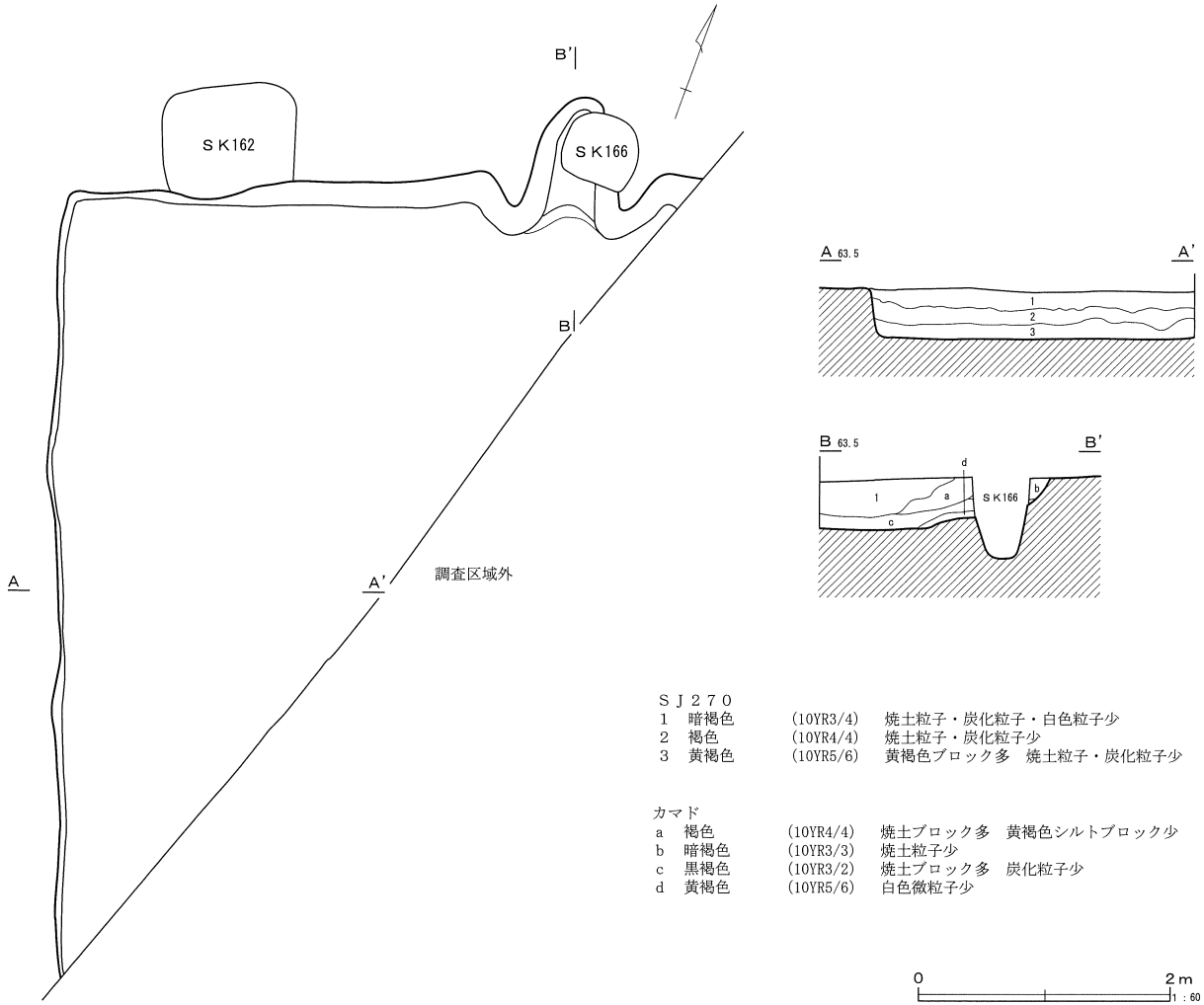
第270号住居跡（第29・30図）

N・O-21・22グリッドに位置する。第162・166号土坑に切られ、第273号住居跡を切る。南東半が調査区域外にあるため住居跡全体の規模は不明である。検出されたのは西壁6.32m、北壁5.10m、深さ0.31~0.34mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは北壁に設置される。先端部を第166号土坑に壊されていた。燃烧部の掘り込みはなく、緩やかな段がつく。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

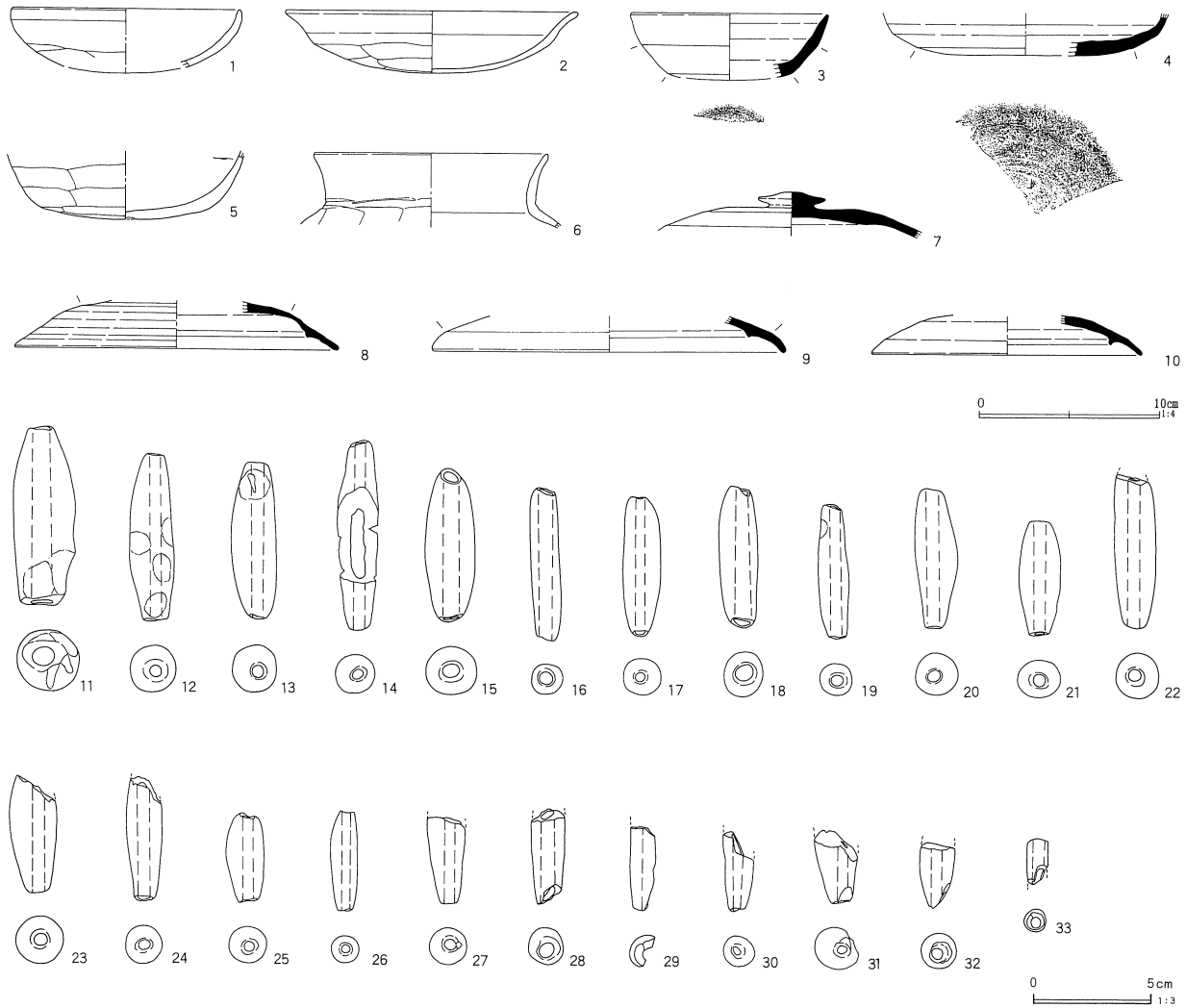
遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が多く出土したが、小破片で摩滅が著しく、殆ど接合しなかった。図示可能な遺物は、土師器坏2・鉢1・甕1、須恵器坏2・蓋4、土鍾23点であった。



第29図 第270号住居跡

第270号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.6)	3.2		B D J L	普通	橙	30	B区	磨耗する
2	土師坏	16.2	3.6		B D J	不良	にぶい橙	75	A区	磨耗著しい
3	須恵坏	(11.0)	3.5	(7.0)	B J	普通	灰黄	25	A区	末野産 底部回転ヘラケズリか？
4	須恵坏		2.3	(12.0)	B J L	良好	黄灰	20	A区	末野産 底部全面回転ヘラケズリ
5	土師鉢		3.8	(9.6)	A B E J L	不良	にぶい橙	30	B区	磨耗著しい
6	土師甕	(13.0)	4.1		A B D E J L	普通	明赤褐	20	A区	内面磨耗著しい
7	須恵蓋		2.5		B D H J	普通	灰白	25	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ
8	須恵蓋	(18.0)	2.6		J L	良好	灰	20	A区	末野産 天井部回転ヘラケズリ



第30図 第270号住居跡出土遺物

第270号住居跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
9	須恵蓋	(19.5)	2.0		A B J	良好	灰	10	覆土	末野産
10	須恵蓋	(15.0)	2.2		B J L	不良	橙	15	A区	末野産

第270号住居跡出土土錘観察表 (第30図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
11	7.40	2.60	0.90	42.13	C b III	A	にぶい橙	100	A区(北)
12	6.90	1.90	0.50	22.18	B b III	C	灰褐	100	B区(南)
13	6.50	1.80	0.45	20.96	B a III	A	暗灰黄	100	B区(南)
14	7.80	1.65	0.45	1.24	B a II	C	褐灰	70	A区(北)
15	6.30	2.05	0.70	23.18	B a IV	C	にぶい黄橙	100	A区(北)
16	6.35	1.30	0.55	9.13	A a IV	C	にぶい黄橙	100	B区(南)
17	5.70	1.55	0.40	14.32	B a IV	C	にぶい橙	100	A区(北)
18	5.80	1.60	0.75	15.94	B a IV	C	にぶい黄橙	100	A区(北)
19	5.55	1.30	0.50	8.18	B a IV	C	明赤褐	100	A区(北)
20	5.80	1.80	0.50	14.60	B a IV	A	にぶい橙	100	B区(南)
21	4.70	1.80	0.50	11.70	B b V	B	黒褐	100	B区(南)
22	(6.40)	1.80	0.55	21.95	B a IV	A	橙	95	A区(北)

第270号住居跡出土土錘観察表（第30図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
23	(4.90)	2.00	0.55	16.04	B a V	A	黒褐	70	A区(北)
24	(5.15)	1.50	0.50	16.96	B a V	C	黒褐	70	A区(北)
25	3.70	1.60	0.45	11.13	B a VI	A	明赤褐	100	A区(北)
26	4.10	1.10	0.35	8.35	B a VI	B	灰褐	100	A区(北)
27	(3.60)	1.55	0.45	5.31	—	B	橙	50	A区(北)
28	(3.90)	1.45	0.60	7.99	—	A	赤	50	B区(南)
29	(3.45)	(1.40)	—	7.03	—	B	にぶい橙	25	A区(北)
30	(3.30)	1.30	0.30	7.09	—	C	橙	40	A区(北)
31	(3.00)	1.85	0.45	4.23	—	C	にぶい橙	30	A区(北)
32	2.70	1.45	0.45	4.92	—	C	にぶい橙	30	A区(北)
33	1.90	0.95	0.40	4.03	—	C	にぶい橙	—	A区(北)

第271号住居跡（第31～34図）

N-21・22グリッドに位置する。第272・274号住居跡を切る。平面形は南北に長い長方形で、長軸3.75m、短軸2.90m、深さは0.27～0.35mである。主軸方位はN-76°-Eを指す。

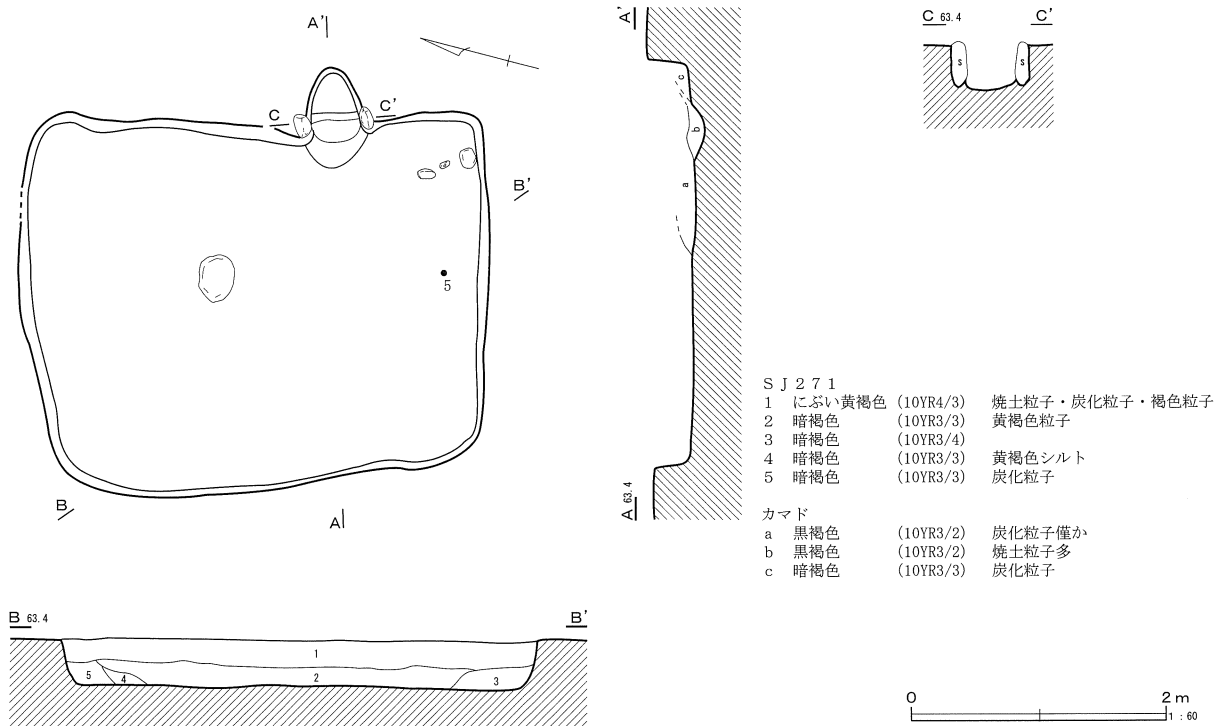
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部は10cm程掘り込み段を持って急激に立ち上がる。左右の袖に自然石が使用されていた。細部の土層観察

は出来なかった。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。住居跡中央付近の床面で扁平な自然石が検出された。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が多く出土したが、小片で摩滅が著しく、殆ど接合しなかった。図示可能な遺物は、土師器坏1、須恵器坏1・蓋2、土製紡錘車1、土錘14点であった。

また、重複する第272号住居跡と同時に調査したため、重複の境界付近にある遺物は、一括して取り上げた。出土遺物にさほど時期差が認められず、整

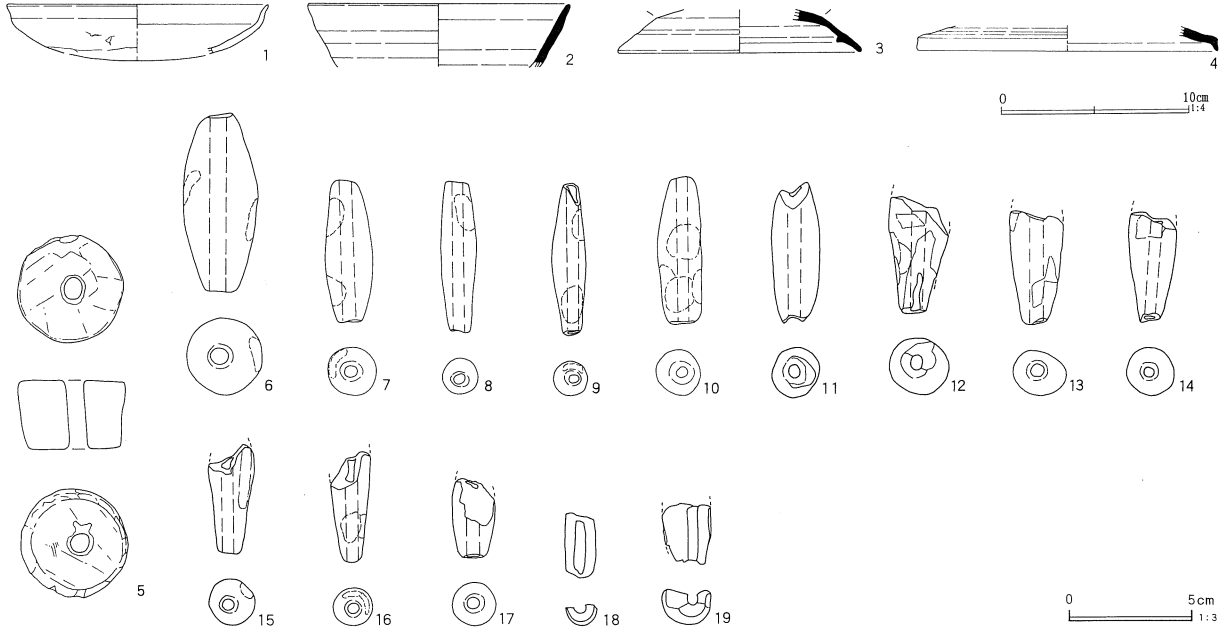


第31図 第271号住居跡

理段階で分離できなかった遺物を第271・272号住居跡出土遺物（第33・34図）として報告する。

第271・272号住居跡出土遺物は、土師器・須恵器の破片が多量に出土した。小破片が多く殆ど接合しな

かった。図示可能な遺物は、土師器坏2・鉢1・甕3、須恵器坏3・碗1・蓋2・甕1、土製紡錘車1、鉢と
思われる鉄製品1、土錘45点であった。



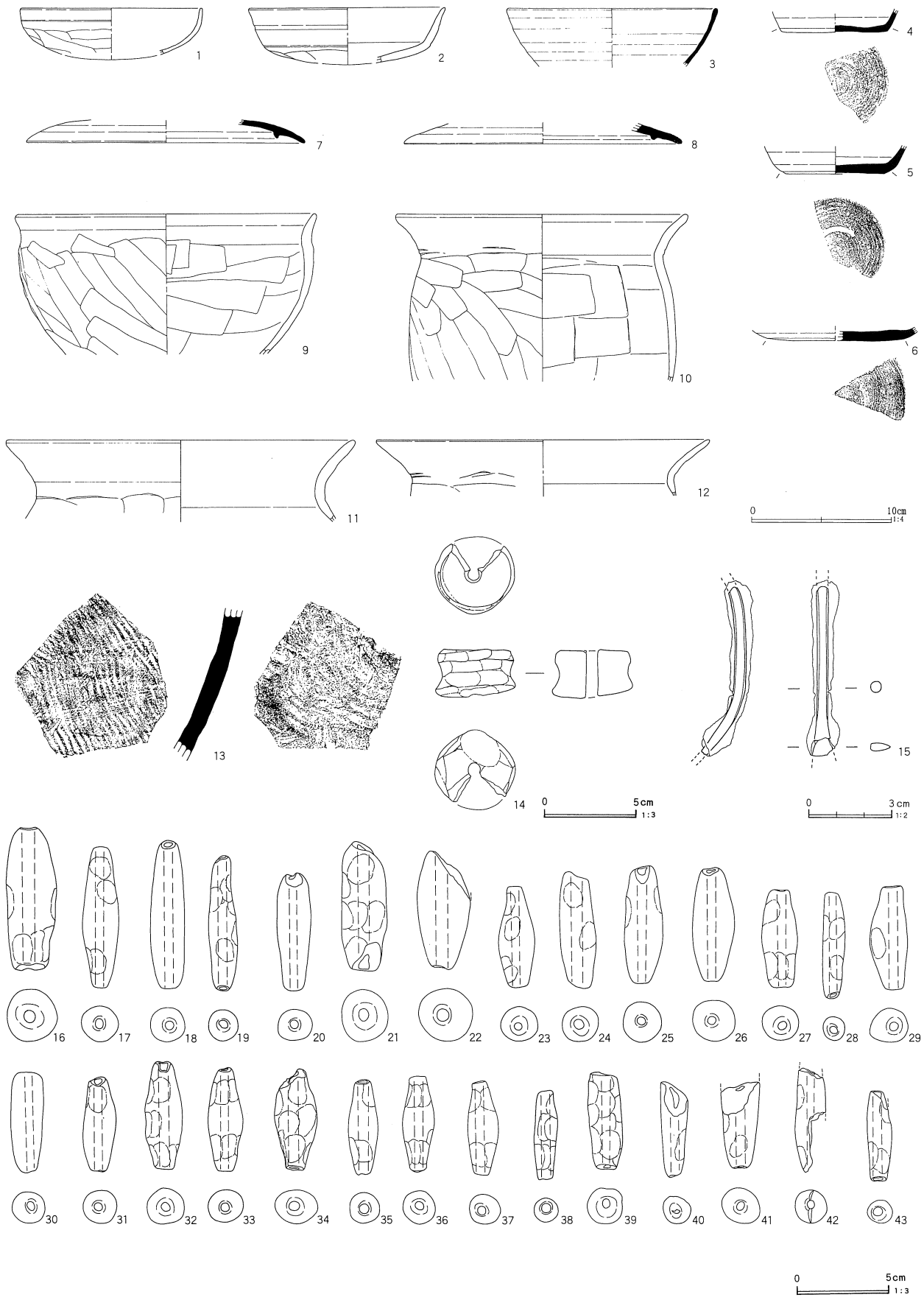
第32図 第271号住居跡出土遺物

第271号住居跡出土遺物観察表（第32図）

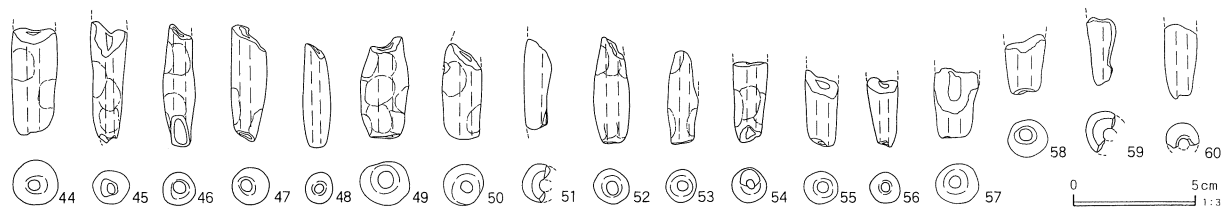
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(14.0)	2.6		B J L	不良	橙	15	B区	磨耗著しい
2	須恵坏	(14.0)	3.4		J	良好	灰	15	A区	末野産
3	須恵蓋	(13.0)	2.3		J L	良好	灰	10	B区	末野産 天井部回転ヘラケズリ
4	須恵蓋	(16.0)	1.3		J L	良好	灰	10	カマド	末野産
5	土製紡錘車	長径4.20cm	短径3.60cm		A B E	普通	にぶい褐	100	+7cm	厚さ2.70cm 孔径0.85cm 重さ60.47g

第271号住居跡出土土錘観察表（第32図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	7.05	3.00	0.70	45.79	B a II	A	橙	100	B区
7	5.60	1.90	0.55	18.34	B a IV	B	黒褐	100	A区
8	6.00	1.45	0.45	10.03	B a IV	B	にぶい橙	100	B区
9	6.00	1.35	0.40	7.95	B a IV	B	橙	95	A区
10	5.85	1.85	0.45	18.43	B b IV	C	にぶい橙	100	A区
11	5.50	1.90	0.45	18.22	B a IV	C	にぶい橙	100	A区
12	4.60	2.35	0.50	15.21	B b III	C	黒褐	50	A区
13	4.50	2.10	0.55	14.68	B a III	A	黒褐	60	A区
14	4.30	1.85	0.40	12.41	B a IV	C	橙	60	A区
15	4.30	1.85	0.45	10.04	B a III	C	にぶい黄橙	40	A区
16	(4.35)	1.60	0.45	7.15	B a III	A	にぶい黄橙	40	カマド
17	(3.10)	1.70	0.50	7.72	—	A	明赤褐	40	B区
18	(2.60)	1.25	0.45	2.34	—	B	灰褐	—	C区
19	(2.35)	1.95	0.40	5.63	—	C	にぶい褐	15	B区



第33图 第271・272号住居跡出土遺物(1)



第34図 第271・272号住居跡出土遺物 (2)

第271・272号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(13.0)	3.3		A D J L	不良	橙	20	B区	やや磨耗する
2	土師坏	(14.0)	3.9		B D E	不良	にぶい橙	15	B区	磨耗著しい
3	須恵碗	(15.0)	4.1		J L	良好	灰	10	C区	末野産
4	須恵坏		1.6	(7.6)	B J L	良好	灰	15	B区	末野産 体部下端・底部全面回転ヘラケズリ
5	須恵坏		2.1	(7.0)	J L	良好	褐灰	40	B区	末野産 体部下端・底部全面回転ヘラケズリ
6	須恵坏		2.0	(10.0)	J L	良好	灰黄	15	C区	末野産 底部全面回転ヘラケズリ
7	須恵蓋	(20.0)	1.3		J L	良好	灰	10	C区	末野産
8	須恵蓋	(20.0)	1.5		J L	良好	灰	10	C区	末野産
9	土師鉢	21.2	10.0		A B C E	良好	明褐色	35	C区	
10	土師甕	(21.0)	12.0		B D J L	普通	にぶい赤褐	15	C区	
11	土師甕	(25.0)	5.8		B D E J L	普通	橙	20	C区	磨耗著しい
12	土師甕	(24.0)	4.0		B J L	不良	橙	15	B区	磨耗著しい
13	須恵甕		8.2		J	良好	灰		C区	末野産 外面平行叩き 内面同心円当具痕
14	土製紡錘車	直径4.30cm 厚さ2.50cm			B	普通	浅黄橙	75	±17cm	孔径0.65cm 重さ36.81g
15	鉄	残存長6.00cm 幅0.40cm 重さ7.99g							覆土	

第271・272号住居跡出土土錘観察表 (第33図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
16	7.60	2.80	0.65	50.51	C a II	A	橙	100	C区
17	7.50	2.00	0.55	25.72	B a II	B	黒褐	100	B区
18	7.90	1.85	0.45	24.75	B a II	A	黒褐	100	C区
19	7.20	1.65	0.50	14.18	C a III	A	黄橙	100	C区
20	6.30	1.80	0.50	18.19	B a IV	C	褐	100	C区
21	6.90	2.80	0.65	39.96	C b III	A	明赤褐	90	C区
22	6.30	2.90	0.65	39.10	B a IV	A	黄橙	75	B区
23	5.40	2.00	0.40	14.37	C b V	C	明黄褐	100	C区
24	6.20	1.90	0.55	19.63	B b IV	B	にぶい黄橙	100	C区
25	6.25	2.15	0.40	23.67	B a IV	B	にぶい黄橙	95	C区
26	6.10	2.30	0.45	25.28	C a IV	A	明黄褐	100	C区
27	5.20	1.90	0.50	17.32	C b V	C	にぶい褐	100	C区
28	5.70	1.25	0.45	6.90	A a IV	C	にぶい黄橙	100	C区
29	5.55	2.05	0.50	18.07	C b V	C	橙	100	C区
30	5.40	1.75	0.60	15.56	B a V	C	褐灰	100	C区
31	5.10	1.85	0.50	11.90	C a V	C	褐	100	C区
32	5.80	2.00	0.55	18.79	C b IV	C	にぶい黄橙	95	C区
33	5.55	1.90	0.50	16.09	C b IV	B	黒褐	100	B区
34	5.40	2.30	0.55	20.10	C b V	C	褐灰	95	B区
35	5.10	1.60	0.55	11.16	C a V	A	橙	100	B区
36	5.10	1.85	0.50	13.07	C b V	A	にぶい黄橙	100	B区
37	5.00	1.70	0.50	10.47	C b V	A	黄橙	100	B区
38	4.80	1.30	0.50	6.79	B a V	C	黒褐	100	B区
39	5.20	2.05	0.50	16.83	B b V	C	黒褐	95	
40	(5.10)	1.50	0.45	8.43	B a III	B	黒褐	65	C区
41	(4.60)	2.15	0.50	16.35	B a III	A	にぶい赤褐	60	
42	(5.50)	1.85	0.45	12.40	B a III	A	にぶい黄橙	60	B区

第271・272号住居跡出土土錘観察表（第33・34図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
43	4.85	1.30	0.50	6.63	B b V	C	明赤褐	95	B区
44	(4.25)	1.80	0.45	12.26	B a IV	A	にぶい黄橙	70	C区
45	(4.85)	1.50	0.40	7.79	B a III	C	浅黄橙	70	C区
46	4.85	1.30	0.55	6.05	B a V	C	にぶい褐	95	B区
47	4.65	1.50	0.50	9.86	B a V	C	灰黄褐	95	
48	4.15	1.20	0.40	4.65	B a V	C	褐	100	C区
49	4.05	2.00	0.65	12.48	C b VI	C	橙	95	B区
50	(3.80)	1.65	0.50	8.08	D b VI	B	にぶい褐	—	C区
51	(3.60)	1.50	(0.45)	4.21	—	B	にぶい黄橙	30	C区
52	4.25	1.95	0.55	6.35	B a V	A	にぶい褐	95	
53	3.70	1.30	0.40	4.49	B b VI	C	橙	80	B区
54	(3.20)	1.40	0.40	5.67	B a IV	C	橙	50	
55	(3.00)	1.30	0.40	4.13	—	C	にぶい黄橙	40	B区
56	(2.80)	1.25	0.40	3.41	—	C	にぶい橙	30	B区
57	(2.80)	1.70	0.45	5.56	—	C	褐灰	25	B区
58	(2.45)	1.50	0.50	4.70	—	C	にぶい橙	30	B区
59	(2.70)	—	—	2.80	—	A	橙	20	
60	(2.90)	(1.30)	(0.40)	3.84	—	C	にぶい褐	25	B区

第272号住居跡（第33～36図）

N-21・22グリッドに位置する。中央付近から北側を第271号住居跡に大きく切られ、第274・278号住居跡を切る。第172号土坑との関係は不明である。平面形は正方形に近く、東西5.26m、南北5.08m、深さは0.20～0.45mである。主軸方位はN-105°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは西壁の南西コーナー近くに設置される。燃烧部の掘り込みはなく、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南壁と東壁で検

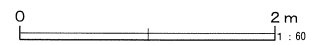
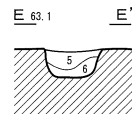
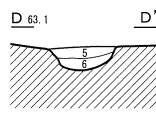
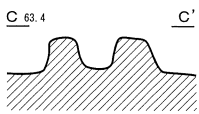
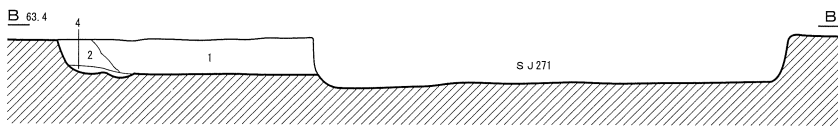
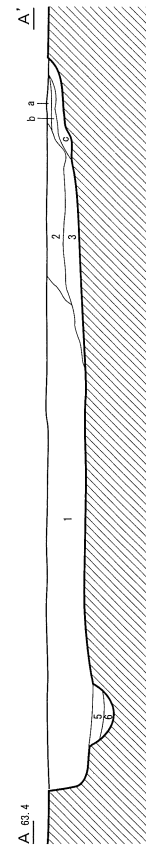
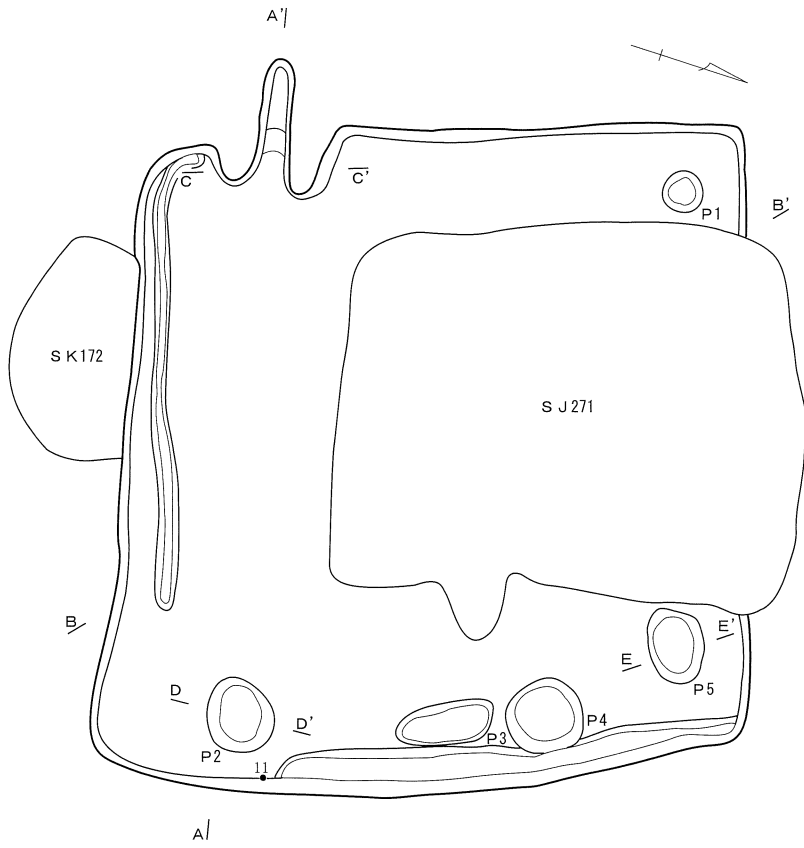
出され、幅11～40cm、深さ1～5cmである。南壁の壁溝は壁際からやや離れて検出された。ピットは5本検出され、P1～P5の深さは12cm、17cm、6cm、11cm、20cmである。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が多く出土した。小破片が多く、殆ど接合しなかった。図示可能な遺物は、土師器坏4・甕1、須恵器坏1・蓋2・甕2、滑石製白玉1、棒状の鉄製品1、土錘13点であった。

12は、棒状の鉄製品で、両端部を欠く。断面は正方形で、鉤状に湾曲していた。

第272号住居跡出土遺物観察表（第36図）

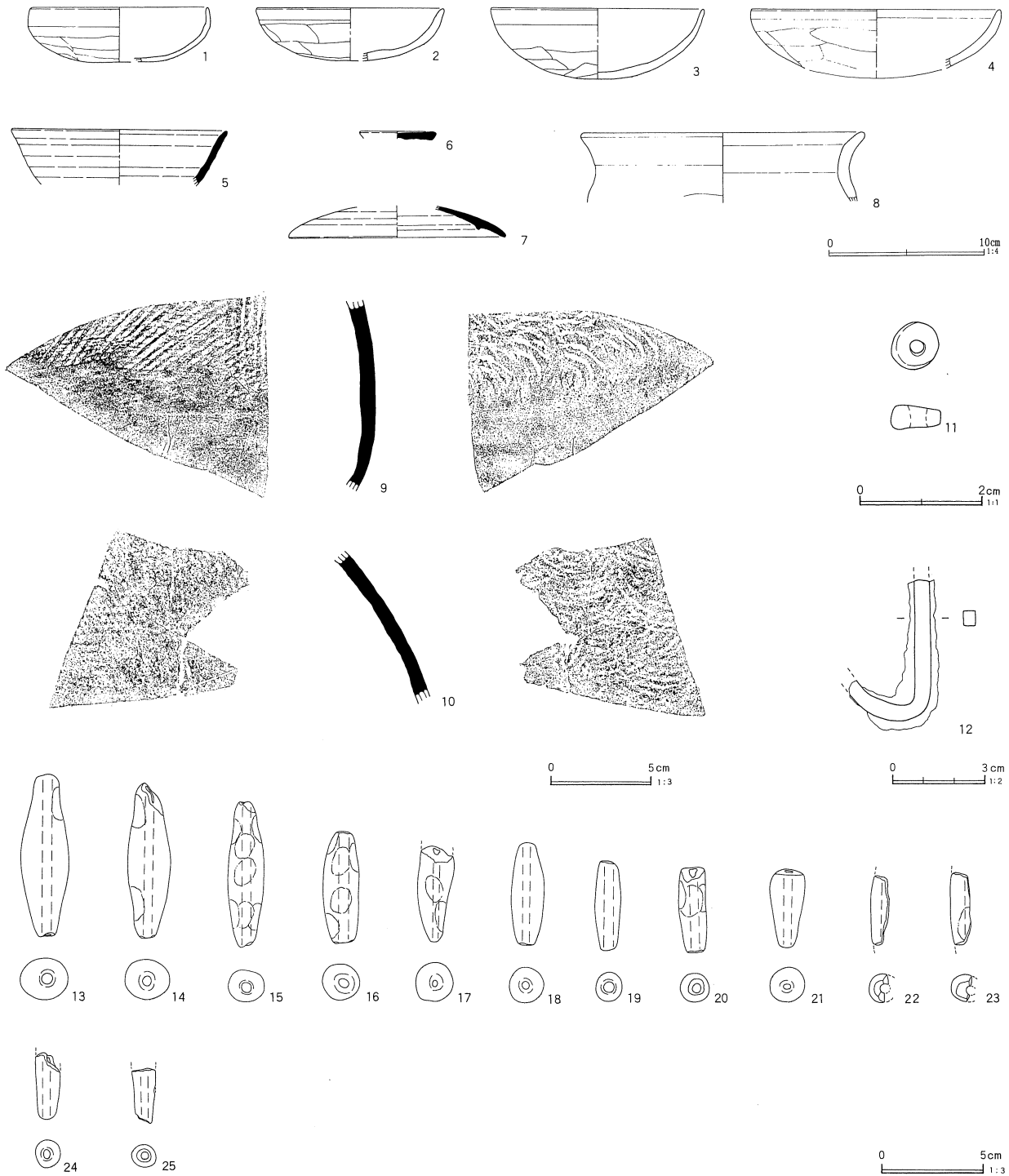
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.4)	3.5		A B D E J	不良	橙	15	P5	磨耗著しい
2	土師坏	(12.0)	3.4		E J	不良	明赤褐	30	A区	磨耗著しい
3	土師坏	(13.6)	4.5		B D J	不良	にぶい褐	60	C・D区	磨耗著しい
4	土師坏	(16.0)	3.8		A B E G	普通	にぶい橙	15	A区	
5	須恵坏	(14.0)	3.6		B J	良好	灰	15	A区	末野産
6	須恵蓋		0.5		E J	不良	にぶい橙	90	D区	末野産 つまみ直径5.0cm
7	須恵蓋	(19.9)	2.0		A B H J	不良	にぶい黄橙	15	D区	末野産 酸化焰焼成
8	土師甕	(18.4)	4.5		B E J L	普通	にぶい橙	20	D区	内面やや磨耗
9	須恵甕				B J L	良好	灰		D区	末野産
10	須恵甕				J L	良好	灰		A区	末野産
11	白玉	直径0.80cm 厚さ0.40cm 孔径0.25cm 重さ0.33g							+8cm	滑石製
12	棒状鉄製品	現存長4.50cm 幅0.50cm 厚さ0.50cm 重さ9.81g							覆土	両端部を欠き、端部の一方が鉤状に湾曲する



- S J 2 7 2
- | | | | |
|---|--------|-----------|----------------|
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 炭化粒子 |
| 2 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 焼土粒子・炭化粒子・褐色粒子 |
| 3 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 焼土・炭化粒子多 |
| 4 | 黒褐色 | (10YR3/1) | 灰色シルト |
| 5 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 焼土粒子・炭化粒子少 |
| 6 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 焼土粒子・炭化粒子少 |

- カマド
- | | | |
|---|-----|----------------|
| a | 褐色 | (10YR4/6) |
| b | 褐色 | (10YR4/4) 焼土僅か |
| c | 暗褐色 | (10YR3/3) |

第35図 第272号住居跡



第36図 第272号住居跡出土遺物

第272号住居跡出土土錘観察表 (第36図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
13	7.80	2.30	0.50	29.20	C a II	A	明赤褐	100	A区
14	7.40	2.20	0.40	24.70	C a III	A	明赤褐	100	C区
15	7.00	1.70	0.50	15.02	C a III	A	浅黄橙	100	C区
16	5.30	1.70	0.50	16.50	B b V	C	にぶい黄橙	100	カマド
17	(4.60)	1.90	0.30	12.08	C a III	C	黒	75	C区
18	4.90	1.80	0.40	12.71	B a V	A	灰黄褐	95	D区

第272号住居跡出土土錘観察表 (第36図)

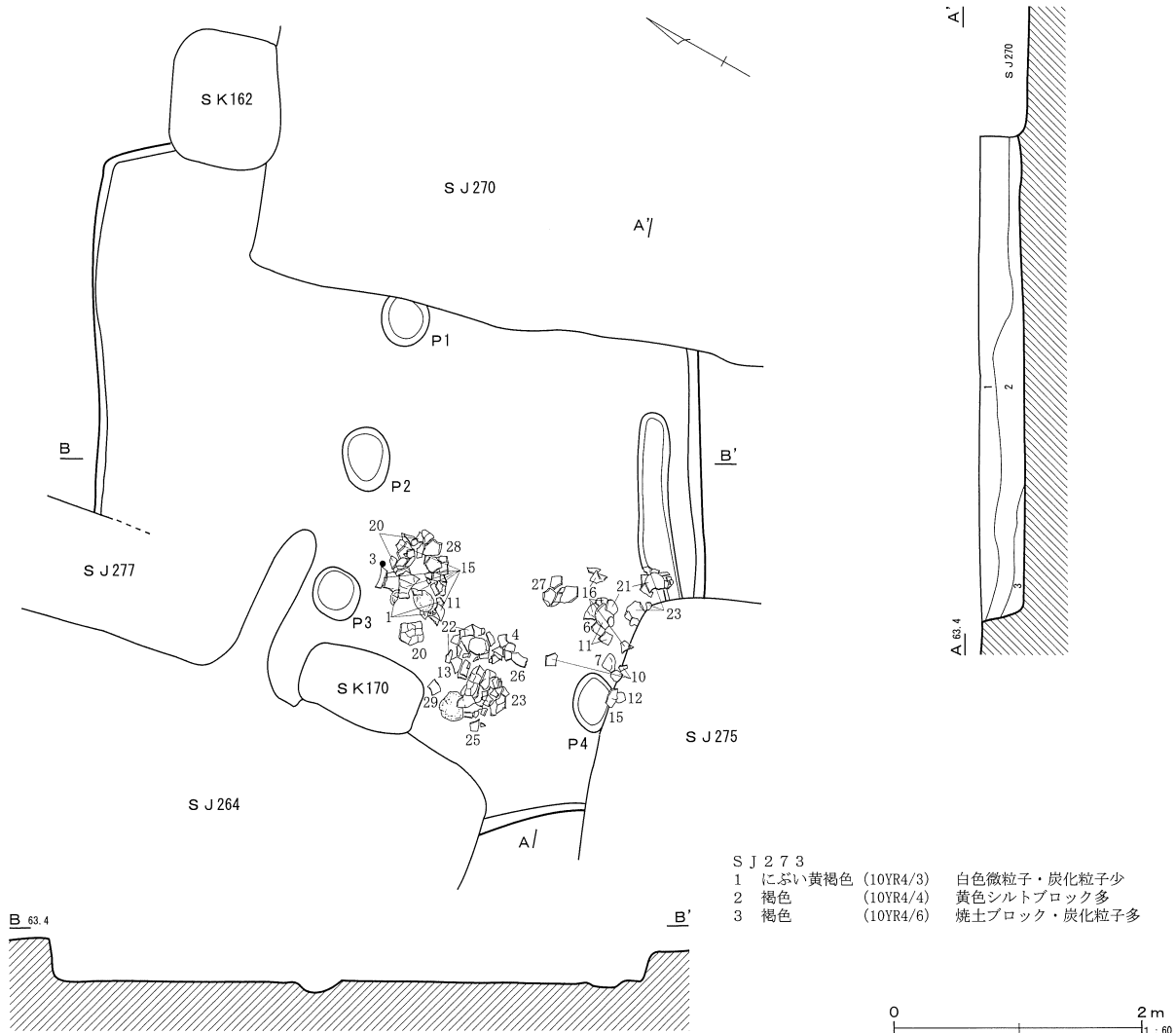
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
19	4.30	1.40	0.50	6.02	B a V	A	橙	100	A区
20	4.10	1.40	0.40	6.86	B b V	C	褐	95	A区
21	3.80	1.70	0.40	8.33	B a IV	C	明黄褐	50	カマド
22	(3.40)	(1.40)	0.40	3.73	—	C	にぶい黄橙	25	A区
23	(3.00)	1.20	—	4.33	—	B	にぶい黄橙	35	D区
24	(3.20)	1.40	0.40	4.02	B a IV	C	にぶい黄橙	40	A区
25	(2.20)	1.30	0.40	2.57	—	C	にぶい黄橙	30	

第273号住居跡 (第37・38・39図)

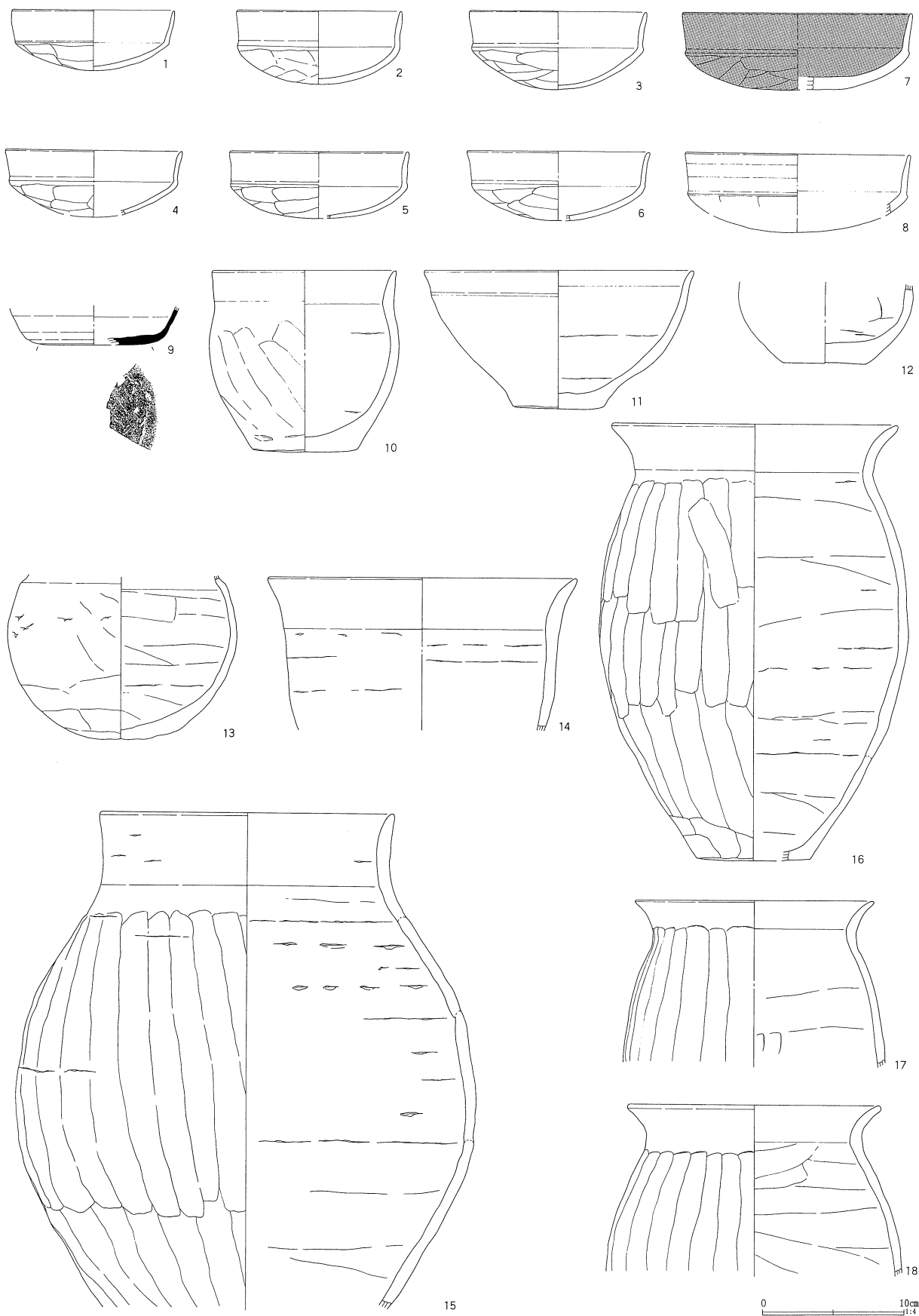
N・O-21・22グリッドに位置する。第264・270・275・277号住居跡・第162・170号土坑と重複し、その何れより古い。そのため検出できた部分のごく限られ、不明な点が多い。平面形は東西に長い長方形と考えられ、長軸5.8m前後で、短軸は4.93mである。

深さは0.19~0.24mである。主軸方位は北壁でN-60°-Eを指す。

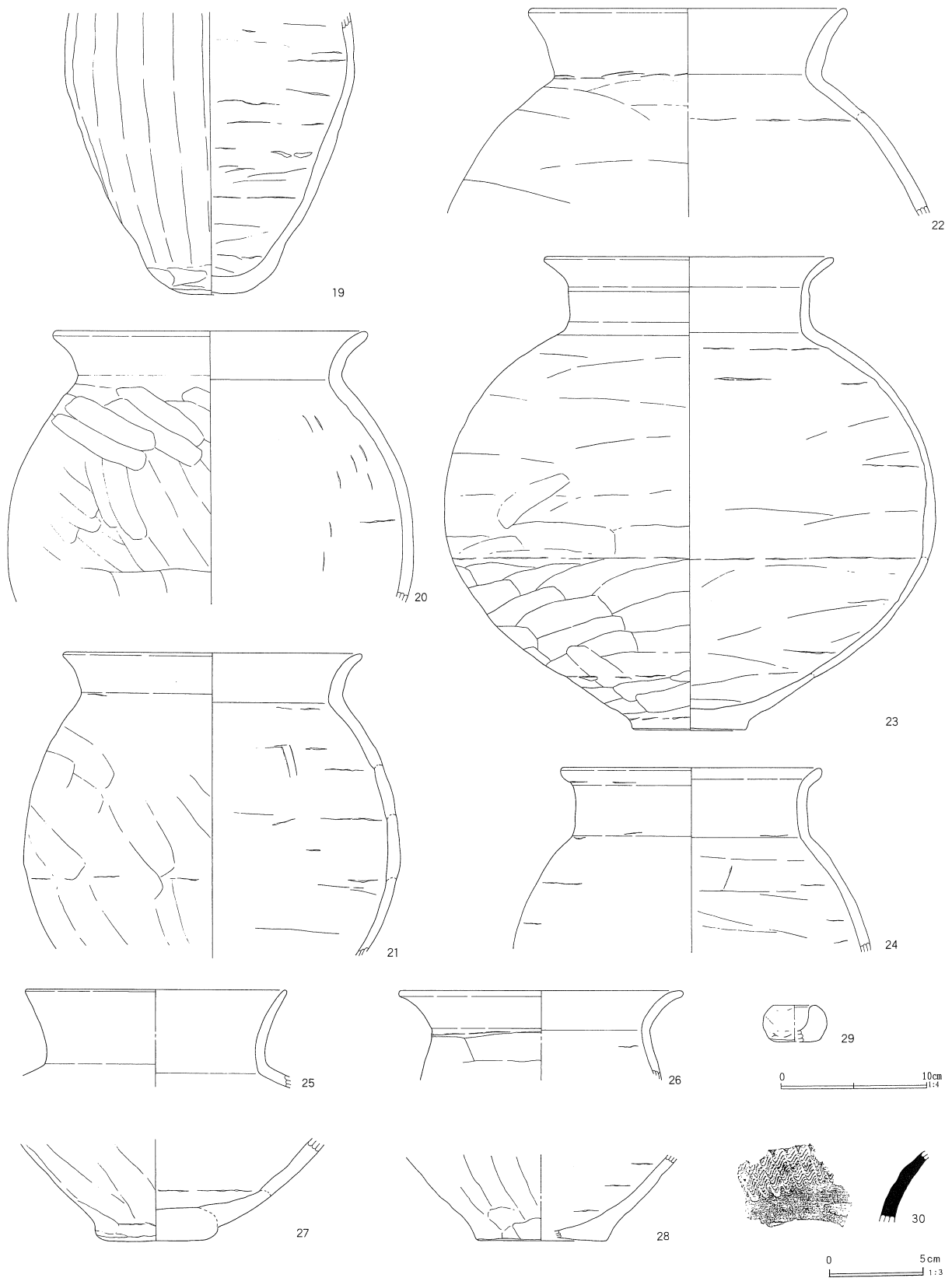
床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南壁で検出され、幅24~30cm、深さ3~4cmだが、やや壁から離れている。ピットは3本検出され、P1~



第37図 第273号住居跡



第38图 第273号住居跡出土遺物 (1)



第39図 第273号住居跡出土遺物 (2)

P 3の深さは8 cm、9 cm、10cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器が多量に出土した。破片はある程度接合するものの、土師器甕の胴部片が多く、図示不可能な遺物も多かった。

図示可能な遺物は、土師器坏8・小型甕3・鉢1・

甗1・甕12・壺2、須恵器坏1・甕1、手捏ね1点であった。出土位置は、概ね住居南西部床面から出土した。

このうち、9の須恵器坏と30の甕は、重複する他住居跡からの混入と思われる。

第273号住居跡出土遺物観察表（第38・39図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	11.6	4.3		B D E J L	不良	橙	95	床	磨耗著しい
2	土師坏	11.8	5.2		B E J L	不良	明赤褐	85	A区	磨耗著しい
3	土師坏	(12.4)	5.5		E J L	不良	明赤褐	75	+3cm	
4	土師坏	(12.6)	4.5		B E J L	不良	橙	20	床	磨耗著しい
5	土師坏	(12.8)	4.7		B E J L	普通	にぶい橙	30	A区	やや磨耗
6	土師坏	(13.0)	4.9		B D E J L	不良	明赤褐	40	床	磨耗著しい
7	土師坏	(16.4)	5.4		A B E J L	普通	にぶい橙	45	床	やや磨耗 内外面黒色処理
8	土師坏	(16.0)	4.3		E J	普通	橙	10	A区	
9	須恵坏		2.8	(8.0)	J L	良好	灰	20	A区	末野産 底部手持ちヘラケズリ
10	土師小型甕	(13.0)	12.7	7.4	B E J L	不良	にぶい橙	40	床	
11	土師鉢	19.1	9.8	6.4	B J L	不良	にぶい橙	90	床	磨耗著しい
12	土師小型甕		5.7	5.8	B C E J L	不良	橙	80	-5cm	磨耗著しい
13	土師小型甕		11.6		B E J L	普通	褐	60	+3cm	やや磨耗 歪みあり
14	土師甕	(22.0)	10.8		B E J L	不良	にぶい橙	20	A区	磨耗著しい
15	土師甕	21.0	34.9		B C J L	不良	にぶい褐	60	床	輪積痕明瞭
16	土師甕	(20.4)	30.6	(8.0)	B C E J L	不良	にぶい褐	50	床	歪み著しい
17	土師甕	(17.0)	11.8		B E J L	不良	橙	30	A区	
18	土師甕	(18.0)	12.2		E J L	不良	橙	30	A区	
19	土師甕		19.3	6.0	B C J L	不良	にぶい褐	45	B区	外面磨耗
20	土師甕	(21.4)	18.6		B E G	普通	褐	20	床	
21	土師甕	(20.4)	20.7		B C J L	不良	にぶい橙	30	-5cm	
22	土師甕	(22.0)	14.2		B D E J L	不良	橙	60	床	
23	土師壺	(20.0)	32.4	8.0	B C D J L	不良	橙	60	床	外面赤彩わずかに残存
24	土師壺	(18.0)	12.6		B J L	不良	にぶい橙	30	A区	磨耗著しい
25	土師甕	(18.0)	6.7		B J L	普通	にぶい褐	25	+7cm	磨耗著しい
26	土師甕	(19.6)	6.1		C E J L	不良	橙	25	-5cm	
27	土師甕		7.0	8.2	B E J L	不良	橙	70	床	磨耗著しい 歪みあり
28	土師甕		9.0	9.0	J L	不良	にぶい黄橙	60	床	磨耗著しい
29	手捏ね土器	(3.6)	2.5		B E J L	不良	にぶい褐	40	床	
30	須恵甕				B J	良好	灰		A区	末野産

第274号住居跡（第40・41図）

N-21・22グリッドに位置する。第266・271・272号住居跡と重複し本住居跡が最も古い。平面形は歪んだ長方形で、長軸は4.5m前後と考えられ、短軸3.94m、深さ0.37~0.40mである。主軸方位はN-44°-Wを指す。北西壁のうちカマドより左は上場のみ検出され、下場および床面は第271号住居跡で壊されていた。

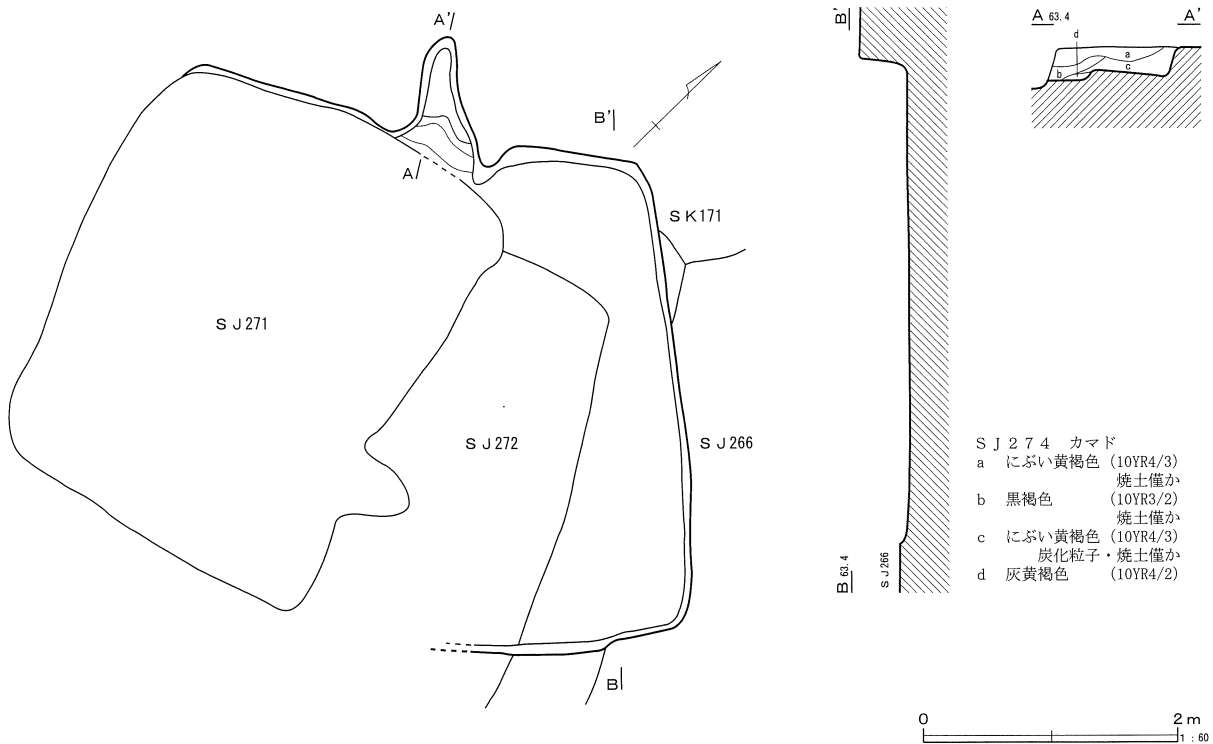
床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土

の観察は出来なかった。

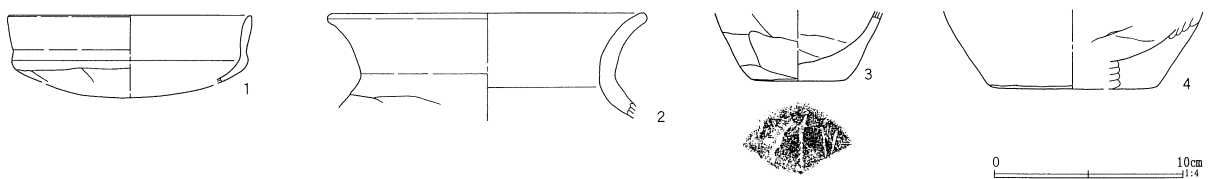
カマドは北西壁に設置される。燃烧部は大半が第271号住居跡で削られていたが、掘り込みはないようで、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が出土した。小破片が多く、接合率は悪い。

図示可能な遺物は、土師器坏1・甕3点であった。



第40図 第274号住居跡



第41図 第274号住居跡出土遺物

第274号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(13.0)	3.6		B D E J	不良	明赤褐	30	B区	
2	土師甕	(17.0)	5.6		B J L	普通	橙	15	B区	やや磨耗
3	土師甕		3.7	(5.0)	B C J L	不良	橙	30	B区	底部木葉痕か?
4	土師甕		4.1	(9.0)	B C J L	不良	にぶい褐	20	B区	磨耗著しい

第275号住居跡 (第42・43図)

O-21グリッドに位置する。第273号住居跡を切る。平面形は正方形で、東西3.65m、南北3.52m、深さは0.18~0.24mである。主軸方位はN-75°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央に設置される。燃烧部は5cm程掘り込み急激に立ち上がる。貯蔵穴はカマド右に設

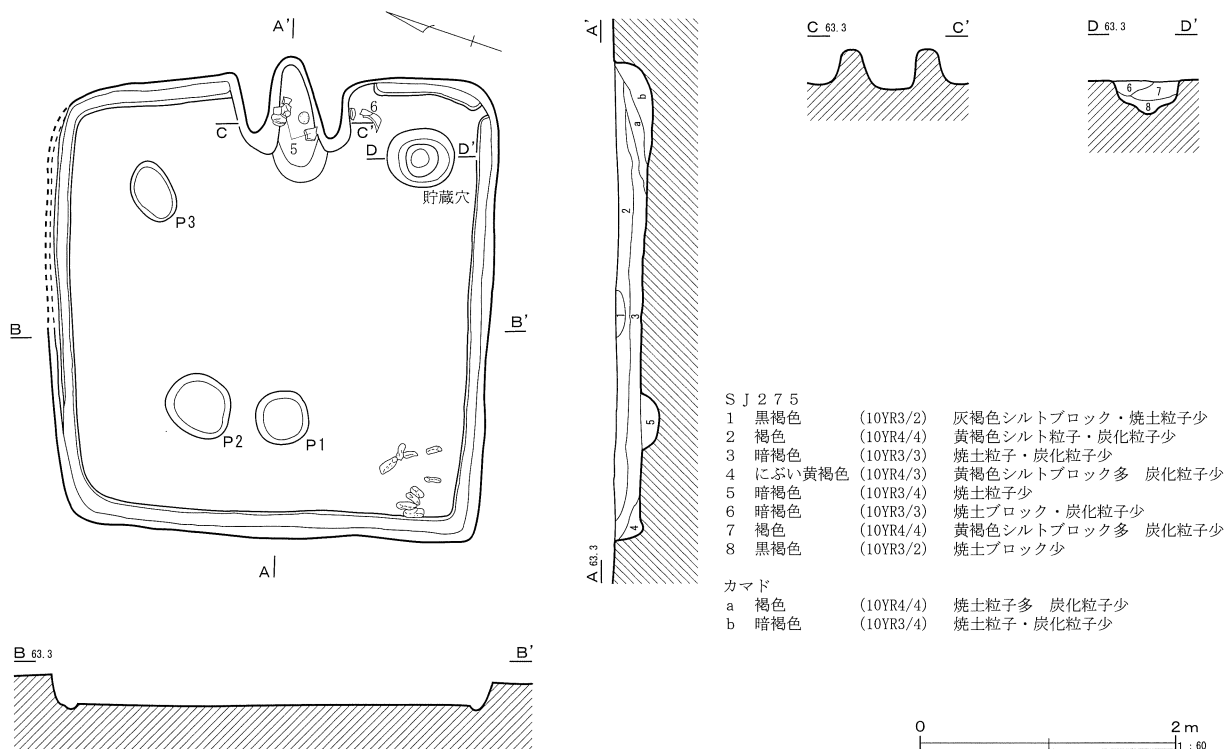
けられ、54×44cmの楕円形で、深さは27cmである。壁溝は南東コーナーで僅かに途切れるもののほぼ全周し、幅14~20cm、深さ2~5cmである。ピットは3本検出され、P1~P3の深さは15cm、16cm、6cmである。

遺物は、覆土から土師器坏・甕・鉢の破片が出土したが、接合率は悪かった。

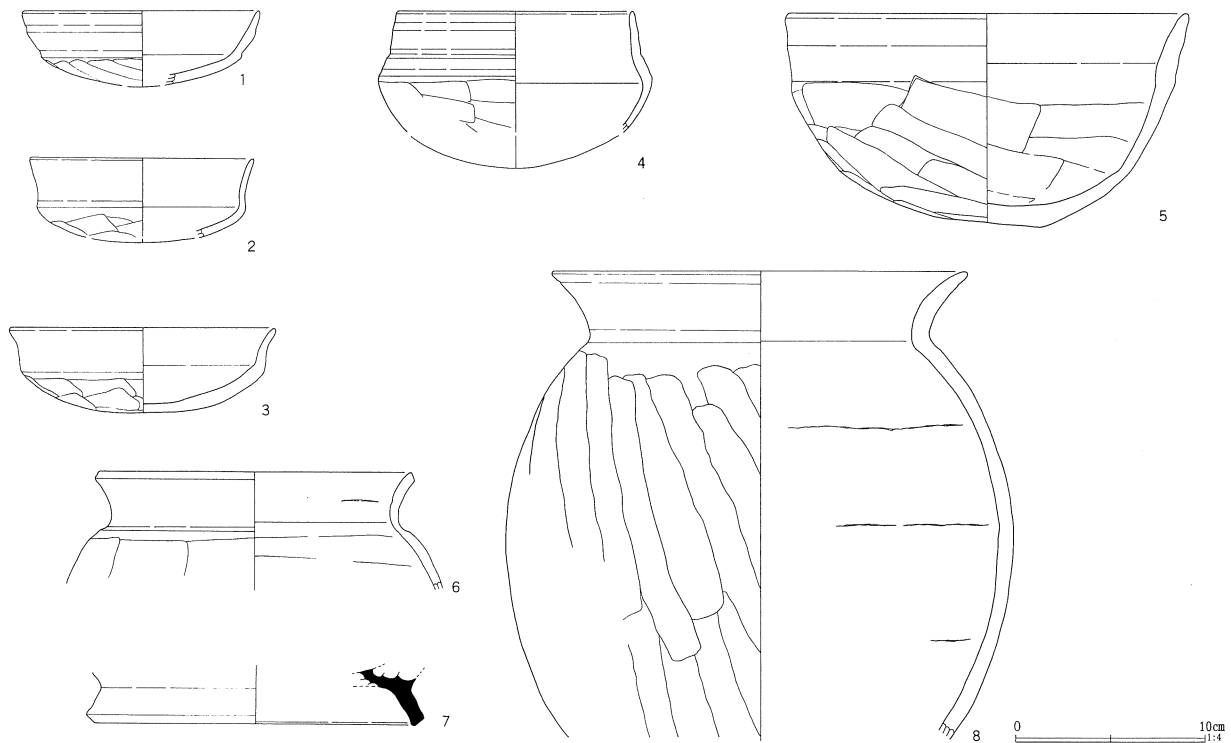
図示可能な遺物は、土師器坏4・鉢1・甕2、須恵

器甕1点が出土した。このうち、5の鉢はカマドから、6の甕はカマド右脇の床面から出土した。

また、南西コーナー付近の床面から編物石が9個出土した。



第42図 第275号住居跡



第43図 第275号住居跡出土遺物

第275号住居跡出土遺物観察表 (第43図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.6)	4.0		BDEJ	普通	橙	25	A区	
2	土師坏	(12.0)	4.2		BCEJL	不良	橙	20	A区	磨耗著しい
3	土師坏	(14.0)	4.5		BEJ	普通	にぶい橙	60	A・B区	磨耗著しい
4	土師坏	(12.6)	6.4		BEJL	普通	にぶい褐	20	A区	
5	土師鉢	21.0	11.3	5.8	BDEJ	普通	橙	75	カマド	
6	土師甕	(16.6)	6.2		BCEJL	不良	にぶい黄橙	40	床	磨耗著しい
7	須恵甕		3.1	(17.0)	JL	良好	灰	15	カマド	末野産
8	土師甕	(22.0)	24.8		BEJL	普通	橙	20	A区・床	

第276号住居跡 (第44・45図)

P-21グリッドに位置する。第552号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。東側と南壁は調査区域外にあるが、南西コーナーは検出された。平面形は東西に長い長方形と考えられる。検出された規模は北壁が4.68m、西壁3.22m、深さは0.43~0.50mである。主軸方位は北壁でN-68°-Eを指す。

床面は起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は検出

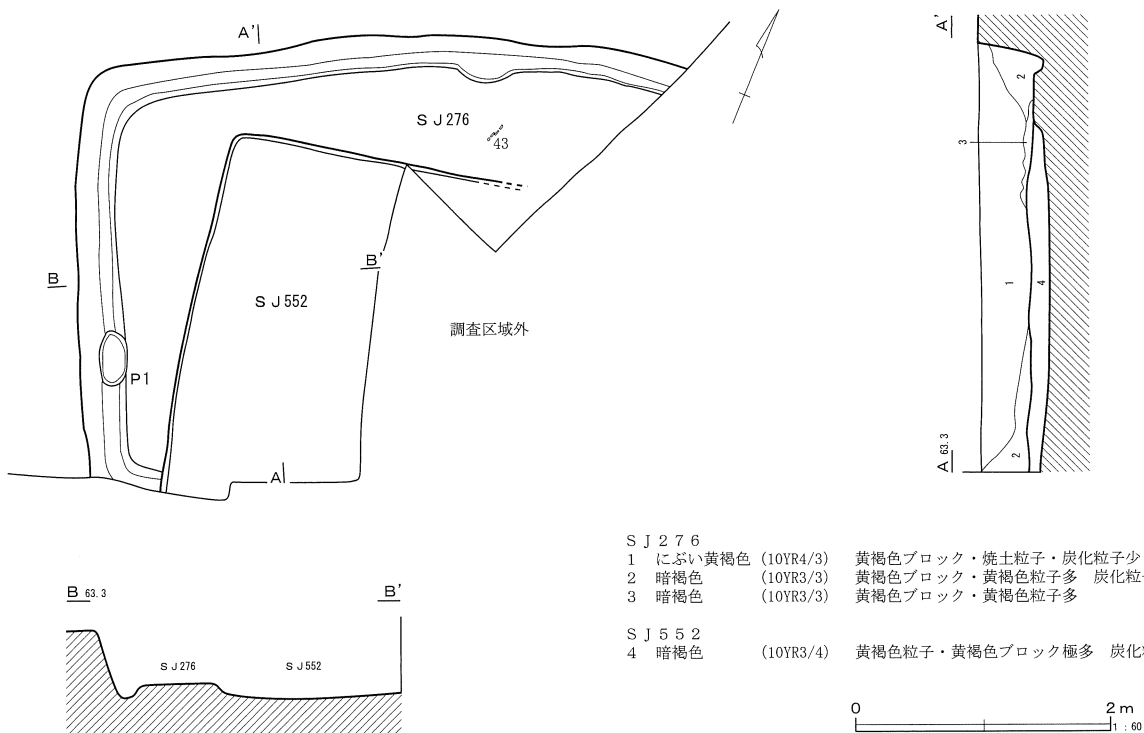
された部分で全周し、幅20~38cm、深さ1~8cmである。ピットは1本検出され、深さは14cmである。

遺物は、覆土から、土師器・須恵器の破片が出土したが、小破片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器坏2・蓋1、刀子1、不明鉄製品1、土錘6点であった。

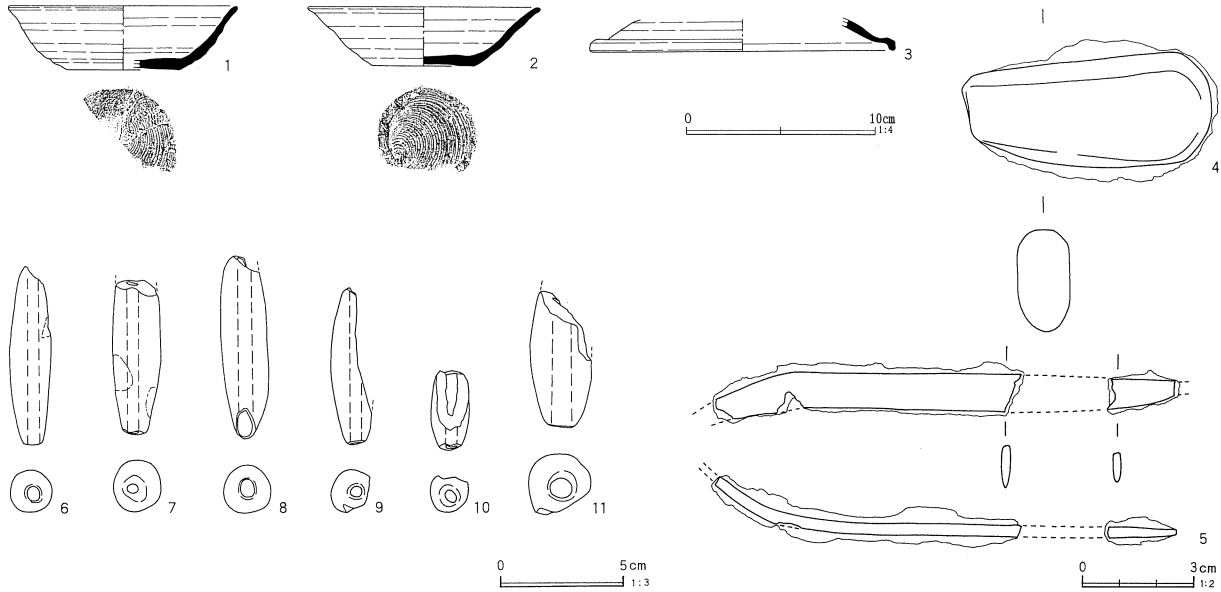
須恵器は、1が南比企産、2・3が末野産である。坏の底部は2点とも、糸切後未調整であった。

5の刀子は、先端及び身部の一部を欠く。基部を境に折れ曲がっていた。



- S J 276
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色ブロック・焼土粒子・炭化粒子少
 - 2 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色ブロック・黄褐色粒子多 炭化粒子少
 - 3 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色ブロック・黄褐色粒子多
- S J 552
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色粒子・黄褐色ブロック極多 炭化粒子少

第44図 第276・552号住居跡



第45図 第276号住居跡出土遺物

第276号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵杯	(12.0)	3.4	(6.0)	I J	良好	明緑灰	20	B区	南比企産 底部回転糸切 火禿痕明瞭
2	須恵杯	(12.3)	3.1	5.4	A B F	良好	灰	30	覆土	末野産 底部回転糸切
3	須恵蓋	(16.0)	1.7		A B H J	良好	灰	10	A区	末野産
4	不明鉄製品	現存長6.50cm 幅3.00cm 厚さ1.40cm 重さ73.29g								
5	刀子	残存長11.90cm		背幅0.45cm	刃幅1.05cm	重さ14.10g			床	身部の一部を欠損 茎部を境に折れ曲がる

第276号住居跡出土土錘観察表 (第45図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	7.00	1.75	0.60	14.11	B a III	C	橙	95	
7	(6.10)	2.05	0.45	23.42	C b III	C	にぶい黄褐	90	
8	7.20	1.90	0.70	20.56	B a III	C	浅黄橙	95	
9	6.15	1.80	0.45	10.24	B b IV	C	にぶい黄橙	60	
10	3.15	1.55	0.50	5.59	B a VI	C	橙	75	
11	(5.35)	2.60	0.85	21.97	B b III	C	橙	60	

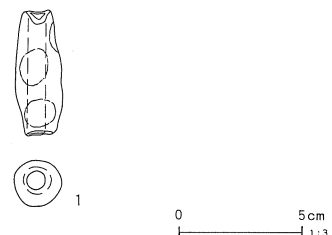
第552号住居跡 (第44・46図)

P-21グリッドに位置する。第276号住居跡の床面に検出された。大半が調査区域外にあるため不明な点が多い。検出された規模は、西壁2.92m、北壁2.12mで、第276号住居跡の床面からの深さは0.05~0.17mである。主軸方位は北壁でN-79°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。覆土は1層で地山粒子・ブロックを極めて多量に含み埋められた可能性がある。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、須恵器の蓋片が数点、土師器甕の胴部片が20数点出土したが、小破片であった。図示可能な遺物は、土錘1点であった。



第46図 第552号住居跡出土遺物

第552号住居跡出土土錘観察表（第46図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	5.00	1.90	0.75	14.02	B a V	C	橙	100	

第277号住居跡（第47・48図）

N-21グリッドに位置する。第264・269号住居跡、第154号土坑に切られ、第273・278・548号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。西壁と東壁の南半は検出できなかった。検出された規模は、北壁3.78m、東壁2.22mで、深さは0.14~0.20mである。主軸方位はN-7°-Wを指す。

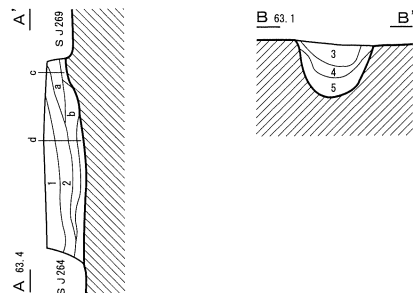
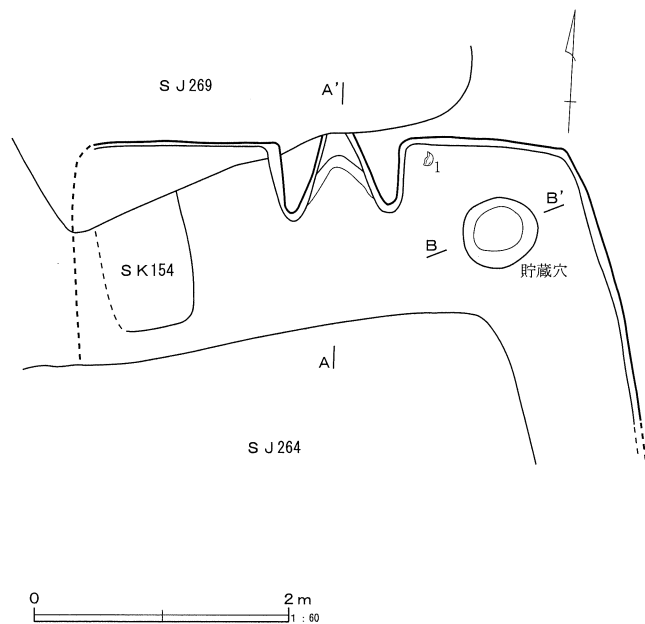
床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土の観察は出来なかった。

カマドは北壁中央付近に設置される。先端は第

269号住居跡に壊される。燃焼部の掘り込みはなく小さな段がつく。貯蔵穴はカマド右に設けられ、62×54cmの楕円形で、深さは39cmである。壁溝は検出されなかった。

遺物は、覆土から土師器坏・甕の破片が出土したが、小片が多く殆ど接合しなかった。図示可能な遺物は、土師器坏5・甕2点であった。

このうち、1はカマド右袖脇の床面からやや浮いた状態で、2は貯蔵穴、4・7はカマドからそれぞれ出土した。

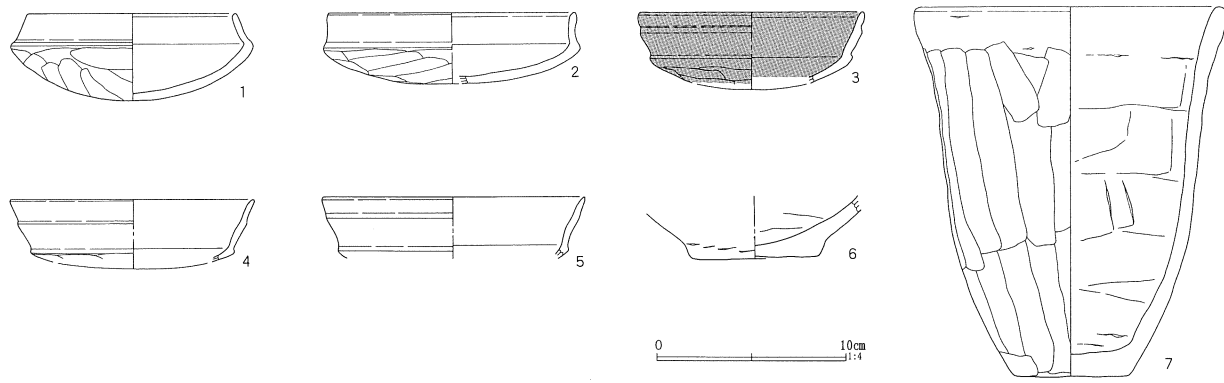


- S J 2 7 7
- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 焼土ブロック・黄褐色シルトブロック少
 - 2 褐色 (10YR4/4) 焼土粒子・炭化粒子少
 - 3 黄褐色 (10YR5/6) 黄褐色シルトブロック少
 - 4 黒褐色 (10YR2/2) 炭化粒子多
 - 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂礫多
- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子・炭化粒子少
 - b 暗褐色 (10YR3/4) 焼土粒子・炭化粒子少
 - c 暗赤褐色 (10YR4/4) 焼土ブロック多
 - d 褐色 (10YR4/6) 黄褐色シルトブロック

第47図 第277号住居跡

第277号住居跡出土遺物観察表（第48図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.0)	4.6		B D E J L	不良	橙	60	+4cm	磨耗著しい
2	土師坏	(13.0)	3.8		B D E J L	普通	にぶい橙	40	貯蔵穴	
3	土師坏	11.8	4.1		A B J	普通	橙	45	B区	内外面黒色処理
4	土師坏	(13.0)	3.3		B E J	不良	橙	10	カマド	
5	土師坏	(14.0)	3.2		D E H J	普通	橙	20	B区	
6	土師甕		3.2	6.8	B E J	不良	橙	80	B区	
7	土師甕	(16.0)	19.5	6.0	A B C E J L	普通	にぶい黄橙	50	カマド	



第48図 第277号住居跡出土遺物

第278号住居跡 (第49・50図)

N-21グリッドに位置する。第269・272・277号住居跡と重複し、その何れよりも古い。平面形は東西に長い長方形で、規模は長軸は4.3m前後、短軸が3.6m前後になると考えられる。深さは0.07~0.13mである。主軸方位はN-114°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土は1層で、短時間で埋まったと思われる。

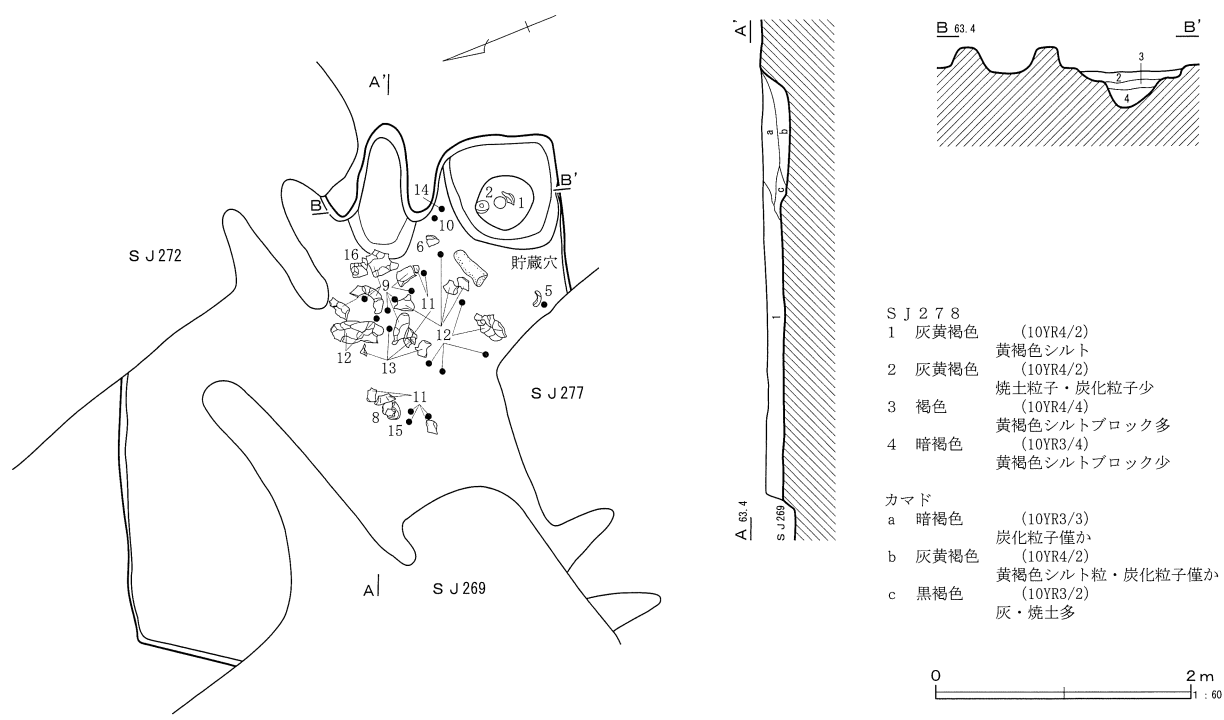
カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃焼部は10cm程掘り込み急激に立ち上がる。貯蔵穴は南東コーナーに設けられ、84×62cmの歪んだ隅丸方形

で、深さは32cmである。壁溝は検出されなかった。

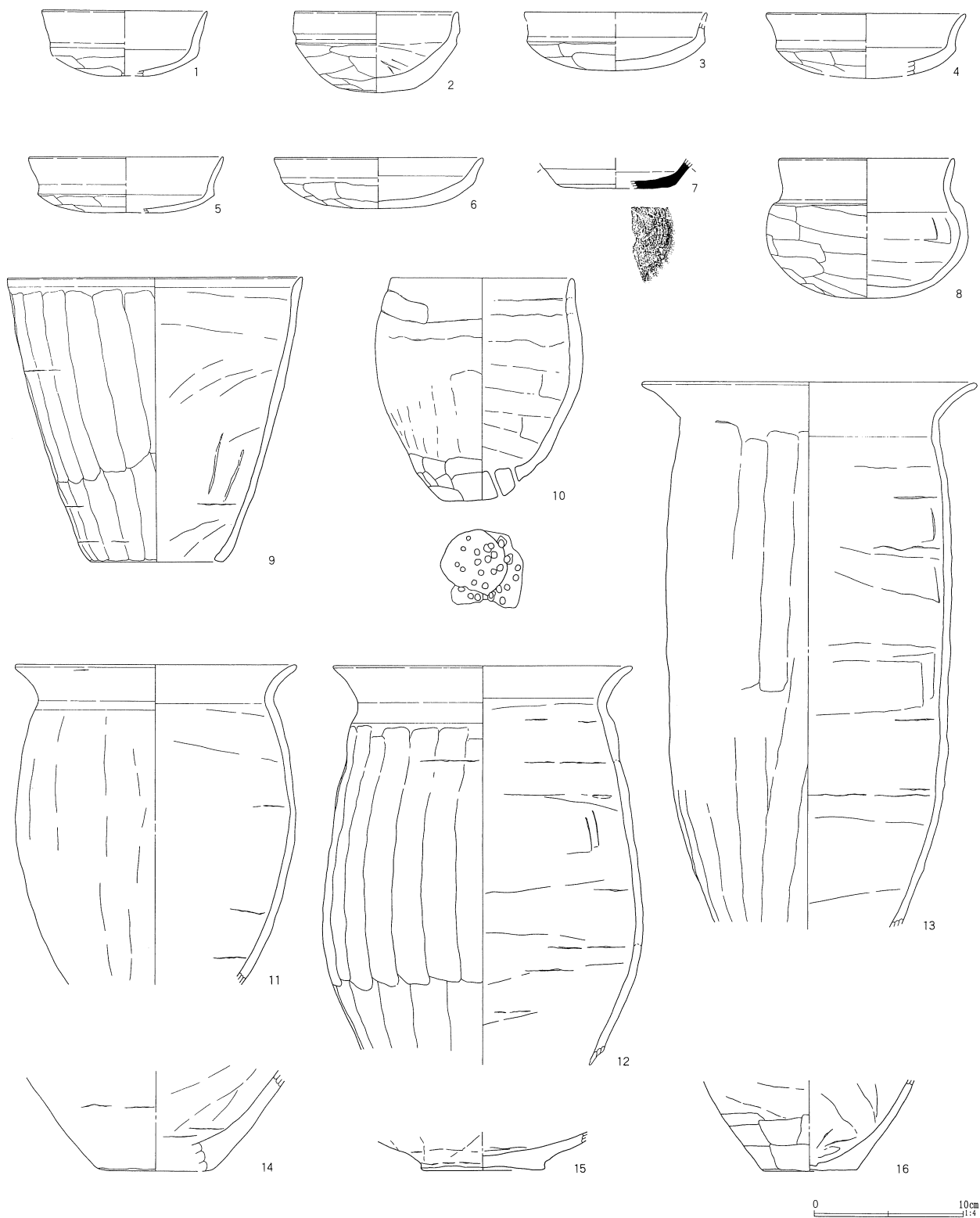
遺物は、カマド周辺部から住居跡中央部にかけて多く出土した。接合率も良く、図示可能な個体数も多かった。また、8世紀代の須恵器片も含まれていたが、重複する住居跡からの混入と考えられる。図示可能な遺物は、土師器坏6・小型壺1・甔2・甕6、須恵器坏1点であった。

このうち7の須恵器は、重複する住居跡からの混入と考えられる。

1~4は貯蔵穴から出土した。10の甔は多孔式で、底部のみでなく、胴部下端まで孔が及んでいた。



第49図 第278号住居跡



第50図 第278号住居跡出土遺物

第278号住居跡出土遺物観察表 (第50図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.0)	4.4		BEJL	普通	灰褐	45	床	磨耗著しい
2	土師坏	(11.0)	5.5	5.0	BEJL	普通	にぶい橙	70	床	やや磨耗

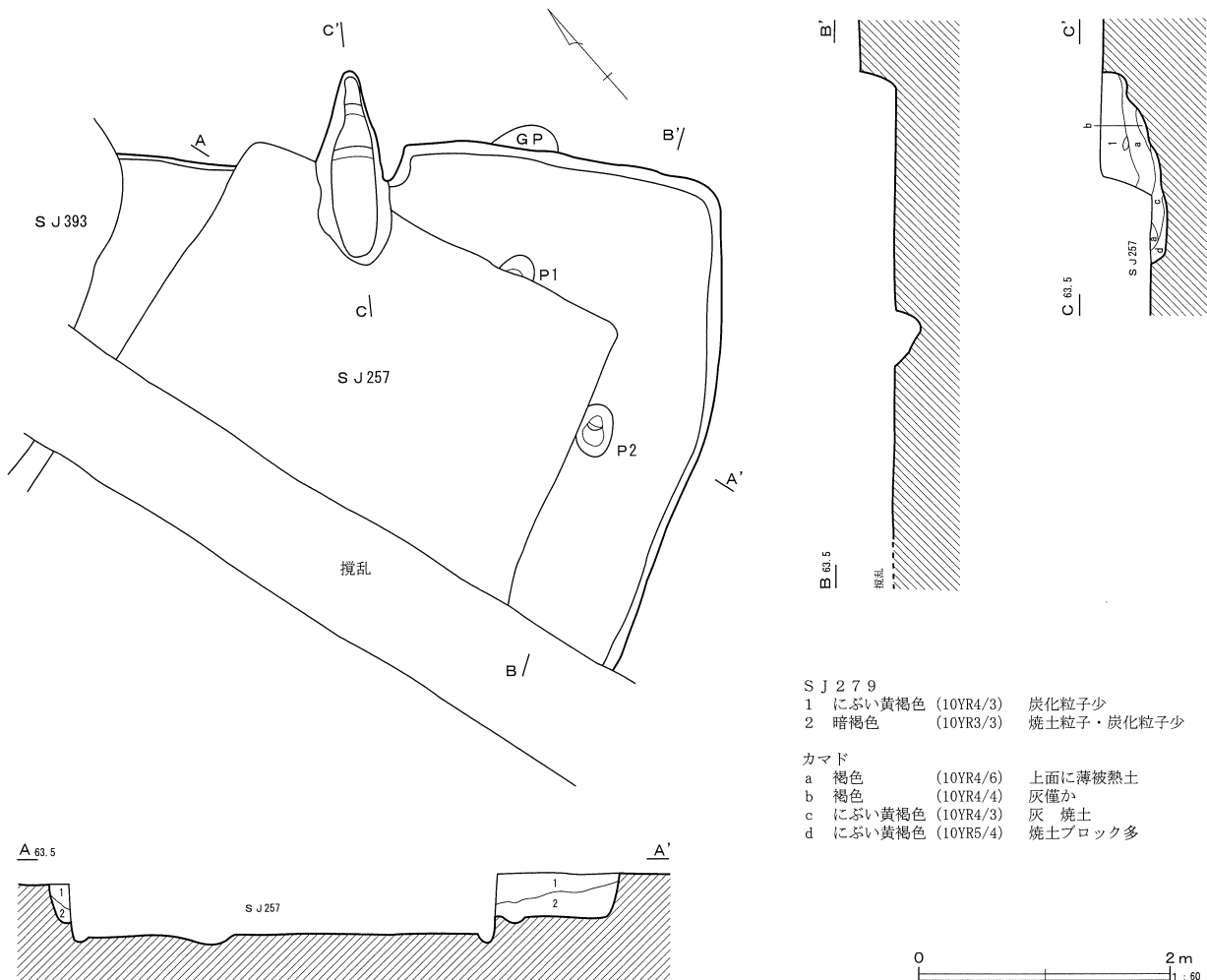
第278号住居跡出土遺物観察表（第50図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
3	土師坏		3.3		B J L	普通	褐灰	40	貯蔵穴	やや磨耗
4	土師坏	(13.4)	4.2		B J	普通	灰褐	20	貯蔵穴・B区	やや磨耗
5	土師坏	(13.0)	3.7		B D E J	不良	橙	20	床	やや磨耗
6	土師坏	(14.0)	3.4		A B E G J	不良	褐灰	25	+3cm	磨耗著しい
7	須恵坏		1.9	(8.0)	B F J L	良好	灰	20	A区	産地不明 体部下端・底部回転ヘラケズリ
8	土師壺	(11.6)	9.5		B J L	普通	にぶい橙	40	床	やや磨耗
9	土師甑	(20.0)	19.1	(9.0)	B C J L	不良	にぶい褐	80	-3cm	歪みあり
10	土師甑	12.2	14.9	4.5	A B D E J L	良好	浅黄橙	95	+5cm	底部・胴部下端部分に3~5mmの孔
11	土師甗	(19.0)	21.5		B E J L	不良	明褐	40	床	磨耗著しい
12	土師甗	(20.2)	26.8		B C E J L	不良	にぶい橙	40	床	
13	土師甗	(22.4)	36.6		B C E J L	不良	褐	40	-3cm	磨耗著しい
14	土師甗		6.8	(8.0)	B J L	普通	灰褐	80	+5cm	内面帯状に有機物付着 外面磨耗著しい
15	土師甗		2.6	8.4	B C J L	普通	灰褐	70	床	
16	土師甗		6.1	6.4	B C J L	不良	褐	80	-3cm	

第279号住居跡（第51・52図）

M-20・21グリッドに位置する。住居跡の中央を第257号住居跡に、北側を第393号住居跡に切られ、

西側は攪乱で壊される。用地の関係で2回に分けて調査された。攪乱の西側は検出できなかった。検出された規模は、北東壁4.88m、南東壁3.92mで、深



第51図 第279号住居跡

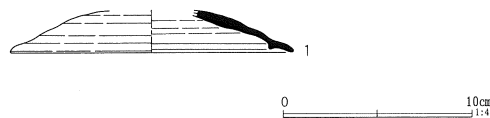
さは0.34～0.45mである。主軸方位はN-55°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北東壁に設置される。左袖周辺は第257号住居跡によって壊されていた。燃烧部は床面を20cm程掘り込み、段を持って煙道部へ続く。煙道部にも段が見られた。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは11cm、17cmである。

遺物は、覆土から土師器坏・甕の破片が少量出土

したが、図示可能な遺物は、須恵器蓋1点のみであるが、本住居跡を切る第257号住居跡からは、古墳時代後期の遺物が出土しており、本住居跡に伴う遺物とは考えにくい。重複する他の遺構・攪乱からの混入と思われる。



第52図 第279号住居跡出土遺物

第279号住居跡出土遺物観察表（第52図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵蓋	(15.0)	2.2		E J L	不良	にぶい橙	25	覆土	末野産 酸化焰焼成

第389号住居跡（第53・54図）

K・L-20グリッドに位置する。第396・510・519号住居跡に切られ、第399・400号住居跡を切る。調査時に平面プランが不明瞭で、周辺遺構と同時に調査したため検出できなかった部分がある。平面形は長方形で、規模は東西が4.30m、南北は4.9m前後と考えられる。深さは0.26～0.40mである。主軸方位は北東壁でN-30°-Wを指す。

床面は平坦だが、西側が低くなっている。壁は垂直に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は検出された部分では全周し、幅10～20cm、深さ1～3cmである。

遺物は覆土から土師器・須恵器の破片が出土したが、小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器坏1、土師器坏1・甕1・土錘1点であった。

1は末野産の須恵器坏で、底部の破片である。底部は全面ヘラ削り調整が施されていた。

第399号住居跡（第53・55図）

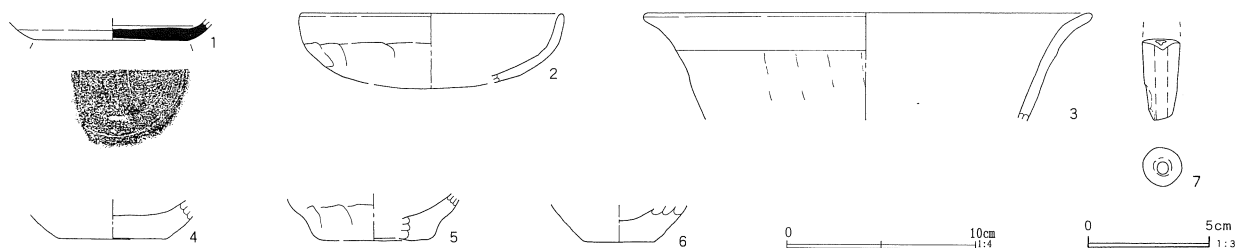
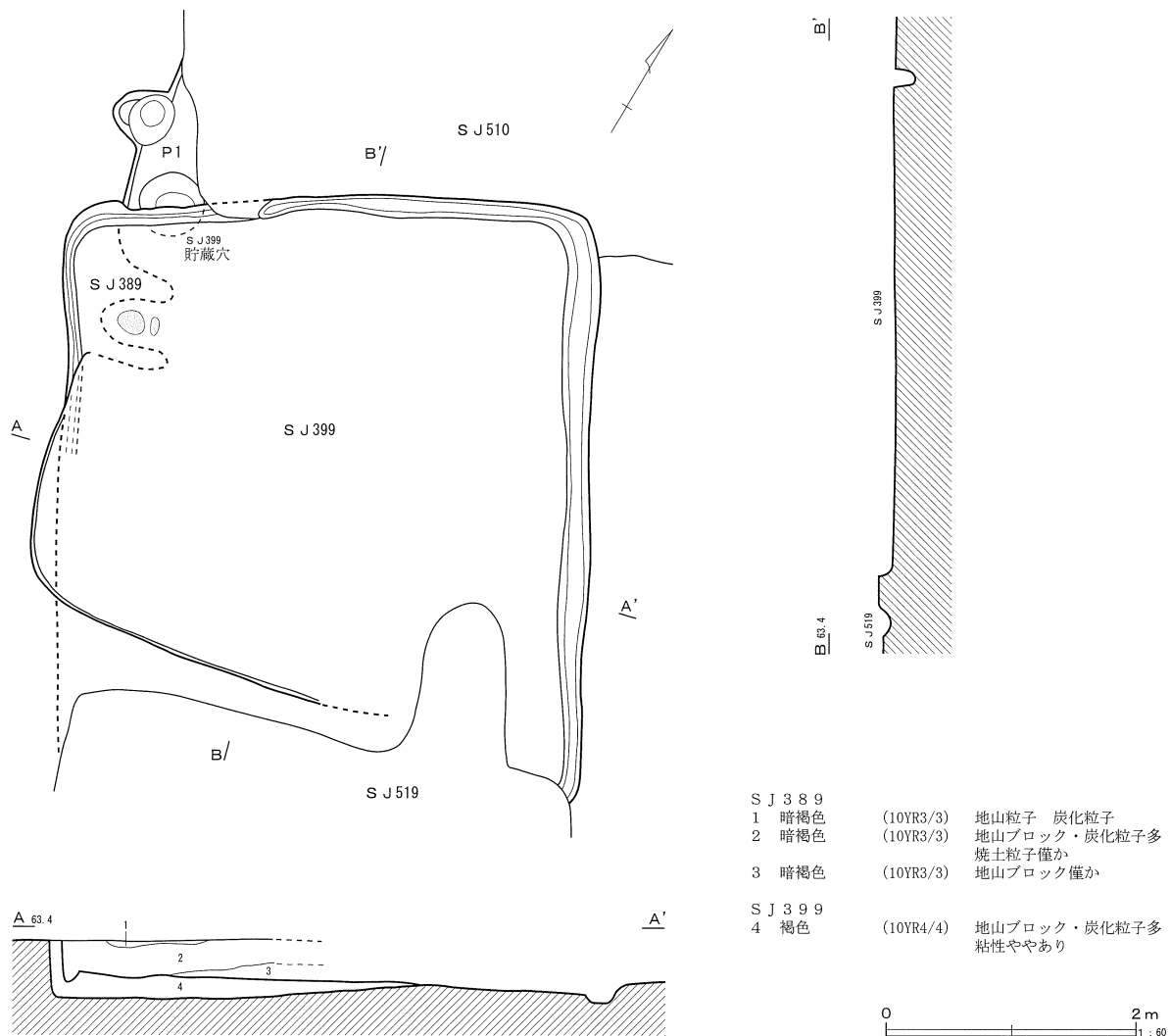
K・L-20グリッドに位置する。第389・396・510・519・520号住居跡に切られる。第397・398号住居跡との関係は不明である。第389号住居跡同様、周辺遺構と同時に調査した。検出された規模は、西壁4.35m、南壁2.60m、深さ0.36～0.46mである。主軸方位はN-110°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。覆土は1層で短期間で埋まったか、埋められた可能性が考えられる。

カマドは西壁に設置される。第389号住居跡によって削られていたが、床面に焼土の痕跡が検出されカマド跡と判断した。貯蔵穴はカマド右に設けられていたが南半を第389号住居跡によって削られていた。径50cm前後の円形と思われ、深さは42cmである。ピットは1本検出され、西壁からやや飛び出す形で検出された。深さは44cmである。

遺物は、覆土・貯蔵穴から、土師器坏・甕の破片が少量出土したが、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・高坏1・甕1点であった。このうち1・3・4は、貯蔵穴から出土した。

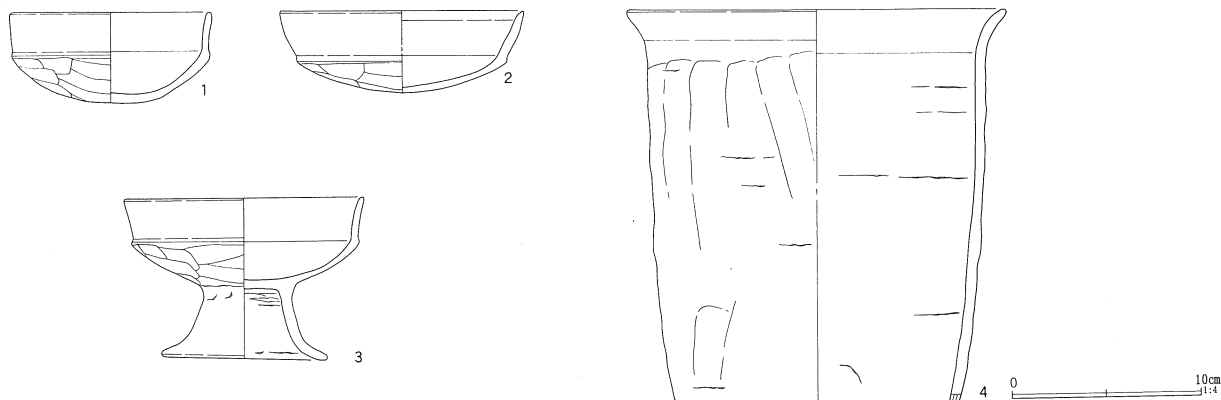


第389号住居跡出土遺物観察表 (第54図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏		1.2	8.0	A H J L	普通	明赤褐	45	覆土	末野産 底部全面回転ヘラケズリ
2	土師坏	(13.8)	3.6		D E J	普通	橙	25	覆土	
3	土師甎	23.8	5.7		B E J L	不良	にぶい黄橙	20	覆土	
4	土師甎		2.1	(5.6)	A B E J	不良	にぶい赤褐	80	覆土	二次焼成
5	土師甎		2.5	5.9	B E F J L	普通	赤褐	55	覆土	二次焼成
6	土師甎		2.0	3.8	B D E J	普通	明褐	65	覆土	

第389号住居跡出土土錘観察表（第54図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
7	(3.30)	1.50	0.50	6.23	B a III	C	橙	40	



第55図 第399号住居跡出土遺物

第399号住居跡出土遺物観察表（第55図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	10.6	4.8		BEJ	不良	にぶい黄橙	70	貯蔵穴	やや磨耗
2	土師坏	(13.0)	4.3		DEJ	不良	にぶい橙	30	覆土	
3	土師高坏	12.6	8.7	8.8	EJL	不良	橙	90	貯蔵穴	磨耗著しい
4	土師甗	(20.0)	20.6		ABCEJL	不良	にぶい橙	20	貯蔵穴	磨耗著しい

第390号住居跡（第56・57図）

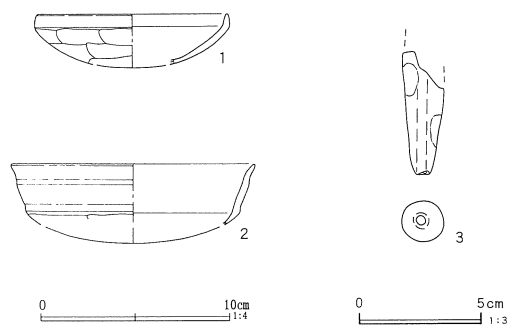
K-19・20グリッドに位置する。南半を第510号住居跡に切れ、第391・499・511号住居跡を切る。第391号住居跡と同時に調査したため床面は検出できず、西壁は土層断面から復元した。東壁は第391号住居跡と同位置またはやや内側にあったと推定される。検出された規模は、東西2.86m、南北2.06mで、深さは0.12~0.20mである。主軸方位は北壁でN-67°-Eを指す。

カマドは検出されなかった。壁溝は北壁で検出され、幅8~10cm、深さ12~28cmである。ピットは2

本検出され、P1・P2の深さは11cm、7cmである。

遺物は、覆土中から土師器片が少量出土した。

図示可能な遺物は土師器坏2、土錘1点であった。



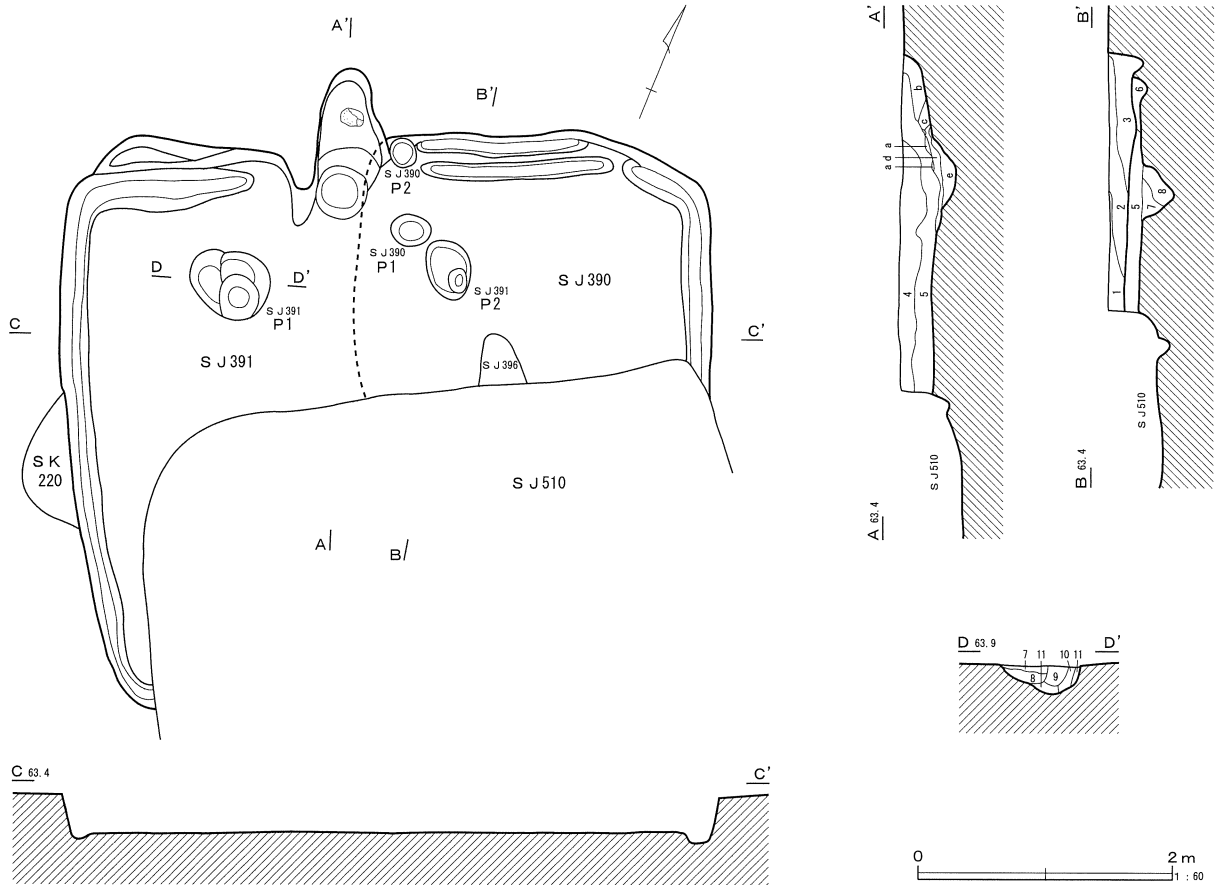
第56図 第390号住居跡出土遺物

第390号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(10.0)	2.8		BDJ	不良	橙	15	覆土	磨耗著しい
2	土師坏	(13.0)	3.2		BDJ	不良	灰黄褐	15	覆土	やや磨耗

第390号住居跡出土土錘観察表（第56図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	(4.80)	1.65	0.40	10.01	B a II	A	にぶい黄褐	50	



- | | | | | | |
|-----------------|---------------------|--|---------------------------|----------------------|--|
| S J 390 | | | 9 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子 炭化粒子 | | |
| 1 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック | | 10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 柱痕 炭化粒子僅か 粘性あり しまりあり | |
| 2 黒褐色 (10YR3/2) | 地山ブロック・炭化粒子多 焼土ブロック | | 11 黒褐色 (10YR3/2) | 充填土 炭化粒子僅か 粘性強い | |
| 3 暗褐色 (10YR3/4) | 地山ブロック多 炭化粒子 焼土粒子 | | S J 391 カマド | | |
| S J 391 | | | a 暗褐色 (10YR3/4) | 焼土ブロック多 粘性強い しまりあり | |
| 4 黒褐色 (10YR3/2) | 焼土粒子・炭化粒子僅か 白色微粒子多 | | b 黒褐色 (10YR3/2) | 焼土粒子僅か しまりあり | |
| 5 暗褐色 (10YR3/3) | 焼土粒子 炭化粒子 しまりあり | | c にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化粒子僅か しまりあり | |
| 6 黒褐色 (10YR3/2) | 粘性あり 固くしまる | | d 黒褐色 (10YR2/3) | 焼土粒子僅か 粘性強い しまりなし | |
| 7 暗褐色 (10YR3/4) | 焼土粒子 炭化粒子 | | e 褐色 (10YR4/4) | 地山土主体 焼土粒子・炭化粒子僅か | |
| 8 黒褐色 (10YR3/2) | 炭化粒子 粘性あり しまりあり | | | | |

第57図 第390・391号住居跡

第391号住居跡 (第57・58図)

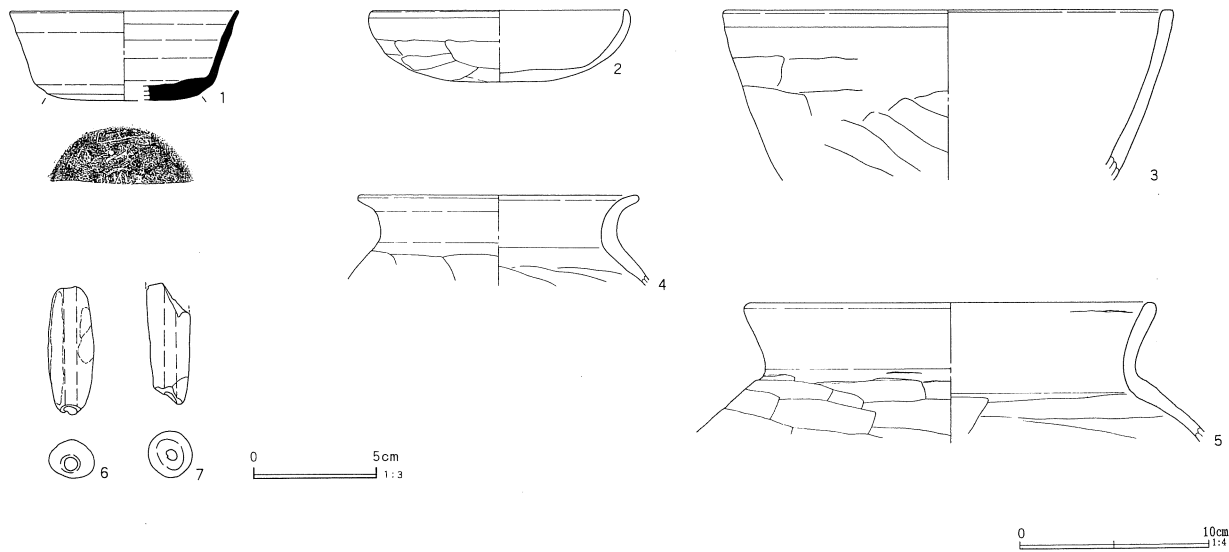
K-19・20グリッドに位置する。第390・396・510号住居跡・第220号土坑と重複し、その何れより古い。平面形は東西に長い長方形で、長軸5.21m、短軸4.52m、深さは0.25~0.30mである。主軸方位はN-21°-Wを指す。

床面はほぼ平坦だが、カマド前面がやや低くなる。壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁中央よりやや西に設置される。燃焼

部は15cm程度掘り込まれていた。右袖は検出できなかった。壁溝は北東コーナーで僅かに途切れるがほぼ全周する。幅12~34cm、深さ3~5cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは37cm、26cmである。

遺物は、土師器環・須恵器環の破片が出土した。特に土師器甕の破片が多かったが、殆ど接合しなかった。図示可能な遺物は、須恵器環1、土師器環1・鉢1・甕2、土錘2点であった。



第58図 第391号住居跡出土遺物

第391号住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	(12.0)	4.8	8.2	J L	良好	灰	40	覆土	末野産 底部手持ちヘラケズリ
2	土師坏	(13.6)	3.8		A B D J	普通	にぶい橙	60	覆土	やや磨耗
3	土師鉢	(24.0)	9.1		A B D E J	不良	橙	15	カマド	磨耗著しい
4	土師甕	(15.0)	4.8		A B D J L	普通	にぶい赤褐	15	覆土	
5	土師甕	(21.2)	7.4		A B E J L	普通	褐	25	覆土	

第391号住居跡出土土錘観察表（第58図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	5.05	1.80	0.50	10.16	B a V	B	にぶい橙	100	カマド
7	4.80	1.75	0.40	11.89	—	C	にぶい橙	50	

第392号住居跡（第59・60図）

J-19・20グリッドに位置する。第401・402・501・503・504・511号住居跡と重複し、その何れよりも新しい。用地の関係で2回に分けて調査された。平面形は南北に長い長方形で、長軸4.12m、短軸3.46m、深さは0.18~0.22mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

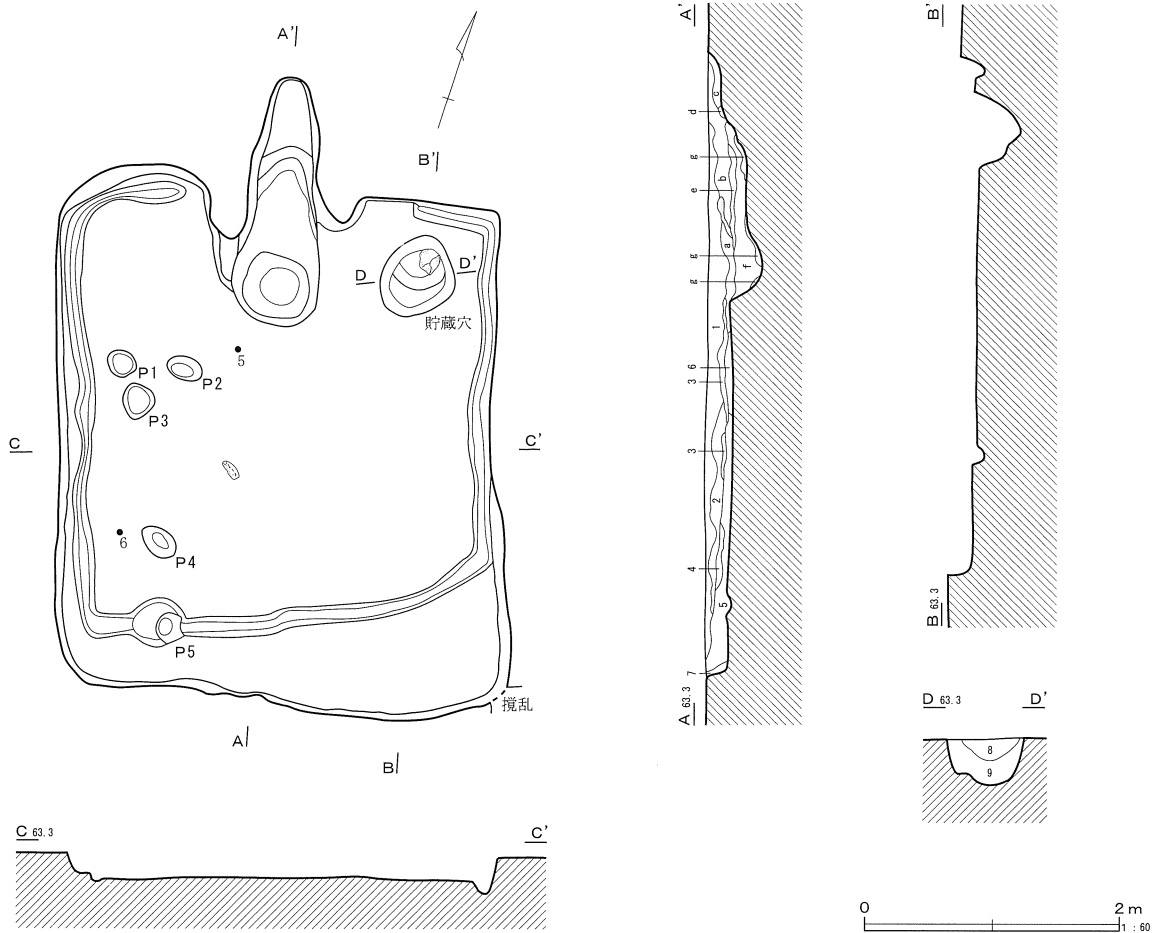
カマドは北壁中央に設置される。燃烧部は25cm程掘り込み、段を持って煙道部へ続く。断面に明瞭な焼土層が観察された。貯蔵穴は北東コーナー近くに

設けられ、76×60cmの楕円形で、深さは39cmである。壁溝は全周し、幅7~18cm、深さ2~10cmである。南壁で壁溝が大きく壁の内側を回っていたが、土層断面からは拡張等の判断は出来なかった。ピットは5本検出され、P1~P5の深さは7cm、6cm、6cm、11cm、5cmである。

遺物は、覆土中から古墳時代後期の土師器が多く出土したが、小片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏3・高坏1、白玉2、耳環1、土錘3点であった。

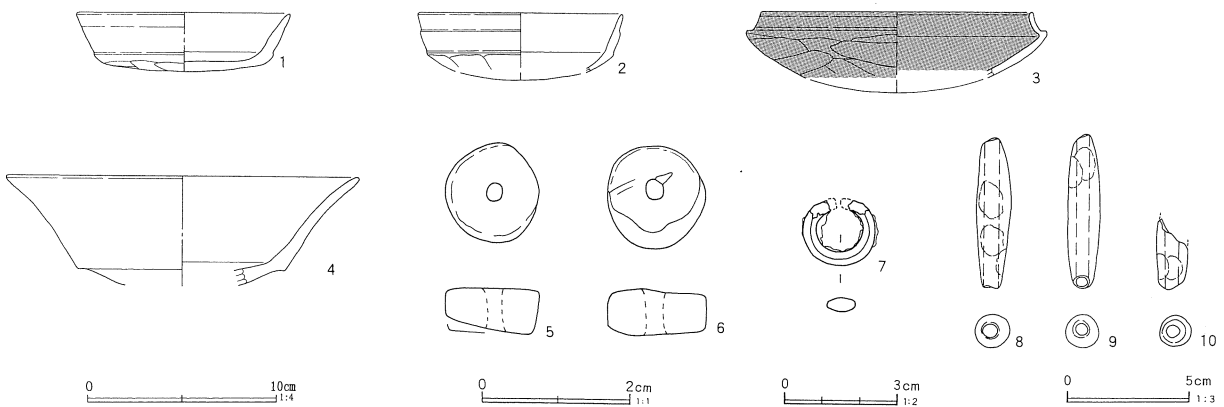
白玉は2点とも滑石製で、直径1.3cm前後とやや大き目である。



- S J 3 9 2
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 焼土粒子・炭化粒子多 しまりなし 粘性あり
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 1層に似るがしまりあり
 - 3 黒褐色 (10YR2/2) 炭化物層 しまりなし 粘性あり
 - 4 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子僅か しまりあり
 - 5 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子僅か 粘性強い しまりあり
 - 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質 焼土粒子・炭化粒子僅か
 - 7 褐色 (10YR4/6) 粘性強く しまりあり
 - 8 褐色 (10YR4/4) 焼土粒子・炭化粒子少
 - 9 灰黄褐色 (10YR4/2) 地山土多 炭化粒子少

- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/4) 1層に似るがしまり強い 焼土粒子多
 - b 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子・炭化粒子
 - c にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山土多 固くしまる
 - d 褐色 (10YR4/4) 砂質 地山土主体
 - e 黒褐色 (10YR2/3) 炭化粒子多 焼土粒子僅か 粘性あり
 - f 暗褐色 (10YR3/4) 焼土粒子・炭化粒子僅か 地山土多 粘性あり
 - g にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質 炭化粒子多

第59図 第392号住居跡



第60図 第392号住居跡出土遺物

第392号住居跡出土遺物観察表（第60図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.4)	3.2		B D E J	普通	灰褐	60	B区	
2	土師坏	(11.0)	3.1		B E J	普通	にぶい橙	20	覆土	磨耗著しい
3	土師坏	(14.4)	3.5		B E J	普通	褐灰	30	覆土	内外面黒色処理
4	土師高坏	(18.8)	5.9		B E J L	不良	にぶい橙	40	覆土	磨耗著しい
5	白玉	直径1.25cm	厚さ0.60cm	孔径0.20cm	重さ1.42g			90	床	滑石製 一部欠損
6	白玉	直径1.30cm	厚さ0.60cm	孔径0.25cm	重さ1.91g			95	床	滑石製 一部欠損 使用痕あり
7	耳環	直径1.90cm	厚さ0.40cm	幅0.70cm	重さ4.96g				床	銅地に鍍銀(?)を施している

第392号住居跡出土土錘観察表（第60図）

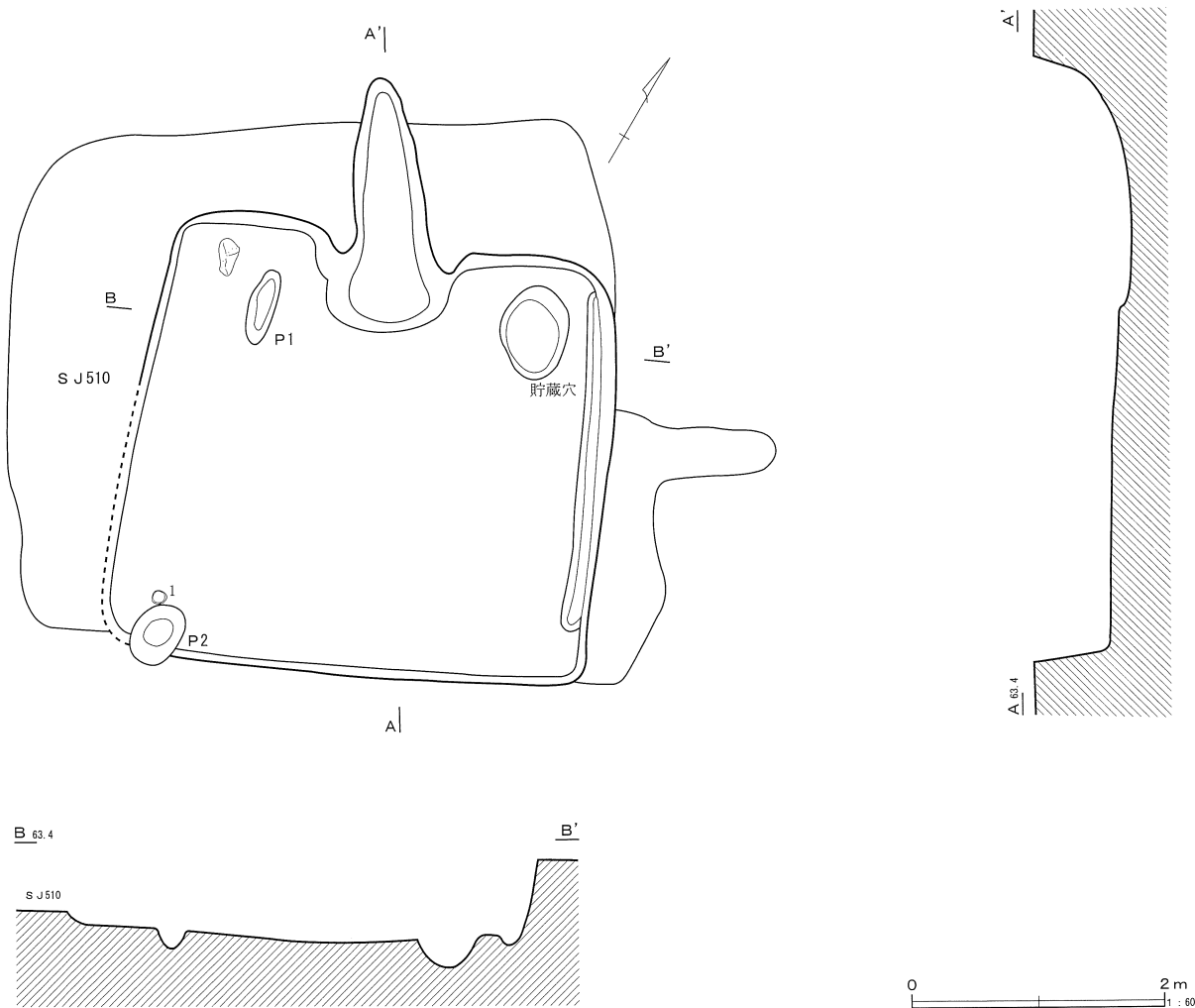
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	5.95	1.40	0.55	9.14	B a IV	B	褐灰	100	
9	6.05	1.30	0.50	8.44	B a IV	C	灰黄褐	100	
10	(2.80)	1.25	0.55	2.98	—	C	橙	—	

第396号住居跡（第61・62図）

切られ、第389・390・391・399・510号住居跡を切る。

K-19・20グリッドに位置する。第508号住居跡に

第397号住居跡との関係は不明である。西壁は検出

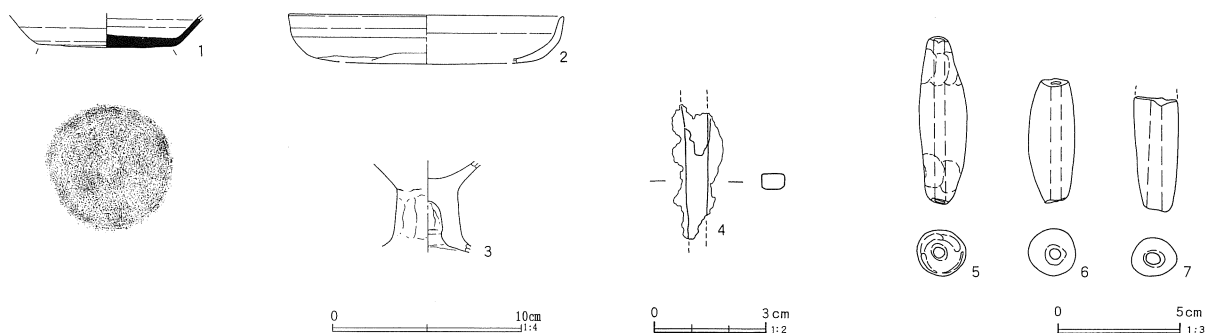


第61図 第396号住居跡

できなかつた。平面形は正方形に近く、東西3.85m、南北3.58m、深さ0.58～0.68mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。覆土の観察は出来なかつた。

カマドは北壁中央に設置される。燃焼部は10cm程度掘り込み、緩やかに立ち上がって煙道部となる。貯蔵穴は北東コーナー近くに設けられ、74×40cmの楕円形で、深さは26cmである。壁溝は東壁で検出され、幅20～24cm、深さ8～15cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは14cm、13cmである。



第62図 第396号住居跡出土遺物

第396号住居跡出土遺物観察表（第62図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	(14.6)	1.8	7.0	B I J L	良好	灰	90	+3cm	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ やや磨耗 やや磨耗 角棒状を呈した鉄片
2	土師坏		2.6		A B D J	普通	橙	20	覆土	
3	土師高坏		4.8		B C E J L	普通	橙	80	覆土	
4	不明鉄製品	現存長3.55cm 幅0.60cm 厚さ0.45cm 重さ4.20g						覆土		

第396号住居跡出土土錘観察表（第62図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	6.60	1.90	0.45	20.82	C a III	C	褐灰	100	
6	4.90	1.85	0.40	16.17	B a V	A	にぶい橙	95	
7	4.50	1.80	0.55	11.85	—	C	にぶい黄橙	50	

第401号住居跡（第63図）

J-19グリッドに位置する。第392・402・504号住居跡・第208号土坑に切られ、第219号住居跡を切る。北壁5.76mと西壁3.57mを検出したのみで、不明瞭な点が多い。深さは0～0.05mである。主軸方位は

遺物は、覆土中から土師器坏・高坏・甕等の破片が出土したが、殆ど接合しなかつた。

図示可能な遺物は、須恵器坏1、土師器坏1・高坏1、不明鉄製品1、土錘3点であった。

1は、南比企産の須恵器坏で、底部は全面回転ヘラ削り調整が施されていた。住居跡南西コーナー付近から出土した。

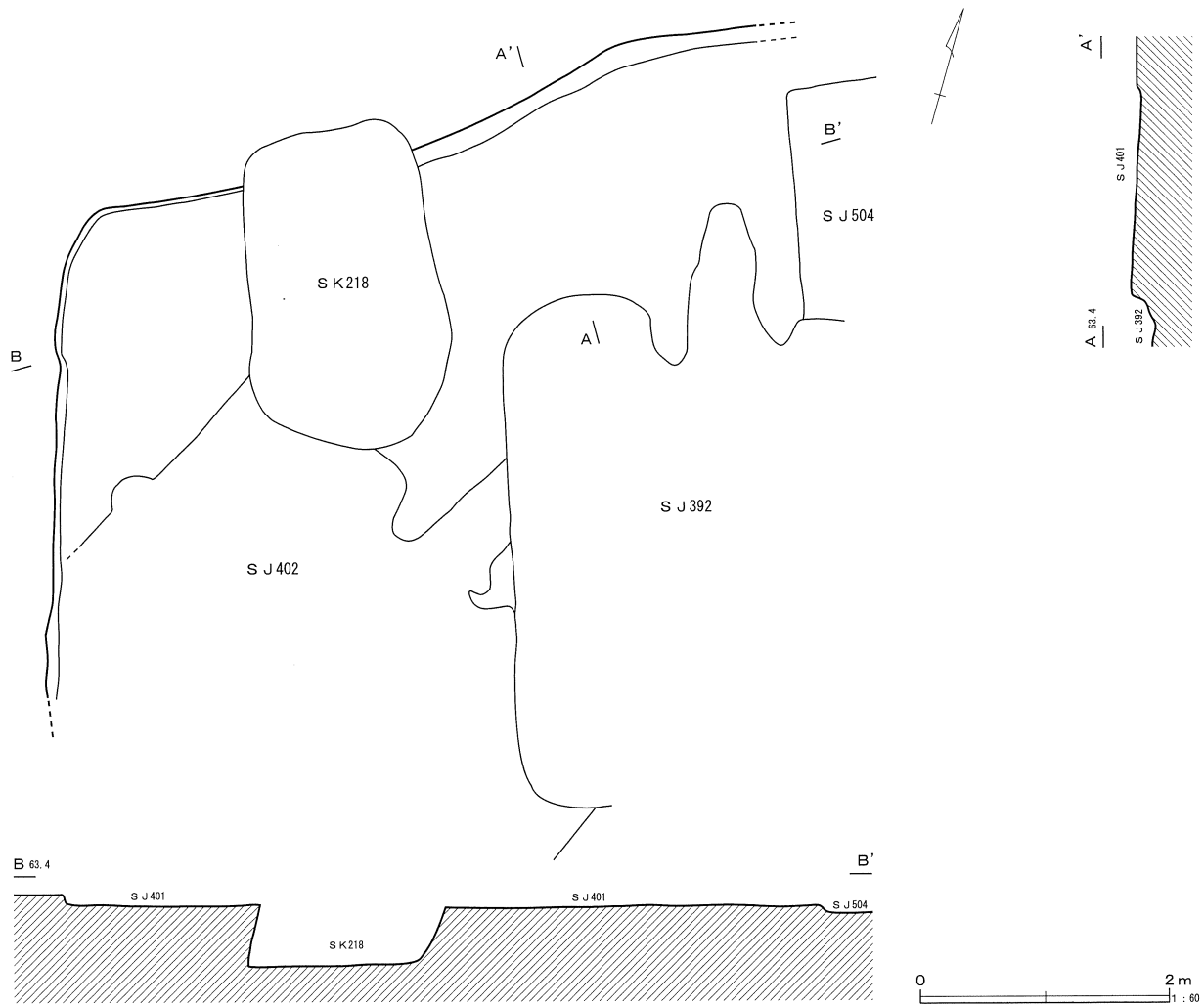
4は、器種不明の鉄製品である。断面が長方形の角棒状となる。全体に錆が著しく、原型をとどめていない。

北壁でN-58°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開きながら立ちあがる。覆土の観察は出来なかつた。

カマド、貯蔵穴等は検出できなかつた。

遺物は、出土しなかつた。



第63図 第401号住居跡

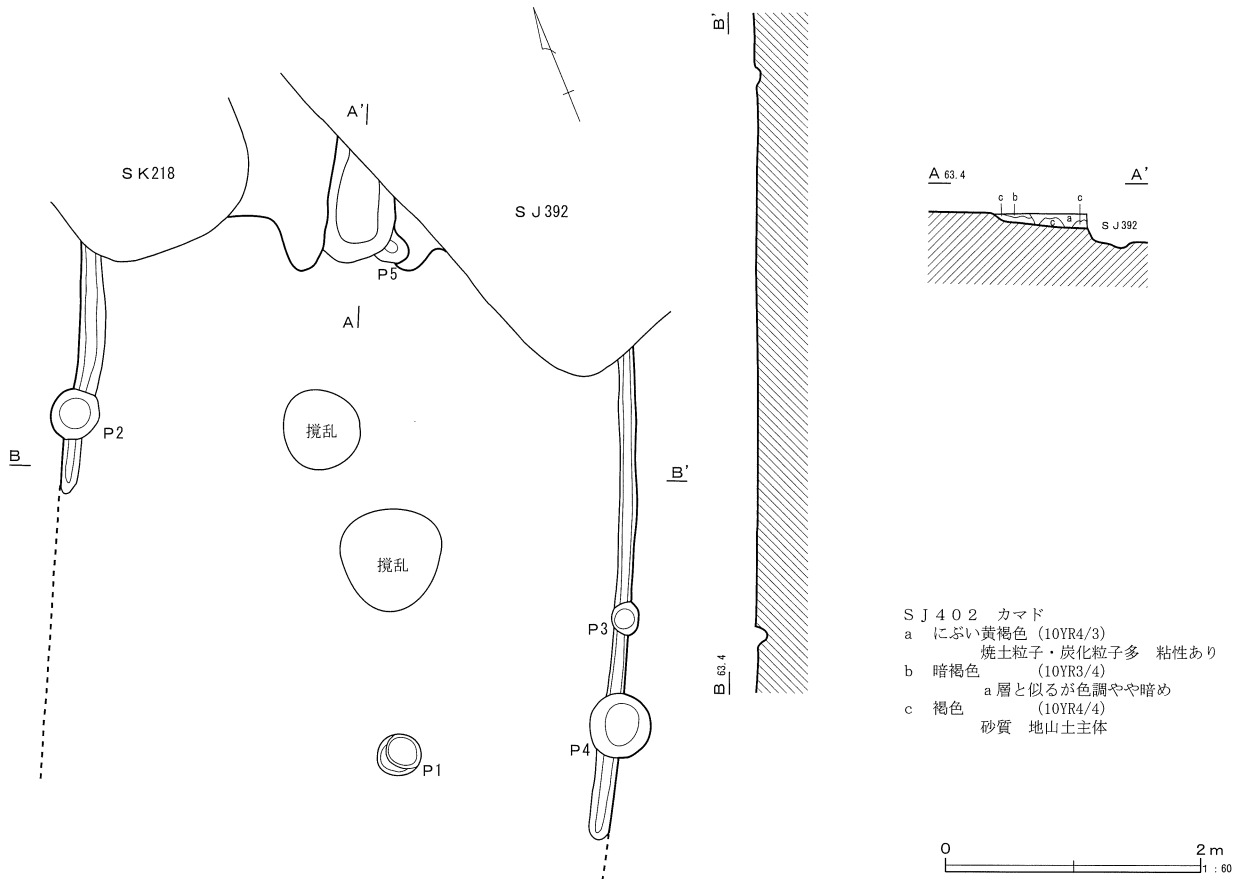
第402号住居跡（第64図）

J・K-19グリッドに位置する。第392号住居跡・第218号土坑に切られ、第401号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。南壁と西壁の一部は検出できなかった。平面形は南北に長い長方形で、検出された規模は長軸が4.82m、短軸4.58mである。深さは0~0.03mと極めて浅い。主軸方位はN-25°-Eを指す。

床面は平坦で、壁はほとんど検出できなかった。深度がないため覆土の状態は不明である。

カマドは北壁中央に設置される。煙道部先端を第392号住居跡に壊される。燃烧部は10cm程度掘り込み、そのまま煙道部となるようである。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁と西壁で検出され、幅12~20cm、深さ4~13cmである。ピットは5本検出され、P1~P5の深さは26cm、31cm、9cm、20cm、4cmである。

遺物は、カマドから1点の土師器甕片が出土したが、図示できなかった。



第64図 第402号住居跡

第475号住居跡 (第65・66図)

I-20グリッドに位置する。第477号住居跡を切り、大半を第476号住居跡に切られていた。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.10m、短軸3.22m、深さは0.10~0.16mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは北壁中央に設置される。燃烧部は床面を10cm程掘り込み、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴は北東コーナー近くに設けられ、径約80cmの円形で、深さは35cmである。壁溝は検出されなかった。

遺物は、覆土中から、少量の須恵器杯・蓋の破片と、土師器杯・甕が出土したが、磨耗が著しく、殆ど接合しなかった。

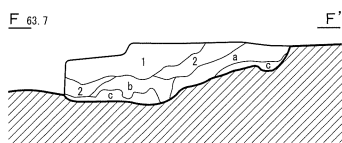
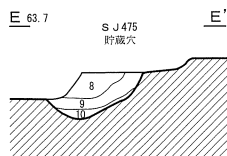
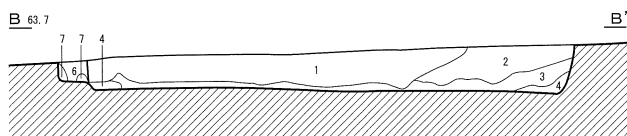
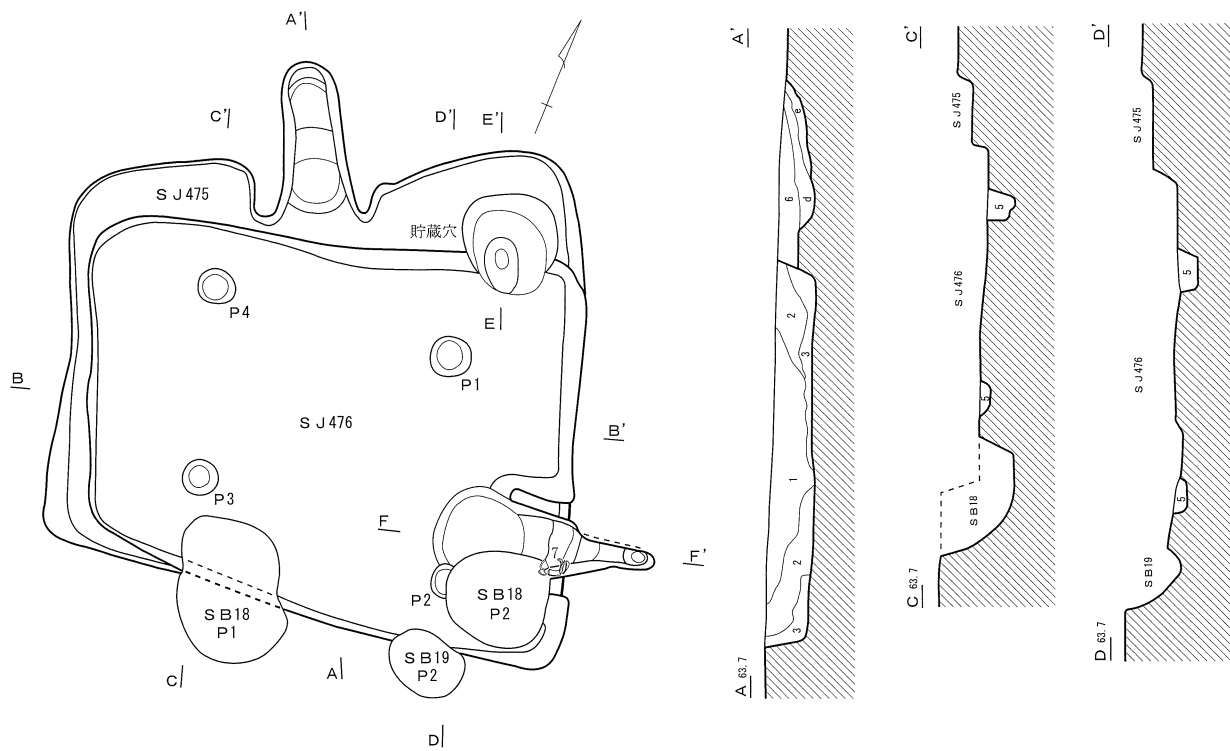
図示可能な遺物は、須恵器杯1・皿1、土師器甕1、土錘1、鉄鏝1点であった。

1は、末野産の須恵器杯と考えられる。浅身で盤状となる。底部は回転ヘラ削りされる。2は時期が異なると考えられるが、重複する第476号住居跡に属していた可能性が高い。

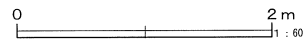
鉄鏝は、短冊形の薄片で、中央で窪む形に緩やかに反り返る。両端部、及び長辺の一部を欠損する。

第475号住居跡出土遺物観察表 (第66図)

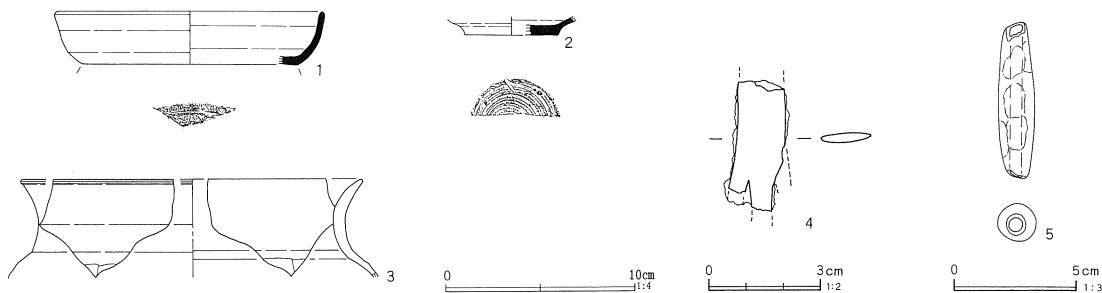
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵杯	(12.2)	2.8	11.5	A F J	良好	暗灰	10	覆土	末野産 底部回転ヘラケズリか? 産地不明 底部回転糸切
2	須恵皿		1.0	(5.0)	J L	良好	灰白	40	覆土	
3	土師甕	(18.2)	5.2		B C D E H	良好	にぶい黄橙	20	覆土	短頸腸扶両丸造柳葉式
4	鉄鏝	現存長3.50cm	幅1.50cm	厚さ0.30cm	重さ2.97g				覆土	



- S J 4 7 6
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 炭化粒子多 焼土僅か
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 基本的には1層 混有物少 地山ブロック溶混
 - 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 全体に地山溶混 大型ブロック多
 - 4 褐色 (10YR4/4) 砂質地山極多 底の溶軟化層
 - 5 暗褐色 (10YR3/4) 炭化粒子多 焼土粒子僅か
- S J 4 7 6 カマド
- a 褐色 (10YR4/4) 大型焼土ブロック
 - b 黒褐色 (10YR3/2) 焼土粒子・ブロック・炭化粒子多
 - c にぶい黄褐色 (10YR5/4) 大型粘質地山ブロック主体
- S J 4 7 5
- 6 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質 地山を全体に溶混し概ね単一的
 - 7 褐色 (10YR4/4) 地山極多 壁・底の溶軟化層
 - 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 未溶化大型地山ブロック多
 - 9 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 焼土粒子・炭化粒子多
 - 10 褐色 (10YR4/4) 砂質地山極多 底の溶軟化層
- S J 4 7 5 カマド
- d にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山・焼土ブロック主体 下部に炭化物層
 - e 暗赤褐色 (5YR3/2) 地山極多 火床面の溶軟化



第65図 第475・476号住居跡



第66図 第475号住居跡出土遺物

第475号住居跡出土土鍾観察表（第66図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	6.15	1.50	0.55	9.56	B a IV	C	浅黄橙	100	

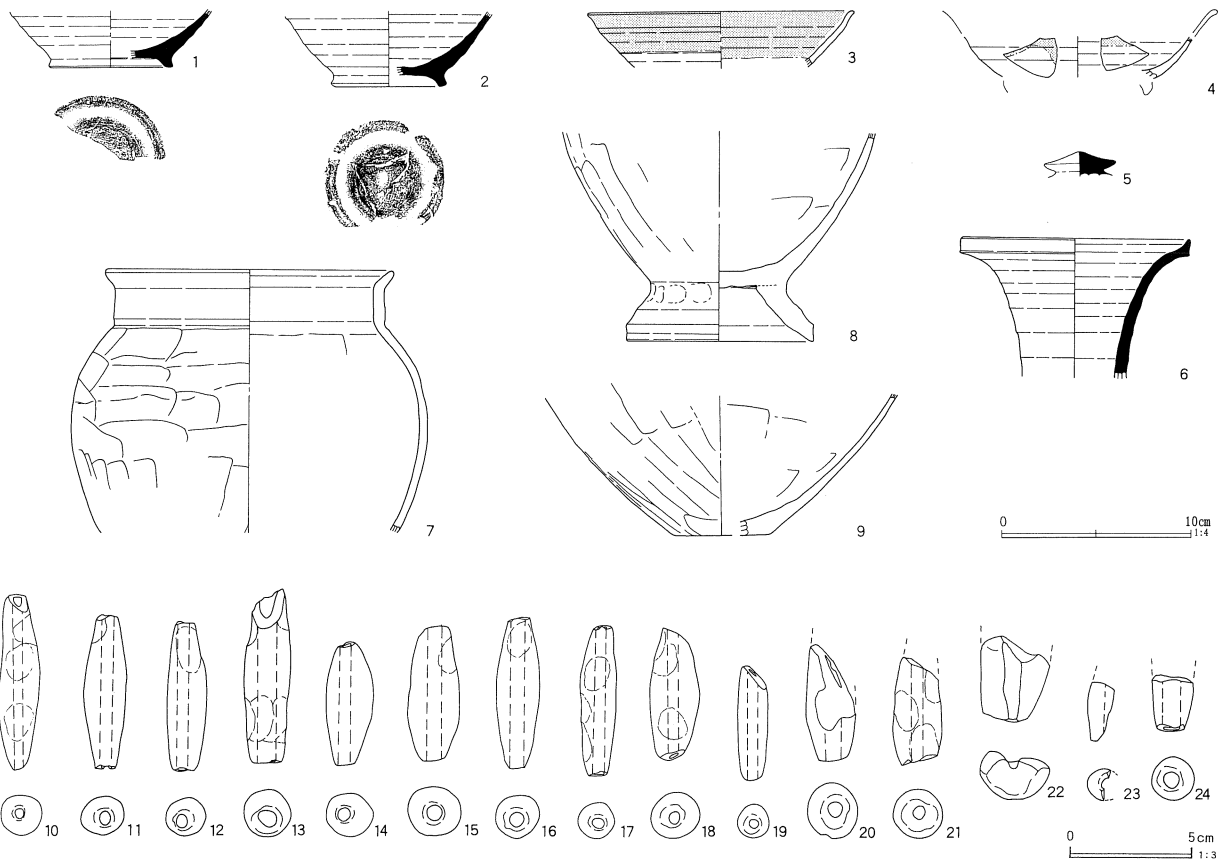
第476号住居跡（第65・67図）

I-20グリッドに位置する。第18・19号掘立柱建物跡に切られ、第475・477号住居跡を切る。平面形は東西に長い長方形で、長軸3.92m、短軸2.94m、深さは0.26~0.32mである。東壁は第475号住居跡と

同位置と考えられる。主軸方位はN-77°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁はほぼ垂直に立ちあがる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。右袖



第67図 第476号住居跡出土遺物

第476号住居跡出土遺物観察表（第67図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵高台碗		3.1	(6.4)	A B J L	良好	青灰	30	カマド	末野産
2	須恵高台碗		4.0	5.4	A D H J L	普通	灰褐	80	覆土	末野産
3	灰釉碗	(14.2)	2.9		F	良好	灰白	5	覆土	猿投産 K-90 施釉 ツケガケ
4	灰釉高台碗		2.2		B F	良好	灰白	5	覆土	猿投産 K-90 施釉 ツケガケ
5	須恵蓋		1.3		B D F	不良	灰白	90	覆土	末野産 つまみ直径3.8cm
6	須恵長頸瓶	12.1	7.4		A B D F H J L	普通	灰オリーブ	50	覆土	末野産
7	土師甕	15.1	13.8		A B E H J L	良好	にぶい黄橙	40	カマド	磨耗著しい
8	土師台付甕		10.9	(9.9)	B E J L	普通	にぶい黄橙	60	カマド	
9	土師甕		7.5	(4.9)	A B E J	良好	明赤褐	40	カマド	

は第18号掘立柱建物跡で壊されていた。燃焼部は10cm程掘り込まれ、段を持って煙道部へ続く。煙道部先端の煙出部はピット状になっていた。貯蔵穴は検出されなかった。ピットは4本検出され、P1～P4の深さは15cm、10cm、8cm、22cmである。P2以外は支柱穴と考えられる。

遺物は、カマドおよび覆土中から平安時代の土師器・須恵器の破片が多量に出土したが、小片が多く、殆ど接合しなかった。特に土師器甕の破片が多かっ

たが、図示できたものは殆どなかった。

図示可能な遺物は、須恵器高台碗2・蓋1・長頸瓶1、灰釉碗2、土師器甕2・台付甕1、土錘15点であった。

1・7～9はカマドから、他は覆土中からの出土である。須恵器は全て末野産である。

灰釉碗は、猿投産と考えられ、内外面ともハケ塗りにより施釉されていた。

第476号住居跡出土土錘観察表 (第67図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
10	6.90	1.60	0.40	15.26	B a III	B	褐灰	100	
11	6.10	1.70	0.55	12.27	B a IV	C	にぶい橙	100	
12	5.90	1.60	0.50	11.97	B a IV	C	にぶい赤褐	100	
13	6.80	1.90	0.70	20.05	B a II	C	灰黄褐	90	
14	4.90	1.90	0.50	12.98	B a V	A	にぶい褐	100	
15	5.30	2.10	0.60	18.00	B a V	C	にぶい黄橙	100	
16	5.90	1.70	0.60	13.38	B a IV	C	にぶい橙	90	
17	5.90	1.45	0.50	10.34	B a IV	C	にぶい橙	100	
18	5.20	1.90	0.50	15.01	B a V	C	橙	100	
19	4.50	1.40	0.35	6.77	B a V	C	にぶい黄橙	100	
20	(4.60)	2.20	0.60	15.59	B a III	C	にぶい赤褐	50	
21	(4.20)	1.90	0.60	15.32	—	C	にぶい黄橙	—	
22	(3.40)	2.80	1.00	12.30	—	C	橙	—	
23	(2.30)	1.40	0.50	1.50	—	A	にぶい黄橙	—	
24	(2.20)	1.75	0.60	4.88	B a III	C	褐灰	30	

第477号住居跡 (第68・69図)

I-20・21グリッドに位置する。第475・476号住居跡・第18・19・20号掘立柱建物跡と重複し、その何れよりも古い。平面形は正方形に近く、南北4.56mで、東西は4.4m前後と考えられる。深さは0.15～0.20mである。主軸方位はN-71°-Eを指す。

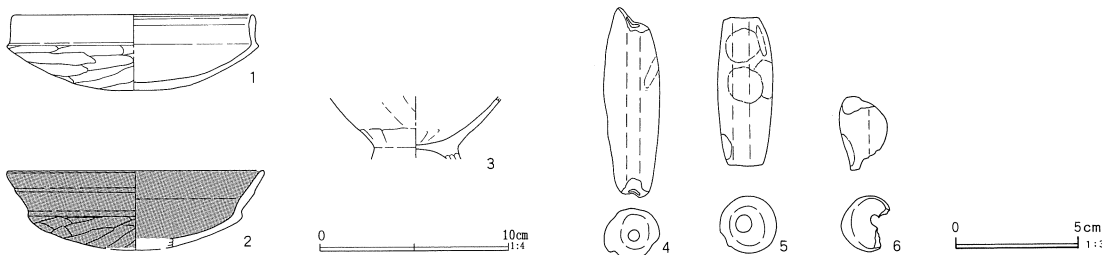
床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土は2層で埋め戻されたと考えられる。

カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃焼

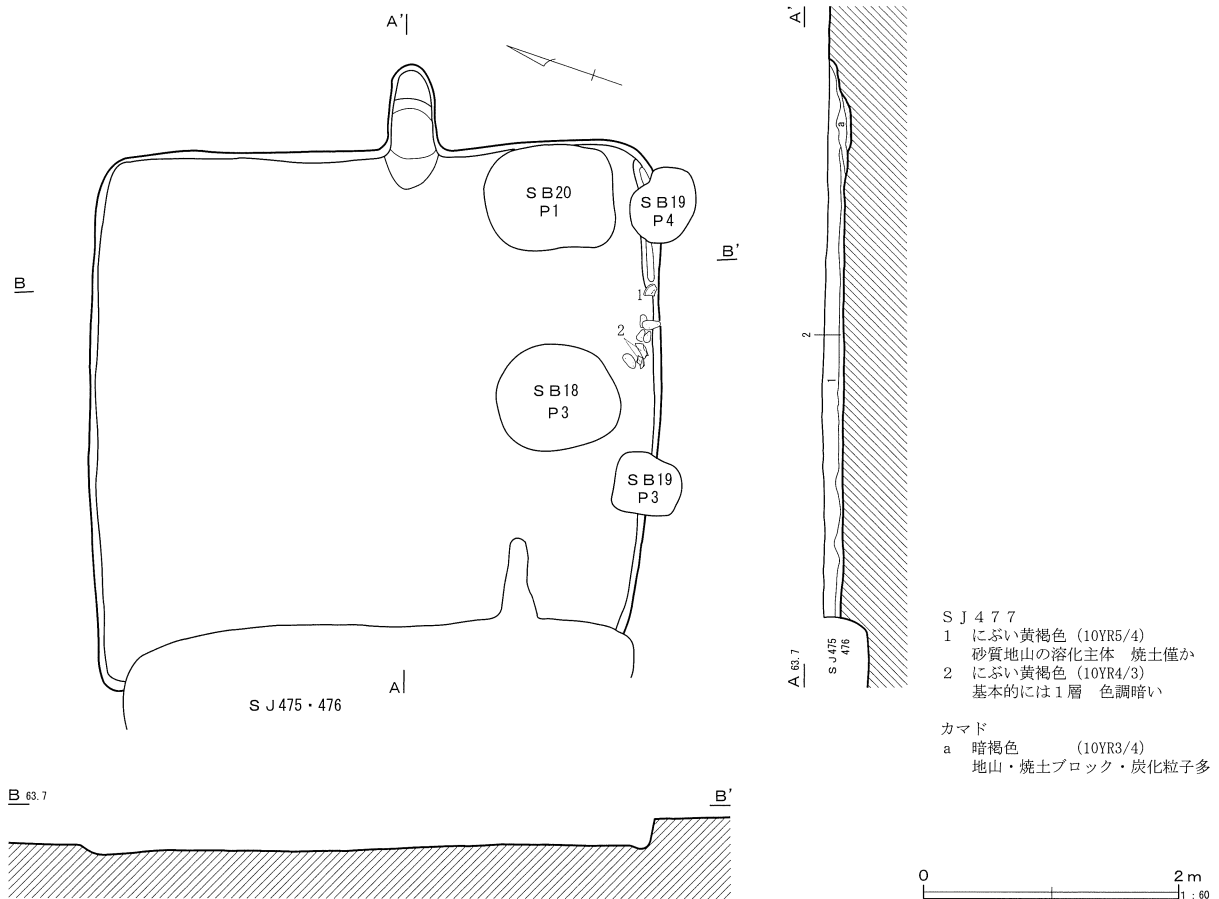
部は5cm程掘り込まれ、段を持って煙道部へ続く。最下層に明瞭な焼土層が確認された。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南東コーナー近くでのみ検出され、幅12～16cm、深さ3～5cmである。

遺物は、土師器坏・甕の破片が少量出土した。図示可能な遺物は、土師器坏2・台付甕1、土錘3点であった。

1・2は住居跡南壁際で、床面からやや浮いた状態で出土した。



第68図 第477号住居跡出土遺物



第69図 第477号住居跡

第477号住居跡出土遺物観察表 (第68図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.6)	4.0		B D E J	良好	橙	70	+6cm	外面黒斑あり
2	土師坏	13.4	4.1		A B J	良好	橙	80	+12cm	内外面黒色処理
3	土師台付甕		3.3		B D E F G H J	普通	橙	40	覆土	

第477号住居跡出土土錘観察表 (第68図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	7.40	2.20	0.50	31.03	B a III	C	灰黄褐	95	貯蔵穴
5	5.90	2.20	0.70	28.45	B b IV	B	黒褐	100	
6	(2.90)	(2.60)	(0.40)	8.12	—	B	にぶい赤褐	—	

第478号住居跡 (第70・71図)

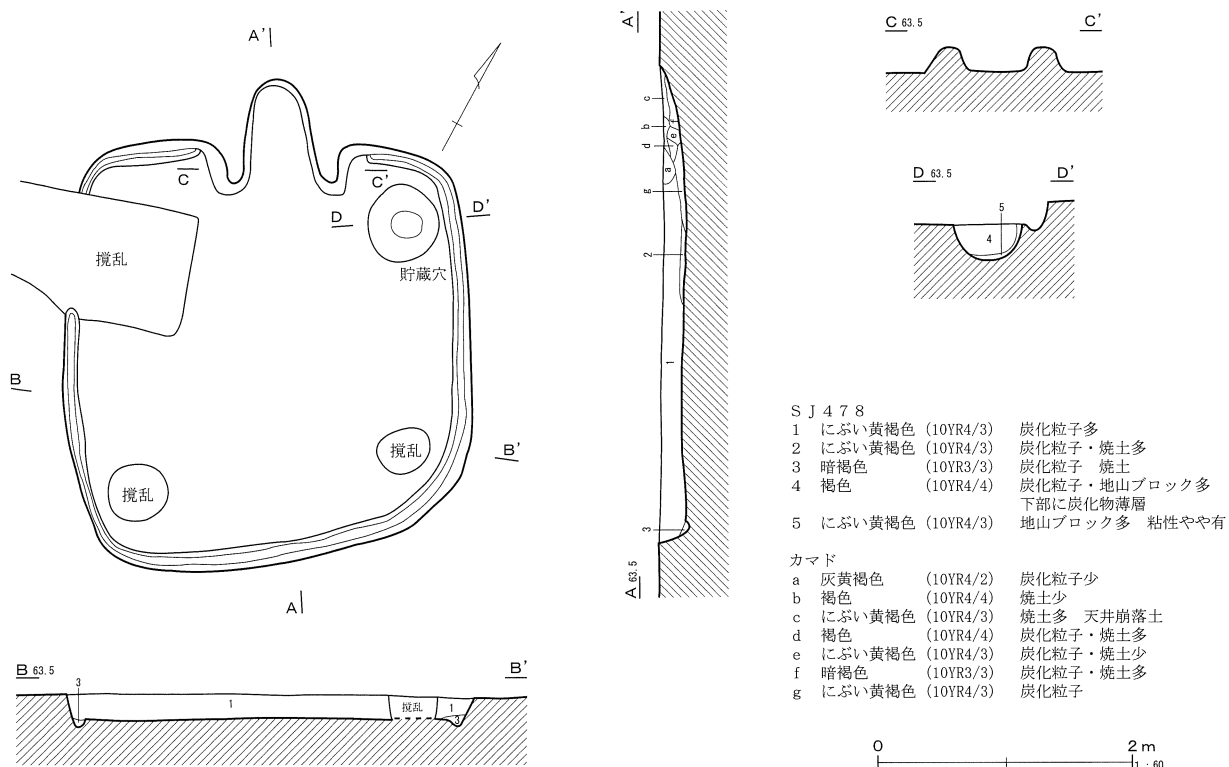
J-23グリッドに位置する。第484号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。南西壁の一部は攪乱で壊されていた。平面形はやや歪むが正方形に近く、東西3.76m、南北3.42m、深さは0.18~0.20mである。主軸方位はN-29°-Wを指す。

床面は中央付近が僅かに高く、壁は開きながら立

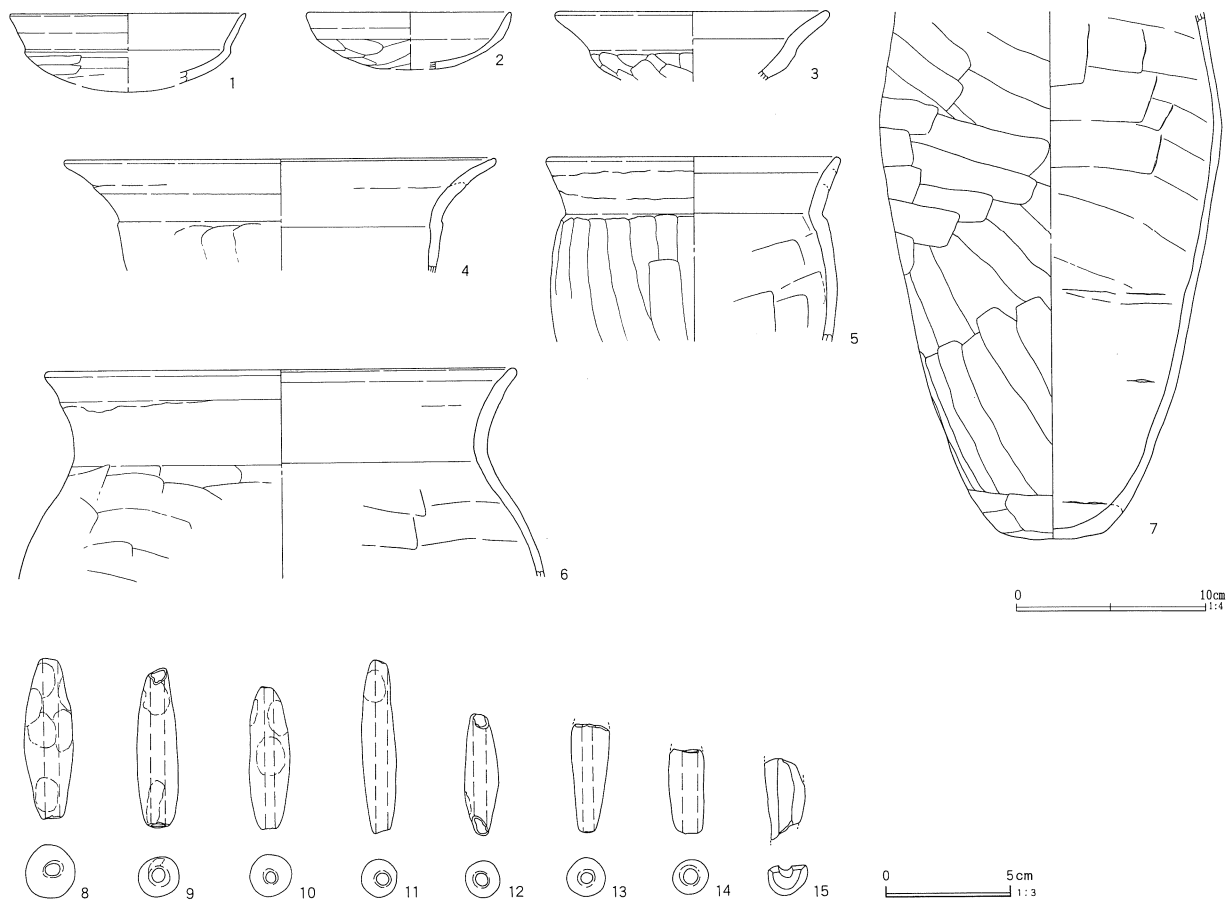
ちあがる。

カマドは北壁中央に設置される。燃烧部の掘り込みはなく、緩やかに立ち上がる。貯蔵穴は北コーナー近くに設けられ、径58cmの円形で、深さは28cmである。壁溝は全周し、幅8~20cm、深さ2~5cmである。

遺物は、土師器坏・甕の破片が多く出土したが、



第70図 第478号住居跡



第71図 第478号住居跡出土遺物

小破片が多く、図示可能な遺物は少なかった。

8点であった。

図示可能な遺物は、土師器坏3・甑1・甕3、土錘

第478号住居跡出土遺物観察表（第71図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.4)	3.7		B D E F J	普通	にぶい橙	40	D区	磨耗著しい 外面一部黒斑あり
2	土師坏	(10.8)	3.0		B D E J	良好	にぶい褐	30	B区	
3	土師坏	(14.3)	3.7		A B D E J	良好	橙	20	覆土	
4	土師甑	22.8	6.0		D H J	普通	橙	15	B区	
5	土師甕	(15.5)	9.9		A B E J	良好	浅黄	40	B・D区	
6	土師甕	(24.8)	11.1		A B E J K L	普通	橙	30	B区	
7	土師甕		27.6	(5.5)	B D E J L	普通	にぶい橙	50	B・C・D区	

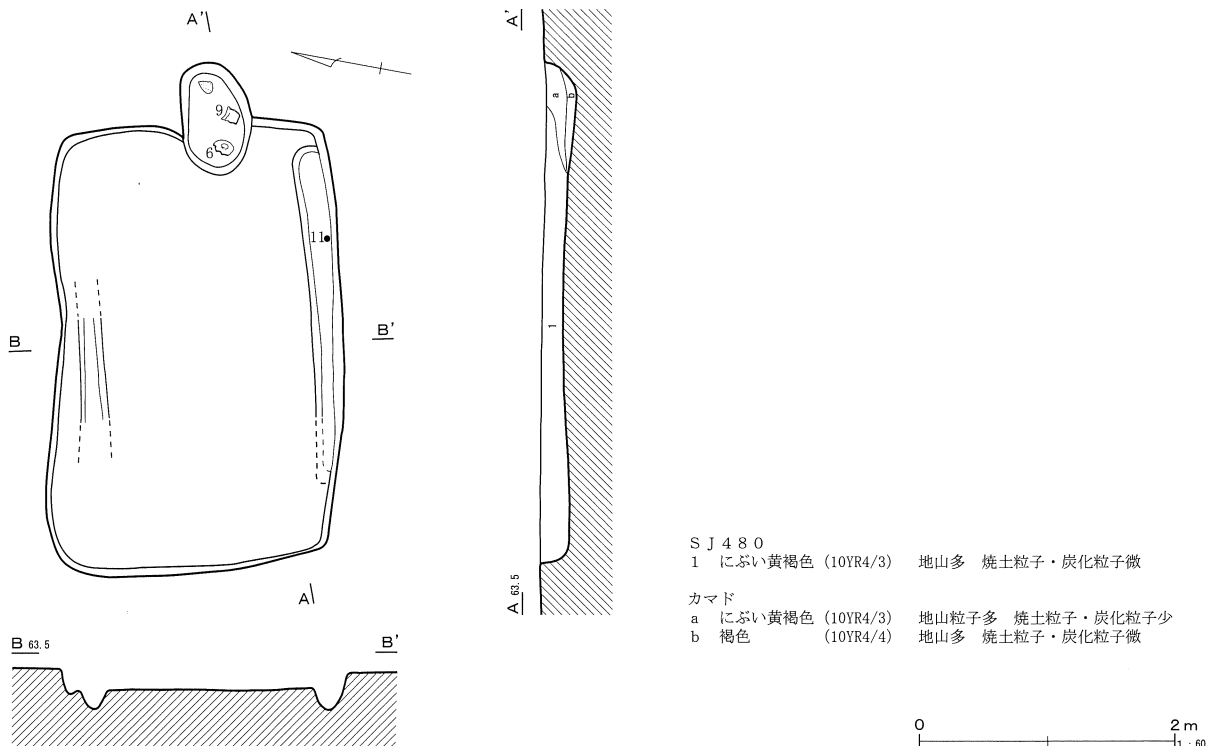
第478号住居跡出土土錘観察表（第71図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	6.30	1.95	0.60	20.55	B a IV	C	橙	100	A区
9	6.20	1.65	0.60	13.84	—	A	にぶい橙	100	B区
10	5.60	1.60	0.40	14.73	B a IV	C	にぶい褐	100	A区
11	6.80	1.40	0.50	12.74	B a III	A	浅黄	100	C区
12	4.80	1.30	0.50	6.32	C a V	A	橙	95	D区
13	(4.20)	1.50	0.45	9.15	B a IV	C	にぶい黄橙	50	D区
14	(3.35)	1.45	0.60	5.56	—	A	橙	50	C区
15	(3.20)	1.60	0.50	4.84	—	B	にぶい黄橙	—	A区

第480号住居跡（第72・73図）

J-22・23グリッドに位置する。第484・486・489・491・518号住居跡と重複し、その何れより新しい。

平面形は東西に長い長方形で、長軸3.55m、短軸2.26m、深さは0.10～0.23mである。主軸方位はN-81°-Eを指す。

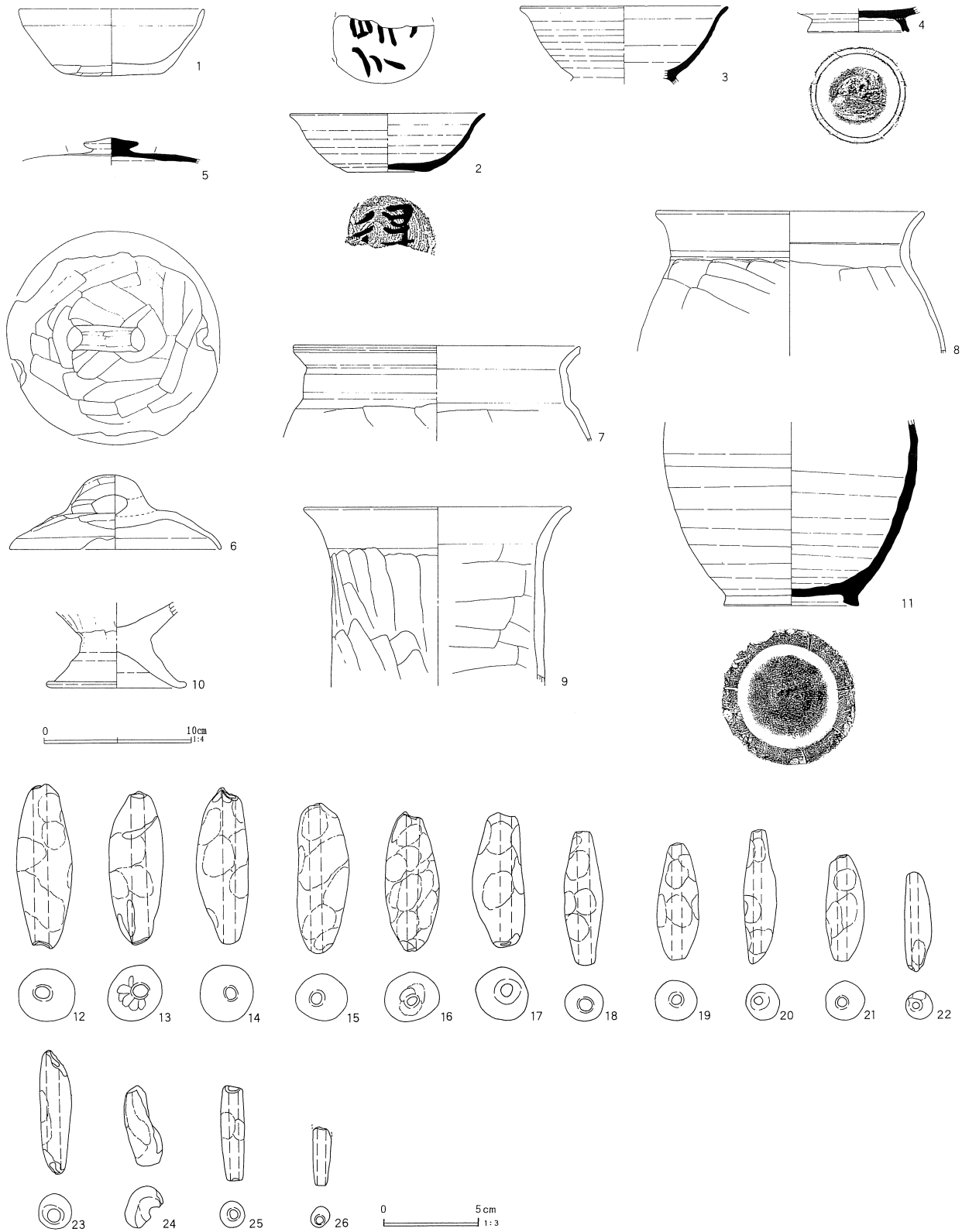


第72図 第480号住居跡

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土は1層で短時間で埋まったと思われる。

カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃烧

部の掘り込みは僅かで急激に立ち上がる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北壁中央付近と南壁で検出され、幅18~30cm、深さ14~17cmである。



第73図 第480号住居跡出土遺物

遺物は、覆土およびカマドから、平安時代の土師器・須恵器の破片が出土した。小破片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環1・蓋1・甕2・甑1・台付甕1、須恵器環1・高台椀1・高台付皿1・蓋1・長頸瓶1、土錘15点であった。

2の須恵器は、末野産で、底部の内外面に「得」と墨書されていた。興味深いのは、「得」の字の筆跡が内外面とも異なることである。別人の筆による可能性もある。

6は土師器の蓋である。本遺跡では他に平安時代の土師器蓋は出土してない。基本的には1の土師器環と成型技法は同じで、環の天地を逆転させ、つま

みを貼り付けた形となっている。口縁部はやや内側に屈曲させる。天井部はつまみを貼り付けた後、強いナデによって仕上げている。天井部内面には煤が付着していた。口径から、環・椀類の蓋の可能性はある。墨を作る際の煤を採取する蓋にも形状が似ているが、蓋の具体的な用途については明らかに出来なかった。

11は、東金子産と思われる長頸瓶である。上半部を欠損していた。細かな砂粒を含むが、精選された胎土で、焼成も良好であった。高台部は幅広で、内側に踏ん張るような形態である。上部には自然釉が付着していた。

第480号住居跡出土遺物観察表（第73図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	12.5	4.5	6.8	E G J K L	良好	橙	60	覆土	
2	須恵環	(13.1)	4.0	(5.8)	A B F J	普通	灰黄	20	覆土	末野産 底部内外面とも「得」の墨書
3	須恵高台椀	(14.1)	5.3		A F H J L	良好	灰白	20	覆土	末野産
4	須恵高台皿		1.7	6.8	A B H J L	普通	灰黄	100	覆土	末野産
5	須恵蓋		1.8		A H J L	不良	灰白	20	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ
6	土師蓋	14.3	5.1		A G J	普通	暗赤褐	60	カマド	天井部ヘラケズリ 内面天井部煤付着
7	土師甕	(19.4)	6.5		A B D E G J	良好	にぶい橙	30	覆土	
8	土師甕	18.2	9.9		B D E J K L	良好	赤褐	70	覆土	
9	土師甑	(18.0)	12.1		A B D H J L	良好	橙	40	カマド	
10	土師台付甕		5.8	8.7	A B E J L	普通	橙	25	覆土	
11	須恵長頸瓶		12.5	9.2	A B C	良好	灰	85	+10cm	東金子産 内外面自然釉

第480号住居跡出土土錘観察表（第73図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
12	8.30	2.85	0.70	48.34	B a II	A	にぶい橙	100	
13	7.75	2.80	0.75	47.90	B a II	A	橙	100	
14	7.90	2.75	0.60	49.63	B a II	A	橙	95	
15	7.60	2.65	0.60	40.84	B a II	A	橙	100	
16	7.05	2.80	0.60	38.69	B a III	A	灰赤	100	
17	6.75	2.65	0.70	39.20	B a III	A	にぶい橙	100	
18	6.80	1.95	0.65	19.40	B a III	A	浅黄橙	100	
19	5.90	2.10	0.50	23.10	B a IV	B	橙	100	
20	6.75	1.65	0.40	16.94	B a IV	B	灰赤	95	
21	5.40	1.95	0.50	18.50	B a V	B	にぶい橙	100	
22	5.05	1.35	0.40	9.27	B a V	B	灰赤	95	カマド
23	6.25	1.65	0.65	13.78	B a IV	A	灰黄褐	90	
24	(4.05)	2.00	0.60	10.56	—	B	赤褐	—	カマド
25	4.80	1.25	0.45	6.88	B a V	B	橙	100	
26	(2.95)	0.95	0.40	2.22	—	B	にぶい橙	50	

第481号住居跡（第74・75・76図）

J・K-22グリッドに位置する。第487・490・517・540・544号住居跡と重複し、その何れより新しい。平面形は東西に長い長方形で、長軸5.56m、短軸3.88m、深さは0.17~0.33mである。主軸方位はN-80°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃烧部は25cmと深く掘り込み、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴は北東コーナーに接して設けられ、130×120cmの隅丸方形で、深さは31cmである。壁溝は南東コーナー、南西コーナー、北壁中央で断続的に検出さ

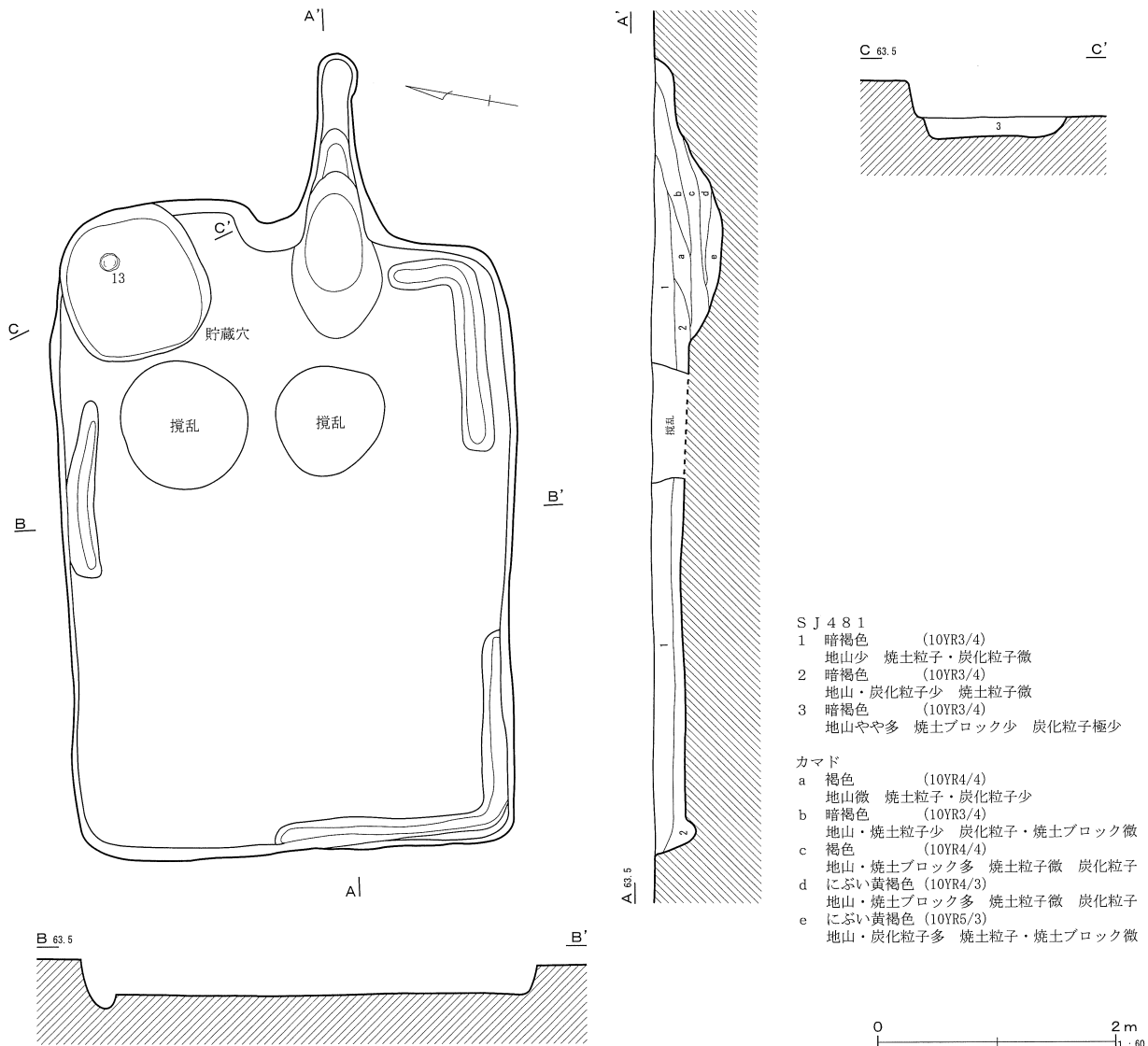
れ、幅16~28cm、深さ10~16cmである。

遺物は、平安時代の土師器・須恵器の破片が多量に出土したが、小破片が多く、摩滅も著しいため、接合率は悪かった。

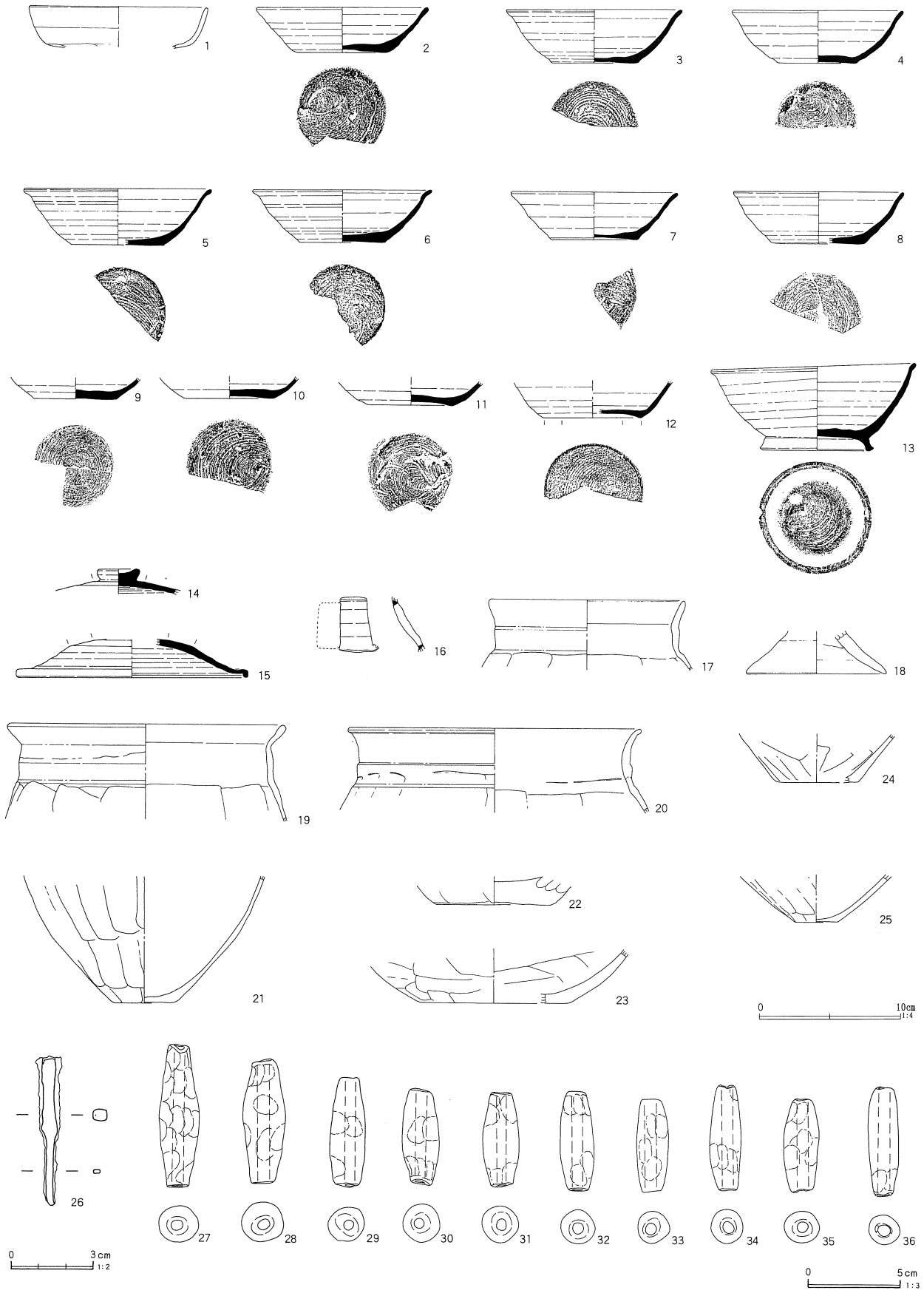
図示可能な遺物は多く、土師器坏1・甕8・台付甕1、須恵器坏11・高台付椀1・蓋2・円面硯1、不明鉄製品1、土錘33点であった。

図示した遺物には、時期差のある遺物が混在していたが、重複する他住居跡からの混入品であったと思われる。

須恵器坏は末野産で構成される。図示不可能であった破片資料には僅かに南比企産の製品も含まれた



第74図 第481号住居跡



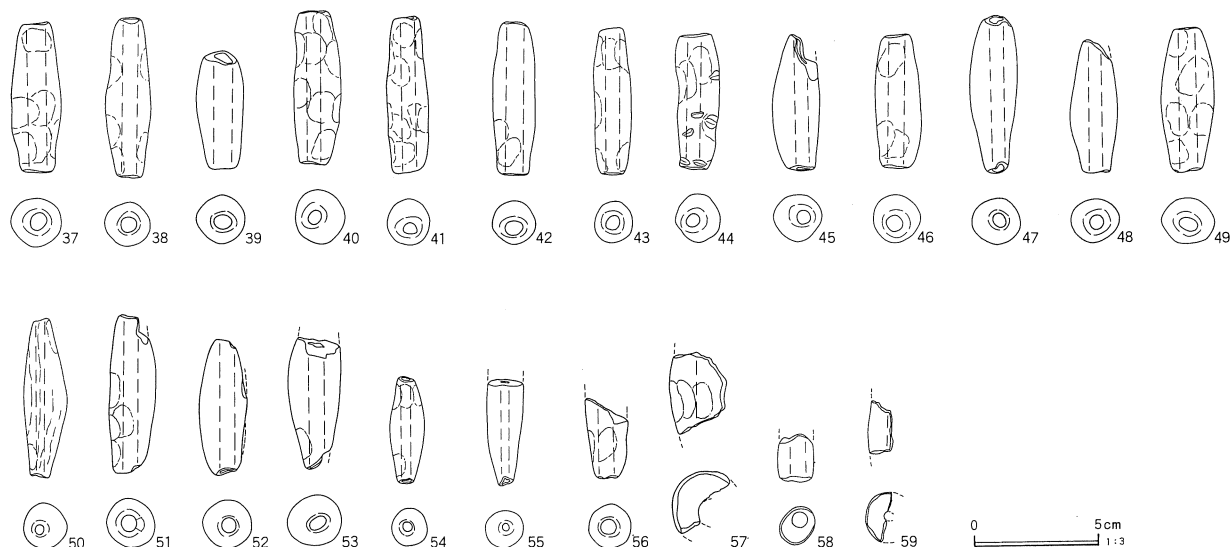
第75图 第481号住居跡出土遺物 (1)

が、概ね末野産であった。口径12cm代で底径は6cm代である。底部は糸切り後未調整である。12の坏は周辺部をヘラ削りするが、混入品と考えられる。

土師器甕は残存率が悪く、胴部以下を欠き全体の形状が明らかなものはなかったが、口縁部は「コ」の字となる。16は円面硯で、南比企産と考えられ

る。脚部の破片で、破片の両側面は透孔となっている。本遺跡からは、他に第496・514・516号住居跡から南比企産の円面硯の脚部片が1点出土しているが、同一個体であるかどうかは明らかに出来なかった。

鉄製品は器種が特定できなかった。26は棒状となるが、鉄鏃の基部の可能性もある。



第76図 第481号住居跡出土遺物 (2)

第481号住居跡出土遺物観察表 (第75図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.6)	2.9		BEJ	普通	橙	25	カマド	
2	須恵坏	12.2	3.2	6.5	HJL	良好	褐灰	50	覆土	末野産 底部回転糸切
3	須恵坏	12.4	3.8	6.3	ABFHJ	普通	灰	30	覆土	末野産 底部回転糸切
4	須恵坏	(12.1)	3.7	5.8	BEHJL	普通	灰黄	25	覆土	末野産 底部回転糸切 内外面磨滅著しい
5	須恵坏	13.2	4.0	6.6	ABHL	良好	灰	35	覆土	末野産 底部回転糸切
6	須恵坏	12.8	3.7	6.2	ACFL	良好	灰	35	覆土	末野産 底部回転糸切
7	須恵坏	(11.8)	3.4	(6.2)	BEHJ	普通	灰	20	覆土	末野産 底部回転糸切
8	須恵坏	12.0	4.7	6.6	ABHL	普通	灰白	25	覆土	末野産 底部回転糸切
9	須恵坏		1.6	6.0	ABCH	良好	灰	70	覆土	末野産 底部回転糸切
10	須恵坏		1.6	6.3	FHJL	良好	灰	60	覆土	末野産 底部回転糸切
11	須恵坏		1.7	6.2	EHJL	普通	橙	80	覆土	末野産 底部回転糸切
12	須恵坏		2.6	7.0	AEHJ	良好	灰	40	覆土	末野産 底部回転糸切後周辺ヘラケズリ
13	須恵高台椀	14.3	6.0	7.4	BCFHJL	良好	灰	80	+21cm	末野産
14	須恵蓋		2.8		BIJL	良好	赤灰	100	覆土	南比企産 天井部ヘラケズリ
15	須恵蓋(椀)	(16.4)	2.7		AEFHJL	普通	灰黄	15	覆土	末野産 天井部ヘラケズリ
16	須恵円面硯		4.0		IJ	良好	赤灰		覆土	南比企産 透かしあり
17	土師甕	(13.8)	5.0		BEGJ	普通	橙	20	覆土	
18	土師台付甕		3.1	9.8	ABEGJ	良好	橙	40	覆土	
19	土師甕	(19.6)	6.8		BEFJ	普通	明赤褐	25	覆土	
20	土師甕	(20.6)	6.0		BEJ	普通	明赤褐	20	覆土	
21	土師甕		19.0	(4.2)	ABDEJ	普通	明赤褐	30	覆土	
22	土師甕		2.0	8.0	ABEJL	普通	明赤褐	70	覆土	
23	土師甕		3.9	(10.6)	BEGJ	普通	暗赤褐	25	覆土	
24	土師甕		3.5	(5.6)	BDEJ	普通	褐	25	覆土	

第481号住居跡出土遺物観察表（第75図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
25	土師甕		3.4	3.0	A B J	普通	にぶい黄橙	35	カマド	
26	鉄鏃?	現存長5.25cm		幅0.60cm	厚さ0.40cm	重さ5.00g			覆土	

第481号住居跡出土土錘観察表（第75・76図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
27	7.10	2.10	0.60	29.37	C b III	C	褐	100	カマド
28	6.60	2.20	0.60	29.99	C b III	B	明赤褐	100	
29	5.80	2.00	0.55	21.11	B b IV	B	黒褐	100	
30	5.20	2.00	0.50	20.76	B b V	B	黒褐	100	
31	5.00	2.00	0.60	16.74	B b V	B	黒褐	100	
32	5.30	1.80	0.60	17.60	B b V	B	黒褐	100	
33	4.95	1.70	0.60	14.46	B b V	C	にぶい黄橙	100	
34	5.60	1.80	0.65	17.94	B b IV	B	黒褐	100	
35	4.95	1.85	0.60	16.21	B b V	B	黒褐	100	
36	5.80	1.70	0.70	14.74	B a IV	B	黒褐	100	
37	5.95	2.00	0.70	22.60	B b IV	B	灰黄褐	100	
38	6.30	1.80	0.60	18.04	B b IV	B	黒褐	100	
39	4.65	1.90	0.70	15.24	B a V	B	黒褐	100	
40	6.10	2.10	0.60	23.56	B b IV	C	にぶい黄橙	100	
41	6.20	1.80	0.55	19.12	B b IV	C	橙	100	
42	6.05	1.70	0.70	17.60	B b IV	C	にぶい褐	100	
43	5.80	1.65	0.60	15.43	B b V	B	にぶい黄褐	100	
44	5.35	1.90	0.55	17.53	B b V	B	橙	100	
45	5.40	1.90	0.55	18.10	B b V	C	橙	95	
46	5.25	1.90	0.65	18.47	B b V	B	黒褐	100	
47	6.20	1.90	0.60	20.42	B a IV	B	にぶい黄褐	100	
48	5.20	1.90	0.55	16.97	C a V	B	にぶい橙	95	
49	5.80	2.10	0.75	20.80	B b IV	C	橙	100	
50	6.30	1.80	0.35	14.93	C b IV	B	明赤褐	95	
51	6.25	1.90	0.60	20.74	B b IV	C	橙	95	
52	5.30	1.90	0.60	16.91	B a V	C	黒	90	
53	(5.20)	2.10	0.60	19.17	B a III	C	にぶい橙	80	
54	4.20	1.50	0.40	6.54	C a V	C	黒褐	100	
55	(4.20)	1.50	0.30	8.82	B a IV	A	橙	70	
56	(3.20)	(1.75)	0.60	7.49	—	B	黒褐	45	
57	(3.20)	(2.90)	—	12.88	—	B	にぶい黄橙	15	
58	(1.90)	1.55	0.60	3.28	—	B	黒褐	—	
59	(2.10)	(2.00)	(0.35)	4.03	—	C	にぶい黄橙	10	

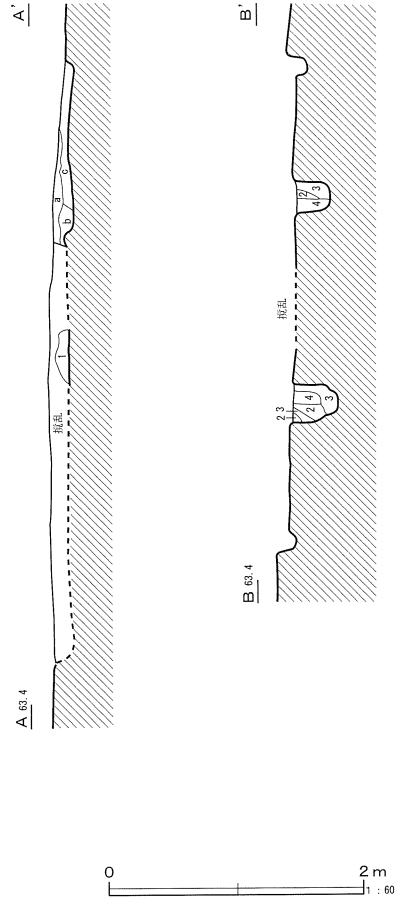
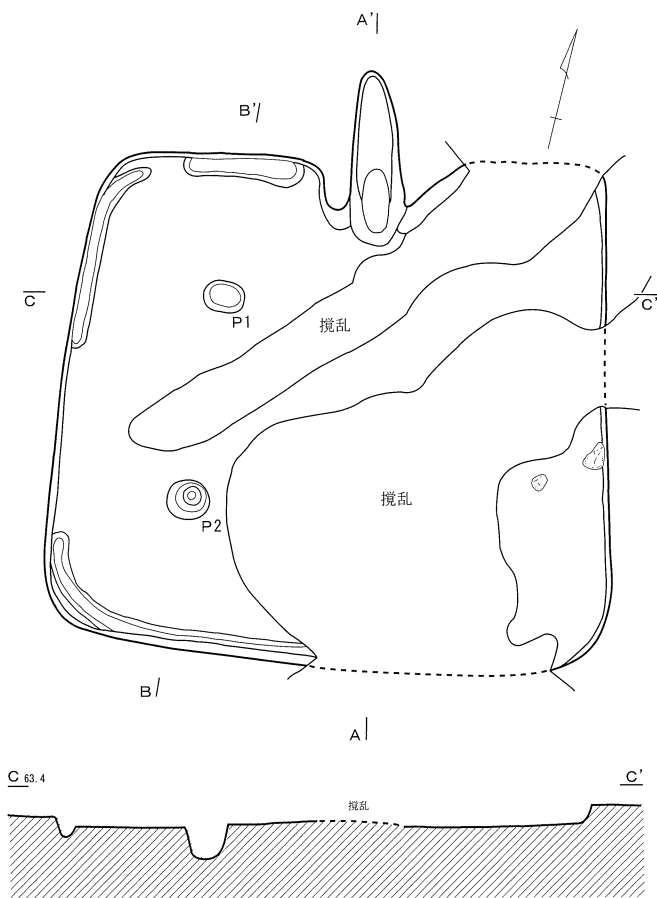
第483号住居跡（第77図）

I-19・20グリッドに位置する。北東から南西方向へ大きく攪乱で壊される。平面形は僅かに東西に長い長方形で、長軸4.38m、短軸3.94m、深さは0.07~0.11mである。主軸方位はN-13°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土の状態は不明瞭である。

カマドは北壁ほぼ中央に設置される。燃烧部の掘り込みは5cm程度で、床面と同レベルの煙道部へ続く。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西半で断続的に検出され、幅10~24cm、深さ4~10cmである。ピットは2本検出され、支柱穴と考えられる。P1・P2の深さは26cm、35cmである。

遺物は、出土しなかった。



- S J 4 8 3
- | | | |
|----------|-----------|---------------------|
| 1 暗褐色 | (10YR3/3) | 地山土多 |
| 2 にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 粘質地山ブロック主体 焼土・炭化粒子微 |
| 3 暗褐色 | (10YR3/4) | 地山ブロック溶混 |
| 4 暗褐色 | (10YR3/4) | 炭化粒子・地山ブロック多 |

- カマド
- | | | |
|----------|-----------|----------------|
| a 暗褐色 | (10YR3/4) | 砂質地山土・焼土ブロック多 |
| b 暗褐色 | (10YR3/3) | 灰層 地山多 焼土 炭化粒子 |
| c にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 地山極多 |

第77図 第483号住居跡

第484号住居跡 (第78・79図)

J-22・23グリッドに位置する。第478・480号住居跡に切られ、第491号住居跡を切る。東壁中央周辺を攪乱で壊される。平面形は正方形で、南北2.72mで、東西も2.7m前後と考えられる。深さは0.16～0.21mである。主軸方位はN-80°-Eを指す。

床面は僅かに起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは検出されなかったが、貯蔵穴の位置から、攪乱に壊された東壁に設置されていたと考えられる。貯蔵穴は南東コーナー近くに設けられ、54×48cmの隅丸方形で、深さは53cmである。壁溝はほぼ全周し、幅10～20cm、深さ3～5cmである。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が出土したが、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・甕1・甌1、土錘5点であった。

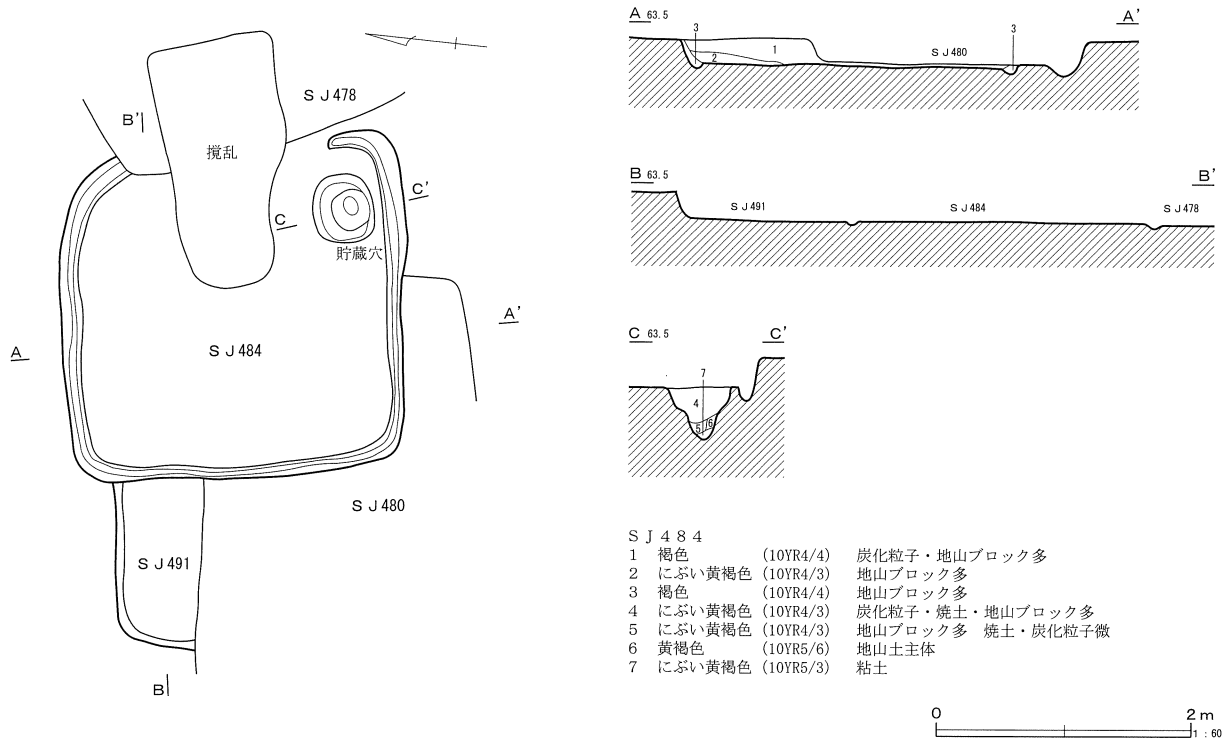
第491号住居跡 (第78・79図)

J-22グリッドに位置する。第480・484・489号住居跡と重複し、その全てに切られ、北西コーナー周辺を検出したのみである。検出された規模は北壁1.19m、西壁0.58mで、深さ0.19～0.24mである。主軸方位は北壁でN-80°-Eを指す。

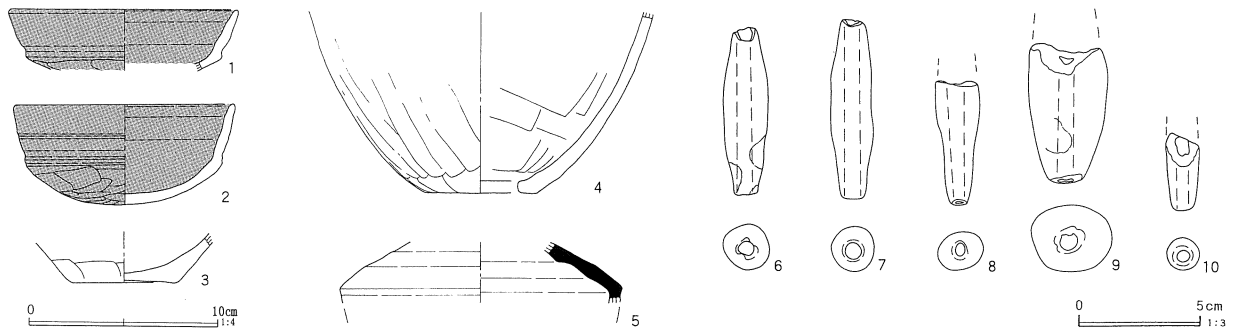
床面はほぼ平坦で、第484号住居跡と同レベルであった。壁は開きながら立ちあがる。覆土の観察は

出来なかった。カマド、貯蔵穴等の施設は不明とせざるを得ない。

遺物は須恵器長頸瓶（第79図5）が1点出土したのみである。



第78図 第484・491号住居跡



第79図 第484・491号住居跡出土遺物

第484・491号住居跡出土遺物観察表（第79図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.2		B D E J	普通	明褐	35	B区	内外面黒色処理
2	土師坏	(11.6)	5.3		B D J	普通	にぶい黄褐	75	A・B区	内外面黒色処理
3	土師甕		2.7	(5.4)	A D E J	普通	にぶい黄褐	75	A区	
4	土師甑		9.6	(5.9)	A B D E J	普通	にぶい黄褐	40	B区	
5	須恵器長頸瓶		3.2		A B J	普通	灰	10	覆土	末野産 S J 491

第484・491号住居跡出土土錘観察表（第79図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	6.60	1.80	0.60	16.75	B a III	A	にぶい黄褐	100	B区
7	7.00	1.70	0.60	16.93	B a III	A	にぶい黄橙	100	B区
8	(4.90)	1.80	0.50	10.44	C a II	B	褐灰	60	B区
9	(5.50)	3.20	0.70	37.39	B a II	A	明赤褐	50	A区
10	(3.10)	1.30	0.60	3.71	B a IV	C	にぶい赤褐	50	B区

第486号住居跡（第80・81図）

J-22グリッドに位置する。第480・489号住居跡に切られ、カマド煙道部のみ検出された。長さ1.01mで、中ほどに小さな段を持ち、先端は浅いピット状になっていた。主軸方位はN-3°-Eを指す。

遺物は、土師器・須恵器片が少量出土した。図示可能な遺物は、須恵器坏1、土師器甕1、土錘3点であった。

第489号住居跡（第81・82・83図）

J-22グリッドに位置する。第480号住居跡に切られ、第486・487・490・491・518号住居跡・第17号掘立柱建物跡を切る。平面形は東西に長い長方形で、長軸3.88m、短軸3.32m、深さは0.37~0.40mである。主軸方位はN-85°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃

焼部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝はカマドの左右からほぼ全周するが、北壁中央で途切れる。幅14~26cm、深さ10~24cmである。多量の土師器・須恵器が出土したが、接合率は悪かった。

遺物は、覆土中から出土した。また、重複が著しく、時期差のある遺物の混入が多かった。

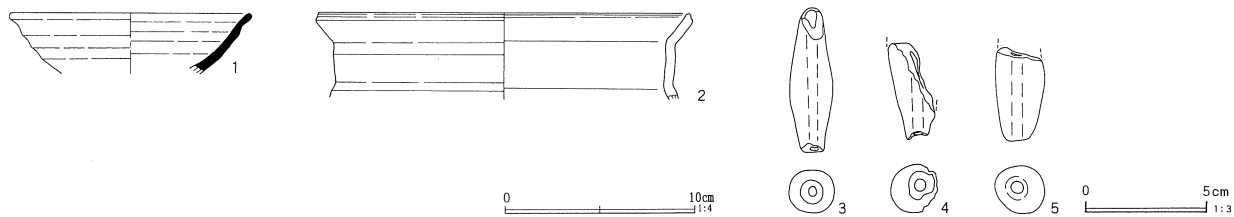
図示可能な遺物も多く、土師器坏1・暗文坏4・甕8・台付甕1、須恵器坏10・高台付椀6・蓋2・コップ型土器1・甕1、鉄製刀子1、土錘33点であった。

須恵器は、殆ど末野産で構成される。24のコップ型土器、34の須恵器甕は南比企産である。

時期差のある遺物が混入し、本住居跡に伴うものは、7~21と、27~34であろう。

また、20の高台椀には底部外面に、「得」の墨書が認められた。

35の刀子は、茎部が反り曲がっていた。



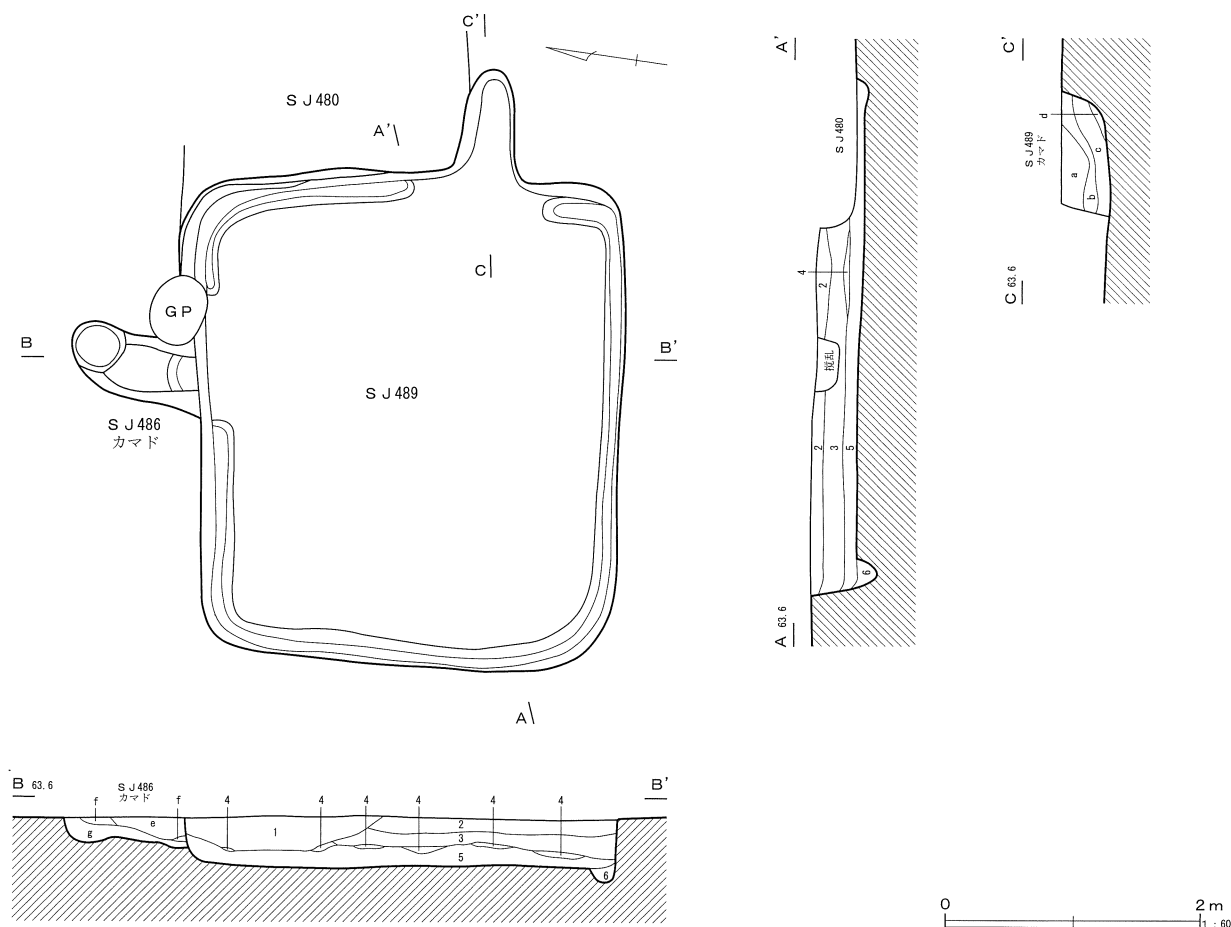
第80図 第486号住居跡出土遺物

第486号住居跡出土遺物観察表（第80図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	(12.6)	3.2		A B H J L	普通	黄灰	20	カマド	末野産
2	土師甕	(19.6)	4.5		A B D J	良好	にぶい褐	20	カマド	

第486号住居跡出土土錘観察表（第80図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	5.70	1.80	0.40	12.43	C a IV	C	にぶい赤褐	90	
4	(3.80)	(1.90)	0.50	7.40	—	B	浅黄橙	—	
5	(3.70)	2.00	0.50	11.58	B a VI	A	にぶい黄橙	40	

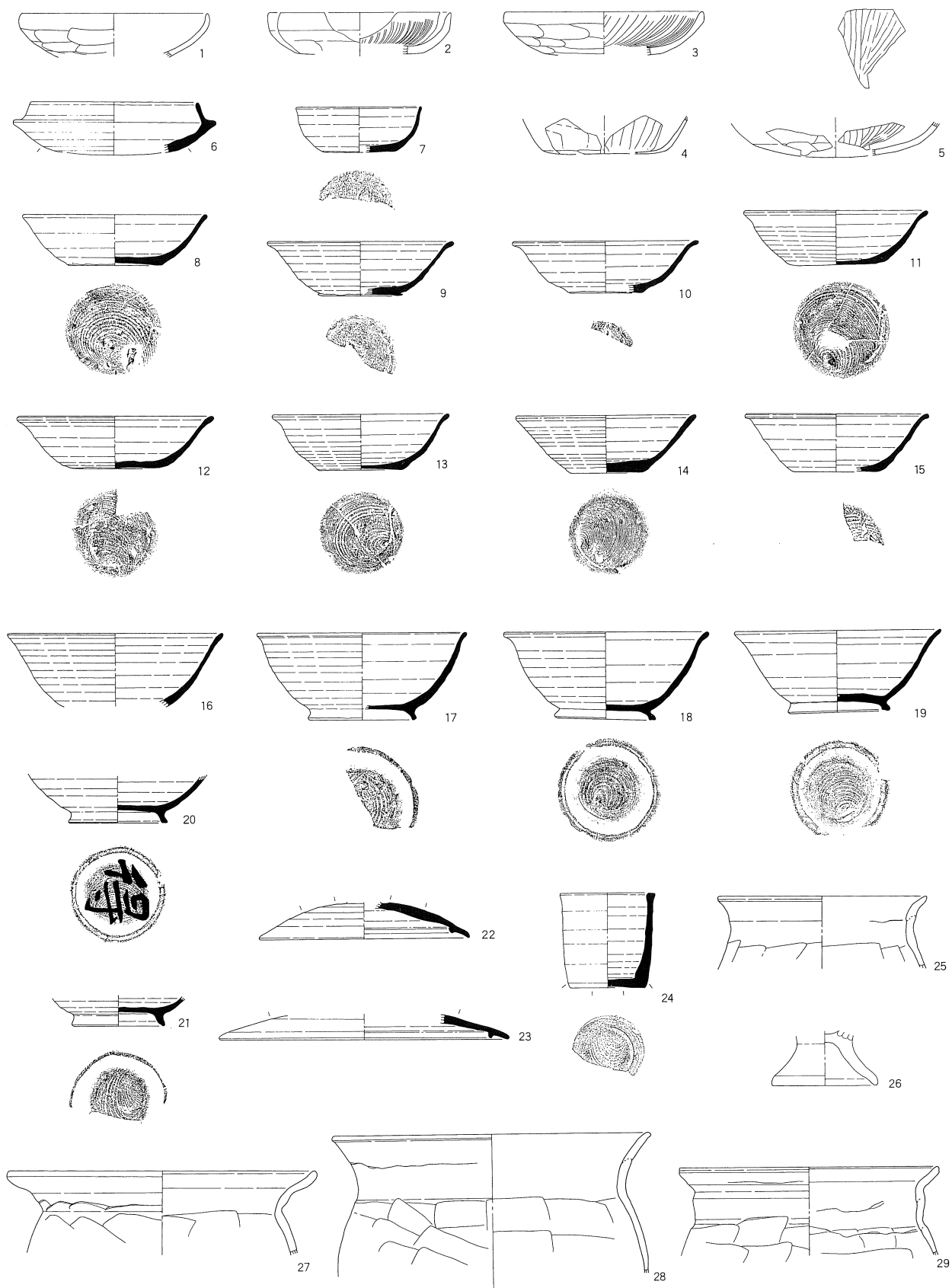


- S J 4 8 9
- | | | | | | |
|---|------------------|----------------------|---|---------------|----------------------|
| 1 | 黒褐色 (10YR2/2) | 焼土ブロックやや多 地山シルトブロック少 | b | 黒褐色 (10YR3/2) | 焼土ブロック極多 地山シルトブロック僅か |
| 2 | 暗褐色 (10YR2/3) | 地山粒子多 炭化粒子少 焼土粒子微 | c | 黒褐色 (10YR3/2) | 焼土ブロック僅か 炭化粒子少 |
| 3 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山粒子・炭化粒子・焼土粒子少 | d | 黒褐色 (10YR3/2) | 地山ブロック多 焼土ブロック・炭化粒子少 |
| 4 | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック僅か 炭化粒子少 | | | |
| 5 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山粒子・炭化粒子・焼土粒子少 | | | |
| 6 | 灰黄褐色 (10YR4/2) | 地山シルト多 | | | |
- S J 4 8 6 カマド
- | | | |
|---|---------------|----------------------|
| e | 黒褐色 (10YR2/2) | 焼土ブロック 地山シルトブロック |
| f | 黒褐色 (10YR3/2) | 地山シルト主体 焼土ブロック 崩落天井部 |
| g | 黒褐色 (10YR2/2) | 地山シルト主体 焼土ブロック 炭化粒子 |
- S J 4 8 9 カマド
- | | | |
|---|---------------|-----------------------|
| a | 黒褐色 (10YR3/2) | 焼土ブロック極少 地山ブロック・炭化粒子少 |
|---|---------------|-----------------------|

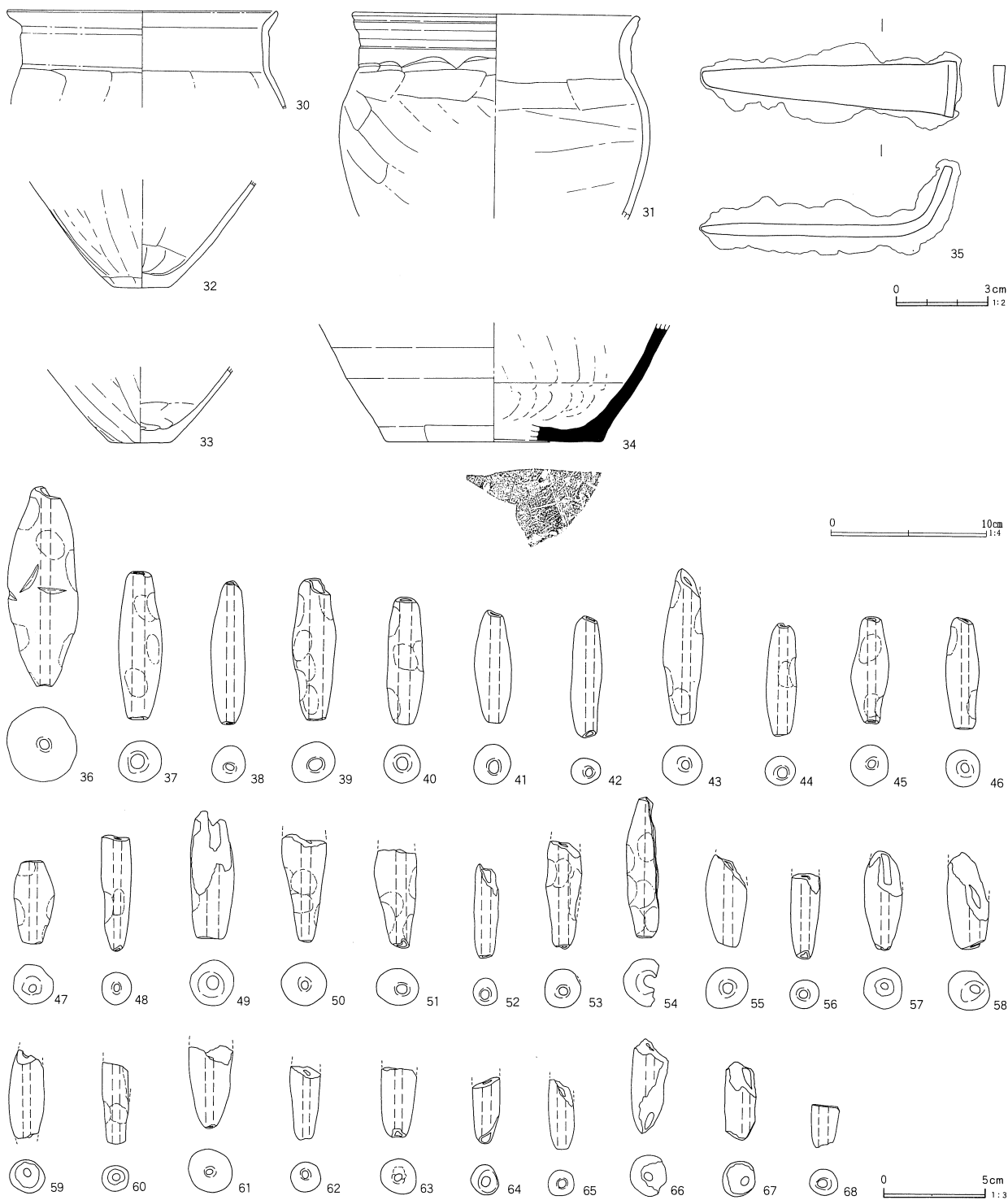
第81図 第486・489号住居跡

第489号住居跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.8)	3.0		B C D J K	普通	にぶい黄橙	30	覆土	
2	土師暗文坏	(12.5)	2.9		A B D E J	良好	橙	15	覆土	内面放射暗文
3	土師暗文坏	(13.6)	3.0		B D E J	普通	明赤褐	35	覆土	内面放射暗文
4	土師暗文坏		2.6	8.6	E G J	普通	灰黄褐	5	覆土	内面放射暗文
5	土師暗文坏		2.3		B F J	普通	橙	10	覆土	内面放射暗文
6	須恵坏	(11.5)	3.4		J L	良好	灰	20	覆土	産地不明 底部回転ヘラケズリ
7	須恵坏	(8.6)	3.1	(5.0)	H J L	良好	灰	40	覆土	末野産 底部回転糸切 歪みあり
8	須恵坏	(12.6)	3.5	6.6	H J L	良好	灰	50	覆土	末野産 底部回転糸切 粘土塊付着
9	須恵坏	(13.0)	3.7	(6.0)	H J L	良好	灰	45	覆土	末野産 底部回転糸切
10	須恵坏	(13.0)	3.6	5.2	J L	良好	灰	30	覆土	末野産 底部回転糸切
11	須恵坏	12.8	3.8	6.8	H J L	良好	灰	70	覆土	末野産 底部回転糸切 歪みあり
12	須恵坏	(13.6)	3.6	6.4	J L	良好	灰	60	覆土	末野産 底部回転糸切



第82图 第489号住居跡出土遺物 (1)



第83図 第489号住居跡出土遺物 (2)

第489号住居跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
13	須恵坏	(12.2)	3.9	6.0	J L	良好	褐灰	40	覆土	末野産 底部回転糸切
14	須恵坏	(12.4)	4.0	5.5	F H J L	良好	灰	55	覆土	末野産 底部回転糸切
15	須恵坏	(12.8)	4.0	(6.0)	J L	良好	灰	25	覆土	末野産 底部回転糸切
16	須恵高台椀	(15.0)	5.0		H J L	普通	灰	30	覆土	末野産 内面やや褐色がかかる
17	須恵高台椀	(14.4)	6.0	(7.4)	J L	良好	褐灰	40	覆土	末野産

第489号住居跡出土遺物観察表（第82・83図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
18	須恵高台椀	14.2	6.1	7.0	J L	良好	黄灰	70	覆土	末野産 歪みあり
19	須恵高台椀	14.3	5.7	7.0	J L	良好	灰	80	覆土	末野産 歪みあり
20	須恵高台椀		3.4	6.8	B L	良好	灰	30	覆土	末野産 底部外面に「得」の墨書
21	須恵高台椀		2.0	6.3	J L	良好	灰白	25	覆土	末野産
22	須恵蓋	(14.4)	2.6		B F J	良好	灰	25	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ
23	須恵蓋	(19.8)	1.7		A B H J	良好	灰	10	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ
24	須恵コップ型	(6.6)	6.5	(5.2)	B J	良好	灰	45	覆土	南比企産 底部周辺・体部下端回転ヘラケズリ
25	土師甕	(14.3)	5.0		B D E J	良好	橙	20	覆土	
26	土師台付甕		3.8	(7.2)	B D E J	普通	明褐	40	覆土	内外面磨耗
27	土師甕	(21.0)	5.8		B D E J	普通	橙	25	覆土	
28	土師甕	(21.7)	9.7		A B D E G J	普通	明赤褐	15	覆土	
29	土師甕	(17.8)	6.1		A D E J	良好	明赤褐	20	覆土	
30	土師甕	17.5	6.4		A B E J L	普通	橙	55	覆土	歪み著しい
31	土師甕	(18.4)	13.2		B D E J	普通	赤褐	15	覆土	
32	土師甕		7.0	3.6	B D E G J	良好	褐	50	覆土	
33	土師甕		4.9	3.8	D E J K	良好	にぶい褐	55	覆土	
34	須恵甕		7.7	(14.0)	B I J K L	良好	灰白	10	覆土	南比企産
35	刀子(身部)	現存長8.30cm 背幅0.40cm 刃幅1.35cm 重さ44.37g							覆土	平棟造り

第489号住居跡出土土錘観察表（第83図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考	
36	9.65	3.55	0.50	91.34	C a I	C	にぶい赤褐	95	カマド	
37	7.15	2.15	0.70	25.92	B a III	C	橙	100		
38	6.90	1.85	0.40	18.82	B a III	C	黒褐	100		
39	6.85	2.15	0.70	21.99	B a III	C	黒褐	95		
40	6.10	1.85	0.65	19.67	B b IV	C	黒褐	100		
41	5.40	1.95	0.65	13.75	C a V	C	橙	100		
42	5.85	1.45	0.40	9.54	B a IV	C	明赤褐	100		
43	7.50	1.90	0.40	21.02	B a I	C	橙	95		
44	5.40	1.40	0.50	9.06	B a V	C	灰黄褐	100		
45	5.20	1.95	0.40	13.58	C a V	C	黒	100		
46	5.45	1.80	0.45	14.50	B a V	C	明赤褐	100		
47	4.00	2.00	0.35	13.45	C b VI	C	にぶい褐	70		
48	5.60	1.60	0.35	11.98	B a II	C	浅黄橙	70		
49	6.15	2.20	0.65	22.05	C b III	C	にぶい黄橙	70		
50	(5.20)	2.20	0.40	15.27	C a II	C	浅黄橙	65		
51	(4.75)	2.05	0.50	13.80	C a III	C	浅黄橙	70		
52	(4.55)	1.30	0.35	4.70	B a V	C	赤褐	80		
53	(5.20)	1.90	0.45	14.62	C b III	C	浅黄橙	70		
54	6.75	2.30	0.55	19.48	C b III	C	褐灰	55		カマド
55	(4.45)	2.20	0.55	13.31	B a V	C	黒褐	75		
56	4.10	1.45	0.40	7.31	B a IV	C	橙	60		
57	4.80	1.95	0.40	13.14	—	C	明赤褐	65		
58	4.65	2.10	0.50	13.34	B b IV	C	黒褐	50		
59	4.30	1.70	0.40	10.19	—	B	褐灰	75		
60	3.95	1.30	0.35	5.87	B b IV	C	にぶい赤褐	60		
61	(3.95)	2.25	0.35	14.78	C a IV	C	灰黄褐	55		
62	(3.55)	1.45	0.40	6.14	B a IV	C	にぶい黄橙	55		
63	(3.40)	1.80	0.40	9.05	B a IV	C	黒褐	50		
64	(3.25)	1.50	0.50	5.02	—	C	浅黄橙	35		
65	(3.40)	1.30	0.45	4.35	B a V	C	橙	70		
66	(4.60)	(2.00)	(0.45)	10.70	—	C	褐	50		
67	(3.80)	1.80	(0.45)	9.57	—	C	明赤褐	—		
68	(2.10)	(1.40)	(0.45)	3.40	—	C	にぶい橙	20		

第487号住居跡（第85図）

J-22グリッドに位置する。第481・489・490・518号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。第490号住居跡の床面に壁溝が検出されたのみで、床面は既に消失していると考えられる。規模は、南北が3.5m前後、東西が3.3m以上である。主軸方位は南壁でN-70°-Eを指す。

壁溝は東側以外で検出され、幅32~20cm、深さ14~26cmと深い。

遺物は、土師器・須恵器の破片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

床面は起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央付近に設置される。燃烧部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西壁から北壁にかけて検出され、幅24~28cm、深さ13~21cmである。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が出土した。特に土師器片が多かったが、殆ど接合しなかった。

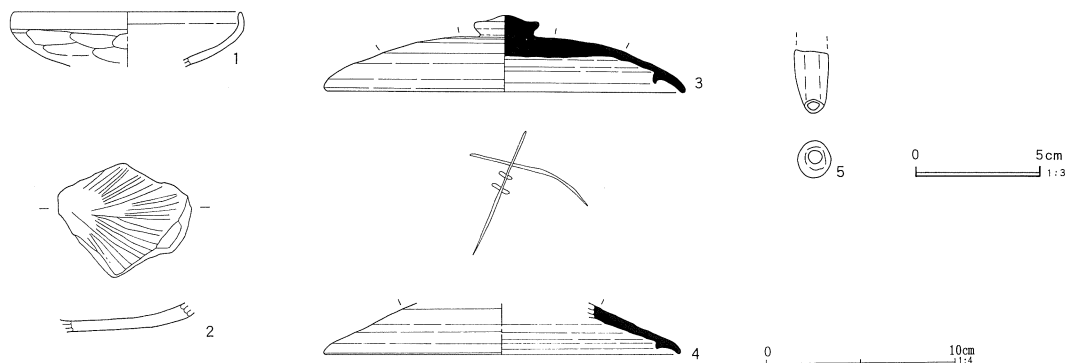
図示可能な遺物は、土師器坏1・暗文坏1、須恵器蓋2、土錘1点であった。

2の暗文坏は底部の破片で、全体の形状は明らかに出来なかったが、内面底部に放射状暗文が施されていた。3・4の須恵器蓋は、2点とも末野産でかえりを有する。3はカマド右袖脇から出土した。

また、本住居は、第489号住居跡に大きく壊されており、第82図1~3・5・22・23等は、本住居跡に伴っていた可能性がある。

第490号住居跡（第84・85図）

J-22グリッドに位置する。第481・489号住居跡に切れ、第487・518号住居跡・第17号掘立柱建物跡を切る。平面形は東西に僅かに長い長方形で、長軸が4.96m、短軸は4.6m前後と考えられる。深さは0.20~0.25mである。主軸方位はN-78°-Eを指す。



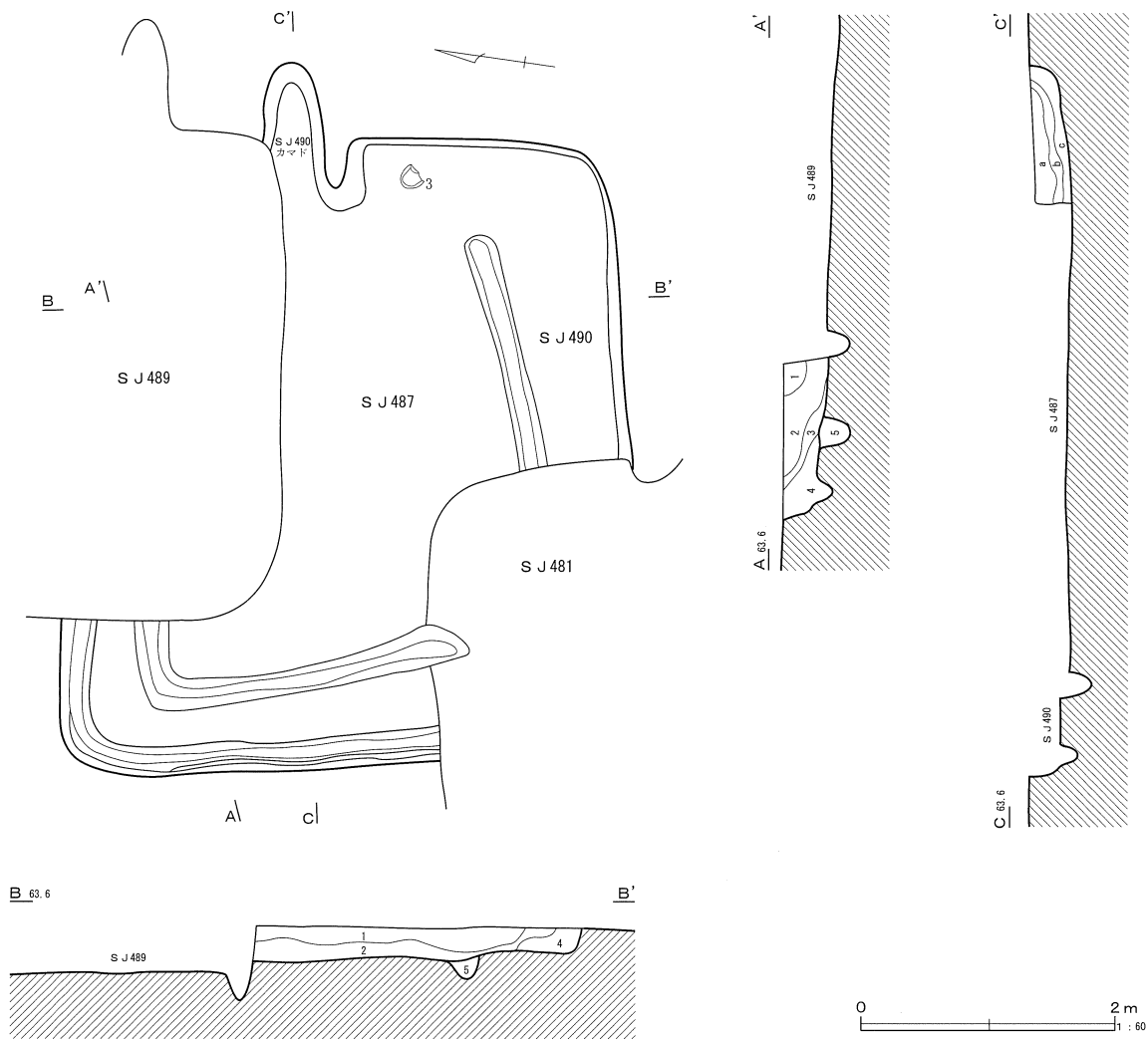
第84図 第490号住居跡出土遺物

第490号住居跡出土遺物観察表（第84図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	2.9		B D E J	普通	橙	25	覆土	
2	土師暗文坏		1.5		A B D E J	普通	橙	—	覆土	内面放射暗文
3	須恵蓋	19.0	4.0		A B H J L	良好	灰	80	+6cm	末野産 内面へラ記号か? 天井部回転へラケズリ
4	須恵蓋	(8.8)	2.7		A F J L	良好	灰	15	覆土	末野産 天井部回転へラケズリ

第490号住居跡出土土錘観察表（第84図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	(2.50)	1.30	0.55	3.51	—	A	にぶい黄橙	—	



- S J 4 9 0
 1 黒褐色 (10YR3/2) 地山ブロック多 焼土ブロック少
 2 黒褐色 (10YR3/2) 地山ブロック少 焼土ブロック僅か 炭化粒子少
 3 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子微
 4 黒褐色 (10YR3/2) 地山ブロックやや多 焼土ブロック・炭化粒子少
- S J 4 8 7
 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 地山土多量 炭化粒子僅か

- S J 4 9 0 カマド
 a 黒褐色 (10YR3/2) 地山ブロック僅か 焼土ブロック・炭化粒子少
 b 黒褐色 (10YR3/2) 焼土ブロック極多
 c 暗褐色 (10YR3/3) 焼土ブロック少 地山ブロック僅か

第85図 第487・490号住居跡

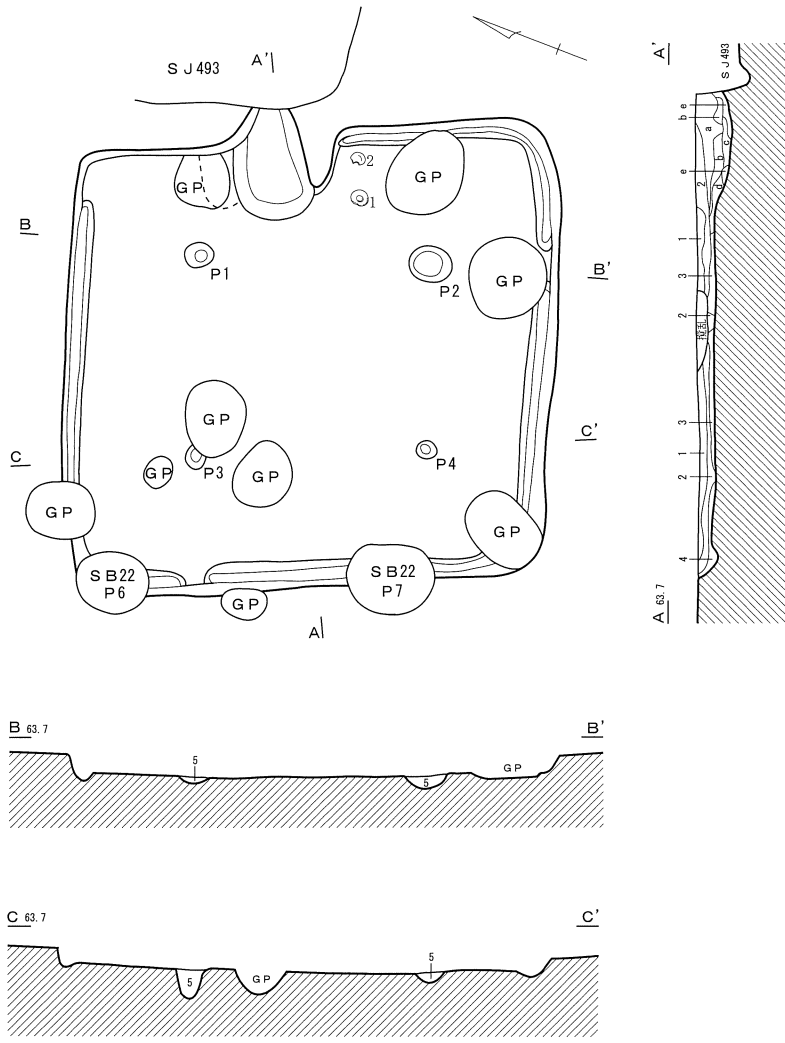
第492号住居跡 (第86・87図)

J-20・21グリッドに位置する。カマド煙道部先端を第493号住居跡に、床面や壁を第22号掘立柱建物跡や多くのグリッドピットに切られ、第529号住居跡を切る。平面形は南北に僅かに長い長方形で、長軸3.94m、短軸3.58m、深さは0.12~0.19mである。主軸方位はN-70°-Eを指す。

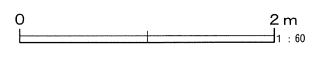
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは東壁中央より北寄りに設置される。燃燒部は15cm程掘り込まれ、緩やかに立ち上がるようである。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は部分的に途切れるもののほぼ全周し、幅24~14cm、深さ1~6cmである。ピットは4本検出され、位置からどれも支柱穴と考えられる。P1~P4の深さは14cm、10cm、24cm、7cmである。

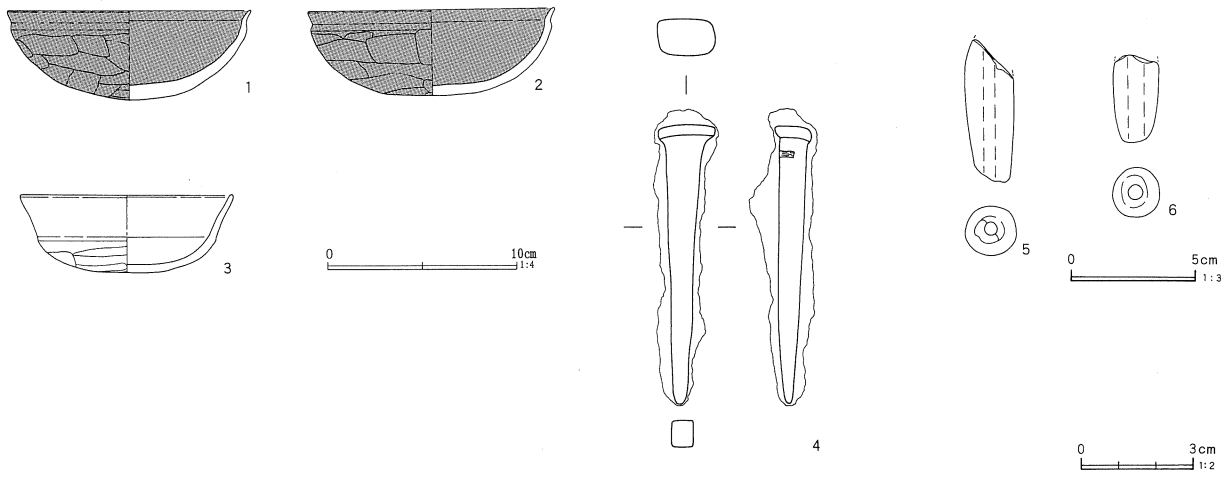
遺物は、覆土から土師器坏・甕の破片が多く出土したが、磨耗著しく、殆ど接合しなかった。



- S J 4 9 2
- 1 褐色 (10YR4/4)
砂質地山粒・焼土多 炭化粒子 しまり強
 - 2 暗褐色 (10YR3/4)
炭化粒子多 焼土 地山ブロック溶混
 - 3 褐色 (10YR4/4)
粘質地山主体
 - 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
地山極多 床溶軟化層
 - 5 暗褐色 (10YR3/4)
炭化粒子多 焼土 地山ブロック
- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/3)
焼土・被加熱地山ブロック 天井崩落後堆積
 - b 暗赤褐色 (5YR3/4)
焼土ブロック主体 天井崩落土
 - c 暗褐色 (10YR3/3)
地山全体に溶混 焼土粒子多 天井崩落前堆積
 - d 暗褐色 (10YR3/4)
灰層 地山小型ブロック 焼土 炭化粒子
 - e 褐色 (10YR4/4)
地山ブロック



第86図 第492号住居跡



第87図 第492号住居跡出土遺物

図示可能な遺物は、土師器坏3、鉄釘1、土錘2点であった。

1・2は、カマド右袖脇からの出土である。床面から4cm程浮いた状態で出土した。丸底の碗状の坏で、口縁部は短く外反しながら立ち上がる。底部はヘラ削りされ、口縁部は強い横ナデが施されている。

口縁端部は極めて薄く、また底部との境界の稜も鋭利である。内外面とも磨耗が著しく、内面の暗文は観察できなかった。

4の鉄釘は、断面が正方形となる角釘で、頭部は一端に折り曲げられている。頭部直下に木質物が付着していた。

第492号住居跡出土遺物観察表（第87図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.8	4.7		B D E H J	良好	にぶい黄橙	95	+4cm	磨耗著しい 外面黒色処理 歪みあり
2	土師坏	(13.0)	4.5		B D E J	不良	にぶい橙	60	+4cm	やや摩耗 内外面黒色処理
3	土師坏	(11.0)	4.1		B D E J L	不良	にぶい黄橙	45	覆土	やや摩耗 歪みあり
4	鉄釘	残存長7.50cm 重さ14.42g							覆土	頭部直下に木質物付着

第492号住居跡出土土錘観察表（第87図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	(5.60)	2.00	0.50	16.33	B a III	A	橙	75	
6	(3.40)	1.90	0.60	11.42	—	A	橙	40	

第493号住居跡（第88・89図）

J-21グリッドに位置する。第19・20号掘立柱建物跡に切られ、第492号住居跡を切る。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.23m、短軸3.76m、深さは0.30~0.40mである。主軸方位はN-83°-Eを指す。

床面は起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド左右には棚状の段が検出された。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部は15cm程掘り込み、手前はピット状になっていた。煙道部は緩やかに立ち上がる。天井部が一部残存していた。貯蔵穴は検出されなかったが、P2はその可能性がある。壁溝は東壁以外で検出され、幅10~20cm、深さ5~10cmである。ピットは4本検出され、P1~P4の深さは19cm、19cm、14cm、33cmである。P1の覆土は、第6層が柱痕状で、周囲の層は固く締まり故意の充填土と考えられる。

遺物は、覆土・カマドから平安時代の土師器・須恵器の破片が多く出土した。須恵器の破片は殆ど接合

しなかった。坏類は末野産が主体を占め、僅かに南比企産が含まれていた。土師器は甕類の破片が多かったが、図示可能な個体以外は殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器坏1・高台付碗3・小型壺1、灰釉碗1、土師器甕4、鉄製刀子1、土錘15点であった。

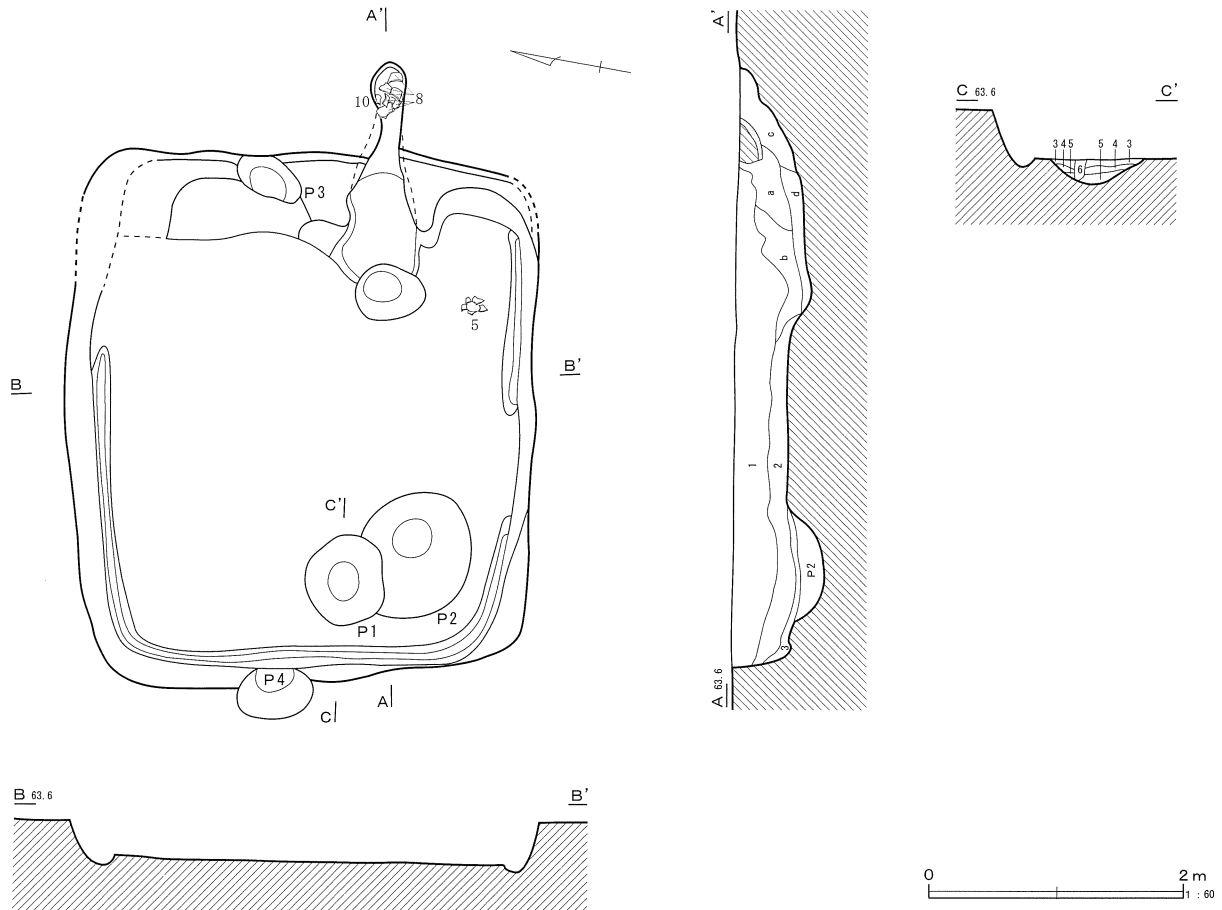
須恵器坏・高台付碗は、末野産であった。2は高台が剥落していた。

5~7の土師器甕は、口径が小さく、台付甕であった可能性がある。

9は灰釉碗の破片である。猿投産と考えられ、内外面ともハケ塗りによって施釉されていた。

10は、所謂壺Gと呼ばれる須恵器の小型壺である。底部を欠損していた。口縁部は、片口状になっていた。8の土師器甕とともに、カマド煙道部先端の覆土（C層）から出土した。

11の刀子は、身部から茎部にかけての破片である。平棟で、ほぼ中央部に両関をもつ。



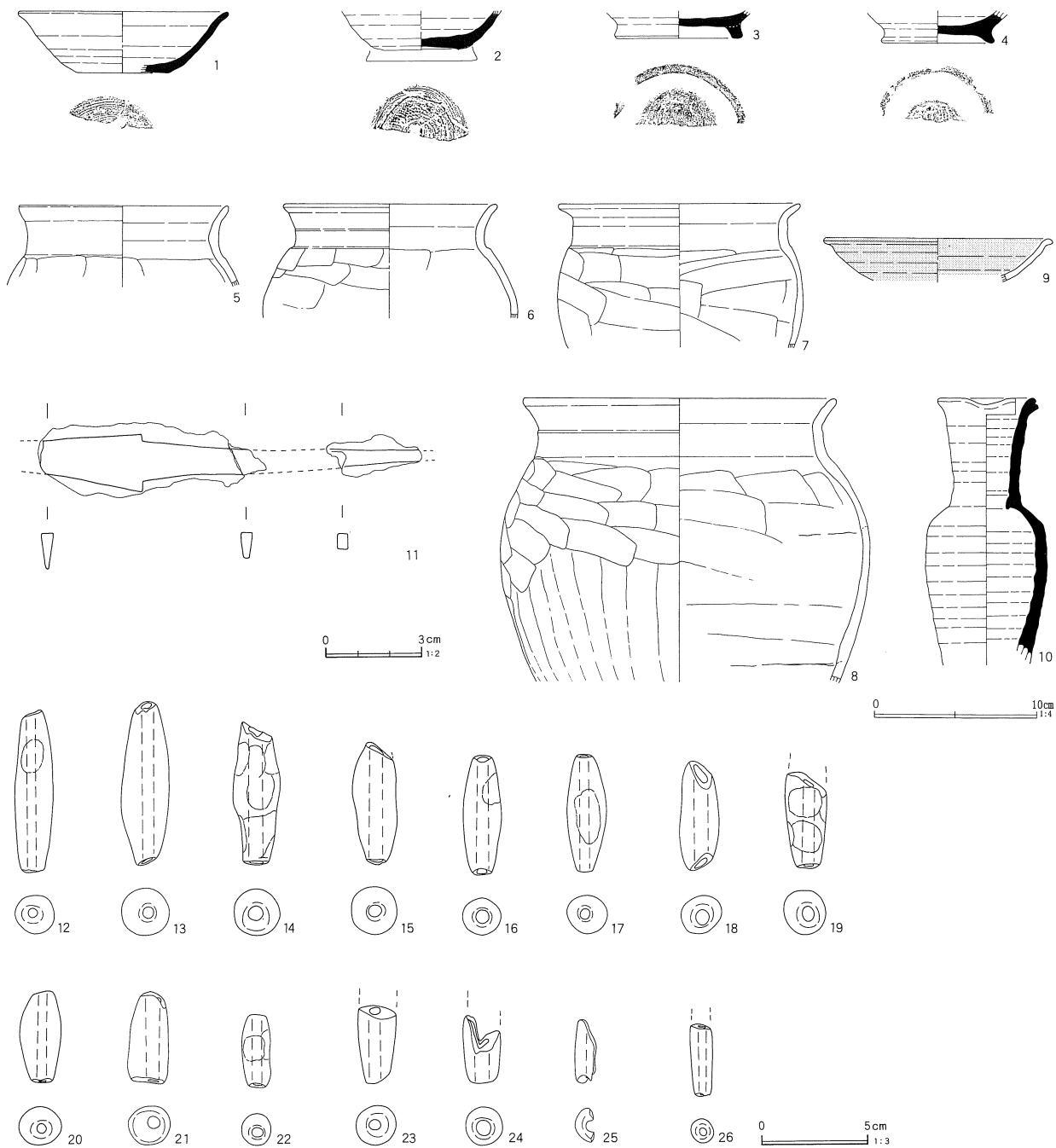
- S J 4 9 3
- 1 黒褐色 (10YR2/3) 黒色腐植土中に地山・炭化粒子・焼土粒子多
 - 2 黒褐色 (10YR3/2) 地山ブロック・灰色粘?土ブロック多
 - 3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 地山ブロック主体 焼土・炭化粒子多
 - 4 暗褐色 (10YR3/4) 砂質地山ブロック主体 焼土微
 - 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質地山ブロック主体 焼土微
 - 6 褐色 (10YR4/4) 柱痕 褐色腐植土

- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/4) 被熱地山・焼土ブロック主体 天井崩落土
 - b 暗褐色 (10YR3/4) 焼土 炭化粒子 被加熱地山 崩落土流溶化層
 - c 褐色 (10YR4/4) 地山主体 単一的だが焼土ブロック多
 - d 黒褐色 (10YR2) 灰層 焼土・炭化粒子多

第88図 第493号住居跡

第493号住居跡出土遺物観察表 (第89図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	(12.8)	3.8	(5.8)	BCEHJL	普通	灰黄	40	覆土	末野産 底部回転糸切
2	須恵高台椀		2.4	(6.4)	BDJL	普通	灰	25	覆土	末野産 高台部剥離
3	須恵高台椀		1.7	(7.7)	ABJL	普通	浅黄	40	覆土	末野産 底部回転糸切後高台貼付
4	須恵高台椀		2.0	(6.8)	BFJL	良好	灰	40	覆土	末野産 底部回転糸切後高台貼付
5	土師甕	12.9	5.0		BDEFJ	良好	橙	75	床	
6	土師甕	(13.0)	7.1		BDJ	良好	浅黄橙	25	覆土	
7	土師甕	(14.8)	9.0		BDEJ	普通	赤褐	10	覆土	
8	土師甕	19.2	17.5		ADEJL	良好	赤褐	50	カマド	
9	灰釉椀	(13.8)	2.7		FJ	良好	灰白	10	覆土	猿投産 K-90 施釉 ツケガケ
10	須恵小型壺	5.8	16.3		EFJL	良好	青灰	60	カマド	産地不明 壺G 口縁部片口状
11	刀子	現存長10.05cm 背幅0.40cm 刃幅1.13cm 重さ26.81g							覆土	平棟造りでほぼ中央に両関を有する



第89図 第493号住居跡出土遺物

第493号住居跡出土土錘観察表 (第89図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
12	7.40	1.80	0.40	21.70	B a III	C	にぶい赤褐	100	
13	7.40	2.20	0.50	28.98	B a III	A	にぶい橙	100	
14	6.40	2.15	0.65	23.58	B b IV	B	にぶい橙	90	
15	5.60	2.10	0.60	3.41	B a IV	C	灰褐	95	
16	5.50	1.70	0.60	14.13	B a IV	B	にぶい黄橙	100	
17	5.30	1.90	0.50	13.91	B a V	C	灰黄褐	100	
18	5.00	1.80	0.70	12.44	B a V	B	にぶい黄橙	100	
19	(4.40)	2.00	0.70	15.65	B a III	C	明赤褐	60	

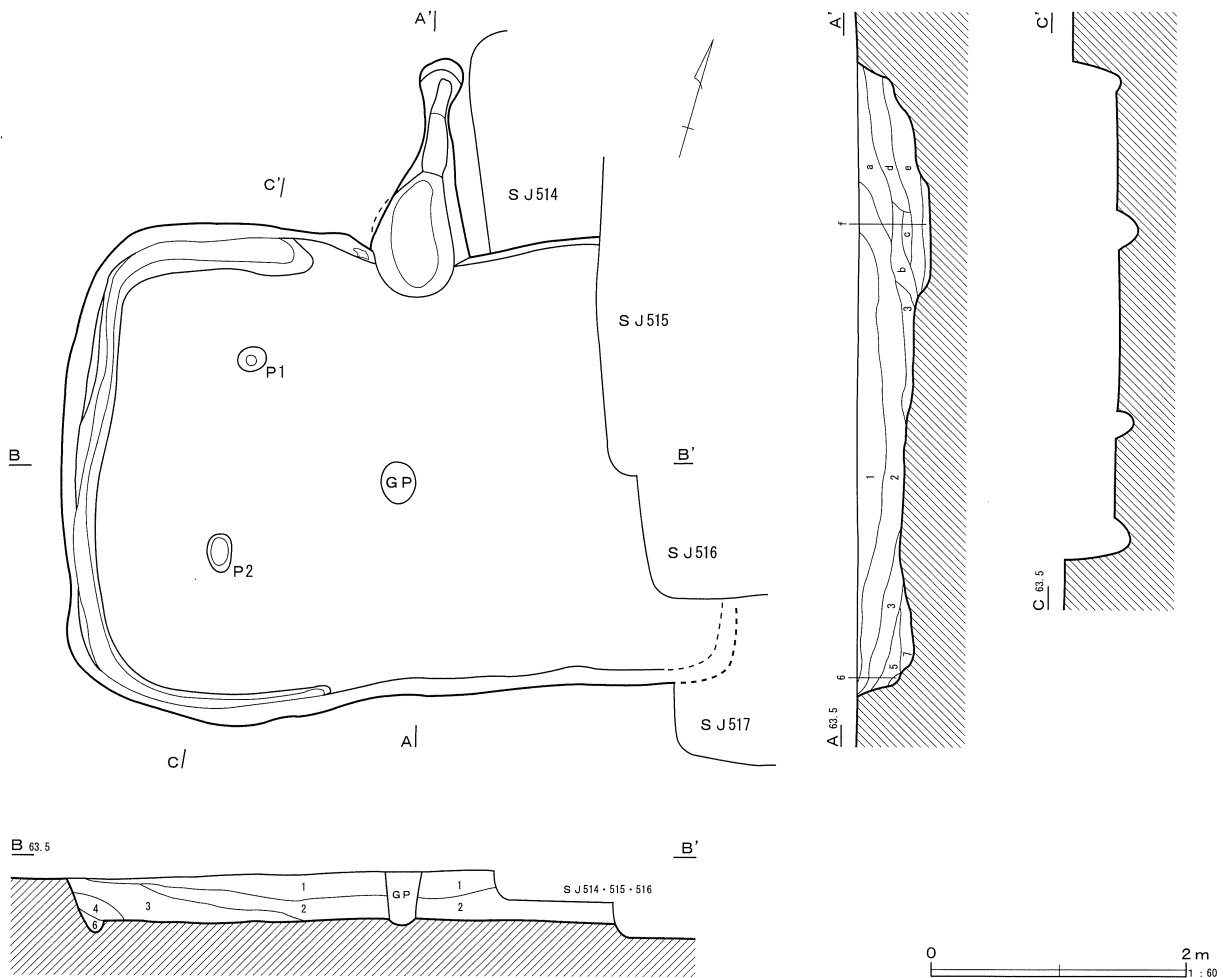
第493号住居跡出土土錘観察表（第89図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
20	4.20	1.90	0.45	12.45	B a VI	C	明赤褐	100	
21	4.20	2.00	0.60	12.72	B a VI	C	にぶい橙	100	
22	3.30	1.40	0.50	5.48	B a VI	A	浅黄橙	100	
23	(3.60)	1.85	0.50	9.78	—	B	灰黄褐	40	
24	(3.10)	1.75	0.65	7.66	B a III	B	褐灰	40	
25	(2.90)	(1.40)	(0.50)	22.34	—	A	赤褐	—	
26	(3.30)	1.10	0.30	2.97	A a IV	C	橙	50	

第496号住居跡（第90・91・121図）

J・K-21グリッドに位置する。第514・515・516号住居跡に切れ、第517・526・529・540号住居跡を切

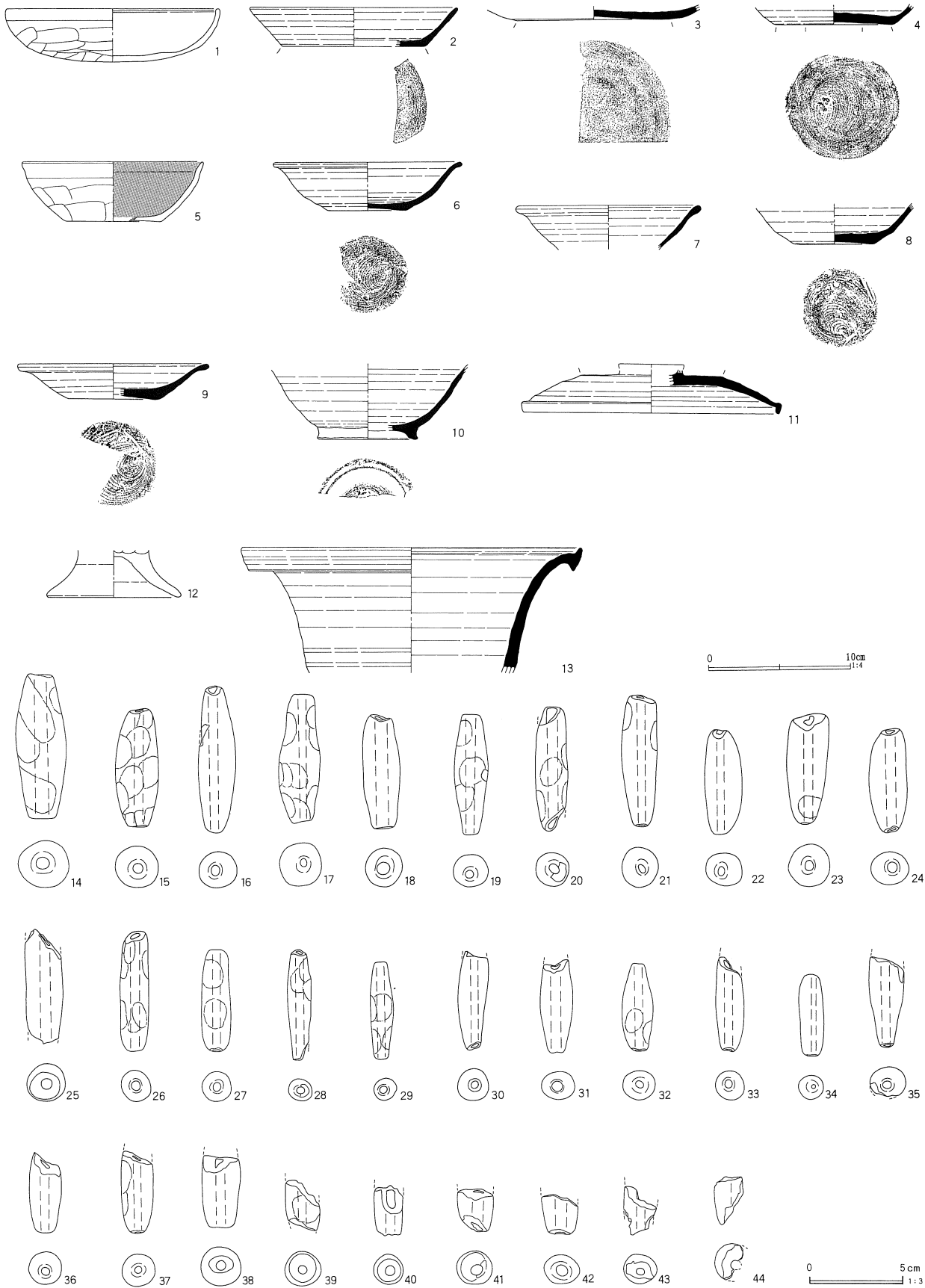
る。東側で重複する住居跡群と同時に調査したため東壁は検出できなかった。平面形は東西に長い長方形で、長軸が5.3m前後、短軸は3.74mである。深さ



- S J 4 9 6
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子多 地山粒子・焼土粒子少
 - 2 暗褐色 (10YR3/3) 地山土多 炭化粒子少 焼土粒子微
 - 3 暗褐色 (10YR3/3) 地山土多 炭化粒子少 焼土粒子微
 - 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山ブロック
 - 5 暗褐色 (10YR3/3) 地山粒子多 地山ブロック少
 - 6 暗褐色 (10YR3/3) 地山粒子少
 - 7 暗褐色 (10YR3/3) 地山粒子多 地山ブロック密多

- カマド
- a 褐色 (10YR4/4) 地山粒子・地山ブロック多 焼土ブロック少
 - b にぶい黄褐色 (10YR5/4) 地山粒子多 炭化粒子少
 - c 暗赤褐色 (5YR3/6) 地山ブロック多 焼土ブロック
 - d にぶい黄褐色 (10YR5/3) 地山主体 下面被熱部か、天井崩落部
 - e 褐色 (10YR4/4) 地山粒子・地山ブロック多
 - f 黒褐色 (10YR3/2) 灰層 炭化粒子多

第90図 第496号住居跡



第91图 第496号住居跡出土遺物

は0.32～0.42mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

床面は起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。覆土は7層に分けられるが、第7層は掘り方充填土の可能性が高い。

カマドは北壁に設置される。燃焼部は床面を15cm程掘り下げ、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西壁を中心に検出され、幅18～38cm、深さ6～12cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは14cm、20cmである。主柱穴と考えられる。

遺物は、覆土から、土師器・須恵器の破片が多量に出土したが、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・台付甕1、須恵器坏6・皿1・高台坏椀1・蓋1・甕1、土錘32点であった。

出土遺物は、概ね2つの時期に分けられる。1～4は概ね8世紀前半、5～13が9世紀後半を中心とした時期のものと考えられる。このうち1～4に関しては、重複する第517号住居跡の遺物であった可能性がある。

第496号住居跡出土遺物観察表（第91図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(14.8)	3.7		B D E J	普通	明赤褐	50	カマド	
2	須恵坏	(14.6)	2.8	10.0	I J L	良好	褐灰	30	覆土	南比企産 底部回転ヘラケズリ
3	須恵坏		1.0	(10.8)	B E J	良好	灰白	25	覆土	産地不明 底部回転糸切後全面回転ヘラケズリ
4	須恵坏		1.5	8.2	I J	良好	褐灰	25	覆土	南比企産 底部回転糸切後周辺ヘラケズリ
5	土師坏	(12.7)	4.2	(6.8)	B D E J	良好	橙	60	覆土	内面黒色処理
6	須恵坏	(13.0)	3.4	5.5	F H J	良好	灰白	50	覆土	末野産 底部回転糸切
7	須恵坏	(12.6)	3.1		J L	良好	灰	25	覆土	末野産
8	須恵坏		2.9	5.6	J L	良好	灰	30	覆土	末野産 底部回転糸切
9	須恵皿	13.3	2.5	6.3	F H J	良好	オリーブ灰	50	覆土	末野産 底部回転糸切
10	須恵高台椀		5.3	(7.0)	H J L	良好	灰	20	覆土	末野産
11	須恵蓋	(18.0)	3.1		B I J L	良好	灰	30	覆土	南比企産 天井部回転ヘラケズリ
12	土師台付甕		3.3	(9.2)	A B D J L	普通	明赤褐	65	覆土	
13	須恵甕	(24.0)	8.8		H J L	良好	灰	15	覆土	末野産

第496号住居跡出土土錘観察表（第91図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
14	7.60	2.70	0.70	40.88	C b II	B	褐灰	100	
15	6.20	2.30	0.50	28.17	B b IV	C	にぶい黄褐	100	
16	7.70	2.00	0.60	22.14	B a III	A	黒褐	100	1区
17	6.80	2.40	0.45	30.58	B b III	B	灰褐	100	1区
18	6.00	2.10	0.70	20.48	B b IV	C	褐灰	100	
19	6.30	1.90	0.40	15.42	C b IV	B	褐灰	100	2区
20	6.50	1.80	0.60	17.21	B a III	B	にぶい橙	85	
21	6.85	2.05	0.45	23.85	B b III	C	にぶい橙	100	1区
22	5.45	2.00	0.50	16.25	B a V	A	灰黄褐	100	
23	5.80	2.25	0.55	25.70	B a III	C	黒褐	90	2区
24	5.40	2.00	0.55	14.42	B a V	A	暗褐	100	カマド
25	(6.00)	2.00	0.60	20.83	—	A	橙	75	2区
26	6.30	1.70	0.50	14.98	B a IV	C	黄橙	100	1区
27	5.35	1.60	0.55	12.41	B a V	C	橙	100	2区
28	(5.80)	1.25	0.40	7.23	B a IV	C	褐灰	90	カマド
29	5.05	1.25	0.40	5.96	B b V	B	橙	100	
30	(5.20)	1.70	0.40	10.38	B a IV	B	褐灰	85	
31	(4.80)	1.80	0.55	10.97	B a IV	C	にぶい黄橙	—	2区
32	4.60	1.70	0.40	9.66	C b V	C	にぶい橙	100	1区
33	5.00	1.60	0.45	9.65	B a V	A	浅黄	90	
34	4.30	1.35	0.25	6.21	A a V	A	浅黄橙	100	

第496号住居跡出土土錘観察表（第91図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
35	(4.70)	1.90	0.45	9.92	C b III	B	褐灰	60	1区
36	(4.20)	1.75	0.40	9.99	B a V	A	明赤褐	75	
37	(4.30)	1.80	0.40	12.06	B a V	C	にぶい赤褐	75	カマド
38	(3.70)	2.15	0.50	14.75	B b IV	C	橙	55	1区
39	(2.65)	1.85	0.45	6.41	—	C	黒	20	
40	(2.60)	1.60	0.50	5.18	—	A	橙	20	
41	(2.25)	1.95	0.65	6.04	—	C	黒褐	15	
42	(2.10)	1.90	0.65	4.96	—	C	暗褐	20	
43	(2.55)	1.60	0.45	4.37	—	C	にぶい橙	15	
44	(2.55)	(2.00)	(0.45)	4.60	—	C	橙	10	

第498号住居跡（第92・93図）

J・K-20グリッドに位置する。第500号住居跡に切られ、第499・511号住居跡・第22号掘立柱建物跡を切る。カマド煙道部先端は攪乱で壊されていた。検出された規模は、東西3.24mで、南北は2.08mである。深さは0.33～0.42mである。主軸方位はN-28°-Wを指す。

床面はやや起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。東壁は幅14cm程の棚状となっていた。

カマドは北壁中央よりやや東に設置される。燃烧部は10cm程掘り込み、急激に立ち上がって煙道部となる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、74×50cmの隅丸長方形で、深さは14cmである。

遺物は、覆土及びカマドを中心に平安時代の土師器・須恵器の破片を多く出土した。須恵器は坏・椀類の破片、土師器は甕類の破片が多かったが、殆ど接合しなかった。また、灰釉陶器片が4片出土した。

図示可能な遺物は、須恵器高台付椀5・皿2・甕1・長頸瓶1、土師器台付甕2、灰釉椀1、鉄製鑊子1、棒状鉄製品1、土錘2点であった。

須恵器の高台付椀・皿は、全て末野産と考えられる。1は住居東壁よりで、5は北西コーナーから出土した。

7の灰釉椀は、東濃産と考えられる。内面にハケ塗りにより施釉されていた。

9・10は、土師器台付甕で、胎土の特徴から同一個体であったと思われるが、接合しなかった。

11は、須恵器甕で、口縁部がコの字となる特異な

甕である。底部を欠損する。胴部下半部は縦方向にヘラナデされ、上半部はロクロの回転を利用したヘラナデが施される。口唇部外面は強い横ナデにより、端部が玉縁状となる。胎土の特徴から、末野産の可能性はある。

12は、須恵器長頸瓶である。頸部以上を欠損する。高台部は幅広で、やや内側に踏ん張る形となる。全体的に仕上げは丁寧で、硬質で、光沢感がある。胎土にも細かな砂粒を含むほかは、精選された胎土である。胎土・高台の特徴から、東金子産の須恵器の可能性はある。

13は、鑊子（けぬき）と思われる鉄製品である。4片に割れていたが、完形品である。支点部分はU字型に曲がり、両片とも徐々に窄まりながら端部にいたる。

14は、棒状の鉄製品で、断面が正方形の角棒状の鉄片である。器種は明らかに出来なかった。

第500号住居跡（第92・94図）

J・K-20グリッドに位置する。第498・499・502・511号住居跡・第22号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡が最も新しい。周辺の遺構と同時に調査したため、南壁は検出できず土層断面から復元した。平面形は東西に長い長方形で、長軸が3.28m、短軸は2.18m、深さは0.25～0.30mである。主軸方位はN-27°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

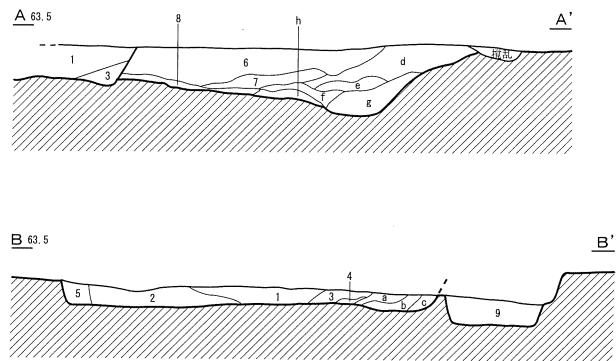
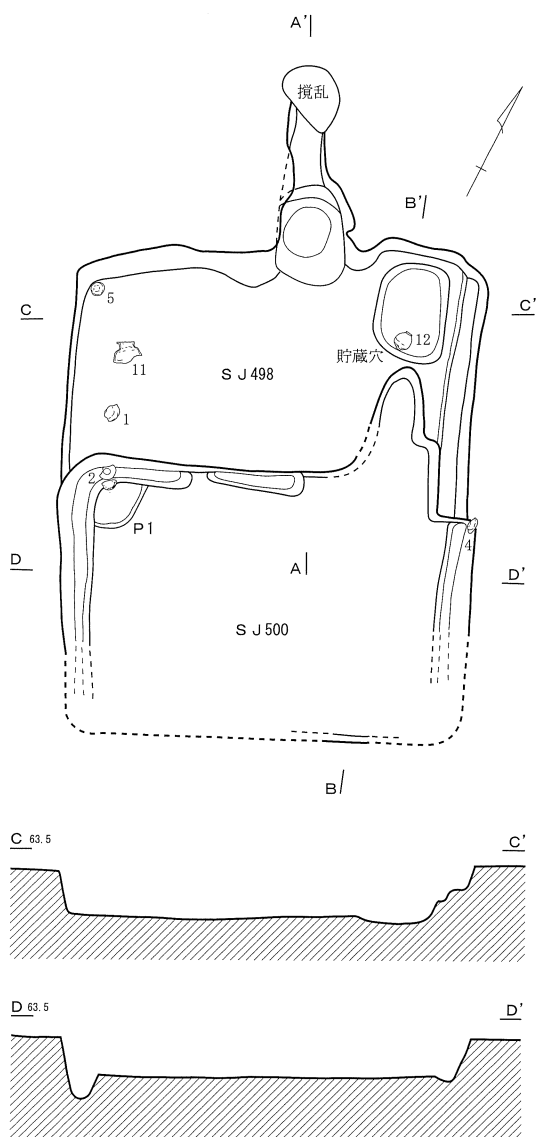
カマドは北壁の北東コーナー近くに設置される。燃烧部は床面を5cmほど掘り込み急激に立ち上がる。貯蔵穴は検出されなかったが、北西コーナーに深さ12cmのP1が検出された。壁溝は断続的に検出され、幅22~30cm、深さ4~18cmである。

遺物は、主に覆土から、平安時代の土師器・須恵器が出土した。遺物は小片が多く、器種の判別が不可能なものが多かった。また、殆ど接合しなかったが、接合する遺物の中には、重複する第498号住居

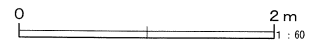
跡の遺物と接合するものもあった。

図示可能な遺物は、須恵器坏2・高台付椀2・皿2、灰釉長頸瓶2、灰釉椀1、鉄鏃1、土錘5点であった。

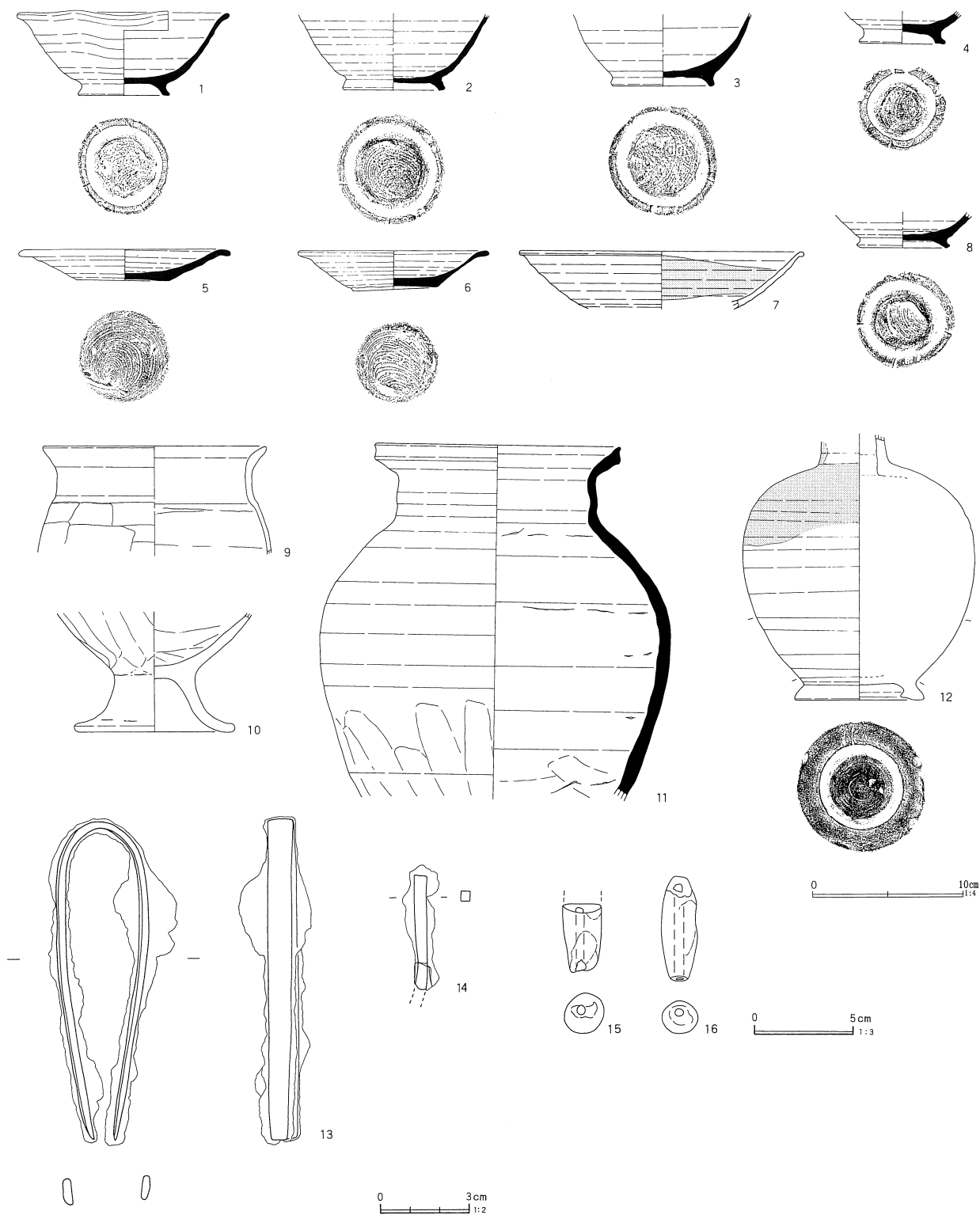
10の鉄鏃は、茎端部と逆刺の一方を欠損する。身部は両刃で、三角形を呈し、若干内湾する。本遺跡出土の鉄鏃の中では、大きく、重量もあり、銛の可能性もある。



- | | | |
|-----------|------------------|----------------------|
| S J 5 0 0 | | |
| 1 | 黒褐色 (10YR3/2) | 地山粒子 炭化粒子 |
| 2 | 暗褐色 (10YR3/4) | 地山ブロック多 |
| 3 | 黒褐色 (10YR3/2) | 地山ブロック多 炭化粒子 |
| 4 | 褐色 (10YR4/4) | 地山ブロック多 |
| 5 | 黒褐色 (10YR3/2) | 地山ブロック少 |
| S J 5 0 0 | カマド | |
| a | 暗赤褐色 (2.5YR3/3) | 地山ブロック・焼土ブロック多 天井崩落土 |
| b | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山ブロック多 暗褐色土ブロック |
| c | 黒褐色 (10YR3/2) | 地山ブロック |
| S J 4 9 8 | | |
| 6 | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック多 炭化粒子 埋め戻し |
| 7 | 褐色 (10YR4/4) | 地山ブロック多 |
| 8 | 黒褐色 (10YR3/1) | 炭化物層 |
| 9 | 褐色 (10YR4/4) | 地山シルト・黒色土互層 |
| S J 4 9 8 | カマド | |
| d | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック 天井部焼土ブロック |
| e | 褐色 (10YR4/4) | 地山 焼土ブロック |
| f | 黒褐色 (10YR3/2) | 地山ブロック 炭化粒子 焼土粒子 |
| g | 暗褐色 (10YR3/3) | 焼土粒子・焼土ブロック多 |
| h | 黒褐色 (10YR3/1) | 灰多 灰掻き出し層 |



第92図 第498・500号住居跡



第93図 第498号住居跡出土遺物

第498号住居跡出土遺物観察表 (第93図)

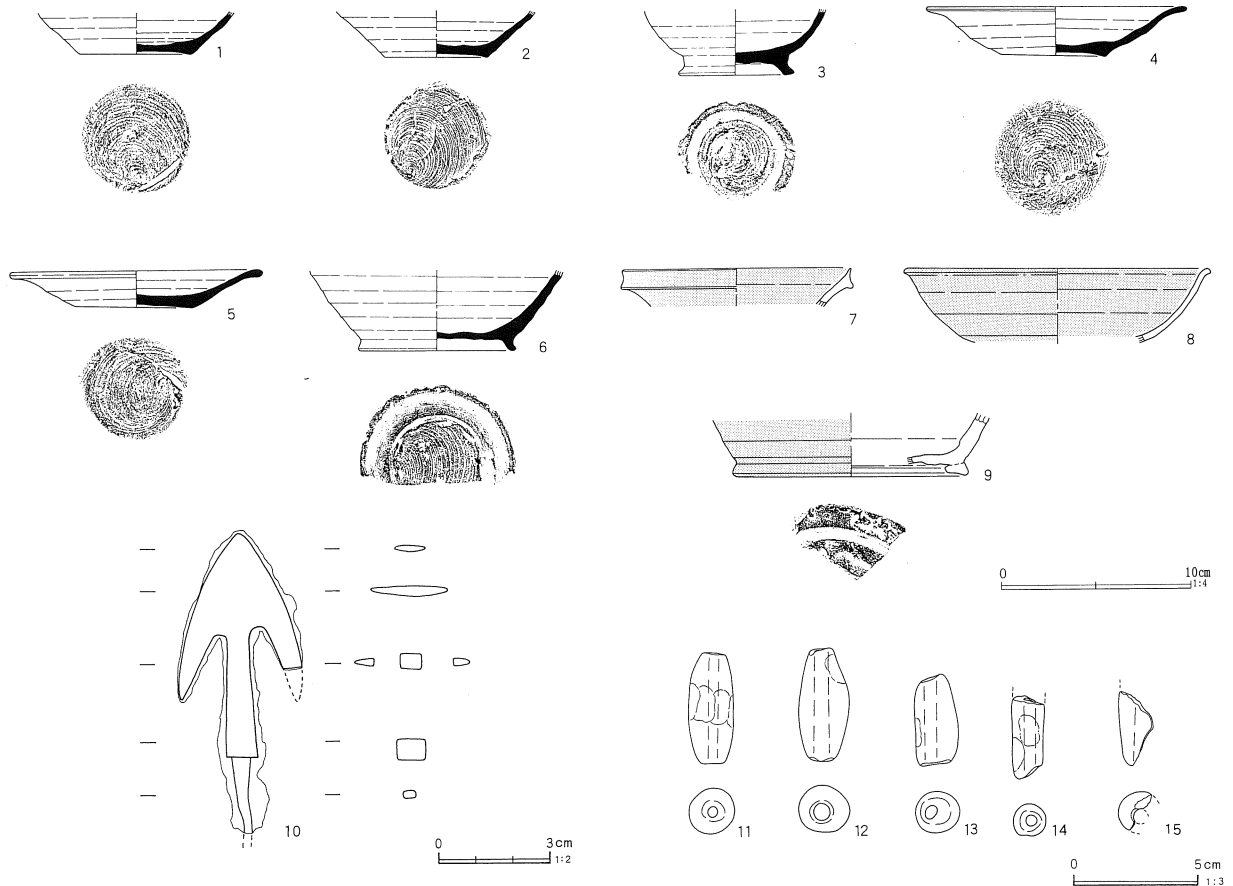
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵高台碗	(14.0)	5.5	6.2	A B J L	良好	灰	50	+7.7cm	末野産 口縁部片口状
2	須恵高台碗		5.1	6.6	A B H L	良好	灰	40	カマド	末野産 底部回転糸切後高台貼付

第498号住居跡出土遺物観察表（第93図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
3	須恵高台碗		4.9	6.9	B E J L	不良	にぶい橙	60	カマド	末野産 底部回転糸切後高台貼付
4	須恵高台碗		2.2	5.5	A B H	普通	灰	80	カマド	末野産 底部回転糸切後高台貼付
5	須恵皿	14.1	2.1	6.1	A B H J	良好	褐灰	100	+9.7cm	末野産 底部回転糸切
6	須恵皿	12.6	2.7	5.8	A B J	良好	灰	80	覆土	末野産 底部回転糸切 歪み著しい
7	灰釉碗	(19.0)	3.8		B	良好	灰白	15	覆土	光ヶ丘 K-90 施釉 ハケヌリ
8	須恵高台碗		2.4	5.6	A B E H L	普通	灰	75	カマド	末野産 底部回転糸切後高台貼付
9	土師台付甕	(15.0)	7.2		B D E J L	普通	にぶい赤褐	20	カマド	
10	土師台付甕		7.9	10.8	B D E J L	普通	にぶい赤褐	80	カマド	
11	須恵甕	(16.2)	23.5		J L	良好	灰	40	+10.4cm	末野産
12	須恵長頸瓶		17.6	8.6	B J L	良好	灰	100	+7.2cm	東金子産 外面肩部自然釉 ヘラ記号「X」
13	鍬子	現存長10.65cm 幅3.10cm 厚さ0.30cm 重さ39.95g							覆土	4片に割損するが完形品
14	棒状鉄製品	現存長3.85cm 幅0.45cm 厚さ0.35cm 重さ5.64g							覆土	断面正方形を呈する角棒状の鉄片

第498号住居跡出土土錘観察表（第93図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
15	(3.30)	2.00	0.50	12.71	—	A	赤褐	—	カマド
16	5.10	1.80	0.40	10.27	B a V	C	にぶい赤褐	90	カマド



第94図 第500号住居跡出土遺物

第500号住居跡出土遺物観察表（第94図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏		2.8	6.0	DEFHJ	普通	灰黄	60	覆土	末野産 底部回転糸切
2	須恵坏		2.5	5.6	ABJ	良好	灰	55	+13.8cm	末野産 内面底部朱墨 ² 赤色付着有り
3	須恵高台椀		3.5	6.2	BFJL	普通	灰	50	覆土	末野産 底部回転糸切後貼付高台
4	須恵皿	13.8	2.6	5.6	BEHJ	普通	暗赤褐	100	+14.2cm	末野産 底部回転糸切
5	須恵皿	13.4	1.9	6.2	BHJL	良好	灰	60	覆土	末野産 底部回転糸切
6	須恵高台椀		4.3	8.0	ABEFHJ	普通	灰オリーブ	60	覆土	末野産 底部回転糸切
7	灰釉長頸瓶	(12.0)	2.0		F	良好	灰白	10	カマド	産地不明
8	灰釉椀	(15.8)	4.0		BF	良好	灰白	15	覆土	猿投産 K-90 施釉 ハケヌリ
9	灰釉長頸瓶		3.4	(12.2)	F	良好	灰白	20	覆土	産地不明
10	鉄鏃	現存長7.90cm 重さ22.73g							覆土	茎端部と逆刺の一方を欠く

第500号住居跡出土土錘観察表（第94図）

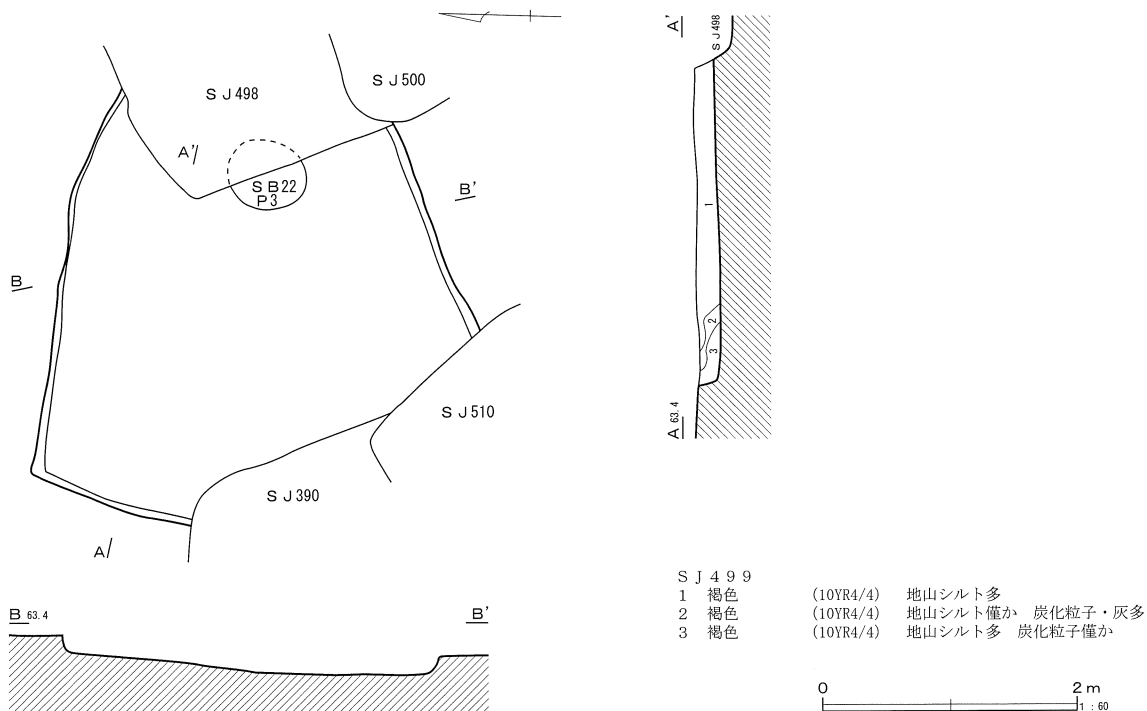
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
11	4.35	1.85	0.40	13.77	BbV	C	黒褐	100	
12	4.40	2.00	0.65	13.63	BaV	C	明赤褐	100	
13	3.60	1.70	0.55	9.07	BaVI	C	灰黄褐	100	
14	(3.25)	1.30	0.45	4.81	—	C	にぶい黄橙	35	
15	(2.95)	(1.70)	(0.55)	3.15	—	C	橙	15	

第499号住居跡（第95・96図）

J・K-20グリッドに位置する。第390・498・500・510号住居跡に切られ、第511号住居跡を切る。北壁から西壁の一部と、南壁の一部が検出されたのみである。南壁の方向から平面形は台形に近くなると思

われる。検出された規模は、南北3.39mで、北壁は3.14mである。深さは0.12~0.20mである。主軸方位は北壁でN-96°-Eを指す。

床面は平坦だが、南側が低くなる傾向が見られる。壁は開き気味に立ちあがる。



第95図 第499号住居跡

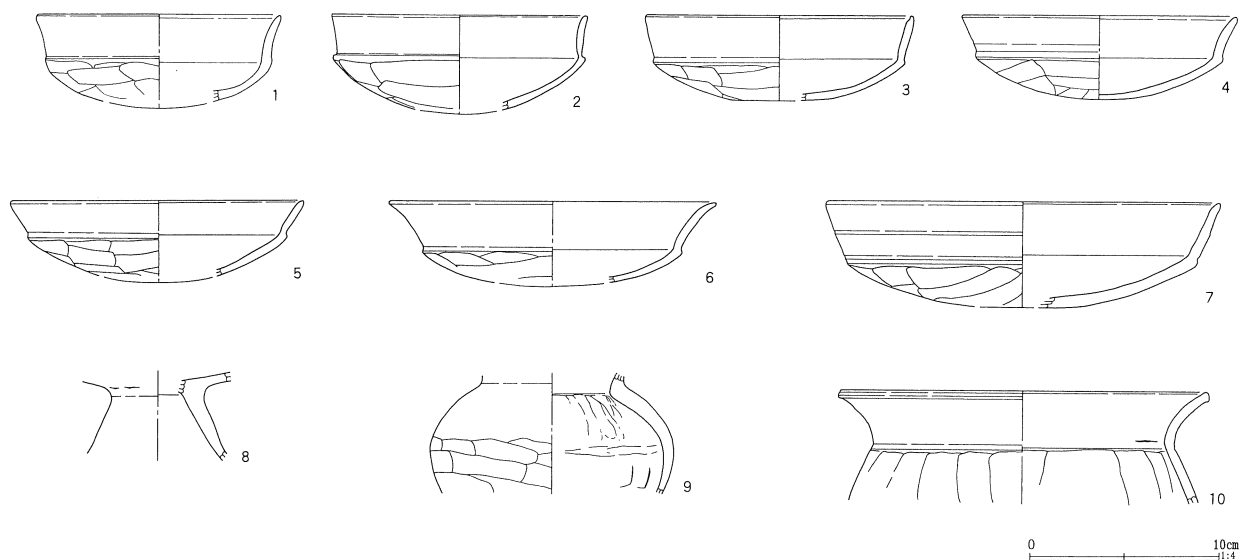
カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が多く出土したが、小片が多く接合は殆どしなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏7・高坏1・壺1・甕

1であった。

7は、口径が21cmとなる大型の坏である、丸底で、口縁部は、強い横ナデにより、弱い段が生じる。口縁部と底部の境界は弱い沈線上となっていた。



第96図 第499号住居跡出土遺物

第499号住居跡出土遺物観察表 (第96図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(13.0)	4.6		BDEJL	普通	にぶい橙	20	覆土	
2	土師坏	(13.6)	5.0		BEJL	普通	橙	30	覆土	
3	土師坏	(14.0)	4.5		BEJL	不良	橙	25	覆土	
4	土師坏	(14.4)	4.5		BDEJL	普通	明赤褐	50	覆土	
5	土師坏	(15.6)	4.0		BDEJ	普通	明赤褐	20	覆土	
6	土師坏	(17.4)	4.2		BEJ	普通	にぶい橙	50	覆土	
7	土師坏	21.0	5.6		EJ	普通	にぶい赤褐	80	覆土	
8	土師高坏		4.6		BJ	普通	にぶい橙	80	覆土	
9	土師小型壺		6.4		BEJ	不良	にぶい橙	60	覆土	
10	土師甕	(19.4)	5.9		BCEJL	普通	にぶい黄橙	20	覆土	やや歪みあり

第501号住居跡 (第97・98図)

J-19・20グリッドに位置する。第392号住居跡に切れ、第503・504号住居跡を切る。東側は大きく攪乱で壊されている。平面形は東西に長い長方形と考えられる。検出されたのは南北2.72mで、東西は2.8m以上と思われる。深さは0.12~0.14mである。主軸方位はN-27°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは北壁に設置される。燃焼部の掘り込みは

僅かで急激に立ち上がる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南壁で途切れて検出され、幅10~18cm、深さ4~10cmである。切れた部分でややずれている。ピットは1本検出され、深さは18cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器が出土したが、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1・鉢1・甕1、土錘5点であった。

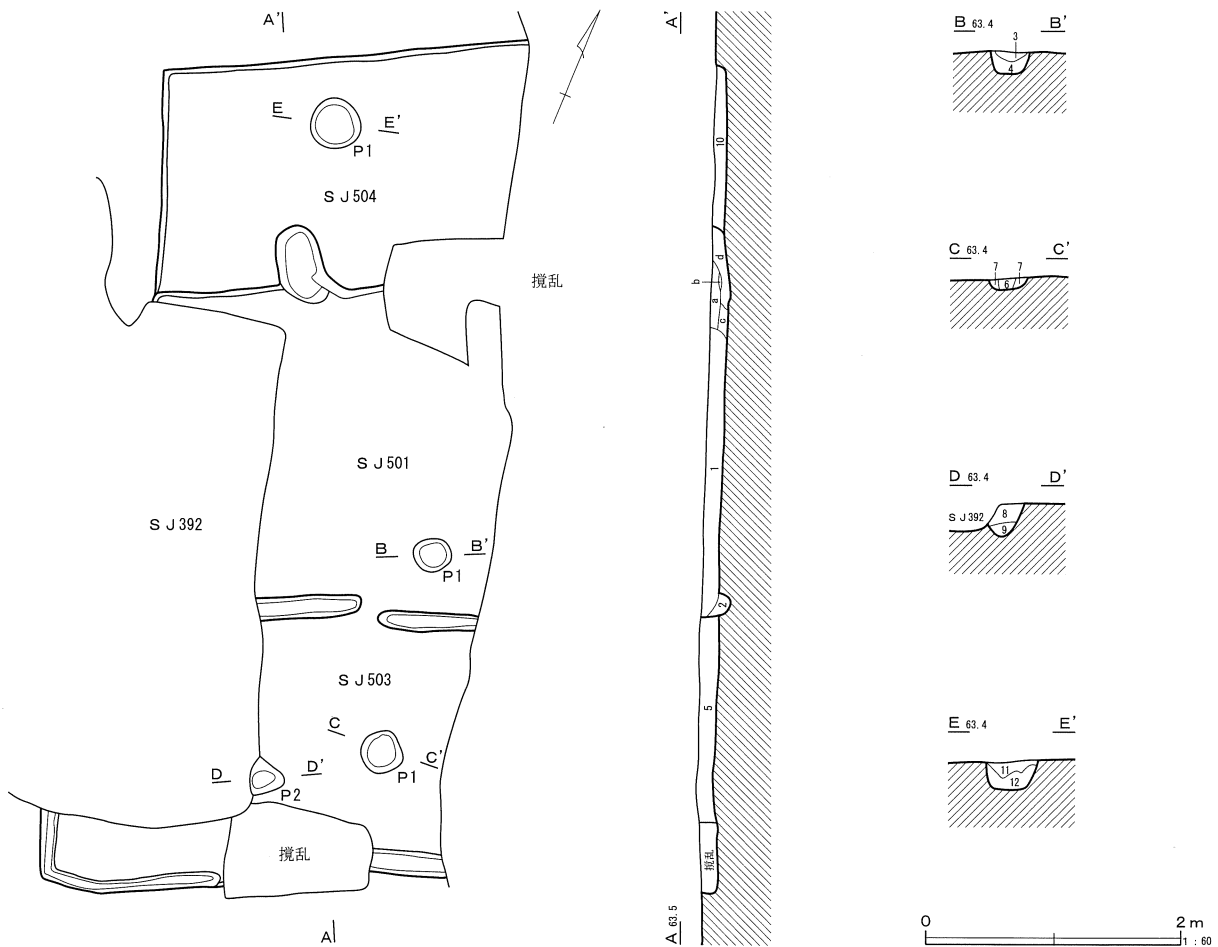
第503号住居跡 (第97・99図)

J-20グリッドに位置する。第392・501号住居跡に切れ、第511号住居跡を切る。東側と南壁中央は攪乱で壊されている。検出されたのは東西3.24m、南北2.08mで、深さは0.12~0.16mである。主軸方位は南壁でN-64°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあが

る。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南壁から西壁に検出され、幅10~20cm、深さ3~4cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは9cm、26cmである。

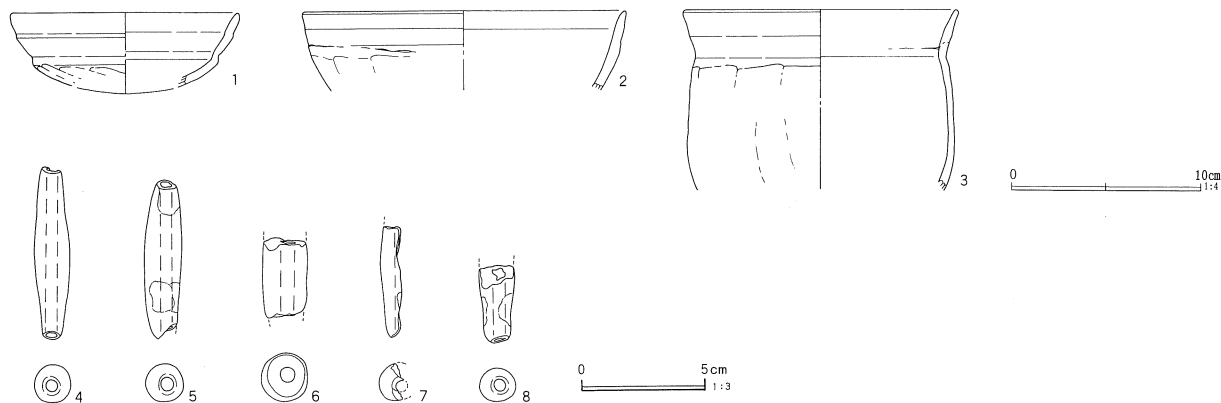
遺物は、古墳時代後期の土師器片が多く出土したが、図示可能な遺物は土錘7点であった。



- S J 5 0 1
- 1 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子・焼土・地山ブロック斑状
 - 2 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子少
 - 3 暗褐色 (10YR3/4) 地山ブロック多
 - 4 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子・地山ブロック少
- S J 5 0 1 カマド
- a 暗褐色 (10YR3/4) 焼土多 天井崩落土
 - b 暗褐色 (10YR3/4) 炭化粒子多 焼土 (5mm)・地山ブロック少
 - c にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山ブロック 焼土少
 - d 黄褐色 (10YR5/6) 地山土主体 炭化粒子少

- S J 5 0 3
- 5 黄褐色 (10YR5/6) 炭化粒子 焼土
 - 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子少
 - 7 黄褐色 (10YR4/6) 地山土主体 焼土少
 - 8 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子 焼土 地山ブロック
 - 9 暗褐色 (10YR3/3) 8層に似るが地山ブロックより多
- S J 5 0 4
- 10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子・地山ブロックまだら
 - 11 暗褐色 (10YR3/3) 地山ブロック・炭化粒子多
 - 12 褐色 (10YR4/6) 地山土主体 炭化粒子少

第97図 第501・503・504号住居跡



第98図 第501号住居跡出土遺物

第501号住居跡出土遺物観察表 (第98図)

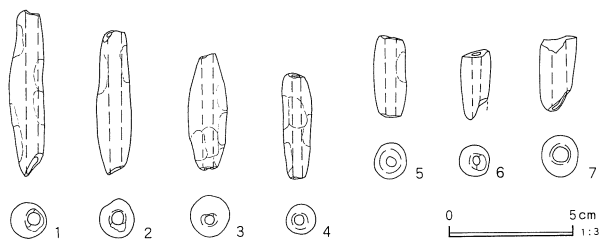
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.9		DEJ	普通	にぶい黄橙	10	B区	
2	土師鉢	(17.1)	4.2		ABEJ	良好	橙	15	覆土	内面黒色(煤か?)
3	土師小型甕	(14.4)	9.5		ABDJL	普通	浅黄橙	25	カマド	内外面二次焼成

第501号住居跡出土土錘観察表 (第98図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	6.80	1.45	0.45	10.03	B a III	C	灰褐	95	B区
5	6.25	1.50	0.55	10.45	B a IV	A	灰黄褐	95	カマド
6	(3.10)	1.90	0.55	10.50	—	C	橙	—	カマド
7	(4.40)	(1.50)	0.50	4.66	B a IV	C	にぶい黄橙	40	
8	(3.05)	1.40	0.50	4.19	—	C	にぶい褐	40	A区

第503号住居跡出土土錘観察表 (第99図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	6.50	1.45	0.50	9.48	B a III	C	橙	95	A区
2	5.65	1.55	0.55	8.32	B a IV	B	黒褐	95	A区
3	4.55	1.65	0.40	9.38	B a V	B	浅黄橙	100	A区
4	4.10	1.20	0.40	5.41	B a V	B	黒褐	100	B区
5	3.20	1.40	0.40	5.65	B a VI	C	黒褐	100	B区
6	(2.75)	1.30	0.40	3.30	B b VI	C	黒褐	90	B区
7	(2.95)	1.60	0.60	5.24	—	C	浅黄橙	20	A区



第99図 第503号住居跡出土遺物

第504号住居跡 (第97図)

J-19・20グリッドに位置する。第392・501号住居跡に切られ、第401号住居跡を切る。東側は大きく攪乱で壊されている。検出された規模は北壁が2.94 m、西壁1.80 mである。深さは0.07~0.11 mと浅い。主軸方位は北壁でN-62°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。ピットは1本検出され、深さは22cmである。

遺物は、土師器・須恵器の破片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第502号住居跡 (第100・101・102図)

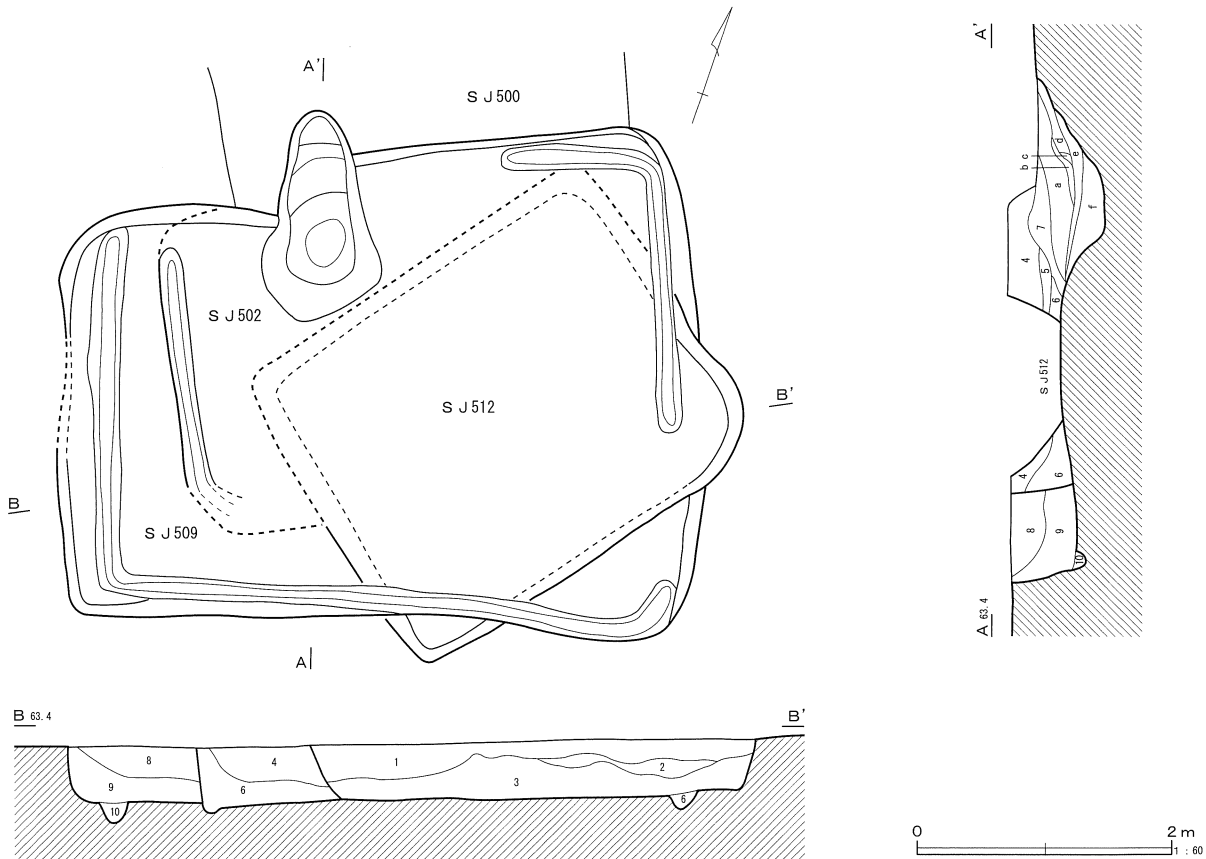
K-20・21グリッドに位置する。第500・512号住居跡に切られ、第509・513・526号住居跡・第22号掘立柱建物跡を切る。周辺の遺構と同時に調査を進めたため、南壁は検出できなかった。平面形は東西に長い長方形で、長軸が4.20m、短軸は3.0m前後と考えら

れる。深さは0.44~0.50mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。カマドを挟んで壁がずれる。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは北壁中央より西寄りに設置される。燃烧部は30cmと深く掘り込まれ、段を持って立ち上がる。カマドd層とe層の境は焼けており、e層は最終段階の火床面と考えられる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北東コーナー近くと西壁で検出され、幅14~22cm、深さ7~13cmである。

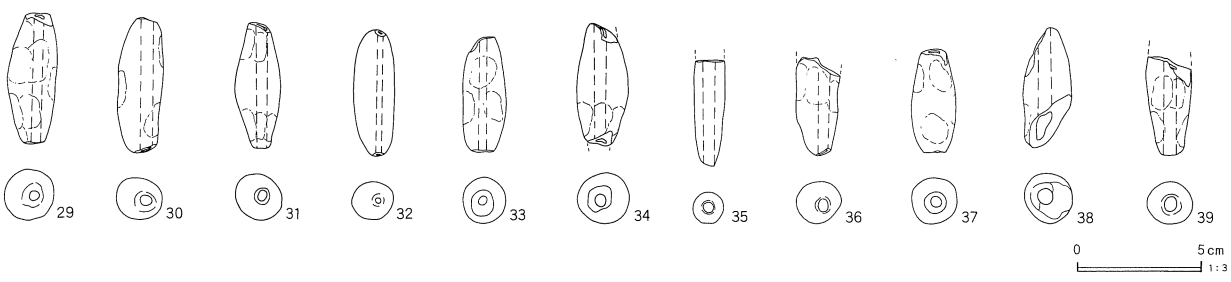
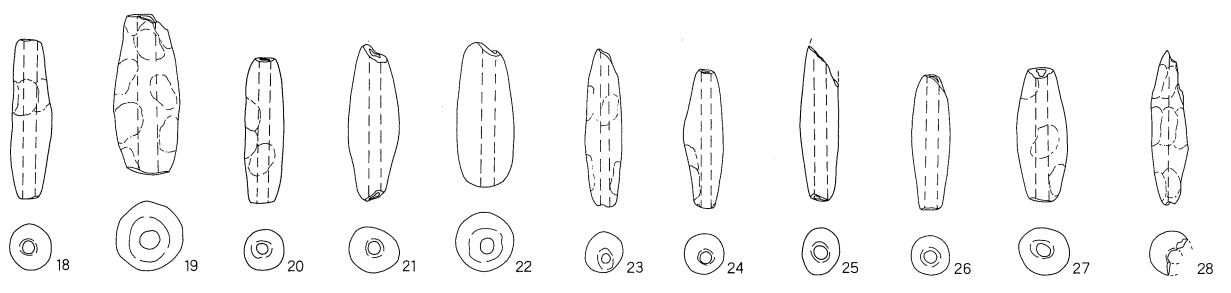
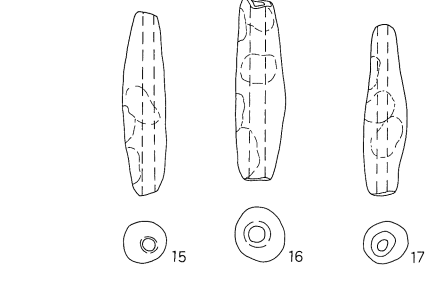
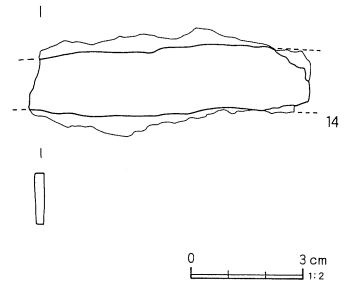
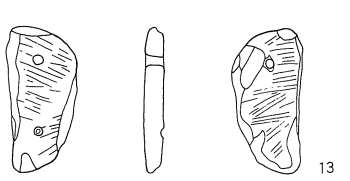
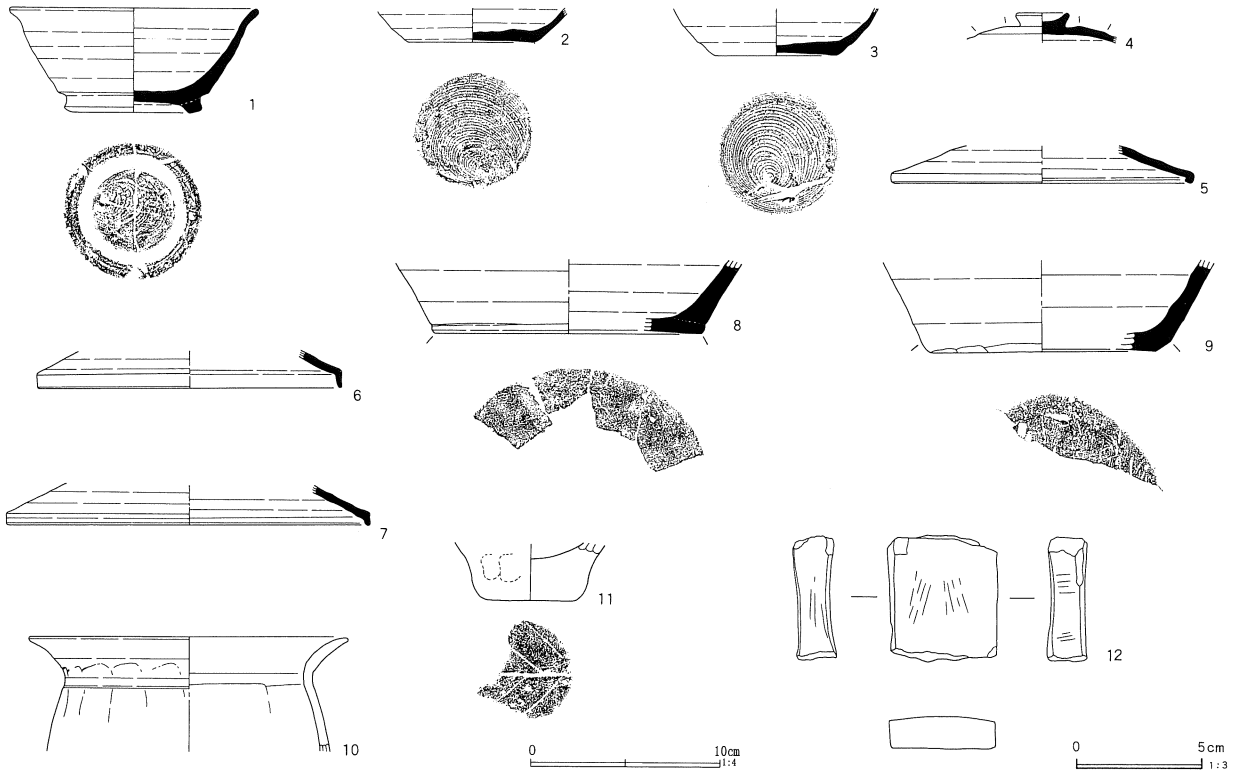
遺物は、平安時代の土師器・須恵器が多く出土したが、小片が多く、殆ど接合しなかった。



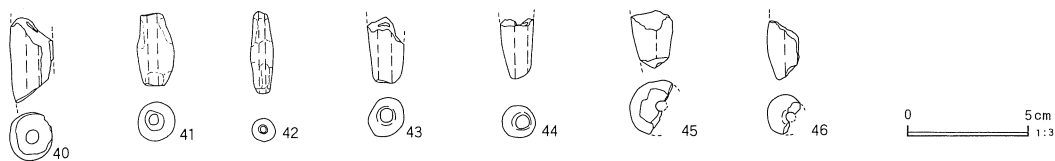
- S J 5 1 2
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山粒子多
 - 2 褐色 (10YR4/6) 炭化粒子少
 - 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子・炭化粒子少
- S J 5 0 2
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土やや多 地山ブロック・炭化粒子少
 - 5 褐色 (10YR4/4) 地山ブロック多
 - 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山やや多 炭化粒子・焼土ブロック僅か
 - 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子・灰多

- S J 5 0 2 カマド
- a にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山ブロック極多 焼土ブロック少
 - b 褐色 (10YR4/4) 地山ブロック・焼土ブロック多 天井崩落土
 - c にぶい黄褐色 (10YR5/3) 地山ブロック極多 焼土ブロック少
 - d にぶい黄褐色 (10YR5/3) 地山ブロック主体 焼土ブロック僅か
 - e 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子・灰極多 焼土ブロック僅か
 - f 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子・灰多 地山ブロック僅か
- S J 5 0 9
- 8 黒褐色 (10YR3/2) 焼土ブロック・炭化粒子僅か
 - 9 にぶい黄褐色 (10YR4/4) 地山ブロック多 焼土ブロック 炭化粒子
 - 10 褐色 (10YR4/4) 地山土多

第100図 第502・509・512号住居跡



第101图 第502号住居跡出土遺物 (1)



第102図 第502号住居跡出土遺物 (2)

第502号住居跡出土遺物観察表 (第101図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵高台碗	13.0	5.5	5.9	A H J L	普通	灰	40	覆土	末野産 底部回転糸切
2	須恵坏		1.8	6.5	B H J	良好	灰	100	覆土	末野産 底部回転糸切
3	須恵坏		2.5	6.4	A F H J L	良好	灰	70	覆土	末野産 底部回転糸切
4	須恵蓋		1.6		E F J L	普通	灰	25	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ
5	須恵蓋	(15.5)	2.0		F H J	良好	灰	10	覆土	末野産
6	須恵蓋	(16.0)	2.0		B I J	良好	灰	5	覆土	南比企産
7	須恵蓋	(19.0)	2.2		F H J L	普通	灰白	10	覆土	末野産
8	須恵甕		3.9	(14.1)	B F H J L	普通	灰	25	覆土	末野産 底部手持ちヘラケズリ
9	須恵甕		4.8	(11.8)	B F H J L	普通	灰	25	覆土	末野産
10	土師甕	(17.0)	6.0		A D H J L	普通	灰黄褐	25	覆土	
11	土師壺		3.1	5.1	A J L	普通	橙	60	覆土	底部木葉痕 体部指頭痕明瞭
12	砥石	残存長4.90cm 幅4.20cm 厚さ1.30cm				良好	灰白		覆土	重さ55.17g 砂岩 上下欠損 三面使用
13	石製模造品	縦1.70cm 横3.80cm 厚さ0.50cm			孔径0.20cm	重さ6.44g			覆土	滑石製 有孔円板
14	板状鉄製品	現存長7.40cm 幅2.30cm 厚さ0.40cm				重さ22.87g			覆土	

第502号住居跡出土土錘観察表 (第101・102図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
15	7.20	1.25	0.55	17.93	B a III	B	褐灰	100	
16	7.10	2.20	0.65	27.43	B a III	A	橙	—	
17	6.70	1.70	0.50	15.34	C a III	C	橙	90	
18	6.25	1.80	0.50	17.50	B a IV	C	橙	100	
19	6.25	2.70	0.80	39.95	B b IV	C	浅黄橙	95	カマド
20	5.65	1.60	0.50	15.10	B a IV	C	明黄褐	100	
21	6.10	2.05	0.50	18.76	C a IV	C	にぶい黄橙	95	
22	5.65	2.30	0.65	27.38	B a IV	C	灰白	100	
23	6.15	1.60	0.40	11.97	B a IV	C	褐	100	
24	5.40	1.60	0.45	11.06	C a V	C	褐灰	95	
25	6.05	1.85	0.55	15.27	B a IV	C	明赤褐	90	
26	5.30	1.55	0.55	11.52	B b V	C	にぶい褐	95	
27	5.25	2.05	0.60	18.70	B a V	C	浅黄橙	100	
28	6.00	1.75	0.55	8.44	B a IV	C	橙	45	
29	5.10	2.05	0.40	18.93	B b V	C	橙	95	
30	5.30	1.80	0.45	15.36	B a V	C	灰黄褐	100	
31	4.90	1.95	0.45	12.90	C a V	C	橙	100	
32	4.95	1.70	0.20	11.82	B a V	C	にぶい黄橙	100	
33	4.50	1.80	0.40	12.85	B a V	C	明赤褐	95	
34	(4.80)	2.10	0.50	16.35	C a V	C	橙	90	
35	(4.15)	1.35	0.40	5.86	B a IV	C	にぶい黄褐	70	
36	(3.80)	1.70	0.50	9.51	B a III	B	にぶい黄橙	50	
37	4.05	1.90	0.45	13.10	C b V	C	灰黄褐	95	
38	4.70	2.00	0.60	12.03	B a V	C	灰黄褐	75	
39	(3.90)	1.80	0.60	10.08	B a IV	C	にぶい黄褐	50	
40	(3.35)	1.90	0.55	8.41	C a VI	C	にぶい黄褐	35	
41	2.85	1.55	0.40	6.34	B a VI	C	橙	100	
42	3.20	0.90	0.25	2.46	C a VI	C	橙	100	
43	(2.60)	1.60	0.55	4.19	—	C	黒褐	20	

第502号住居跡出土土錘観察表（第102図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
44	(2.35)	1.30	0.50	2.92	—	B	にぶい橙	20	
45	(2.25)	2.20	0.40	5.53	—	C	にぶい黄橙	10	
46	(2.30)	1.60	0.40	3.12	—	C	灰黄褐	10	

図示可能な遺物は、須恵器高台付椀1・坏2・蓋4・甕2、土師器甕1・壺1、砥石1、板状鉄製品1、石製模造品1、土錘32点であった。

須恵器は、6の南比企産の須恵器蓋を除き、全て末野産であった。

13の石製模造品は、滑石製で、2孔穿たれているが、一方の孔は貫通していない。

第509号住居跡（第100・103図）

K-20グリッドに位置する。第502・512号住居跡に切られ、第508・510・513・526号住居跡を切る。平面形は東西に長い長方形で、長軸5.02m、短軸3.20m、深さは0.44~0.54mである。主軸方位は南壁でN-20°-Eを指す。

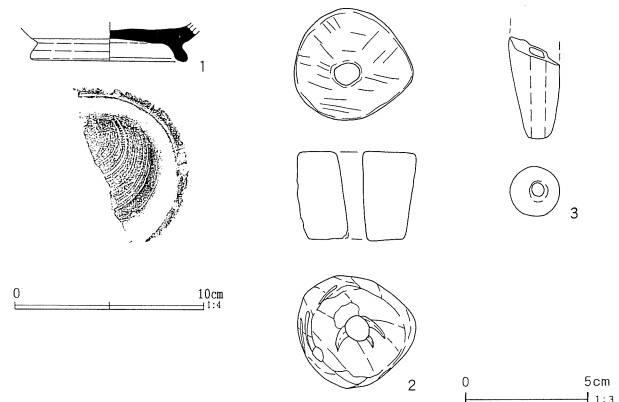
床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。東壁の一部は第502号住居跡と同位置と考えられる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西壁から南壁に検出され、幅12~28cm、深さ9~15cmである。西壁の壁溝は壁から離れて検出された。

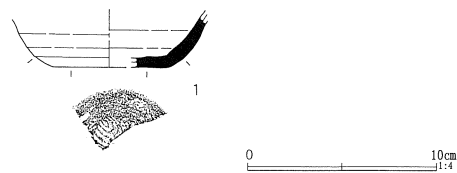
遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が出土したが、小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器高台付椀1、土製紡錘車1、土錘1点であった。

号と重複し、本住居跡が最も新しい。但し、周辺の住居跡と同時に調査したため北西側は検出できず、土層断面等から復元した。平面形は長方形で、長軸が3.30m、短軸は2.7m前後と考えられる。深さは0.40~0.46mである。主軸方位はN-38°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。カマド、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。遺物は、土師器・須恵器の小片が少量出土したが、図示可能な遺物は、須恵器坏1点のみであった。



第103図 第509号住居跡出土遺物



第104図 第512号住居跡出土遺物

第512号住居跡（第100・104図）

K-20グリッドに位置する。第502・509・513・526

第509号住居跡出土遺物観察表（第103図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵高台椀		2.1	8.0	A B F J	良好	灰	50	覆土	末野産 底部回転糸切後高台貼付
2	土製紡錘車	長径4.70cm	短径3.75cm		A B E J	良好	にぶい橙	100	覆土	厚さ3.50cm 孔径1.00cm 重さ85.83g

第509号住居跡出土土錘観察表（第103図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	4.00	2.00	0.50	10.28	B a II	C	にぶい橙	40	

第512号住居跡出土遺物観察表（第104図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏		3.1	(6.0)	A H J L	普通	灰黄	20	覆土	末野産 回転糸切後周辺・体部下端回転ヘラケズリ

第506号住居跡（第105・106・107図）

K-21・22グリッドに位置する。第507号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。第507号住居跡と同時に調査したため西壁は検出できなかった。平面形は東西に僅かに長い長方形で、長軸4.48m、短軸3.95m、深さは0.31～0.38mである。主軸方位はN-11°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土上層に大きな攪乱が見られた。

カマドは北壁中央より東寄りに設置される。燃焼部は25cm程掘り込み、段を持って煙道部へ続く。土層断面に明瞭な焼土が観察された。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁と南壁で検出され、幅9～28cm、深さ3～6cmである。ピットは4本検出され、

P1～P4の深さは12cm、11cm、15cm、16cmである。

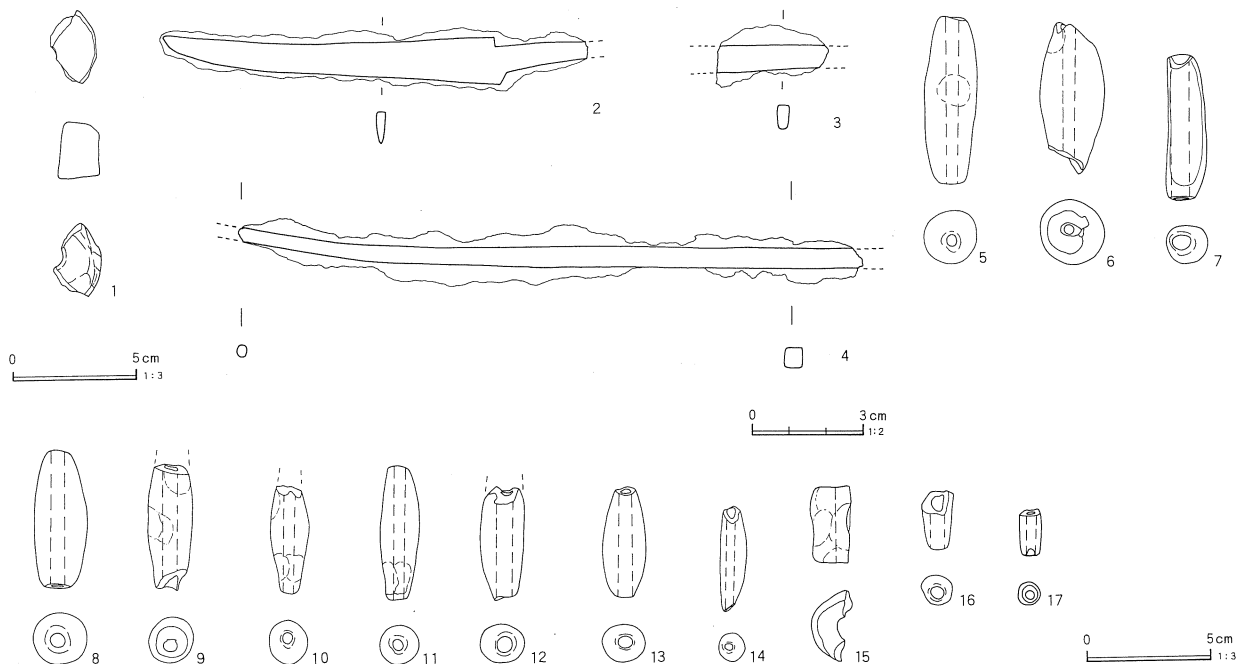
遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、小片が多く、図示可能な土器は出土しなかった。

図示可能な遺物は、土製紡錘車1、刀子1、棒状鉄製品1、不明鉄製品1、土錘13点であった。

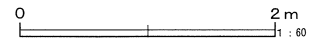
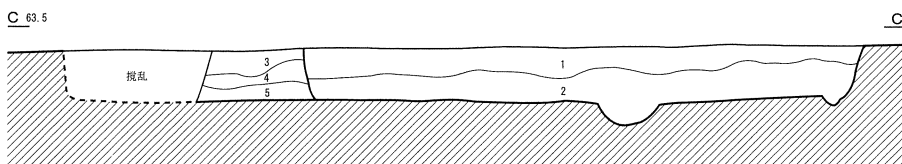
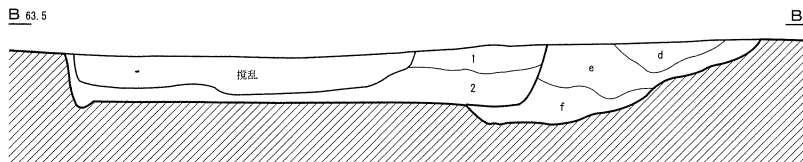
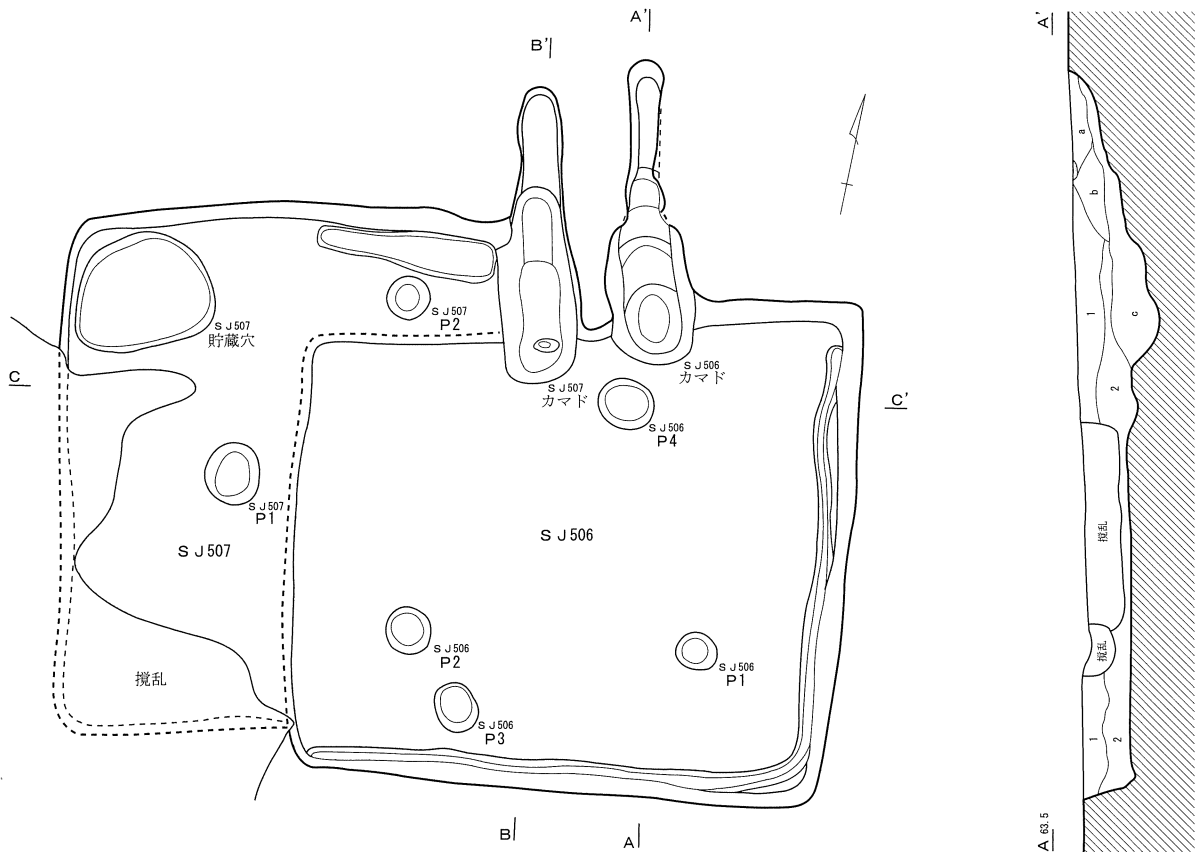
2の刀子は、両端部を欠損するが、原型をとどめていた。

また、重複する第507号住居跡と同時に調査したため、重複の境界付近の遺物については、今回遺物を2つの住居跡に分離できなかったため、第506・507号住居跡出土遺物（第107図）として報告する。

図示可能な遺物は、須恵器坏4・高台付碗1・甕1・長頸瓶1、土師器甕1、不明鉄製品1、刀子2、環状鉄製品1、土錘26点であった。



第105図 第506号住居跡出土遺物



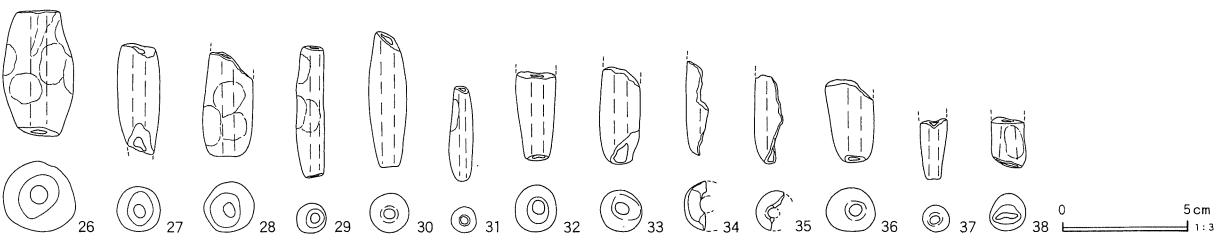
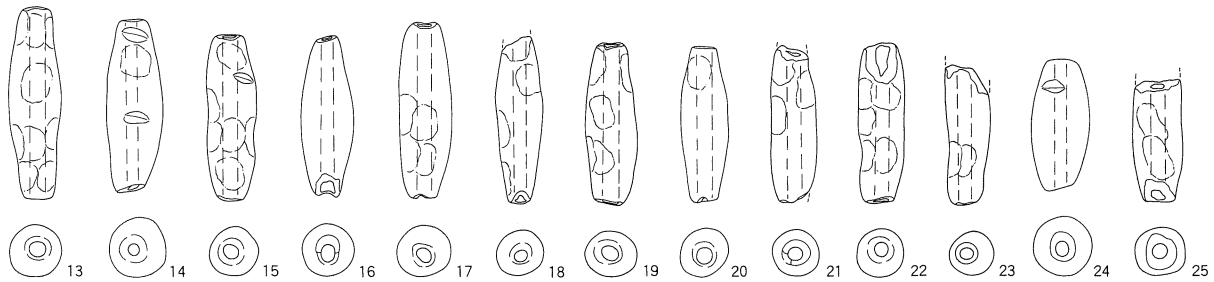
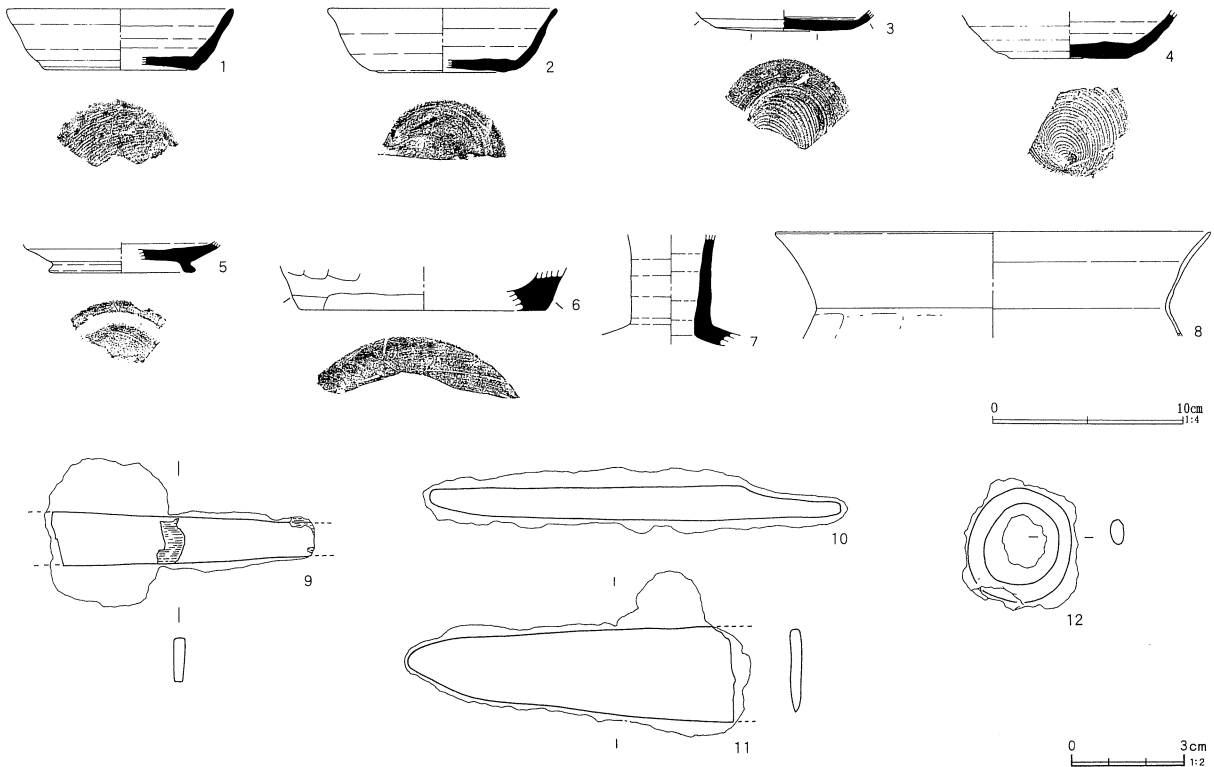
S J 5 0 6
 1 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色粒子・炭化粒子・焼土粒子多
 2 黒褐色 (10YR2/3) 黄褐色粒子・炭化粒子多 焼土粒子少

S J 5 0 6 カマド
 a 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子多 炭化粒子少
 b 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子・炭化粒子少
 c 黒褐色 (10YR3/2) 焼土・黄褐色粒子多 炭化粒子少

S J 5 0 7
 3 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色粒子・炭化粒子・焼土粒子多
 4 黒褐色 (10YR2/3) 黄褐色粒子多 炭化粒子・焼土粒子少
 5 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色粒子極多 炭化粒子・焼土粒子僅か

S J 5 0 7 カマド
 d 暗褐色 (10YR3/3) 焼土・黄褐色粒子多 炭化粒子少
 e 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色粒子・焼土粒子・焼土ブロック多
 f にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色粒子極多 焼土粒子少 焼土ブロック

第106図 第506・507号住居跡

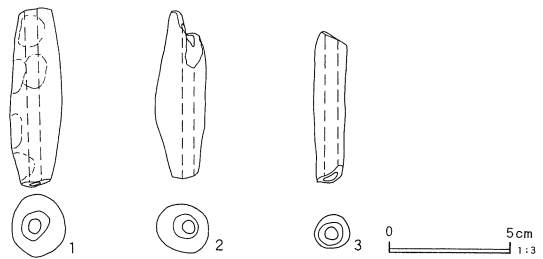


第107図 第506・507号住居跡出土遺物

第507号住居跡 (第106・107・108図)

K-21グリッドに位置する。第506号住居跡に切られ、第526号住居跡を切る。西壁から南壁は攪乱に壊される。検出された規模は、東西4.15m、南北4.16mで、深さは0.31~0.40mである。主軸方位はN-11°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味立ちあがる。



第108図 第507号住居跡出土遺物

カマドは北壁に設置される。カマドの左右で壁の位置が違うのは、元々段違いになっていたのか、カマドがコーナーに設置されていたのか判断できなかった。燃烧部は15cm程掘り込み、緩やかに立ち上がって煙道部となる。土層観察から埋められた可能性が高い。貯蔵穴は北西コーナーに設けられ、114×

90cmの楕円形で、深さは14cmである。壁溝はカマド左でのみ検出され、幅18～34cm、深さ5～7cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは28cm、11cmである。

遺物は、土師器・須恵器の小片が少量出土したのみで、図示可能な遺物は、土錘3点であった。

第506号住居跡出土遺物観察表（第105図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土製紡錘車	長径1.80cm	短径1.35cm		A B E	普通	橙	25	カマド	厚さ2.20cm 重さ11.15g
2	刀子	現存長11.40cm	背幅0.25cm	刃幅0.90cm					P3	両関平棟造りの刀子
3	不明鉄製品	現存長3.00cm	幅0.70cm	厚さ0.35cm					P3	
4	棒状鉄製品	残存長16.7cm	幅0.50cm						覆土	鉄鏃の可能性も考えられる

第506号住居跡出土土錘観察表（第105図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	6.60	2.10	0.50	28.28	B a III	C	灰褐	100	
6	(5.90)	2.60	0.40	30.77	—	C	にぶい黄橙	80	
7	5.70	1.70	0.80	12.31	B a IV	C	浅黄橙	100	カマド
8	5.40	2.10	0.60	21.47	B a V	C	にぶい黄橙	100	
9	(5.00)	1.80	0.50	15.40	—	C	にぶい黄橙	—	カマド
10	(4.30)	1.80	0.45	8.68	C a IV	C	灰白	70	P3
11	5.30	1.55	0.45	11.86	B a V	B	褐灰	100	カマド
12	(4.50)	1.70	0.65	11.09	B a III	C	灰黄褐	60	カマド
13	4.40	1.70	0.60	9.60	B a V	C	灰黄褐	100	カマド
14	4.10	1.10	0.30	4.27	B a VI	C	にぶい黄橙	100	
15	(3.00)	2.80	0.90	11.53	—	C	浅黄橙	—	
16	(2.30)	1.20	0.50	2.27	—	A	灰白	—	カマド
17	(1.90)	0.90	0.30	1.26	—	C	灰黄褐	—	カマド

第506・507号住居跡出土遺物観察表（第107図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	(11.8)	3.2	(7.3)	B H J L	普通	灰白	20	D区	末野産 底部回転糸切
2	須恵坏	(12.0)	3.3	(6.7)	E H J	普通	灰白	20	覆土	末野産 底部回転糸切
3	須恵坏		1.2	(7.2)	B I J	良好	灰黄	40	A区	南比企産 底部回転糸切後周辺ヘラケズリ
4	須恵坏		2.5	6.3	I J	良好	灰白	40	F区	南比企産 底部回転糸切
5	須恵高台碗		1.5	(7.6)	C I J	良好	灰	20	B区	南比企産 底部回転糸切
6	須恵甕		2.3	(13.0)	B I J L	良好	灰	30	カマド	末野産 底部手持ちヘラケズリ
7	須恵長頸瓶		5.8		B I J	良好	灰	80	D区	南比企産 外面自然釉
8	土師甕	(22.8)	5.5		A B E J	普通	橙	20	B区	磨耗著しい
9	刀子	現存長6.90cm	背幅0.30cm	刃幅1.08cm						刀子の茎部片 部分的に木質物が残存する
10	不明鉄製品	現存長8.65cm	背幅0.30cm	刃幅2.20cm						刀子か？
11	刀子	現存長10.80cm	刃幅0.86cm							身部片
12	環状鉄製品	現存長2.95cm	幅0.40cm	厚さ0.62cm						

第506・507号住居跡出土土錘観察表（第107図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
13	7.55	2.05	0.65	26.34	C a II	B	にぶい黄橙	100	A区
14	6.80	2.35	0.45	29.67	B a III	A	にぶい黄橙	95	F区
15	6.50	2.00	0.60	21.31	B b III	C	黒褐	100	F区
16	6.30	2.10	0.65	19.36	B a IV	C	橙	100	A区
17	6.90	2.10	0.65	24.44	B a III	C	にぶい黄褐	100	
18	6.50	1.85	0.50	16.03	B a III	C	にぶい黄橙	95	B区
19	6.30	2.05	0.70	20.32	B b IV	C	黒褐	100	A区
20	6.10	2.00	0.65	18.03	B b IV	C	褐灰	100	B区
21	6.15	1.90	0.60	17.67	B a IV	B	にぶい黄橙	90	B区
22	6.30	1.90	0.60	21.22	B b IV	C	にぶい黄橙	95	F区
23	(5.50)	1.75	0.50	13.81	B a II	C	褐灰	75	A区
24	5.15	2.35	0.60	25.84	B b V	B	にぶい黄橙	100	B区
25	(4.75)	2.00	0.60	16.81	B b IV	C	橙	75	D区
26	4.90	2.90	0.70	34.60	B b V	B	浅黄橙	100	A区
27	4.35	1.80	0.50	12.27	—	C	にぶい褐	80	C区
28	(4.05)	2.00	0.55	15.17	B b V	C	にぶい黄橙	75	C区
29	5.20	1.20	0.35	6.71	B b V	C	明赤褐	100	A区
30	5.30	1.50	0.45	11.16	B a V	C	にぶい黄橙	100	F区
31	3.70	1.00	0.30	3.23	B a VI	C	灰黄褐	100	F区
32	(3.50)	1.85	0.55	9.37	B a IV	C	にぶい橙	50	
33	(3.80)	1.70	0.55	8.49	B a IV	C	灰黄褐	55	A区
34	(3.70)	(1.90)	—	4.20	—	C	浅黄橙	20	D区
35	(3.45)	(1.60)	(0.40)	4.25	—	B	黒褐	20	D区
36	(3.30)	1.90	0.45	9.33	B a VI	C	にぶい橙	95	F区
37	(2.35)	1.10	0.40	2.01	—	C	にぶい黄橙	—	F区
38	(2.00)	1.45	0.90	3.03	—	B	にぶい黄橙	15	F区

第507号住居跡出土土錘観察表（第108図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	7.00	1.95	0.60	31.44	B b III	C	黄橙	100	カマド
2	6.60	2.10	0.50	19.96	C b III	C	灰黄褐	85	カマド
3	5.90	1.40	0.50	8.83	A a III	C	にぶい橙	90	貯蔵穴

第508号住居跡（第109・110図）

K-20・21グリッドに位置する。住居跡中央付近から北壁を第509・513号住居跡に切れ、第396・510・519・520・526・532・533・546号を切る。床面は所々小さな攪乱で壊されていた。平面形は正方形に近いと考えられ、南北5.94m、東西5.81mで、深さは0.32～0.36mである。主軸方位はN-79°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

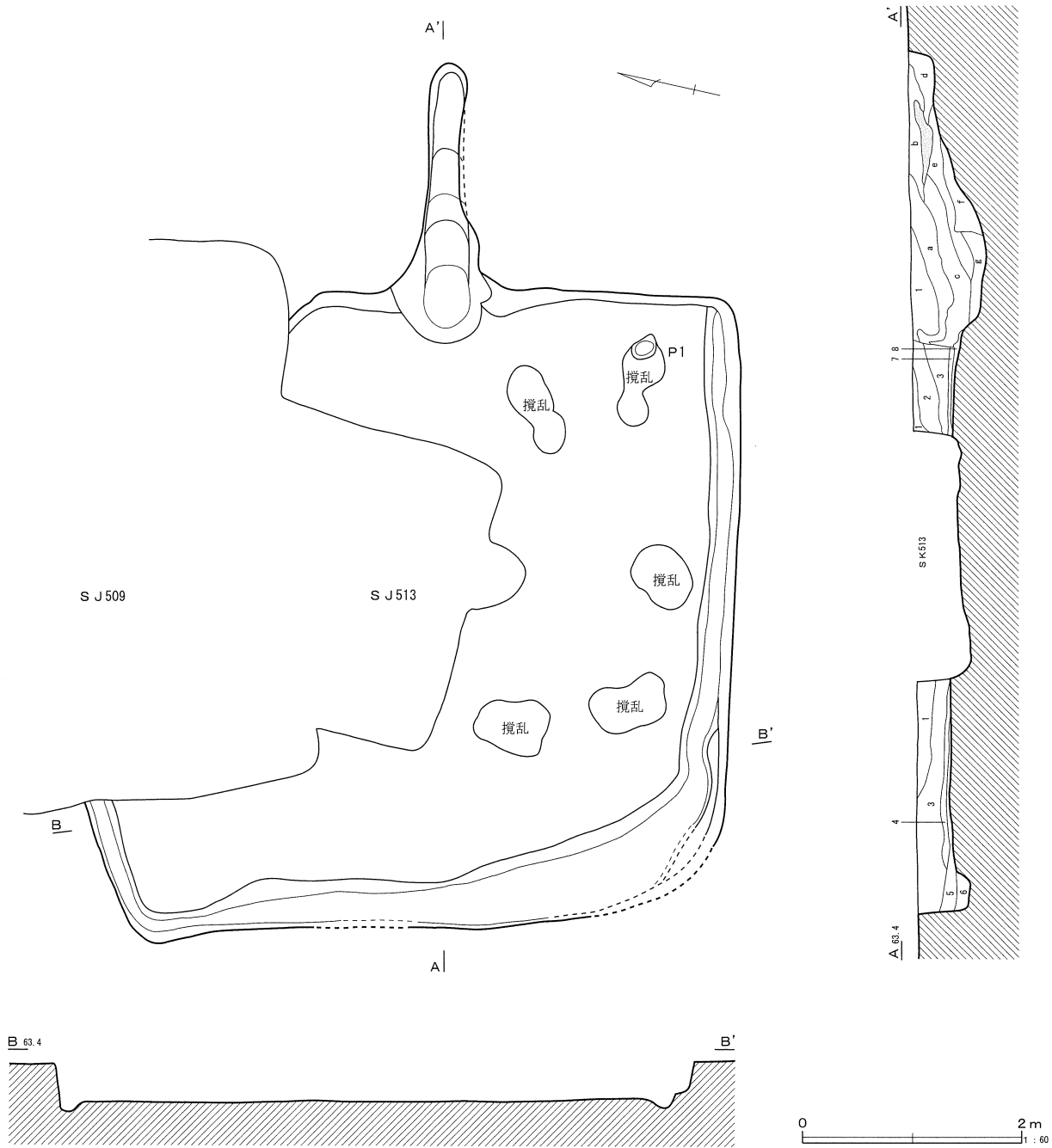
カマドは東壁に設置される。燃烧部は20cm程掘り下げられ、段を持って煙道部へ続く。土層断面に明瞭な焼土層が確認できた。f層は人為的に貼り付けたものと思われる。貯蔵穴は検出されなかった。壁

溝は東壁以外で検出され、幅20～80cm、深さ5～15cmである。特に南壁のものは幅が広がっていた。ピットは攪乱で壊されていたものの1本検出され、深さは4cmである。

遺物は、土師器・須恵器の破片が多く出土した。小片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器坏11・蓋2・鉢2、土師器台付甕1・甕1、鉄鏃1、刀子1、土錘27点であった。

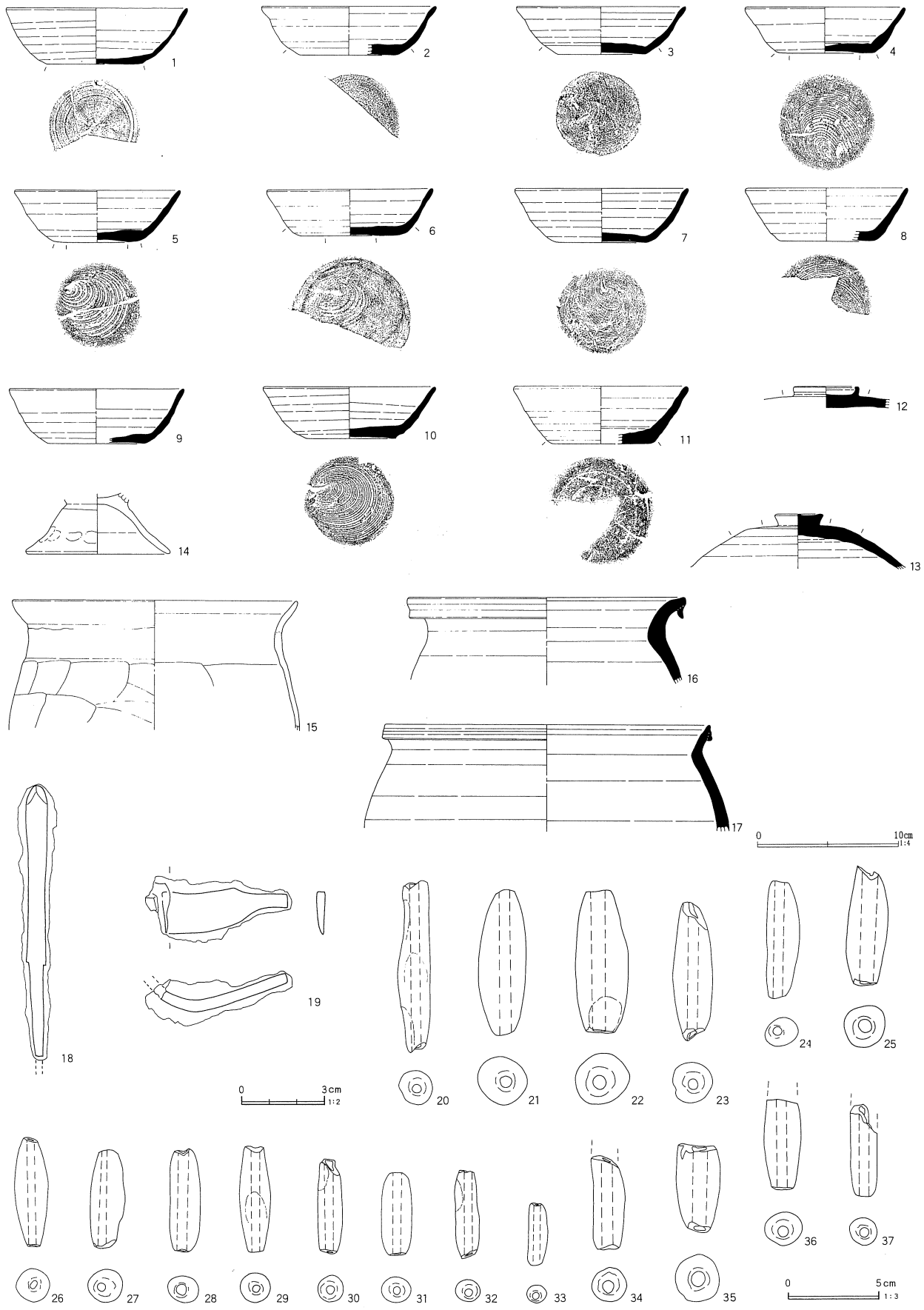
須恵器坏類には時期差が認められる。本住居跡は、底部周辺部へら削り調整を施した坏が出土する第510号住居跡を切っており、7～10の須恵器坏類が本住居跡に伴っていた可能性がある。



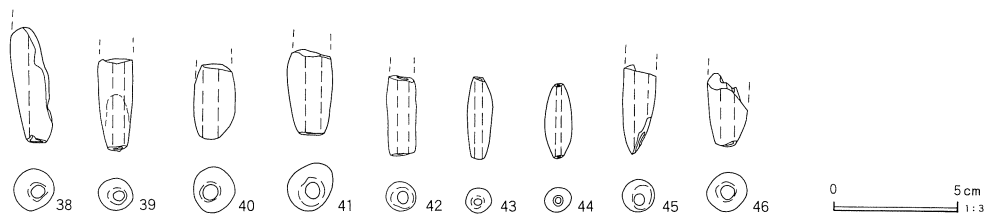
- S J 508
- | | | |
|---|------------------|----------------------|
| 1 | 暗褐色 (10YR3/3) | 砂質地山ブロック・焼土・炭化粒子多 |
| 2 | 暗褐色 (10YR3/4) | 基本は1層 焼土・炭化粒子少 地山土極多 |
| 3 | 黒褐色 (10YR2/3) | 溶化進行した地山ブロック 焼土 炭化粒子 |
| 4 | 黒褐色 (10YR2/3) | 基本は3層 粘質地山ブロック 一部床面状 |
| 5 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山主体に溶混 焼土・炭化粒子多 |
| 6 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 溶化地山極多 壁溶流入土層 |
| 7 | 黒褐色 (10YR3/2) | 灰薄層 焼土 被熱地山 炭化粒子多 |
| 8 | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 粘質地山ブロック主体 貼床状 |

- カマド
- | | | |
|---|---------------|----------------------|
| a | 暗褐色 (10YR3/3) | 粘質地山ブロック主体 焼土・炭化粒子微 |
| b | 褐色 (10YR4/4) | 小型地山 焼土ブロック 天井崩落土 |
| c | 暗褐色 (10YR3/4) | 焼土・炭化粒子多 |
| d | 黒褐色 (10YR2/3) | 焼土 地山ブロック 全体に赤味 |
| e | 暗褐色 (10YR3/3) | 粘質地山・大型焼土ブロック多 天井崩落土 |
| f | 黒褐色 (10YR3/2) | 粘質地山主体 |
| g | 黒褐色 (10YR2/3) | 灰層 焼土 被加熱地山 炭化粒子多 |

第109図 第508号住居跡



第110图 第508号住居跡出土遺物 (1)



第111図 第508号住居跡出土遺物(2)

第508号住居跡出土遺物観察表(第110図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	12.8	4.0	6.8	B C I J	良好	灰白	55	覆土	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ
2	須恵坏	(12.4)	3.4	7.0	A J	良好	灰	15	覆土	末野産 内面漆? 底部・体部下端回転ヘラケズリ
3	須恵坏	(12.1)	3.4	6.3	B I J L	良好	暗赤褐	40	覆土	南比企産 底部・体部下端回転ヘラケズリ
4	須恵坏	11.3	3.3	7.1	A B C J L	良好	灰	80	覆土	末野産か? 底部回転糸切後周辺ヘラケズリ
5	須恵坏	(11.7)	3.7	6.0	A C J L	普通	灰	40	覆土	末野産 底部回転糸切後周辺ヘラケズリ
6	須恵坏	(11.8)	3.3	(7.0)	B D E H J	普通	灰白	20	覆土	末野産 回転糸切後周辺・体部下端回転ヘラケズリ
7	須恵坏	(12.2)	3.8	6.5	A B C I J L	良好	暗赤褐	30	覆土	南比企産 底部回転糸切 底部ヘラ記号
8	須恵坏	(11.4)	3.8	6.8	B D J L	良好	灰	30	覆土	末野産 底部回転糸切
9	須恵坏	(12.3)	3.9	(6.9)	A B J	良好	灰	40	覆土	末野産 底部回転糸切
10	須恵坏	12.3	3.7	6.4	A B D H J L	良好	灰	60	覆土	末野産 底部回転糸切
11	須恵坏	(12.1)	4.1	(7.1)	B H J L	普通	灰	40	覆土	末野産 底部全面・体部下端回転ヘラケズリ
12	須恵蓋		1.5		B F I J	良好	灰	80	覆土	南比企産 天井部回転ヘラケズリ
13	須恵蓋		3.9		A B J L	普通	灰白	60	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ
14	土師台付甕		4.3	10.0	A B D E J	良好	橙	100	覆土	外面指頭痕明瞭
15	土師甕	(20.2)	9.2		B D E J	良好	橙	40	覆土	
16	須恵鉢	(19.6)	6.2		A B H J L	良好	黄灰	10	覆土	末野産
17	須恵鉢	(23.0)	7.5		A B H J L	良好	黄灰	10	覆土	末野産
18	鉄鏃	長さ9.70cm 幅0.70cm 重さ18.71g							覆土	
19	刀子	現存長4.50cm 背幅0.40cm 刃幅1.55cm 重さ15.59g							覆土	身部から茎部にかけての部材

第508号住居跡出土土錘観察表(第110・111図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
20	9.00	1.85	0.50	52.98	A a I	B	黒褐	100	
21	7.70	2.60	0.60	44.62	B a II	C	橙	100	
22	7.60	2.90	0.70	26.18	B a II	C	にぶい橙	100	掘り方
23	7.30	2.10	0.60	25.44	B a III	C	橙	90	
24	6.20	1.80	0.50	14.95	B a IV	B	褐灰	100	
25	6.30	2.20	0.70	24.61	B a III	B	にぶい黄橙	90	
26	5.80	1.80	0.40	15.22	B a IV	B	灰黄褐	100	
27	5.20	1.90	0.50	15.52	B a V	A	にぶい赤褐	100	
28	5.50	1.70	0.50	13.28	B a IV	C	褐灰	100	カマド
29	5.60	1.60	0.40	13.07	B a IV	C	浅黄橙	100	
30	5.10	1.40	0.40	8.30	B a V	C	灰黄褐	95	掘り方
31	4.40	1.60	0.40	9.28	B a VI	C	にぶい黄橙	100	カマド
32	4.70	1.30	0.40	6.64	A a V	C	にぶい黄橙	100	
33	3.30	1.10	0.30	2.74	A a VI	C	浅黄橙	100	
34	5.00	1.85	0.70	16.22	B a III	B	褐灰	70	
35	(4.70)	2.50	0.80	23.39	B a II	C	にぶい黄橙	60	
36	(4.80)	2.00	0.60	16.95	B a II	C	にぶい黄橙	60	
37	(4.90)	1.50	0.50	9.56	A a III	C	にぶい黄橙	70	
38	(4.50)	(1.70)	0.50	10.18	B a II	A	にぶい黄橙	50	
39	(3.60)	1.35	0.40	5.58	B a III	B	褐灰	50	
40	(3.00)	1.80	0.60	7.20	B a	C	橙	—	
41	(3.30)	1.90	0.60	7.64	B a III	C	にぶい橙	40	

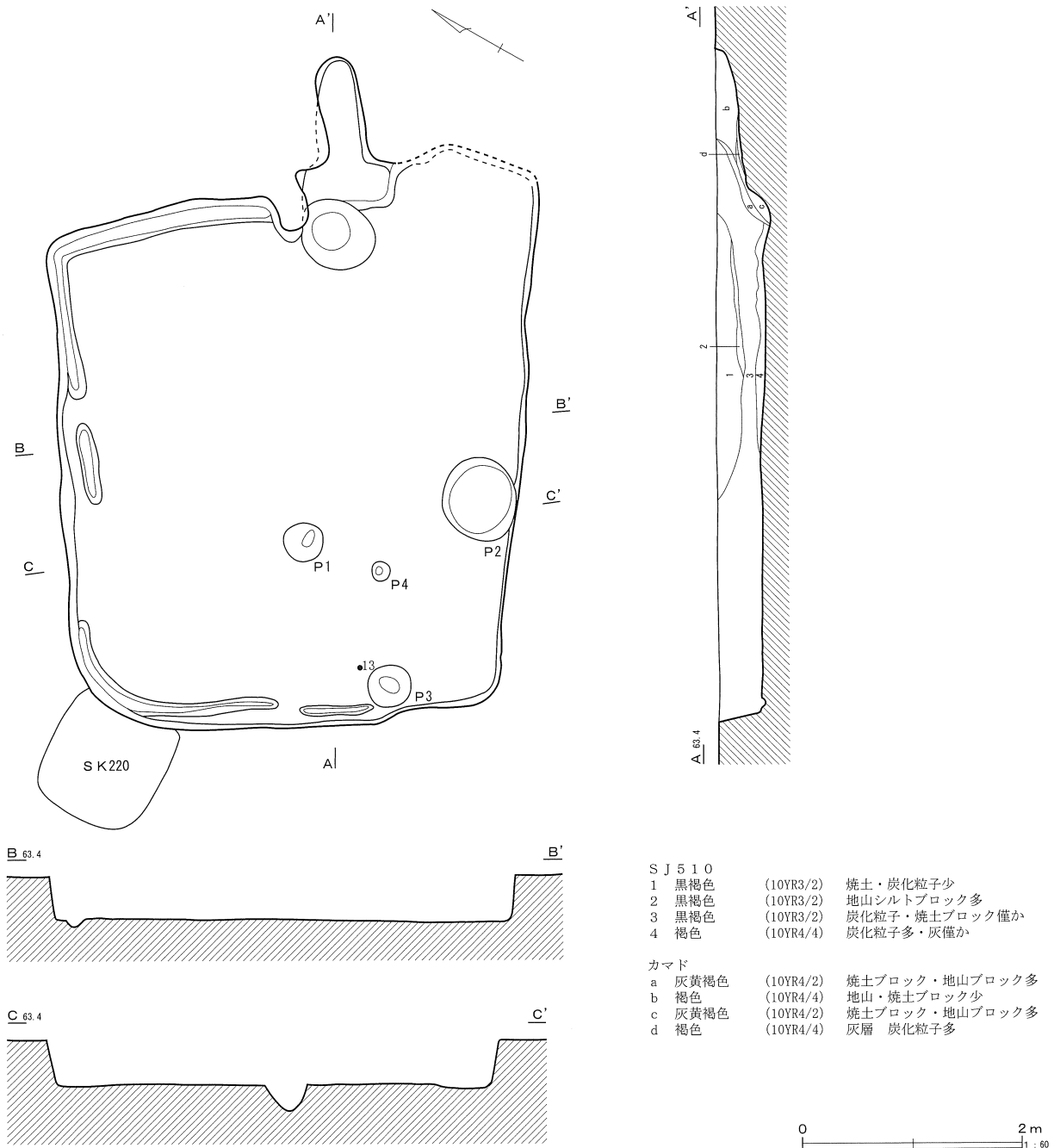
第508号住居跡出土土錘観察表 (第111図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
42	(3.20)	1.20	0.50	4.19	—	C	灰黄褐	—	
43	3.20	1.00	0.30	2.70	B a VI	A	灰白	100	
44	2.90	1.10	0.20	2.49	B a VI	B	明赤褐	100	
45	(3.50)	1.30	0.40	4.42	—	C	明赤褐	—	
46	(2.90)	1.70	0.55	5.02	B a	C	灰黄褐	—	

第510号住居跡 (第112・113図)

K-19・20グリッドに位置する。第508・509号住居

跡・第220号土坑に切られ、第390・391・396・399・499・511・520号住居跡を切る。平面形は東西に長いやや



第112図 第510号住居跡

歪んだ長方形で、長軸4.84m、短軸4.32m、深さは0.38~0.45mである。主軸方位はN-63°-Eを指す。

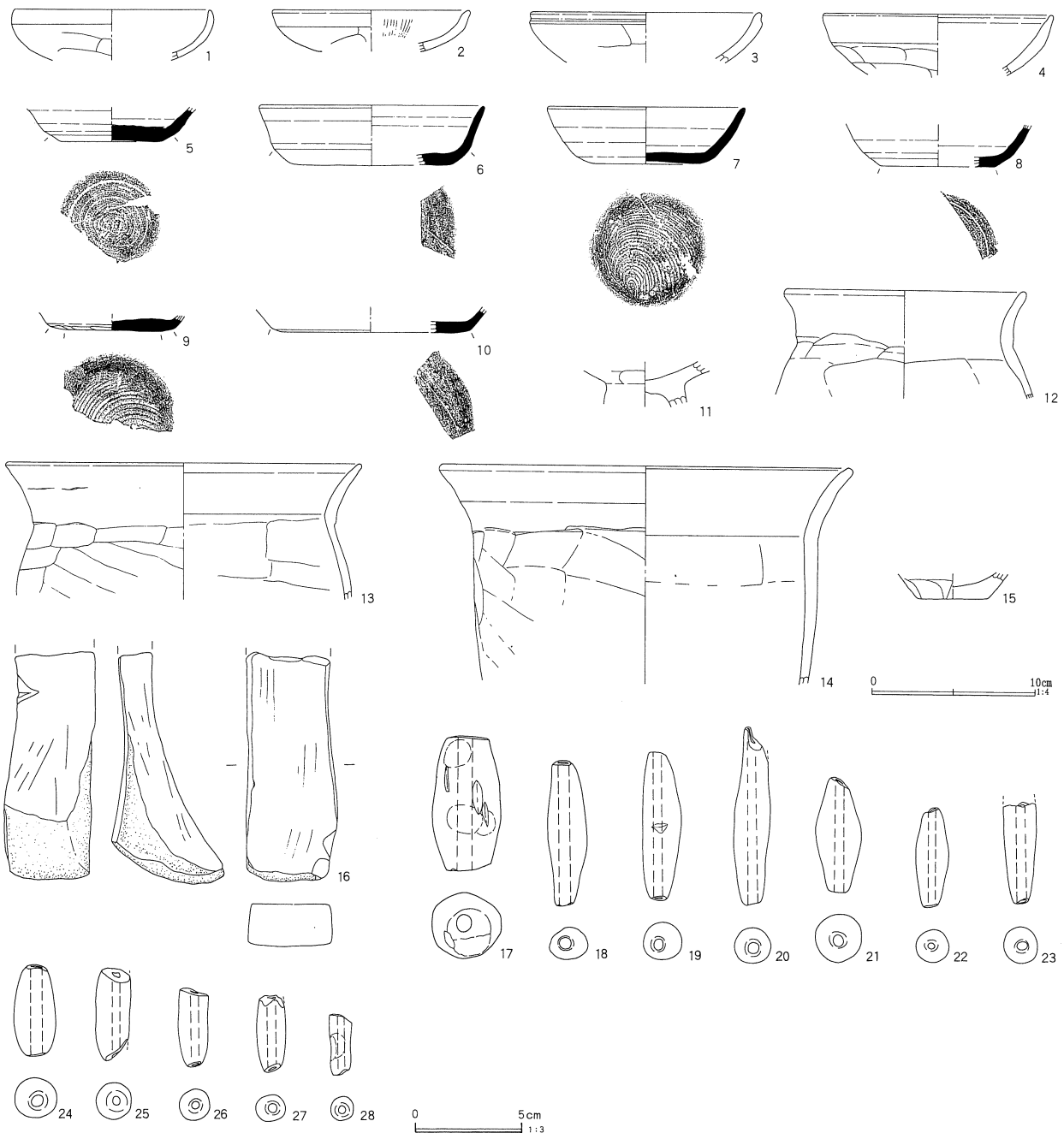
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃烧部はピット状に10cm程掘り込み、急激に立ち上がって煙道部へ続く。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝はカマド左から北壁、西壁で断続的に検出され、幅

8~26cm、深さ1~10cmである。ピットは4本検出され、P1~P4の深さは28cm、2cm、32cm、15cmである。

遺物は、土師器・須恵器の破片が多く出土したが、小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏3・暗文坏1・高坏1・甕4、須恵器坏6、砥石1、土錘12点であった。



第113図 第510号住居跡出土遺物

第510号住居跡出土遺物観察表（第113図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.1		B D J	普通	黄橙	10	覆土	内面放射暗文 外面黒斑か？ 南比企産 底部全面・体部下端回転ヘラケズリ 産地不明 底部手持ちヘラケズリ?後ナデ 南比企産 底部回転糸切 南比企産 底部回転ヘラケズリ 末野産 底部回転糸切後周辺手持ちヘラケズリ 末野産 底部手持ちヘラケズリ 凝灰岩 重さ192.18g
2	土師暗文坏	(12.0)	2.5		A B J	普通	明赤褐	10	覆土	
3	土師坏	(14.0)	3.0		B E J	普通	橙	10	覆土	
4	土師坏	(14.0)	3.7		A B D J	良好	橙	25	カマド	
5	須恵坏		2.1	(6.2)	A B D J L	良好	灰白	60	覆土	
6	須恵坏	(13.8)	3.7	(10.0)	J	良好	灰	15	覆土	
7	須恵坏	(12.0)	3.5	6.7	I J	普通	灰	60	覆土	
8	須恵坏		2.6	(7.0)	I J	良好	黄灰	20	覆土	
9	須恵坏		1.0	(7.6)	A J L	普通	黄灰	40	覆土	
10	須恵坏		1.6	(12.0)	B F J	良好	黄灰	15	覆土	
11	土師高坏		2.8		B D J	普通	橙	70	覆土	
12	土師甕	(14.6)	6.6		B D J	普通	橙	25	覆土	
13	土師甕	(22.0)	8.4		A B D J L	普通	橙	15	床	
14	土師甕	(25.0)	13.3		B D E J	良好	にぶい橙	25	カマド	
15	土師甕		2.1	(4.2)	B F J	普通	黄橙	40	覆土	
16	砥石	残存長10.4cm 最大幅4.00cm 最大厚5.10cm					灰黄	—	覆土	

第510号住居跡出土土錘観察表（第113図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
17	6.20	3.20	0.80	56.69	B b IV	B	黒褐	95	胎土黒?光る物質 カマド
18	6.70	1.80	0.55	13.68	C b III	C	にぶい赤褐	100	
19	6.80	1.75	0.50	19.43	B a III	C	にぶい黄褐	95	
20	8.15	1.65	0.50	18.31	B a II	C	にぶい橙	95	
21	5.30	2.25	0.50	18.78	C a V	C	橙	100	
22	4.60	1.50	0.35	7.19	C b V	C	黒褐	95	
23	(4.70)	1.70	0.45	9.17	B a III	B	橙	70	
24	4.20	1.85	0.60	11.62	B a V	C	にぶい橙	100	
25	4.25	1.70	0.40	10.94	C a V	C	灰黄褐	100	
26	(3.70)	1.50	0.35	6.74	B a IV	C	にぶい黄橙	60	
27	3.60	1.40	0.40	5.65	C a	A	橙	90	
28	(2.80)	1.15	0.40	2.90	—	C	にぶい黄橙	35	

第511号住居跡（第114・115図）

J・K-19・20グリッドに位置する。第390・392・498・499・500・503・510号住居跡・第22号掘立柱建物跡と重複し、その何れよりも古い。北東コーナーは攪乱で壊されていた。平面形は南北に長い長方形で、長軸6.42m、短軸5.54m、深さは0.22~0.32mである。主軸方位はN-72°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

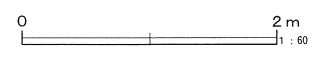
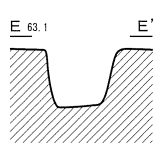
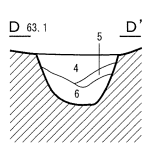
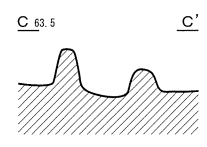
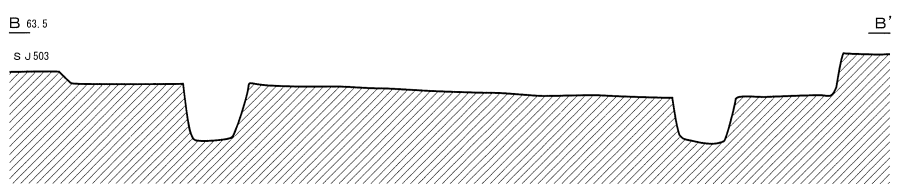
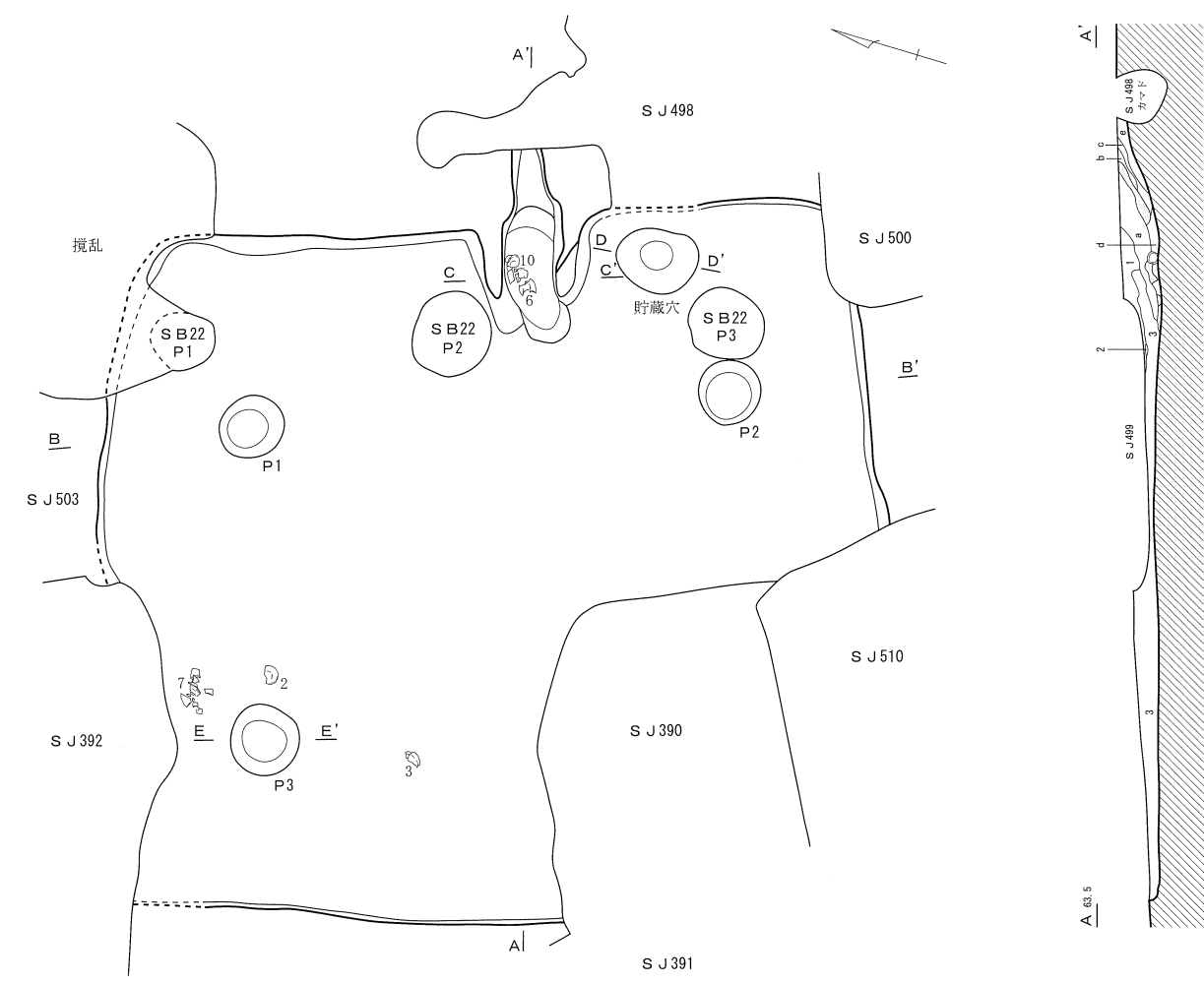
カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部の掘り込みは僅かで、緩やかに立ち上がって煙道部となる。煙道部先端は第498号住居跡に壊されて

いた。貯蔵穴はカマド右に設けられ、64×52cmの楕円形で、深さは41cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは3本検出され、支柱穴と考えられる。深さは43cm、35cm、44cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器が多量に出土したが、小片が多く、図示した遺物以外は殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏5・高坏2・壺1・甕2、土玉1、土錘4点であった。

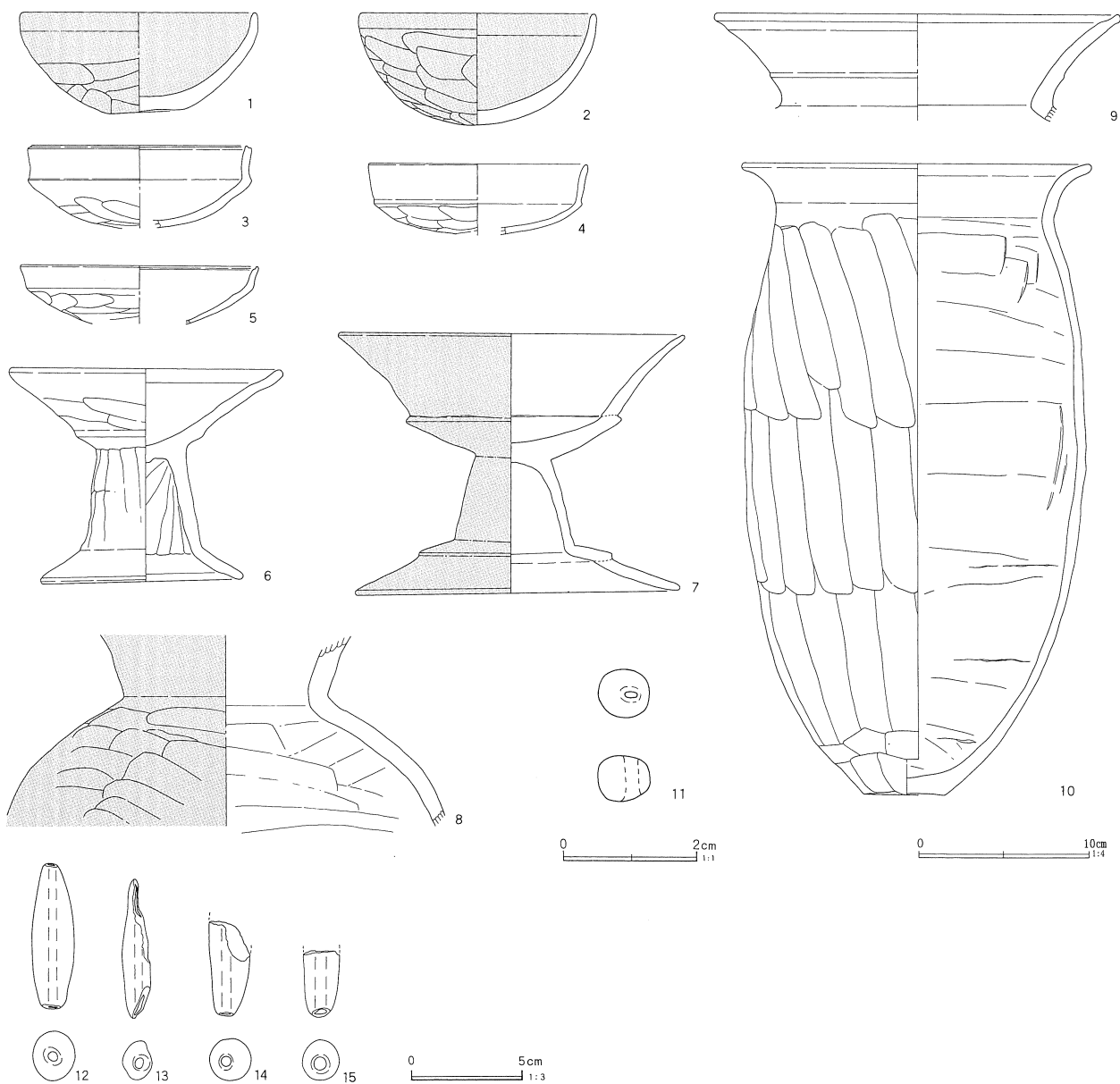
このうち、2・3・7は住居跡北西寄り、7の高坏と10の甕はカマドから出土した。



- S J 5 1 1
- 1 褐色 (10YR4/4) 地山シルトブロック多
 - 2 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子多
 - 3 褐色 (10YR4/4) 焼土ブロック・炭化粒子僅か
 - 4 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 炭化粒子・焼土粒子少
 - 5 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子少

- カマド
- a 褐色 (10YR4/4) 地山シルトブロック極多 焼土ブロック僅か
 - b 褐色 (10YR4/4)
 - c 灰黄褐色 (10YR4/2) 焼土ブロック多 崩落天井部
 - d 黒褐色 (10YR3/2) 灰層 炭化粒子やや多
 - e 灰黄褐色 (10YR4/2) 地山シルト主体 炭化粒子少

第114図 第511号住居跡



第115図 第511号住居跡出土遺物

第511号住居跡出土遺物観察表 (第115図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(13.7)	5.9		A D J L	普通	にぶい赤褐	75	覆土	内外面赤彩
2	土師坏	13.6	6.6		A B E F J L	良好	赤褐	70	+4cm	内外面赤彩
3	土師坏	(12.9)	4.9		D E F G J K L	良好	明赤褐	50	床	
4	土師坏	(12.8)	4.1		B D E J	普通	明赤褐	40	貯蔵穴	
5	土師坏	(14.0)	3.4		B D E J	良好	にぶい黄橙	40	覆土	
6	土師高坏	15.8	12.8	11.7	A B E J K L	良好	橙	85	カマド	
7	土師高坏	20.4	15.0	(19.0)	A E J	不良	橙	70	床	外面赤彩
8	土師壺		11.2		B D E J	普通	橙	35	覆土	外面赤彩
9	土師甕	(23.6)	6.3		A B E J L	普通	橙	20	覆土	
10	土師甕	20.5	37.1	4.9	B C J L	普通	にぶい褐	80	カマド	
11	土製小玉	直径0.70cm	厚さ0.65cm	孔径0.25cm	重さ0.40g			100	覆土	

第511号住居跡出土土錘観察表（第115図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
12	6.35	2.15	0.40	21.80	B a IV	C	にぶい黄橙	100	
13	6.05	1.70	0.45	8.34	B a IV	C	黒褐	60	
14	(4.15)	1.85	0.40	12.28	B a IV	C	灰黄褐	50	
15	(2.90)	1.70	0.60	6.44	—	C	浅黄橙	35	

第513号住居跡（第116・117図）

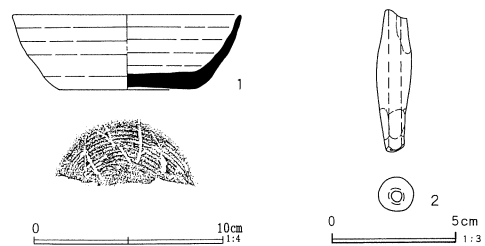
K-20グリッドに位置する。北半を第509・512号住居跡に切られ、第508・526号住居跡を切る。北側は検出されなかった。検出された規模は、東西2.83mで、南北は2.10mである。深さは0.28~0.34mである。主軸方位はN-178°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土の観察は出来なかった。

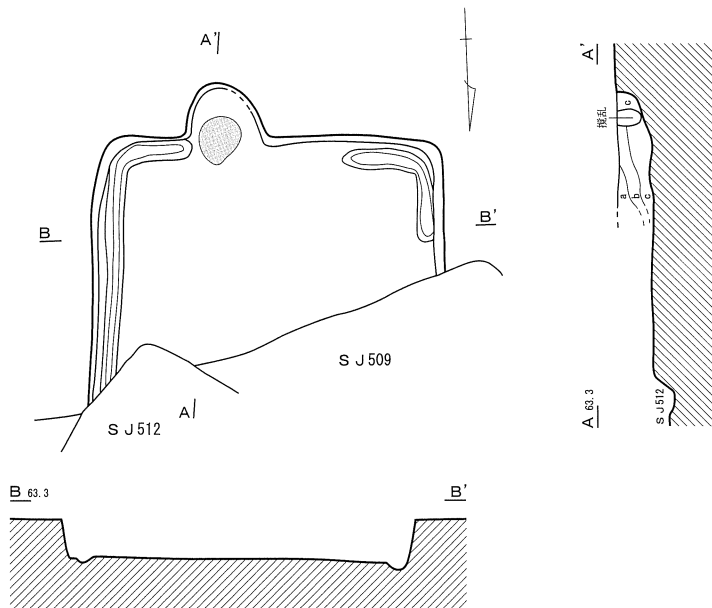
カマドは南壁中央よりやや東に設置される。燃焼部の掘り込みはないが明瞭な火床面が検出された。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は各壁で検出され、

幅11~16cm、深さ3~7cmである。

遺物は、須恵器の小片が10数点出土したのみで、図示可能な遺物は、須恵器坏1、土錘1点であった。



第116図 第513号住居跡出土遺物



第117図 第513号住居跡

- S J 513 カマド
- a 褐色 (10YR4/4)
地山ブロック少 炭化物僅か
 - b にぶい黄褐色 (10YR4/3)
地山ブロック・焼土ブロック僅か
 - c にぶい黄褐色 (10YR4/3)
地山ブロック多 焼土ブロック・炭化粒子僅か

0 2m
1:60

第513号住居跡出土遺物観察表（第116図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	12.0	3.9	(7.4)	A B H J L	普通	灰白	40	覆土	末野産 底部回転糸切

第513号住居跡出土土錘観察表（第116図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	5.60	1.40	0.45	7.74	B a IV	C	にぶい橙	100	

第514号住居跡（第118～123図）

J・K-21グリッドに位置する。第496・515・516・517・528・529号住居跡と重複し、その何れより新しい。周辺の住居跡と同時に調査したため南半は検出できなかった。平面形は東西に長い長方形と考えられ、東西5.49mで、南北は4.5m前後と思われる。深さは0.24～0.34mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。中央付近の床下に土坑が検出された。この土坑が本住居跡に伴う床下土坑か、住居跡以前の土坑かの判断は出来なかった。

カマドは2基検出された。カマドAは北壁中央よりやや東に設置される。燃烧部は40cmと大きく掘り込み、緩やかに立ち上がって煙道部へ続く。最下層に灰層が検出された。カマドBは東壁に設置され、人為的に埋められたようである。やはり燃烧部は深めに掘りこまれていた。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北東コーナーで検出され、幅16～30cm、深さ2～10cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは18cm、12cmである。

遺物は、カマドA・Bから平安時代の土師器・須恵器が出土した。

図示可能な遺物は、土師器暗文坏1・甕1、須恵器坏3・高台付椀2、羽口1、土錘5点であった。なお、第514～516号住居跡は、同時に調査したため、覆土中の遺物については、土層断面観察用に設けたセクションベルトを境に、第496・514・516号住居跡出土遺物（第121図）、第514・515号住居跡出土遺物（第122図）、第514・515・516号住居跡出土遺物（第123図）として取り上げた。

第496・514・516号住居跡出土遺物（第121図）は、土層断面C-C'以南で出土した遺物である。平安時代の土師器・須恵器の破片が多く出土したが、図示可能な遺物は、須恵器高台付椀3・甕1・円面硯1、土師器甕2、土錘5点であった。

1～3の高台付椀は末野産である。3点とも底部

のみ残存していたため、全体の器形は不明である。2・3は色調が灰黄色～灰オリーブで、焼成が悪く、所謂「赤焼け」の状態であった。

4は円面硯の脚部の破片である。胎土から南比企産と考えられる。破片の両側面は透孔である。本遺跡からは、第481号住居跡から、南比企産の円面硯の脚部片が出土しているが（第75図）、同一個体であるかどうかは明らかに出来なかった。

第514・515号住居跡出土遺物（第122図）は、土層断面B-B'以北で出土した遺物である。平安時代の土師器・須恵器片が多く出土したが、小破片が多く、殆ど接合しなかった。図示可能な遺物は、土師器坏1・甕1、灰釉椀1、須恵器坏1・高台付椀1、土錘4点であった。

2の灰釉椀は口縁部の破片である。猿投産と考えられ、内外面ともハケ塗りにより施釉されていた。

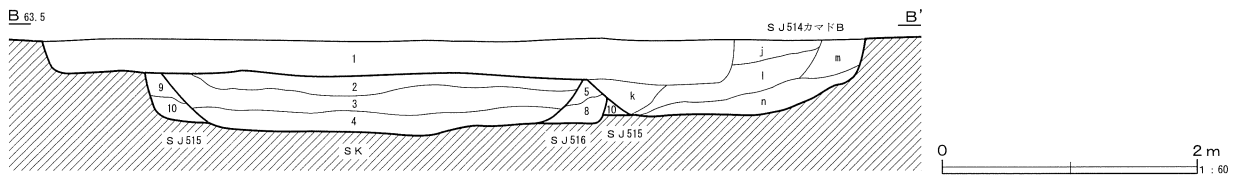
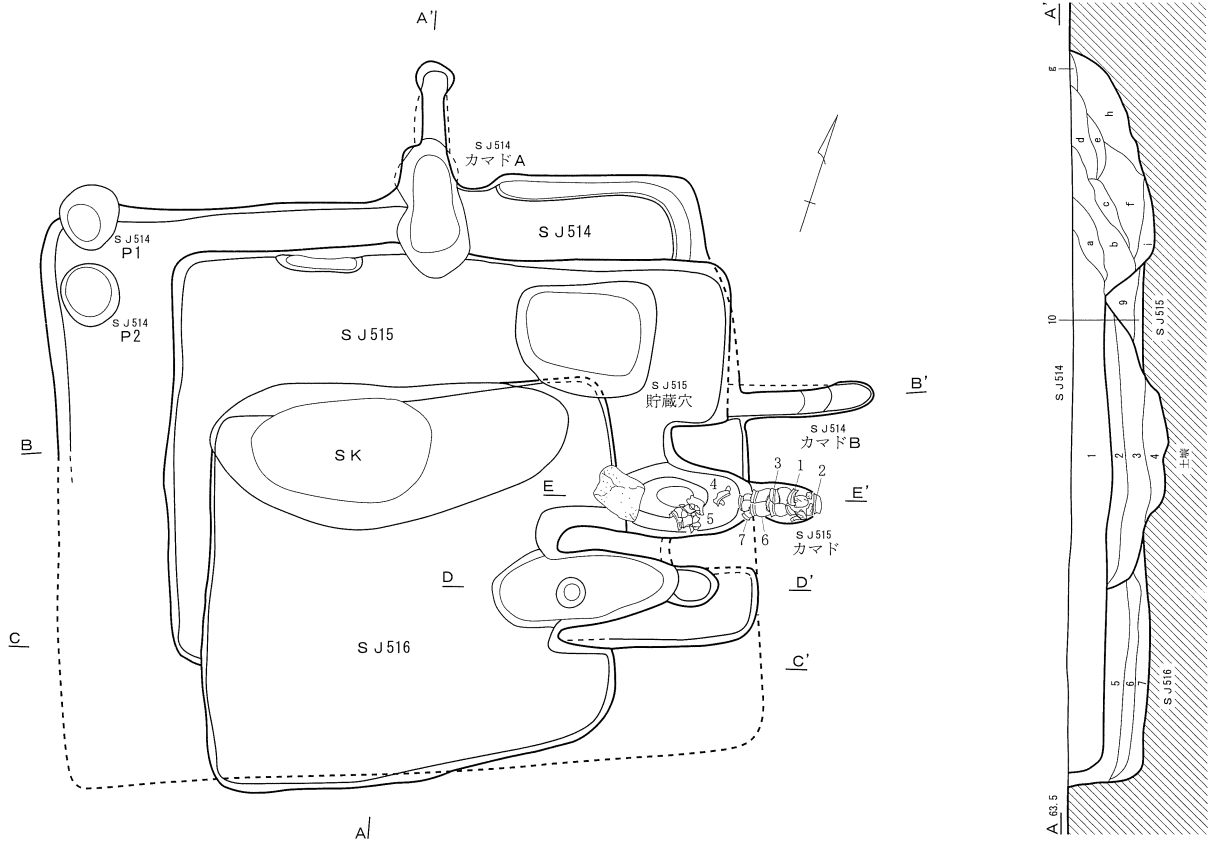
5の土師器甕は、第514号住居跡カマドA出土の破片と接合した。口縁部はコの字が崩れた形態をしており、2の灰釉椀とともに、重複する住居跡の中で最も新しい第514号住居跡に属していた可能性がある。

第514・515・516号住居跡出土遺物（第123図）は、土層断面BとCの間で出土した遺物である。平安時代の土師器・須恵器の破片が多量に出土したが、小破片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器坏6・高台付椀2・皿3、棒状鉄製品1、土錘20点であった。

須恵器は全て末野産であった。坏類の底部は全て糸切り後未調整であった。坏類は口径13cm前後で、底径は6cm前後のもの6cm代後半のものがある。両者は時期差があると考えられ、9世紀前半から後半にかけての遺物と考えられる。遺構の重複関係から、前者は第515号住居跡に、後者は516号住居跡に属していた可能性がある。

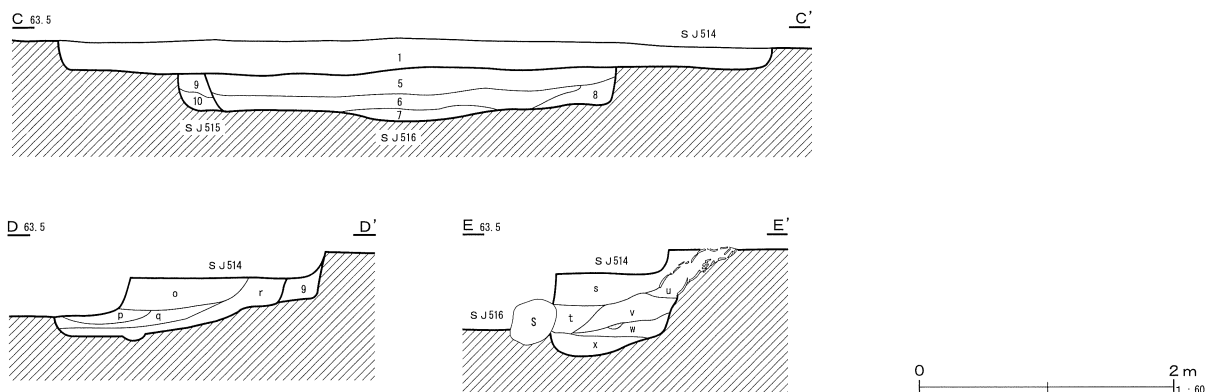
また、4の坏には、底部の内外面に「得」の墨書が認められた。内面と外面では筆跡が異なるのは注目される。



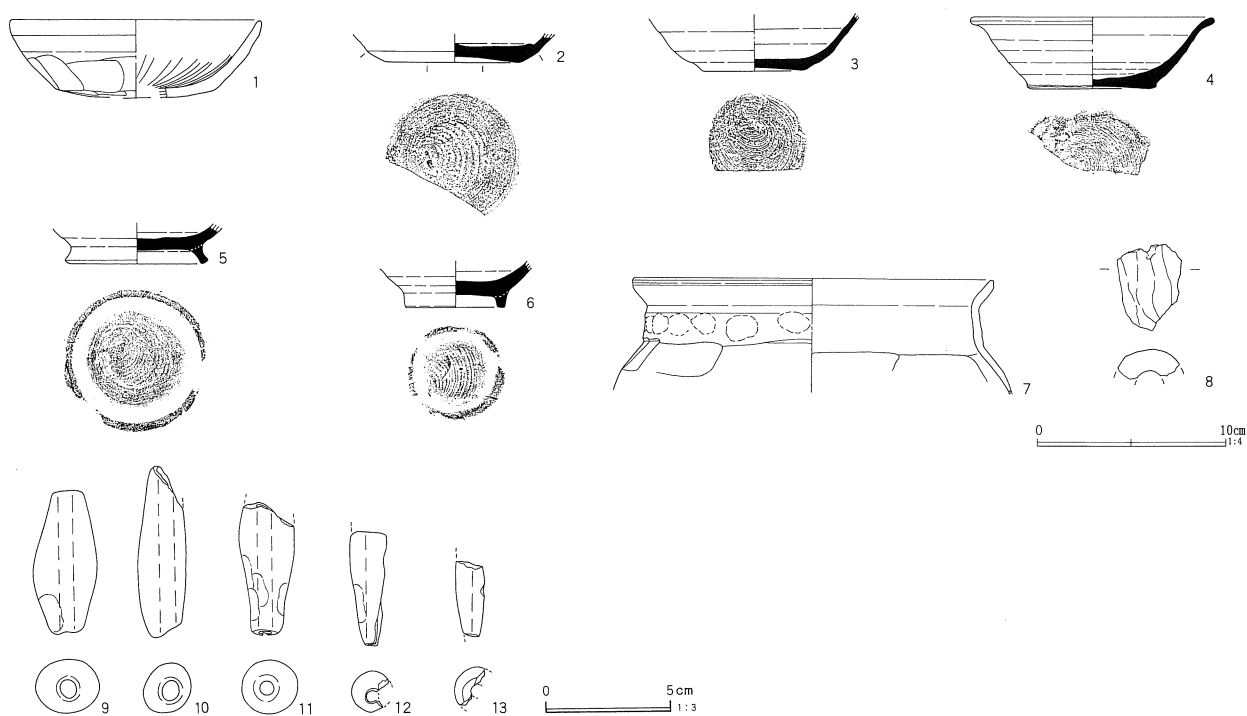
- S J 5 1 4
- | | | |
|---|---------------|------------------|
| 1 | 黒褐色 (10YR2/3) | 地山粒子・炭化粒子・焼土粒子少 |
| 2 | 黒褐色 (10YR2/2) | 地山粒子多 炭化粒子・焼土粒子少 |
| 3 | 黒褐色 (10YR2/2) | 地山粒子・炭化粒子多 焼土粒子少 |
| 4 | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山土多 炭化粒子・焼土粒子少 |
- S J 5 1 4 カマドA
- | | | |
|---|------------------|----------------------|
| a | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山ブロック極多 地山粒子多 |
| b | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック少 地山粒子多 焼土粒子少 |
| c | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山粒子多 焼土粒子・炭化粒子微 |
| d | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 地山ブロック 天井部か |
| e | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山粒子多 焼土粒微 |
| f | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山土極多 焼土ブロック少 |
| g | 黒褐色 (10YR2/3) | 地山粒子・地山ブロック少 |
| h | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | |
| i | 暗褐色 (10YR3/4) | 灰層 地山土・焼土ブロック少 炭化粒子多 |
- S J 5 1 4 カマドB
- | | | |
|---|------------------|------------------|
| j | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 天井部 |
| k | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山粒子多 地山ブロック少 灰 |
| l | 暗褐色 (10YR3/4) | 地山粒子多 焼土粒子少 |
| m | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山粒子少 焼土粒子・炭化粒子微 |
| n | 褐色 (10YR4/4) | 地山ブロック多 焼土ブロック少 |

- S J 5 1 5
- | | | |
|----|---------------|------------------|
| 9 | 黒褐色 (10YR2/3) | 地山粒子多 炭化粒子・焼土粒子微 |
| 10 | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山土多 炭化粒子・焼土粒子微 |
- S J 5 1 5 カマド
- | | | |
|---|---------------|-------------------|
| s | 暗褐色 (10YR3/4) | 地山土多 焼土ブロック・炭化粒子微 |
| t | 黒褐色 (10YR2/3) | 地山土多 焼土粒子少 |
| u | 暗褐色 (10YR3/3) | 煙道部の甕内部の土 |
| v | 褐色 (10YR4/4) | 地山土多 焼土ブロック 天井崩落土 |
| w | 褐色 (10YR4/4) | 地山土多 |
| x | 暗褐色 (10YR3/3) | 灰層 炭化粒子・焼土多 |
- S J 5 1 6
- | | | |
|---|---------------|--------------------|
| 5 | 黒褐色 (10YR2/2) | 地山粒子多 炭化粒子・焼土粒子少 |
| 6 | 黒褐色 (10YR2/2) | 地山粒子・炭化粒子多 焼土粒子少 |
| 7 | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック多 炭化粒子・焼土粒子微 |
| 8 | 黒褐色 (10YR2/2) | 地山粒子多 炭化粒子少 焼土粒子微 |
- S J 5 1 6 カマド
- | | | |
|---|------------------|------------------|
| o | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山粒子・焼土ブロック多 |
| p | 黒褐色 (10YR2/3) | 炭化粒子多 焼土ブロック少 |
| q | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山粒子多 炭化粒子・焼土粒子少 |
| r | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 焼土ブロック多 |

第118図 第514・515・516号住居跡 (1)



第119図 第514・515・516号住居跡 (2)



第120図 第514号住居跡出土遺物

第514号住居跡出土遺物観察表 (第120図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師暗文坏	(13.2)	4.1	(8.4)	B D G J	良好	橙	40	カマドB	内面放射暗文
2	須恵坏		1.5	7.2	A I J L	良好	灰	80	カマドB	南比企産 回転糸切後周辺・体部下端回転ヘラケズリ
3	須恵坏		3.0	(5.4)	A B D F J L	良好	灰白	60	カマドA	末野産 底部回転糸切
4	須恵坏	(12.8)	3.8	(6.8)	A D H J L	良好	灰	25	カマドA	末野産 底部回転糸切
5	須恵高台碗		2.1	7.0	A D H J	良好	灰白	80	カマドB	末野産 底部回転糸切後高台貼付
6	須恵高台碗		2.5	5.3	B D H J L	良好	にぶい橙	80	カマドB	末野産 底部回転糸切後高台貼付
7	土師甕	(19.0)	6.0		A B D E J	良好	にぶい橙	40	カマドB	
8	羽口		残存長4.50cm	幅3.40cm	厚さ1.10cm		灰黄褐		カマドB	重さ20.96g

第514号住居跡出土土錘観察表（第120図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
9	5.65	2.05	0.75	26.41	C a IV	C	橙	100	カマド B
10	6.80	2.10	0.80	19.23	B a IV	B	褐灰	90	カマド B
11	(5.25)	2.20	0.55	19.57	C b III	C	にぶい黄橙	70	カマド B
12	(4.50)	1.60	0.45	7.21	B a III	C	浅黄橙	45	カマド B
13	(2.95)	—	—	3.81	—	C	にぶい黄橙	15	カマド A

第515号住居跡（第118・119・122～124図）

J・K-21グリッドに位置する。第514・516号住居跡に切れ、第496・517・528・529号住居跡を切る。周辺遺構と同時に調査したため不明確な点がある。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.55m、短軸3.05m、深さは0.58～0.66mである。主軸方位はN-72°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁に設置される。燃烧部は20cm程掘り込み、急激に立ち上がって煙道部となる。煙道部には5個体の土師器甕で補強されていた。燃烧部手前には径約40cmのやや大型の石が出土した。貯蔵穴はカマド左に設けられ、112×87cmの隅丸長方形で、

深さは29cmである。壁溝は北壁の一部で検出され、幅18～20cm、深さ2～5cmである。

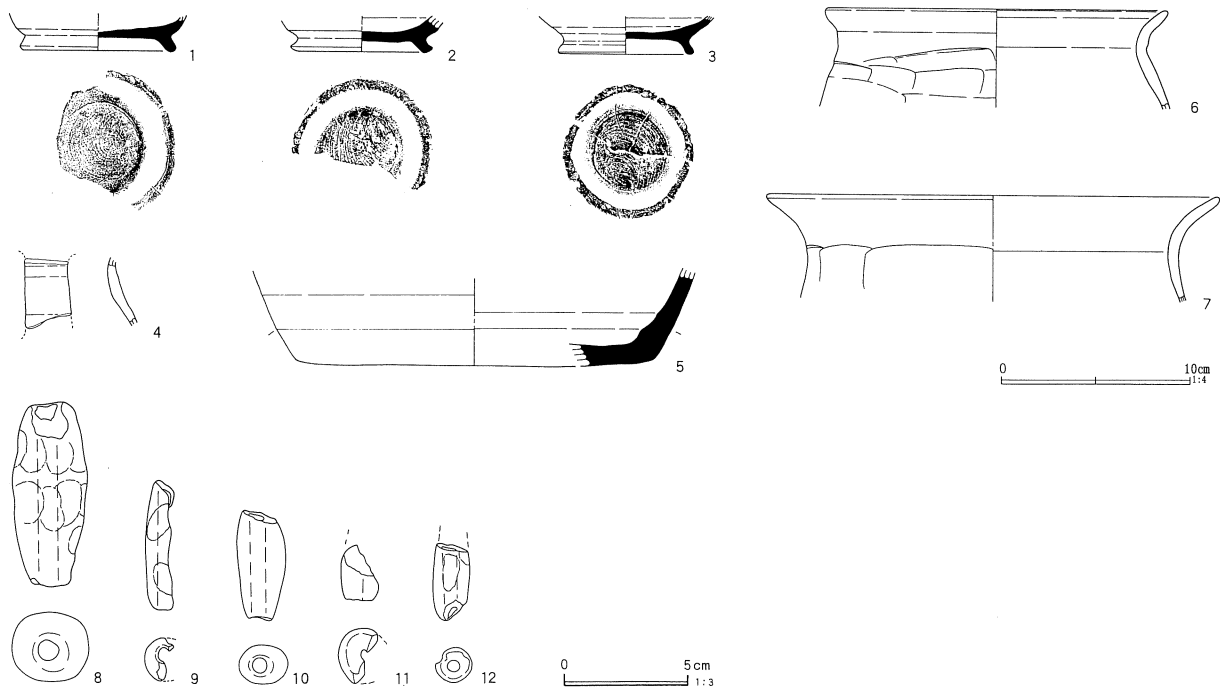
遺物は、カマド煙道部・燃烧部から土師器甕が7個体と土錘2点が出土した。このうち4・5は燃烧部から、1～3・6・7は煙道部からの出土である。

煙道部出土の土師器甕は、煙道先端から2・1・3・6・7の順で、口縁部を下に向け、連なって出土した。

甕は、7点とも底部を欠損する。口縁部の形態は、「くの字」、コの字に近いもの、「コの字」が混在する。

第516号住居跡（第118・119・121・123・125図）

J・K-21グリッドに位置する。第514号住居跡に



第121図 第496・514・516号住居跡出土遺物

第496・514・516号住居跡出土遺物観察表（第121図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵高台椀		1.9	(7.9)	A B F J	普通	灰	50	覆土	末野産 底部回転糸切後高台貼付
2	須恵高台椀		1.9	6.6	E J	不良	灰黄	60	覆土	末野産 底部回転糸切後高台貼付
3	須恵高台椀		2.0	(7.1)	B E H J	普通	灰オリーブ	80	覆土	末野産 底部回転糸切後高台貼付
4	円面硯		3.7		B D I	良好	褐灰		覆土	南比企産 透かしあり
5	須恵甕		5.2	(19.0)	A B J L	良好	灰	15	覆土	末野産
6	土師甕	18.0	5.2		B D E H J L	普通	明赤褐	60	覆土	
7	土師甕	(23.8)	5.6		B D E J	普通	橙	20	覆土	

第496・514・516号住居跡出土土錘観察表（第121図）

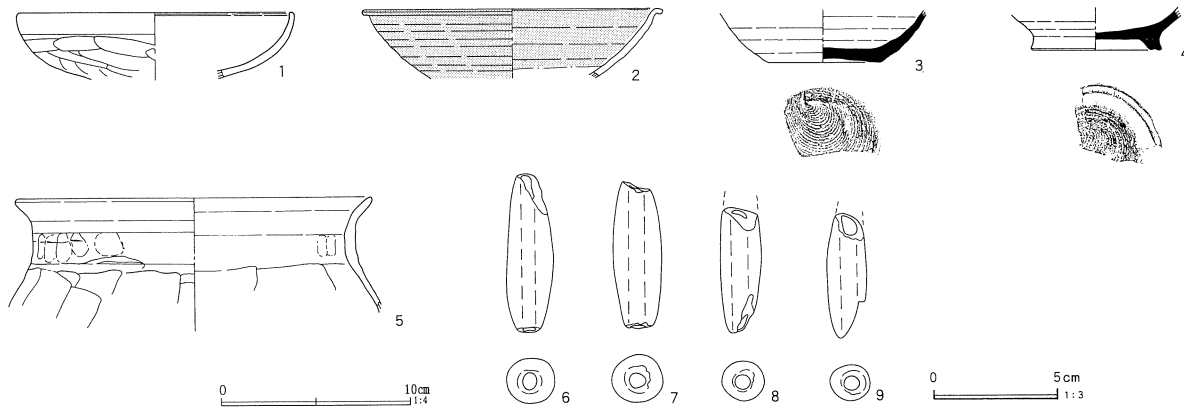
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	7.30	3.00	0.80	54.91	C b III	C	灰白	100	
9	5.20	1.40	0.40	7.65	B a V	A	にぶい黄橙	50	
10	4.30	1.90	0.55	11.50	B a V	C	褐灰	95	
11	(2.10)	(2.20)	(0.40)	4.81	—	C	明褐	—	
12	(3.10)	1.45	0.45	5.35	—	A	灰黄褐	—	

切られ、第496・515・517号住居跡を切る。平面形はやや歪んだ正方形に近く、東西3.28m、南北3.12m、深さは0.52～0.64mである。主軸方位はN-69°-Eを指す。

床面はやや起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。カマドは東壁に設置される。燃烧部は15cm程掘り

込み、小さな段を持って立ち上がる。燃烧部中央に小ピットが検出された。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、土師器・須恵器の破片が少量出土したが、殆ど接合しなかった。図示可能な遺物は、カマドから出土した、土錘6点であった。



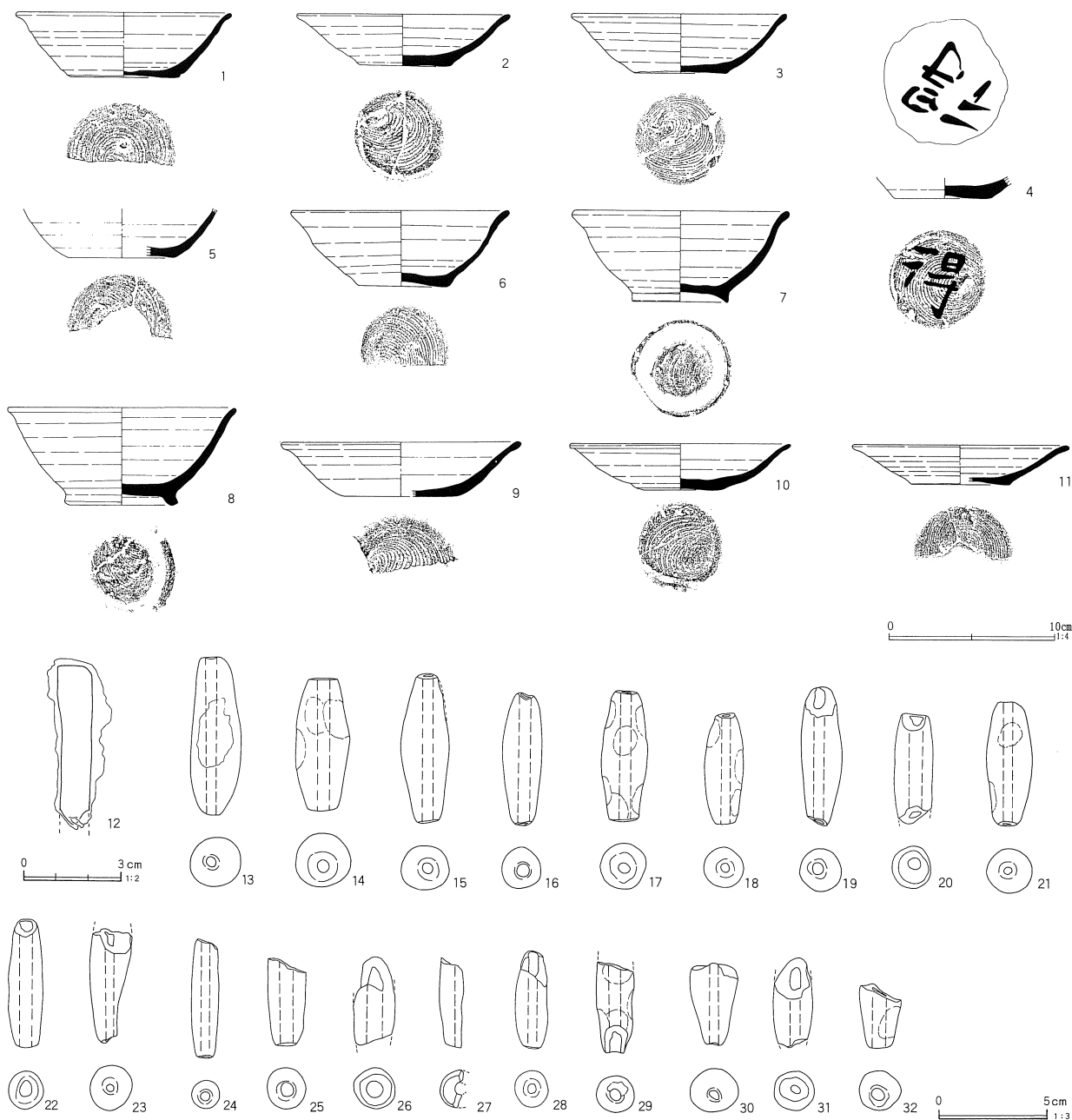
第122図 第514・515号住居跡出土遺物

第514・515号住居跡出土遺物観察表（第122図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	14.5	3.4		B D E J	良好	橙	40	覆土	
2	灰釉椀	(15.5)	3.7		B J	良好	灰白	10	覆土	猿投産 K-90 施釉 ハケヌリ
3	須恵坏		2.6	6.0	B D E	良好	明赤褐	50	覆土	末野産 底部回転糸切
4	須恵高台椀		2.3	(6.7)	B E F H	良好	灰	40	覆土	末野産 底部回転糸切後高台貼付
5	土師甕	(18.8)	6.1		B D E J L	良好	灰白	40	カマドA	

第514・515号住居跡出土土錘観察表（第122図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	6.20	1.90	0.70	18.85	B a IV	B	にぶい黄橙	90	
7	5.80	2.00	0.60	17.92	B a IV	C	明赤褐	100	
8	(4.90)	1.70	0.60	10.10	B a III	C	にぶい橙	70	
9	4.80	1.60	0.60	7.93	B a V	C	浅黄橙	80	



第123図 第514・515・516号住居跡出土遺物

第514・515・516号住居跡出土遺物観察表（第123図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考	
1	須恵坏	(13.2)	3.9	6.7	J L	良好	灰	50	カマド	末野産 底部粘土粒付着	
2	須恵坏	12.8	3.2	5.6	A B H J	普通	灰黄	60	カマド	末野産 底部回転糸切 煤?付着	
3	須恵坏	13.2	3.6	5.7	H J L	良好	灰	80	カマド	末野産 底部回転糸切 やや歪みあり	
4	須恵坏		1.3	6.1	A H J L	良好	灰	100	カマド	末野産 底部内外面とも「得」の墨書	
5	須恵坏		2.9	6.6	B E H J L	良好	にぶい黄橙	40	カマド	末野産 底部回転糸切	
6	須恵坏	13.0	4.6	5.6	A B H J L	良好	褐灰	55	覆土	末野産 底部回転糸切	
7	須恵高台椀	13.0	5.5	5.9	H J L	良好	灰	60	カマド	末野産 歪みあり	
8	須恵高台椀	13.7	5.9	6.2	B E J L	普通	にぶい橙	95	カマド	末野産 底部回転糸切後高台貼付	
9	須恵皿	(14.6)	3.3	(7.0)	A B J L	良好	灰	30	覆土	末野産 底部回転糸切	
10	須恵皿	13.3	2.8	5.4	A B H L	良好	灰	80	覆土	末野産 底部回転糸切	
11	須恵皿	13.2	2.4	6.0	J L	良好	灰	50	カマド	末野産 底部回転糸切 やや歪みあり	
12	棒状鉄製品	現存長4.80cm 幅1.10cm 重さ19.81g									

第514・515・516号住居跡出土土錘観察表（第123図）

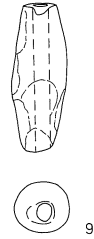
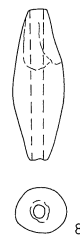
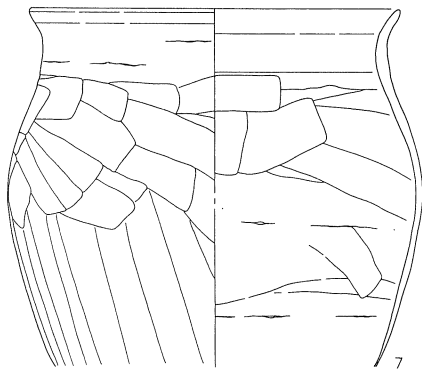
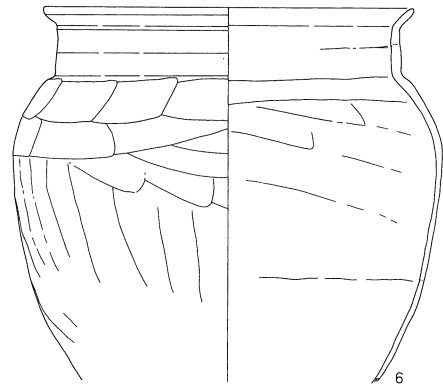
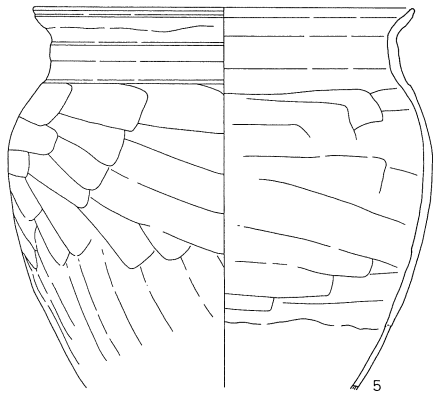
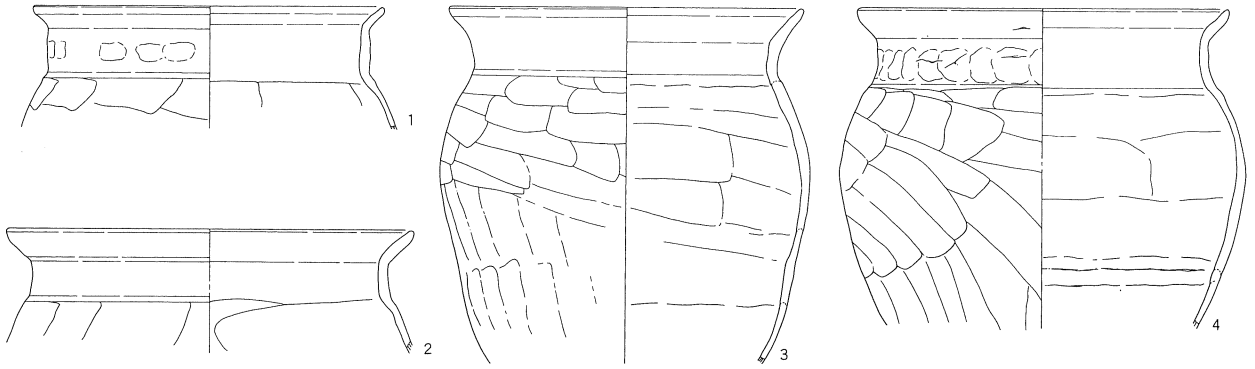
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
13	7.10	1.90	0.50	33.93	B a III	C	灰黄褐	95	
14	6.00	2.00	0.55	31.58	C b IV	C	明赤褐	100	
15	6.75	2.20	0.50	26.05	C b III	B	黒褐	95	
16	6.00	1.90	0.60	15.99	B a IV	C	にぶい黄褐	100	
17	5.90	2.10	0.55	24.14	C b IV	C	にぶい褐	100	
18	5.00	1.80	0.45	15.96	B b V	C	黒褐	95	
19	6.30	1.95	0.50	17.24	B a IV	A	褐灰	95	
20	5.00	1.90	0.55	14.20	B b V	C	にぶい黄褐	90	
21	5.60	2.05	0.40	18.77	C a IV	A	灰白	95	
22	5.80	1.75	0.70	13.06	B b IV	C	明赤褐	100	
23	5.20	2.05	0.35	15.16	C a III	C	にぶい黄橙	70	
24	5.40	1.25	0.40	7.60	A a V	A	橙	100	
25	4.00	1.85	0.65	11.29	B a IV	C	にぶい橙	60	
26	4.00	2.00	0.75	8.67	—	C	灰黄褐	—	
27	4.10	1.70	0.55	5.76	—	C	褐灰	30	
28	4.45	1.65	0.45	9.83	B a V	B	褐灰	90	
29	4.10	1.75	0.60	10.57	B a III	A	にぶい赤褐	55	
30	3.70	2.20	0.50	11.64	C a IV	C	橙	50	
31	4.05	1.85	0.50	10.88	—	A	橙	—	
32	2.90	1.90	0.60	7.59	—	B	褐灰	30	

第515号住居跡出土遺物観察表（第124図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師甕	(18.4)	7.3		B D E J	良好	明赤褐	65	カマド	
2	土師甕	(21.3)	6.5		A B D E J	良好	橙	20	カマド	
3	土師甕	18.5	18.7		A B D E J	良好	明赤褐	80	カマド	
4	土師甕	(19.4)	16.8		B E J	普通	明赤褐	40	カマド	
5	土師甕	19.9	20.0		B D E J	良好	橙	75	カマド	
6	土師甕	19.5	19.6		A B D E J	良好	明褐	80	カマド	
7	土師甕	19.7	18.7		B E J L	普通	明赤褐	70	カマド	やや磨耗

第515号住居跡出土土錘観察表（第124図）

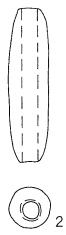
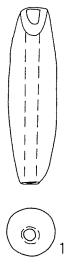
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	5.90	2.10	0.60	20.56	B a IV	C	にぶい赤褐	100	カマド
9	5.80	2.25	0.70	16.23	B a IV	C	にぶい橙	100	カマド



0 10cm 1:4

0 5cm 1:3

第124图 第515号住居跡出土遺物



0 5cm 1:3

第125图 第516号住居跡出土遺物

第516号住居跡出土土錘観察表（第125図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	6.90	1.90	0.50	22.52	B a III	C	にぶい橙	100	カマド
2	6.10	1.70	0.70	14.42	B a IV	C	灰黄褐	100	カマド
3	5.90	2.00	0.50	19.54	B a IV	C	明赤褐	100	カマド
4	(3.90)	1.70	0.70	10.67	B b III	C	褐灰	60	カマド
5	(3.90)	1.50	0.60	6.87	B a III	A	にぶい黄橙	60	カマド
6	(2.90)	1.40	0.50	4.47	B a III	A	にぶい黄橙	40	カマド

第517号住居跡（第126・127図）

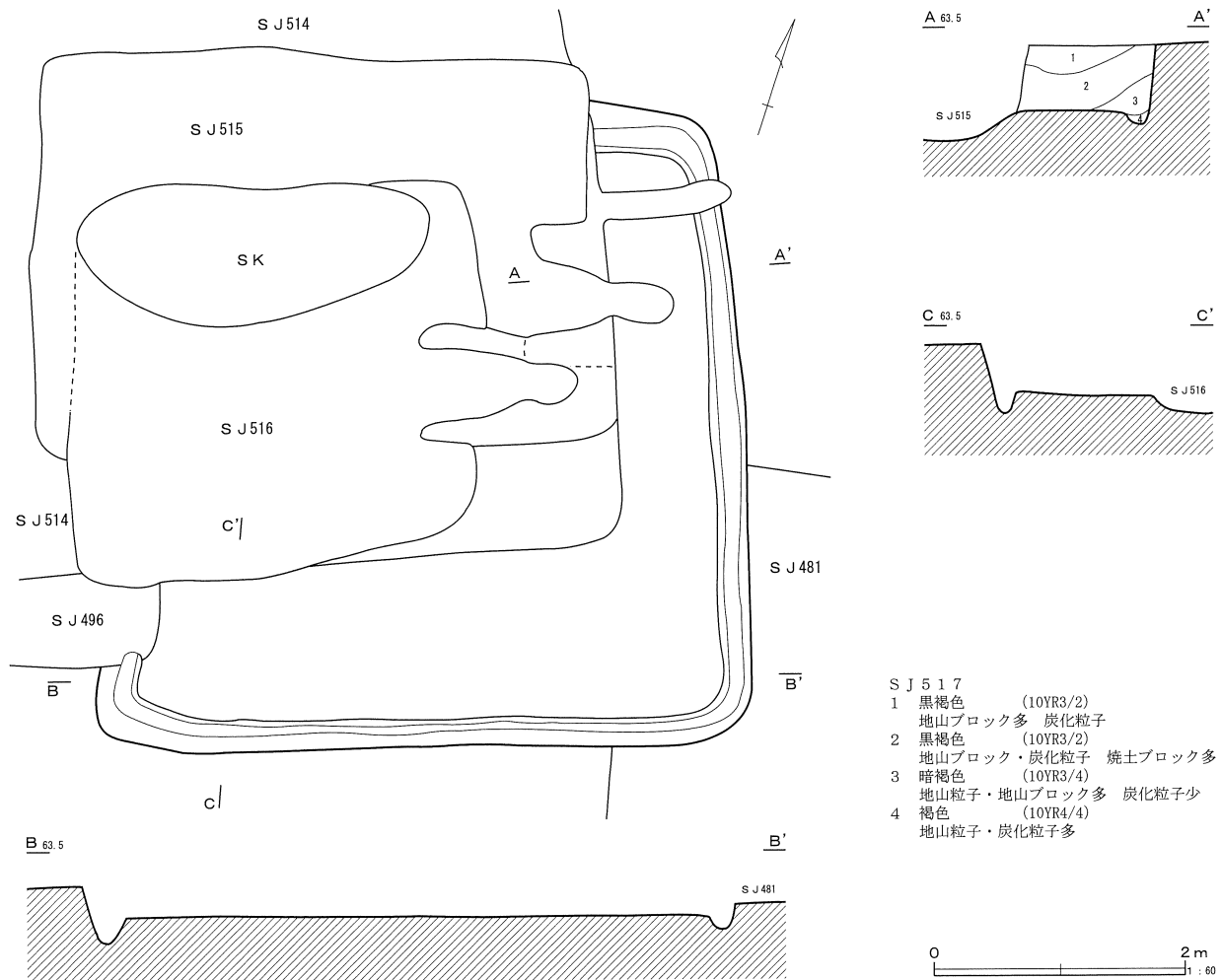
J・K-21・22グリッドに位置する。北西側の大半を第481・496・514・515・516号住居跡に切られ、第540・544号住居跡を切る。平面形は正方形で、東西5.26m、南北5.20m、深さは0.40~0.42mである。主軸方位は東壁でN-22°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土はごく一部で観察されたのみである。

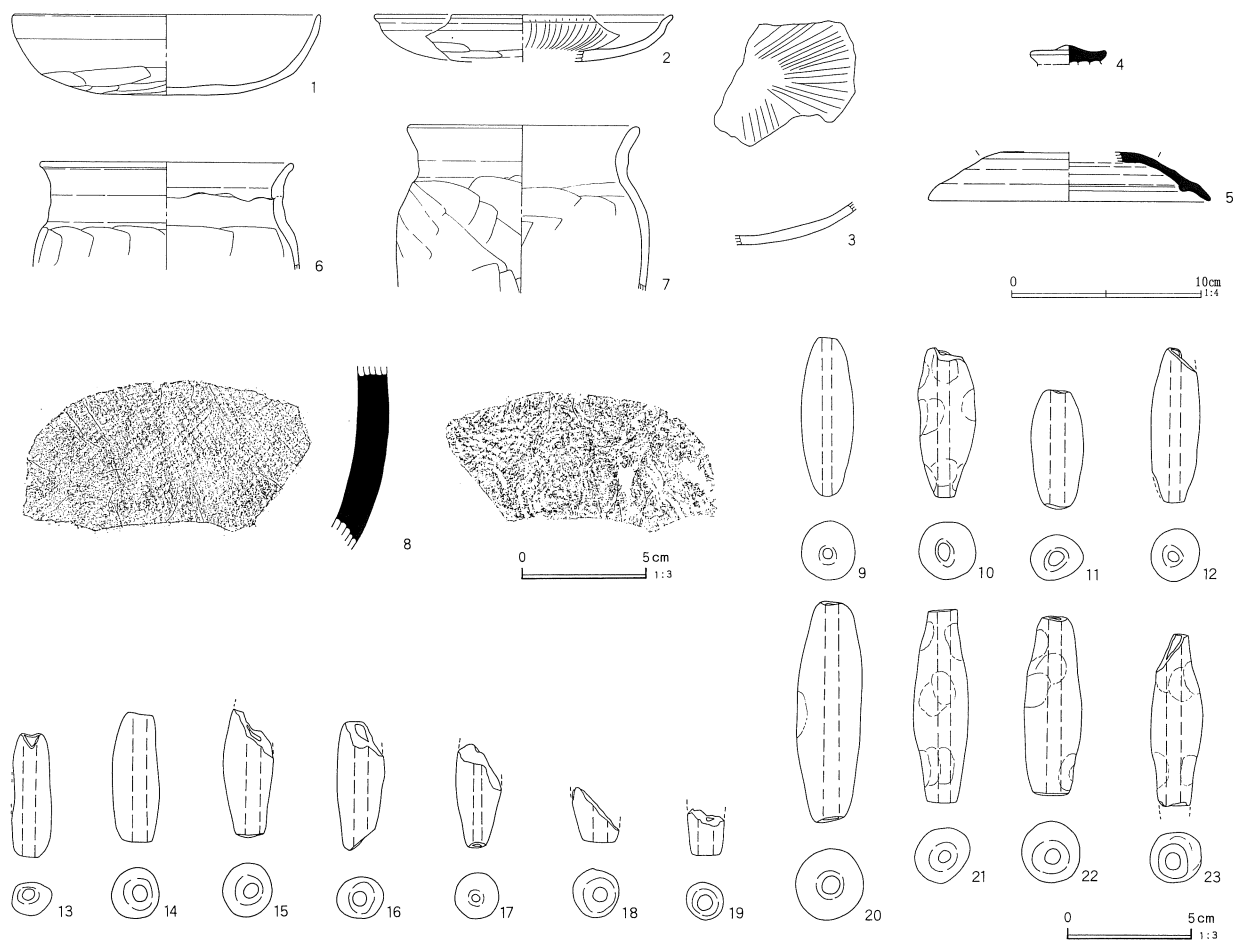
カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は検出された部分では全周し、幅20~42cm、深さ10~20cmである。

遺物は、奈良時代の土師器・須恵器の破片が多く出土したが、小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1・暗文坏2・小型甕2、須恵器蓋2・甕1、土錘15点であった。



第126図 第517号住居跡



第127図 第517号住居跡出土遺物

第517号住居跡出土遺物観察表 (第127図)

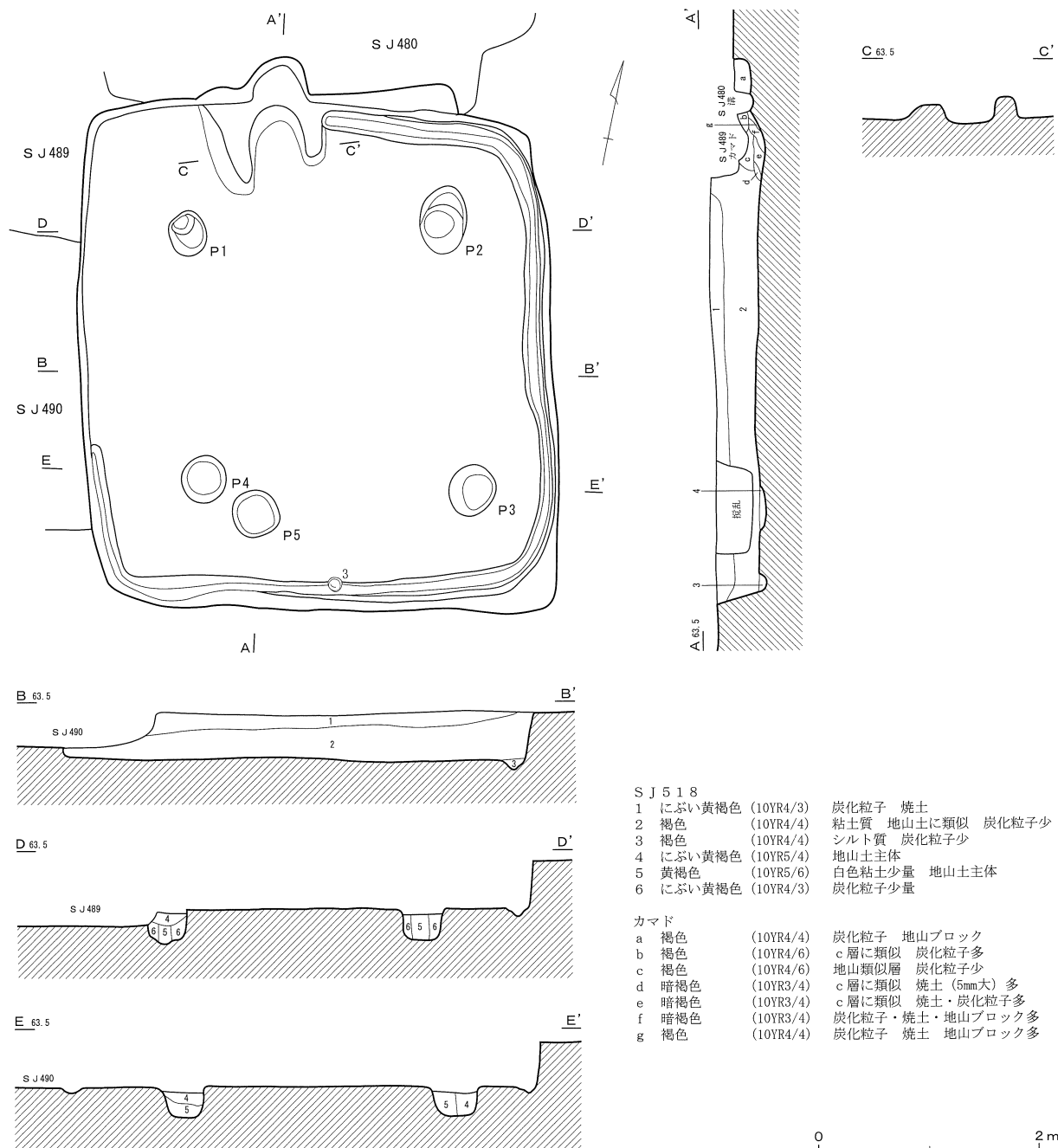
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(16.2)	4.3		A B H J	不良	にぶい橙	40	覆土	
2	土師暗文坏	(15.8)	2.5		A B D E J	普通	橙	10	覆土	内面放射暗文
3	土師暗文坏		6.7		A E J K L	普通	橙		覆土	内面放射暗文
4	須恵蓋		1.1		A B J	普通	灰黄	90	覆土	末野産 つまみ直径4.0cm
5	須恵蓋	(14.8)	2.6		B F J L	不良	灰白	15	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ
6	土師小型甕	(13.2)	5.6		B D E H J K L	普通	橙	30	覆土	内面輪積痕明瞭
7	土師小型甕	(12.0)	8.6		B E F J L	普通	にぶい赤褐	50	覆土	
8	須恵甕				A J L	普通	灰		覆土	末野産 外面格子目叩き 内面同心円当具痕

第517号住居跡出土土錘観察表 (第127図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
9	6.30	2.35	0.45	25.18	B a IV	A	にぶい黄橙	100	
10	5.90	2.30	0.70	25.39	C b IV	C	にぶい橙	90	
11	4.70	2.10	0.65	15.20	B a V	C	にぶい赤褐	100	
12	6.10	2.10	0.50	21.04	B b IV	A	にぶい黄橙	95	
13	4.90	1.60	0.50	8.10	B a V	C	にぶい褐	90	
14	5.10	2.10	0.65	19.06	B b V	C	にぶい黄橙	100	
15	(5.10)	2.15	0.60	17.30	C b IV	B	明褐	75	
16	5.05	1.90	0.60	12.83	B b V	A	浅黄橙	85	

第517号住居跡出土土錘観察表 (第127図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
17	(4.10)	1.85	0.35	10.88	B a IV	B	褐灰	50	
18	(2.20)	1.95	0.60	4.71	—	C	灰黄褐	10	
19	(1.85)	1.55	0.60	3.32	—	B	橙	15	
20	8.70	2.90	0.75	55.51	B a II	A	褐	100	
21	7.60	2.30	0.55	31.20	C b II	C	黒褐	100	
22	7.05	2.45	0.65	36.15	B b III	B	褐灰	100	
23	6.80	2.15	0.70	22.90	C b III	B	黒褐	85	



第128図 第518号住居跡

第518号住居跡（第128・129図）

J・K-22・23グリッドに位置する。第480・489・490号住居跡に切られ、第487号住居跡・第17号掘立柱建物跡を切る。平面形は南北に僅かに長い長方形で、長軸4.62m、短軸4.38m、深さは0.38～0.54mである。主軸方位はN-16°-Wを指す。

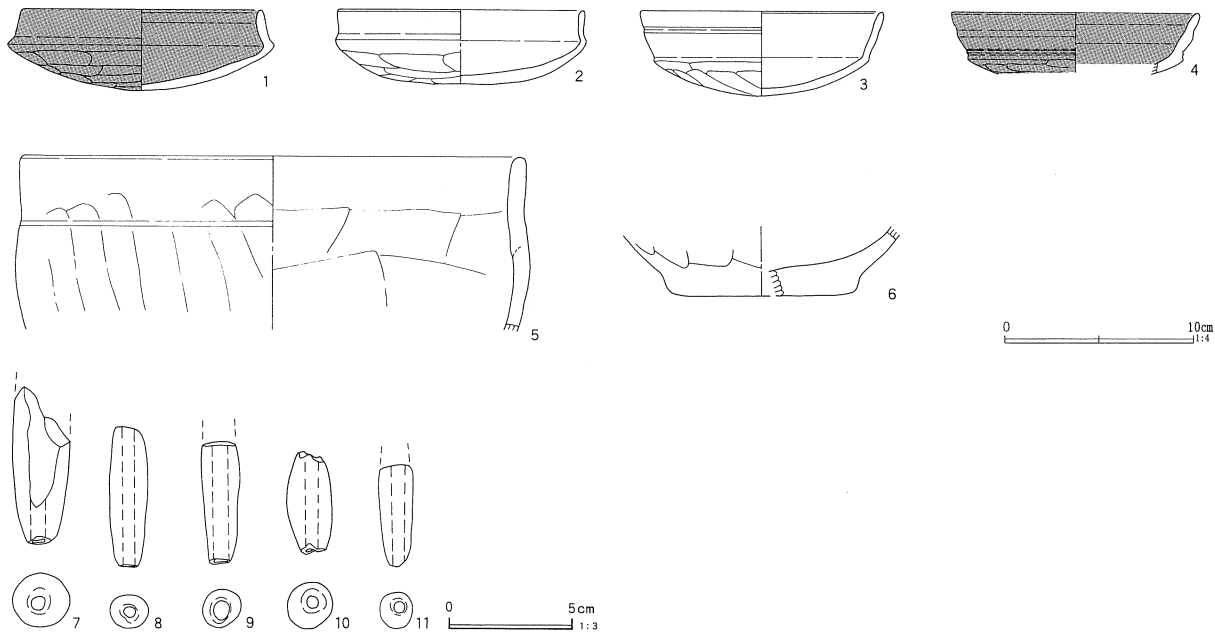
床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。カマドは北壁中央よりやや西に設置される。第480・489号住居跡に壊され、遺存度は余り良くない。燃烧部の掘り込みはなく、緩やかに立ち上がる。燃烧部の外側に同じような掘り込みが検出された。貯

蔵穴は検出されなかった。壁溝はカマド右から東壁、南壁と西壁の一部で検出され、幅12～30cm、深さ5～8cmである。ピットは5本検出され、P1～P5の深さは32cm、28cm、26cm、28cm、46cmである。P1～P4は主柱穴と考えられる。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器片が多く出土したが、小片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏4・鉢1・甕1、土錘5点であった。

3の坏は、住居南壁際で、床面から7cmほど浮いた状態で出土した。



第129図 第518号住居跡出土遺物

第518号住居跡出土遺物観察表（第129図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.6	4.3		B F J	普通	明赤褐	90	B区・P2	内外面黒色処理
2	土師坏	(12.9)	3.9		B D E F J	普通	赤褐	45	B区	底部大きな黒斑あり
3	土師坏	12.8	4.5		A B C E J	良好	にぶい橙	100	+7cm	底部の70%黒斑
4	土師坏	(13.0)	3.2		B D J	良好	明赤褐	25	B区	内外面黒色処理
5	土師鉢	(26.4)	9.2		A B E H J L	不良	橙	20	A・B・C・D区	磨耗著しい
6	土師甕		3.7	(10.0)	B D E J	普通	橙	40	B区	二次焼成

第518号住居跡出土土錘観察表（第129図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
7	(6.20)	2.30	0.60	23.96	B a II	C	灰褐	70	D区
8	5.50	1.55	0.50	10.34	B a IV	C	にぶい黄橙	100	C区
9	(4.80)	1.55	0.75	8.63	B a III	C	明赤褐	70	D区
10	(4.00)	1.80	0.50	11.06	C a V	C	にぶい褐	85	A区
11	(4.00)	1.40	0.40	6.21	B a III	C	橙	60	C区

第519号住居跡 (第130・131・132図)

K-20・21グリッドに位置する。第508・534号住居跡に切られ、第386・399・520・533・546号住居跡・第261号土坑を切る。本住居跡は土層断面から西側を埋めて縮小が行われていた。縮小前の平面形は東西に長い長方形で、長軸4.22m、短軸2.78m、深さは0.32~0.42mである。主軸方位はN-15°-Wを指す。縮小後は、長軸方向を1.1m程短くし、3.1m前後と正方形に近づいている。

床面は凹凸が見られ、壁は垂直に立ちあがる。縮小後の覆土は概ね自然堆積と考えられる。

カマドは北壁の北東コーナー近くに設置される。燃焼部手前は攪乱で壊されていた。燃焼部は20cm程掘り込み、その奥を更に掘り込んでから緩やかに立

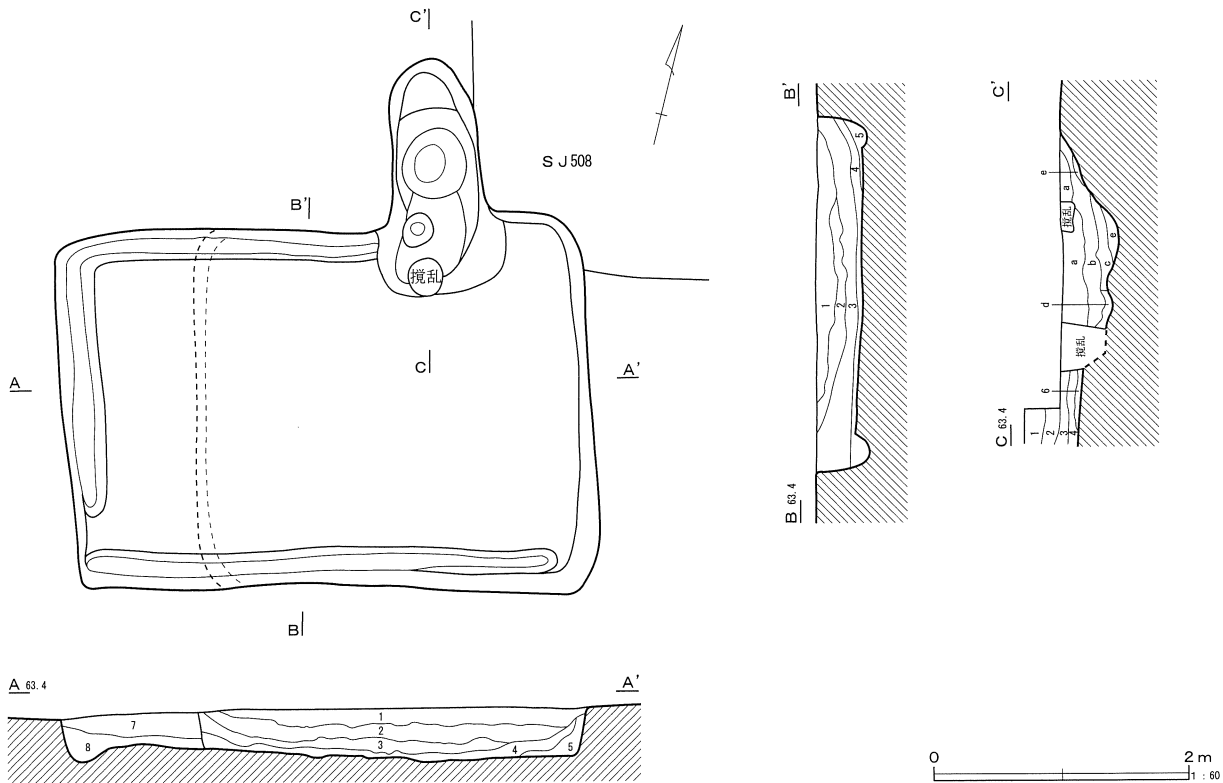
ち上がる。中心から左で深さ9cmの小ピットが検出された。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁以外で検出され、幅18~36cm、深さ5~12cmである。

遺物は、覆土から平安時代の土師器・須恵器の破片が多く出土した。土師器は甕が、須恵器は坏の破片が多く出土したが、小片で殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器暗文坏1・甕1、須恵器坏2、土錘12点であった。

また、本住居跡は、第520号住居跡と重複しており、重複の境界付近の遺物は、第519・520号住居跡出土遺物(第132図)として扱った。

第519・520号住居跡出土遺物は、図示可能な遺物として、須恵器坏2、不明土製品1、土錘10点が出土した。



- S J 5 1 9
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 焼土・炭化粒子多
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 基本は1層 地山ブロック溶混多
 - 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 2層に準ずる 地山ブロック小型 溶化未進行
 - 4 暗褐色 (10YR3/4) 混有物少 暗色 粘質土化進行
 - 5 褐色 (10YR4/4) 地山・ブロック極多 壁溶軟化
 - 6 褐色 (10YR4/4) 粘質地山主体 粘性強
 - 7 暗褐色 (10YR3/3) 焼土・炭化粒子多 固くしまる

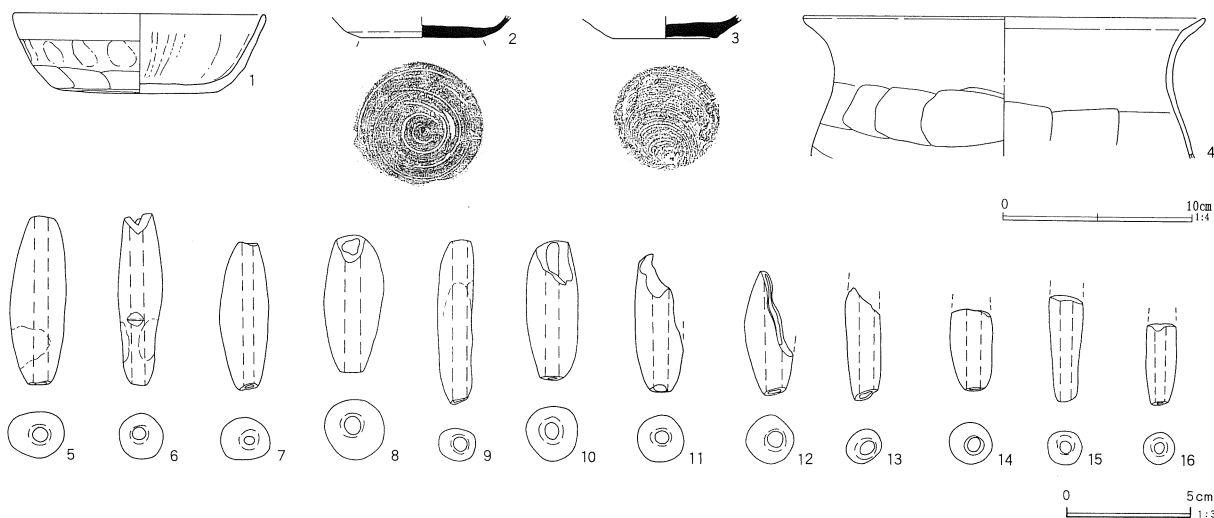
- 8 暗褐色 (10YR3/4) 基本は7層 地山ブロック溶混多
- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/4) 焼土・非熟ブロック・炭化粒子多 天井崩落土
 - b 暗褐色 (10YR3/3) 灰層 大型焼土ブロック・炭化粒子多
 - c 暗褐色 (10YR3/4) 粘質地山主体
 - d 暗褐色 (10YR3/4) c層・e層の中間的層 灰掻き出しに起因か
 - e 褐色 (10YR4/4) 地山極多

第130図 第519号住居跡

1は末野産の須恵器坏で、底部は糸切り後未調整であった。底径7.4cmである。2は、南比企産の須恵器坏底部で、底部は全面回転ヘラ削りが施されていた。また底部には、「十」あるいは「×」と墨書

されていた。2点の土器には時期差があり、住居跡の重複関係から、1は第519号住居跡に、2は第520号住居跡に属していた可能性がある。

3は用途不明の土製品で、孔が1孔穿たれていた。



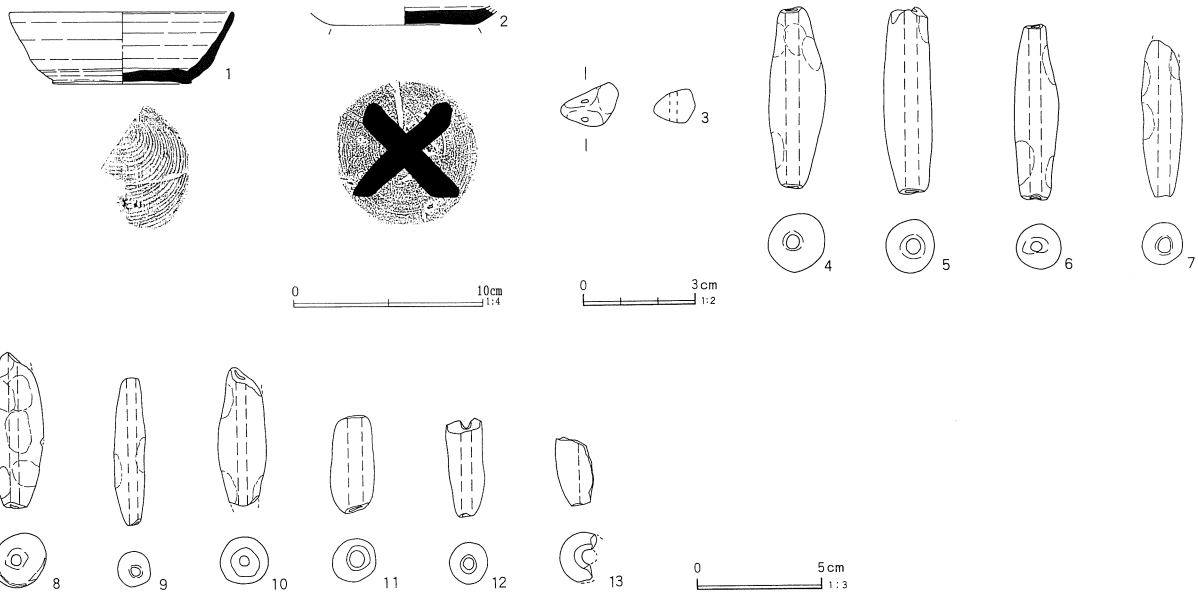
第131図 第519号住居跡出土遺物

第519号住居跡出土遺物観察表（第131図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師暗文坏	13.3	4.8	8.7	B D E J	良好	橙	75	覆土	内面放射暗文
2	須恵坏		1.2	6.4	A B I J	良好	灰	100	覆土	南比企産 底部全面回転ヘラケズリ
3	須恵坏		1.2	5.5	B J L	良好	灰	100	覆土	末野産 底部回転糸切
4	土師甕	(21.3)	7.5		B D E J	普通	黄橙	25	覆土	

第519号住居跡出土土錘観察表（第131図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	6.60	2.20	0.60	24.16	B b III	C	にぶい橙	100	カマド
6	6.80	1.80	0.50	18.18	B a III	C	にぶい黄橙	90	
7	5.80	2.00	0.40	17.63	B a IV	C	にぶい黄橙	100	
8	5.40	2.35	0.70	24.55	B a V	C	浅黄橙	95	
9	6.40	1.50	0.60	10.70	A a IV	B	褐灰	100	
10	5.50	2.20	0.65	20.97	B a IV	C	灰黄褐	90	
11	(5.50)	1.85	0.50	13.58	B a III	C	灰白	60	
12	(4.90)	1.90	0.60	12.30	B a V	C	褐灰	70	
13	(4.40)	1.40	0.60	6.76	A a V	C	橙	90	
14	(3.20)	1.70	0.60	8.73	B a III	A	浅黄橙	50	
15	(4.20)	1.40	0.50	5.70	B a II	C	にぶい赤褐	50	
16	(3.20)	1.30	0.40	4.77	B a IV	B	褐灰	50	



第132図 第519・520号住居跡出土遺物

第519・520号住居跡出土遺物観察表（第132図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	(11.8)	3.8	(7.4)	B D F J	普通	褐灰	40	覆土	末野産 底部回転糸切
2	須恵坏		1.1	7.7	B I J	良好	灰白	100	覆土	南比企産 底部「+」か「×」の墨書 転用硯か？
3	不明土製品	縦2.20cm	横1.80cm		J	普通	にぶい橙	100	覆土	孔径0.30cm 重さ4.11g

第519・520号住居跡出土土錘観察表（第132図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	7.15	2.40	0.55	26.99	C a III	C	にぶい黄橙	95	
5	7.30	2.10	0.60	26.54	B a III	A	浅黄橙	95	
6	6.95	1.80	0.45	17.50	C b III	C	灰黄褐	100	
7	(6.20)	1.70	0.60	15.08	B a III	C	にぶい黄橙	90	
8	6.10	2.25	0.40	22.42	B b IV	C	灰黄褐	85	
9	5.80	1.40	0.40	8.93	C a IV	C	にぶい橙	100	
10	5.50	1.90	0.40	15.71	C a IV	C	にぶい黄褐	80	
11	3.90	1.30	0.60	10.04	B a VI	C	灰黄褐	95	
12	3.80	1.65	0.45	8.23	B a IV	C	にぶい黄	60	
13	2.70	2.00	0.55	5.83	—	C	橙	20	

第520号住居跡（第133・134図）

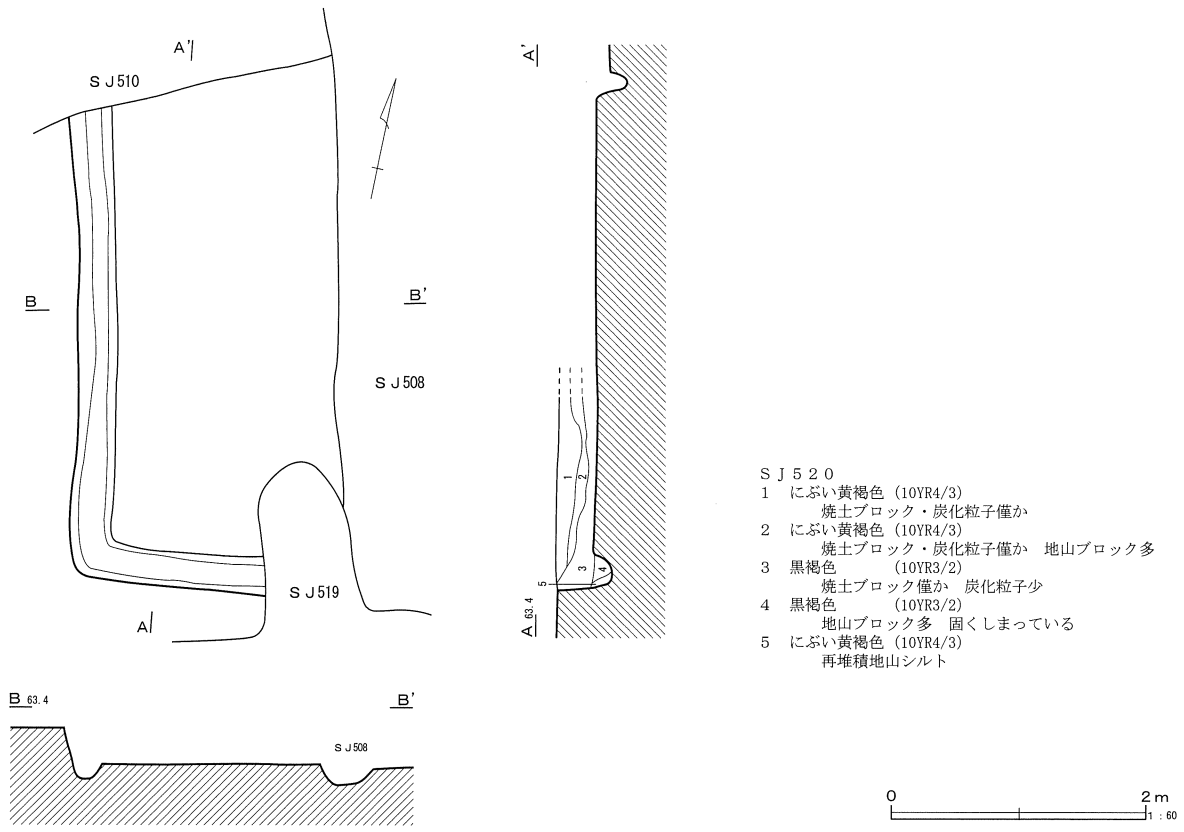
K-20グリッドに位置する。第508・510・519号住居跡に切られ、第399号住居跡を切る。西壁から南壁の一部が検出されただけである。検出された規模は西壁3.58m、南壁1.53mで、深さは0.28~0.32mである。主軸方位は西壁でN-13°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

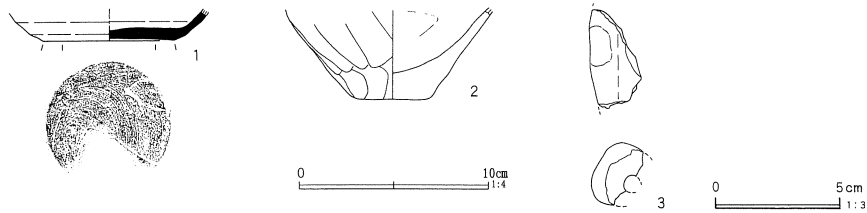
覆土は一部の観察しか出来なかった。

カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。壁溝は検出された壁全てで見られ、幅30~34cm、深さ11~13cmである。

遺物は、土師器・須恵器の破片が数点出土したのみで、図示可能な遺物は、須恵器坏1点と、土師器甕1点、土錘3点であった。



第133図 第520号住居跡



第134図 第520号住居跡出土遺物

第520号住居跡出土遺物観察表 (第134図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏		1.7	7.0	B F I J	良好	灰	75	覆土	南比企産 回転糸切後周辺手持ちヘラケズリ
2	土師甕		4.7	4.2	A B D E J L	良好	橙	100	覆土	外面二次焼成

第520号住居跡出土土錘観察表 (第134図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	(3.90)	(2.60)	(0.70)	11.07	—	C	にぶい黄橙	10	

第524号住居跡 (第135・136図)

L-22グリッドに位置する。第530・531号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は東西に長い

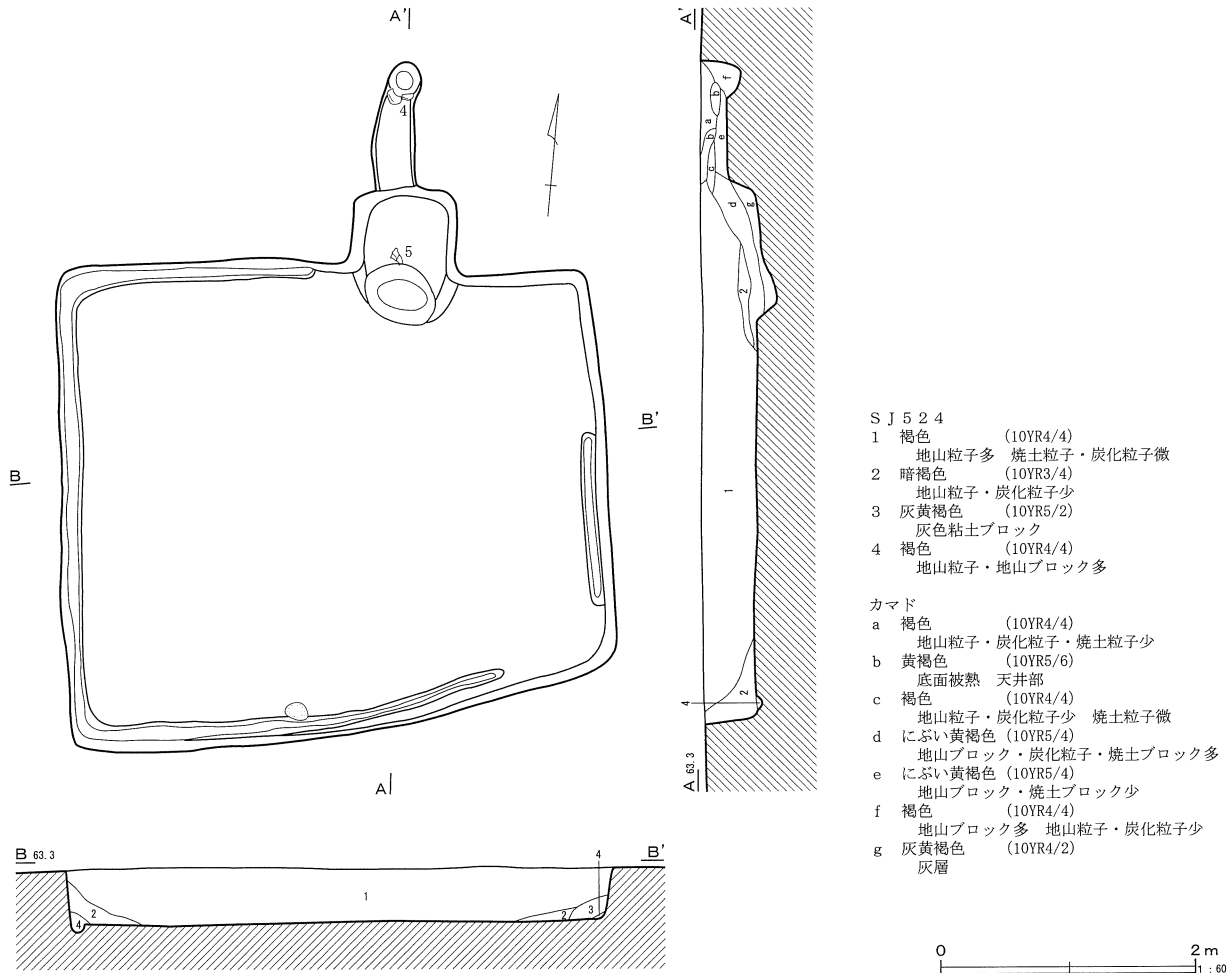
長方形で、長軸4.35m、短軸3.70m、深さは0.35～0.45mである。主軸方位はN-8°-Wを指す。床面は平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは北壁中央より東寄りに設置される。天井部の一部が残存していた（b層）。燃烧部はピット状に15cm程掘り込み、段を持って煙道部となる。煙道部先端はピット状になっていた。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南東コーナーと南西コーナー以外で検出され、幅10~22cm、深さ4~9cmである。

遺物は、奈良時代の土師器・須恵器片が出土した。土師器は坏・甕の破片が多かったが、小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・甕2・台付甕1、須恵器蓋1、土錘9点であった。

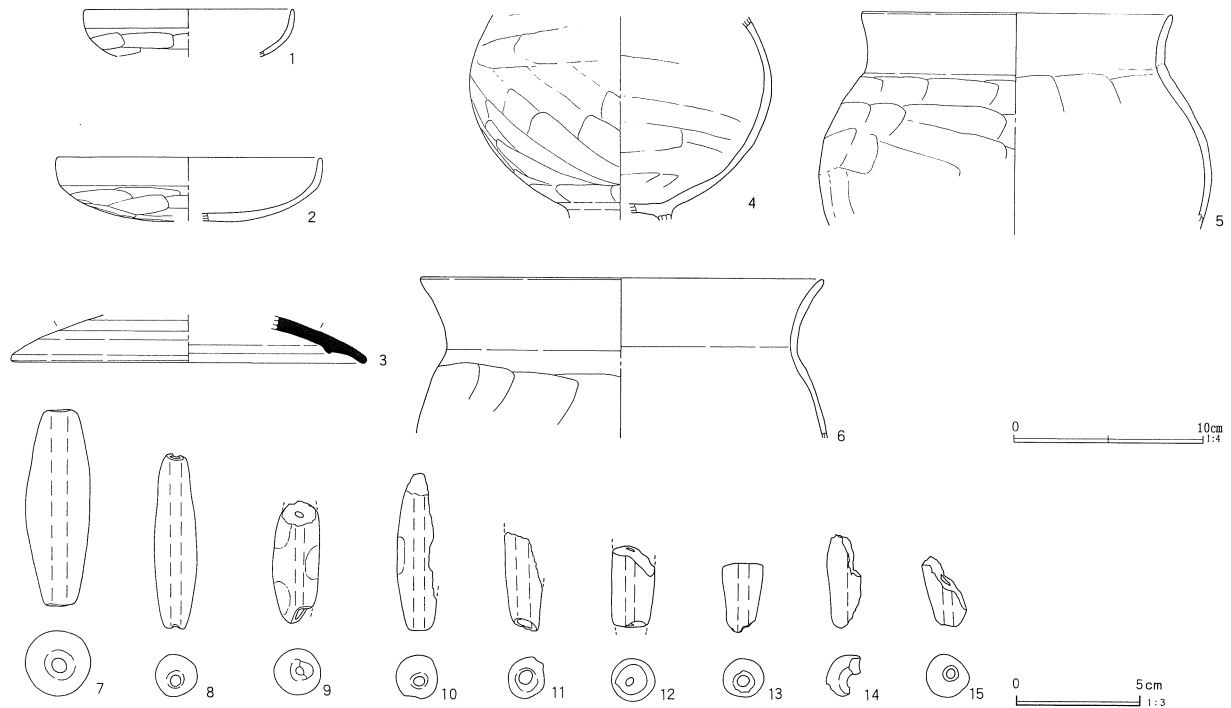
1~3は覆土から、4~6はカマドから出土した。



第135図 第524号住居跡

第524号住居跡出土遺物観察表 (第136図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.0)	2.6		B D E J	普通	橙	30	覆土	
2	土師坏	(14.0)	3.4		B D E J	良好	にぶい橙	40	カマド	
3	須恵蓋	(18.7)	2.5		A B E J	良好	灰	10	C区	未野産 天井部回転ヘラケズリ
4	土師台付甕		10.8		B D E J	良好	明赤褐	50	カマド	
5	土師甕	(16.3)	11.8		B D E J	良好	橙	40	カマド	
6	土師甕	(21.3)	8.5		A B D E J	普通	橙	40	カマド	内外面磨耗著しい



第136図 第524号住居跡出土遺物

第524号住居跡出土土錘観察表（第136図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
7	7.75	2.60	0.60	42.77	B b II	C	にぶい橙	100	4区
8	6.95	1.65	0.45	15.69	B a III	C	にぶい黄橙	95	1区
9	4.80	1.80	0.40	13.76	B a IV	C	黒褐	70	2区
10	6.15	1.80	0.45	9.63	B a V	C	明赤褐	55	2区
11	(3.90)	1.70	0.60	6.10	—	C	にぶい黄橙	40	C区
12	(3.25)	1.70	0.40	9.54	—	C	橙	40	4区
13	(2.75)	1.65	0.45	5.60	—	C	橙	30	カマド
14	(3.70)	—	(0.60)	5.00	—	C	橙	20	4区
15	(2.80)	1.75	0.40	5.07	—	C	にぶい褐	15	1区

第525号住居跡（第137・138図）

K・L-22グリッドに位置する。平面形は正方形に近く南北4.21m、東西4.01m、深さは0.36~0.43mである。主軸方位はN-82°-Eを指す。

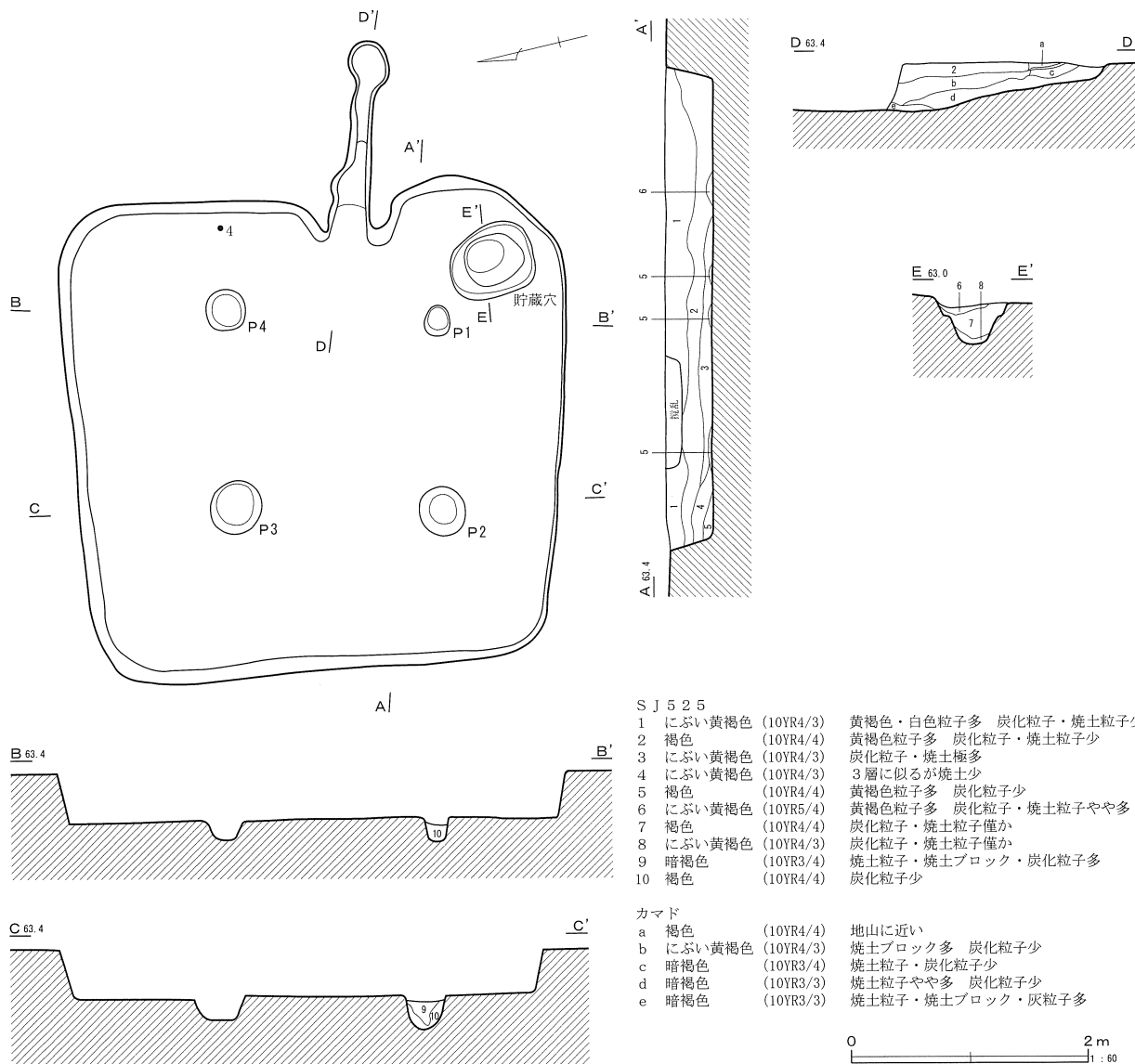
床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃焼部の掘り込みはなく、緩やかな段を持って煙道部となる。貯蔵穴は南東コーナー近くに設けられ、74×60cmの楕円形で、深さは34cmである。壁溝は検出さ

れなかった。ピットは4本検出され、何れも支柱穴と考えられる。P1~P4の深さは20cm、28cm、20cm、16cmである。

遺物は、覆土から古墳時代の土師器片が多く出土した。坏・甕の破片が多かったが、磨耗が著しく、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏4・小型甕1・甕2、土錘2点であった。このうち、2は貯蔵穴から、4は住居跡東壁沿いで、6はカマドから出土した。



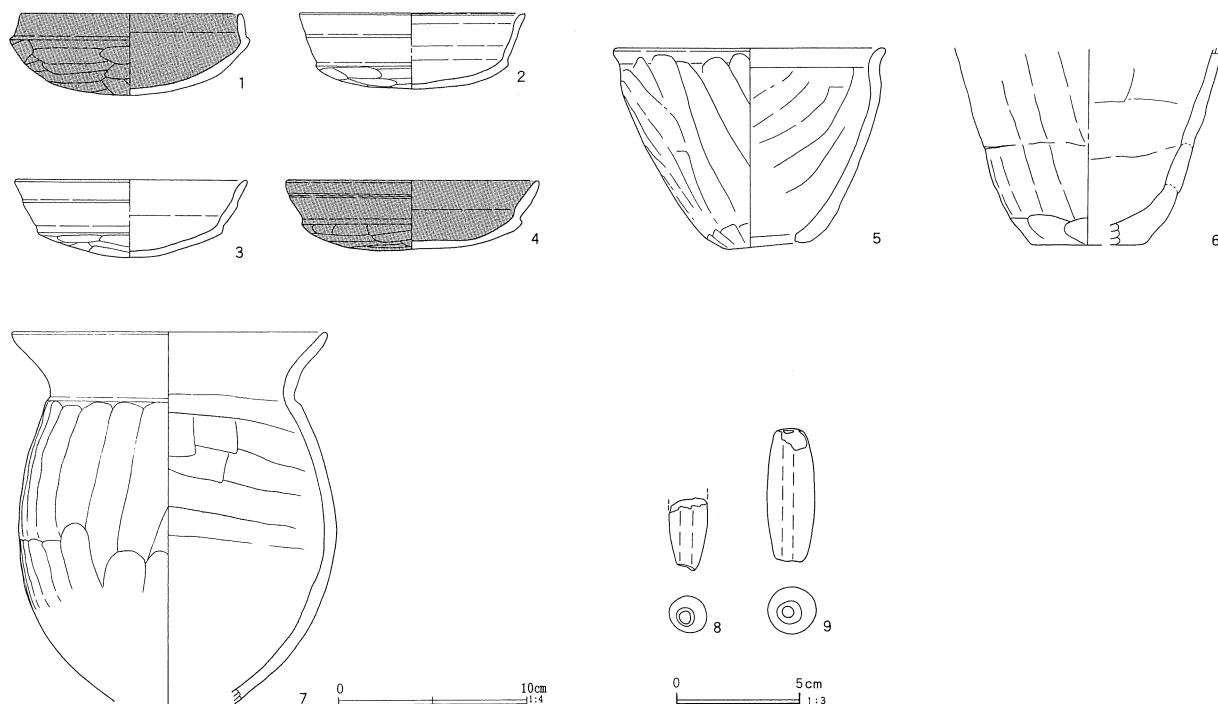
第137図 第525号住居跡

第525号住居跡出土遺物観察表 (第138図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	11.6	4.3		D E G J L	良好	にぶい褐	90	覆土	内外面黒色処理
2	土師坏	(11.9)	4.0		B D E J	普通	にぶい橙	25	貯蔵穴	
3	土師坏	(12.3)	4.0		B E J	普通	にぶい黄褐	50	覆土	底部黒斑あり
4	土師坏	13.3	3.7		B D J L	良好	にぶい黄褐	100	+10cm	内外面黒色処理
5	土師甗	14.1	10.5	4.5	A J L	良好	橙	80	覆土	内面黒く煤ける
6	土師甗	10.4	10.4	(5.9)	E F J L	普通	にぶい赤褐	40	カマド	
7	土師甗	16.5	19.7		A J K L	良好	にぶい黄橙	80	覆土	

第525号住居跡出土土錘観察表 (第138図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	(2.90)	1.55	0.50	4.96	—	C	明赤褐	20	
9	5.25	1.90	0.45	18.45	B a V	C	にぶい黄橙	95	



第138図 第525号住居跡出土遺物

第526号住居跡 (第139・140・141図)

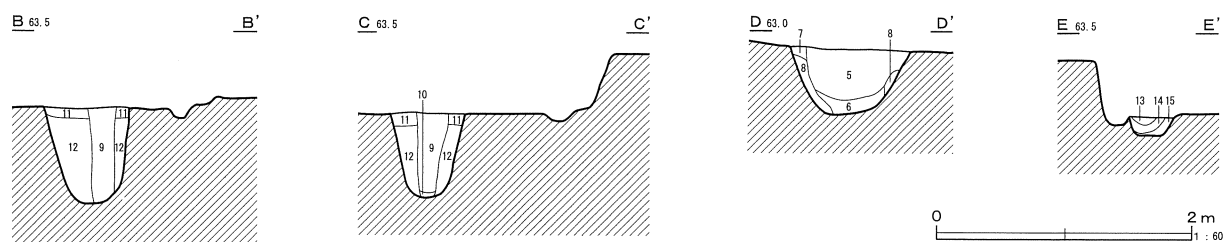
K-20・21グリッドに位置する。第496・502・507・508・509・512・513・529号住居跡・第22号掘立柱建物跡と重複し、その何れより旧く、北西側は検出されなかった。平面形は正方形で、東西7.28m、南北7.27m、深さは0.40~0.44mである。主軸方位はN-23°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

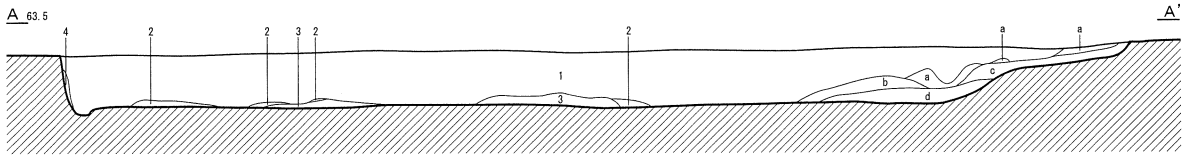
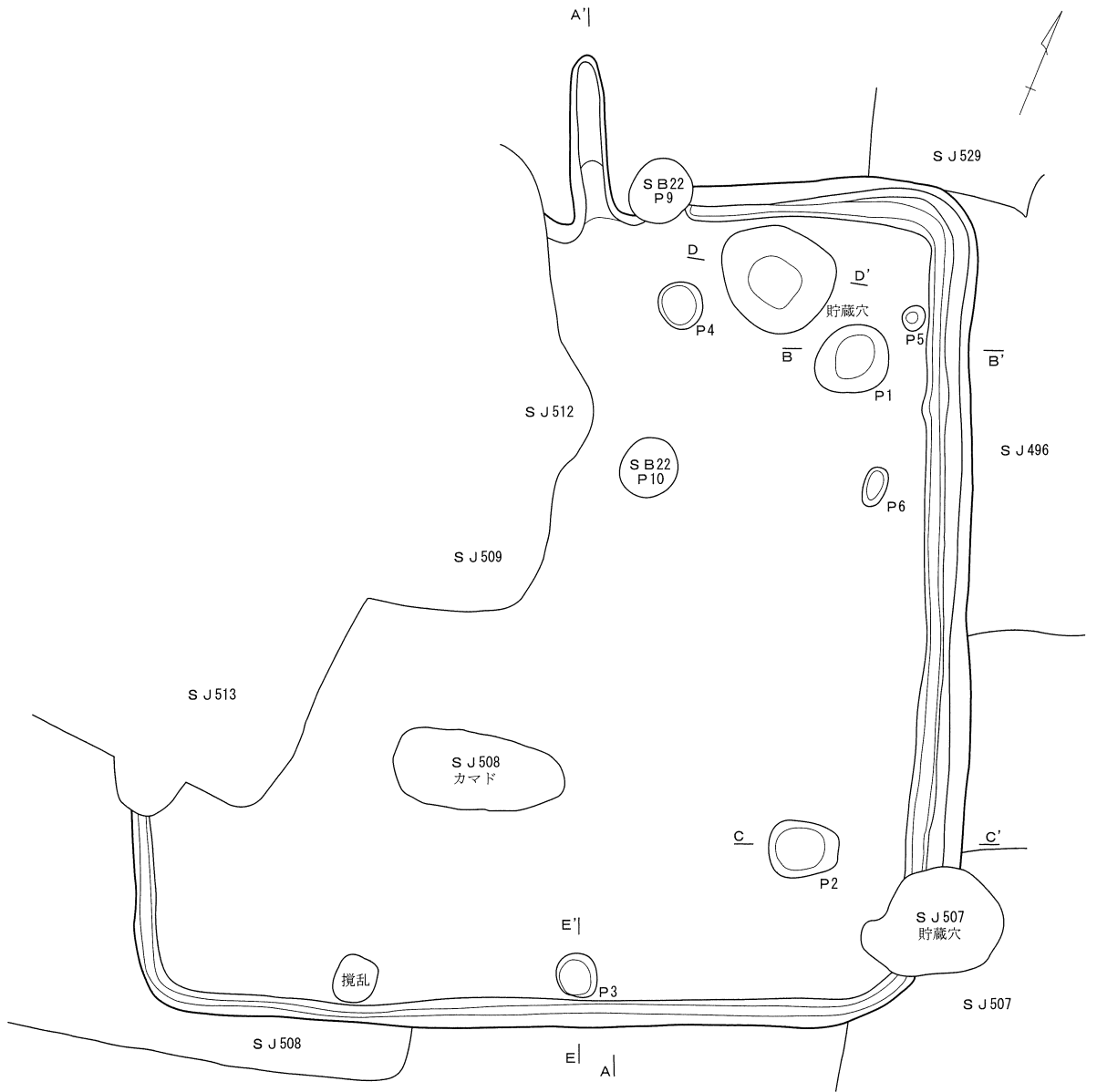
カマドは北壁に設置される。燃焼部の掘り込みは

なく、段を持って煙道部なる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、102×88cmの楕円形で、深さは52cmである。壁溝は全周し、幅18~28cm、深さ6~8cmである。ピットは5本検出され、P1~P5の深さは76cm、67cm、14cm、4cm、8cmである。P1・P2は土層断面から柱穴と考えられる。

遺物は、古墳時代後期の土師器杯・甕の破片が少量出土した。図示可能な遺物は、土師器杯2・甕1、土錘3点であった。

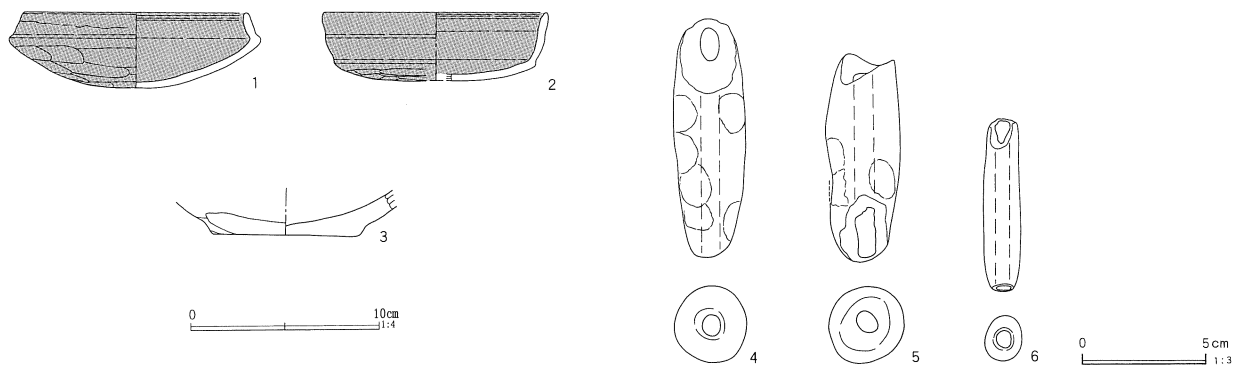


第139図 第526号住居跡 (1)



- | | | | | | | |
|-----------|------------------|--------------------|--------|-----|------------------|--------------------|
| S J 5 2 6 | | | | | | |
| 1 | 褐色 (10YR4/4) | 再堆積地山シルト | 炭化粒子極少 | 11 | 灰黄褐色 (10YR5/2) | 白色粘土多 酸化鉄 |
| 2 | 褐色 (10YR4/4) | 炭化粒子多 | | 12 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山シルト |
| 3 | 黒褐色 (10YR3/2) | 炭化粒子・地山シルトブロック・焼土少 | | 13 | 黒褐色 (10YR2/3) | 地山シルト多 |
| 4 | 焼土層 | | | 14 | 黒褐色 (10YR2/3) | 焼土僅か 炭化粒子多 |
| 5 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山シルトブロック・焼土・炭化粒子少 | | 15 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 埋め戻し地山シルト 炭化粒子少 |
| 6 | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 白色粘土 | | | | |
| 7 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 白色粘土 | | カマド | | |
| 8 | 黒褐色 (10YR3/2) | 地山シルトブロック 焼土 炭化粒子 | | a | 褐色 (10YR4/4) | 焼土ブロック・地山シルトブロック僅か |
| 9 | 褐色 (10YR4/4) | 炭化粒子多 | | b | 褐色 (10YR4/4) | 地山シルトブロック多 炭化粒子少 |
| 10 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山シルト極多 | | c | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化粒子少 |
| | | | | d | 黒褐色 (10YR3/2) | 灰層 焼土ブロック極多 |

第140図 第526号住居跡 (2)



第141図 第526号住居跡出土遺物

第526号住居跡出土遺物観察表（第141図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	11.8	4.0		A B E J L	良好	赤褐	80	貯蔵穴	内外面黒色処理
2	土師坏	(11.8)	3.5		B E J	良好	にぶい褐	25	覆土	内外面黒色処理
3	土師甕		2.5	(8.0)	A B E J L	良好	灰黄褐	25	カマド	

第526号住居跡出土土錘観察表（第141図）

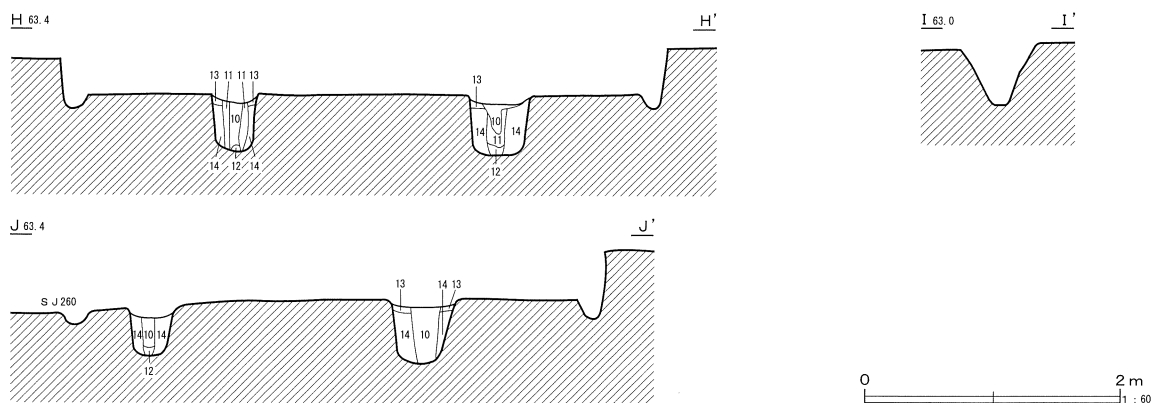
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	(9.40)	3.05	0.80	64.27	B a I	C	にぶい黄橙	80	
5	(8.20)	3.20	0.95	60.58	B a I	C	にぶい橙	70	
6	6.80	1.80	0.65	13.75	B a III	C	明赤褐	95	

第527号住居跡（第142・143・144図）

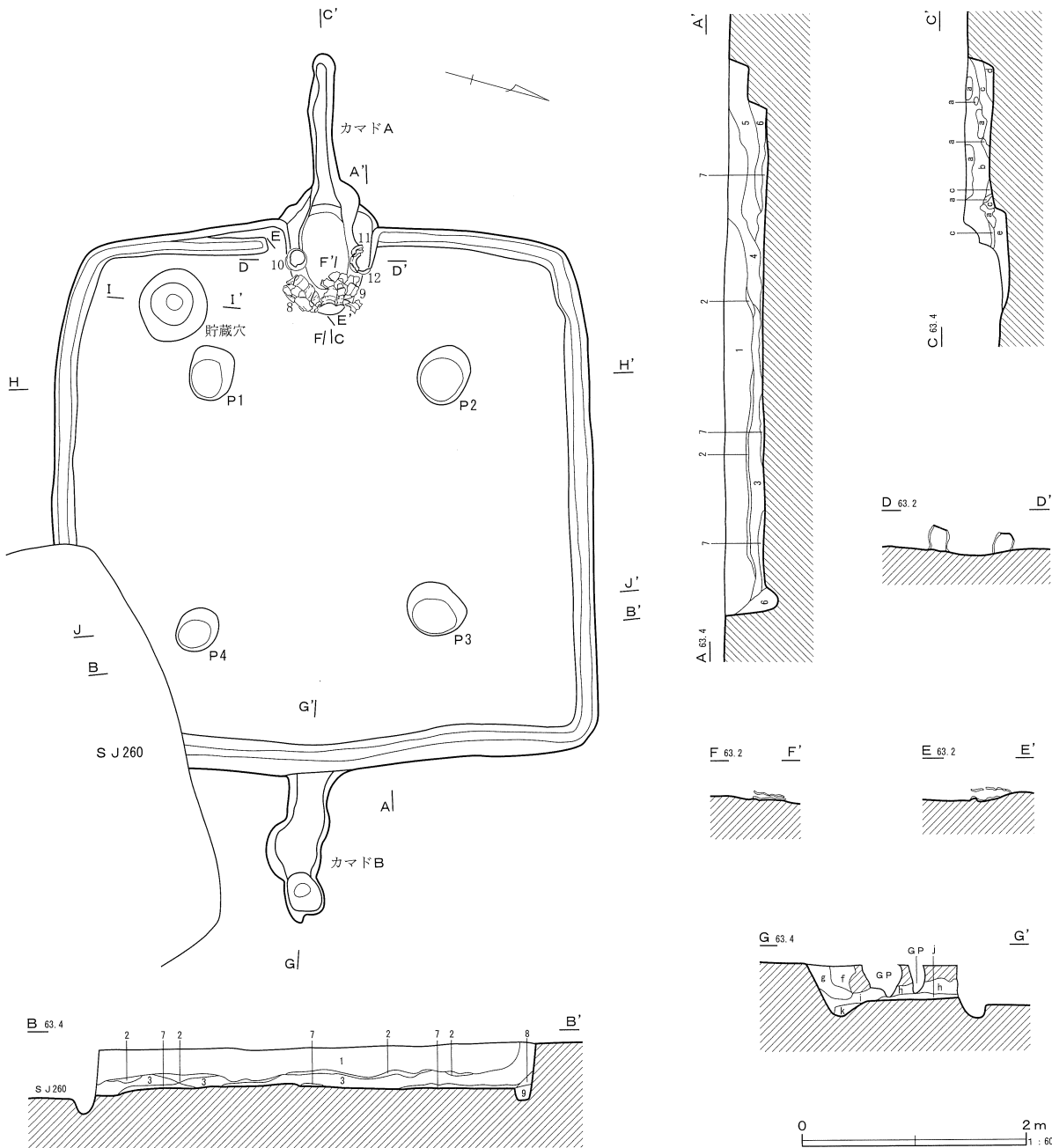
L-20・21グリッドに位置する。南東コーナーを第260号住居跡に切られ、第546号住居跡を切る。平面形は正方形で、東西4.98m、南北4.91m、深さは0.34~0.38mである。主軸方位はN-107°-Wを指す。

床面はやや起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは2基検出された。カマドAは西壁中央に設置される。燃烧部は10cm程掘り込み、段を持って煙道部となる。袖は左右共に土師器甕で補強されていた。カマドBは東壁に設置され、煙道部のみ残存していた。壁溝によって切られていたが、天井部が



第142図 第527号住居跡（1）



S J 5 2 7

- | | | | |
|----|--------|-----------|-----------------|
| 1 | 褐色 | (10YR4/4) | 炭化粒子・焼土多 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 炭化粒子 |
| 3 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 地山ブロック・炭化粒子・焼土少 |
| 4 | 褐色 | (10YR4/4) | 炭化粒子・焼土少 |
| 5 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 焼土多 |
| 6 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 粘性やや多 地山土少 |
| 7 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 炭化物層 炭化物の下に焼土層状 |
| 8 | にぶい黄褐色 | (10YR4/2) | 炭化粒子多 |
| 9 | 褐色 | (10YR4/4) | 炭化粒子多 |
| 10 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 炭化粒子多 |
| 11 | 灰黄褐色 | (10YR4/2) | 炭化粒子 |
| 12 | 灰黄褐色 | (10YR5/2) | 粘土層 |
| 13 | 灰黄褐色 | (10YR4/2) | 炭化粒子・焼土少 |
| 14 | にぶい黄褐色 | (10YR5/3) | 炭化粒子多 |

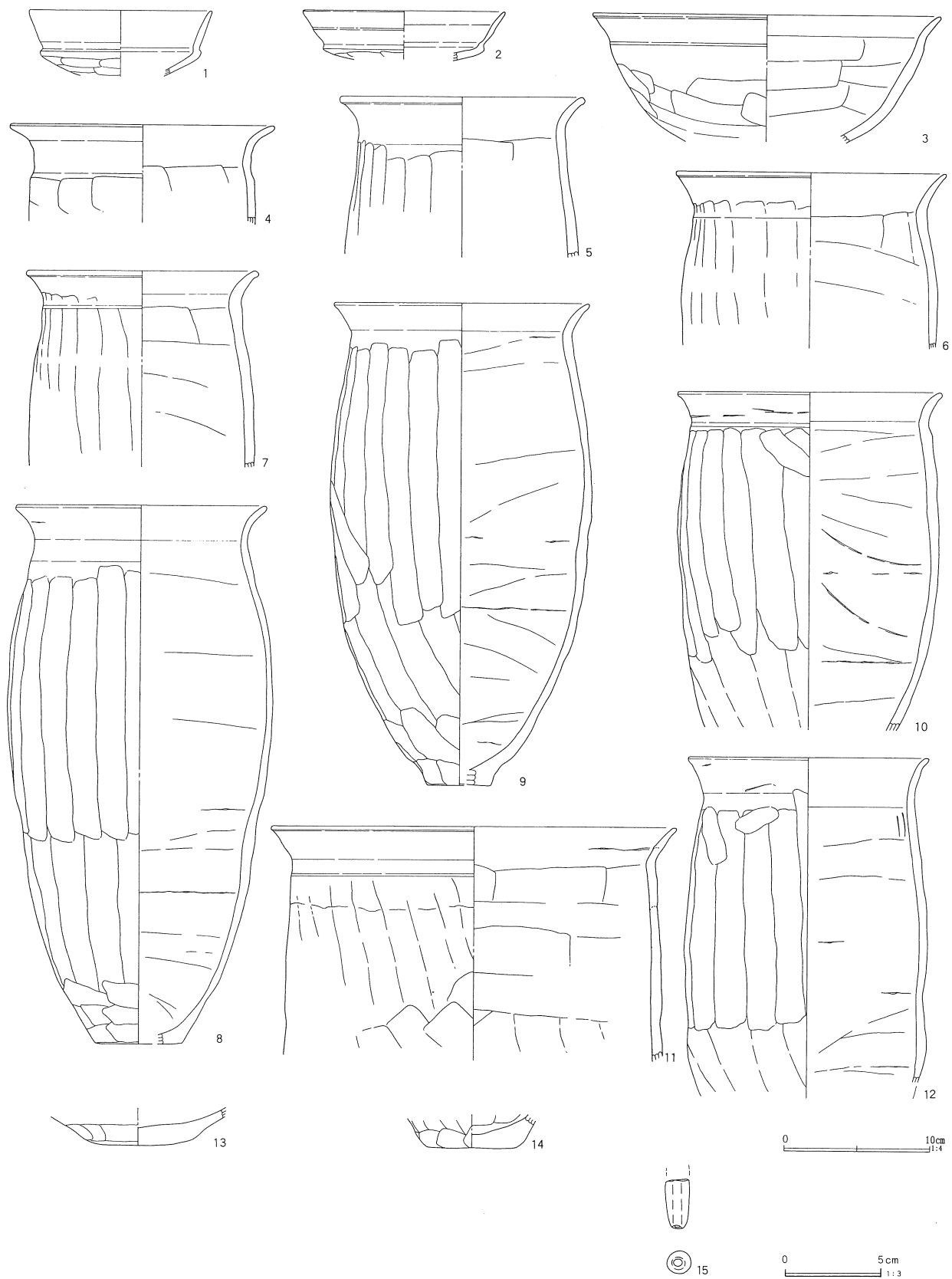
カマドA

- | | | | |
|---|-----|-----------|--------------------|
| a | 褐色 | (10YR4/6) | 天井崩落土 下面に半還元面 |
| b | 褐色 | (10YR4/4) | 地山シルトブロック・炭化粒子・焼土少 |
| c | 褐色 | (10YR4/4) | 白色粘土ブロック多 |
| d | 黒褐色 | (10YR3/2) | 灰層 焼土ブロック多 |
| e | 褐色 | (10YR4/4) | 地山シルトブロック極多 炭化粒子極少 |

カマドB

- | | | | |
|---|--------|-----------|---------------------|
| f | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 炭化粒子多 |
| g | 暗褐色 | (10YR3/3) | 焼土・炭化粒子多 |
| h | 暗褐色 | (10YR3/4) | 炭化粒子・焼土粒 (φ2~3mm) 多 |
| i | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 炭化粒子・焼土粒 (φ5mm大) 多 |
| j | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 粘性高い iよりも炭化粒子・焼土粒子多 |
| k | 褐色 | (10YR4/4) | 地山土主体 炭化粒子少 |

第143図 第527号住居跡 (2)



第144図 第527号住居跡出土遺物

残存し、先端はピット状となっていた。貯蔵穴はカマド左に設けられ、67×60cmの円形で、深さは46cmである。壁溝は全周し、幅16～30cm、深さ4～16cmである。ピットは4本検出され、P1～P4の深さは46cm、48cm、50cm、38cmである。何れも支柱穴と考えられる。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕・甗がカマド

及び覆土から出土した。覆土の遺物は少なく、殆ど図示可能な個体であった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・鉢1・甕10・甗1、土錘1点であった。

このうち、8・9はカマド燃烧部手前の床面から、10・12は、カマド袖の補強材として転用されていたものである。

第527号住居跡出土遺物観察表（第144図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.4)	4.5		A B E J L	普通	橙	40	覆土	
2	土師坏	(13.8)	3.4		B D E J	良好	にぶい橙	30	カマド・A区	
3	土師鉢	(23.8)	8.7		A D J L	良好	にぶい橙	20	A区	
4	土師甕	(18.0)	6.8		A B D H J L	良好	にぶい橙	40	C区	
5	土師甕	(16.4)	11.0		B E J L	普通	浅黄橙	25	B区	
6	土師甕	(18.4)	11.9		D E J L	良好	にぶい橙	40	カマド・A区	
7	土師甕	(15.6)	13.4		B D E H J L	良好	にぶい橙	20	B区	
8	土師甕	(17.0)	37.0	(6.0)	A E J L	不良	にぶい橙	70	カマド	
9	土師甕	17.6	33.1	(4.4)	B C J L	普通	にぶい橙	80	カマド	磨耗著しい
10	土師甕	18.2	23.2		B C J L	普通	にぶい橙	90	カマド	
11	土師甗	(27.6)	16.0		A E H J L	良好	浅黄橙	40	カマド	
12	土師甕	16.6	22.2		B C J L	不良	灰褐	70	カマド	口縁部は楕円形を呈する
13	土師甕		2.5	7.5	B D E J	良好	橙	80	A区	
14	土師甕		2.4	6.1	B D E J L	良好	にぶい赤褐	80	A区	

第527号住居跡出土土錘観察表（第144図）

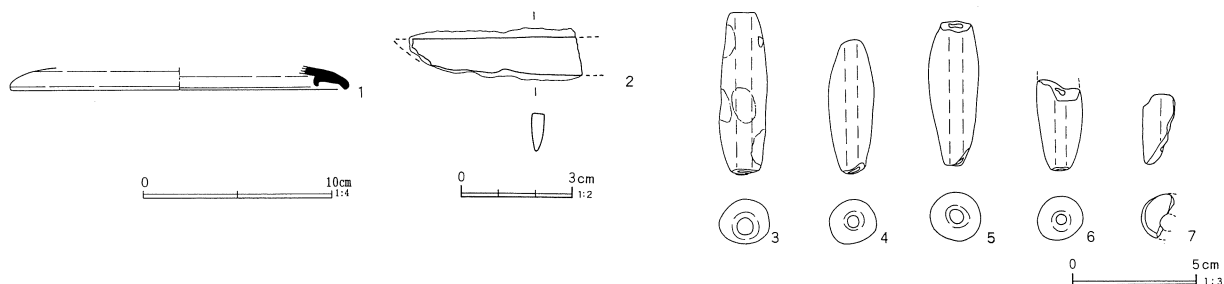
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
15	(2.50)	1.20	0.40	3.56	B a III	A	橙	40	

第528号住居跡（第145・146図）

J-21・22グリッドに位置する。第514・515号住居跡と重複し、本住居跡が古い。平面形は正方形で、南北2.55m、東西2.51m、深さは0.40～0.48mである。主軸方位はN-87°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁に設置される。燃烧部の掘り込みは浅く、緩やかに立ち上がって煙道部となる。最下層に灰層が検出された。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は全周し、幅10～16cm、深さ1～7cmである。



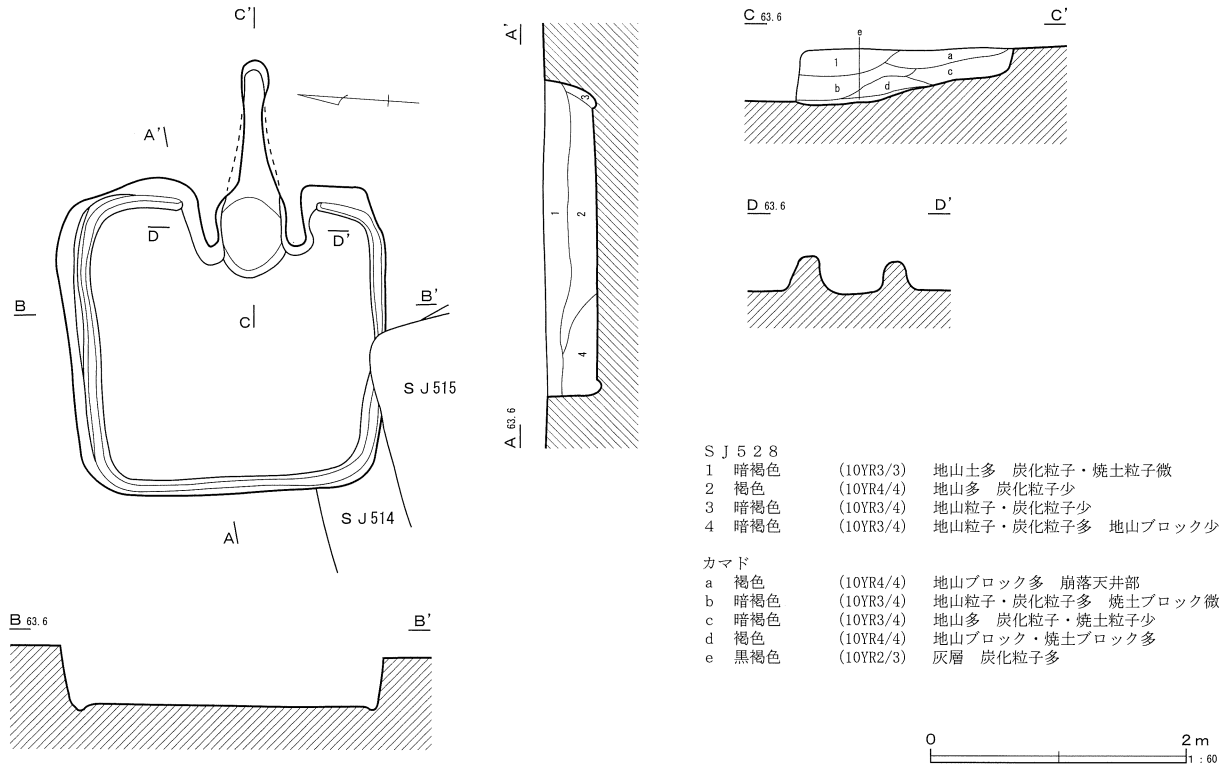
第145図 第528号住居跡出土遺物

遺物は、土師器・須恵器の小片が少量出土したが、
 接合はしなかった。

図示可能な遺物は、須恵器蓋 1、土錘 5、鉄製品
 として刀子 1 点が出土した。

1 は、須恵器蓋の口縁部の破片である。末野産で、
 カマドから出土した。

2 は刀子である。切先から身部にかけての部材で
 ある。



第528号住居跡出土遺物観察表 (第145図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵蓋	(17.7)	1.2		B J	良好	灰	5	カマド	末野産
2	刀子	現存長4.55cm	背幅0.35cm	刃幅1.05cm		重さ7.47g			覆土	

第528号住居跡出土土錘観察表 (第145図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	6.40	2.00	0.70	19.99	B b IV	C	にぶい橙	100	
4	5.30	1.90	0.45	13.60	B a V	A	灰褐	100	
5	(5.70)	2.05	0.60	17.67	C a III	A	橙	90	
6	(3.60)	1.90	0.40	9.58	B b IV	C	—	45	
7	2.80	—	—	4.49	—	A	—	—	

第529号住居跡 (第147・148図)

J・K-21グリッドに位置する。第492・496・514・
 515号住居跡に切られ、第526号住居跡を切る。検出

された規模は、東西が4.72m、南北は4.18mで、深
 さは0.08~0.14mである。主軸方位はN-17°-Wを
 指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

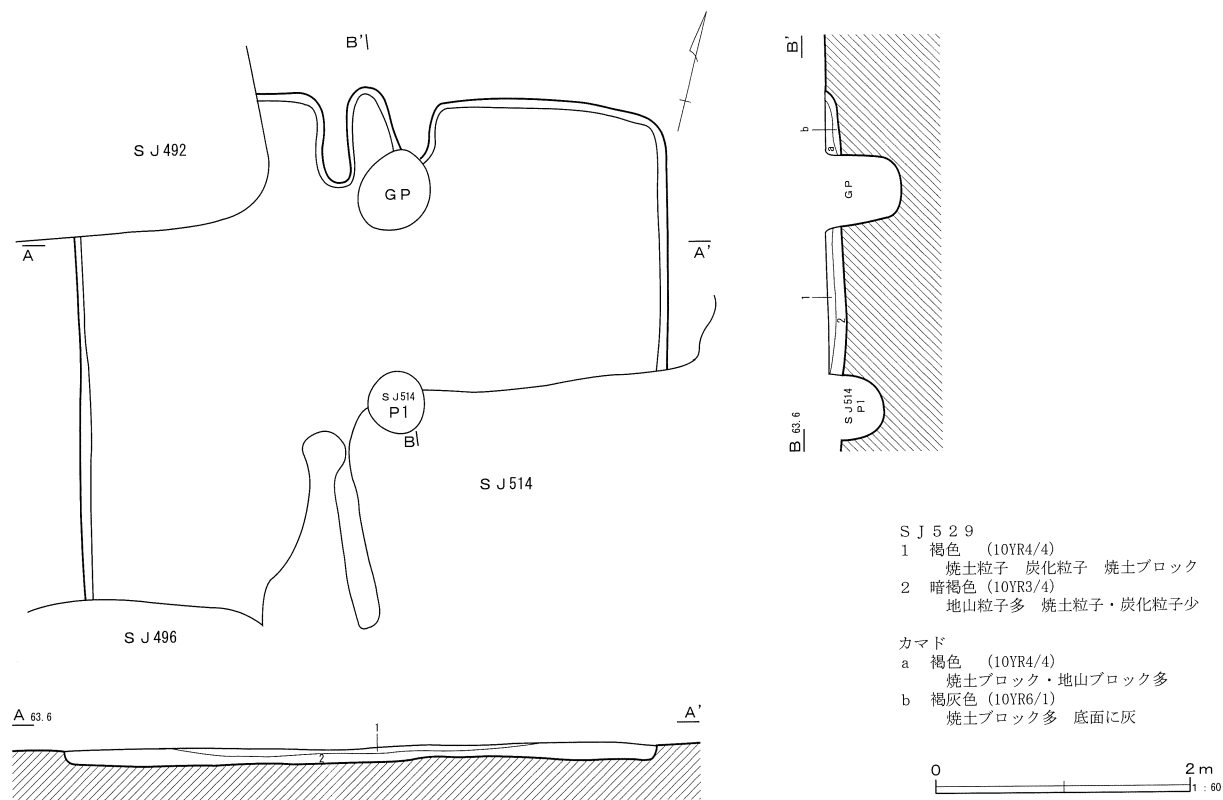
カマドは北壁中央に設置される。右袖先端はグリッドピットに壊されていた。燃焼部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、土師器・須恵器の破片が少量出土したが、

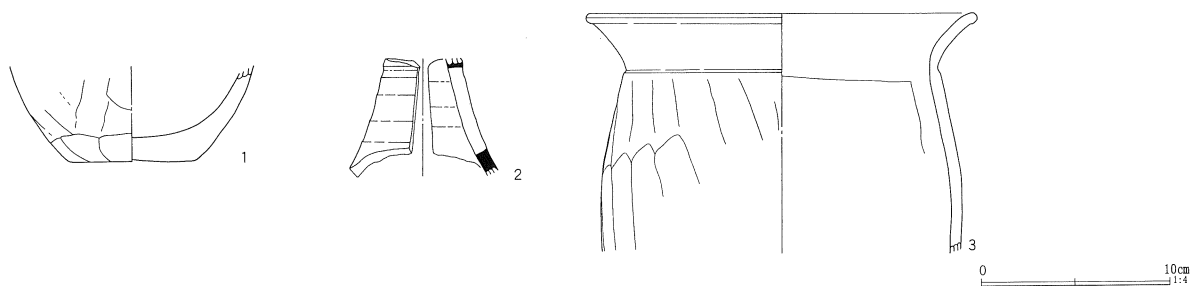
接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器甕2、須恵器高坏1点であった。

2は、須恵器高坏の脚部と考えられる。約50%の破片であるが、透孔が2孔認められた。



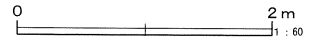
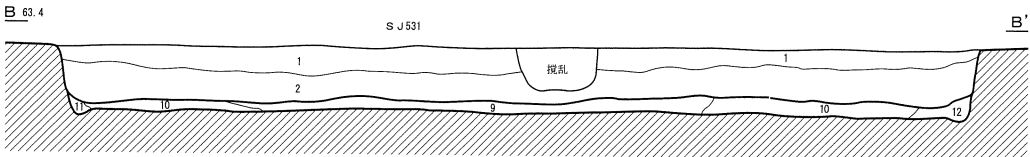
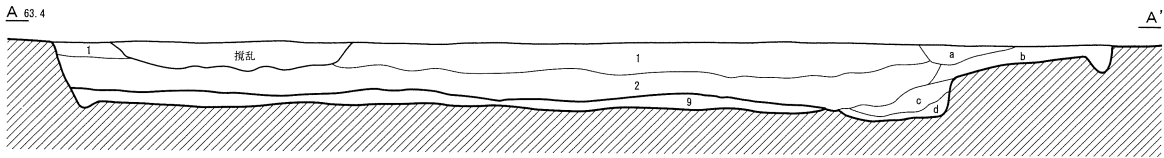
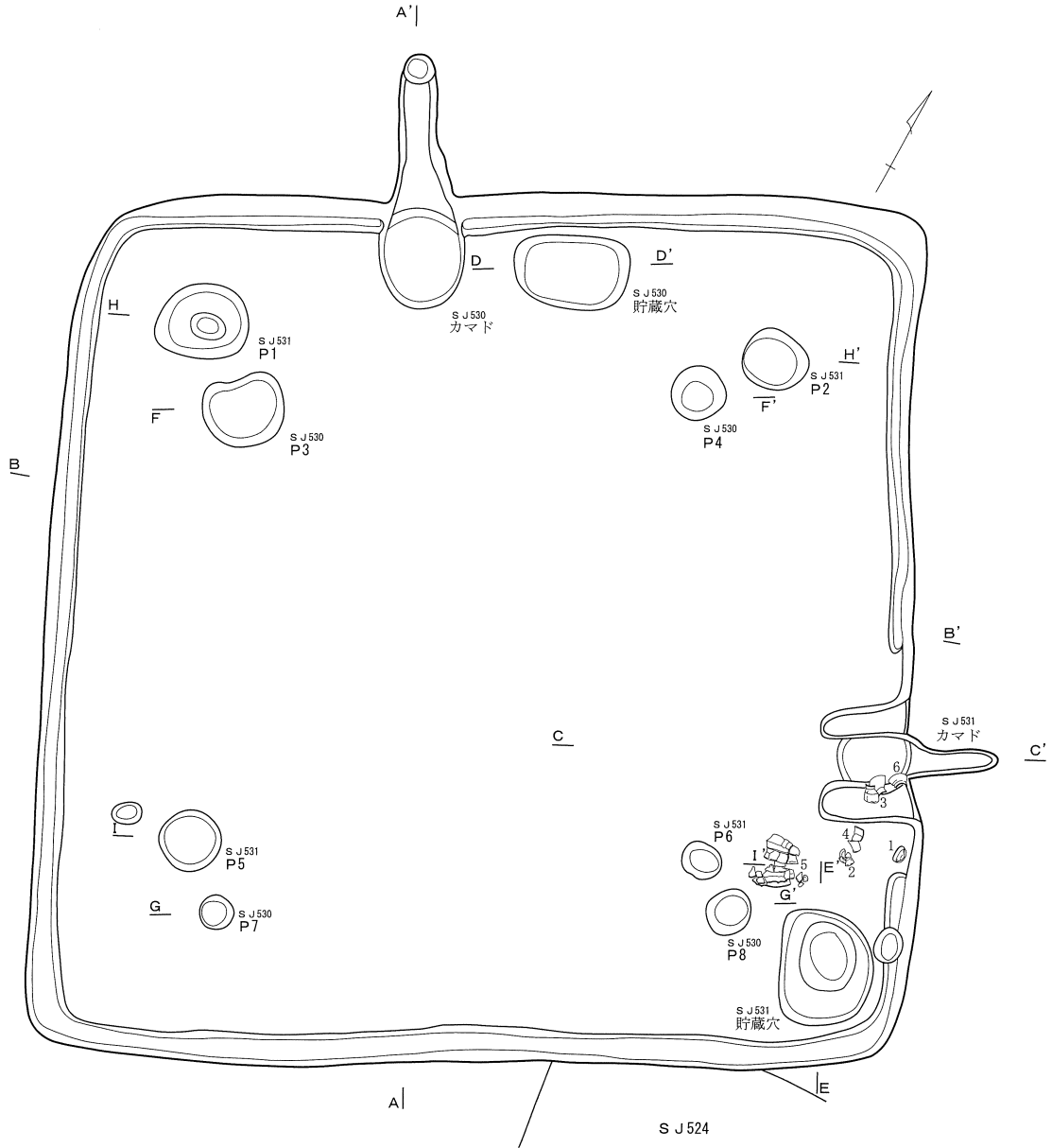
第147図 第529号住居跡



第148図 第529号住居跡出土遺物

第529号住居跡出土遺物観察表 (第148図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師甕		5.1	(6.5)	BDJ	普通	橙	50	覆土	
2	須恵器高坏		6.2		ABJ	良好	灰	50	覆土	末野産 透かしあり
3	土師甕	(20.3)	12.7		ABDHJL	普通	橙	30	覆土	



第149図 第530・531号住居跡 (1)

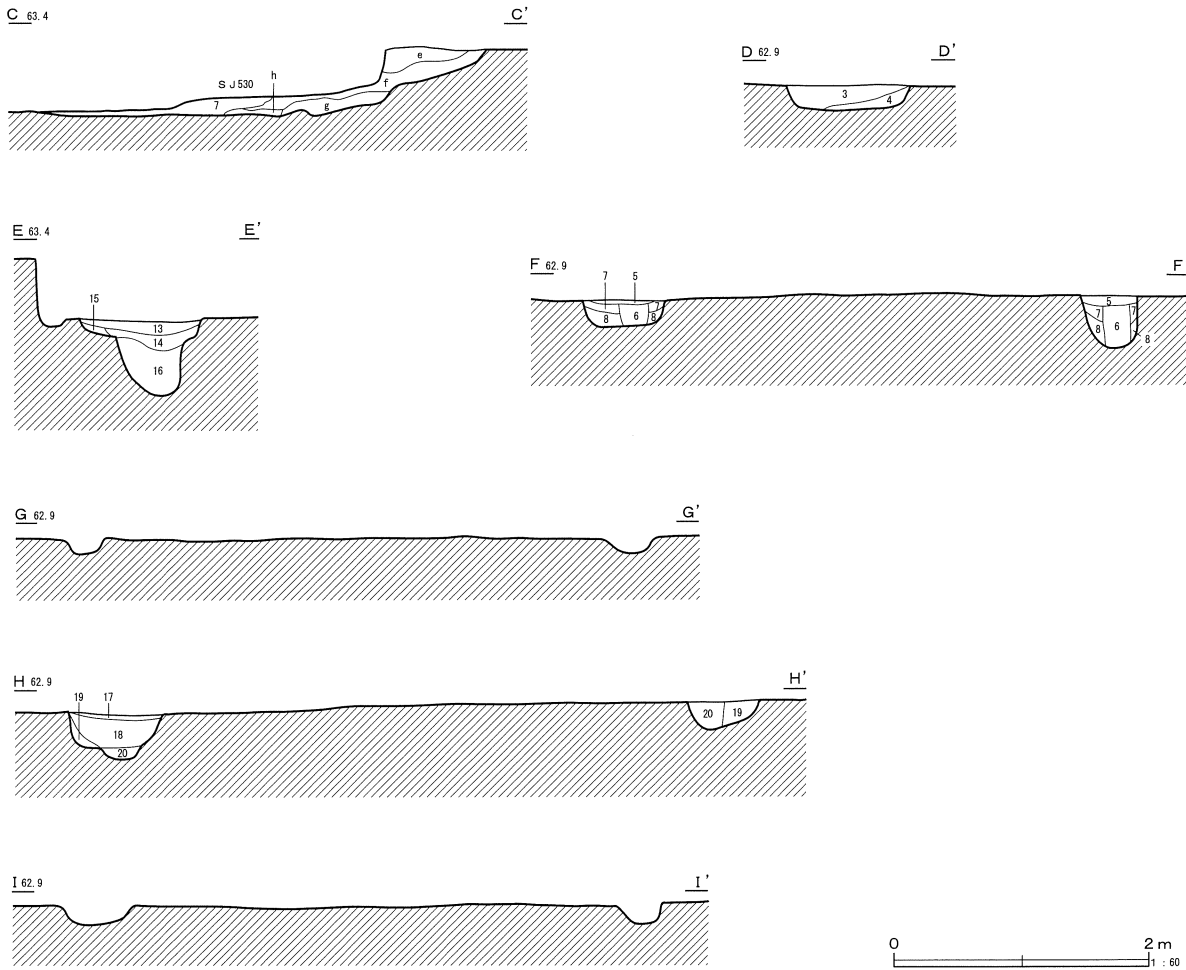
第530号住居跡（第149～152図）

K・L-21・22グリッドに位置する。第524号住居跡に切られ、第531号住居跡を切る。第531号住居跡と同時に調査したため、本住居跡のみの検出は出来ず、断面から復元した。平面形は正方形で、東西7.34m、南北7.24m、深さは0.38～0.52mである。主

軸方位はN-29°-Wを指す。

床面は起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁中央より西寄りに設置される。燃烧部は10cm程掘り込み、大きな段を持って煙道部となる。煙道部先端はピット状となっていた。貯蔵穴はカマド右に設けられ、98×60cmの隅丸長方形で、深



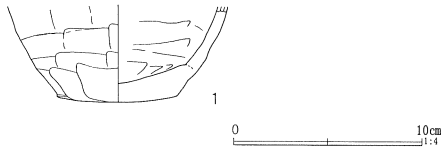
S J 5 3 0			
1	暗褐色 (10YR3/4)	地山粒子・炭化粒子少	焼土粒子微
2	褐色 (10YR4/6)	地山粒子・炭化粒子少	地山ブロック多
3	褐色 (10YR4/4)	地山粒子多	焼土ブロック・炭化粒子少
4	褐色 (10YR4/4)	地山粒子多	炭化粒子微
5	暗褐色 (10YR3/4)	炭化粒子	焼土帯状に多
6	暗褐色 (10YR3/3)	柱痕	炭化粒子・地山ブロック微
7	暗褐色 (10YR3/4)	地山粒子多	炭化粒子少
8	褐色 (10YR4/4)	地山粒子多	炭化粒子微
S J 5 3 0 カマド			
a	褐色 (10YR4/4)	天井部分	
b	暗褐色 (10YR3/4)	地山粒子・炭化粒子・焼土粒子少	
c	暗褐色 (10YR3/4)	炭化粒子多	焼土ブロック少
d	褐色 (10YR4/4)	灰層	炭化粒子多

S J 5 3 1			
9	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	地山多	炭化粒子微
10	暗褐色 (10YR3/4)	地山ブロック・焼土粒子少	炭化粒子多
11	暗褐色 (10YR3/4)	地山粒子多	
12	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	地山多	
13	褐色 (10YR4/4)	地山粒子多	炭化粒子少 白色ブロック微
14	暗褐色 (10YR3/4)	地山粒子多	炭化粒子・焼土粒子微
15	褐色 (10YR4/4)	炭化粒子微	
16	褐色 (10YR4/4)	地山粒子多	炭化粒子微
17	暗褐色 (10YR3/4)	炭化粒子多	
18	暗褐色 (10YR3/4)	地山粒子多	炭化粒子少 焼土ブロック微
19	褐色 (10YR4/4)	炭化粒子少	地山多
20	褐色 (10YR4/4)	炭化粒子・地山ブロック少	
S J 5 3 1 カマド			
e	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	天井部	
f	褐色 (10YR4/4)	地山土多	焼土ブロック少
g	暗赤褐色 (5YR3/2)	灰層	地山ブロック多 炭化粒子少
h	暗褐色 (10YR3/4)	炭化粒子・焼土粒子多	

第150図 第530・531号住居跡（2）

さは16cmである。壁溝は土層断面には現われなかった。本住居跡に伴うピットは4本検出され、P3・P4・P7・P8の深さは22cm、42cm、12cm、12cmである。何れも支柱穴と考えられる。

遺物は、貯蔵穴から土師器甕底部の破片が1点出



第151図 第530号住居跡出土遺物

土した。

また、本住居跡は、第531号住居跡と同時に調査したため、覆土の遺物は、第530・531号住居跡出土遺物（第152図）として取り上げた。

遺物は、土師器・須恵器の破片が出土した。特に土師器は坏・甕の破片が多量に出土したが、小片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏6・椀1・高坏2・甕5、須恵器坏1・蓋1、土製紡錘車1、鉄製品が1点、土錘13点が出土した。

第530号住居跡出土遺物観察表（第151図）

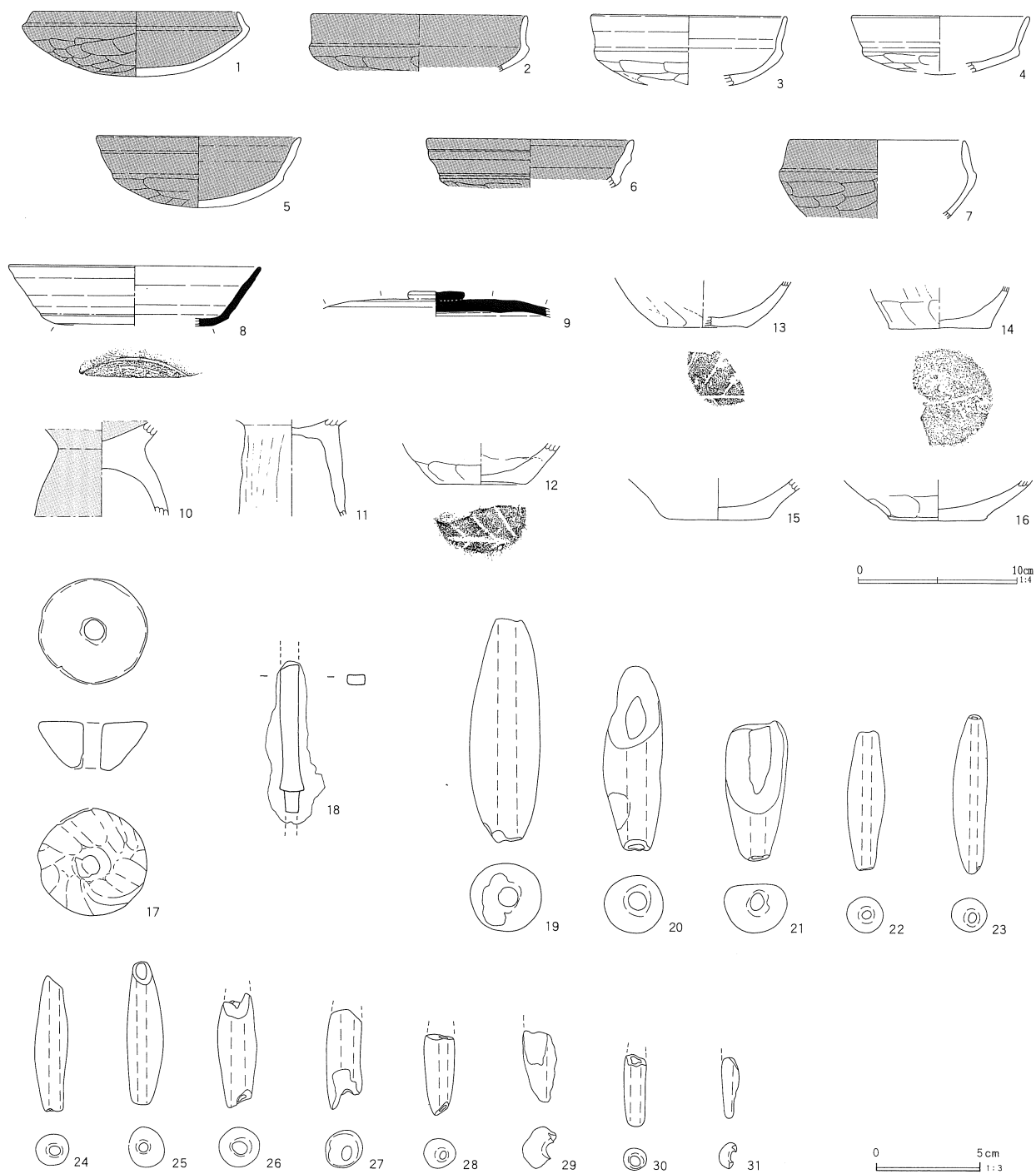
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師甕		5.1	6.4	BEHJL	良好	橙	100	貯蔵穴	

第530・531号住居跡出土遺物観察表（第152図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.8	4.1		ABEJ	良好	にぶい橙	80	覆土	内外面黒色処理
2	土師坏	13.5	3.6		BDEGJ	良好	褐灰	30	覆土	内外面黒色処理
3	土師坏	(12.4)	4.5		ABEJ	良好	橙	30	覆土	
4	土師坏	(11.2)	3.5		BEJ	良好	橙	25	覆土	
5	土師坏	(12.8)	4.5		ABDEJ	良好	橙	40	覆土	内外面黒色処理
6	土師坏	(13.0)	3.1		BDEJ	良好	にぶい赤褐	30	覆土	内外面黒色処理
7	土師椀	(11.0)	5.0		BEFJ	良好	にぶい橙	30	覆土	外面黒色処理
8	須恵坏	(15.8)	3.8	(9.9)	EFHJ	普通	灰白	30	覆土	末野産? 底部回転ヘラケズリ
9	須恵蓋		1.7		ABHJL	良好	黄灰	35	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ
10	土師高坏		5.9		ABEJ	良好	にぶい橙	45	覆土	坏部内面・外面赤彩
11	土師高坏		6.2		ABDJ	普通	橙	70	覆土	二次焼成
12	土師甕		2.6	(5.8)	ABFHJL	良好	にぶい橙	45	覆土	底部木葉痕
13	土師甕		2.9	(5.5)	ABHJL	良好	にぶい褐	20	覆土	底部木葉痕
14	土師甕		2.6	6.3	AEFHJL	良好	にぶい赤褐	50	覆土	底部木葉痕か?
15	土師甕		2.6	6.8	BJ	良好	浅黄橙	100	覆土	
16	土師甕		2.6	6.0	ABDEFJ	良好	にぶい橙	100	覆土	
17	土製紡錘車	長径5.10cm	短径1.30cm		ABEJ	普通	浅黄橙	95	覆土	孔径0.90cm 重さ45.76g
18	鉄鏃	現存長4.65cm	幅0.55cm	厚さ0.35cm					覆土	

第530・531号住居跡出土土錘観察表（第152図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
19	10.50	3.30	0.90	92.77	CaI	A	にぶい橙	100	2区
20	(8.60)	2.80	0.80	46.07	CaI	A	にぶい橙	70	3区
21	(6.60)	3.00	0.80	34.52	CaI	A	にぶい褐	40	3区
22	6.50	1.70	0.40	15.62	BaIII	C	浅黄橙	100	4区
23	7.40	1.70	0.50	16.35	BaIII	C	にぶい橙	100	4区
24	6.40	1.60	0.50	11.52	BaIV	A	にぶい黄橙	100	2区
25	6.70	1.90	0.40	17.33	BaIII	B	黒褐	100	3区
26	(5.30)	1.90	0.70	13.74	CaIV	C	橙	80	2区



第152図 第530・531号住居跡出土遺物

第530・531号住居跡出土土錘観察表 (第152図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
27	(4.70)	1.70	0.70	11.58	—	C	にぶい黄橙	—	4区
28	(3.80)	1.50	0.35	6.86	B a III	A	明赤褐	60	3区
29	(3.30)	(2.80)	(0.70)	6.78	—	C	にぶい赤褐	—	2区
30	3.40	1.10	0.50	2.77	A a IV	C	浅黄橙	50	3区
31	(2.80)	(1.40)	(0.50)	2.44	—	A	明褐	—	3区

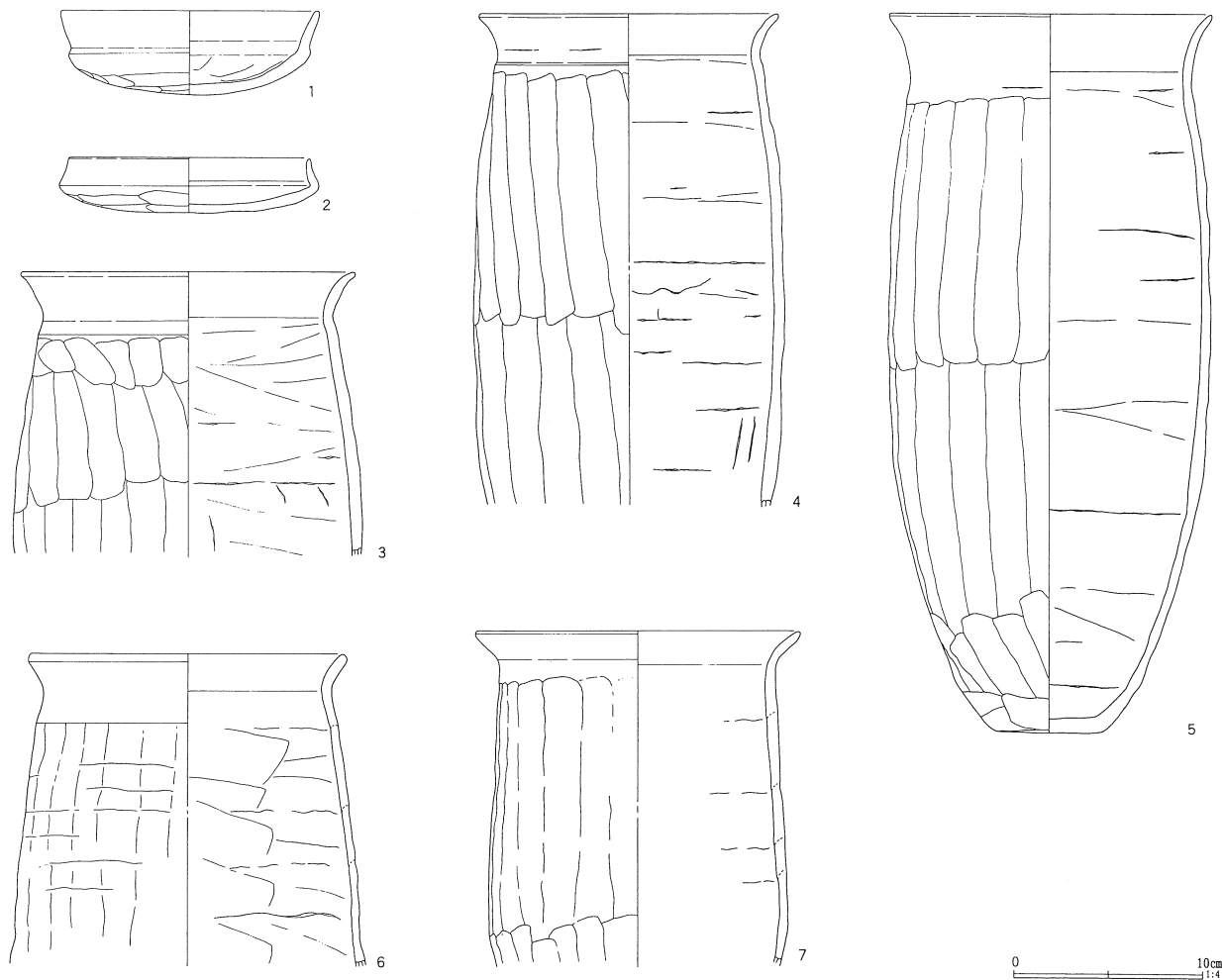
第531号住居跡（第149～152図）

K・L-21・22グリッドに位置する。第524・530号住居跡と重複し、本住居跡が古い。第530号住居跡の下層にあり、第530号住居跡とほとんど同形・同規模であった。深さは0.45～0.65mである。主軸方位はN-62°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち

あがる。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃烧部の掘り込みは僅かで、段を持って煙道部となる。貯蔵穴は南東コーナー近くに設けられ、96×78cmの歪んだ長方形で、深さは60cmである。壁溝は全周し、幅9～32cm、深さ2～7cmである。本住居跡に伴うピットは4本検出され、P1・P2・P5・P6の深



第153図 第531号住居跡出土遺物

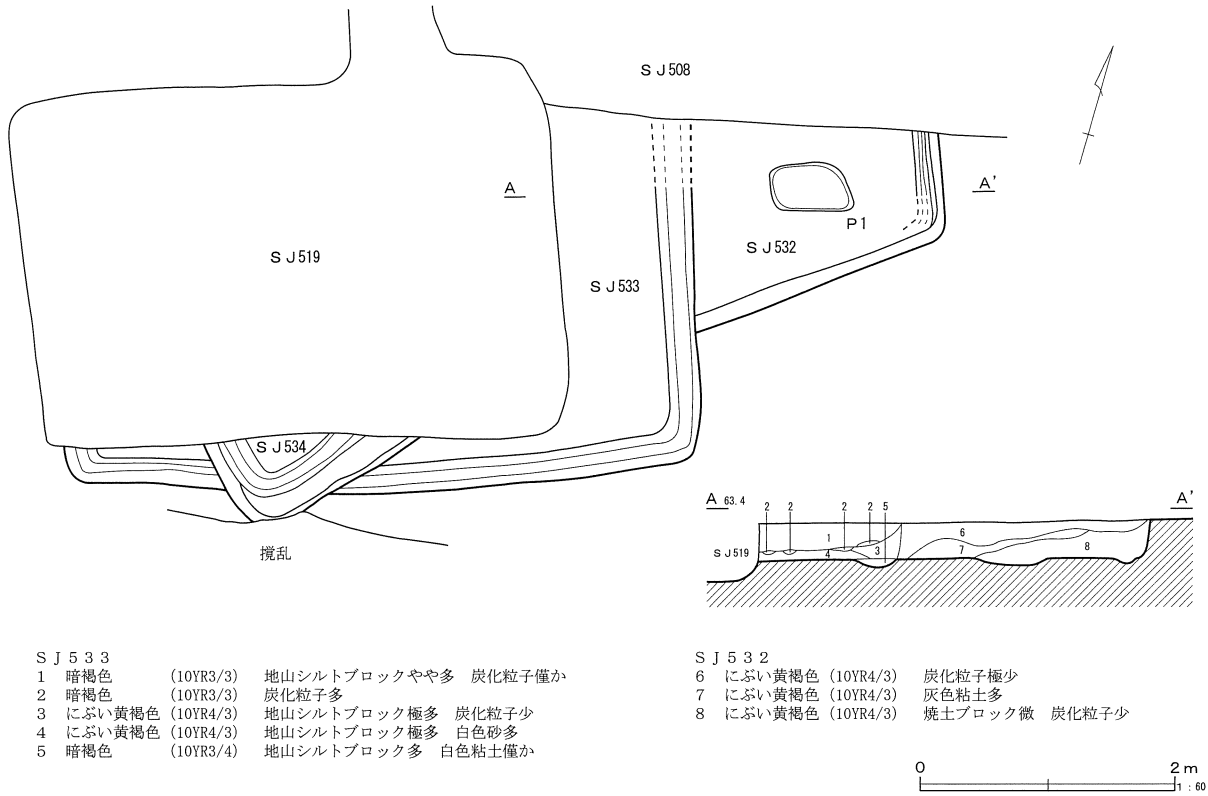
第531号住居跡出土遺物観察表（第153図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	13.6	4.4		ABDEHJL	普通	にぶい橙	95	+8cm	
2	土師坏	12.8	2.9		A E H J L	普通	にぶい橙	60	床	
3	土師甕	(17.8)	15.1		C E H J L	不良	にぶい褐	60	カマド	磨耗著しい
4	土師甕	16.0	26.2		B J L	普通	灰褐	60	床	輪積痕明瞭
5	土師甕	(17.0)	38.1	5.6	B C J L	不良	にぶい橙	70	-3cm	磨耗著しい 輪積痕明瞭
6	土師甕	(16.6)	18.0		BDEHJL	普通	浅黄橙	40	カマド	輪積痕明瞭
7	土師甕	(17.1)	17.7		A J L	普通	浅黄橙	25	床	

さは35cm、21cm、14cm、16cmである。何れも支柱穴と考えられる。

遺物は、カマド及びカマド脇の床面から、土師器
坏・甕が出土した。

図示可能な遺物は、土師器坏2・甕5点であった。
1・2・4・5はカマドと貯蔵穴の間から、3・6はカ
マドから出土した。



- S J 5 3 3
- | | | | |
|----------|-----------|--------------|--------|
| 1 暗褐色 | (10YR3/3) | 地山シルトブロックやや多 | 炭化粒子僅か |
| 2 暗褐色 | (10YR3/3) | 炭化粒子多 | |
| 3 にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 地山シルトブロック極多 | 炭化粒子少 |
| 4 にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 地山シルトブロック極多 | 白色砂多 |
| 5 暗褐色 | (10YR3/4) | 地山シルトブロック多 | 白色粘土僅か |

- S J 5 3 2
- | | | |
|----------|-----------|---------------|
| 6 にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 炭化粒子極少 |
| 7 にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 灰色粘土多 |
| 8 にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 焼土ブロック微 炭化粒子少 |

第154図 第533・534・532号住居跡

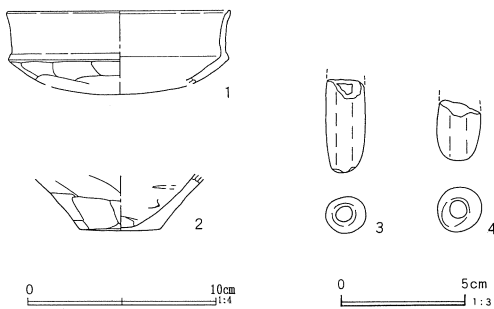
第532号住居跡 (第154・155図)

K・L-20グリッドに位置する。第508・533号住居跡に切られ、546号住居跡を切る。南東コーナー周辺が検出されたのみである。検出された規模は、南

壁2.13m、東壁0.81m、深さは0.27~0.29mである。主軸方位は南壁でN-55°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は垂直に立ちあがる。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁で検出され、幅20~22cm、深さ2~4cmである。ピットは1本検出され、深さは34cmである。

遺物は、古墳時代の土師器片が少量出土した。図示可能な遺物は、土師器坏1・甕1、土錘2点であった。



第155図 第532号住居跡出土遺物

第533号住居跡 (第154・156図)

L-20グリッドに位置する。第508・519号住居跡に切られ、第532・546号住居跡を切る。第534号住居

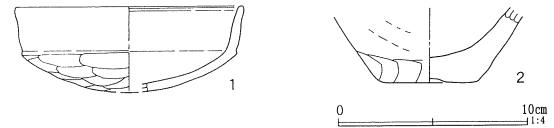
跡との関係は不明である。南壁と東壁の南半を検出したのみである。検出した規模は、東西5.08m、南北2.93m、深さは0.28～0.31mである。主軸方位は南壁でN-74°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は垂直に立ちあがる。カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は検出された壁で全周し、幅20～24cm、深さ4～8cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土したが、接合しなかった。図示可能な遺物は、土師器坏1・甕1点であった。

第534号住居跡（第154図）

L-20グリッドに位置する。第519号住居跡に切られ、第546号住居跡を切る。第533号住居跡との関



第156図 第533号住居跡出土遺物

係は不明である。南コーナーを検出したのみである。検出した規模は、南東壁1.24m、南西壁0.74m、深さは0.42m前後である。主軸方位は南東壁でN-45°-Wを指す。

壁溝は、幅16～22cm、深さ1cm前後で検出された。南東壁のものは壁からやや離れて検出された。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏片が数点出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第532号住居跡出土遺物観察表（第155図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.9		BEJ	不良	にぶい橙	20	覆土	磨耗著しい
2	土師甕		3.0	4.2	ABCEJL	不良	にぶい黄橙	60	覆土	やや磨耗

第532号住居跡出土土錘観察表（第155図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	(3.65)	1.60	0.70	7.20	BaIV	C	灰黄褐	40	
4	(1.90)	1.85	0.60	5.80	—	A	にぶい黄橙	20	

第533号住居跡出土遺物観察表（第156図）

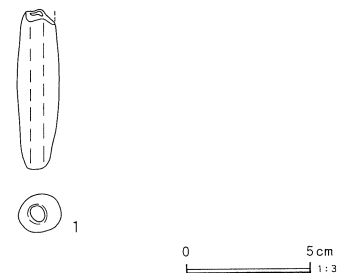
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	4.5		BEJ	普通	橙	40	覆土	
2	土師甕		4.0	5.2	BDJL	普通	赤褐	40	覆土	

第540号住居跡（第157・158図）

K-21・22グリッドに位置する。第481・496・506・507・514・515・516・517号住居跡に切られ、第544号住居跡を切る。多くの部分を他の住居跡に壊され、部分的に検出された。平面形は台形に近いと考えられる。長軸が6.9m前後、短軸は6.5m前後と思われ、深さは0.27～0.31mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

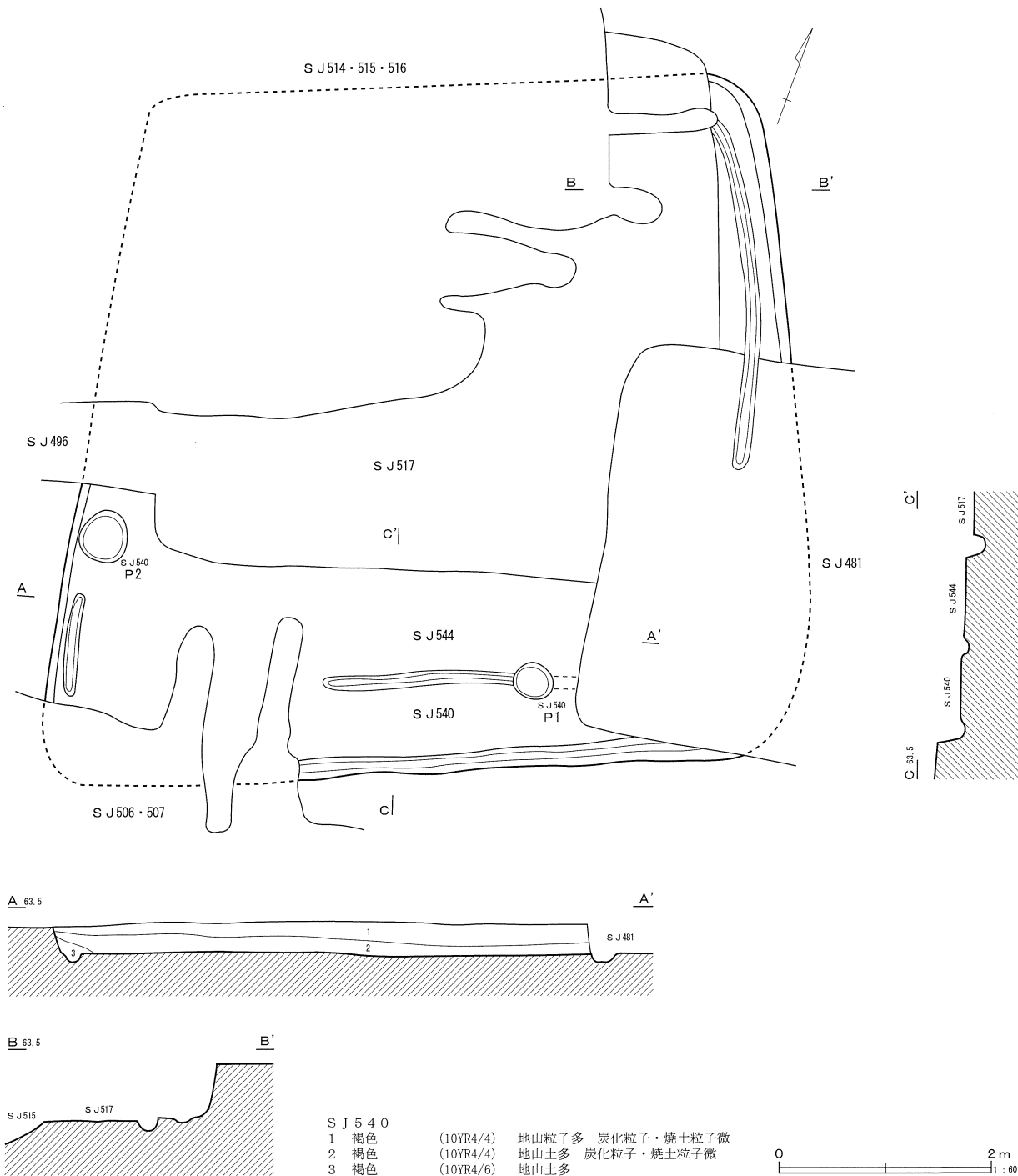
カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南壁と西壁の一部で検出され、幅16～22cm、深さ2～4



第157図 第540号住居跡出土遺物

cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは1 cm、4 cmである。

遺物は、覆土から土師器甕の破片が数点出土したが、図示可能な遺物は、土錘1点のみであった。



第158図 第540・544号住居跡

第540号住居跡出土土錘観察表 (第157図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	(6.30)	1.70	0.65	13.11	B a IV	A	にぶい黄橙	95	

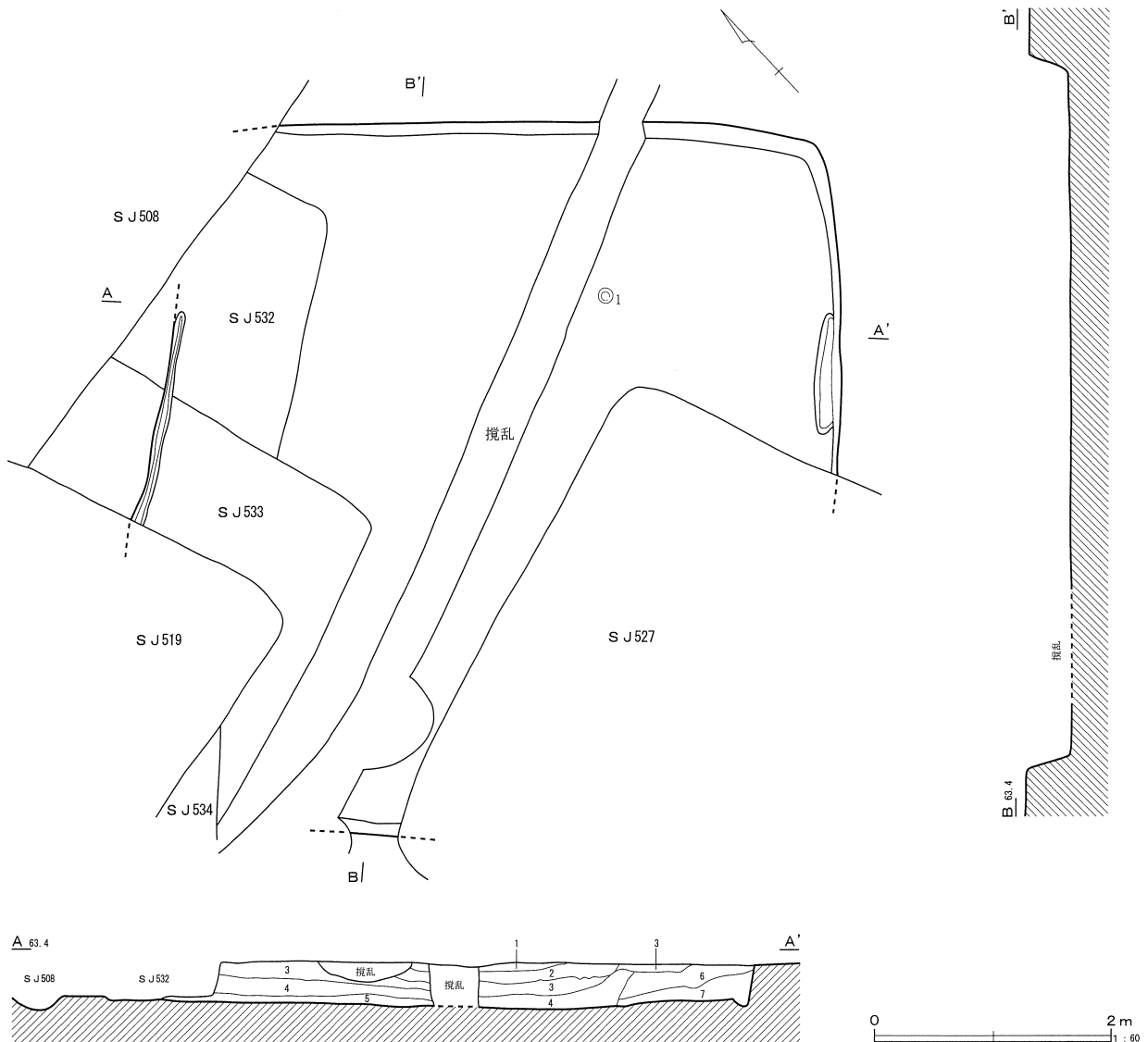
第544号住居跡 (第158図)

K-21・22グリッドに位置する。第481・506・507・514・515・516・517・540号と重複し、その何れよりも古い。第540号住居跡の床面に壁溝が検出された。床面は既に消失していたと思われる。平面形は第540号住居跡を一回り小さくしたような形で、長軸が6.1m前後、短軸は5.4m前後と思われる。深さは

0.24~0.32mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。

床面や壁の状態は不明で、覆土の観察も出来なかった。壁溝は東辺と南辺の一部で検出され、幅12~14cm、深さ2~4cmである。

遺物は出土しなかった。



- S J 5 4 6
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山未溶化小型ブロック・焼土多 しまり弱い
 2 暗褐色 (10YR3/4) 地山未溶化小型ブロック・焼土・炭化粒子多
 3 褐色 (10YR4/4) 黄色砂質~シルト質地山

- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 暗褐色シルト質地山 粘性良
 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 4層が基本 灰黄色地山土多 粘性強
 6 褐色 (10YR4/4) 3層に似るが、1層の混入多くブロック状
 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 4層が基本 色調暗く、粘性優る

第159図 第546号住居跡

第546号住居跡（第159・160図）

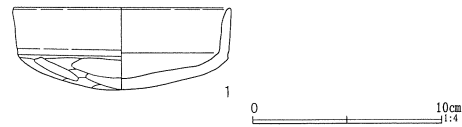
K・L-20・21グリッドに位置する。第508・519・527・532・533・534号住居跡と重複し、その何れより古い。中央付近を東西方向に攪乱に壊される。平面形は正方形に近く、北東壁から南西壁が6.10m、北西壁から南東壁が5.90m、深さは0.34～0.36mである。主軸方位は北壁でN-48°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は南東

壁と北西壁の一部で検出され、幅10～32cm、深さ2～5cmである。

遺物は、覆土中から土師器杯・甕の破片が数点出土した。図示可能な遺物は土師器杯1点のみであった。



第160図 第546号住居跡出土遺物

第546号住居跡出土遺物観察表（第160図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師杯	11.5	4.4		ADEJL	不良	橙	95	床	磨耗著しい

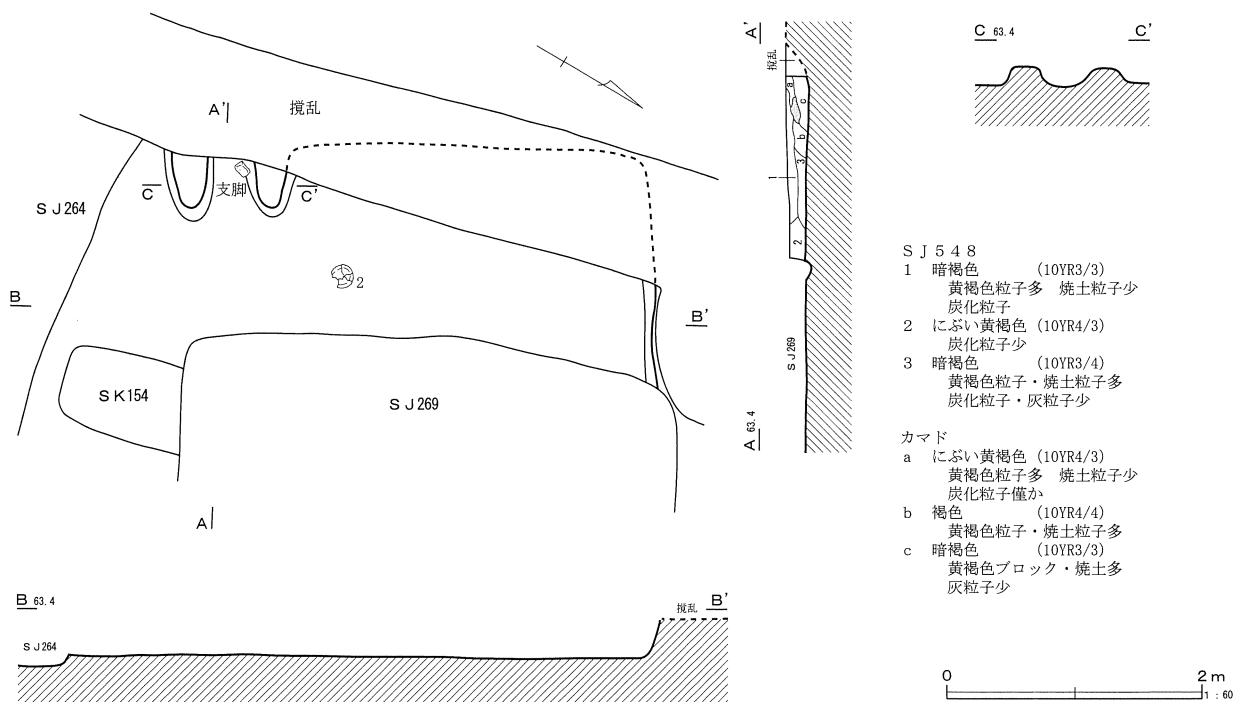
第548号住居跡（第161・162図）

N-20・21グリッドに位置する。第264・269・277号住居跡・第154号土坑と重複し、その何れよりも古い。西側は攪乱で壊される。北壁の一部とカマド周辺を検出したのみである。検出された規模は、南北4.94

m、東西1.72m、深さは0.10m前後である。主軸方位はN-115°-Wを指す。

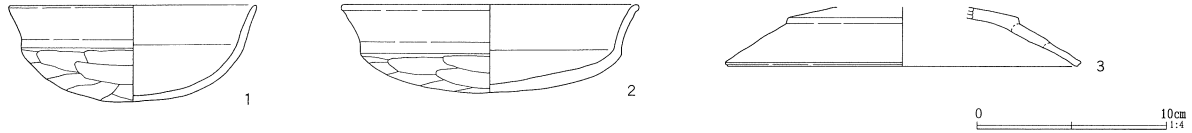
床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは西壁に設置される。煙道部先端は攪乱で壊されていた。燃烧部の掘り込みはなく、緩やかに



立ち上がるようである。土層断面に明瞭な焼土が確認された。自然石利用の支脚が出土した。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土した。図示可能な遺物は、土師器坏2、高坏1点であった。



第162図 第548号住居跡出土遺物

第548号住居跡出土遺物観察表（第162図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	13.1	5.1		B C E J L	不良	にぶい褐	80	覆土	磨耗著しい
2	土師坏	15.8	4.6		E J L	不良	明赤褐	90	+2cm	磨耗著しい
3	土師高坏		3.1	(19.0)	J	不良	にぶい橙	15	カマド	磨耗著しい

2. 掘立柱建物跡

第17号掘立柱建物跡（第163・165図）

J・K-22・23グリッドに位置する。第489・490号住居跡に切られ、第518号住居跡を切る。但し、第518号住居跡とは同時に調査したため検出できなかった部分がある。規模は3×2間で、桁行6.30m、梁行4.54mである。柱間は桁行2.08～2.16m、梁行2.04～2.50mである。主軸方位はN-12°-Wを指す。北西コーナーの柱穴は第489号住居跡に壊され検出できなかった。

柱穴は円形または楕円形で、径58～80cm、深さ28～40cmである。柱痕は9本中5本で観察され、P3では底面に小穴が検出された。

遺物は、P3・P5掘り方から、土師器坏・須恵器

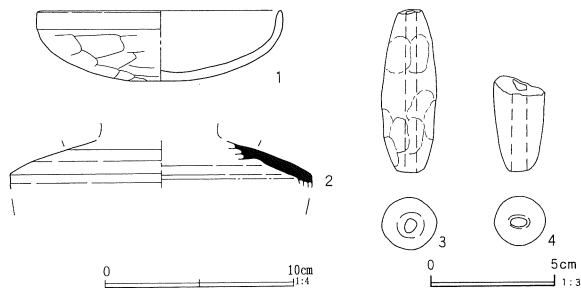
長頸瓶が出土した。

2の長頸瓶は末野産で、肩部の破片である。

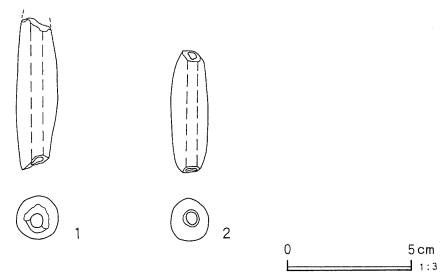
第22号掘立柱建物跡（第164・166・167図）

J・K-20・21グリッドに位置する。第492・499・511・526号住居跡より新しく、第498・500・502号住居跡より古い。規模は5×2間で、桁行12.20m、梁行4.82mである。柱間は桁行2.20～2.46m、梁行は検出されたもので2.28mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。検出できなかった柱穴は、他の遺構や攪乱に壊されたと考えられる。

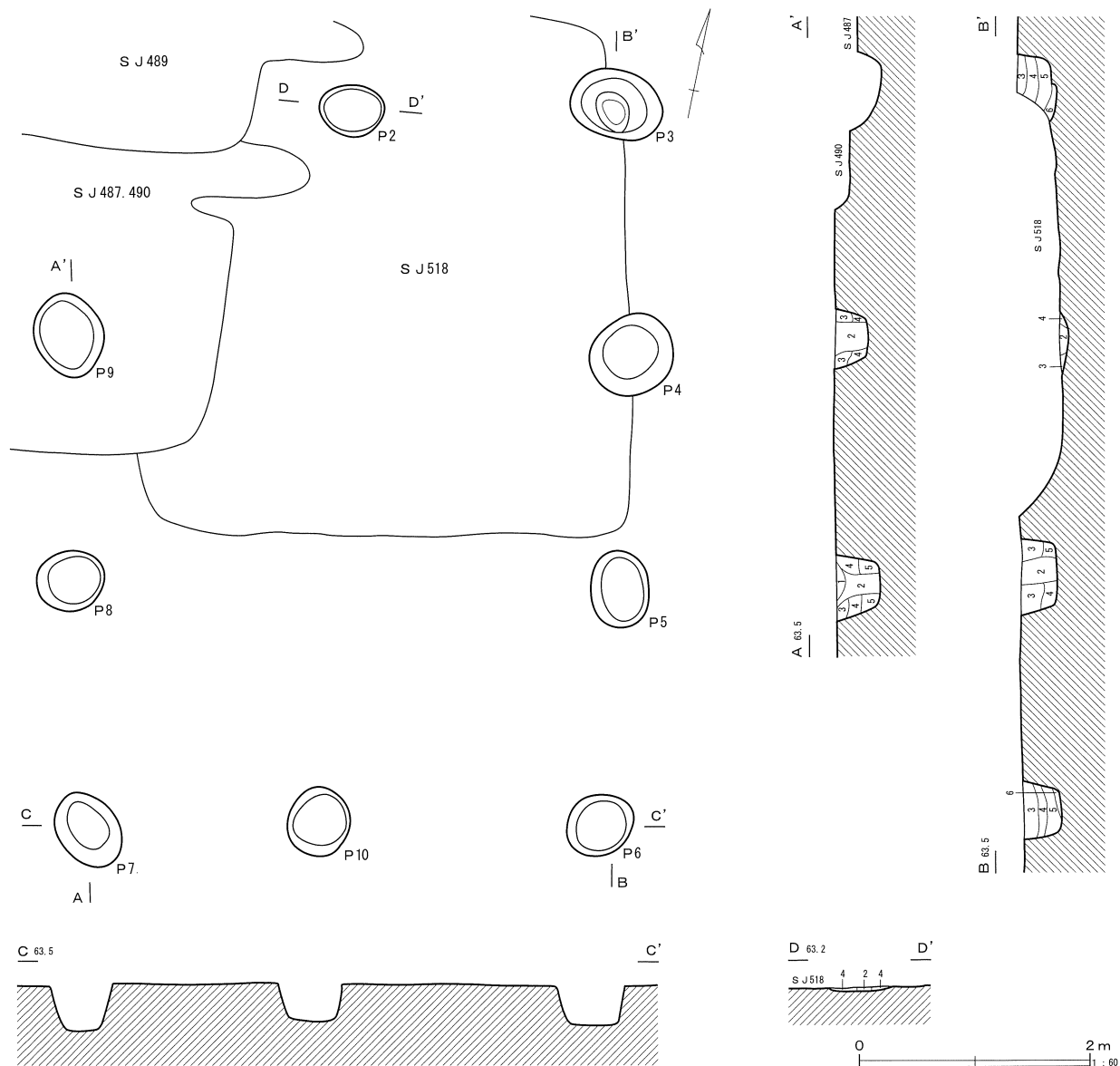
柱穴は円形または楕円形で、径48～80cm、深さ50～68cmである。柱痕は11本のうち、土層観察が出来



第163図 第17号掘立柱建物跡出土遺物



第164図 第22号掘立柱建物跡出土遺物



- SB 17
- | | |
|------------------------------|-----------------------------------|
| 1 褐色 (10VR4/4) 地山ブロック 炭化粒子少 | 4 暗褐色 (10VR3/4) 地山ブロック多 炭化粒子 焼土粒子 |
| 2 暗褐色 (10VR3/3) 地山ブロック多 炭化粒子 | 5 にぶい黄褐色 (10VR4/3) 地山ブロック 炭化粒子多 |
| 3 褐色 (10VR4/4) 地山ブロック・焼土粒子多 | 6 暗褐色 (10VR3/3) 地山ブロック多 褐色粘質土ブロック |

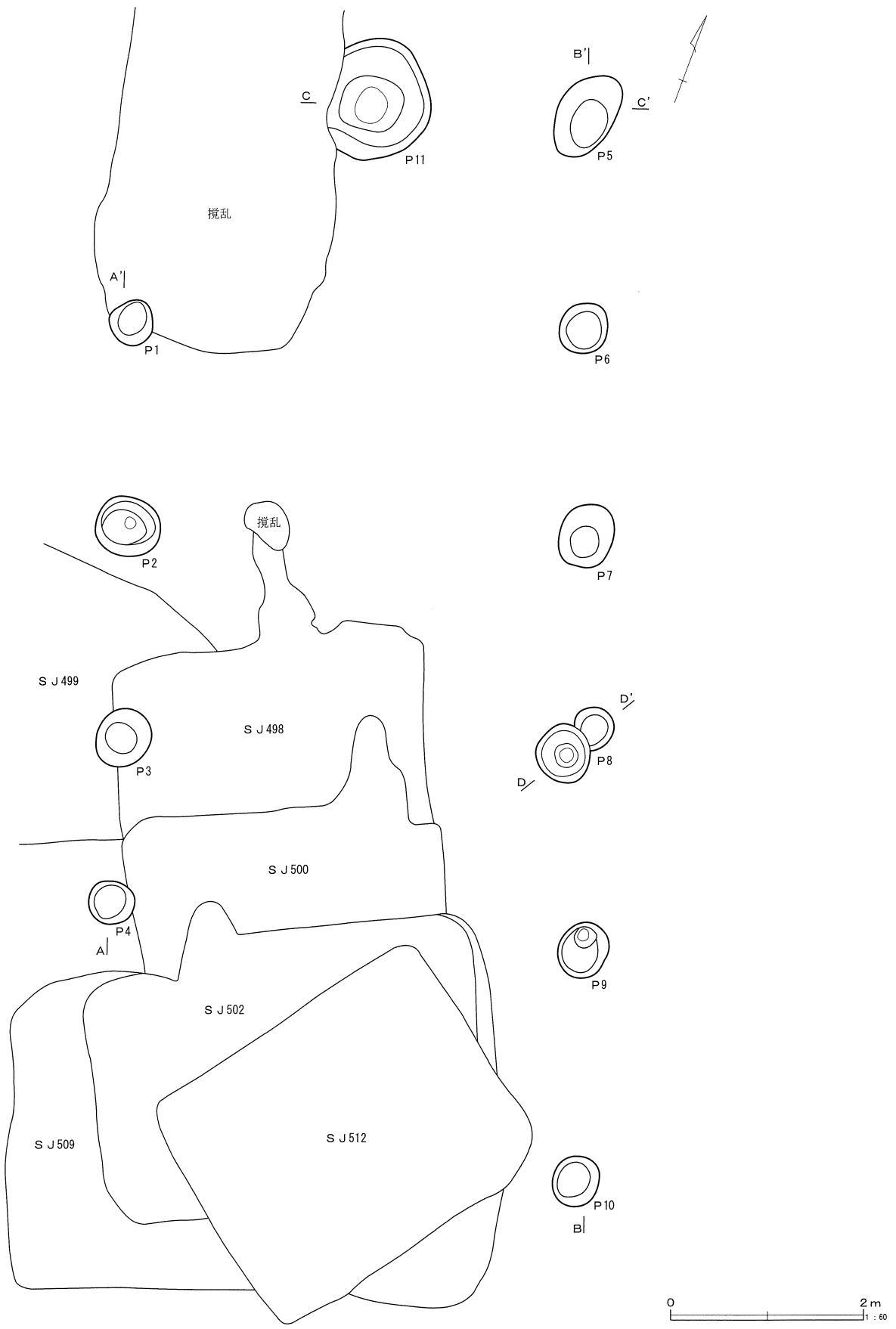
第165図 第17号堀立柱建物跡

第17号堀立柱建物跡出土遺物観察表 (第163図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.8)	3.7		A B D E J	良好	明褐	30	P3	末野産
2	須恵長頸瓶		2.5		A B J	普通	灰	20	P5	

第17号堀立柱建物跡出土土錘観察表 (第163図)

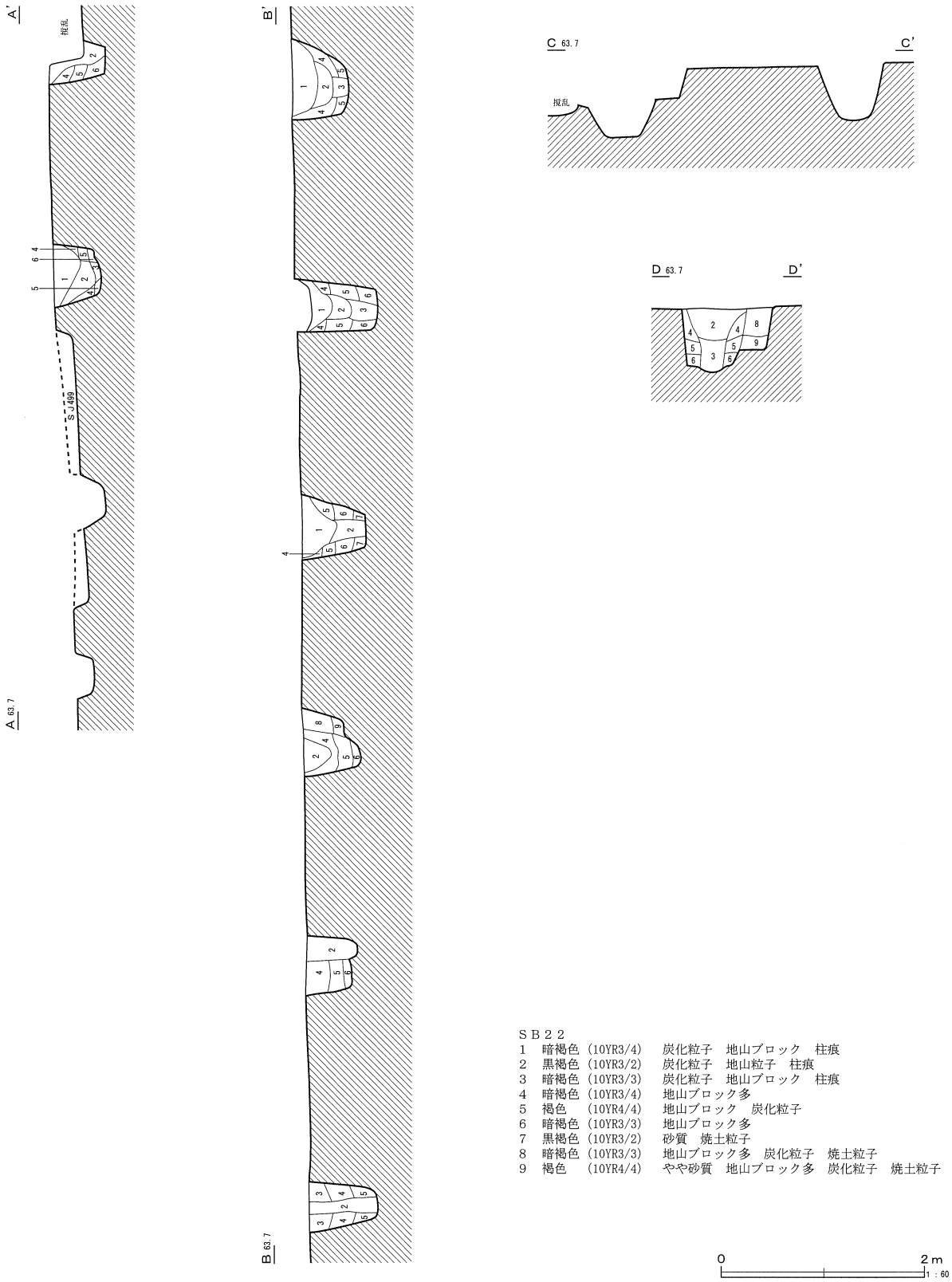
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	6.45	2.10	0.60	25.10	B b IV	C	橙	95	
4	(3.80)	2.00	0.65	12.84	B a III	C	黒褐	45	



第166图 第22号堀立柱建物跡 (1)

た8本全てで見られた。P 8は建替えが行われたと
考えられる。

遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図
示可能な遺物は、土錘2点であった。



第167図 第22号掘立柱建物跡 (2)

第22号堀立柱建物跡出土土錘観察表（第164図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	6.00	1.70	0.50	15.10	B a IV	C	にぶい橙	90	P10
2	4.80	1.70	0.50	10.48	B a V	C	明赤褐	100	P8

3. 土坑

第146号土坑（第168・171図）

O-21グリッドに位置する。第264号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ2.02m、幅0.63m、深さ0.40mである。主軸方位はN-11°-Wを指す。遺物は、須恵器甕の口縁部片が出土したのみであった。

第147号土坑（第168図）

M-22グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.90m、短径0.77m、深さ0.23mである。主軸方位はN-82°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第148号土坑（第168図）

M-22グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.70m、短径0.54m、深さ0.61mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。土層では確認できなかったが、柱穴の可能性もある。遺物は出土しなかった。

第149号土坑（第168図）

M-22グリッドに位置する。第259号住居跡を切る。平面形は楕円形で、長径0.98m、短径0.74m、深さ0.18mである。主軸方位はN-5°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第150号土坑（第168図）

M-22グリッドに位置する。第258号住居跡を切る。平面形は正方形で、長さ0.68m、幅0.60m、深

さ0.32mである。主軸方位はN-12°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第151号土坑（第168図）

M-22グリッドに位置する。第258号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ0.68m、幅0.56m、深さ0.11mである。底面中央やや南に、径21cm、深さ6cmの小ピットが検出された。主軸方位はN-61°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第152号土坑（第168図）

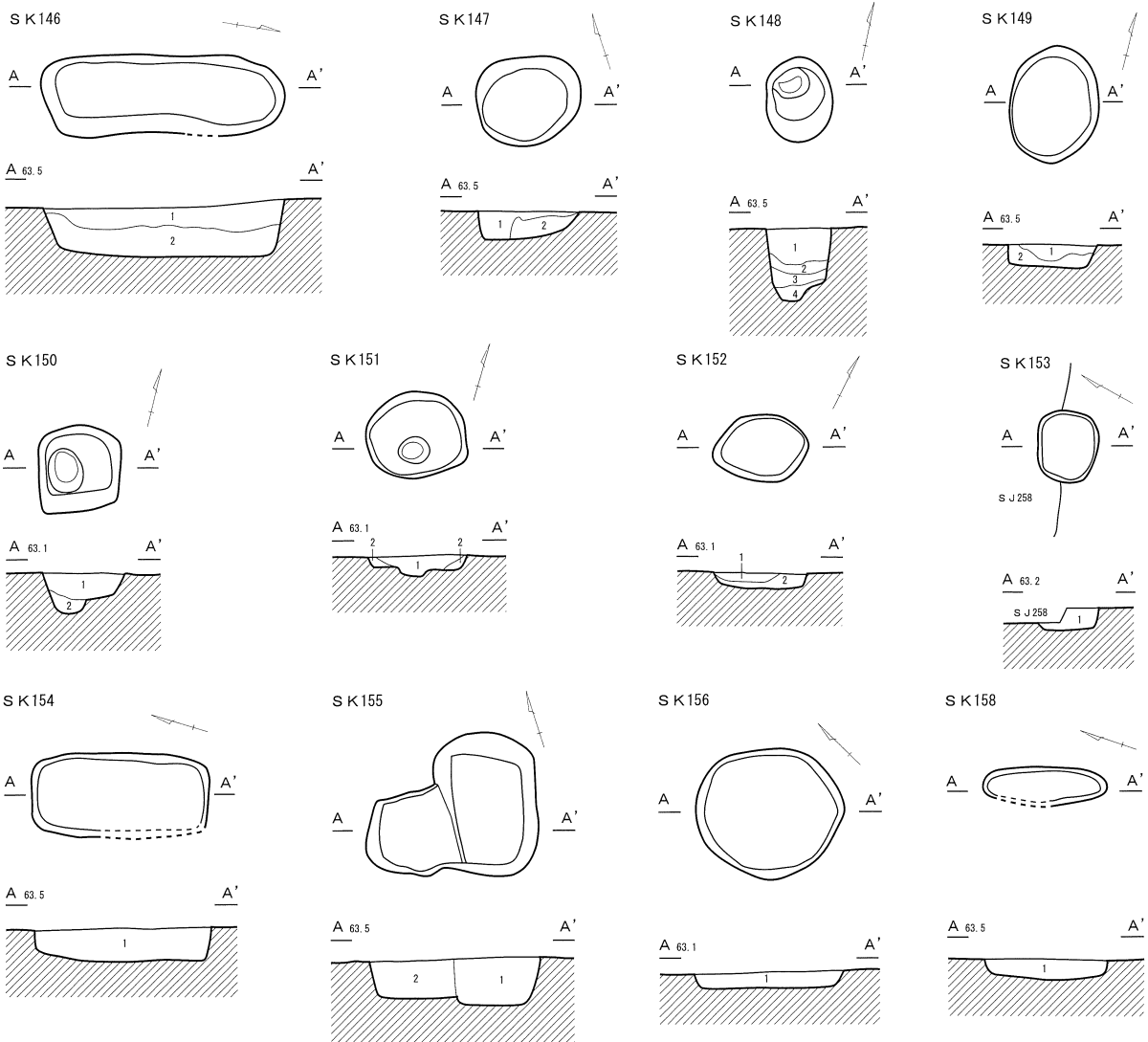
M-22グリッドに位置する。第258号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ0.62m、幅0.42m、深さ0.13mである。主軸方位はN-83°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第153号土坑（第168図）

M-22グリッドに位置する。第258号住居跡に切られ、第259号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ0.45m、幅0.44m、深さ0.16mである。主軸方位はN-70°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第154号土坑（第168図）

N-21グリッドに位置する。第269・277・548号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ1.46m、幅0.54m、深さ0.28mである。主軸方位はN-15°-Wを指す。遺物は、土師器坏・甕の小片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。



SK146
 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 白色粒子・焼土粒子・炭化粒子・小礫少
 2 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色粒子極多 炭化粒子・小礫少

SK147
 1 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子少
 2 暗褐色 (10YR3/4) 礫多 焼土粒子僅か

SK148
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子・炭化粒子・小礫少
 2 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子僅か
 3 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色粒子多 炭化粒子少
 4 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子僅か

SK149
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子僅か
 2 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子僅か

SK150
 1 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子やや多 焼土粒子少
 2 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子少

SK151
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少 焼土粒子
 2 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子僅か

SK152
 1 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子少 焼土粒子
 2 暗褐色 (10YR3/4) 炭化粒子僅か 焼土粒子

SK153
 1 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子多 焼土粒子少

SK154
 1 褐色 (10YR4/4) 黄褐色ブロック多 焼土ブロック少

SK155
 1 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色土多 焼土粒子・炭化粒子少
 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子僅か

SK156
 1 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色土多 焼土粒子・炭化粒子少

SK158
 1 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色ブロック多 焼土ブロック多



第168図 第146～156・158号土坑

第155号土坑（第168図）

M-21グリッドに位置する。土層観察から2基の土坑の切り合いと判明した。東側の土坑は西側のものより新しく、長さ1.19m、幅0.84m、深さ0.39mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。西側の土坑は、長さ0.79m以上、幅0.71m、深さ0.31mである。主軸方位はN-84°-Wである。遺物は土師器甕の破片が少量出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第156号土坑（第168図）

M-21グリッドに位置する。第262号住居跡を切る。平面形は円形で、長径1.22m、短径1.10m、深さ0.15mである。遺物は、平安時代の須恵器の坏片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第158号土坑（第168図）

N-21グリッドに位置する。第269号住居跡を切る。平面形は長楕円形で、長径0.93m、短径0.30m、深さ0.16mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。遺物は出土しなかった。

第159号土坑（第169図）

M-21グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長径0.88m、短径0.70m、深さ0.49mである。遺物は、土師器坏片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第160号土坑（第169図）

M-21グリッドに位置する。第161号土坑と接するが新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長径0.86m、短径0.52m、深さ0.13mである。主軸方位はN-14°-Wを指す。遺物は土師器甕の小片が2点出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第161号土坑（第169図）

M-21グリッドに位置する。第267号住居跡を切る。平面形は不整円形で、径0.64m、深さ0.60mである。遺物は土師器坏・甕の小片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第162号土坑（第169図）

N-21・22グリッドに位置する。第270・273号住居跡を切る。西半が深くなっており、東半はテラス状である。平面形は長方形で、長さ1.02m、幅0.93m、深さ0.52mである。主軸方位はN-66°-Eを指す。遺物は土師器・須恵器の破片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第163号土坑（第169図）

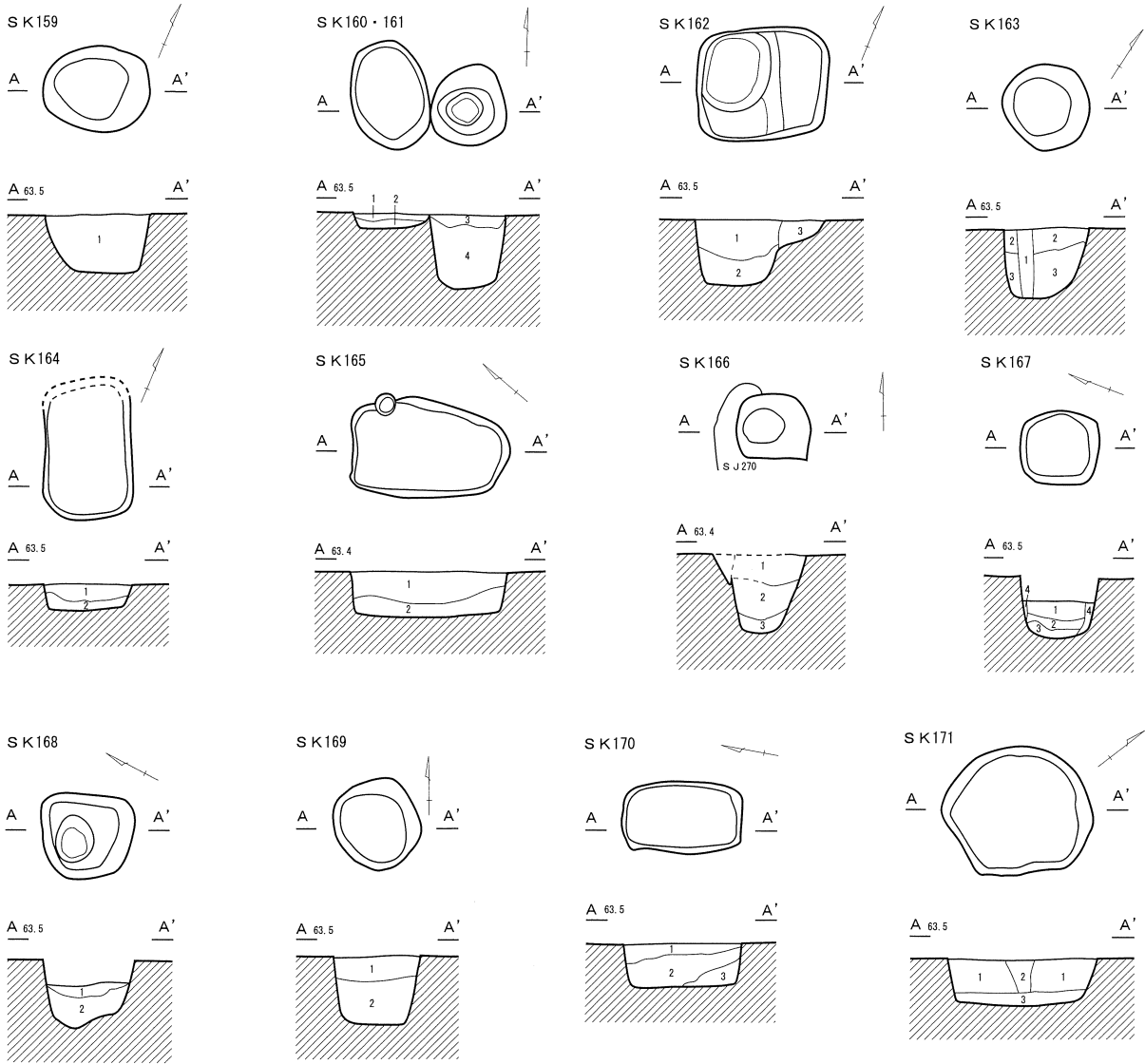
M-21グリッドに位置する。平面形は円形で、長径0.74m、短径0.72m、深さ0.55mである。土層観察では柱穴と考えられるが、周辺に展開する柱穴が見当たらなかった。遺物は土師器甕の破片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第164号土坑（第169図）

M-22グリッドに位置する。第259号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ1.2m前後で、幅は0.74m、深さ0.22mである。主軸方位はN-23°-Wを指す。遺物は土師器の小片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第165号土坑（第169・171図）

M-22グリッドに位置する。第259・262号住居跡を切る。平面形は不整隅丸長方形で、長さ1.20m、幅0.68m、深さ0.40mである。北コーナー近くの壁際に小ピットが検出された。主軸方位はN-40°-Wを指す。遺物は土師器甕の破片が少量出土した。図示可能な遺物は、土師器甕1、土錘2点であった。



SK159
1 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色土多 焼土粒子・炭化粒子少

SK160・161
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子やや多 焼土粒子少
2 褐色 (10YR4/4) 焼土粒子少
3 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子少
4 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色土多 焼土粒子・炭化粒子少

SK162
1 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色ブロック多 焼土粒子・炭化粒子少
2 黒褐色 (10YR2/3) 焼土ブロック・炭化粒子多
3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色ブロック多

SK163
1 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色粒子少
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色ブロック 焼土粒子少
3 褐色 (10YR4/4) 黄褐色ブロック多

SK164
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) やや砂質 焼土粒子・炭化粒子・白色粒子少
2 褐色 (10YR4/4) 焼土粒子僅か 炭化粒子

SK165
1 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子・炭化粒子少 黄褐色粒子多
2 黒褐色 (10YR3/2) 焼土粒子・炭化粒子少

SK166
1 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子少
2 黒褐色 (10YR3/2) 焼土ブロック多 炭化粒子少
3 暗褐色 (10YR3/4) 焼土ブロック少

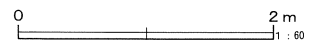
SK167
1 黒褐色 (10YR3/2) 焼土粒子・炭化粒子少
2 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色ブロック少
3 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色ブロック 焼土粒子少
4 褐色 (10YR4/4) 地山土主体

SK168
1 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子少
2 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色ブロック多

SK169
1 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色ブロック・炭化粒子少
2 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色ブロック多

SK170
1 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子・炭化粒子少
2 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色ブロック 焼土粒子少
3 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色ブロック少

SK171
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子 にぶい黄褐色シルト
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
3 褐色 (10YR4/4)



第169図 第159~171号土坑

第166号土坑（第169図）

N-22グリッドに位置する。第270号住居跡のカマドを切る。平面形は隅丸方形で、長さ0.52m、幅0.50m、深さ0.64mである。主軸方位はN-89°-Wを指す。遺物は土師器甕・坏の破片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第167号土坑（第169・171図）

M-21グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、長さ0.54m、幅0.52m、深さ0.48mである。主軸方位は北辺でN-22°-Wを指す。遺物は、土師器甕の破片が出土したが、図示可能な遺物は、鉄製品として釘が1点出土した。

第168号土坑（第169図）

M・N-21グリッドに位置する。平面形は隅丸台形で、底面にピットが検出された。長さ0.70m、幅0.68m、深さ0.57mである。主軸方位はN-63°-Eを指す。遺物は須恵器坏・土師器甕の破片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第169号土坑（第169図）

M-21グリッドに位置する。平面形は円形で、径0.74m、深さ0.56mである。遺物は器種不明な土師器の小片が7点出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第170号土坑（第169図）

O-21グリッドに位置する。第264・273号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ0.98m、幅0.50m、深さ0.37mである。主軸方位はN-10°-Wを指す。遺物は、土師器甕の破片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第171号土坑（第169・171図）

M・N-22グリッドに位置する。第266号住居跡を

切る。平面形は不整形で、長さ1.13m、幅1.05m、深さ0.38mである。主軸方位はN-20°-Eを指す。遺物は、土師器坏・甕の破片が出土した。図示可能な遺物は、土師器坏1、土錘1点であった。

第172号土坑（第170・171図）

N-21グリッドに位置する。第272号住居跡との新旧関係は不明だが、同時に調査したため北半は検出できなかった。平面形は隅丸長方形に近いと思われる。西端に落ち込みが検出された。検出した規模は、長さ1.62mで、幅は0.70m、深さ0.52mである。主軸方位はN-88°-Wを指す。遺物は土師器・須恵器の坏類の破片が出土したが、図示可能な遺物は、須恵器坏1、土師器暗文坏1点であった。

第173号土坑（第170・171図）

M-22グリッドに位置する。平面形は円形で、径0.74m、深さ0.62mである。底面中央はピット状になっていた。遺物は古墳時代後期の土師器坏、甕の小片が出土したが、図示可能な遺物は土錘1点のみであった。

第174号土坑（第170図）

M-22グリッドに位置する。平面形は円形で、径0.62m、深さ0.84mである。土層観察では柱穴と考えられるが、周辺に続く柱穴は見られなかった。遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の小片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第175号土坑（第170図）

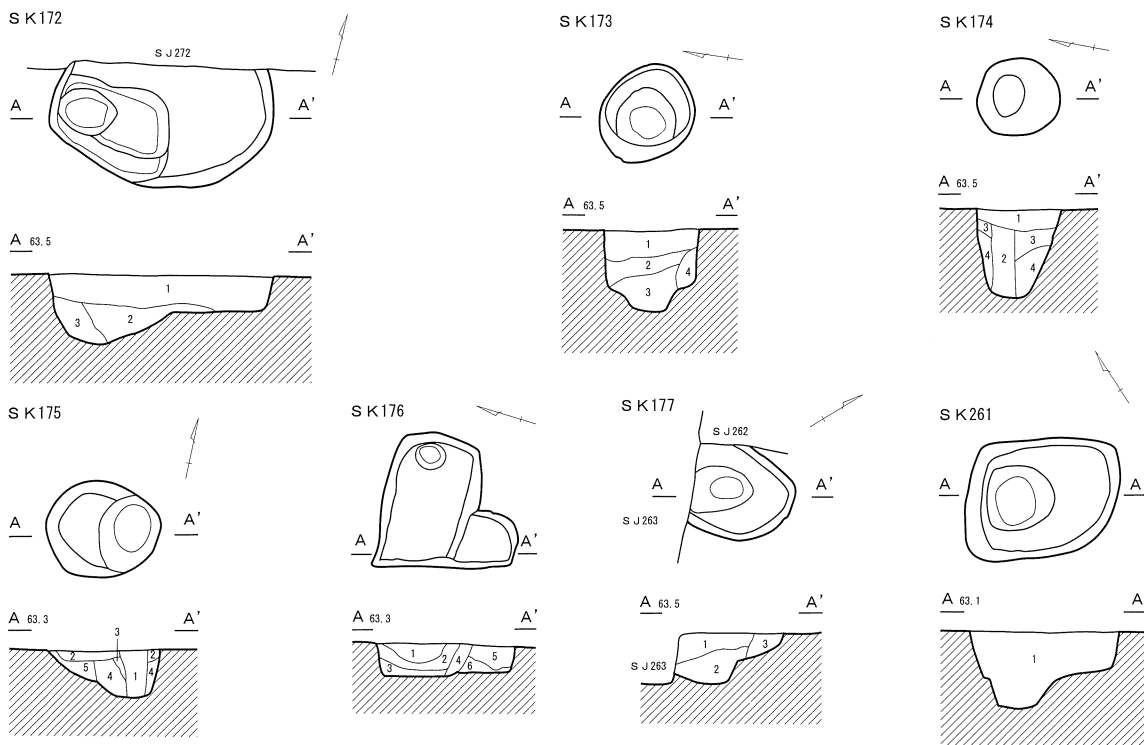
O-21グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径0.90m、短径0.78m、深さ0.39mである。土層観察では柱穴と考えられるが、周辺に続く柱穴は見られなかった。主軸方位はN-82°-Wを指す。遺物は土師器甕の破片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第176号土坑（第170・171図）

〇-21グリッドに位置する。平面形は長方形の南西端が飛び出す形となっている。長方形部分は長さ1.10m、幅1.06m、深さ0.28mで、東端にピットが検出された。飛び出した部分は長方形部分より古い土坑と考えられる。主軸方位は長方形部分でN-85°-Eを指す。遺物は土師器甕の破片が出土したが、図示可能な遺物は、土錘1点であった。

第177号土坑（第170図）

M-21グリッドに位置する。第262号住居跡・第263号住居跡との新旧関係は不明だが、同時に調査したため重なる部分は検出できなかった。平面形は隅丸長方形と思われ、検出した長さは0.60m、幅0.56m、深さ0.39mである。中央部はピット状に落ち込む。主軸方位はN-70°-Eを指す。遺物は、土師器甕の破片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。



- SK172
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子多
 2 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子僅か 灰白色シルト
 3 暗褐色 (10YR3/3) 灰白色シルト多

- SK173
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色シルト多
 2 黒褐色 (10YR2/3) 黄褐色シルトブロック 炭化粒子粒少
 3 黒褐色 (10YR2/3) 黄褐色シルトブロック多
 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 炭化粒子少

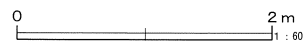
- SK174
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色シルトブロック多 焼土粒子少
 2 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色シルトブロック・炭化粒子少
 3 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色シルトブロック少
 4 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色シルトブロック多

- SK175
 1 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色シルトブロック多
 2 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色シルトブロック少 焼土粒子微
 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 灰黄褐色シルトブロック多
 4 褐色 (10YR4/4) 黄褐色シルトブロック多
 5 褐色 (10YR4/6) 黄褐色シルトブロック主体

- SK176
 1 暗褐色 (10YR3/3) 焼土粒子・炭化粒子少
 2 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子少
 3 褐色 (10YR4/6) 黄褐色シルトブロック多 炭化粒子少
 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 黄褐色シルトブロック多
 5 暗褐色 (10YR3/4) 炭化粒子少
 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色シルトブロック多

- SK177
 1 褐色 (10YR4/4) 白色微粒子・焼土僅か
 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子僅か
 3 褐色 (10YR4/4) 粘質土

- SK261
 1 黄褐色 (10YR5/6) 地山土主体 部分的に炭化粒子・焼土粒子多

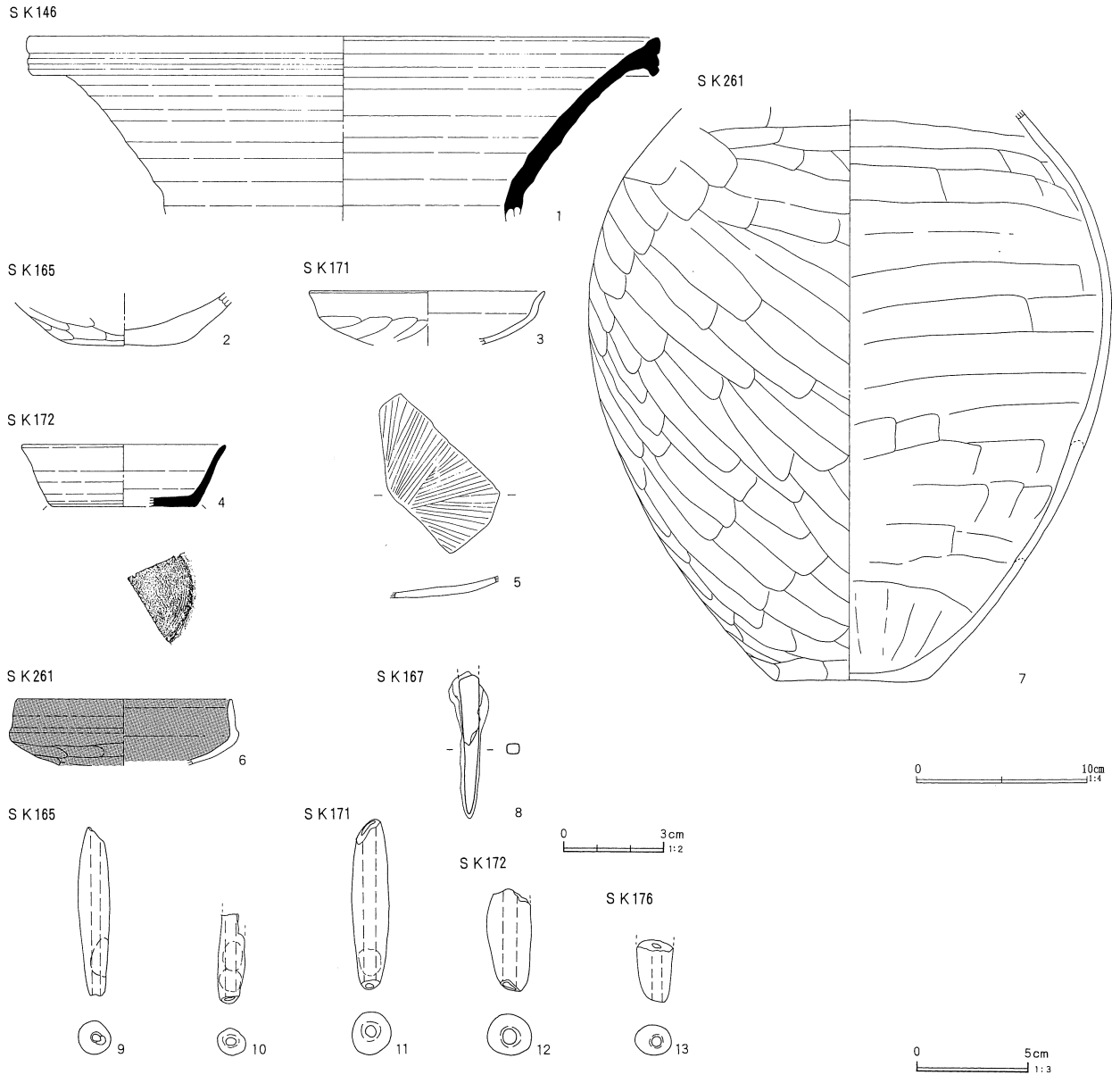


第170図 第172～177・261号土坑

第261号土坑（第170・171図）

L-20グリッドに位置する。第519号住居跡に切られる。平面形は隅丸長方形で、長さ1.10m、幅0.90m、深さ0.58mである。底面西端にピット状の

落ち込みが検出された。主軸方位はN-55°-Wを指す。遺物は、土師器坏・甕の破片が出土した。図示可能な遺物は、土師器坏1、甕1点であった。



第171図 土坑出土遺物

土坑出土遺物観察表（第171図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵甕	(37.1)	10.8		A B C F	良好	黄灰	20	SK146	末野産 歪み有り
2	土師甕		3.1	7.7	A B D E J	良好	淡黄	60	SK165	
3	土師坏	(13.8)	3.2		A B E J	良好	橙	25	SK171	
4	須恵坏	(12.0)	3.7	(8.4)	B J	良好	灰	20	SK172	末野産 底部全面・体部下端回転ヘラズリ
5	土師暗文坏		1.3		B D F J	良好	橙		SK172	内面放射暗文

土坑出土遺物観察表（第171図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
6	土師坏	(12.8)	3.9		B D J	良好	にぶい橙	25	SK261	内外面黒色処理
7	土師甕		34.4	9.5	B D E F J L	良好	淡黄	60	SK261	
8	角釘	現存長4.10cm 幅0.40cm 厚さ0.30cm 重さ3.75g							SK167	

土坑出土土錘観察表（第171図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
9	7.40	1.50	0.35	12.72	B a III	A	浅黄橙	100	S K 165
10	(3.90)	1.25	0.50	4.56	B a IV	A	浅黄橙	60	S K 165
11	7.40	1.90	0.50	17.56	B a III	C	明褐	100	S K 171
12	4.50	2.00	0.65	13.00	B a V	C	にぶい褐	95	S K 172
13	(2.75)	1.60	0.45	4.65	—	A	橙	25	S K 176

4. ピット

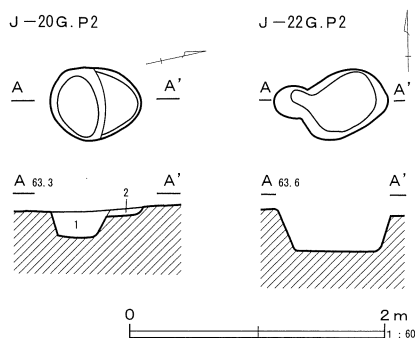
E区ではグリッドピットとして約60本調査した。この中には柱穴と考えられるものもあったが、周囲に続くピットが見られなかった。また、遺物を出土したものもあるが、大半が器種の判別も出来ないくらいの小片の須恵器、土師器を数片出土したのみである。これらのピット全てを明らかにすることはできず、図示できた遺物を出土したピットのみ記述する。

J-20グリッド ピット2（第172・173図）

長径0.72m、短径0.58mの楕円形で、北半はテラス状、南半が深くなっている。深さは南半で0.20mである。遺物は、須恵器高台付椀1、鉄製品1点が出土した。

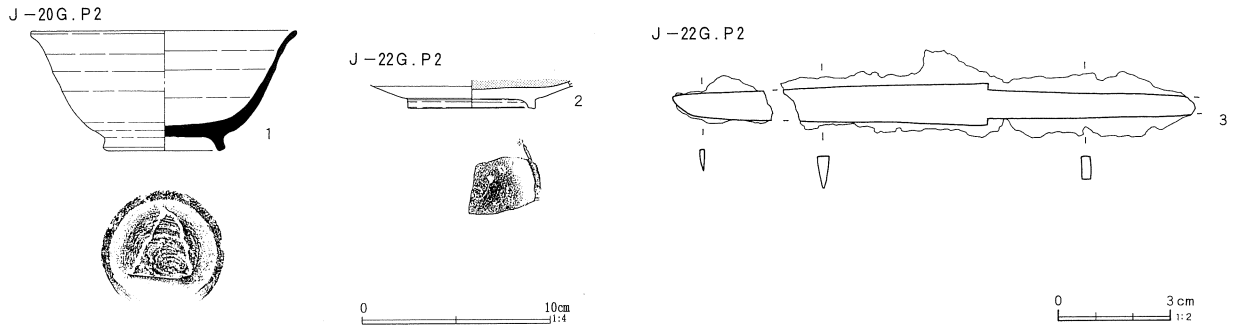
J-22グリッド ピット2（第172・173図）

長さ0.58m、幅0.48mの隅丸長方形の北西コーナーが飛び出す形で、深さは0.32mである。遺物は、灰釉皿が一点出土した。



J-20G. P1・P2
 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 炭化粒子・焼土粒子少
 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少

第172図 グリッドピット



第173図 グリッドピット出土遺物

グリッドピット出土遺物観察表 (第173図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵高台碗	(14.2)	6.3	6.5	BF J L	普通	灰	40	J-20G.P2	末野産? 底部回転糸切
2	灰釉高台皿		1.5		BF	普通	灰白	30	J-22G.P2	二川産 K-14 施釉 ハケヌリ
3	刀子	現存長13.75cm		背幅0.35cm	刃幅0.85cm	重さ36.03g			J-20G.P2	

1. 住居跡

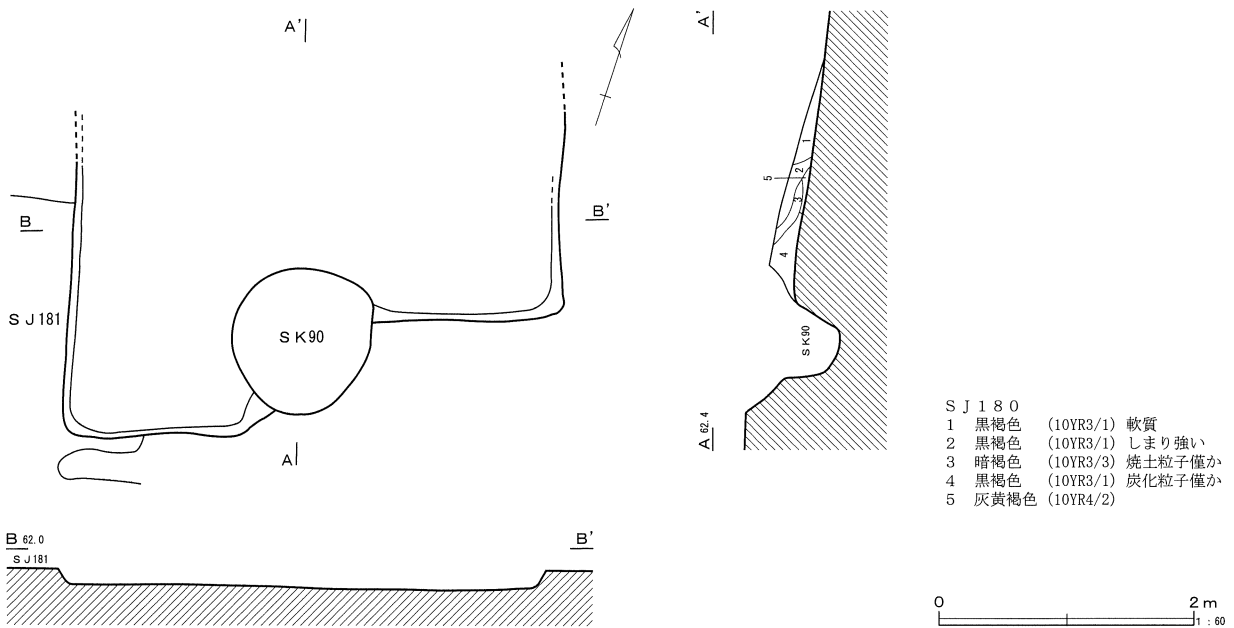
第180号住居跡（第175・176図）

F-23・24グリッドに位置する。第181号住居跡・第90号土坑に切られる。荒川に向う斜面にあり、北半は検出できなかった。検出された規模は、東西3.86m、南北は1.5m程で、深さは0.14~0.22mである。南壁の西半部は南に張り出していた。主軸方位

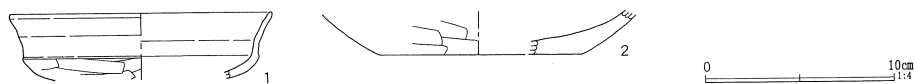
はN-15°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は、覆土から土師器坏・甕の破片が少量出土したが、小片で、摩滅が著しく、殆ど接合しなかった。図示可能な遺物は、土師器坏1・甕1点であった。



第175図 第180号住居跡



第176図 第180号住居跡出土遺物

第180号住居跡出土遺物観察表（第176図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(13.8)	3.5		B G J L	普通	明褐	10	覆土	
2	土師甕		2.3	(12.8)	A B E G H J	普通	明赤褐	10	A区	

第181号住居跡（第177・178図）

F・G-23・24グリッドに位置する。第91・92号土坑に切られ、第180号住居跡を切る。平面形は正方形で、南北4.68m、東西4.22m、深さは0.10~0.33m

である。主軸方位はN-78°-Eを指す。

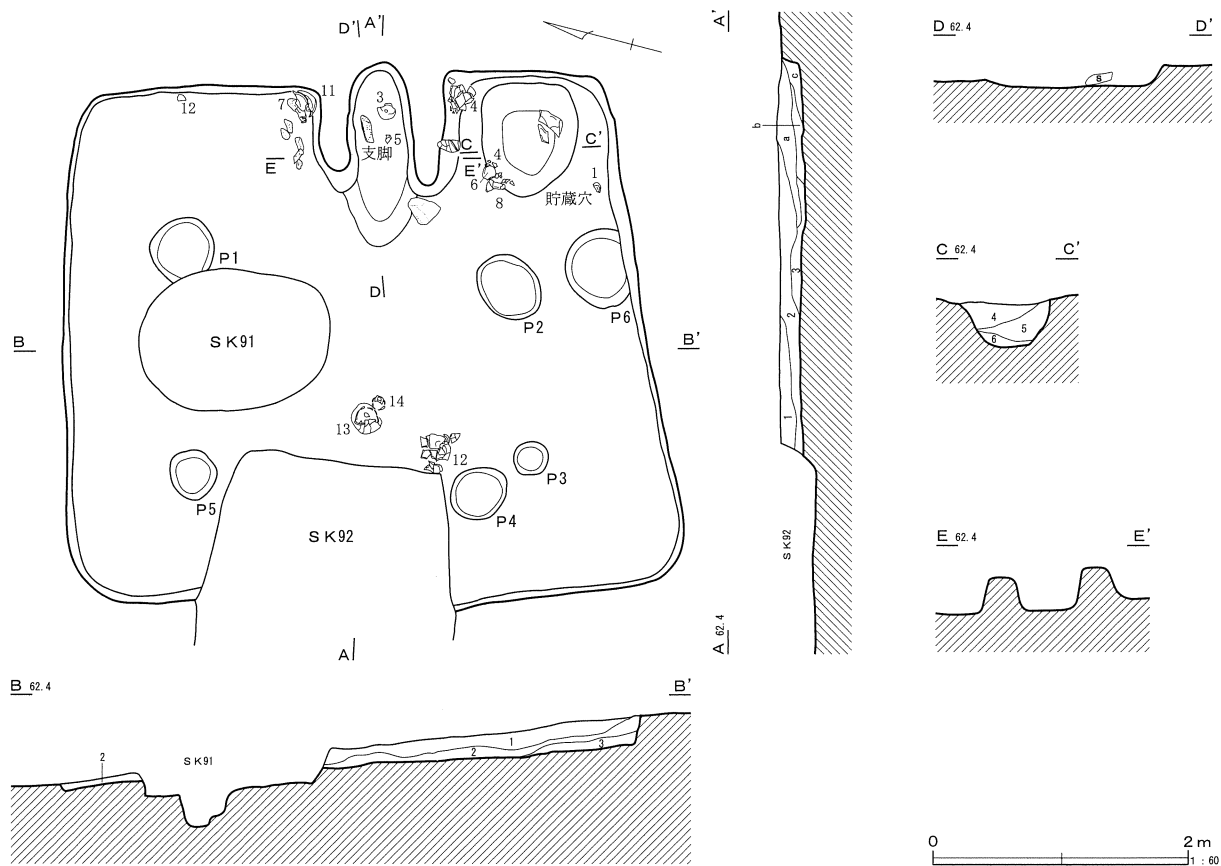
床面は起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。覆土は概ね自然堆積と考えられる。

カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃烧

部の掘り込みは僅かで急激に立ち上がる。川原石利用の支脚が倒位で出土した。貯蔵穴はカマド右に設けられ、92×76cmの楕円形だが、東壁際は直線的である。深さは38cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは6本検出され、P1～P6の深さは4cm、3cm、7cm、3cm、2cm、2cmである。位置からP1～P3とP5は支柱穴とも考えられるがやや浅い。

遺物は、カマド・貯蔵穴・及び覆土から古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が多量に出土した。特に土師器甕は胴部の破片が多かったが、接合率も良かった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・高坏1・鉢2・埴1・壺2・甕5・甌1点であった。



SJ181

- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 炭化粒子少 地山ブロック
- 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 炭化粒子多 焼土粒子
- 3 褐色 (10YR4/6) 炭化粒子
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子 焼土粒少
- 5 黒褐色 (10YR3/3) 炭化粒子

- 6 褐灰 (10YR5/1) 砂 (φ1mm以下)

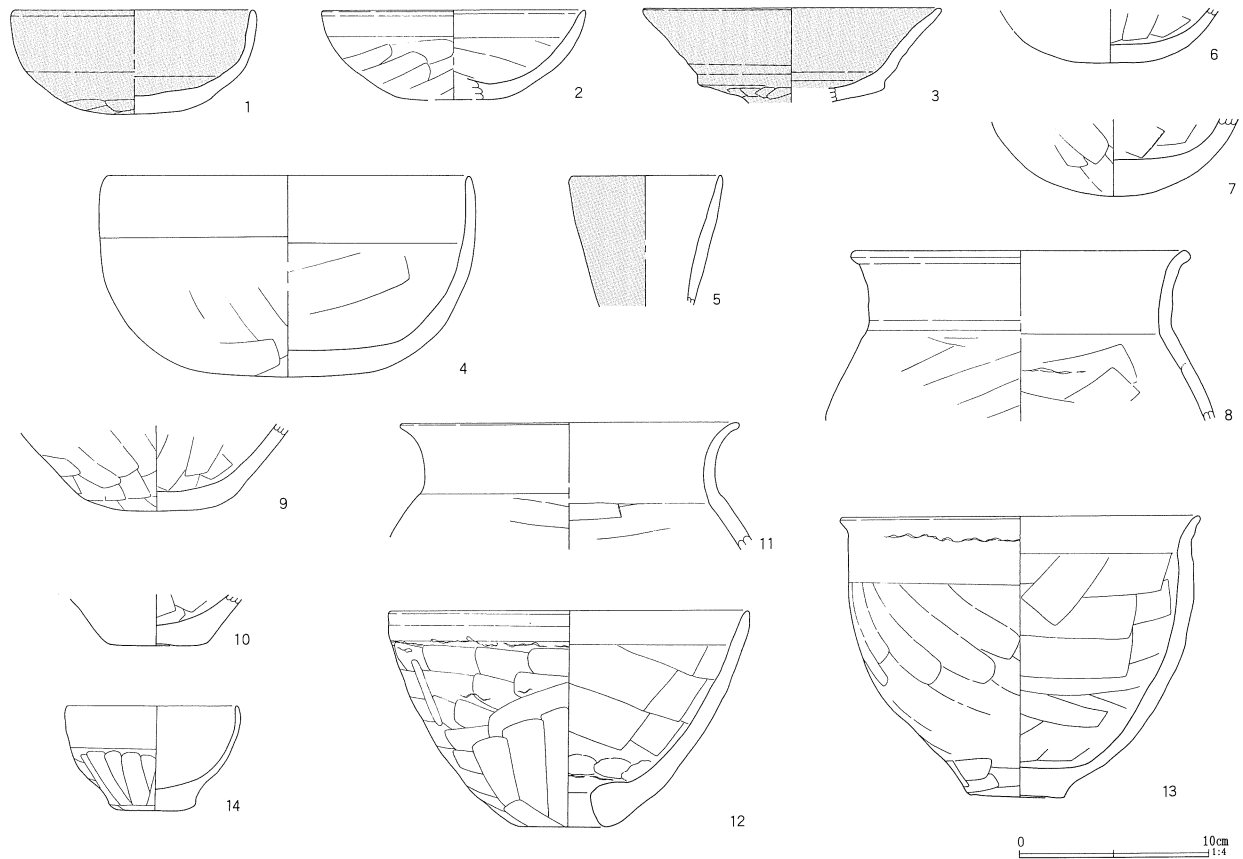
カマド

- a 褐色 (10YR4/4) 焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子多
- b 暗赤褐色 (5YR3/6) 焼土多
- c 褐色 (10YR4/6) 炭化粒子 焼土粒多

第177図 第181号住居跡

第181号住居跡出土遺物観察表 (第178図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.7)	5.5		ABEG	良好	赤	25	+16cm	内外面赤彩
2	土師坏	(13.8)	4.7		ABEG	良好	橙	15	覆土	
3	土師高坏	15.7	5.0		ABCEG	良好	赤	60	カマド	内外面赤彩
4	土師鉢	(19.8)	10.7		BEGH	普通	明赤褐	20	-3.5cm	
5	土師埴	(7.9)	6.8		ABCEG	普通	橙	25	カマド	外面赤彩
6	土師壺		2.9		ABEG	良好	赤褐	90	+3cm	



第178図 第181号住居跡出土遺物

第181号住居跡出土遺物観察表（第178図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
7	土師壺		4.0		ABCEG	普通	橙	60	+5cm	
8	土師甕	(17.6)	9.0		ABEHJ	良好	橙	20	-3cm	
9	土師甕		4.5	7.4	ABCG	普通	赤褐	70	覆土	
10	土師甕		2.7	5.4	ABCEG	良好	明赤褐	70	覆土	
11	土師甕	(17.8)	6.7		ABEG	良好	橙	30	-4.5cm	
12	土師甕	18.9	11.3	4.6	ABEL	良好	橙	70	床	
13	土師甕	18.9	14.6	5.1	ABCEG	普通	橙	90	-6cm	
14	土師小型鉢	9.0	5.5	3.5	ABEGHL	良好	赤褐	80	床	内外面煤付着

第182号住居跡（第179-180図）

G・F-23グリッドに位置する。荒川に向う斜面にあり、北壁と西壁は検出できなかった。土層観察から洪水等によって壊されたと考えられる。検出された規模は、南北5.82m、東西5.12m、深さは0.31~0.36mである。主軸方位はN-87°-Eを指す。

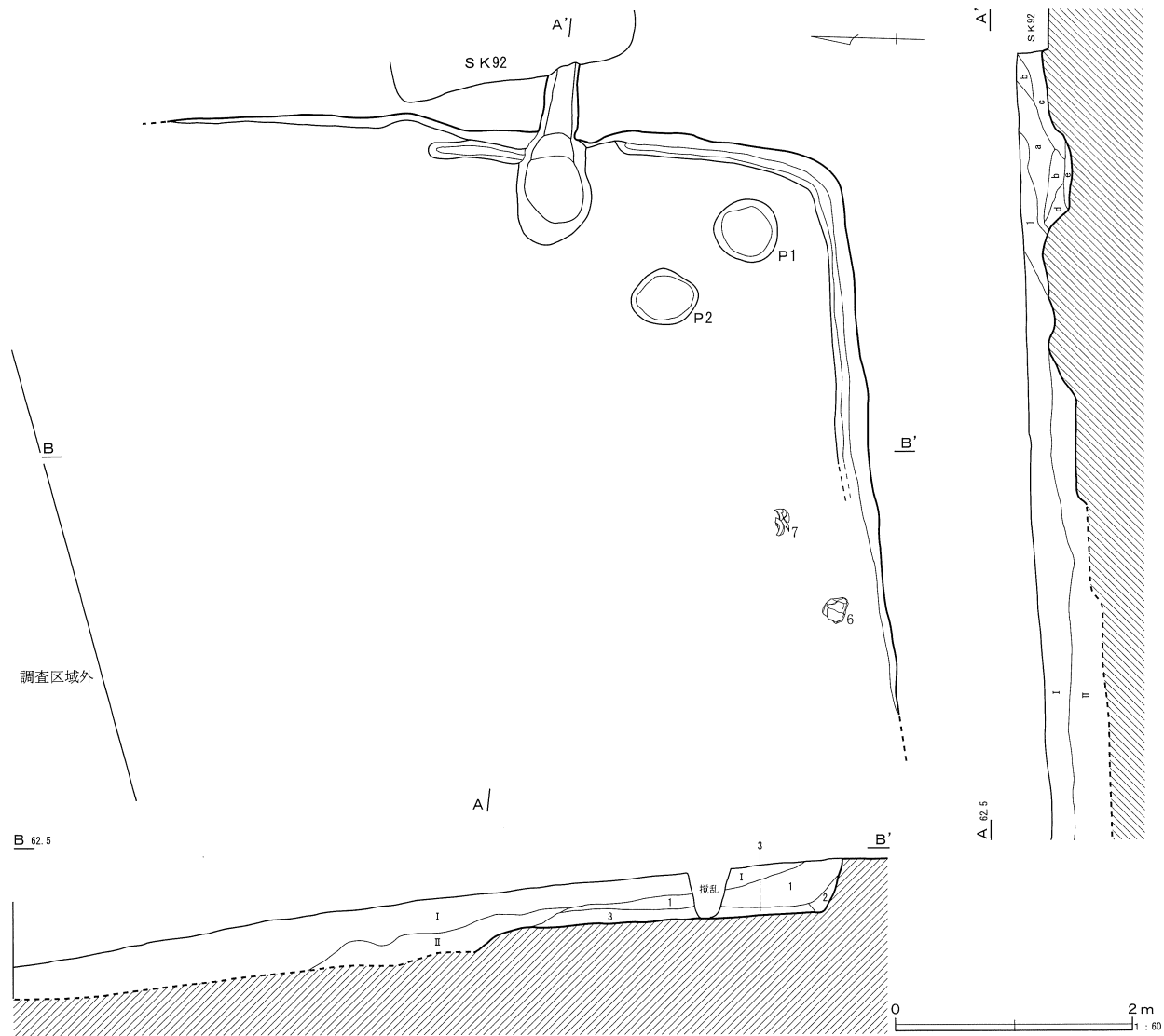
床面は平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは東壁に設置される。燃烧部は20cm程掘り込み、段を持って煙道部となる。貯蔵穴は検出され

なかった。壁溝はカマド周辺から南壁で検出され、幅16~28cm、深さ2~4cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは4cm、5cmである。

遺物は、覆土から、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が多量に出土した。何れも小破片で、殆ど接合しなかった。覆土の遺物には時期差があり、一部奈良時代以降の土師器・須恵器の破片も混入していたが、本住居は上層をI・II層に壊されており、時期の異なる遺物が混入したものと思われる。

図示可能な遺物は、土師器坏5・鉢1・甕3、羽口 明鉄製品1、土錘5点であった。
1、管玉1、鉄製品として刀子1・棒状鉄製品1・不



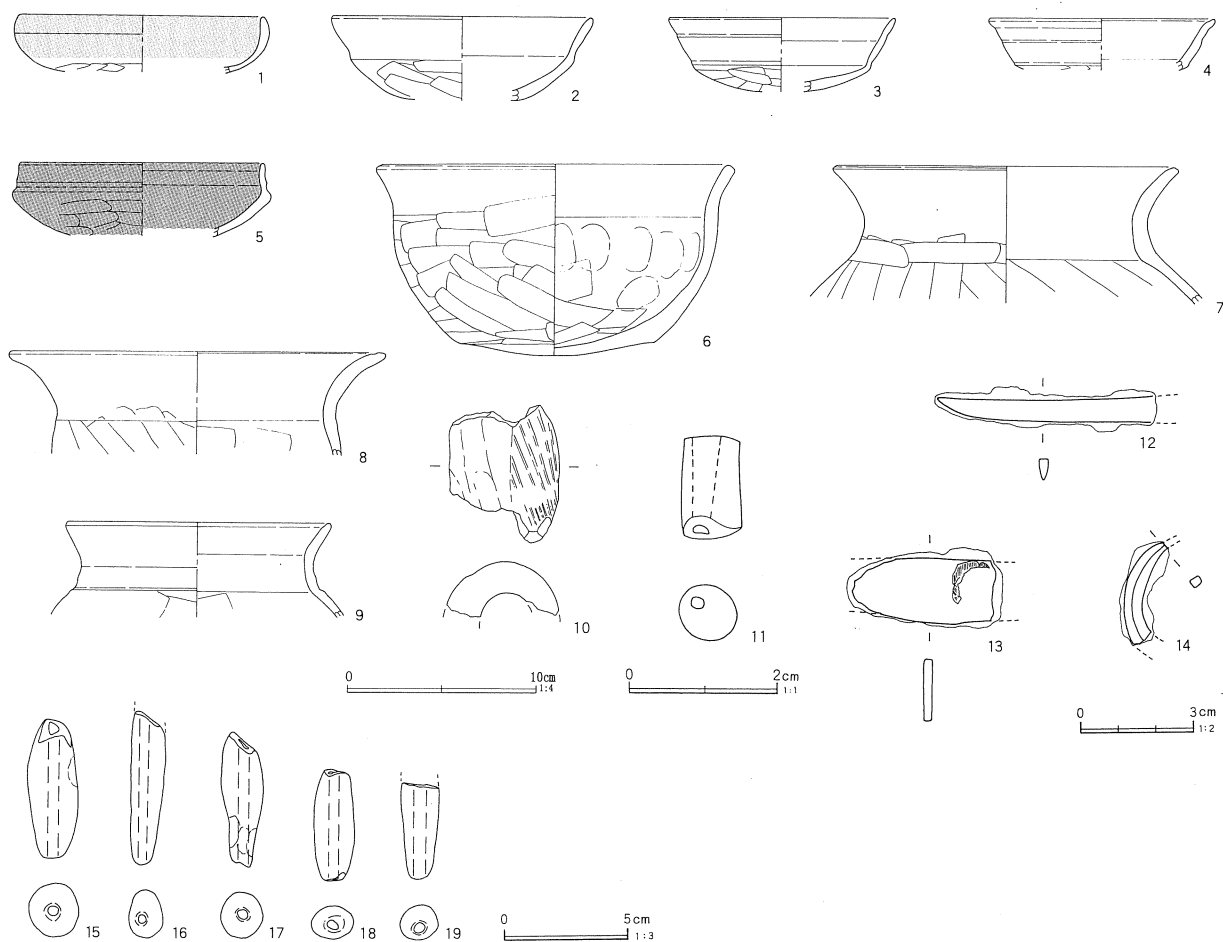
- S J 1 8 2
- I 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子 焼土粒僅か
 - II 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子 I層よりしまりあり
 - 1 暗褐色 (10YR3/4) 炭化粒子 焼土粒子 砂粒子 地山ブロック多
 - 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子・焼土粒多 地山ブロック多
 - 3 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子 地山ブロック多 貼床土

- カマド
- a にぶい黄褐色 (10YR5/3) 炭化粒子・焼土多 地山ブロック
 - b 赤褐色 (2.5YR4/6) 焼土ブロック多 炭化粒子 天井部崩落土
 - c 灰黄褐色 (10YR5/2) 焼土粒 炭化粒子 粘性やや有り
 - d 灰黄褐色 (10YR5/2) 焼土粒・炭化粒子僅か しまりあり
 - e 黒色 (10YR2/1) 炭化粒子・灰・焼土粒多

第179図 第182号住居跡

第182号住居跡出土遺物観察表 (第180図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.8)	3.0		A B E G	普通	橙	20	C区	内外面赤彩
2	土師坏	(13.8)	4.4		A B E G	普通	橙	15	C区	
3	土師坏	(11.8)	3.9		A B E G	普通	橙	30	B区	
4	土師坏	(11.8)	2.7		A B E G	良好	黄橙	20	B区	



第180図 第182号住居跡出土遺物

第182号住居跡出土遺物観察表（第180図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
5	土師坏	(12.9)	3.9		ABEG	普通	橙	20	B区	内外面黒色処理
6	土師鉢	18.3	10.1	10.2	ABDEFGJ	良好	橙	60	+8cm	内面煤状付着
7	土師甕	17.8	7.2		ABEGL	普通	浅黄橙	70	-3cm	
8	土師甕	(19.8)	5.4		BCEGJ	良好	橙	20	B区	
9	土師甕	(14.0)	5.0		ABEGL	良好	橙	20	C区	
10	羽口	残存長7.30cm 幅5.90cm 厚さ1.90cm			—	—	橙		B区	重さ88.19g
11	管玉	残存長1.40cm 直径0.80cm 孔径0.20cm 重さ0.92g							覆土	碧玉製 風化している
12	刀子	現存長5.90cm 背幅0.25cm 刃幅0.60cm 重さ5.14g							覆土	切先から身部にかけての部材
13	不明鉄製品	現存長3.80cm 幅1.78cm 厚さ0.25cm 重さ11.40g							覆土	木質物付着
14	棒状鉄製品	現存長3.00cm 幅0.70cm 厚さ0.30cm 重さ2.28g							覆土	

第182号住居跡出土土錘観察表（第180図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
15	5.45	2.10	0.40	18.26	C a V	C	にぶい黄	100	
16	6.00	1.90	0.35	12.15	C a III	A	にぶい黄橙	85	B区
17	5.30	1.80	0.45	10.61	C a V	A	灰黄褐	100	B区
18	4.35	1.60	0.45	7.85	B a V	C	明赤褐	100	C区
19	3.80	1.45	0.45	6.44	B a IV	A	黄橙	55	C区

第283号住居跡 (第181・182図)

I・J-27・28グリッドに位置する。第280・418号住居跡に切られ、第309・415・436・440号住居跡を切る。平面形は歪んだ正方形で、北東壁から南西壁が4.60m、北西壁から南東壁が4.42m、深さは0.26～0.32mである。主軸方位はN-131°-Wを指す。

床面は小さな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは南西壁の中央に設置される。煙道部先端は第418号住居跡で壊されていた。燃烧部は10cm程掘り下げ、緩やかに立ち上がって煙道部となる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝はカマド右から北西

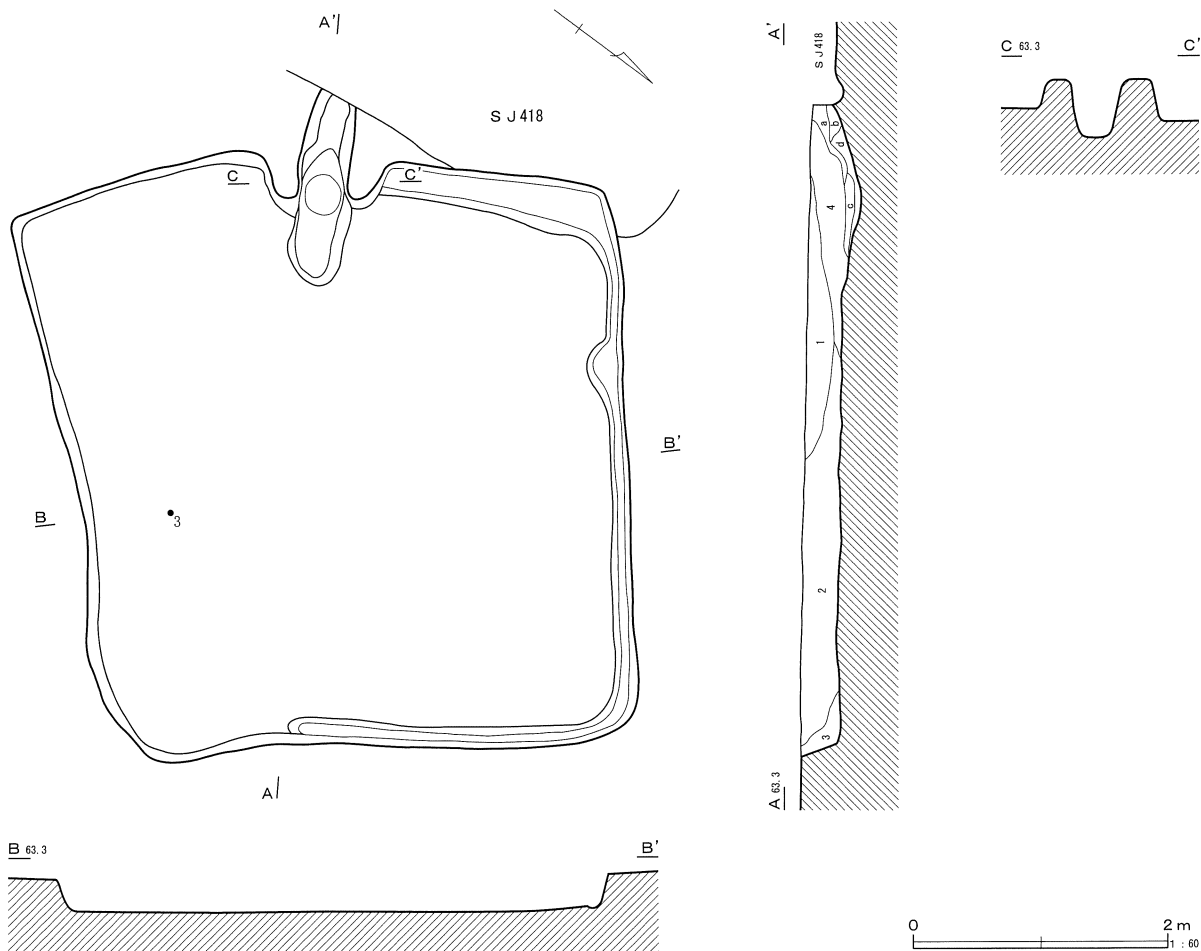
壁を通り、北東壁中央まで検出され、幅18～44cm、深さ2～4cmである。

遺物は、主に覆土から土師器坏・甕の破片が多量に出土した。特に土師器甕の胴部片が多かったが、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・小型壺1・甕4、須恵器小型壺1、土錘13点であった。

3の小型壺は、ほぼ完形に近い個体である。平底で、球形の胴部に広口で短い口縁部がつく。胴部は荒いヘラケズリが施され、口縁部には対称位置に孔が2孔穿たれていた。

4は須恵器の小型壺である。上半部の破片で、口



S J 2 8 3

- | | | | | |
|---|------------------|---------|------------|------|
| 1 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 黒褐色粒子極多 | 炭化粒子少 | 焼土粒子 |
| 2 | 暗褐色 (10YR3/4) | 黄褐色粒子多 | 焼土粒子・炭化粒子少 | |
| 3 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化粒子少 | 焼土粒子僅か | |
| 4 | 暗褐色 (10YR3/3) | 黄褐色粒子極多 | 焼土粒子・炭化粒子少 | |

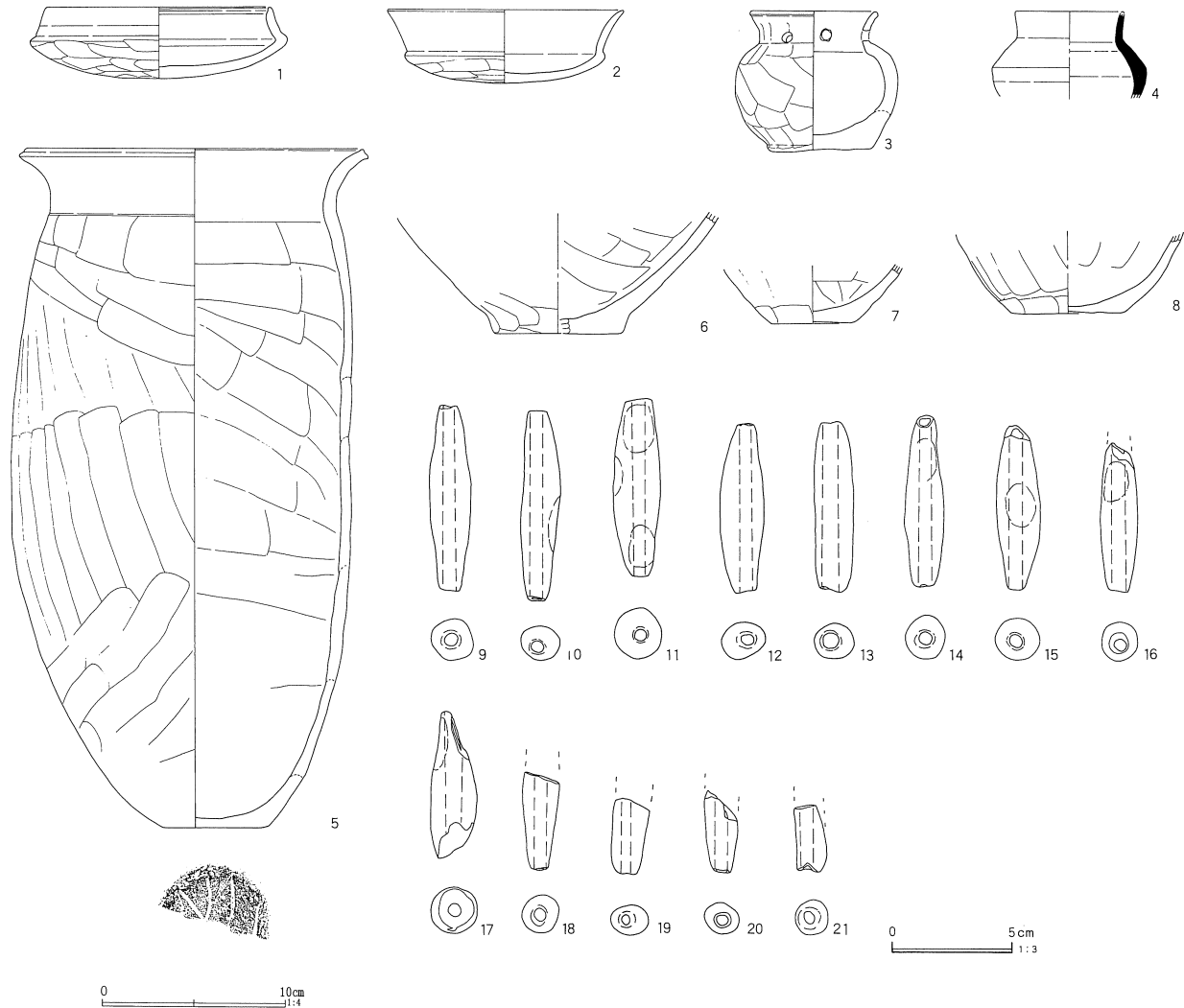
カマド

- | | | |
|---|----------------|-------------------|
| a | 暗褐色 (10YR3/4) | 焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子少 |
| b | 黒褐色 (10YR3/2) | 焼土粒子少 炭化粒子僅か |
| c | 灰黄褐色 (10YR4/2) | 焼土粒子少 (粘土層) |
| d | 暗褐色 (10YR3/3) | 黄褐色粒子・焼土粒子・炭化粒子多 |

第181図 第283号住居跡

縁端部を欠損する。なで肩だが張りのある肩部で、胴部との境界は弱い稜となる。胎土は精選され、混入粒子は殆ど認められないが、黒色の吹出しが認め

られる。外面全面に自然釉が認められた。また、内面胴部には、赤色の付着物が認められた。産地は明らかにできなかった。



第182図 第283号住居跡出土遺物

第283号住居跡出土遺物観察表（第182図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.2	3.9		B D E H J	良好	明赤褐	60	カマド	
2	土師坏	12.8	4.0		A E J	普通	橙	90	A区	
3	土師小型壺	6.8	7.6	5.5	H J L	普通	にぶい赤褐	90	床	2孔あり
4	須恵小型壺	(5.8)	4.9		B F	良好	灰白	15	B区	産地不明 内面赤色付着物 外面自然釉
5	土師甕	19.0	37.2	6.0	A B E H J L	良好	橙	60	カマド・B区	底部木葉痕
6	土師甕		6.6	(7.0)	B J L	普通	灰褐	30	B区	
7	土師甕		3.2	4.6	B J	普通	にぶい褐	50	B区	
8	土師甕		4.4	6.3	A B J L	良好	黒褐	50	B区	

第283号住居跡出土土錘観察表（第182図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
9	7.60	1.70	0.50	16.41	B a II	A	にぶい黄橙	100	B区
10	7.70	1.60	0.50	14.58	A a II	A	褐灰	100	A区
11	7.20	2.10	0.50	24.26	B a III	A	灰黄褐	100	A区
12	6.80	1.80	0.50	15.49	B a III	A	灰黄褐	100	A区
13	6.90	1.60	0.70	13.34	B a III	A	灰白	100	A区
14	7.00	1.80	0.60	16.49	B a III	A	灰黄褐	100	B区
15	6.70	1.80	0.50	18.30	B a III	A	褐灰	100	A区
16	6.10	1.60	0.50	11.90	B a III	A	にぶい橙	90	
17	(5.90)	1.90	0.55	16.45	—	C	灰黄褐	—	B区
18	(4.00)	1.60	0.50	7.75	B a IV	A	褐灰	70	B区
19	(3.10)	1.50	0.40	5.25	—	A	にぶい褐	—	
20	(3.40)	1.40	0.50	3.99	—	A	褐灰	—	A区
21	(2.70)	1.50	0.50	4.34	—	A	橙	—	B区

第415号住居跡（第183・184図）

I・J-27・28グリッドに位置する。第280・283号住居跡に切られ、第421・422・440号住居跡を切る。平面形は南北に僅かに長い長方形で、長軸4.48m、短軸3.68m、深さは0.13~0.15mである。主軸方位はN-70°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央よりやや南に設置される。左袖先端はグリッドピットに壊されていた。燃烧部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴はカマド右に設けられ、70×62cmの楕円形で、深さは49cmである。壁溝は東壁以外で全周し、幅10~22cm、深さ1~4cmである。ピットは4本検出され、P1~P4の深さは24cm、18cm、6cm、6cmである。何れも支柱穴と考えられる。

遺物は、古墳時代後期の土師器甕の破片が多く出土したが、胴部の小破片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器高坏1・甕1、滑石製白玉1点であった。

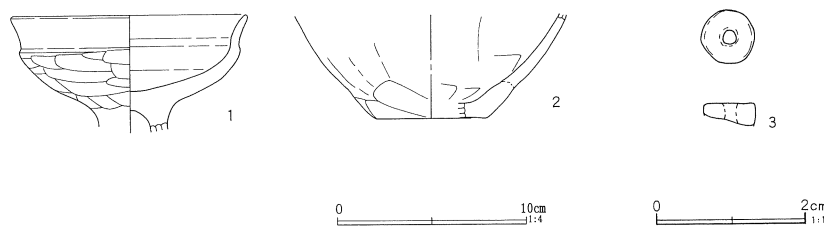
第422号住居跡（第184図）

I-27・28グリッドに位置する。第415号住居跡に切られ、第421・427・439・440号住居跡を切る。第415号住居跡の西側に西壁周辺のみが検出された。北壁、南壁は第415号住居跡と同位置と考えられる。検出された規模は、南北4.29m、東西0.53m、深さは0.12~0.24mである。主軸方位は西壁でN-31°-Wを指す。

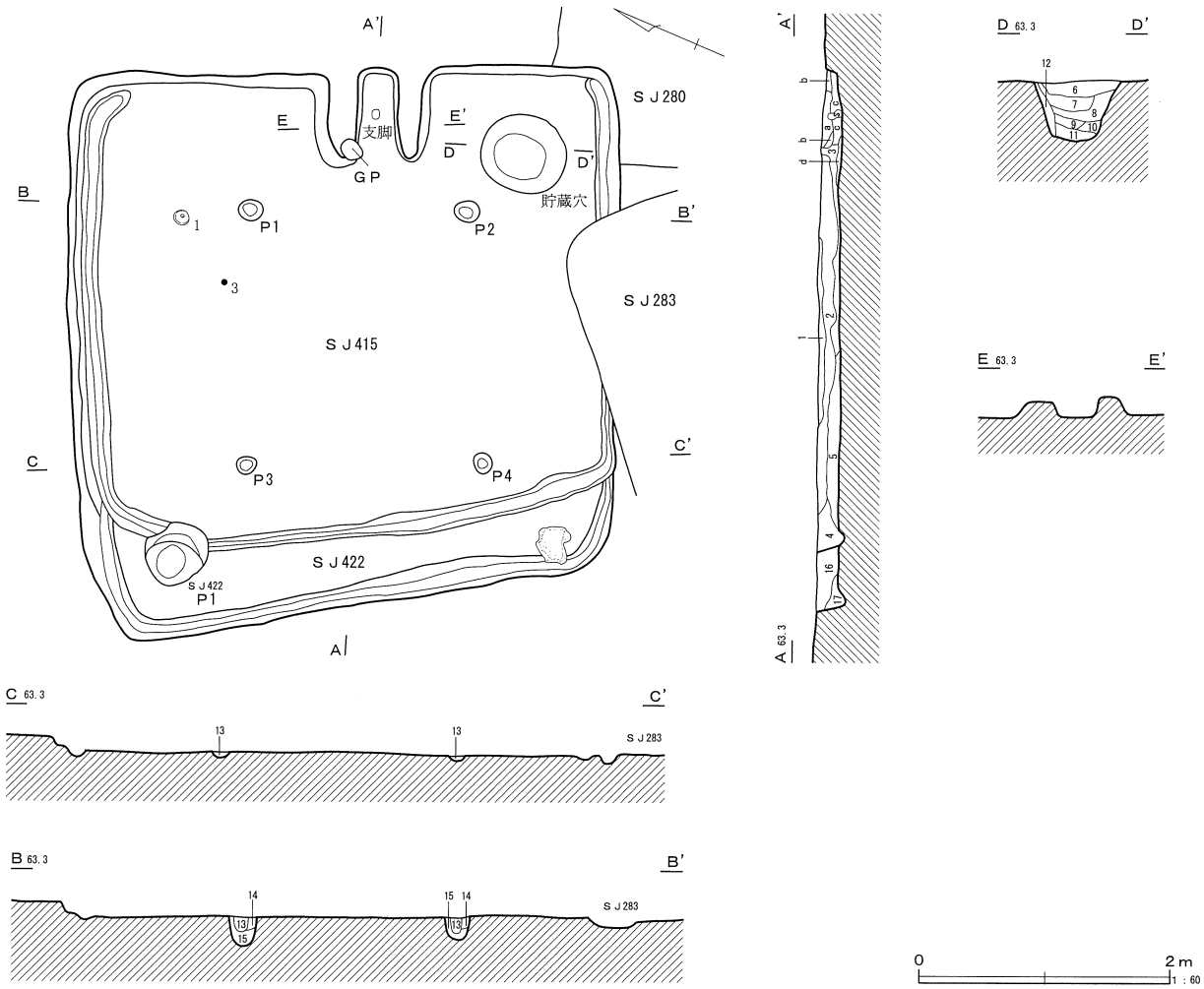
床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は検出された部分で全周し、幅8~28cm、深さ6~7cmである。ピットは1本検出され、深さは22cmである。南西コーナーの床面からやや大型で扁平な石が出土した。

遺物は、古墳時代後期の土師器甕の破片が10数点出土したが、図示可能な遺物はなかった。



第183図 第415号住居跡出土遺物



- S J 4 1 5
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 灰黄色地山粒多 炭化粒子微
 - 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質地山主体 全体に溶化
 - 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 灰白色粘質土 しまり弱
 - 4 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 2層に似るが地山は大型ブロック
 - 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 3層に似るが灰白色土は小型ブロック
 - 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 炭化粒子少
 - 7 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質地山土極多
 - 8 褐色 (10YR4/4) 黄色地山粒 ブロック 粘性強
 - 9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 7層に似るが地山全体的に溶混
 - 10 褐色 (10YR4/4) 7層に似るが地山ブロック主体
 - 11 灰黄褐色 (10YR5/2) 灰白色粘質土極多
 - 12 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 地山極多 壁の溶軟化層
- 13 褐色 (10YR4/4) 粘性強 地山全体溶混 柱痕
- 14 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 地山ブロック多
- 15 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 地山ブロック構成 しまり強
- カマド
- a 暗赤褐色 (5YR5/6) 焼土ブロック主体 天井崩落土層
 - b 黒褐色 (10YR3/2) a層崩落前に落下した天井・壁の焼土ブロック
 - c 暗褐色 (10YR3/4) 灰層 小型焼土ブロック 炭化粒子多
 - d 暗赤褐色 (5YR5/6) 焼土極多 火床面の溶軟化層
- S J 4 2 2
- 16 褐色 (10YR4/4) 粘質地山ブロック
 - 17 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山・壁の溶化層極多

第184図 第415・422号住居跡

第415号住居跡出土遺物観察表 (第183図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師高坏	12.4	6.2		B D E J	良好	橙	80	+4cm	
2	土師甕		5.6	(5.8)	A B D E J	良好	橙	20	貯蔵穴	
3	白玉	直径0.70cm 厚さ(0.30)cm		孔径0.20cm		重さ0.17g			+16cm	滑石製 欠損多い

第417号住居跡（第185・186図）

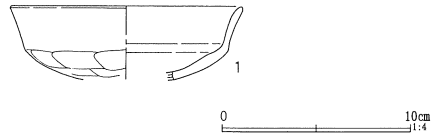
H-27グリッドに位置する。第412号住居跡・第13号掘立柱建物跡・第248号土坑に切られ、第421号住居跡を切る。東壁の大半を第412号住居跡に壊されるが一辺4.0m前後の正方形と考えられる。深さは0.13~0.14mである。主軸方位はN-80°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

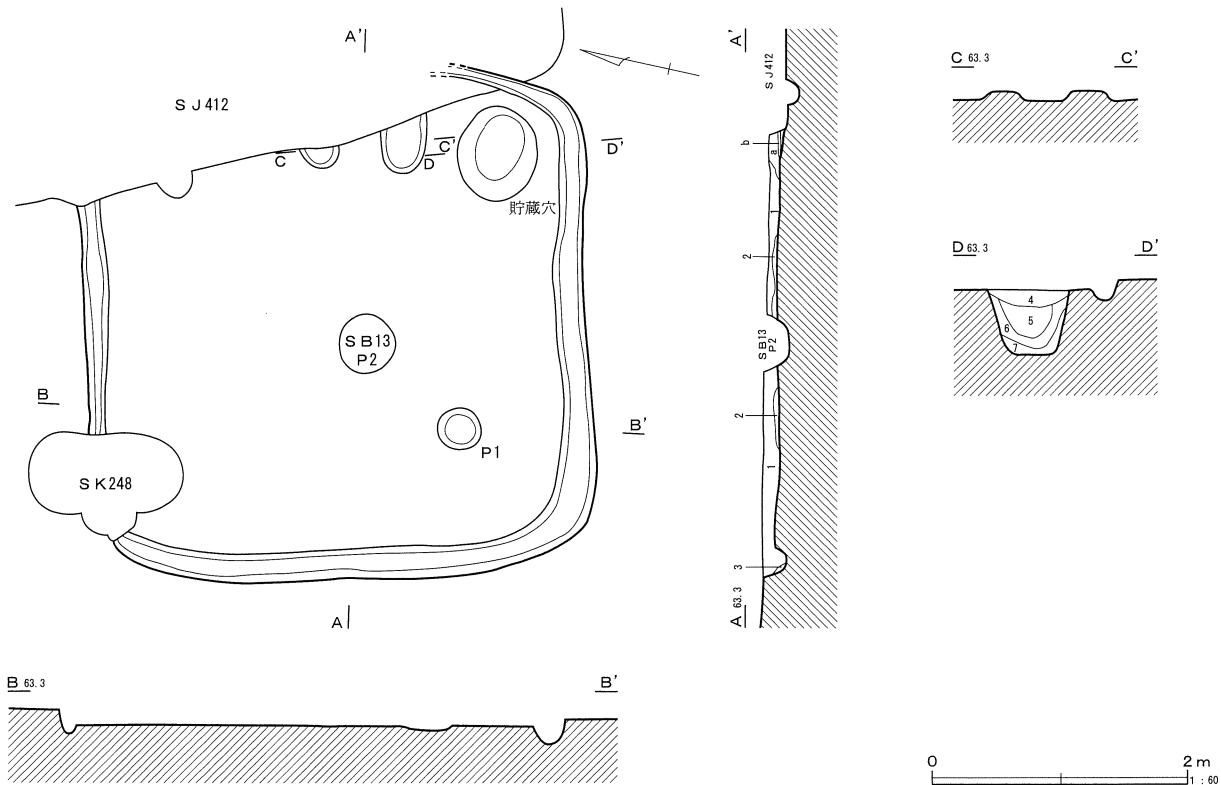
カマドは東壁に設置される。燃烧部と左右の袖の一部が残存していた。燃烧部の掘り込みはなく、土層断面に明瞭な焼土層が見られた。貯蔵穴はカマド

右に設けられ、72×64cmの楕円形で、深さは49cmである。壁溝は全周するようで、幅14~28cm、深さ3~15cmである。ピットは1本検出され、深さは3cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の小片が出土したが、図示可能な遺物は、土師器坏1点であった。



第185図 第417号住居跡出土遺物

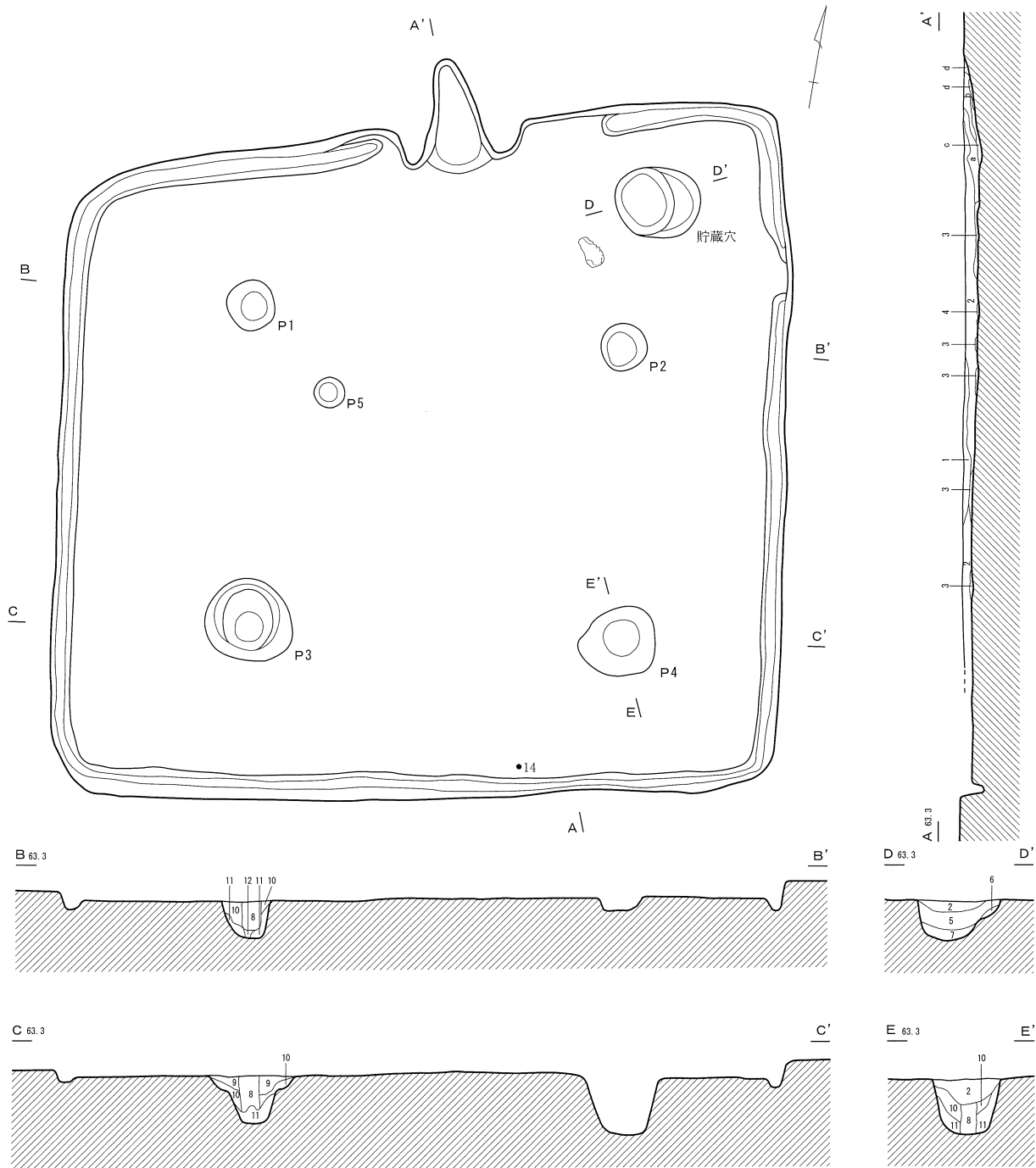


- | | | | | | | | | | | |
|-----------|------------------|----------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|
| S J 4 1 7 | | | | | | | | | | |
| 1 | 灰黄褐色 (10YR5/2) | 灰白色ブロック・炭化粒子・焼土ブロック多 | | | | | | | | |
| 2 | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 灰白色ブロック 炭化粒子 | | | | | | | | |
| 3 | 褐色 (10YR4/4) | 地山粒子 炭化粒子 | | | | | | | | |
| 4 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 焼土粒子 灰白色ブロック | | | | | | | | |
| 5 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質 炭化粒子 | | | | | | | | |
| 6 | 暗褐色 (10YR3/3) | 炭化粒子・焼土粒子多 粘性やや有り | | | | | | | | |
| 7 | 褐色 (10YR4/4) | 砂質 地山粒子 炭化粒子 | | | | | | | | |
| カマド | | | | | | | | | | |
| a | 赤褐色 (5YR4/6) | 焼土ブロック・灰多 | | | | | | | | |
| b | 暗赤褐色 (5YR3/4) | 砂質 焼土多 | | | | | | | | |

第186図 第417号住居跡

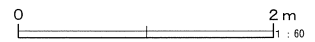
第417号住居跡出土遺物観察表（第185図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.2)	3.9		B D E J	普通	橙	20	覆土	



- S J 4 1 8
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 砂質地山粒・焼土・炭化粒子多
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 大型 (φ50mm) 砂質地山ブロック多
 - 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質地山主体 床状だが軟質
 - 4 黒褐色 (10YR2/2) 炭化粒子単純層
 - 5 暗褐色 (10YR3/3) 小型粘質地山ブロック少 炭化粒子多
 - 6 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 灰黄色粘質地山粒多 壁の溶軟化層
 - 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 灰黄色粘質地山を主体溶混 灰色を帯びる
 - 8 暗褐色 (10YR3/4) 柱痕

- 9 暗褐色 (10YR3/4) 粘質地山ブロック多 焼土 炭化粒子
 - 10 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質地山ブロック主体 しまり強
 - 11 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 8層に似るが地山ブロック多く大型
 - 12 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 灰白色粘質土、柱の粘土化したものか
- カマド
- a 黒褐色 (10YR3/2) 天井部崩落土層と思われるが、焼土ブロック少
 - b 暗褐色 (10YR3/4) 焼土 炭化粒子 灰
 - c 褐色 (10YR4/4) 暗褐色粘質土層 掘方充填土か
 - d 褐色 (10YR4/6) 焼土極多 底の溶軟化層



第187図 第418号住居跡

第418号住居跡（第187・188・189図）

I・J-27グリッドに位置する。第283・436・440・443・553号と重複し、本住居跡が最も新しい。平面形は正方形に近く、長軸6.90m、短軸6.31mで、深さは0.07~0.15mと浅い。主軸方位はN-13°-Wを指す。

床面は中央付近が僅かに高くなり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは北壁中央よりやや東に設置される。燃焼部の掘り込みは僅かで緩やかに立ち上がる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、80×66cmの楕円形で、深さは

は37cmである。壁溝は東壁で一部途切れるが全周し、幅14~28cm、深さ7~14cmである。ピットは5本検出され、P1~P5の深さは30cm、12cm、44cm、52cm、6cmである。P1~P4は支柱穴と考えられる。

遺物は、土師器坏・甕、須恵器坏類の破片が多く出土したが、小片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1・暗文坏1・鉢1・甕3、須恵器坏2・蓋1・盤1・甕1、砥石1、滑石製白玉1、棒状鉄製品1、土錘25点であった。

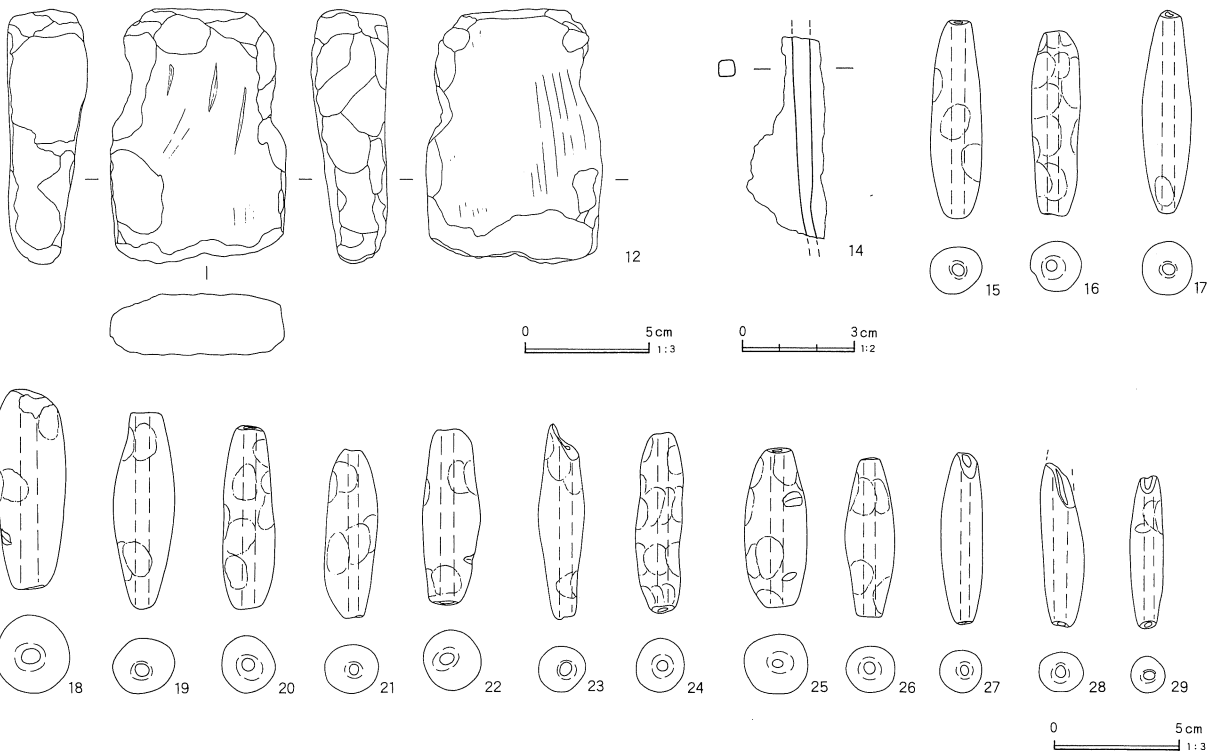
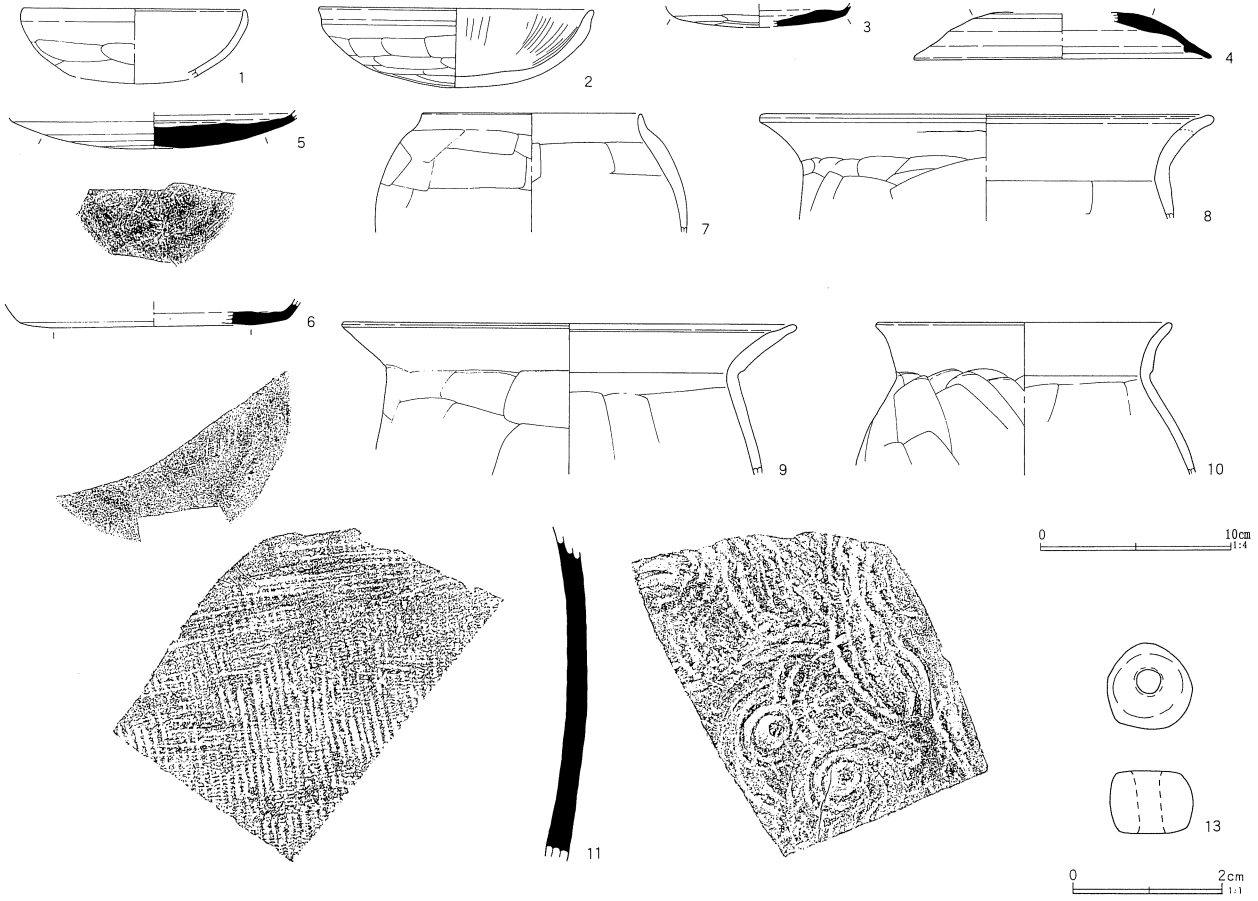
6の盤は、大型の坏とも考えられたが、底部には叩き目の痕跡が認められ、盤と判断した。

第418号住居跡出土遺物観察表（第188図）

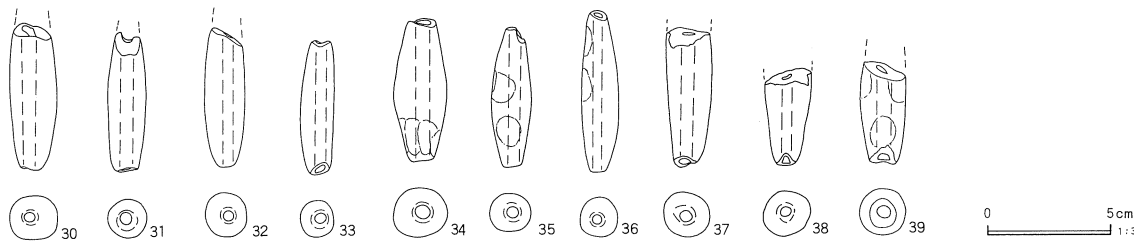
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.6)	3.6		ABDGJ	普通	橙	25	貯蔵穴	
2	土師暗文坏	14.4	4.2		BDGHJ	普通	橙	70	貯蔵穴	内面反射暗文
3	須恵坏		1.2	(9.0)	AFJL	良好	灰	20	覆土	末野産 手持ちヘラケズリ
4	須恵蓋	(15.5)	2.4		AHJL	普通	灰白	5	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ
5	須恵坏		1.9	(15.0)	AHJL	良好	灰	30	覆土	末野産 底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ
6	須恵盤?		1.4	(14.0)	BFJL	良好	灰	20	覆土	末野産 底部回転ヘラケズリ
7	土師鉢	11.4	6.3		ADGHJL	不良	橙	50	カマド	
8	土師甕	(23.5)	5.6		BDGJ	普通	明赤褐	25	覆土	
9	土師甕	23.7	7.9		BDEGJ	良好	橙	70	カマド	
10	土師甕	15.4	8.0		ABDGJL	普通	橙	65	カマド	
11	須恵甕				BJ	良好	灰		覆土	末野産 外面格子目叩き 内面同心円当具痕
12	砥石	長さ9.40cm 幅6.90cm 厚さ3.00cm 重さ195.04g							覆土	凝灰岩
13	白玉	直径1.15cm 厚さ0.85cm 孔径0.35cm 重さ1.59g						100	床	滑石製
14	棒状鉄製品	現存長さ5.10cm 幅0.45cm 厚さ0.45cm 重さ12.93g							+7.5cm	両端部を欠いた角釘か?

第418号住居跡出土土錘観察表（第188・189図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
15	7.80	2.00	0.50	31.34	B a II	A	にぶい黄橙	100	
16	7.20	2.00	0.40	28.08	B b III	A	褐灰	100	
17	7.90	2.10	0.50	25.84	B a II	A	にぶい黄橙	100	
18	7.80	3.10	0.70	60.71	B a II	A	橙	95	
19	7.70	2.40	0.50	33.38	C a II	A	褐	100	
20	7.20	2.20	0.50	31.31	B b III	C	にぶい黄橙	100	
21	6.70	2.10	0.40	25.27	B a III	A	にぶい黄橙	100	
22	6.90	2.40	0.60	32.70	B b III	C	にぶい赤褐	100	
23	7.60	1.90	0.50	20.30	B a II	A	にぶい黄橙	90	
24	7.05	2.10	0.45	22.74	C b III	A	明赤褐	95	
25	6.20	2.40	0.40	38.48	B b IV	A	灰黄褐	100	
26	6.20	2.00	0.60	18.69	C b IV	A	にぶい黄橙	100	
27	6.70	1.70	0.40	16.81	B a III	A	にぶい黄橙	95	
28	6.40	1.70	0.50	15.39	B a III	A	にぶい橙	80	
29	6.00	1.40	0.40	10.28	B a IV	A	黒褐	90	
30	(5.80)	1.80	0.40	17.93	B a III	A	黒褐	80	
31	(5.50)	1.50	0.50	11.40	B a IV	A	灰黄褐	90	
32	(5.50)	1.70	0.40	15.89	B a III	A	黒褐	70	
33	5.30	1.50	0.40	9.24	B a V	A	橙	100	



第188图 第418号住居跡出土遺物 (1)



第189図 第418号住居跡出土遺物 (2)

第418号住居跡出土土錘観察表 (第189図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
34	5.60	2.10	0.60	17.99	C a IV	A	橙	100	
35	5.50	1.60	0.40	11.11	B b IV	A	黒褐	90	
36	6.35	1.55	0.35	13.26	B a IV	C	黒褐	100	
37	(5.45)	1.90	0.50	15.09	B a III	A	黒褐	70	
38	(3.80)	1.95	0.40	10.48	B a III	C	にぶい黄橙	45	
39	(4.00)	1.80	0.50	12.61	—	A	にぶい黄橙	—	

第419号住居跡 (第190・191図)

H・I-26・27グリッドに位置する。第423・425号住居跡・第13号掘立柱建物跡と重複し、その何れよりも古い。平面形は正方形で、東西5.90m、南北5.86mで、深さは0.02~0.05mと浅い。主軸方位はN-73°-Eを指す。

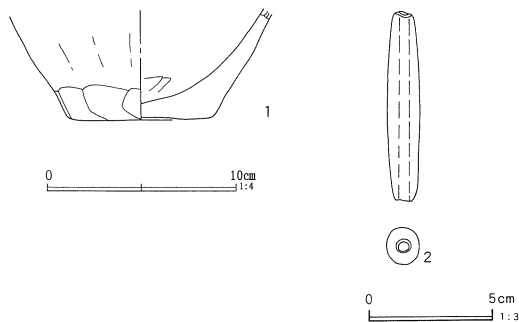
床面は緩やかな起伏がある。壁の状態は不明瞭である。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。東壁に対して南に振れている。燃烧部はの掘り込みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴はカマド右の壁面に設けられ、86×60cmの楕円形で、深さは15cmである。壁溝は南西コーナーで途切れるが他は全周するようで、かまど右袖にまで及んでいた。幅10~24cm、深さ1~8cmである。ピットは4本検出され、P1~

P4の深さは47cm、48cm、22cm、35cmである。何れも主柱穴と考えられる。

遺物は、覆土から土師器甕の破片が出土したが、小片が多く接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器甕の底部1、土錘1点であった。



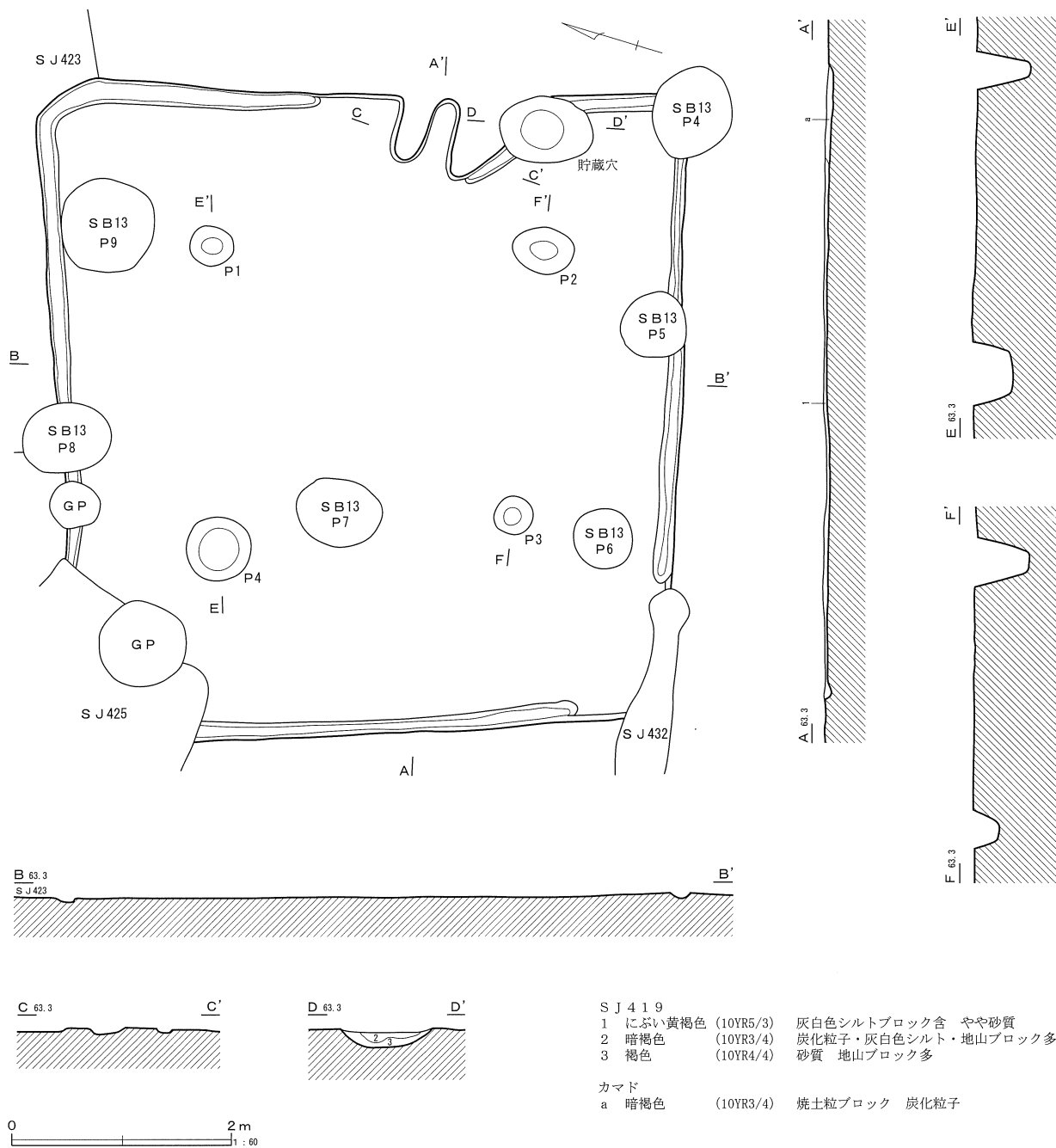
第190図 第419号住居跡出土遺物

第419号住居跡出土遺物観察表 (第190図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師甕		5.7	(7.5)	B E J L	良好	黄橙	25	覆土	

第419号住居跡出土土錘観察表 (第190図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	7.45	1.50	0.40	12.56	A a III	C	浅黄橙	100	



第191図 第419号住居跡

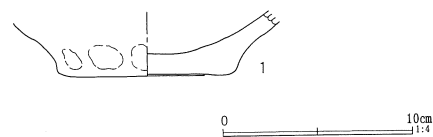
第421号住居跡 (第192・193図)

H・I-27・28グリッドに位置する。第412・415・417・422・439号住居跡と重複し、その何れよりも古い。東壁と北西コーナーを検出したのみである。検出した規模は、東西5.92m、南北3.24mで、深さは0.01~0.08mと浅い。主軸方位はN-9°-Wを指す。

床面は平坦で、壁の状態は不明瞭である。覆土の

観察は出来なかった。

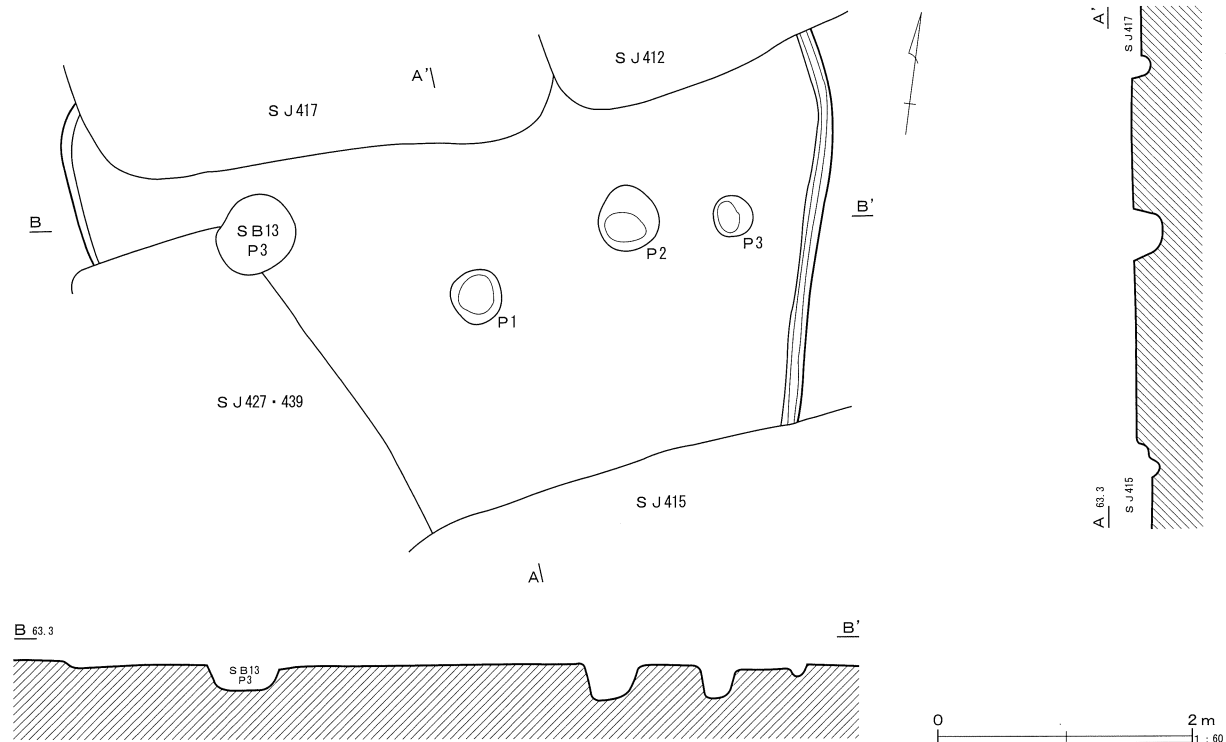
カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁



第192図 第421号住居跡出土遺物

で検出され、幅14~16cm、深さ6~8cmである。ピットは3本検出され、P1~P3の深さは22cm、28cm、24cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が少量出土した。小破片が多く接合はしなかった。
図示可能な遺物は、土師器甕1点のみであった。



第193図 第421号住居跡

第421号住居跡出土遺物観察表 (第192図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師甕		3.4	(9.5)	B E J	普通	橙	20	覆土	内外面磨耗著しい

第423号住居跡 (第194・195図)

H-26・27グリッドに位置する。第414・424号住居跡・第13号掘立柱建物跡に切られ、第419号住居跡を切る。平面形は正方形で、南北4.88m、東西4.85mで、深さは0.03~0.04mと浅い。主軸方位はN-69°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁の状態は不明瞭である。

カマドは東壁に設置される。カマドを挟んで左右の壁がややずれていた。燃烧部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、径94cmの円形で、深さは46cmである。壁溝は検出され

なかった。

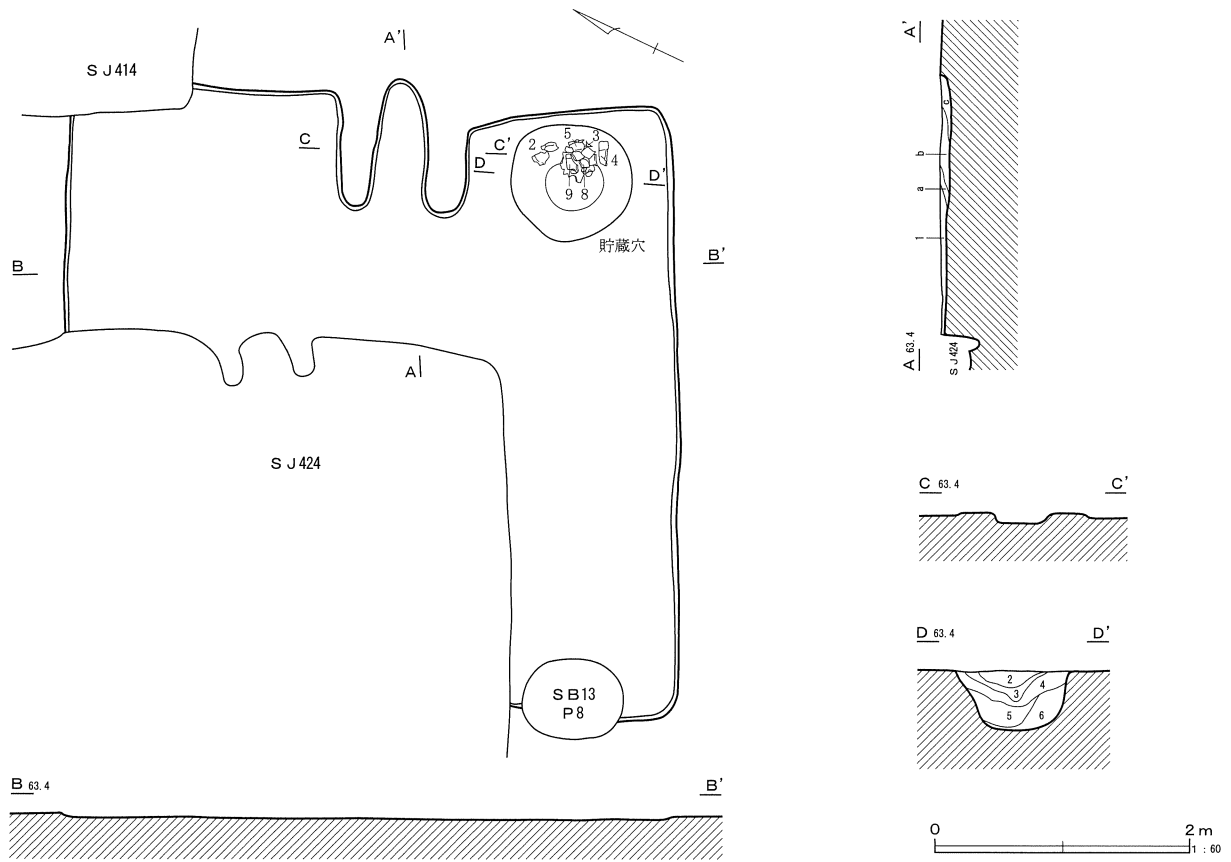
遺物は、覆土・貯蔵穴から土師器坏・甕の破片が少量に出土したが、小破片で、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏3・甕4・甑1・鉢1・手捏ね土器2・ミニチュア1点であった。

1~5・8・9は、貯蔵穴から出土し、他は覆土からの出土である。

11は、底部が長方形となる鉢である。口縁部・胴部の大半を欠損していたため、全体の器形は明らかに出来なかった。底部外面は一定方向にヘラケズリされ、胴部下端部も横方向にヘラケズリされてい

た。

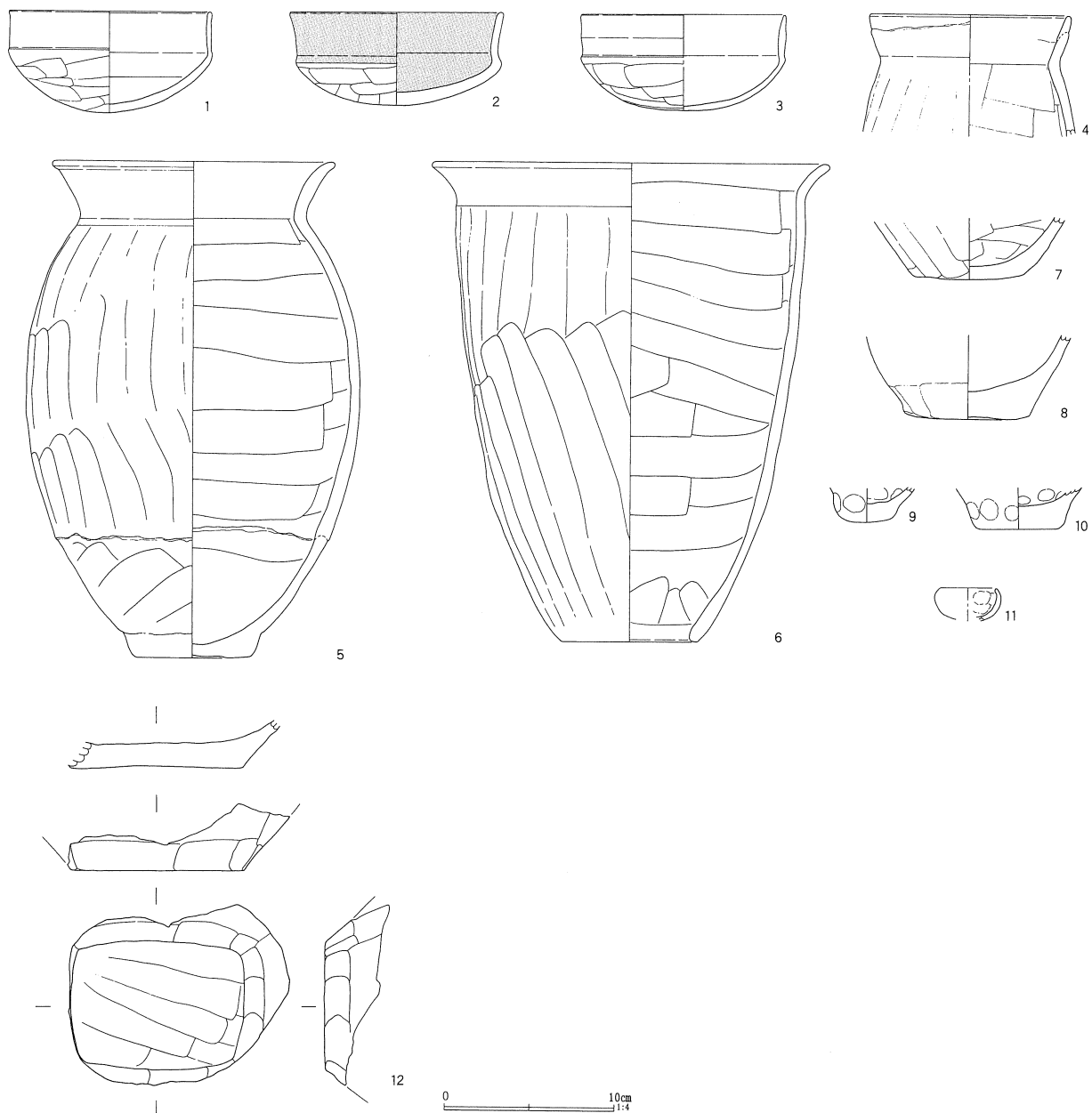


- | | | | | |
|-----------|--------------------|--------------------|--------------------|------------|
| S J 4 2 3 | 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山粒子 焼土粒子 | 6 褐色色 (10YR5/1) | 砂質 炭化粒子 |
| | 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化粒子 | カマド | |
| | 3 黒色 (10YR3/1) | 炭化粒子層 地山ブロック含む | a 赤褐色 (5YR4/8) | 焼土粒子・ブロック多 |
| | 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 炭化粒子 1層に似るが地山ブロック多 | b 暗褐色 (10YR3/3) | 焼土粒子 炭化粒子 |
| | 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質 地山ブロック | c にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 焼土粒子 |

第194図 第423号住居跡

第423号住居跡出土遺物観察表 (第195図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	11.8	6.0		B C E J L	普通	橙	80	貯蔵穴	内外面赤彩 外面磨耗 底部が角の丸い長方形
2	土師坏	12.4	5.6		A B D E F J	良好	明赤褐	70	貯蔵穴	
3	土師坏	(12.0)	5.7		B D E J L	良好	黄橙	40	貯蔵穴	
4	土師甕	(11.7)	7.2		A B G J L	不良	明赤褐	25	貯蔵穴	
5	土師甕	16.6	29.3	6.9	A B D E J L	良好	橙	50	貯蔵穴	
6	土師甌	23.4	28.1	8.0	A B D J L	普通	橙	70	覆土	
7	土師甕		3.7	6.5	B C E J L	普通	明黄褐	60	覆土	
8	土師甕		5.0	7.4	H J L	普通	橙	70	貯蔵穴	
9	手捏ね土器		2.0	3.1	B G	普通	明黄褐	80	貯蔵穴	
10	土師甕		2.4	4.6	A E F G	普通	橙	50	覆土	
11	ミニチュア	(3.4)	1.9		B J	不良	橙	20	覆土	
12	土師鉢			底径10.3cm~7.6cm	B E J	不良	橙	70	覆土	



第195図 第423号住居跡出土遺物

第424号住居跡 (第196・198図)

H-26・27グリッドに位置する。第425号住居跡に切られ、第423号住居跡を切る。中央部から西壁を攪乱で壊される。平面形は正方形に近く、南北4.41 m、東西4.27 m、深さは0.16~0.20 mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。

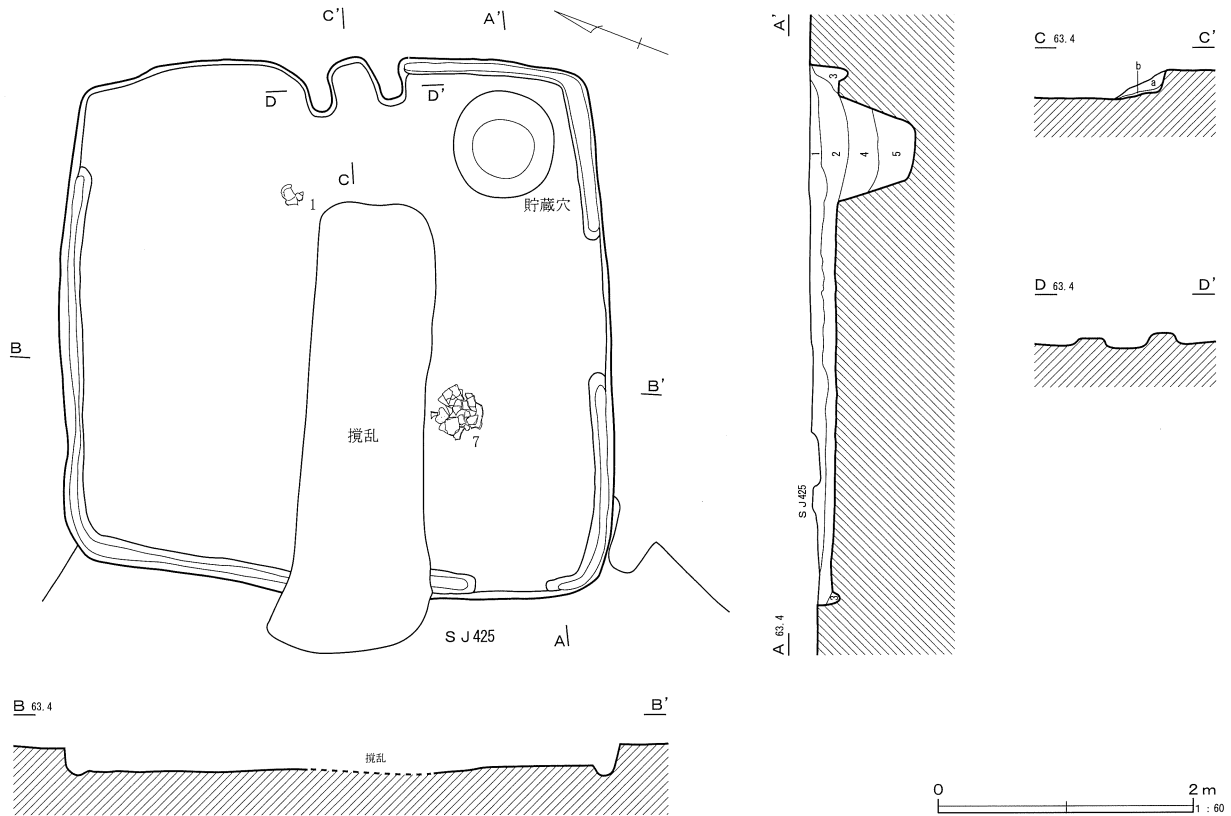
床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは東壁中央に設置される。燃焼部の掘り込

みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、径85cmの円形で、深さは54cmである。壁溝は断続的に検出され、幅12~20cm、深さ4~10cmである。

遺物は、土師器坏・甕の破片が多く出土した。特に甕の胴部片が多かったが、小破片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1・甕4・壺1・甌1点であった。



- | | | | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|----------|------|------------------|-----|---------------|------------|
| S J 4 2 4 | (10YR3/3) | 地山粒子 | 白色パミス状粒子 | 5 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質 | 地山ブロック多 | 炭化粒子 |
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 地山粒子 | 炭化粒子 | 焼土粒子 | カマド | | |
| 2 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 地山粒子 | 炭化粒子 | 焼土粒子 | a | 褐色 (10YR4/4) | 焼土粒子 |
| 3 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 地山粒子多 | 炭化粒子 | 焼土粒子 | b | 暗褐色 (10YR3/3) | 焼土粒子・炭化粒子多 |
| 4 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 地山粒ブロック | 炭化粒子 | | | | |

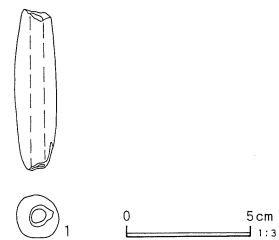
第196図 第424号住居跡

第424号住居跡出土遺物観察表 (第198図)

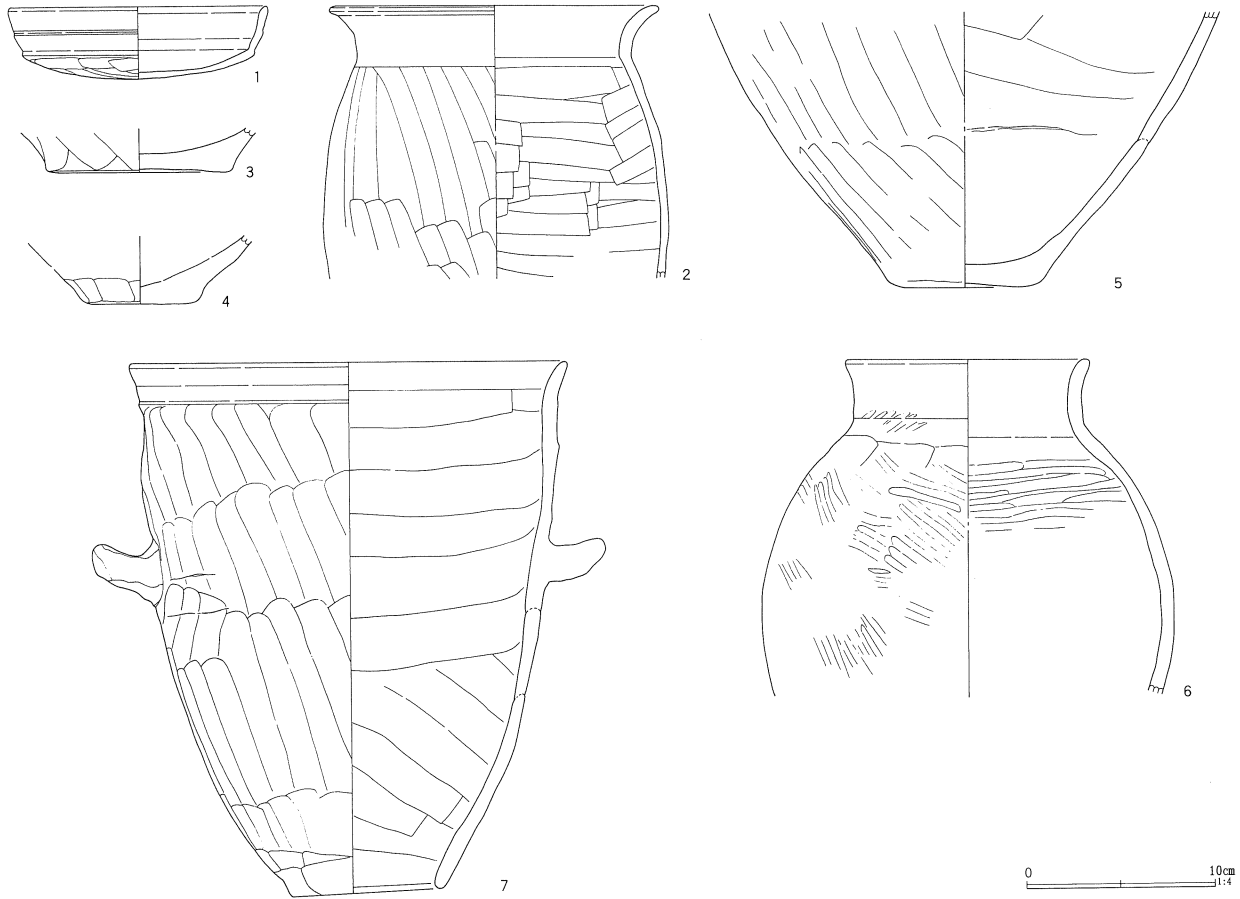
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	13.5	3.8		B G J	普通	にぶい褐	90	+6.3cm	
2	土師甕	(16.9)	14.5		A B J	良好	明赤褐	25	貯蔵穴	
3	土師甕		2.3	9.7	B E J L	良好	明赤褐	95	覆土	
4	土師甕		3.6	5.8	B E L	不良	橙	70	覆土	
5	土師甕		14.5	(8.0)	A B E J	良好	にぶい黄橙	40	貯蔵穴	
6	土師壺	(12.7)	17.7		A B D E F J	良好	にぶい黄橙	40	覆土	
7	土師甗	23.0	28.1	8.0	A B E H J L	良好	橙	80	床	

第425号住居跡 (第197・199図)

H-26グリッドに位置する。第419・424・426号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。2箇所の大きな攪乱とグリッドピットに壊されていた。平面形は正方形で、南北5.66m、東西5.41m、深さは0.07~0.12mである。主軸方位はN-69°-Eを指す。



第197図 第425号住居跡出土遺物



第198図 第424号住居跡出土遺物

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

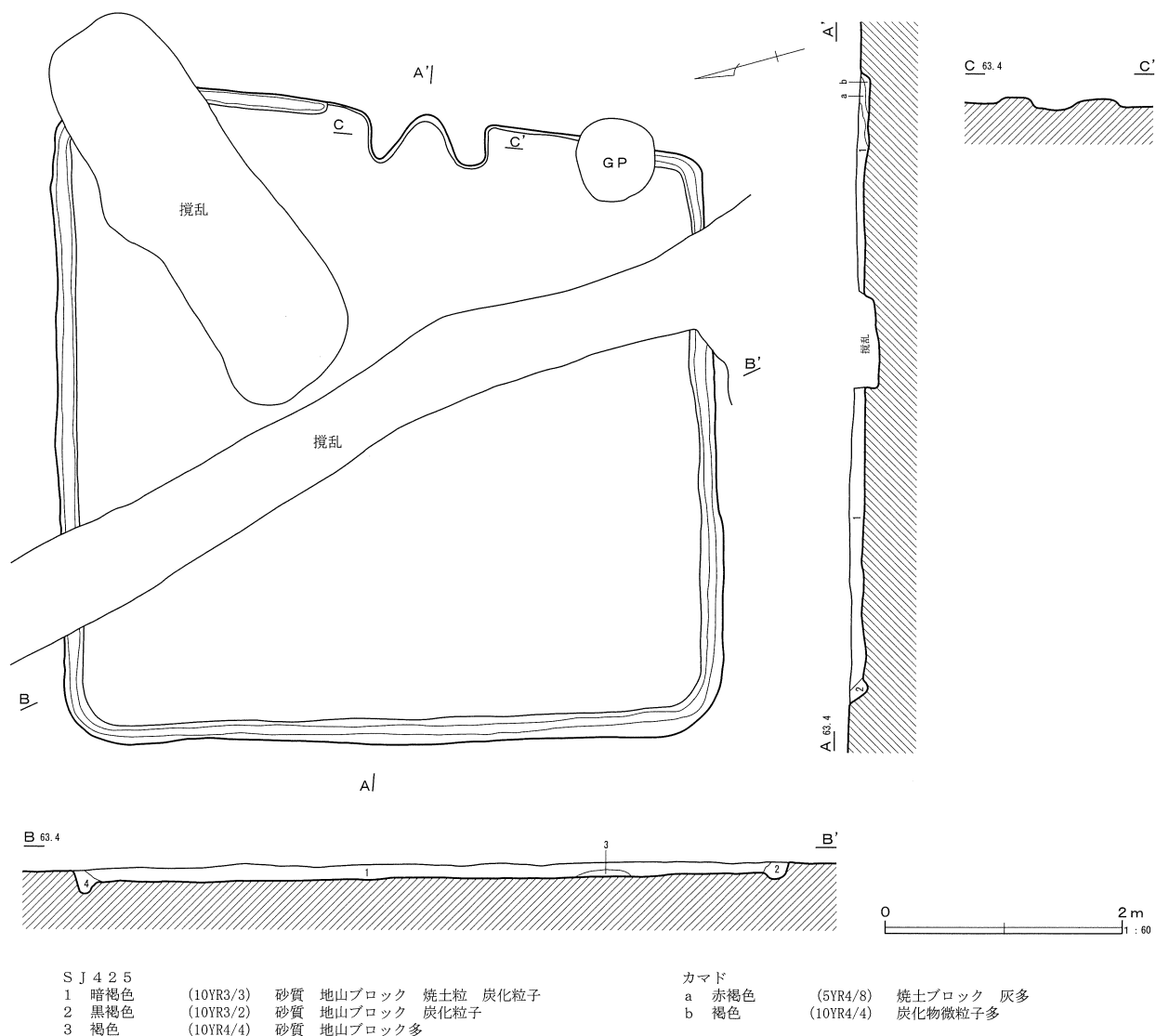
カマドは東壁に設置される。燃烧部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝はほぼ全周し、幅14~22cm、深さ4~12cmであ

る。

遺物は、土師器坏・甕の破片が少量出土した。坏では、有段口縁坏の破片が含まれていたが、図示可能な遺物は土錘1点のみであった。

第425号住居跡出土土錘観察表（第197図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	6.30	1.80	0.65	15.45	B a IV	A	明赤褐	95	



第199図 第425号住居跡

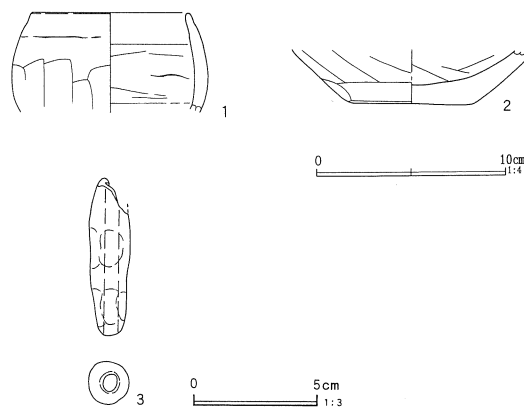
第426号住居跡 (第200・201図)

G・H-26グリッドに位置する。第425号住居跡と重複し、本住居跡が古い。中央部を南北に攪乱で壊される。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.50m、短軸3.84m、深さは0.08~0.10mである。主軸方位はN-69°-Wを指す。

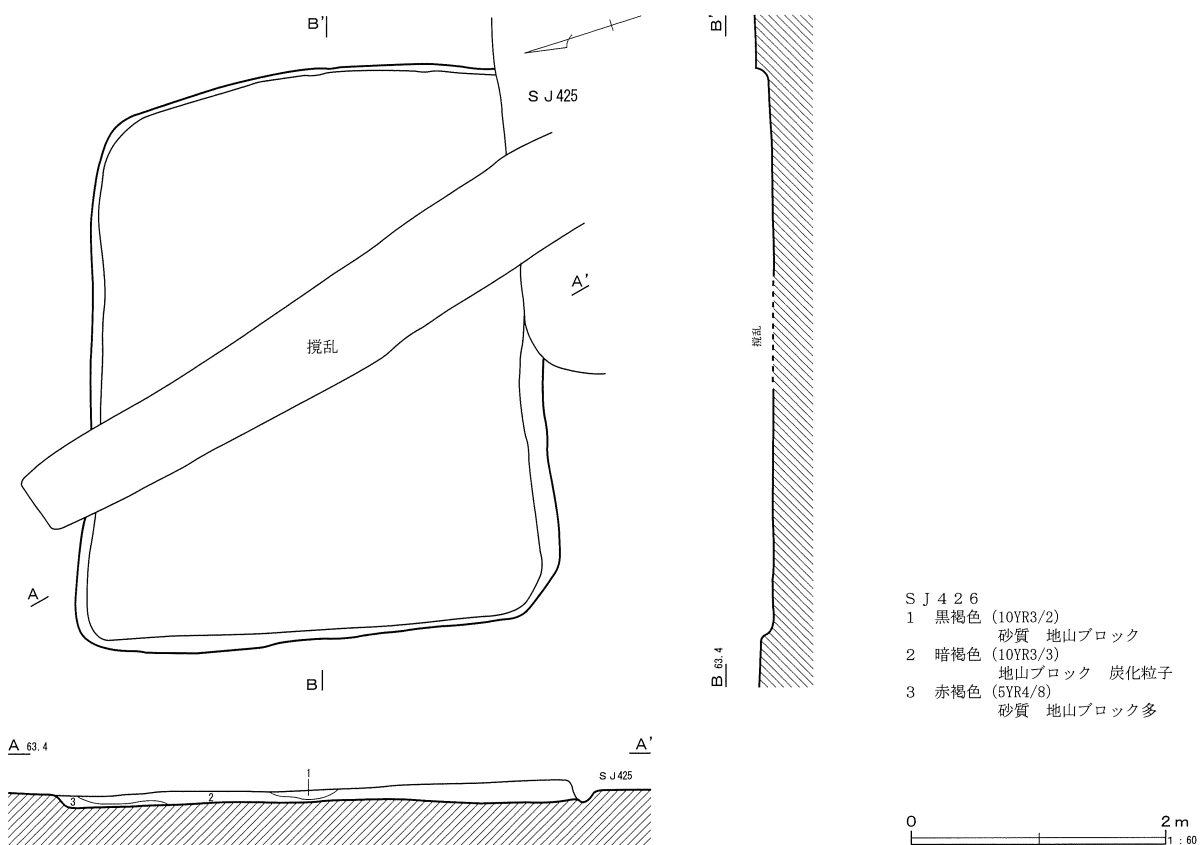
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は、覆土から、土師器坏・甕の破片が出土したが、図示可能な遺物は、土師器碗1・壺1、土錘

1点であった。



第200図 第426号住居跡出土遺物



第201図 第426号住居跡

第426号住居跡出土遺物観察表（第200図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師碗	(8.2)	5.3		A C F J	普通	浅黄橙	25	覆土	
2	土師壺		2.8	(6.8)	B E G H J	良好	橙	25	覆土	

第426号住居跡出土土錘観察表（第200図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	6.20	1.70	0.70	12.83	B a IV	B	にぶい黄橙	95	

第427号住居跡（第202・203図）

I-27グリッドに位置する。西及び南側を第422・428号住居跡・第13号掘立柱建物跡に切られ、第439・440号住居跡を切る。検出された規模は、南北4.54m、東西2.24mで、深さは0.05～0.10mと浅い。主軸方位はN-27°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁の状態は不明瞭である。

カマドは北壁に設置される。燃烧部の掘り込みは10cm弱で急激に立ち上がる。最下層に灰層が見られ

た。貯蔵穴はカマド右に設けられ、72×56cmの楕円形で、深さは18cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは6本検出され、P1～P6の深さは61cm、39cm、35cm、22cm、37cm、19cmである。P4から西に深さ7cmの溝が検出された。

遺物は、土師器坏・甕の破片が多量に出土した。特にカマド及び貯蔵穴の周囲からの出土が多い。

図示可能な遺物として、土師器坏9・高坏1・鉢3・甕4・壺1、土錘7点が出土した。

9はいわゆる比企型坏で、口縁部外面と、内面に赤彩されていた。

第439号住居跡（第202・204図）

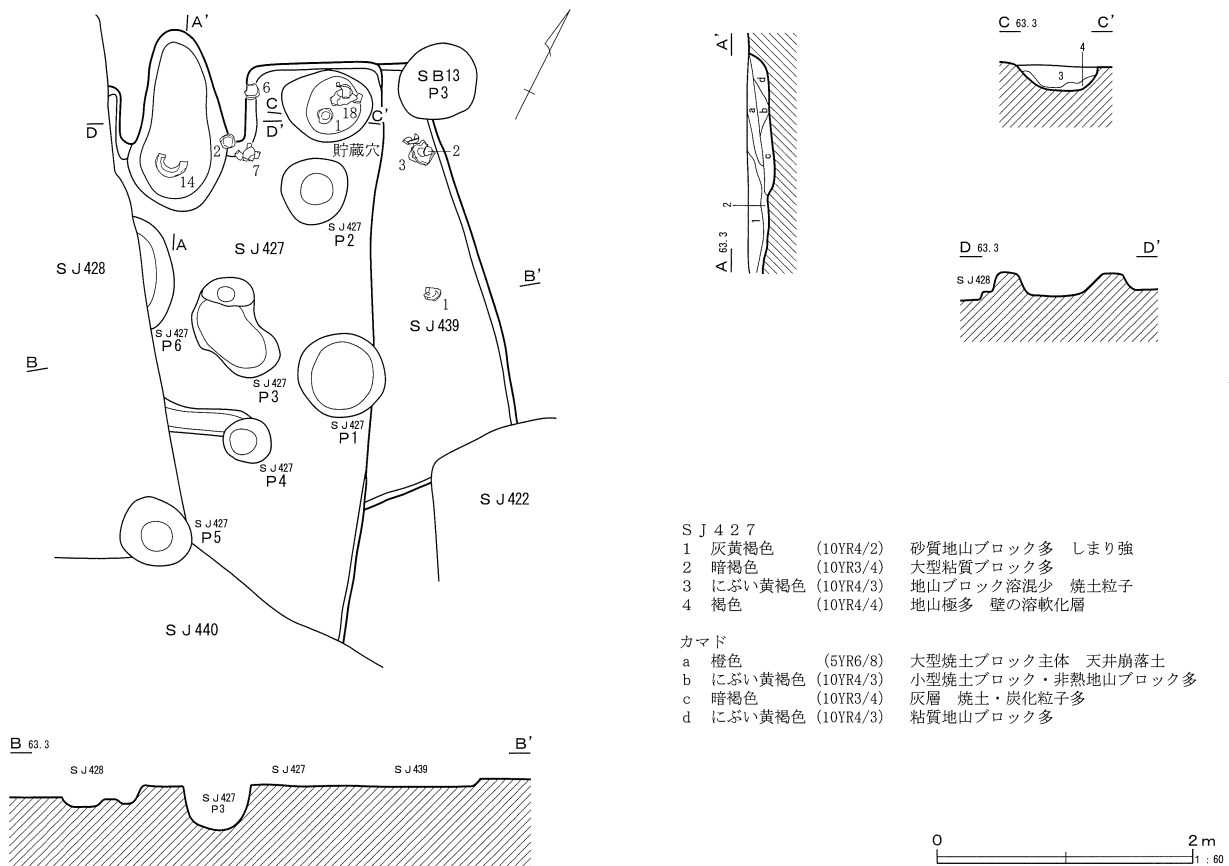
I-27グリッドに位置する。第422・427号住居跡・第13号掘立柱建物跡に切られ、第421号住居跡を切る。東壁と南壁の一部を検出したのみである。検出された規模は、南北3.16m、東西1.37mである。深

さは0.08m前後で、第427号住居跡とほとんど同じである。主軸方位は東壁でN-44°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は開きながら立ちあがる。覆土の観察は出来なかった。カマド、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕類の破片が少量出土した。何れも小片で殆ど接合しなかった。

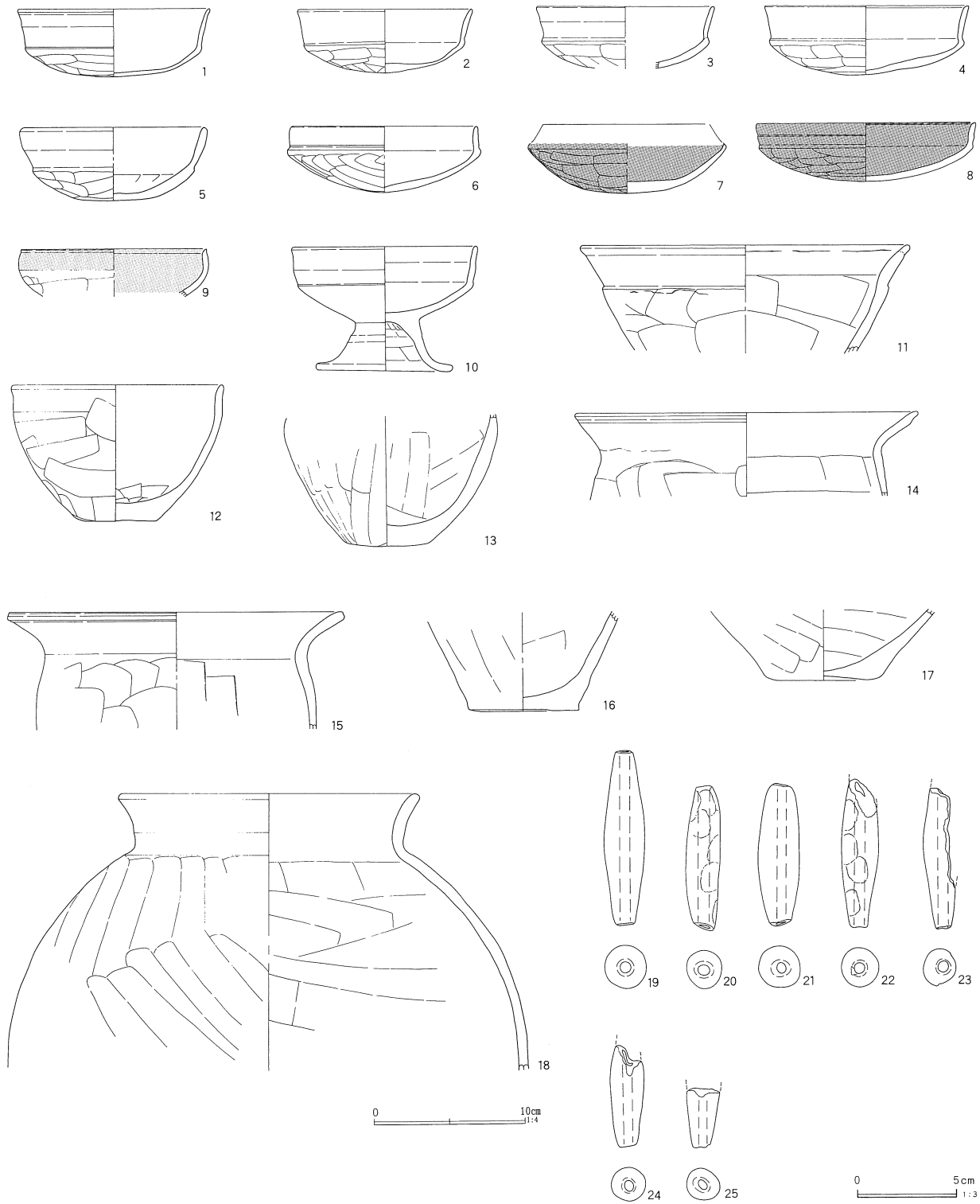
図示可能な遺物は、土師器坏2・壺1点であった。



第202図 第427・439号住居跡

第427号住居跡出土遺物観察表（第203図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.7	4.5		B E F J	良好	橙	100	貯蔵穴	
2	土師坏	11.5	4.2		B E F J	良好	橙	95	床	
3	土師坏	11.7	4.1		B E F L	良好	明赤褐	60	貯蔵穴	磨耗する
4	土師坏	13.4	4.6		B D E F J	良好	にぶい橙	90	覆土	
5	土師坏	(12.0)	4.8		A B D E F L	良好	橙	40	貯蔵穴	
6	土師坏	12.2	4.4		B D E J	良好	浅黄橙	60	-7.6cm	
7	土師坏		3.3		A B F	良好	にぶい赤褐	40	床	内外面黒色処理
8	土師坏	14.5	3.9		B E	良好	黒	60	覆土	内外面黒色処理
9	土師坏	(12.2)	3.1		B E F I J	良好	黒褐	10	覆土	内外面赤彩
10	土師高坏	12.2	8.2	8.9	B D E F J L	良好	明赤褐	70	貯蔵穴	



第203図 第427号住居跡出土遺物

第427号住居跡出土遺物観察表 (第203図)

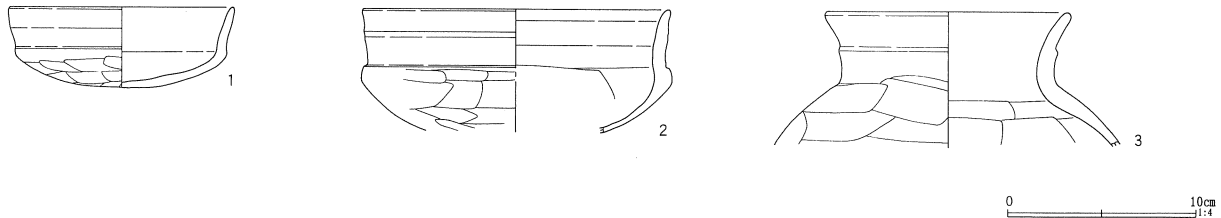
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
11	土師鉢	(21.6)	7.1		BDEGJL	良好	橙	15	覆土	
12	土師鉢	13.9	8.9	5.4	BDEFGJ	良好	橙	60	貯蔵穴	
13	土師鉢		8.6	5.6	BDEF	良好	橙	40	覆土	

第427号住居跡出土遺物観察表（第203図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
14	土師甕	22.5	5.5		ABEGJL	良好	明赤褐	55	カマド	刷毛状工具によるナデ 内面黒色 外面磨耗
15	土師甕	(22.0)	7.7		BEGJ	良好	にぶい褐	30	カマド	
16	土師甕		6.5	(7.3)	ABCGJL	普通	橙	30	覆土	
17	土師甕		4.6	7.7	BJL	普通	橙	60	覆土	
18	土師壺	(19.5)	18.1		ABEGHJL	良好	明赤褐	30	貯蔵穴	

第427号住居跡出土土錘観察表（第203図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
19	8.60	2.10	0.55	28.72	Ca I	C	灰黄褐	100	
20	7.10	1.90	0.60	19.17	Ba III	A	浅黄橙	100	
21	7.00	2.20	0.50	25.98	Ba III	A	黒褐	100	
22	(7.30)	1.90	0.55	20.82	Ca III	A	橙	90	
23	(6.90)	1.80	0.55	12.21	Ba II	A	にぶい褐	55	
24	(5.00)	1.65	0.50	11.98	Ca IV	C	にぶい黄橙	70	
25	(2.90)	1.70	0.50	6.08	—	C	にぶい橙	30	



第204図 第439号住居跡出土遺物

第439号住居跡出土遺物観察表（第204図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	11.8	4.3		EGJ	普通	橙	70	床	全体磨耗著しい
2	土師坏	(16.4)	6.5		BEG	良好	にぶい黄褐	15	-9cm	
3	土師壺	13.0	7.0		BEG	良好	橙	70	+3.4cm	

第428号住居跡（第205・206図）

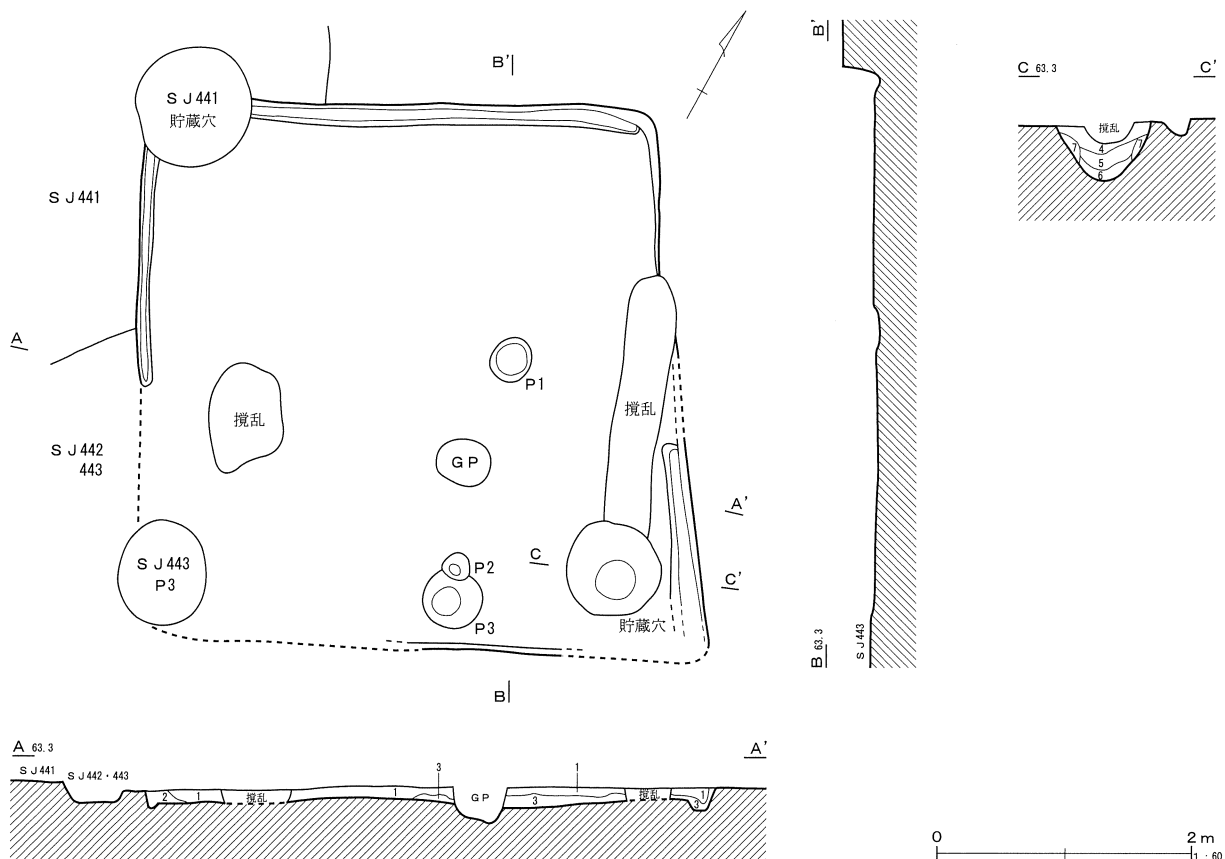
I-27グリッドに位置する。第441・442・443号住居跡に切られ、第427・440号住居跡を切る。周辺の住居跡と同時に調査したため一部検出できなかった壁や、攪乱、グリッドピットに壊された部分も見られた。平面形はやや歪んだ正方形で、南北4.32m、東西4.16m、深さは0.20~0.25mである。主軸方位は北壁でN-30°-Wを指す。

床面は起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは検出されなかった。貯蔵穴は東コーナーに設けられ、径74cmの円形で、深さは43cmである。壁溝は南東壁以外で検出され、幅8~20cm、深さ24~29cmである。ピットは3本検出され、P1~P3の深さは5cm、13cm、29cmである。

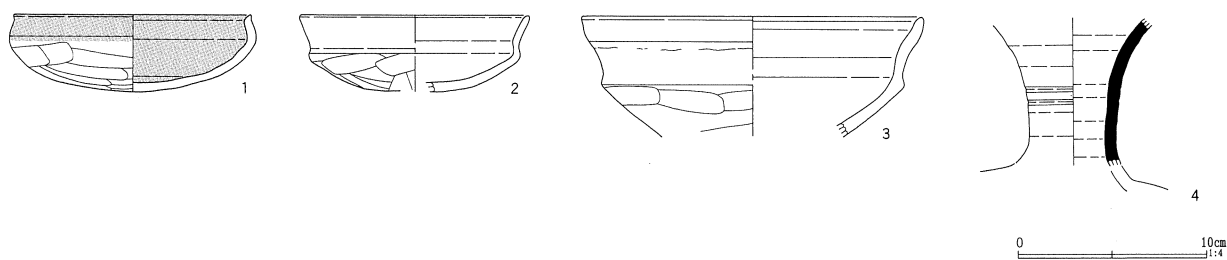
遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、磨滅が著しく、接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏3、須恵器長頸瓶（平瓶）1点であった。



- | | | | | |
|-----------|--------------------|---------------------|--------------------|----------------|
| S J 4 2 8 | 1 暗褐色 (10YR3/3) | 砂質 地山ブロック 焼土粒子 炭化粒子 | 4 暗褐色 (10YR3/3) | 砂質 地山ブロック 焼土粒子 |
| | 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 1層に似るが地山主体 | 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質 地山ブロック極多 |
| | 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質 地山ブロック主体 | 6 灰黄褐色 (10YR4/2) | 粘質地山極多 |
| | | | 7 暗褐色 (10YR3/4) | 地山土極多 壁の溶軟化層 |

第205図 第428号住居跡



第206図 第428号住居跡出土遺物

第428号住居跡出土遺物観察表 (第206図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師杯	12.4	4.1		ABC G I J L	良好	橙	80	覆土	内外面赤彩
2	土師杯	(12.0)	4.0		B E G	良好	にぶい黄橙	25	覆土	
3	土師杯	(18.0)	6.4		B E G J	普通	にぶい黄褐	30	覆土	
4	須恵長頸瓶		7.7		A B E J	良好	灰	80	覆土	末野産

第430号住居跡（第207・208図）

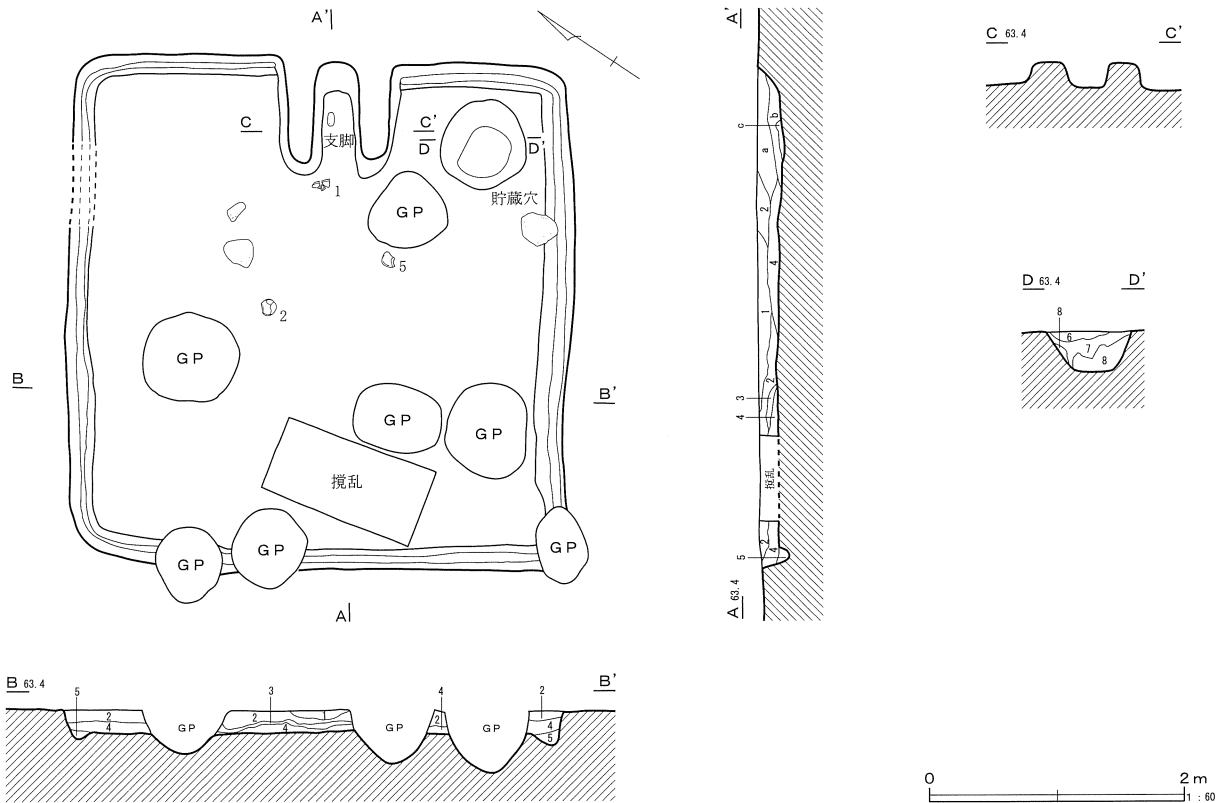
H-25グリッドに位置する。第433号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。部分的に攪乱やグリッドピットに壊される。平面形は正方形で、北東から南西が4.09m、北西から南東が4.06mで、深さは0.10~0.20mである。主軸方位はN-57°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち

あがる。

カマドは北東壁中央に設置される。燃烧部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴はカマド右に設けられ、径70cmの歪んだ円形で、深さは30cmである。壁溝は全周し、幅14~26cm、深さ1~2cmである。

遺物は、覆土及びカマド周辺から土師器坏・甕の



- S J 4 3 0
- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 炭化粒子層状に混入
 - 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 1層に似るが粘性高い
 - 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 炭化粒子多
 - 4 黄褐色 (10YR5/6) 地山土主体
 - 5 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子
 - 6 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子多

- 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子・地山ブロック多
- 8 褐色 (10YR4/6) 地山ブロック主体 炭化粒子・焼土少

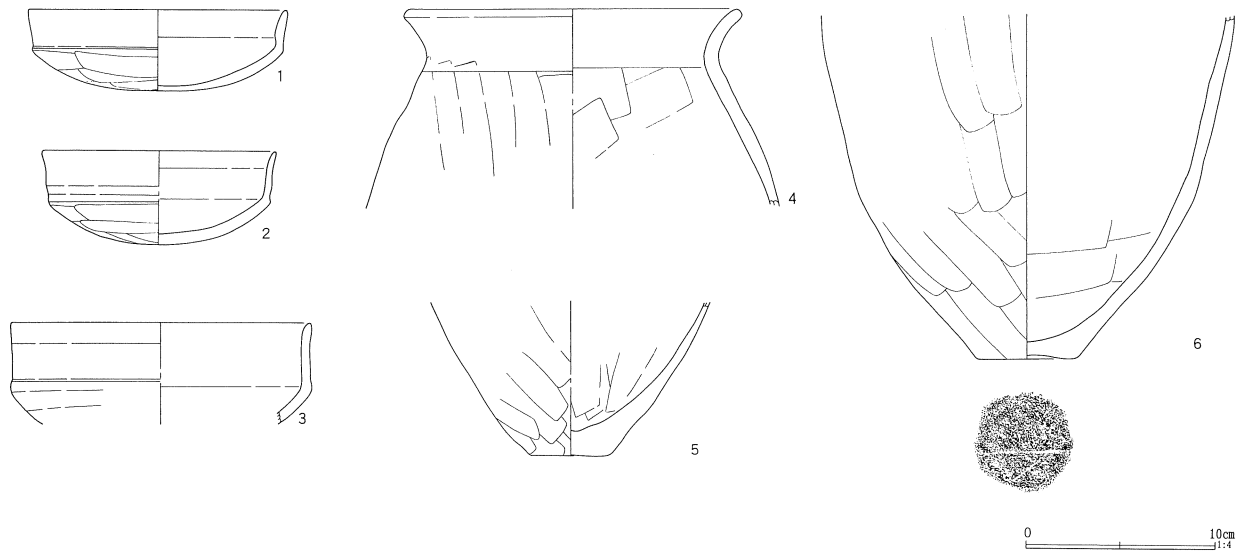
- カマド
- a 褐灰色 (10YR5/1) 炭化粒子 焼土 鉄分多
 - b 灰黄褐色 (10YR5/2) 焼土多 天井崩落土
 - c にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土 粘性強

第207図 第430号住居跡

第430号住居跡出土遺物観察表（第208図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	13.6	4.3		B E F J L	良好	にぶい褐	90	+4cm	
2	土師坏	12.4	4.9		B D F J L	良好	明赤褐	70	+3cm	
3	土師坏	(15.9)	5.3		D E F J L	良好	明赤褐	20	B・D区	
4	土師甕	(17.4)	10.5		A B E G J	普通	にぶい黄褐	30	B区	
5	土師甕		8.2	3.0	A B E F J L	良好	灰黄褐	30	床	
6	土師甕		18.2	5.0	A E J	普通	黒褐	30	A区	底部木葉痕?

破片が多量に出土したが、甕の胴部の小片が多く、図示可能な遺物は、土師器環3・甕3点であった。接合しなかった。



第208図 第430号住居跡出土遺物

第431号住居跡 (第209・210図)

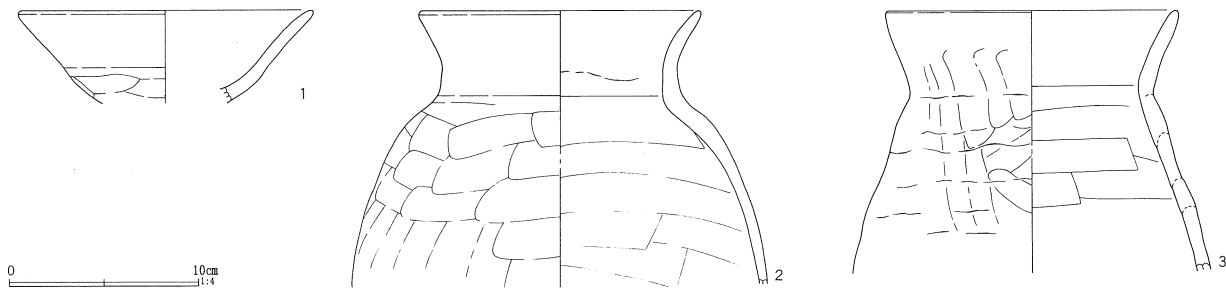
H-25・26グリッドに位置する。南側を第447号住居跡に切られ、南北に溝状の攪乱に壊される。平面形は南北にやや長い長方形で、東西3.50m、南北は4.0m前後と思われる。深さは0.08~0.20mである。主軸方位はN-75°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁に設置される。燃烧部の掘り込みは浅く急激に立ち上がる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西壁で検出され、幅10~20cm、深さ6~8cmである。

遺物は、覆土から土師器環・甕の破片が多く出土したが、磨滅が著しく、接合しなかった。

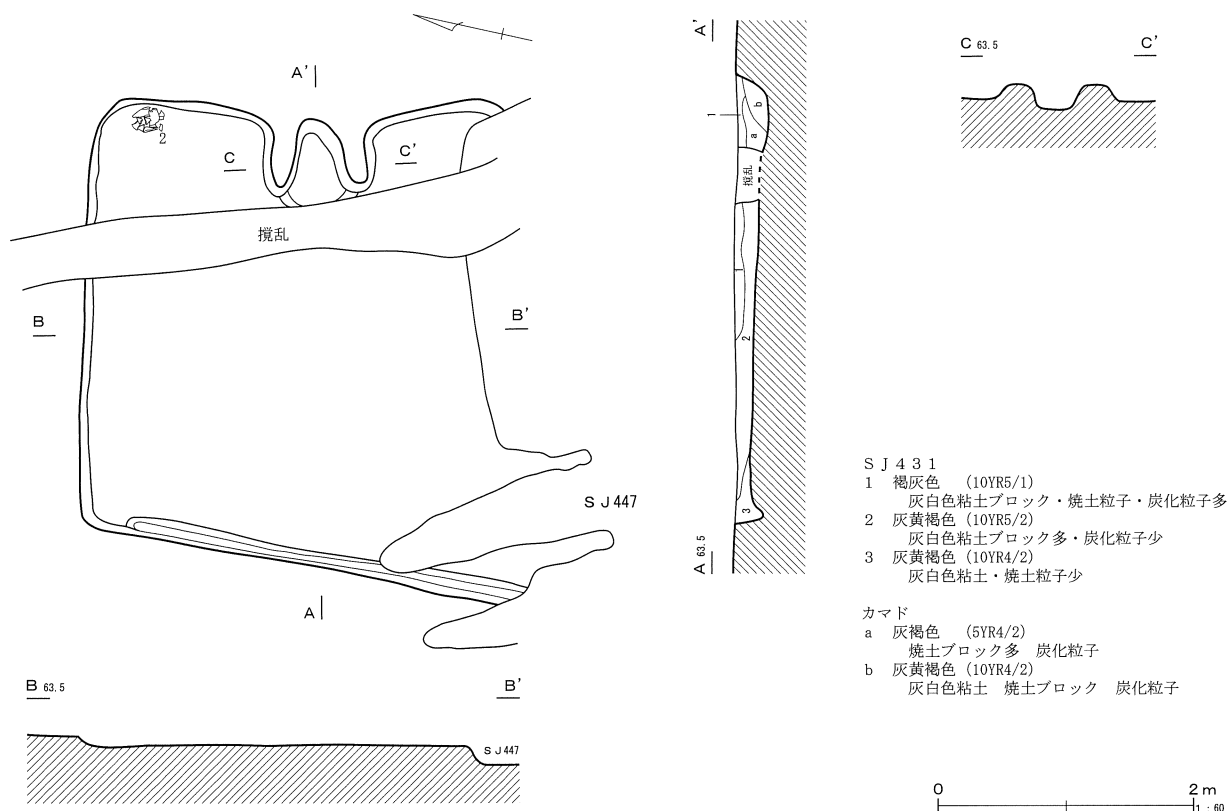
図示可能な遺物は、土師器環1・甕2点であった。



第209図 第431号住居跡出土遺物

第431号住居跡出土遺物観察表 (第209図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	15.6	4.9		BEG	普通	明赤褐	60	覆土	
2	土師甕	(14.8)	14.6		BEG	普通	明赤褐	40	床	
3	土師甕	(15.4)	13.9		BEG	普通	にぶい黄橙	20	カマド	輪積痕明瞭



第210図 第431号住居跡

第432号住居跡 (第211・212図)

H・I-26グリッドに位置する。第441・447号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。東壁を攪乱に壊されていた。平面形は正方形で、南北4.10m、東西も4.1m前後になると思われる。深さは0.12~0.20mである。主軸方位はN-72°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁に設置される。燃烧部は攪乱で壊されていた。煙道部には段があり、先端は浅いピット

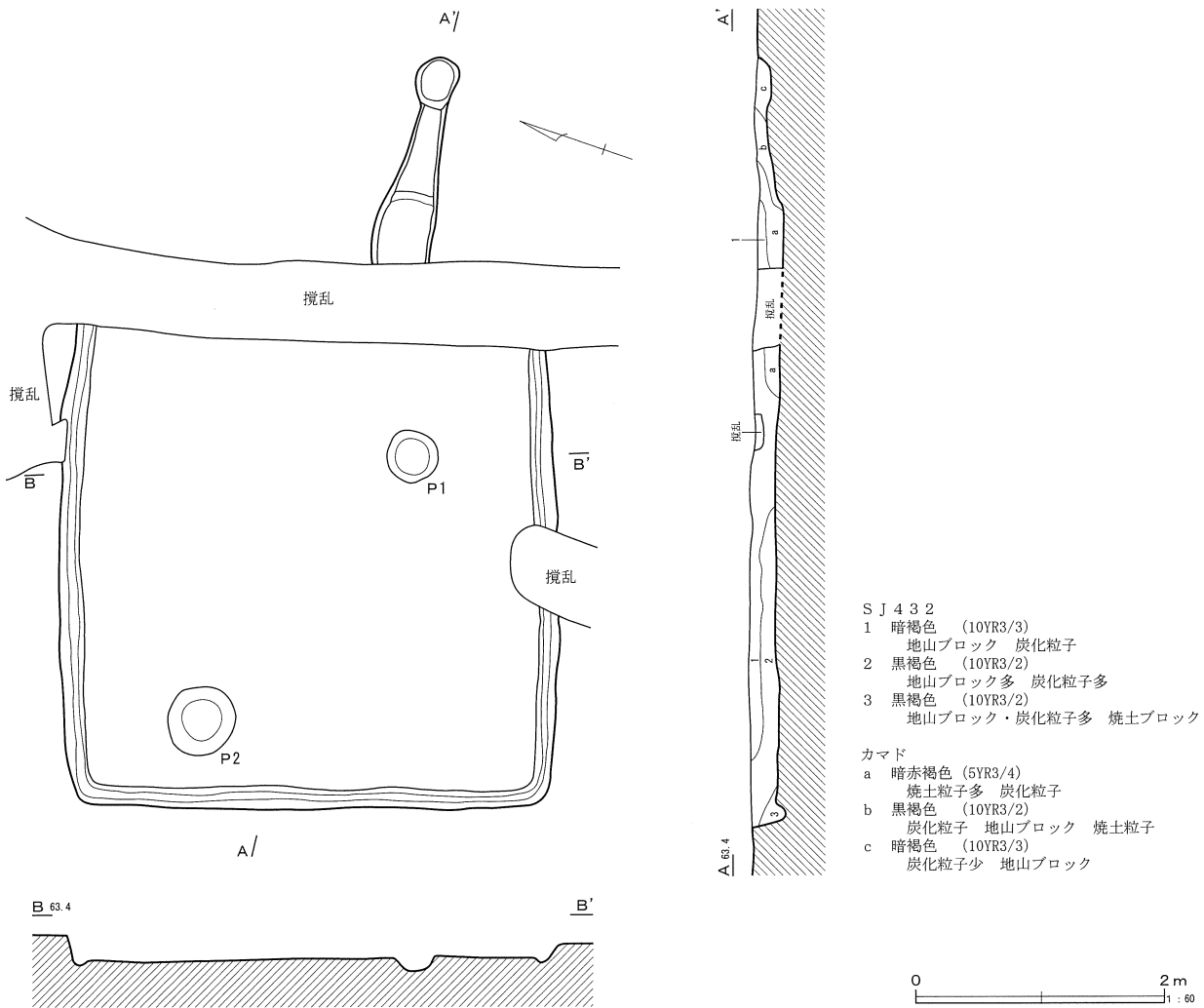
状になっていた。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は全周するようで、幅14~20cm、深さ3~7cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは11cm、24cmである。

遺物は、主に覆土から土師器・須恵器の破片が多く出土した。特に土師器甕の胴部片が多かったが、小片で、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏4・甕1、須恵器甕1点であった。

第432号住居跡出土遺物観察表 (第212図)

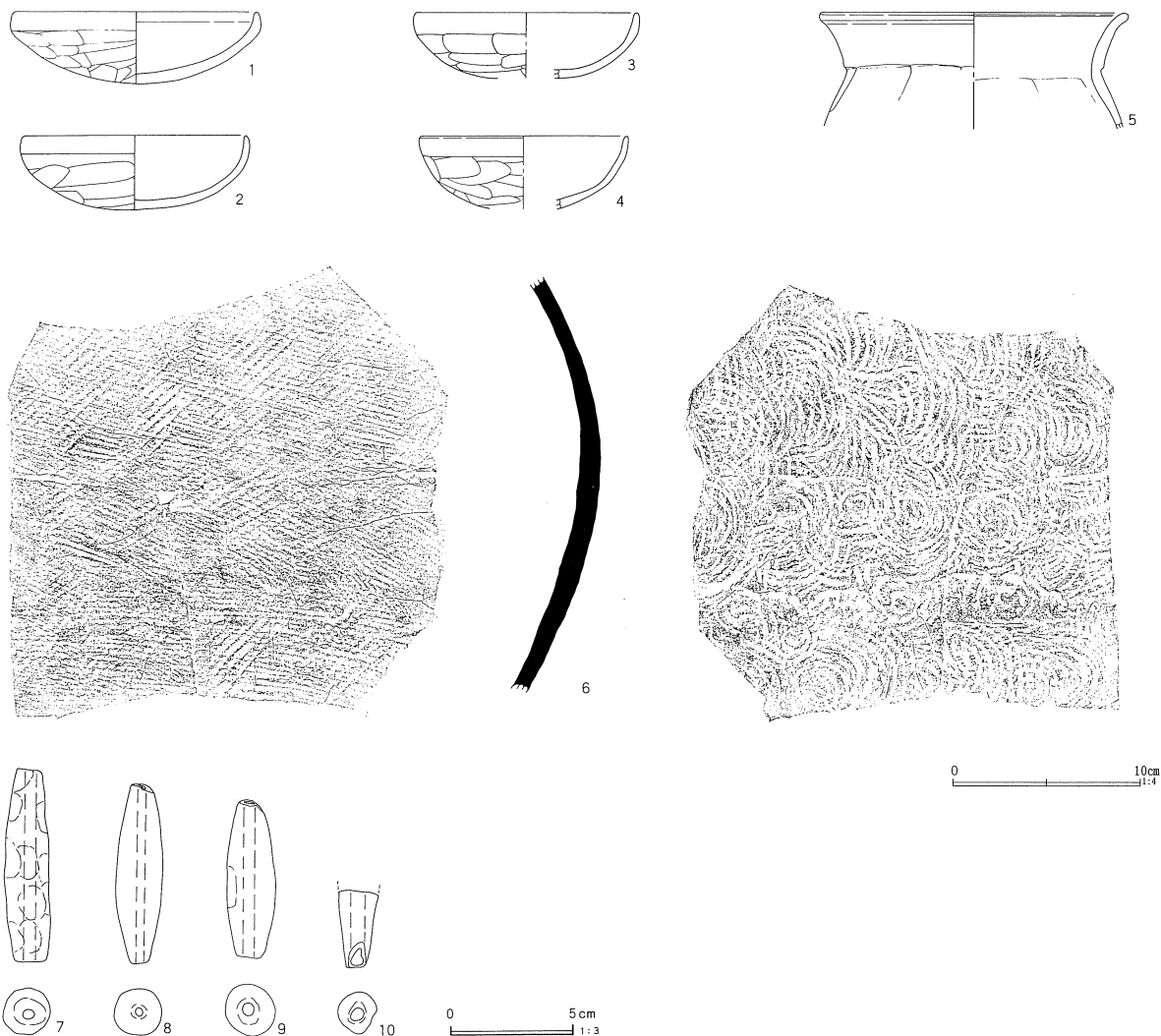
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	13.0	3.8		E J	普通	明赤褐	70	覆土	末野産
2	土師坏	11.9	3.9		B D F G	普通	橙	70	覆土	
3	土師坏	(11.8)	3.5		A B D G	良好	橙	20	覆土	
4	土師坏	(11.1)	3.9		A B D G	普通	橙	30	覆土	
5	土師甕	(16.2)	6.1		B D E G J L	普通	赤褐	30	カマド	
6	須恵甕				A J	不良	褐灰		覆土	



第211図 第432号住居跡

第432号住居跡出土土錘観察表 (第212図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
7	7.70	1.85	0.45	24.52	B b II	C	橙	100	
8	7.15	1.95	0.35	23.37	B b III	A	にぶい黄橙	100	
9	6.30	2.10	0.50	21.93	B b IV	A	明褐	100	
10	(3.10)	1.70	0.60	5.26	—	A	橙	—	



第212図 第432号住居跡出土遺物

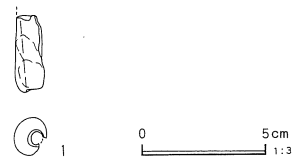
第433号住居跡（第213・214図）

H-25グリッドに位置する。第430号住居跡・第255号土坑と重複し、本住居跡が古い。多くのグリッドピットに壊されていた。平面形はやや歪んだ正方形で、東西5.48m、南北5.40mで、深さは0～0.02mと極めて浅い。主軸方位はN-67°-Eを指す。

床面はやや起伏があり、壁の状態は不明瞭である。

覆土の観察は出来なかった。

カマドは東壁に設置される。燃烧部は10cm程掘り



第213図 第433号住居跡出土遺物

第433号住居跡出土土錘観察表（第213図）

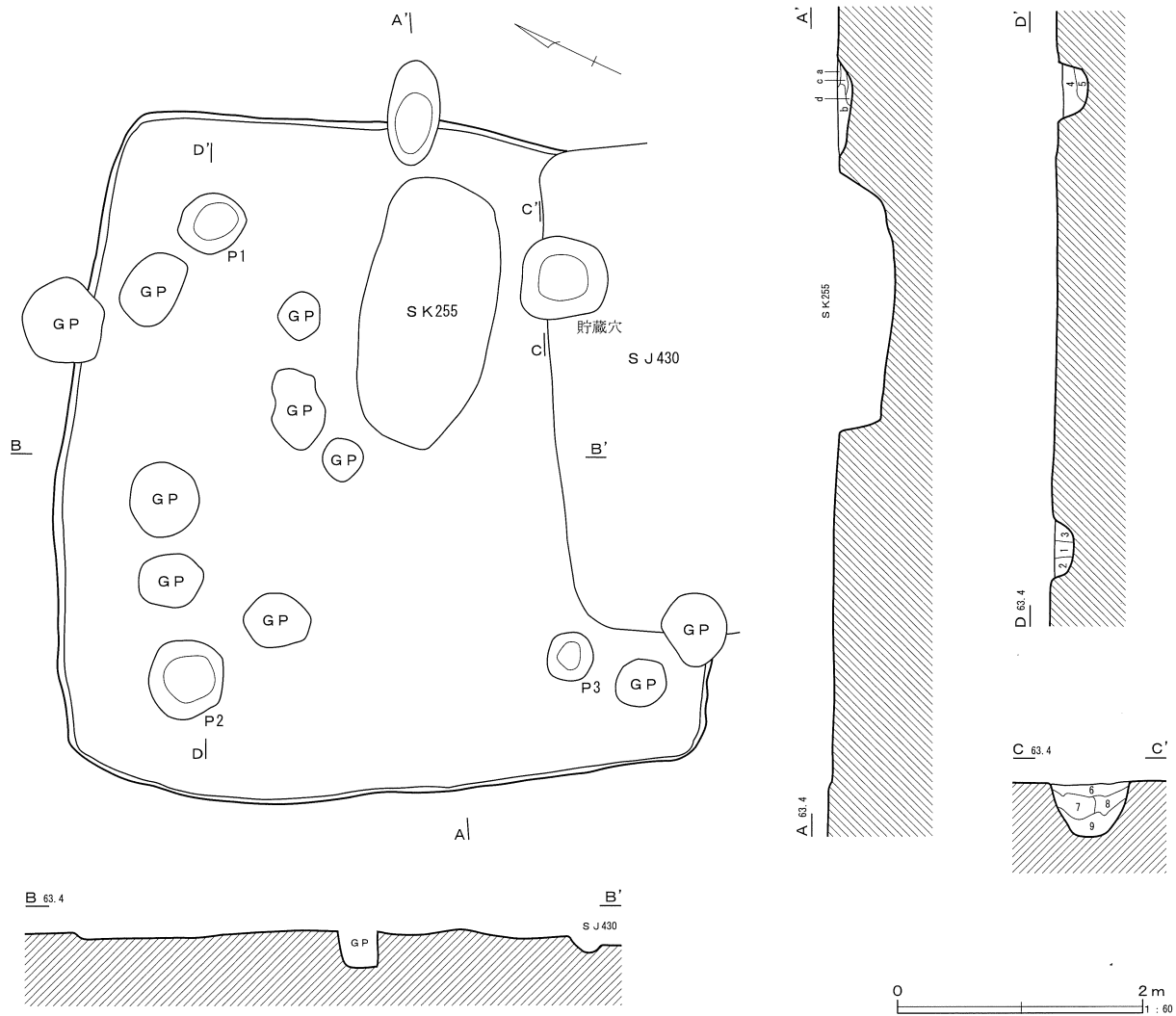
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	(3.10)	1.50	0.50	3.81	—	C	明赤褐	20	

込み緩やかに立ち上がる。貯蔵穴はカマド右のやや離れたところに設けられ、78×76cmの隅丸方形で、深さは42cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは24cm、18cm

である。

遺物は、土師器の小片が少量出土したが、磨滅が著しく、器種不明のものが多かった。

図示可能な遺物は土錘1点であった。



S J 4 3 3

- | | | | |
|---|------------------|----------|-----|
| 1 | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 炭化粒子少 | 柱痕 |
| 2 | 黄褐色 (10YR5/6) | 炭化粒子少 | |
| 3 | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 炭化粒子少 | 鉄分多 |
| 4 | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 炭化粒子・焼土少 | |
| 5 | 黄褐色 (10YR5/6) | 地山土主体 | |
| 6 | 褐色 (10YR4/6) | 炭化粒子・焼土少 | |
| 7 | 黄褐色 (10YR5/6) | 地山ブロック多 | 焼土 |

- | | | |
|---|----------------|---------------|
| 8 | 褐色 (10YR4/6) | 1層に似るが地山ブロック多 |
| 9 | 灰黄褐色 (10YR5/2) | 粘土質シルト層 粘性有り |

カマド

- | | | |
|---|---------------|----------------|
| a | 褐色 (7.5YR4/6) | 焼土多 天井崩落土 |
| b | 黄褐色 (10YR5/6) | 焼土多 炭化粒子 天井崩落土 |
| c | 黄褐色 (10YR5/6) | 炭化粒子 焼土少 |
| d | 褐色 (10YR4/4) | 焼土 粘性高 |

第214図 第433号住居跡

第434号住居跡（第215・216図）

G・H-24グリッドに位置する。第435号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は東西に長い長方形で、長軸3.76m、短軸2.70m、深さは0.07~0.15mである。主軸方位はN-77°-Eを指す。

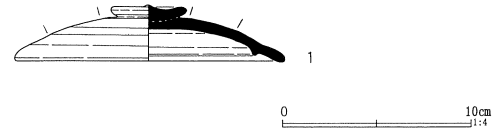
床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央よりやや南寄りに設置される。燃焼部は10cm程掘り込み急激に立ち上がる。燃焼部手前でやや大型の自然石が出土した。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

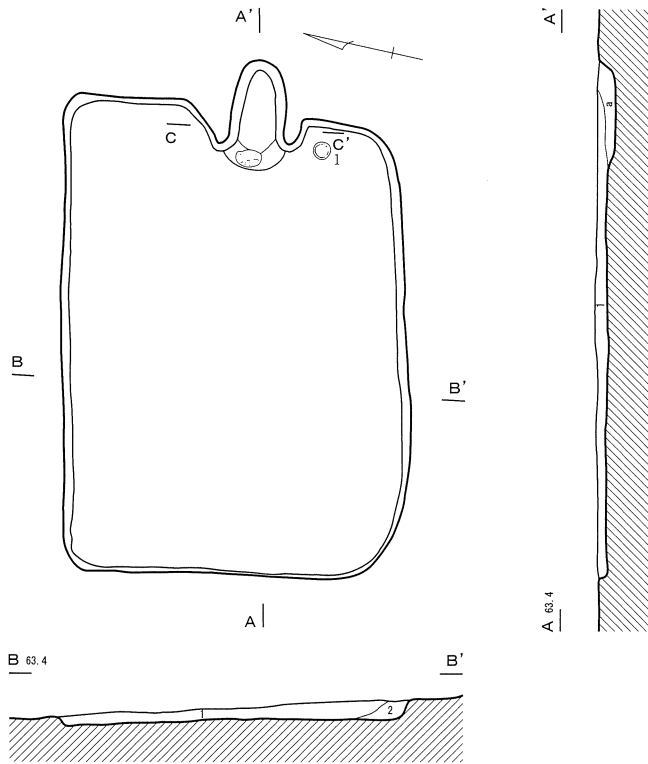
遺物は、土師器・須恵器の破片が少量出土した。土師器は坏・甕、須恵器は蓋・甕の破片が出土したが、小片が多く接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器蓋1点であった。

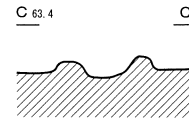
1は末野産のかえりを有する須恵器蓋である。完形品である。カマド右脇で出土した。



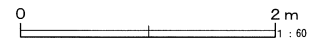
第215図 第434号住居跡出土遺物



第216図 第434号住居跡



- S J 4 3 4
 1 暗褐色 (10YR3/3) 砂質 焼土粒子僅か 地山ブロック
 2 褐色 (10YR4/4) 砂質 地山ブロック多
 カマド
 a 黒褐色 (10YR3/2) 焼土ブロック・炭化粒子多



第434号住居跡出土遺物観察表（第215図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵蓋	14.0	3.0		BHJL	良好	暗灰	100	床	末野産 天井部回転ヘラケズリ

第435号住居跡 (第217・218図)

H-24グリッドに位置する。北壁の一部を第434号住居跡に切られる。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.53m、短軸3.96m、深さは0.05~0.12mである。主軸方位はN-103°-Wを指す。

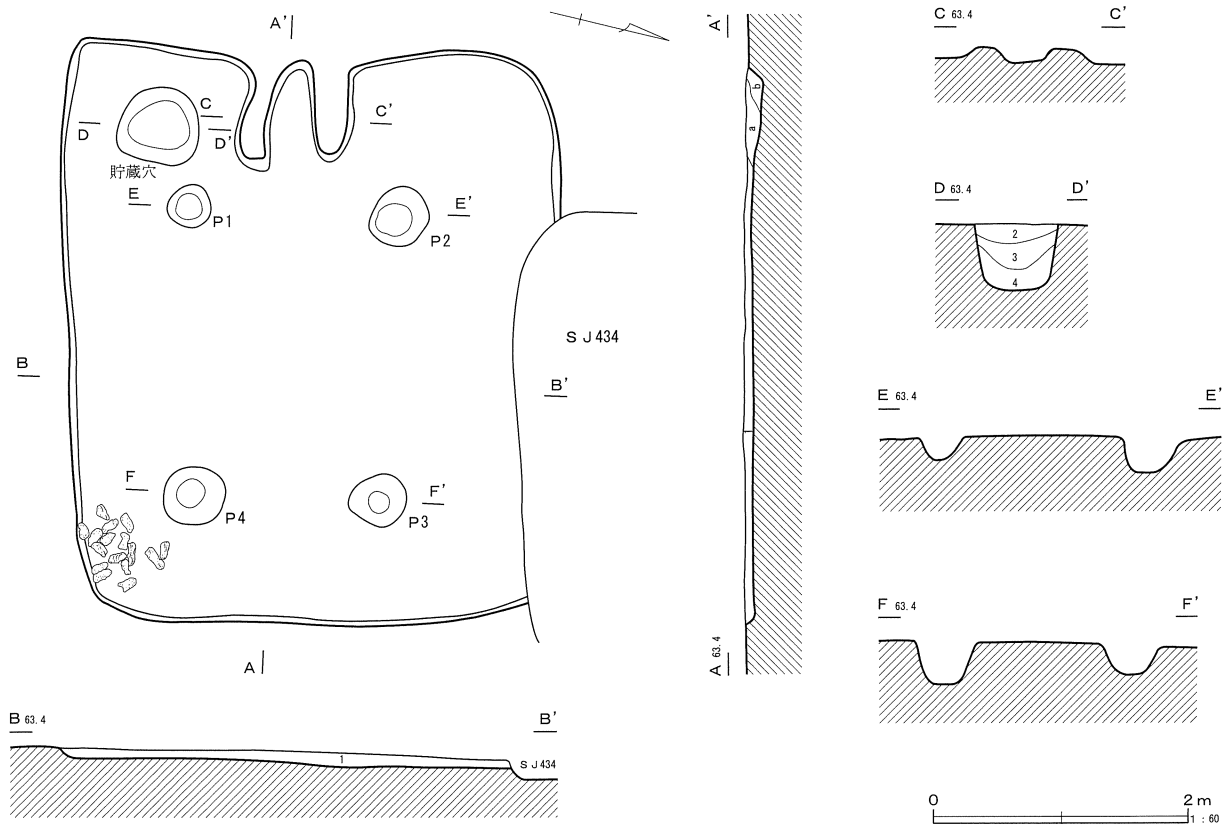
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは西壁中央に設置される。燃烧部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴はカマド左に設

けられ、64×60cmの楕円形で、深さは53cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは4本検出され、P1~P4の深さは20cm、24cm、24cm、33cmである。何れも支柱穴と考えられる。南東コーナーで編物石が16個まとまって出土した。

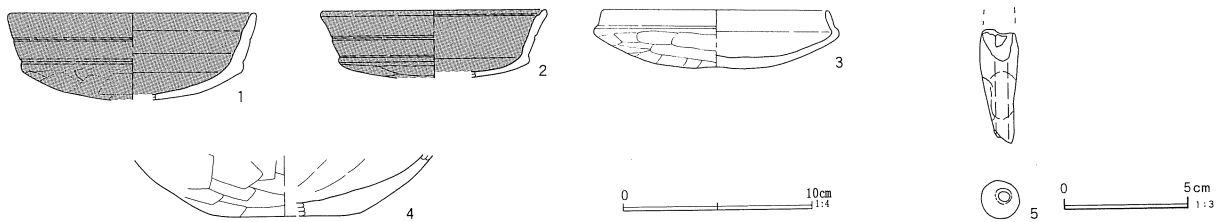
遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器の破片が出土したが、磨滅が著しく、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏3・甕1、土錘1点であった。



- | | | | | | |
|-----------|------------------|--------|------------------|--------------|--------------|
| S J 4 3 5 | | 4 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山ブロック・炭化粒子多 | |
| 1 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質 | 焼土粒子 | 炭化粒子 | |
| 2 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山ブロック | 炭化粒子少 | | |
| 3 | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック | 炭化粒子・灰白色粘質土ブロック多 | | |
| カマド | | a | 暗褐色 (10YR3/3) | 砂質 | 焼土ブロック・炭化粒子多 |
| | | b | 暗褐色 (10YR3/4) | 砂質 | 焼土粒子少 |

第217図 第435号住居跡



第218図 第435号住居跡出土遺物

第435号住居跡出土遺物観察表（第218図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	13.0	4.6		BDEFGJ	良好	黒褐	50	P2・4	内外面黒色処理
2	土師坏	(11.8)	3.6		BDEFGJ	良好	橙	10	P2	内外面黒色処理
3	土師坏	(11.7)	3.1		BEGJ	普通	赤褐	25	カマド	
4	土師甕		3.2	(7.9)	BEGJ	普通	明赤褐	25	貯蔵穴	

第435号住居跡出土土錘観察表（第218図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	(4.50)	1.50	0.40	7.46	B a IV	A	灰黄褐	75	

第436号住居跡（第219・220図）

I・J-27・28グリッドに位置する。第283・418号住居跡に切られ、第309・440・555号住居跡を切る。平面形は正方形で、東西5.44m、南北5.18m、深さは0.26～0.31mである。主軸方位はN-25°-Wを指す。

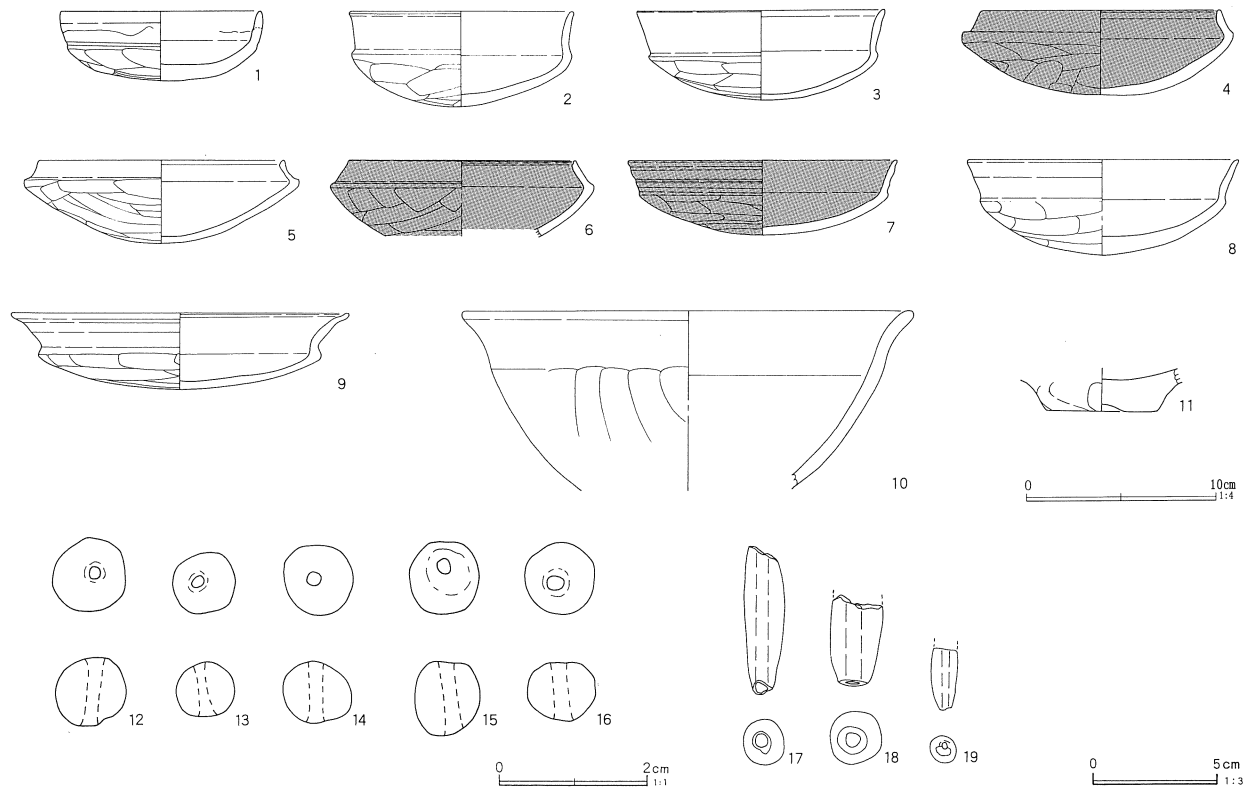
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁中央よりやや東に設置される。燃焼

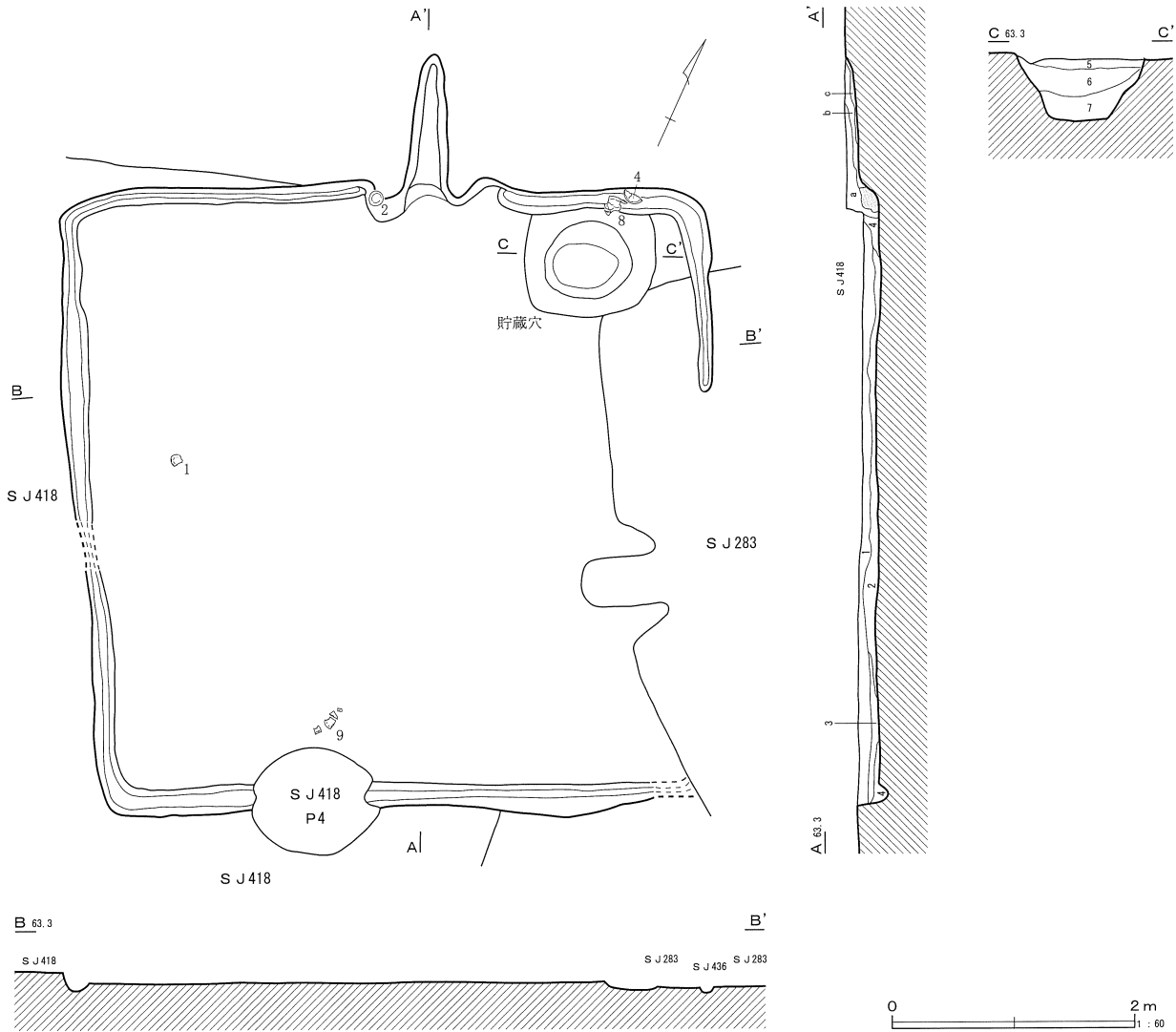
部の掘り込みはなく、段を持って煙道部へ続く。土層断面に明瞭な焼土ブロックが観察された。貯蔵穴はカマド右の北壁に接して設けられ、109×92cmの丸みを持った長方形で、深さは55cmである。壁溝は全周するようで、幅10～24cm、深さ2～6cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が出土した。坏の破片が多く。甕・甔の破片は殆ど出土しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏9・鉢1・甕1、土製小玉5、土錘3点であった。



第219図 第436号住居跡出土遺物



- S J 4 3 6
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 砂質地山主体 灰白色地山・炭化粒子僅か
 - 2 褐色 (10YR4/4) 地山粒子・地山小ブロック多
 - 3 暗褐色 (10YR3/3) 1層に似るがやや軟質 焼土粒子
 - 4 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質黄色地山土主体
 - 5 暗褐色 (10YR3/4) 1層に似るが粘質地山の単一層
 - 6 暗褐色 (10YR3/4) 砂質地山主体 炭化粒子

- 7 褐色 (10YR4/4) 地山粒子

- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/4) 砂質地山粒主体 焼土微
 - b 灰黄褐色 (10YR4/2) 焼土 炭化粒子 灰
 - c にぶい黄褐色 (10YR5/3) 地山極多 底溶軟化層

第220図 第436号住居跡

第436号住居跡出土遺物観察表 (第219図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	10.7	3.7		ABDEFGJ	良好	にぶい黄褐	70	-6cm	
2	土師坏	11.8	5.0		BDEFJL	良好	橙	95	床	
3	土師坏	13.1	4.8		ABEJ	良好	橙	80	貯蔵穴	
4	土師坏	12.6	4.5		BEFG	良好	にぶい橙	90	+7cm	内外面黒色処理
5	土師坏	13.0	4.4		ABDEGJL	良好	にぶい褐	45	覆土	
6	土師坏	(12.0)	4.0		BDEFG	良好	明赤褐	30	覆土	内外面黒色処理
7	土師坏	14.3	3.9		BEFGL	良好	灰褐	60	覆土	内外面黒色処理
8	土師坏	14.4	5.0		BEFJ	良好	橙	60	+8cm	
9	土師坏	18.0	4.0		BEFJL	良好	浅黄橙	70	床	

第436号住居跡出土遺物観察表（第219図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
10	土師鉢	(23.7)	9.5		B E J	普通	明赤褐	10	覆土	
11	土師甕		2.3	6.0	G J L	普通	明赤褐	60	覆土	
12	土製小玉	直径1.00cm	厚さ0.90cm	孔径0.15cm			重さ0.86 g	100	覆土	
13	土製小玉	直径0.75cm	厚さ0.70cm	孔径0.20cm			重さ0.53 g	100	覆土	
14	土製小玉	直径0.90cm	厚さ0.80cm	孔径0.20cm			重さ0.67 g	100	覆土	
15	土製小玉	直径0.95cm	厚さ1.00cm	孔径0.20cm			重さ1.04 g	100	覆土	
16	土製小玉	直径0.90cm	厚さ0.80cm	孔径0.25cm			重さ0.70 g	100	覆土	

第436号住居跡出土土錘観察表（第219図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
17	5.85	1.80	0.55	13.94	B a IV	A	にぶい褐	100	
18	(3.55)	2.15	0.60	13.96	B b V	A	明黄褐	50	
19	(2.45)	1.15	0.30	2.38	B a VI	C	にぶい黄褐	95	

第437号住居跡（第221・222図）

H・I-24・25グリッドに位置する。第448号住居跡に切られ、第445・472号住居跡を切る。平面形は正方形で、東西5.74m、南北5.44mで、深さは0.04～0.10mと浅い。主軸方位はN-14°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

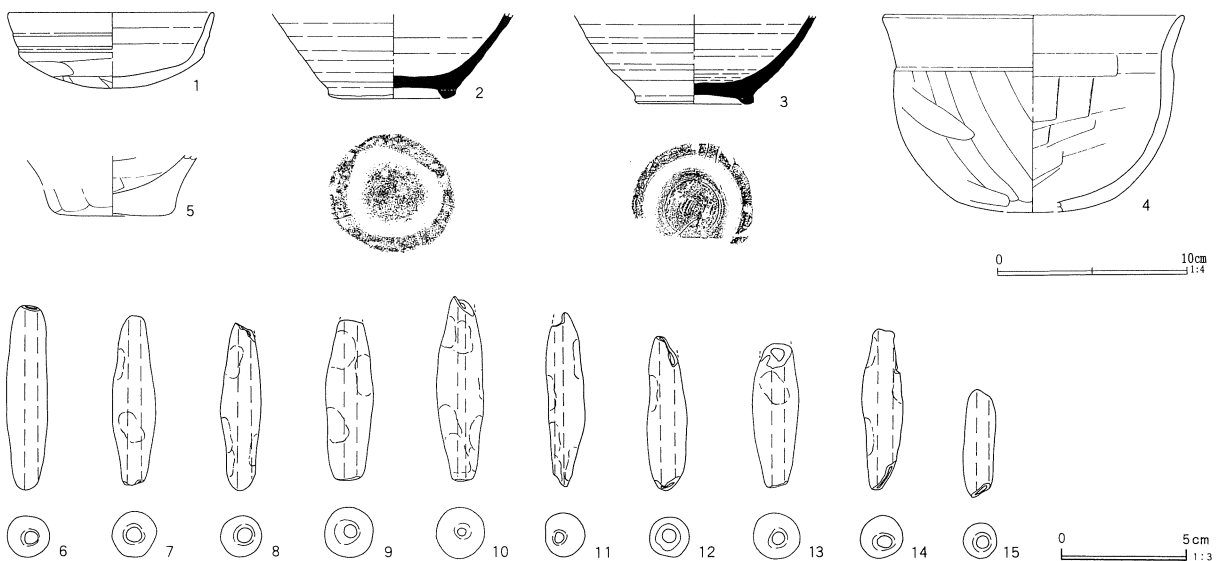
カマドは北壁中央に設置される。燃烧部は20cm程掘り込み、急激に立ち上がる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、径78cmの円形で、深さは41cmである。壁溝は北西コーナーと東壁の一部で検出された。幅が

28～50cmと広く、深さは3～7cmである。ピットは4本検出され、P1～P4の深さは56cm、52cm、43cm、40cmである。何れも主柱穴と考えられる。

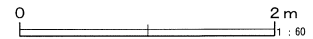
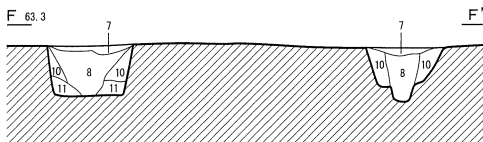
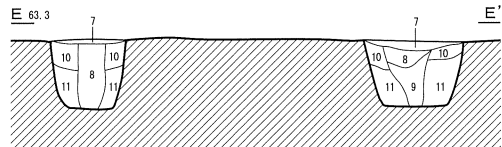
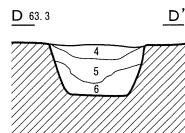
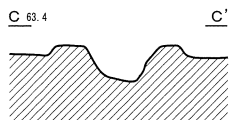
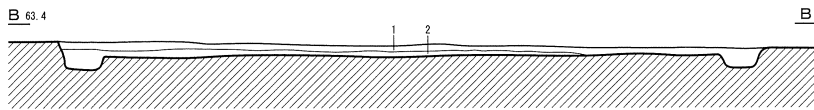
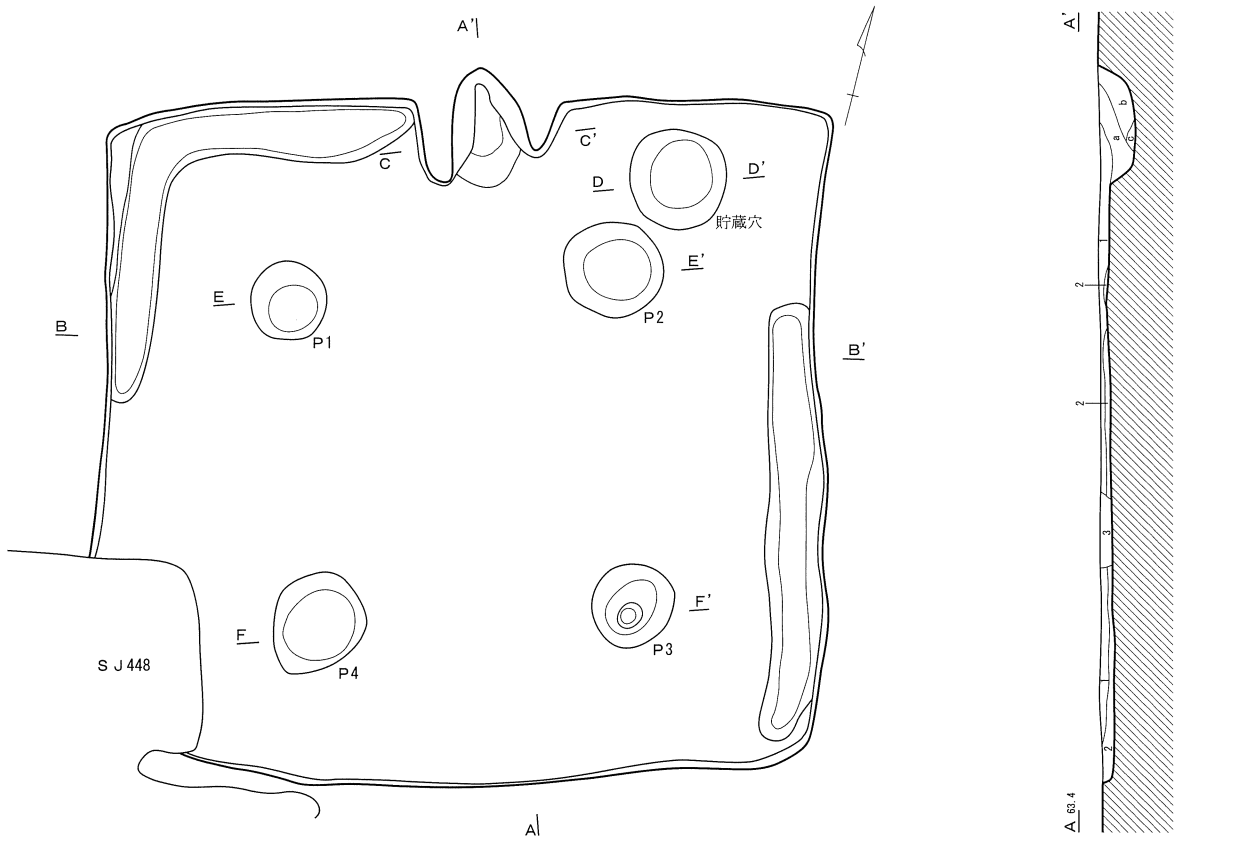
遺物は、古墳時代～平安時代の土師器・須恵器の破片が出土した。小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏・鉢・甕、須恵器高台付椀2、土錘10点であった。

時期差のある遺物が出土したが、本住居跡に伴うと考えられるのは、2・3の高台付椀と考えられる。



第221図 第437号住居跡出土遺物



- | | | | |
|--------------------|-----------------------|--------------------|---------------------|
| S J 4 3 7 | | | |
| 1 暗褐色 (10YR3/4) | 地山粒子 炭化粒子多 白色粒子少 焼土粒子 | 9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質 焼土粒子少 |
| 2 にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 地山ブロック主体 炭化粒子少 | 10 褐色 (10YR4/4) | 地山ブロック 炭化粒子 |
| 3 褐色 (10YR4/4) | 地山ブロック少 炭化粒子 焼土粒子微 | 11 暗褐色 (10YR3/4) | 地山ブロック多 |
| 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質 地山ブロック多 | | |
| 5 褐色 (10YR4/4) | 炭化粒子 焼土粒子 | カマド | |
| 6 褐色 (10YR4/4) | 炭化粒子多 | a 暗褐色 (10YR3/3) | 炭化粒子・焼土ブロック・地山ブロック少 |
| 7 黒褐色 (10YR3/2) | 焼土粒子・炭化粒子・地山ブロック多 | b 暗褐色 (10YR3/4) | 炭化粒子・焼土粒子・地山ブロック少 |
| 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質 焼土粒子 地山ブロック | c 暗褐色 (10YR3/4) | 炭化粒子・焼土粒子少 |

第222図 第437号住居跡

第437号住居跡出土遺物観察表（第221図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(10.8)	4.0		BDEFJL	良好	明赤褐	30	貯蔵穴	
2	須恵高台碗		4.5	(5.3)	ABFHJL	不良	にぶい黄褐	40	覆土	末野産か？底部回転糸切後高台貼付 末野産か？底部回転糸切後高台貼付
3	須恵高台碗		4.7	(5.8)	BCEFGJ	良好	褐灰	50	覆土	
4	土師鉢	(15.8)	10.4	(8.5)	ABCEFJ	良好	黒褐	30	C区	
5	土師甕		3.2	6.3	ABL	良好	にぶい黄橙	80	覆土	

第437号住居跡出土土錘観察表（第221図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	7.30	1.70	0.50	16.95	B a III	C	にぶい黄褐	100	A区
7	6.70	1.85	0.60	14.98	B a III	A	灰黄褐	100	A区
8	6.60	1.60	0.60	12.63	B a III	C	にぶい黄褐	100	A区
9	6.35	2.00	0.50	20.25	B b IV	C	にぶい黄橙	95	C区
10	7.30	2.05	0.35	24.80	C b III	C	にぶい黄橙	95	C区
11	6.90	1.75	0.45	12.40	B a III	C	明赤褐	95	
12	6.10	1.60	0.50	11.36	B a III	C	にぶい黄橙	90	
13	(5.70)	1.90	0.50	16.75	B a IV	C	にぶい黄橙	90	C区
14	6.35	1.70	0.60	12.23	B a IV	C	橙	90	D区
15	4.25	1.40	0.50	5.96	B a V	C	明赤褐	100	D区

第438号住居跡（第223・224図）

H-24・25グリッドに位置する。カマド手前と中央付近をグリッドピットに壊される。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.28m、短軸3.29m、深さは0.14~0.22mである。主軸方位はN-80°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。

カマドは東壁中央に設置される。燃烧部は10cm程掘り下げ、緩やかに立ち上がりながら煙道部となる。川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は断続的に検出され、幅9~22cm、深さ1~7cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは15cm、12cmである。

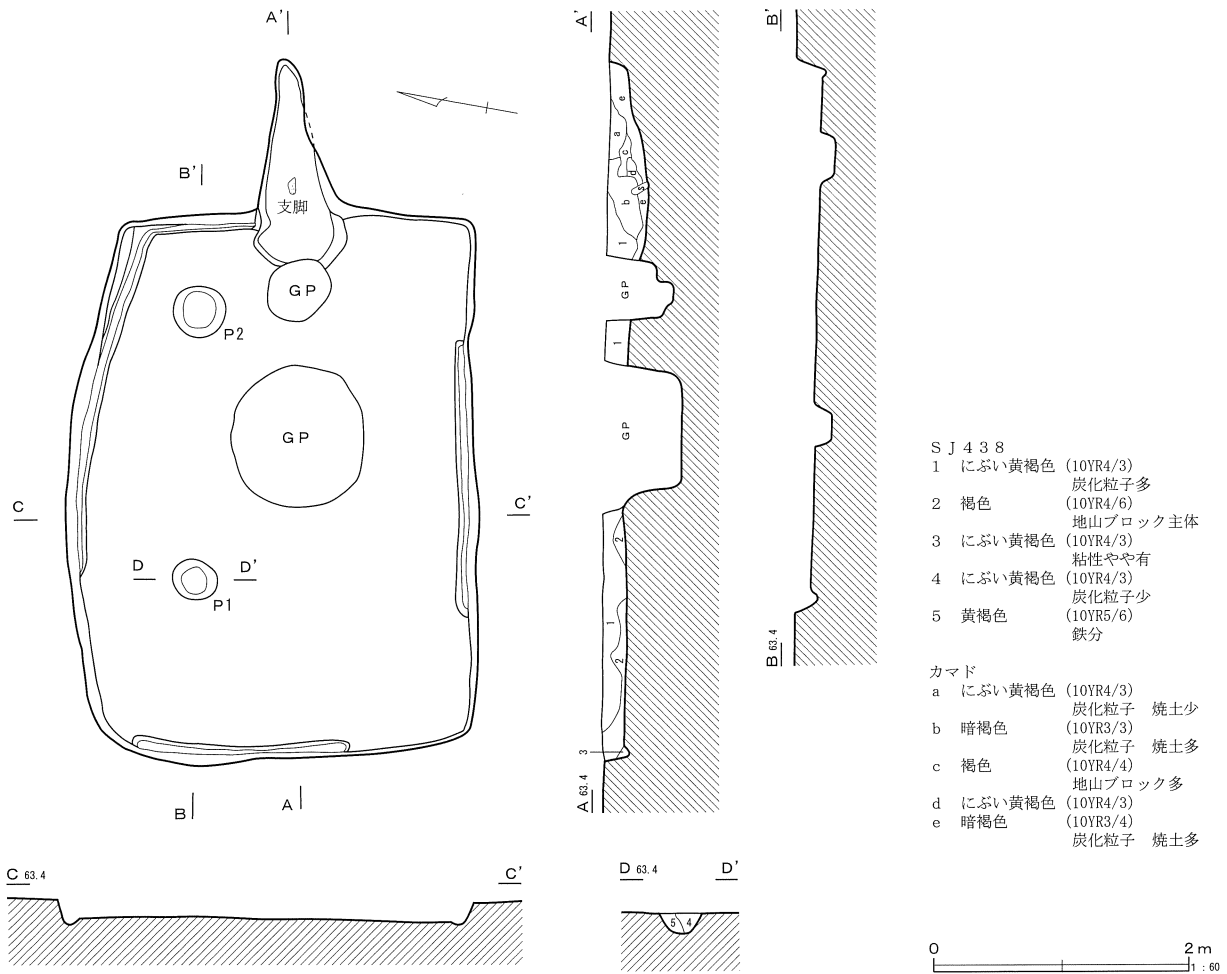
遺物は、平安時代の土師器・須恵器の破片が多く出土した。特に碗類の破片が多かった。

図示可能な遺物は、須恵器坏1・高台付碗14、土師器高坏1・甕2、土錘4点であった。

出土遺物で特徴的なのは、高台付碗の多さである。これらの高台坏は、焼成が極めて悪く、高台の成型、貼り付けが粗雑で、5のように高台の体をなしていないものまでである。また、高台の輪郭が綺麗な円形とならず、歪んだ円または楕円形となる。

このうち、1の坏と、8・11には、胎土に片岩と小礫を含み、末野産の製品と考えてよいと思うが、その他の高台付碗は、胎土に白色の微粒子を多量に含み、器面はざらついた感のあるものの、粘土そのものには大粒の礫・砂粒等を含まず、綺麗な粘土を使用して製作されている。しかし、成型は極めて粗雑で、焼成も悪い。

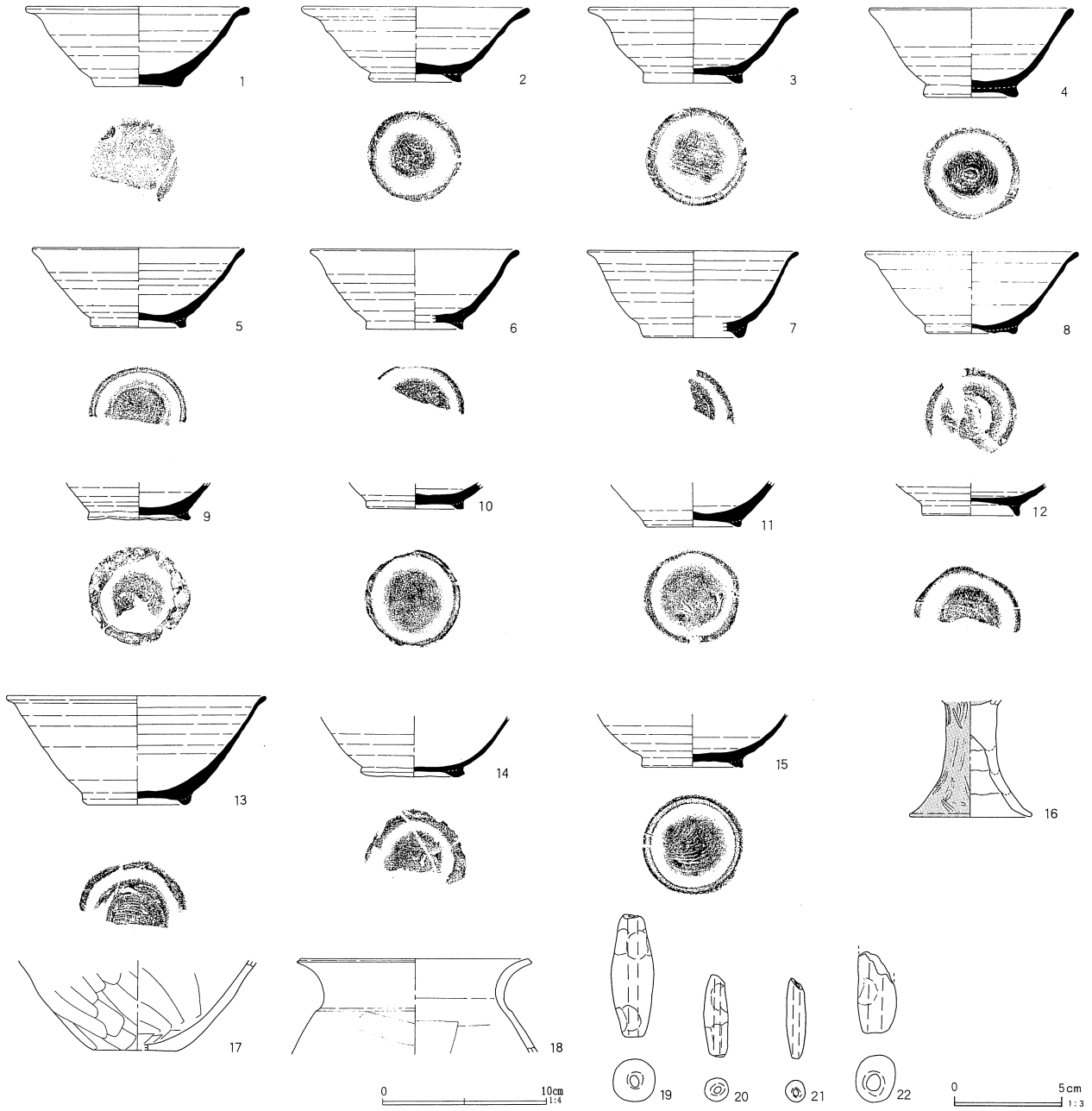
平成12年度に報告した第1号窯跡の製品に胎土・焼成技法が似ていることから、これらは如意産の須恵器であった可能性がある。



第223図 第438号住居跡

第438号住居跡出土遺物観察表 (第224図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	(13.5)	4.9	5.3	ABCHJL	不良	灰黄褐	30	B区	末野産? 底部回転糸切
2	須恵高台椀	(13.7)	4.6	5.3	BEFJ	普通	灰	40	B区	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
3	須恵高台椀	12.6	4.2	5.8	BCFJ	不良	灰白	60	B区	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
4	須恵高台椀	(12.3)	5.5	5.4	BFL	普通	灰白	40	B区	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
5	須恵高台椀	(12.8)	4.9	(5.1)	ABF	不良	灰白	30	B区	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
6	須恵高台椀	(12.6)	4.9	(6.0)	ABDF	不良	灰白	30	A区	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
7	須恵高台椀	(12.7)	5.3	(5.8)	ABEG	不良	灰白	15	A区	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
8	須恵高台椀	(12.8)	5.0	(5.4)	ABHJ	普通	灰	40	B区	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
9	須恵高台椀		2.3	6.0	ABFJ	良好	褐灰	80	A区	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
10	須恵高台椀		1.5	5.9	ABDEGJ	不良	にぶい黄褐	90	覆土	末野産? 底部切り離し痕不明瞭
11	須恵高台椀		2.7	5.7	ABEGHJ	不良	橙	60	A区	末野産? 底部回転糸切不明瞭
12	須恵高台椀		2.0	(5.8)	BCFGJ	普通	灰白	40	A区	末野産? 底部回転糸切
13	須恵高台椀	(15.7)	6.7	(6.0)	ABEG	不良	明黄褐	30	A区	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
14	須恵高台椀		3.7	(6.0)	ABEG	不良	浅黄	25	カマド	末野産? 底部切り離し痕不明瞭
15	須恵高台椀		3.3	6.0	ABDEGJ	不良	灰白	70	B区	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
16	土師高坏		7.0	7.2	AEGH	良好	明黄褐	30	B区	外面赤彩痕
17	土師甕		5.6	(5.0)	ABEGH	良好	にぶい黄褐	40	カマド	
18	土師甕	(13.8)	5.7		ABGHJ	普通	灰黄褐	15	B区	



第224図 第438号住居跡出土遺物

第438号住居跡出土土錘観察表 (第224図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
19	5.55	2.00	0.55	16.57	C a IV	A	灰黄	100	B区
20	3.70	1.10	0.35	3.66	B b VI	C	黒褐	100	カマド
21	3.65	0.90	0.30	2.13	A a VI	C	灰黄褐	100	A区
22	(3.70)	2.15	0.80	11.95	—	—	橙	45	

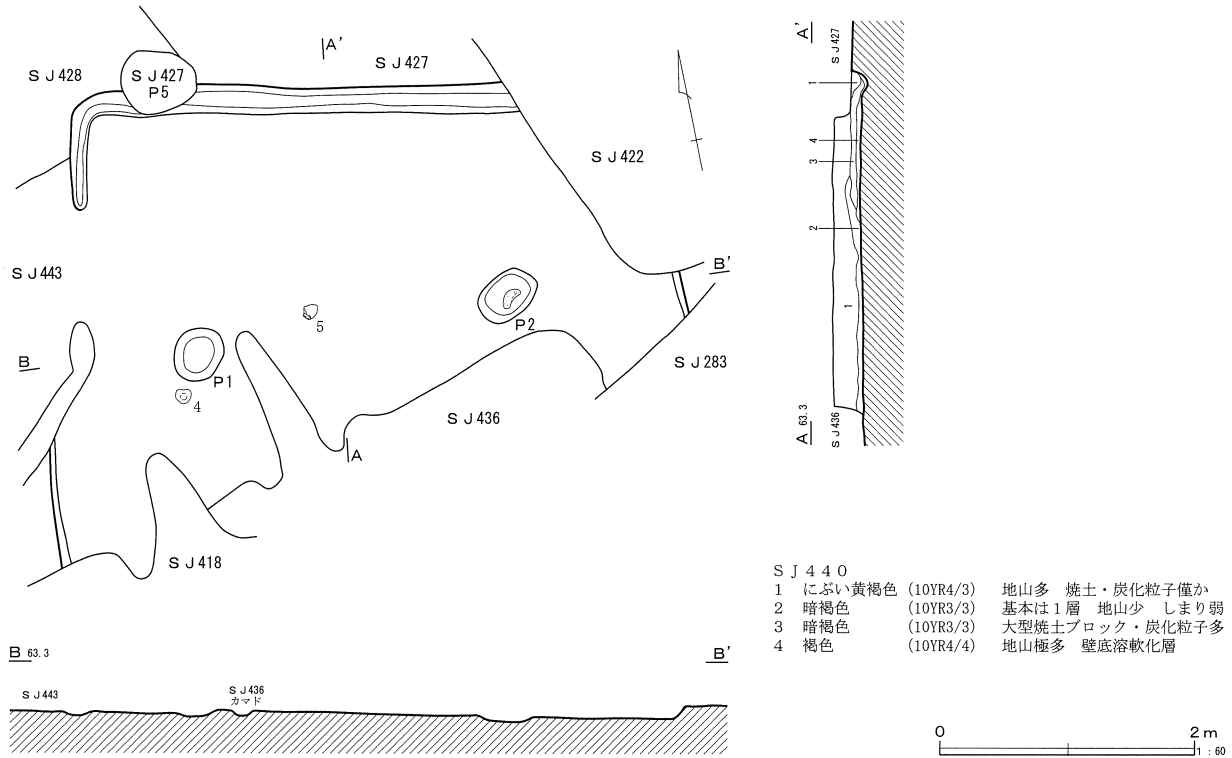
第440号住居跡 (第225・226図)

I-27グリッドに位置する。第283・415・418・422・427・428・436・443号住居跡と重複し、その何れより古い。北壁から東壁と西壁の一部を検出した。検出された規模は、東西4.28m、南北3.71mで、深さは

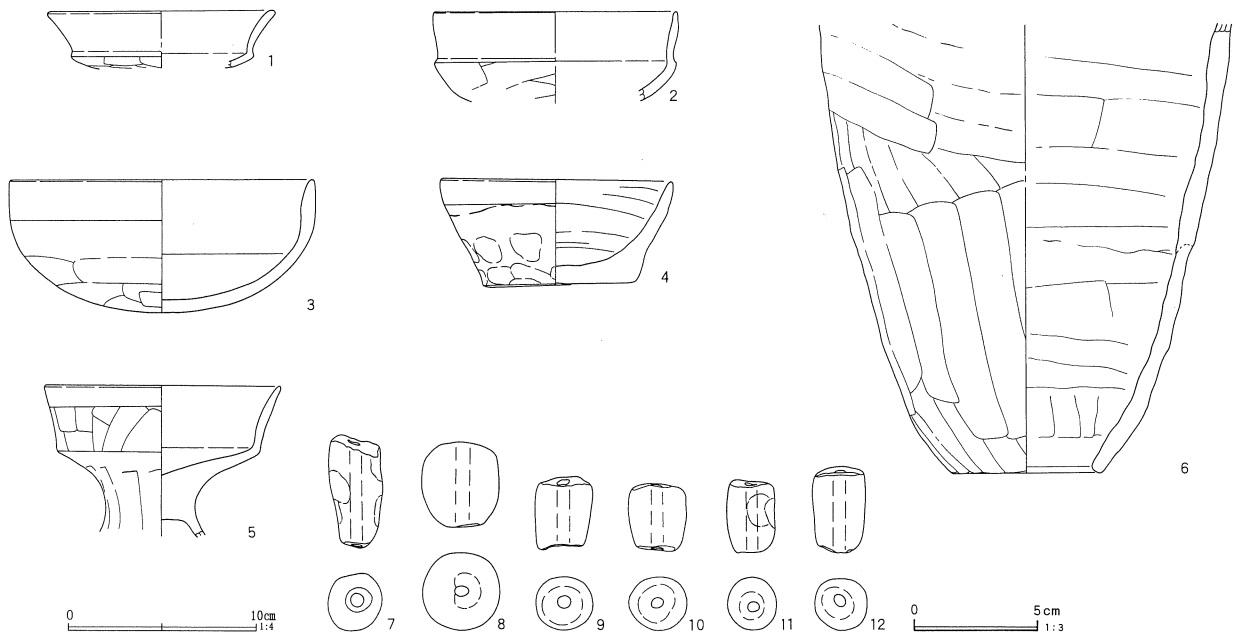
0.07~0.18mである。主軸方位は北壁でN-79°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は開きながら立ちあがる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北壁で検出され、幅12~24cm、深さ3~6cmである。ピ



第225図 第440号住居跡



第226図 第440号住居跡出土遺物

ットは2本検出され、P1・P2深さは4cm、3cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器が多く出土した。特に甕の破片が多かったが、磨滅が著しく殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏4・高坏1・甕1、土錘6点であった。

1は、底部を欠損していた。口縁部は大きく外反することから、高坏であった可能性がある。

4は鉢状の小型坏である。底部は平底で、直線的

に外傾しながら立ち上がる。口縁部はやや内側へ傾く。口縁部はヨコナデ、胴部は下半部に指頭による圧痕が認められる。

7～12は土錘である。7以外は、本遺跡出土土錘のなかでも、形態的に特徴のある一群である。幅に対し、長さが極めて短くなるタイプで、両端が残存しているため、これで完形品である。両端部はヘラまたは指によって調整され、平坦となる。形態が球形となるいわゆる土玉とは異なり、管状土錘の中に含まれるものと考えられる。

第440号住居跡出土遺物観察表（第226図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.9)	3.0		BE	普通	橙	20	覆土	
2	土師坏	(12.8)	4.7		BFJ	普通	橙	15	覆土	
3	土師坏	15.8	7.0		BEGJ	普通	橙	50	覆土	
4	土師坏	12.1	5.6	8.0	BEGJ	良好	にぶい黄橙	95	床	
5	土師高坏	12.5	8.0		BEG	普通	明赤褐	80	床	
6	土師甕		24.6	7.9	ACDEJL	普通	明黄褐	50	覆土	

第440号住居跡出土土錘観察表（第226図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
7	(4.45)	2.40	0.60	19.90	BbIV	C	にぶい黄褐	70	
8	3.35	3.10	0.55	29.92	EbVI	C	橙	100	
9	2.85	2.25	0.50	13.31	EbVI	A	橙	100	
10	2.70	2.30	0.50	13.03	EbVI	C	橙	100	
11	2.85	2.10	0.45	11.62	EbVI	A	橙	100	
12	3.40	2.20	0.50	14.43	EbVI	C	橙	100	

第441号住居跡（第227・228図）

I-26・27グリッドに位置する。第432号住居跡に切られ、第428・442・443号住居跡を切る。西側は攪乱で壊され、それから西は検出できなかった。周辺の住居跡と同時に調査を進めたため、北東コーナー周辺を検出したのみである。検出された規模は、南北4.04m、東西2.88mで、深さは0.05～0.08mと浅い。主軸方位は北壁でN-71°-Eを指す。

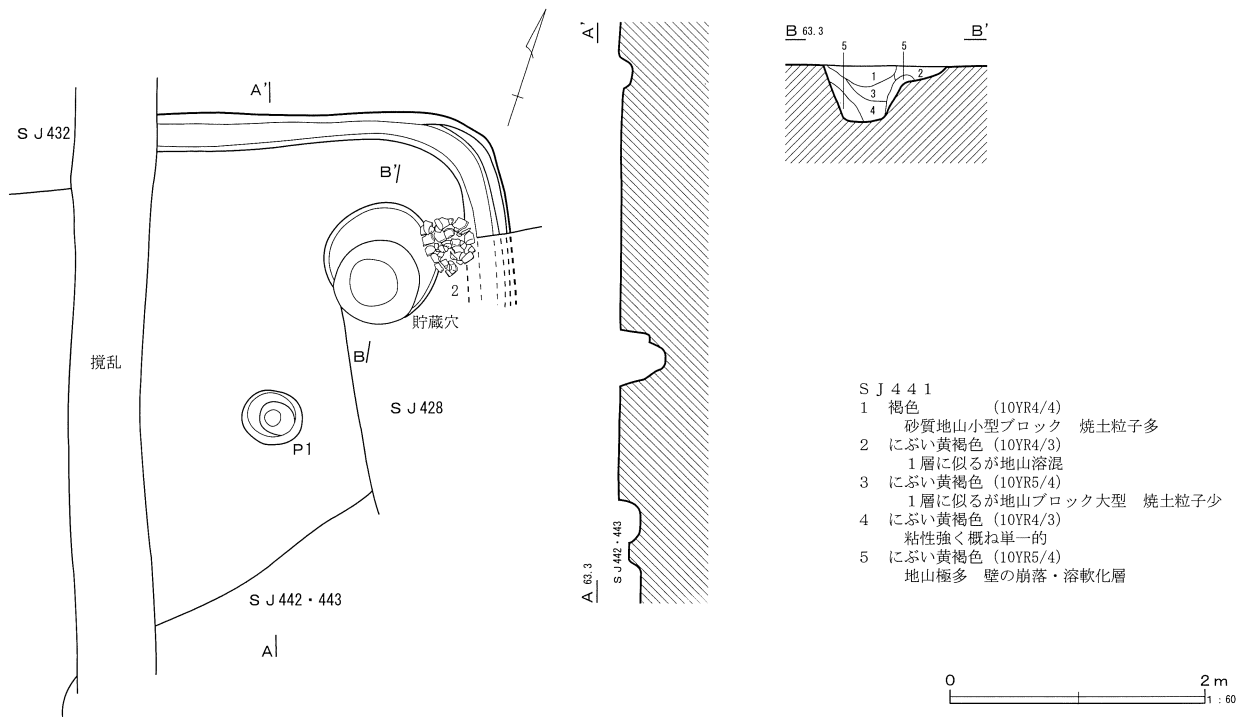
床面はほぼ平坦で、壁の状態は不明瞭である。覆土の観察は出来なかった。

カマドは検出されなかった。貯蔵穴は第428号住居跡との境界に検出され、98×90cmの楕円形で、深さは45cmである。壁溝は検出された壁全てで見られ、幅20～30cm、深さ5～8cmである。ピットは1本検出され、深さは35cmである。

遺物は、貯蔵穴脇から出土した甕以外、破片資料

第441号住居跡出土遺物観察表（第228図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	4.2		BEG	良好	明黄褐	15	覆土	
2	土師甕	24.6	31.5	9.7	ABJL	普通	灰黄褐	90	床	

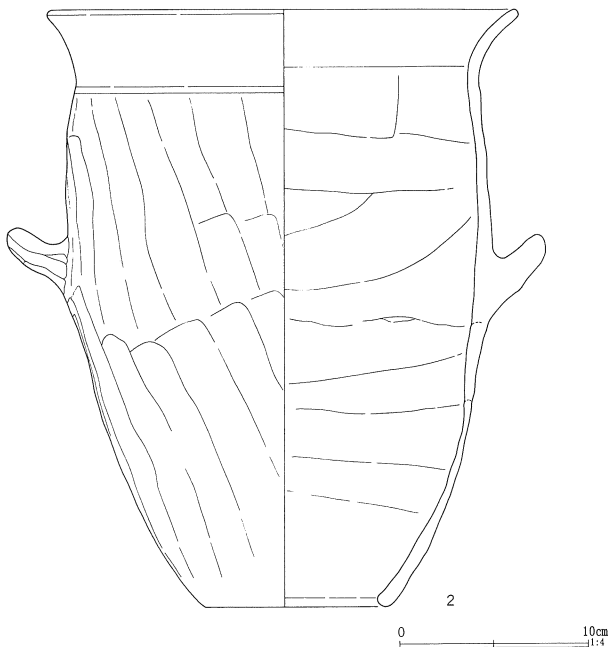


第227図 第441号住居跡



は殆ど出土しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1・甑1点であった。



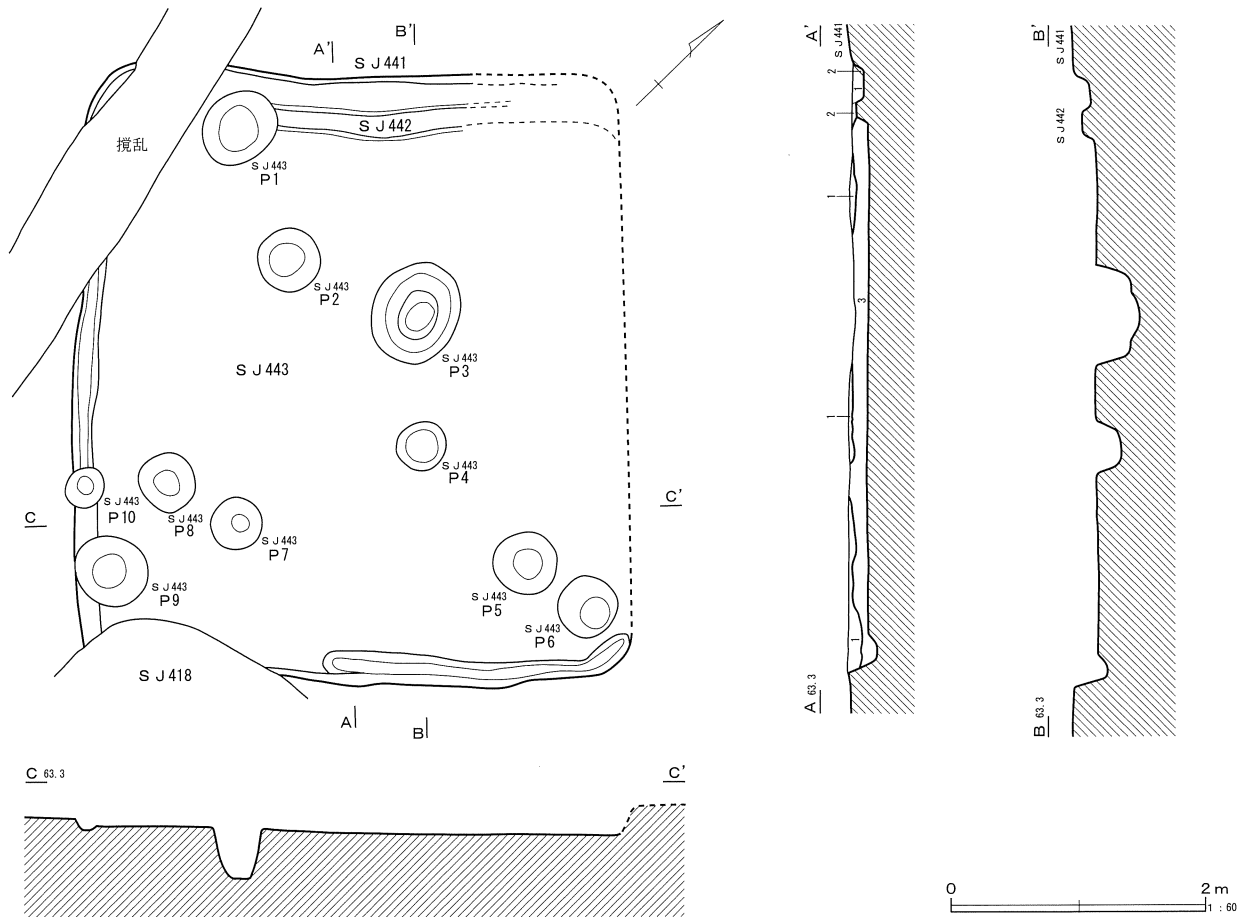
第228図 第441号住居跡出土遺物

第442号住居跡 (第229図)

I-27グリッドに位置する。第441号住居跡に切られ、第428・443号住居跡を切る。西コーナーを攪乱で壊されていた。第428・443号住居跡と同時に調査し、大半を第443号住居跡と共有していたと考えられるため不明瞭な点が多い。また、第443号住居跡を埋めて床面を構築しているが検出時には既に床面の大半は消失していたと思われる。北西壁の一部とごく僅かな床面を検出したのみである。平面形は長方形と考えられ、規模は長軸4.80m、短軸4.5m程度か。深さは0~0.03mである。主軸方位はN-48°-Wを指す。

床面や壁の状況は不明で、カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西壁で検出され、幅23~26cm、深さ8cm前後である。

遺物は出土しなかった。



S J 4 4 2
 1 暗褐色 (10YR3/4) 砂質地山ブロック 焼土粒子 炭化粒子 白色
 2 褐色 (10YR4/4) 地山主体 壁の溶軟化層

S J 4 4 3
 3 褐色 (10YR4/4) 砂質地山ブロックの故意の埋め戻し

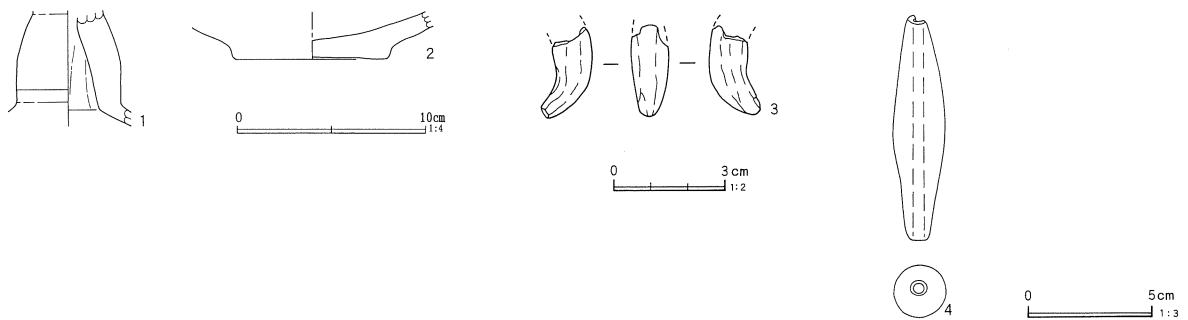
第229図 第442・443号住居跡

第443号住居跡 (第229・230図)

I-27グリッドに位置する。第418・441・442号住居跡に切られ、第428・440号住居跡を切る。周辺の住居跡と同じに調査を進めたため北コーナーから北東壁は検出できなかった。平面形は正方形に近く、

一辺が4.5m前後と考えられる。深さは0.10~0.18mである。主軸方位はN-48°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土は1層で、第442号住居跡構築時に埋められたと考えられる。



第230図 第443号住居跡出土遺物

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北東壁と南西壁で検出され、幅13~28cm、深さ1~6cmである。ピットは10本検出され、P1~P10の深さは15cm、21cm、36cm、20cm、21cm、34cm、43cm、17cm、20cm、25cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器片が出土したが、破片数は極めて少なかった。

図示可能な遺物は、土師器高坏1・甕1、土製勾玉1、土錘1点であった。

第443号住居跡出土遺物観察表（第230図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師高坏		6.1		B E G	普通	明赤褐	40	覆土	
2	土師甕		2.5	(8.0)	B E J	普通	明赤褐	40	覆土	
3	土製勾玉	長さ(2.4)cm	厚さ1.0cm	重さ2.58g					覆土	

第443号住居跡出土土錘観察表（第230図）

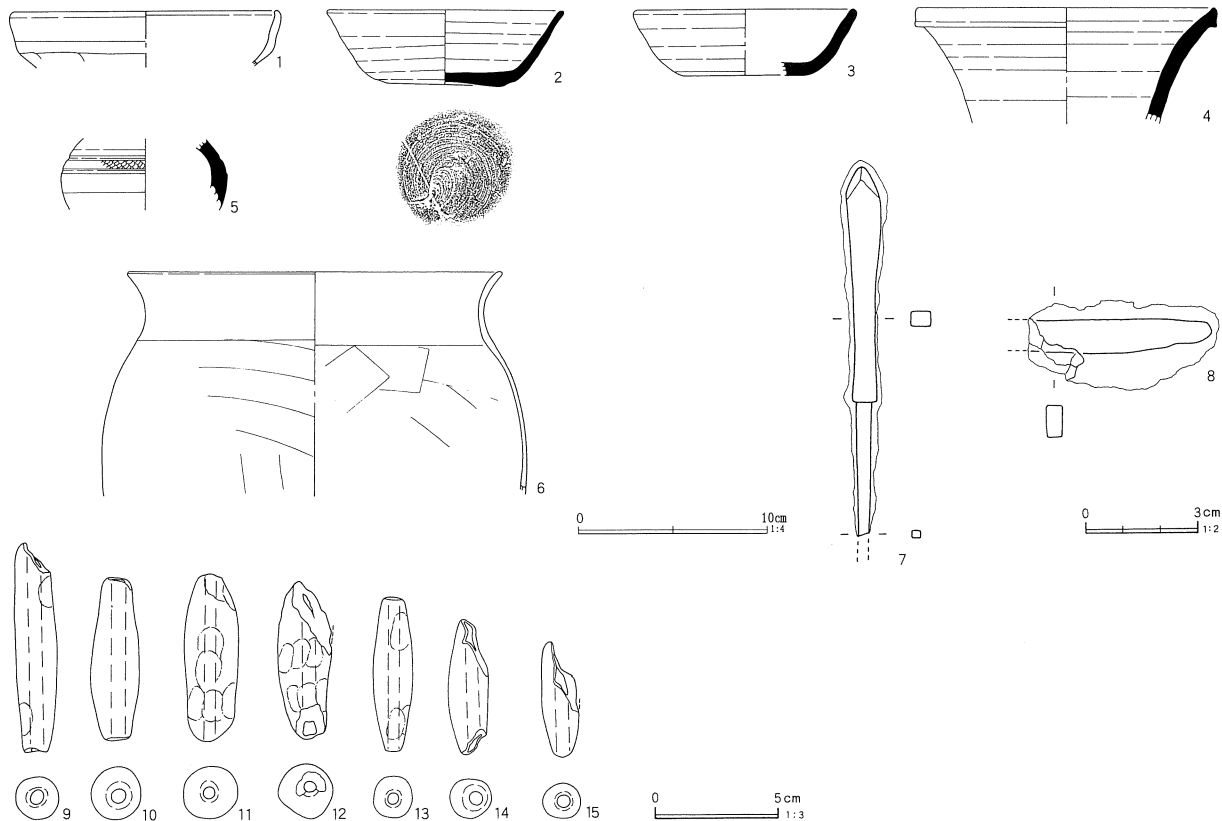
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	8.85	2.10	0.40	28.18	C a II	A	明褐	95	

第444号住居跡（第231・232図）

I-25・26グリッドに位置する。第254号土坑に切られ、第445・447・535号住居跡を切る。第462号住居跡との関係は不明瞭である。平面形は東西に長い長

方形で、長軸4.26m、短軸3.14m、深さは0.21~0.25mである。主軸方位はN-73°-Eを指す。

床面は中央付近が僅かに高くなり、壁は開きながら立ちあがる。



第231図 第444号住居跡出土遺物

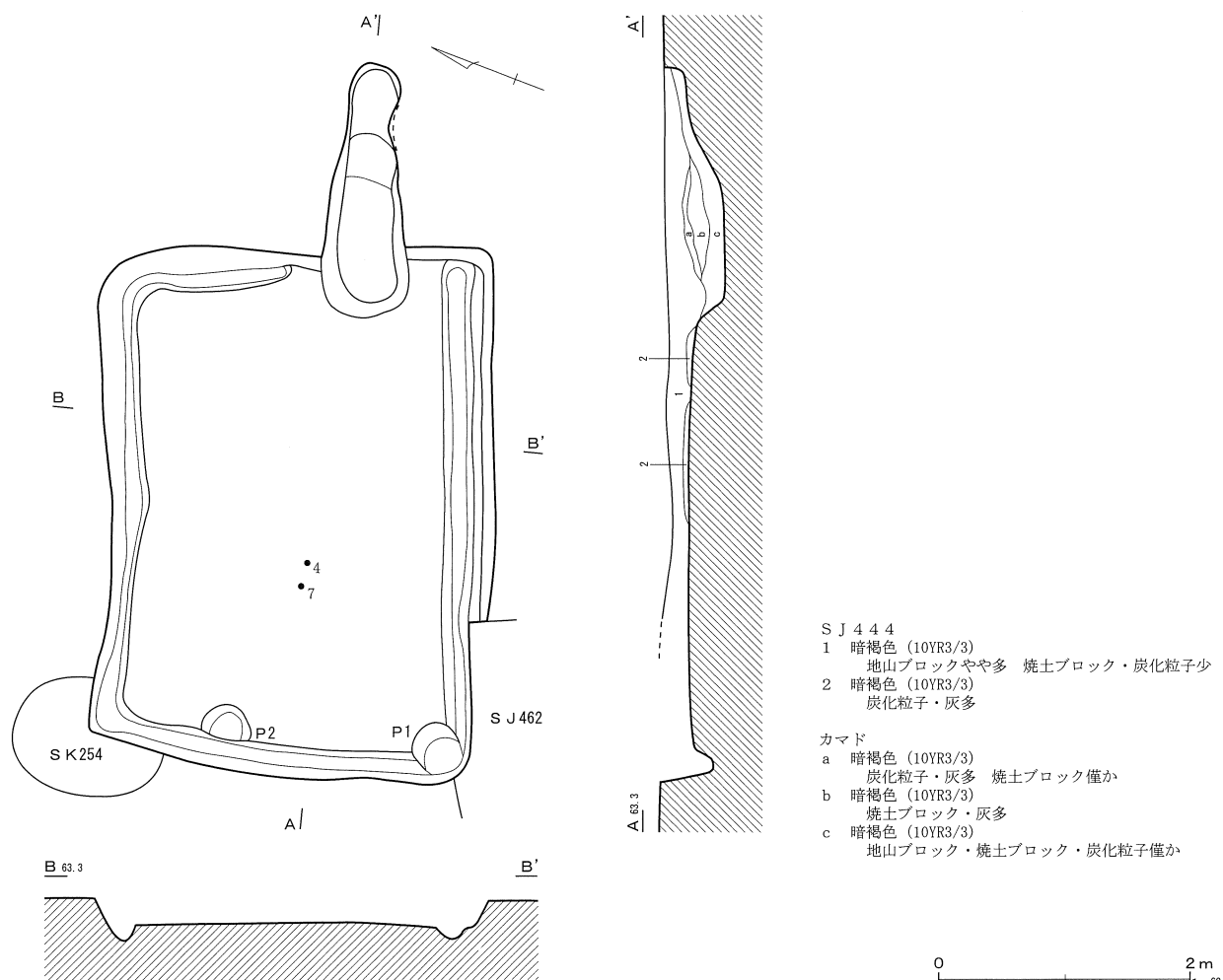
カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部は20cm程掘り込み、緩やかな段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝はほぼ全周し、幅18~32cm、深さ9~12cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは19cm、13cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期~平安時代の土師

器・須恵器の破片が多く出土した。特に土師器甕の破片が多かったが、小片が多く、接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1・甕1、須恵器坏2・罎1・甕1、鉄鏃1・刀子1、土錘7点が出土した。

2・3の須恵器坏は2点とも末野産で、底部の調



第232図 第444号住居跡

第444号住居跡出土遺物観察表 (第231図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(14.1)	3.0		BDEFGJL	良好	にぶい褐	20	カマド	
2	須恵坏	12.6	4.1	6.3	ABFHL	良好	褐灰	60	覆土	末野産 底部回転糸切
3	須恵坏	(11.8)	3.5	6.7	ABEFHL	良好	黄灰	30	覆土	末野産 回転糸切後体部下端ヘラケズリ
4	須恵甕	(15.8)	6.1		ABJL	良好	灰	25	床	末野産
5	須恵罎		3.8		BGL	良好	灰	10	覆土	末野産 櫛状工具押圧
6	土師甕	(19.8)	11.8		BDEGJ	良好	橙	30	覆土	
7	鉄鏃	現存長9.80cm 幅0.95cm 厚さ0.40cm 重さ15.28g							十4cm	
8	刀子?	現存長4.90cm 幅0.90cm 厚さ0.40cm 重さ21.60g							覆土	茎部片か?

整は、2は糸切り後未調整、3は体部下端部がヘラケズリされていた。

7の鉄鏝は、莖尻を欠くが、ほぼ原型をとどめていた。

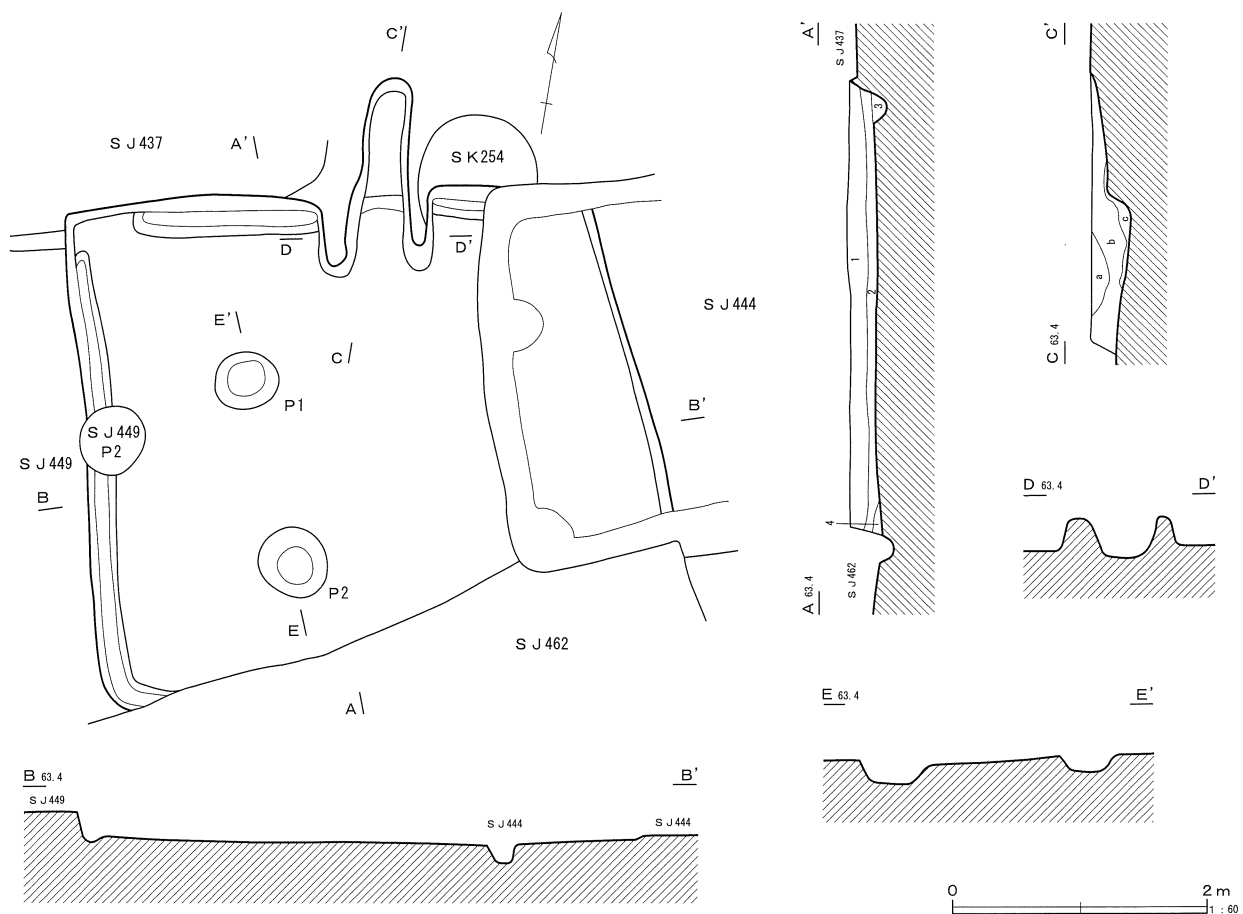
第444号住居跡出土土錘観察表（第231図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
9	8.20	1.70	0.60	18.35	A a II	C	にぶい黄橙	100	
10	6.45	2.15	0.60	21.44	C a IV	B	灰黄褐	100	
11	6.60	2.20	0.45	27.23	B a IV	A	にぶい黄橙	95	
12	6.20	2.20	0.50	20.24	B a IV	A	灰黄褐	75	
13	6.05	1.65	0.50	12.32	C a IV	B	黒褐	100	
14	5.30	1.65	0.55	10.60	C a V	A	明赤褐	100	
15	(4.50)	1.40	0.50	4.99	B a V	A	橙	60	

第445号住居跡（第233・234図）

I-25グリッドに位置する。第437・444・449・462号住居跡・第254号土坑と重複し、その何れよりも旧

い。西壁中央はグリッドピットで壊されていた。東壁は第444号住居跡の床面に検出された。平面形は東西に僅かに長い長方形で、長軸4.54m、短軸は4.1



S J 4 4 5

- 1 褐色 (10YR4/4) 地山粒子多 炭化粒子・焼土粒子少
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 地山粒子多 炭化粒子・焼土粒子微
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 地山粒子少 炭化粒子微
- 4 黒褐色 (10YR3/2) 地山粒子・炭化粒子多

カマド

- a 暗褐色 (10YR3/3) 地山ブロック僅か 炭化粒子少 粘性有り
- b 暗褐色 (10YR3/3) 地山ブロック多 炭化粒子・焼土ブロック少
- c 暗褐色 (10YR3/3) 地山ブロック多 炭化粒子少 焼土ブロック多

第233図 第445号住居跡

m前後と考えられる。深さは0.19～0.23mである。主軸方位はN-14°-Wを指す。

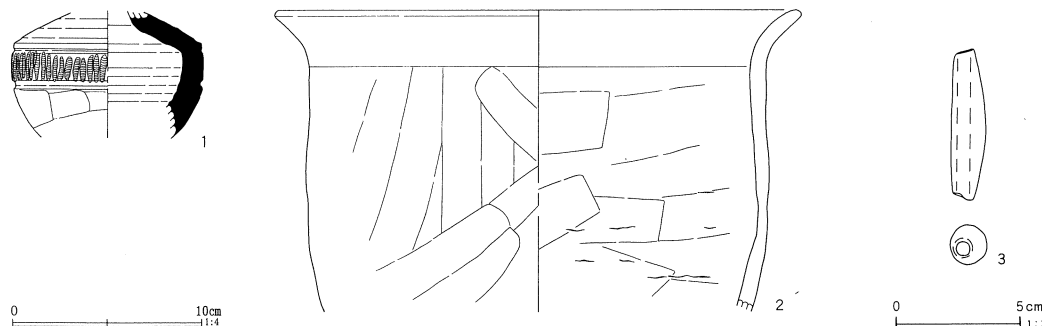
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは北壁に設置される。燃烧部の掘り込みはなく、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北壁と西壁で検出され、幅20～34

cm、深さ2～10cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは14cm、17cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器・須恵器の破片が出土したが、小片が多く、接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器罌1、土師器甗1、土錘1点であった。



第234図 第445号住居跡出土遺物

第445号住居跡出土遺物観察表（第234図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵罌		6.7		A B F J L	良好	褐灰	25	覆土	末野産
2	土師甗	(27.4)	15.9		A B C E J	良好	明黄褐	15	覆土	外面磨耗

第445号住居跡出土土錘観察表（第234図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	5.95	1.55	0.60	11.51	B a IV	A	明赤褐	100	

第447号住居跡（第235～238図）

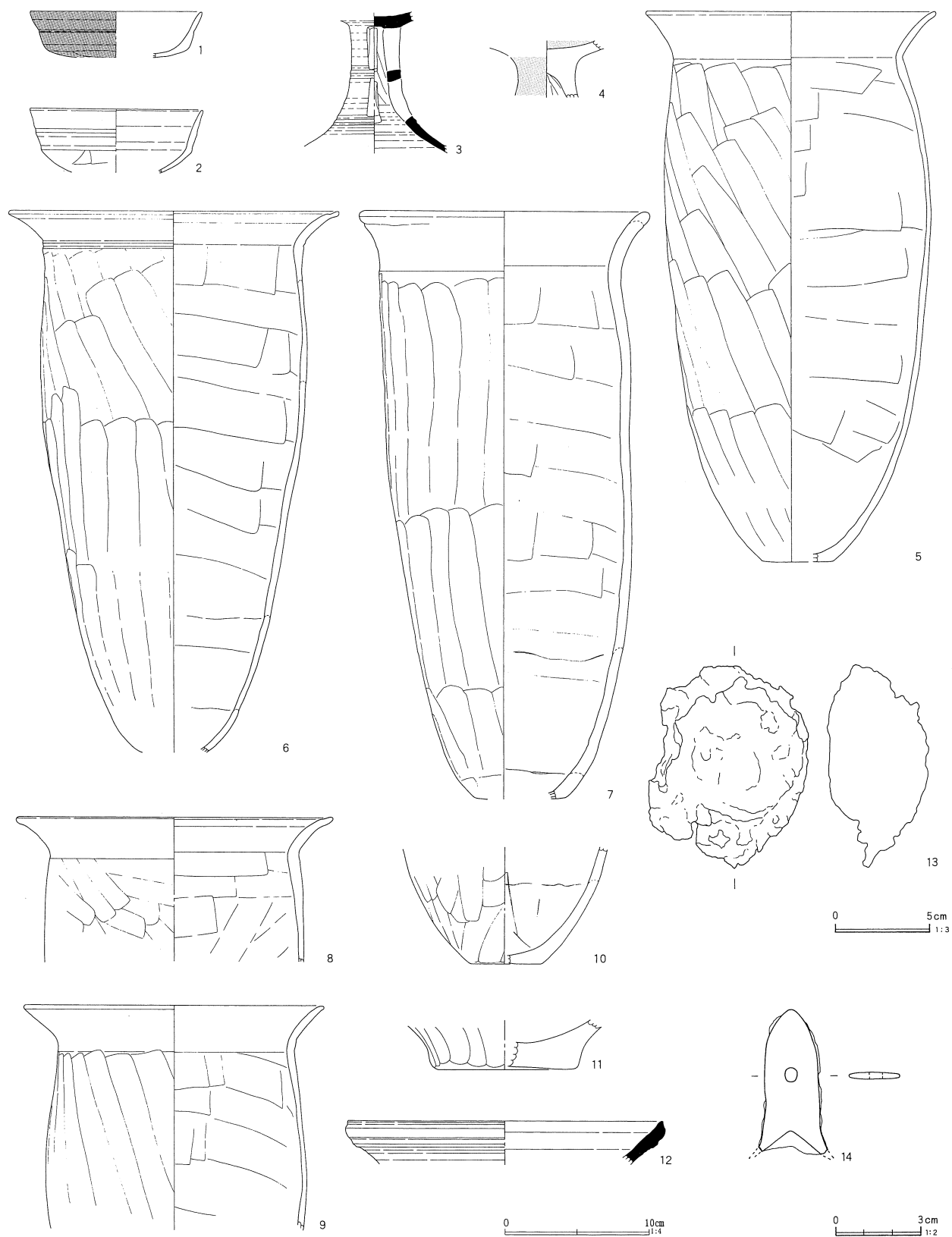
H・I-25・26グリッドに位置する。第432・444号住居跡・第249・250・251・252・253号土坑に切られ、第431・535号住居跡を切る。平面形は方形に近く、南北7.88m、東西7.58m、深さは0.07～0.14mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。

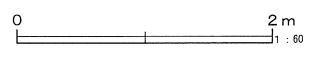
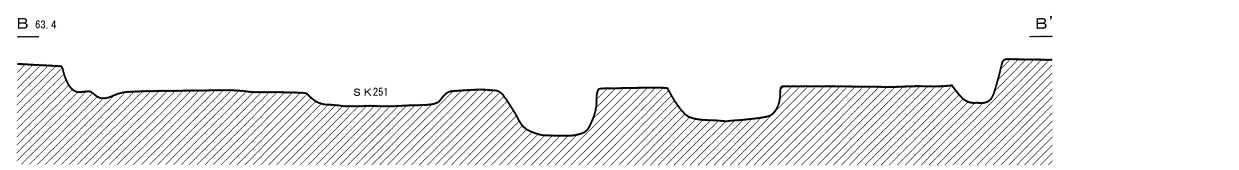
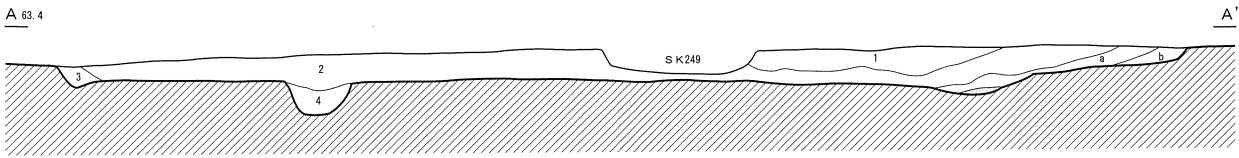
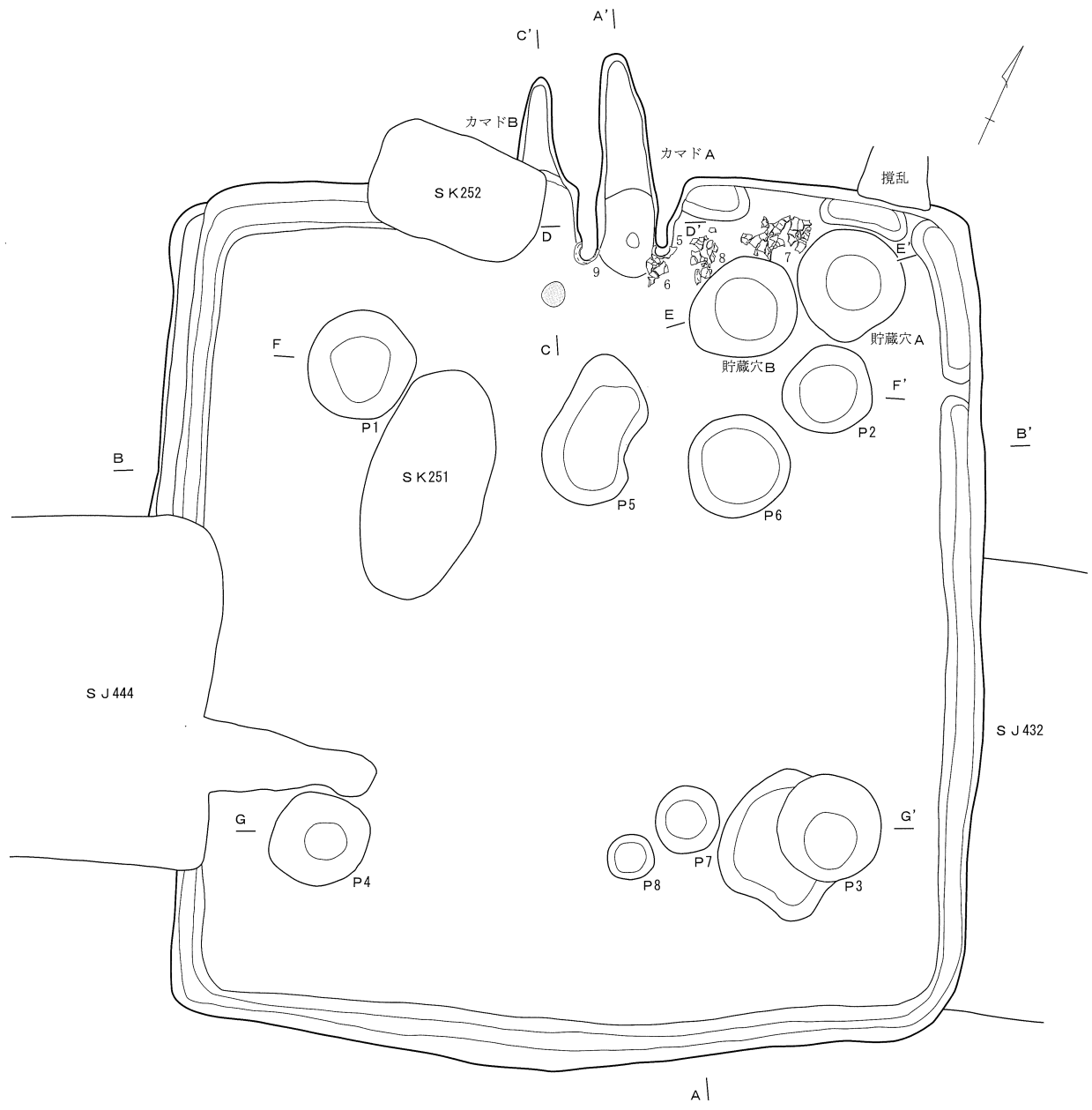
カマドは2基検出された。カマドAは北壁中央よりやや西に設置される。燃烧部は10cm程掘り込み、緩やかに立ち上がって煙道部へ続く。左右の袖の補強材に土師器甗が使用されていた。覆土最下層に明瞭な焼土層が確認された。カマドBはカマドAの西

側で検出された。覆土は埋め戻されており、カマドAより古いと考えられる。カマドB手前の床面に焼土の痕跡が見られたことから、カマドBの燃烧部の掘り込みはなかったと考えられる。カマドBの右袖は位置的にカマドAの左袖に再利用されたものか。

貯蔵穴も2基検出された。貯蔵穴Aは北東コーナー近くに設けられ、径96cmの円形で、深さは50cmである。貯蔵穴Bは貯蔵穴AとカマドAの間に設けられ、88×104cmの楕円形で、深さは52cmである。壁溝はほぼ全周し、幅22～46cm、深さ9～16cmである。西壁北半の壁溝は壁の内側に検出された。ピットは8本検出され、P1～P8の深さは58cm、48cm、66



第235图 第447号住居跡出土遺物 (1)



第236図 第447号住居跡 (1)

cm、49cm、37cm、23cm、31cm、17cmである。P 1～P 4は支柱穴と考えられる。

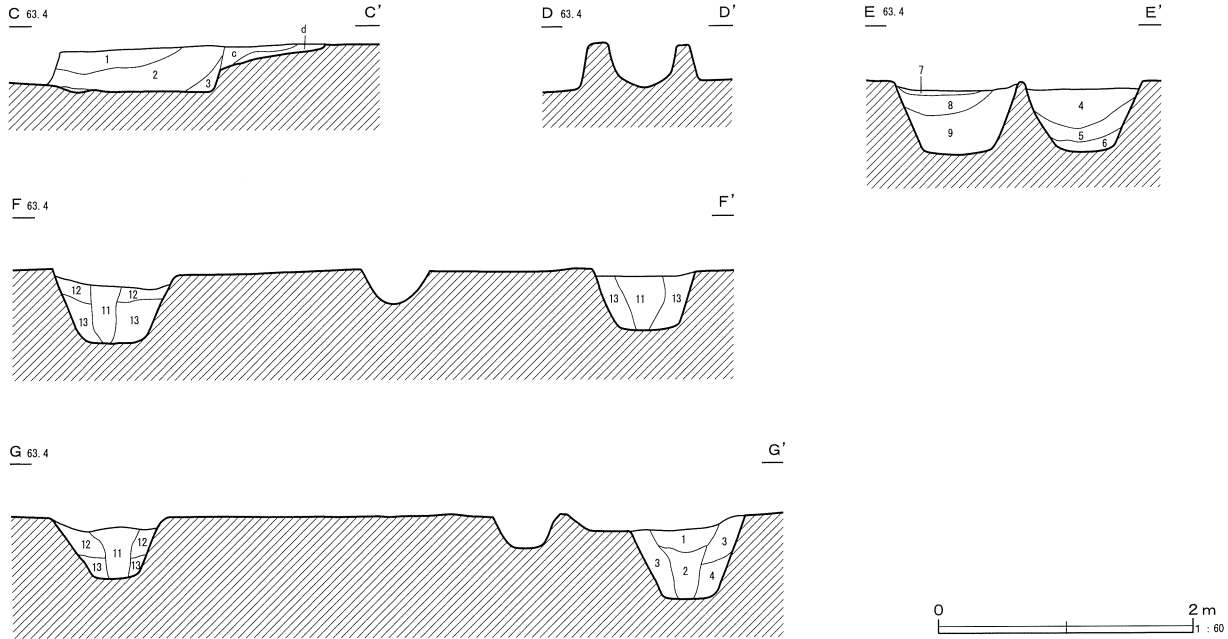
遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器の破片が多量に出土した。特に土師器は、甕の破片が多かったが、小片が多く、接合率は悪かった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・高坏1・甕7、須恵器高坏1・甕1、椀形滓1・鉄鏃1・刀子2、土錘

4点であった。

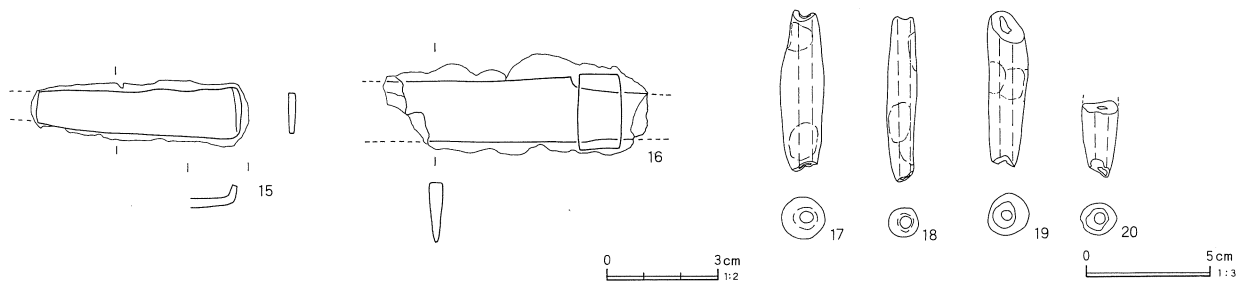
5・6はカマドA右袖から、7・8は貯蔵穴北側から、9はカマドA左袖から出土した。

14～16の鉄製品は、3点ともP 3から出土した。14は、無茎の三角形を呈する鉄鏃で、孔が穿たれていた。



S J 4 4 7				
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	地山粒子・焼土粒多	11	暗褐色 (10YR3/3)
2	暗褐色 (10YR3/4)	炭化粒子・焼土粒子・地山ブロック多	12	褐色 (10YR4/4)
3	黒褐色 (10YR3/2)	焼土粒・炭化粒子多	13	暗褐色 (10YR3/4)
4	暗褐色 (10YR3/3)	砂質 地山粒子・地山ブロック多	カマドA	
5	暗褐色 (10YR3/3)	砂質 地山ブロック・炭化粒子多	a	黒褐色 (10YR3/2)
6	暗褐色 (10YR3/4)	地山ブロック 炭化粒子 礫 (φ3cm)	b	にぶい黄褐色 (10YR4/3)
7	褐色 (10YR4/4)	地山ブロック 暗褐色土 住居貼床	カマドB	
8	褐色 (10YR4/4)	地山ブロック少 砂質 礫 (φ3cm) 多	c	黒褐色 (10YR3/2)
9	暗褐色 (10YR3/4)	砂質 地山ブロック 焼土粒	d	赤褐色 (2.5YR4/8)
10	暗褐色 (10YR3/3)	砂質 地山粒子多		

第237図 第447号住居跡 (2)



第238図 第447号住居跡出土遺物 (2)

第447号住居跡出土遺物観察表（第235・238図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考	
1	土師坏	(12.0)	3.2		BDEFJL	良好	灰黄褐	5	覆土	外面黒色処理 産地不明 透かしあり 外面赤彩 外面煤付着 床 床 カマド カマド 覆土 覆土 底部木葉痕? 覆土 末野産 覆土 P3 P3 P3 P3	
2	土師坏	(11.9)	4.3		ABDEFJ	良好	橙	10	覆土		
3	須恵高坏		9.8		BF	良好	暗灰	40	覆土		
4	土師高坏		3.9		BEG	良好	赤	70	覆土		
5	土師甕	20.0	38.0	5.0	ABEG	普通	にぶい黄褐	80	カマド		
6	土師甕	23.0	37.4		ABDEJ	良好	にぶい黄橙	40	カマド		
7	土師甕	19.5	40.6		ABDEJ	良好	にぶい黄橙	80	床		
8	土師甕	(21.6)	10.0		ABEG	良好	橙	30	床		
9	土師甕	21.0	15.5		ABDGL	良好	にぶい黄橙	80	カマド		
10	土師甕		8.1	(4.8)	ABGJ	良好	橙	40	覆土		
11	土師甕		3.5	(9.0)	ABEFJ	良好	黒褐	30	覆土		
12	須恵甕	(21.8)	3.0		ABFJ	良好	暗灰	5	覆土		
13	椀形鉄滓	長さ10.40cm 幅8.30cm 厚さ5.20cm 重さ527.76g									覆土
14	鉄鏝	現存長さ5.00cm 幅2.40cm 厚さ0.25cm 孔径0.45cm 重さ9.10g									P3
15	刀子(茎部)	現存長さ5.65cm 背幅0.20cm 刃幅1.10cm 重さ11.19g									P3
16	刀子	現存長さ7.05 背幅0.30cm 刃幅1.60cm 重さ38.84g									P3

第447号住居跡出土土錘観察表（第238図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
17	6.40	1.70	0.50	15.75	B a IV	C	にぶい橙	100	
18	6.50	1.20	0.50	8.23	A a III	A	にぶい黄橙	100	
19	(6.10)	1.70	0.40	15.76	B a III	C	浅黄橙	80	
20	(3.00)	1.50	0.40	4.13	—	A	明赤褐	—	

第448号住居跡（第239・240・241図）

I-24グリッドに位置する。第437・449号住居跡・第15号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡が最も古い。中央付近の床面を攪乱で壊されていた。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.08m、短軸3.40m、深さは0.30~0.35mである。主軸方位はN-78°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

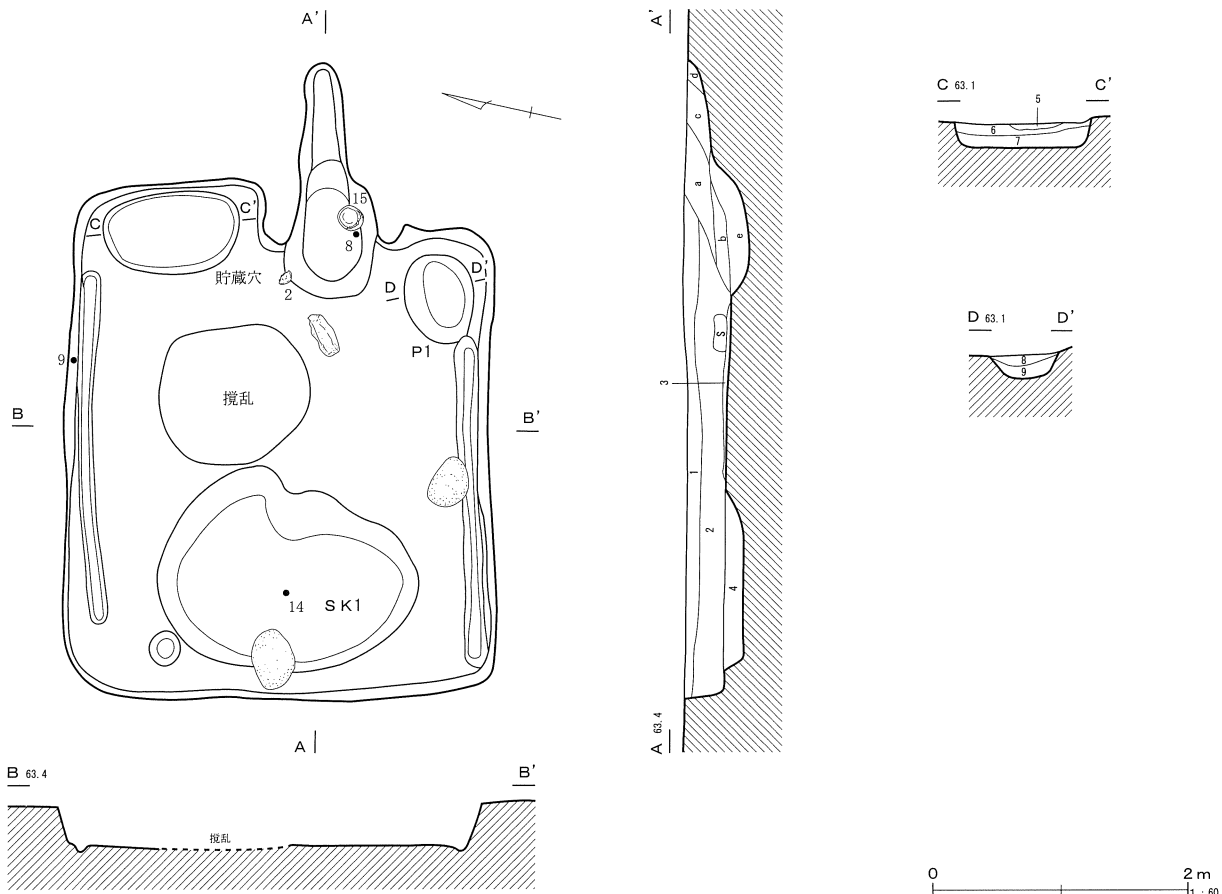
カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部は15cm程掘り込み、段を持って煙道部へ続く。カマド左の壁が東に飛び出す形となっている。貯蔵穴はカマド左に設けられ、108×66cmの楕円形で、深さは21cmである。壁溝は北壁と南壁で検出され、幅12~20cm、深さ4~5cmである。ピットは1本検出され、深さは20cmである。床面の西半で土坑が検出

され、土層から床下土坑と判断した。

遺物は、平安時代の土師器・須恵器の破片が多量に出土した。特に土師器甕類の破片が多かったが、小片が多く、殆ど接合しなかった。この他、須恵器坏・椀類の破片が多かったが、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1・甕6、須恵器坏4・高台付椀2・皿1・甕1、灰釉小瓶1、不明銅製品1、土錘32点であった。また、小片で図示不可能であったが、灰釉椀の破片が1点出土した。

17の銅製品は、最大径1.6cm、厚さ0.35cmの楕円形の薄片である。鋳の痕跡が二箇所を確認できるが、全体的に錆が著しく、原型をとどめていない。当初帯金具かとも思われたが、鋳の位置関係が異なることから、不明銅金具とした。



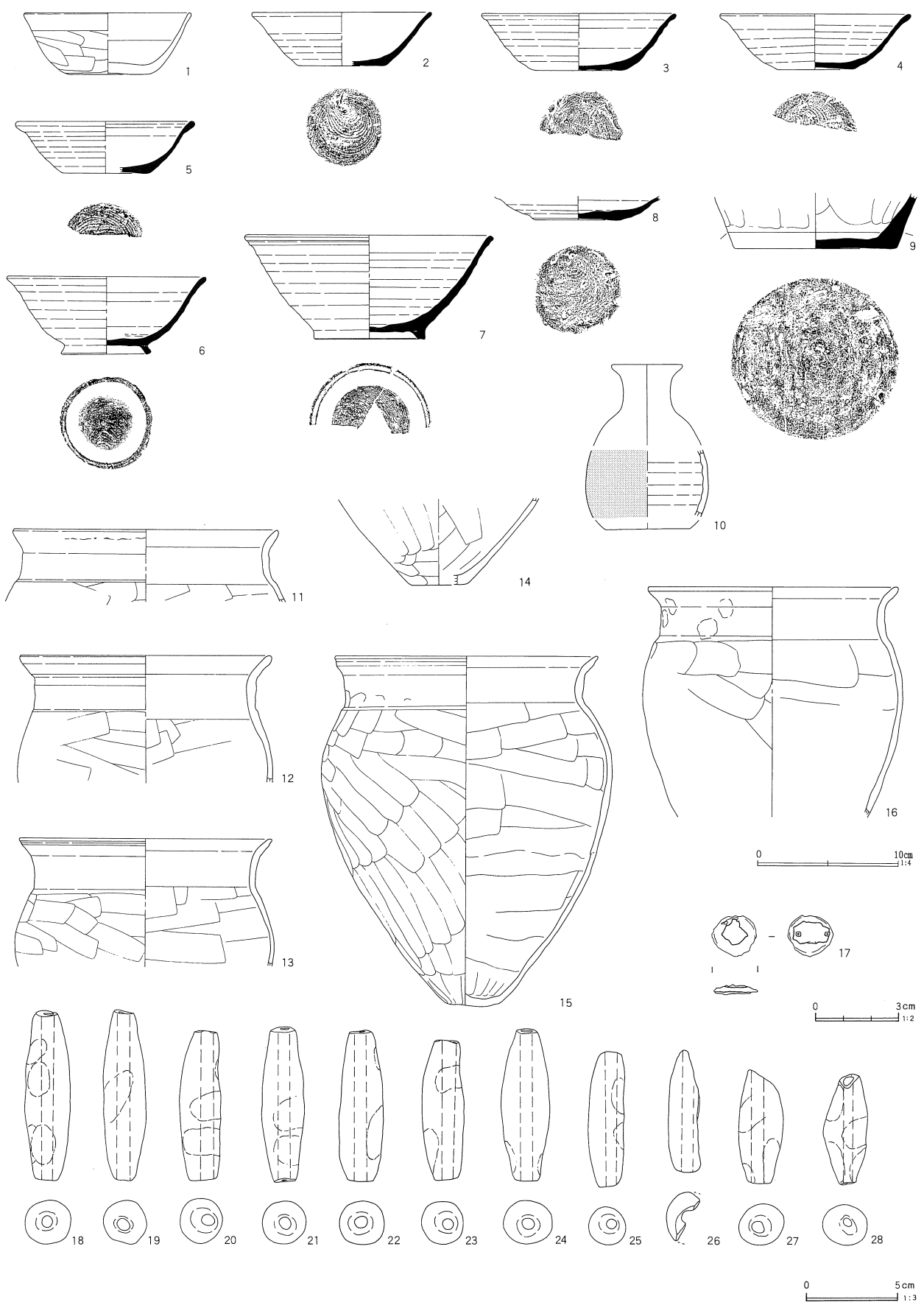
S J 4 4 8

- | | | | | | |
|---|-------------------|---------------------|-----|------------------|-------------------|
| 1 | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 地山粒子多 焼土粒子微 | 9 | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 地山粒子多 炭化粒子少 焼土粒子微 |
| 2 | にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 地山ブロック多 焼土粒子・炭化粒子少 | カマド | | |
| 3 | にぶい黄褐色 (10YR6/3) | 地山ブロック 貼床 | a | にぶい黄褐色 (10YR6/3) | 焼土ブロック少 炭化粒子微 |
| 4 | にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 焼土ブロック多 床下土坑 | b | 褐色 (10YR4/4) | 焼土ブロック少 炭化粒子多 |
| 5 | にぶい赤褐色 (2.5YR3/4) | 焼土ブロック | c | にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 焼土ブロック・焼土粒子多 |
| 6 | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 地山ブロック少 炭化粒子微 | d | にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 地山粒子多 炭化粒子微 |
| 7 | にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 地山ブロック多 炭化粒子少 焼土粒子微 | e | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 地山ブロック 焼土ブロック多 |
| 8 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山粒子多 炭化粒子・焼土ブロック少 | | | |

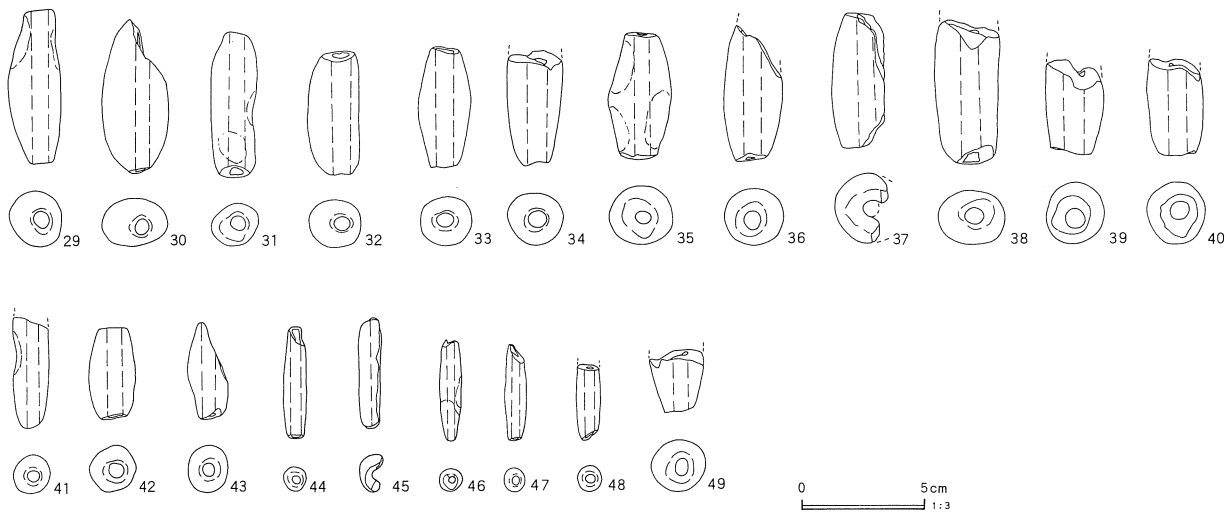
第239図 第448号住居跡

第448号住居跡出土遺物観察表 (第240図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.8)	4.4	(6.2)	BEGHJL	良好	明赤褐	25	カマド	
2	須恵坏	13.5	3.9	5.6	BCEGJ	良好	にぶい赤褐	90	カマド	末野産 底部回転糸切
3	須恵坏	(13.7)	4.1	(6.2)	ABDEGHJ	不良	明赤褐	30	覆土	末野産 底部回転糸切
4	須恵坏	(12.7)	3.8	(6.4)	E F J	不良	灰黄褐	25	覆土	末野産 底部回転糸切 磨耗著しい
5	須恵坏	(12.5)	3.7	(6.2)	ABEGHJ	不良	灰黄褐	20	覆土	末野産 底部回転糸切
6	須恵高台碗	(14.1)	5.6	5.9	BCEHJL	不良	灰黄褐	30	覆土	末野産 底部回転糸切
7	須恵高台碗	(17.5)	7.4	7.8	ABEFGHJL	良好	黄灰	40	貯蔵穴	末野産 底部回転糸切後高台貼付
8	須恵皿	1.3	6.4	BEGHJ	普通	暗褐	90	カマド	末野産 底部回転糸切	
9	須恵甕	4.0	11.6	BHJL	良好	暗青灰	80	床	末野産 底部、体部下端ヘラケズリ	
10	灰釉小瓶	4.8		F	良好	灰白	10	覆土	二川産 K-90 ハケヌリ	
11	土師甕	(18.7)	5.2	ABEG	良好	橙	30	覆土		
12	土師甕	(17.8)	9.1	BDEGJL	普通	赤褐	15	覆土		
13	土師甕	(17.9)	9.1	ABEGJ	良好	明赤褐	30	カマド		
14	土師甕	6.1	4.1	BEGHJ	普通	橙	40	-6cm		



第240图 第448号住居跡出土遺物 (1)



第241図 第448号住居跡出土遺物(2)

第448号住居跡出土遺物観察表(第240図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
15	土師甕	18.8	24.8	3.8	B E G H J L	良好	橙	80	カマド	
16	土師甕	(17.8)	16.4		B E G J	良好	橙	30	カマド	
17	不明銅製品	最大径1.60cm 厚さ0.35cm 孔径0.20cm 重さ1.66g							覆土	

第448号住居跡出土土錘観察表(第240・241図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
18	9.10	2.40	0.60	45.06	B b I	A	にぶい黄橙	100	P1
19	9.10	2.35	0.70	42.54	B a I	A	にぶい黄橙	100	
20	8.00	2.40	0.70	43.23	B b II	A	橙	100	
21	8.20	2.30	0.60	37.04	B b II	A	にぶい黄褐	100	
22	8.20	2.40	0.70	45.03	B b II	A	にぶい橙	100	
23	7.40	2.30	0.60	39.10	B b III	A	にぶい褐	100	
24	8.00	2.60	0.60	40.73	B b II	A	にぶい黄橙	100	
25	7.20	2.00	0.55	28.37	B b III	A	にぶい黄橙	100	
26	6.50	2.60	0.60	20.52	B a III	C	暗赤褐	50	
27	6.00	2.40	0.60	25.83	B b IV	A	明赤褐	80	
28	5.90	2.40	0.45	22.59	C b IV	A	浅黄橙	100	
29	6.00	2.20	0.70	21.03	B a IV	A	浅黄橙	100	
30	6.00	2.60	0.60	20.02	C a IV	A	褐	60	
31	5.70	1.90	0.60	15.04	B a IV	A	にぶい黄橙	100	
32	4.80	2.00	0.60	16.98	B a V	A	明赤褐	100	
33	4.70	2.00	0.70	16.34	B a V	A	にぶい黄橙	100	
34	(4.50)	2.20	0.70	17.11	B a III	A	橙	60	
35	5.00	2.50	0.60	23.66	B b V	A	にぶい黄橙	95	
36	(5.30)	2.30	0.70	23.27	—	A	明赤褐	—	
37	5.30	2.80	0.60	26.55	B b V	A	にぶい黄橙	—	
38	(5.70)	2.60	0.80	30.46	C a II	A	にぶい褐	70	
39	(3.70)	2.40	0.80	17.09	—	A	橙	—	
40	(3.80)	2.50	0.70	17.89	—	A	明赤褐	—	
41	(4.40)	1.50	0.50	8.78	B a III	A	灰白	60	
42	3.60	1.80	0.60	10.66	B a VI	A	橙	100	
43	(3.80)	1.80	0.50	7.81	—	A	橙	—	
44	(4.40)	1.00	0.30	3.08	A a V	A	にぶい黄橙	90	
45	4.40	1.50	0.40	4.60	—	C	灰黄褐	—	

第448号住居跡出土土錘観察表（第240・241図）

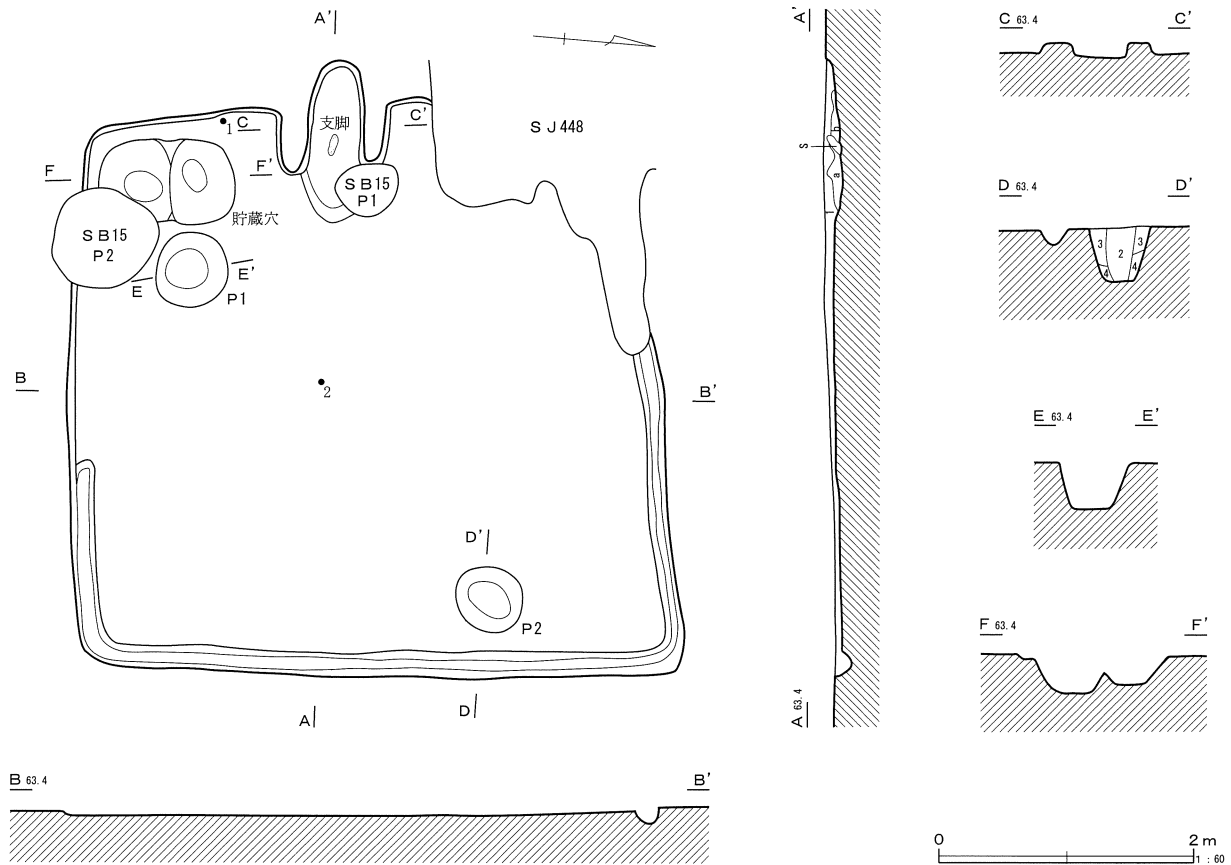
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
46	(4.00)	0.90	0.25	2.56	—	C	灰黄褐	—	
47	(3.80)	0.90	0.35	2.19	A a VI	A	にぶい黄橙	90	カマド
48	(2.90)	1.00	0.40	2.94	A a VI	A	浅黄橙	70	
49	(2.50)	2.20	0.70	8.09	B b	C	にぶい黄橙	—	

第449号住居跡（第242・243図）

I-24・25グリッドに位置する。第448号住居跡・第15号掘立柱建物跡に切られ、第445・462号住居跡を切る。平面形は正方形で、南北4.78m、東西4.58m、深さは0.07~0.13mである。主軸方位はN-93°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁の状態は不明瞭である。

カマドは西壁に設置される。燃烧部は10cm程掘り込み緩やかに立ち上がる。川原石利用の支脚が立位で検出された。貯蔵穴はカマド左に設けられていた。108×66cmの楕円形だが底面が南北に分かれて検出された。深さは南側が29cm、北側が24cmである。壁溝は北壁から南東コーナーにかけて検出され、幅14~28cm、深さ6~12cmである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは37cm、42cmである。



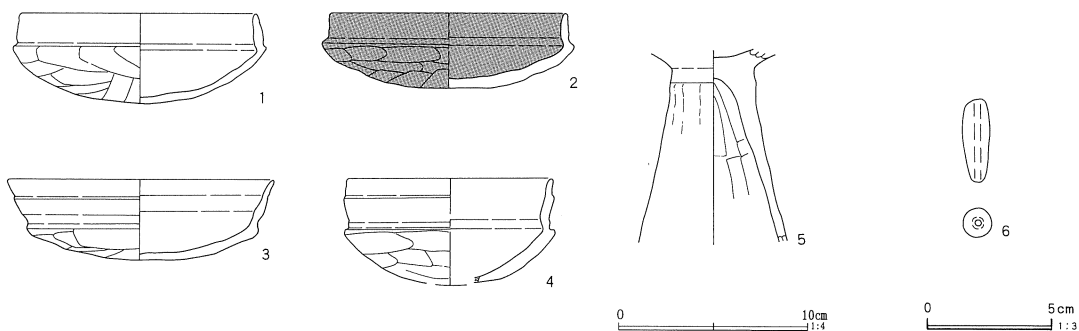
- S J 4 4 9
 1 暗褐色 (10YR3/3) 地山ブロック僅か、焼土ブロック少
 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 焼土ブロック少 炭化粒子やや多
 3 暗褐色 (10YR3/3) 焼土ブロック極少 炭化粒子僅か
 4 暗褐色 (10YR3/3) 炭化粒子少 地山ブロック僅か

- カマド
 a 暗褐色 (10YR3/3) 焼土ブロック極多 炭化粒子少量
 b 暗褐色 (10YR3/3) 焼土ブロック・炭化粒子少 灰僅か

第242図 第449号住居跡

遺物は、古墳時代後期の土師器片が多く出土した。特に坏類が多く、甕類は少なかった。

図示可能な遺物は、土師器坏4・高坏1、土錘1点である。



第243図 第449号住居跡出土遺物

第449号住居跡出土遺物観察表 (第243図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.5	4.7		BCDEG	普通	橙	100	+3cm	内外面黒色処理
2	土師坏	12.5	4.0		BCDE	普通	浅黄橙	50	+5cm	
3	土師坏	(14.1)	4.2		BCDEJ	普通	橙	80	覆土	
4	土師坏	(10.8)	5.6		BDE	普通	褐	30	覆土	
5	土師高坏		10.2		BDEJ	普通	橙	30	覆土	

第449号住居跡出土土錘観察表 (第243図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	3.25	1.15	0.25	3.72	BaVI	A	にぶい黄橙	100	

第450号住居跡 (第244・245図)

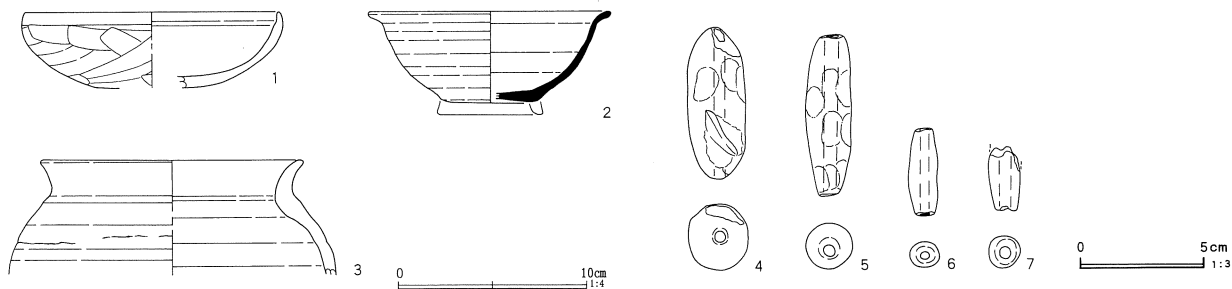
I・J-26グリッドに位置する。第452・460号と重複し、本住居跡が新しい。床面をグリッドピットに壊されていた。平面形は東西に長い長方形で、長軸3.90m、短軸2.88mで、深さは0.02~0.06mと浅い。主軸方位はN-79°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁の状態は不明瞭である。

カマドは東壁中央に設置される。燃烧部は10cm程掘り込み急激に立ち上がる。支脚に利用したと思われる川原石が倒位で出土した。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、奈良・平安時代の土師器・須恵器の破片が出土したが、小片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1・甕1、須恵器高

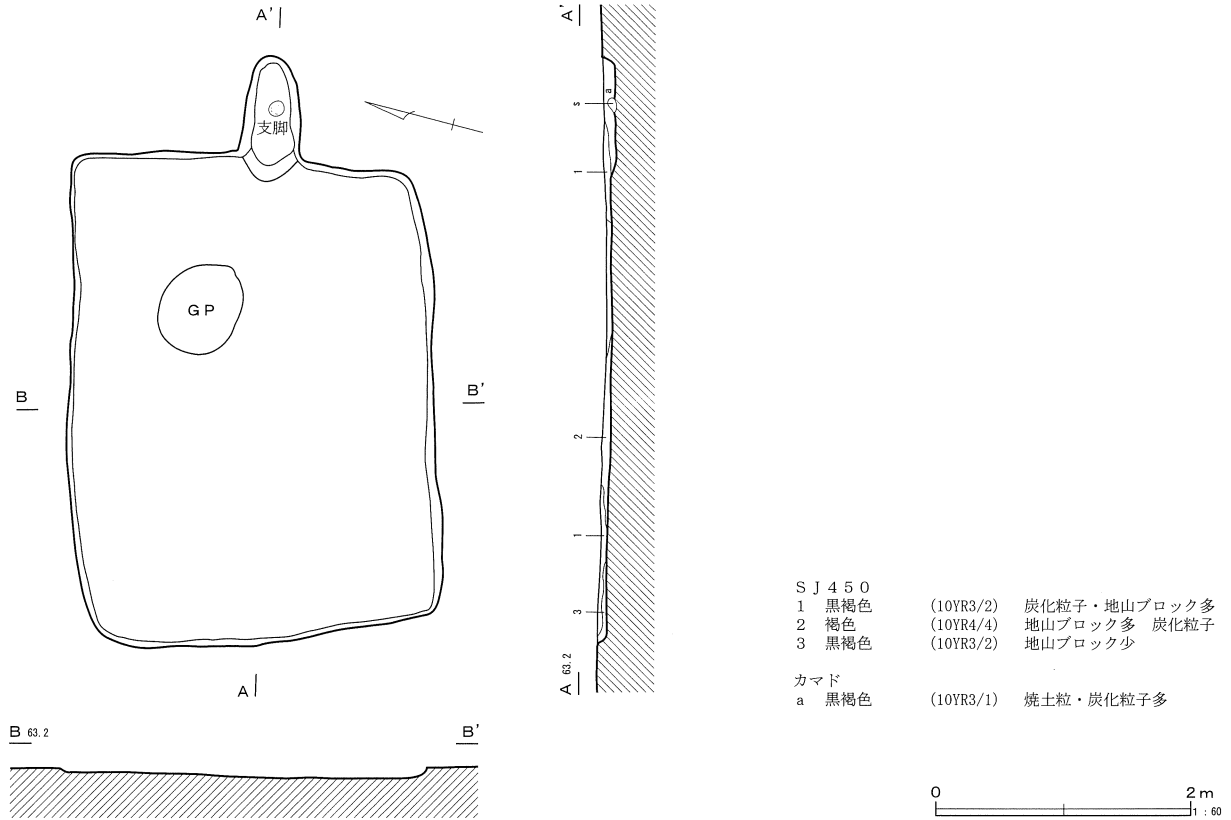


第244図 第450号住居跡出土遺物

台付椀1、土錘4点であった。

1の土師器坏は混入品と考えられ、本住居に伴うものは2・3と考えられる。

3はロクロ成型の甕で、短く「く」の字に外反する口縁部を有する。胴部はヨコナデが施されていた。



第245図 第450号住居跡

第450号住居跡出土遺物観察表 (第244図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(13.4)	4.0		ABEFGH	良好	橙	30	覆土	
2	須恵高台椀	(12.8)	4.8	(4.2)	BCDEGJL	不良	明赤褐	20	覆土	末野産 高台剥離
3	土師甕	(13.7)	6.1		ABFGHJL	良好	黒	25	覆土	ロクロ甕

第450号住居跡出土土錘観察表 (第244図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	6.00	2.10	0.45	34.10	B a IV	C	にぶい黄褐	95	
5	6.35	1.80	0.50	18.42	B b IV	A	明褐	100	
6	3.45	1.20	0.35	3.84	B b VI	A	浅黄橙	100	
7	(2.50)	(1.30)	(0.50)	3.12	—	A	にぶい褐	—	

第451号住居跡（第246・247図）

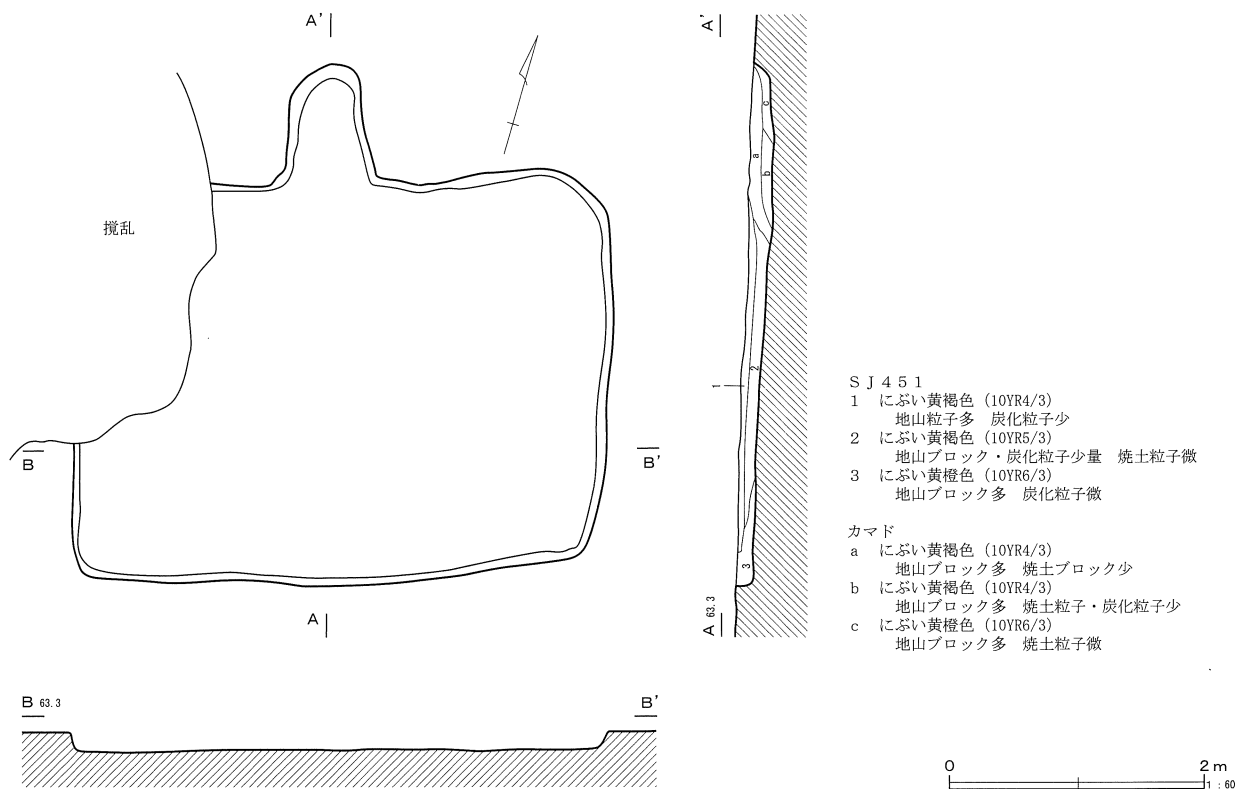
H-23グリッドに位置する。第455号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北西コーナー周辺は攪乱で壊されていた。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.26m、短軸3.12m、深さは0.12~0.18mである。主軸方位はN-18°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

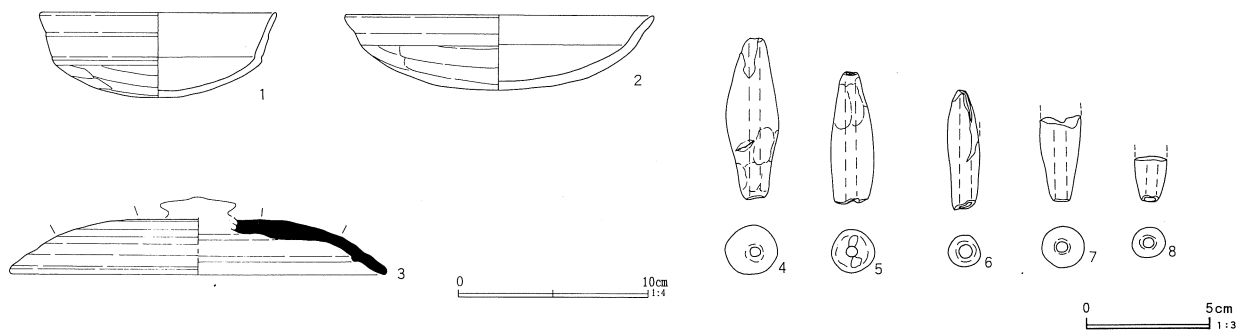
カマドは北壁に設置される。燃烧部の掘り込みは極僅かで急激に立ち上がる。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が出土したが、小片が多く接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏2、須恵器蓋1、土鍾5点であった。



第246図 第451号住居跡



第247図 第451号住居跡出土遺物

第451号住居跡出土遺物観察表（第247図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.4	4.5		A B E G J	普通	橙	80	B区	
2	土師坏	16.3	4.0		A B C D E G J L	不良	明赤褐	80	B区	
3	須恵蓋	(19.7)	3.0		B E H J L	普通	暗灰	40	A・B区	末野産 天井部回転ヘラケズリ

第451号住居跡出土土錘観察表（第247図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	6.30	2.10	0.35	22.07	C b IV	C	橙	95	A区
5	5.20	1.70	0.45	13.74	B b V	B	にぶい橙	100	B区
6	4.70	1.30	0.50	6.57	B a V	B	にぶい赤褐	85	A区
7	(3.35)	1.70	0.45	7.04	B a III	B	にぶい黄橙	50	
8	(1.80)	1.30	0.40	2.06	—	A	橙	—	カマド

第452号住居跡（第248・249・250図）

I・J-26・27グリッドに位置する。第450・538号住居跡に切られ、第557・559号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。西壁の南半は検出できなかった。南東コーナーや南壁、北壁の一部は攪乱で壊されていた。平面形は正方形で、南北7.29m、東西7.14m、深さは0.09～0.12mである。主軸方位はN-29°-Wを指す。

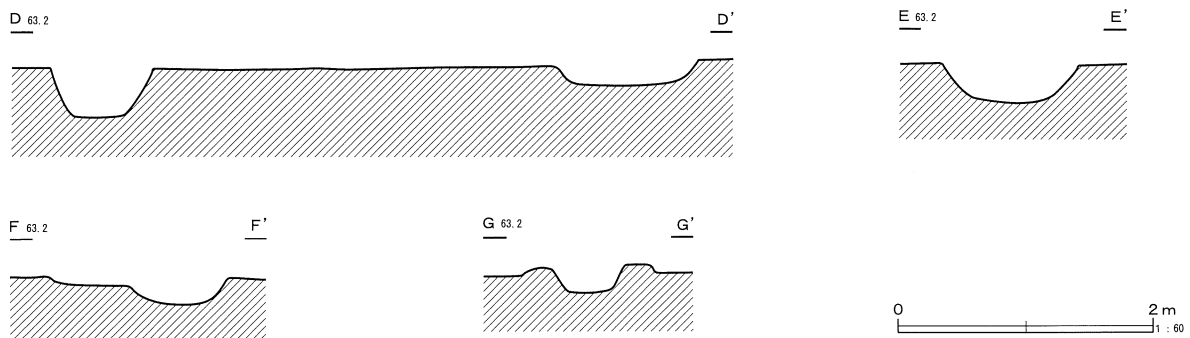
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁中央より西寄りに設置される。燃焼

部の掘り込みは浅く、緩やかな段で煙道部となる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、119×108cmの隅丸台形形で、深さは30cmである。壁溝は各壁で検出され、幅13～22cm、深さ4～11cmである。ピットは4本検出され、P1～P4の深さは6cm、20cm、36cm、19cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器が出土したが小片が多く接合しなかった。

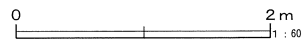
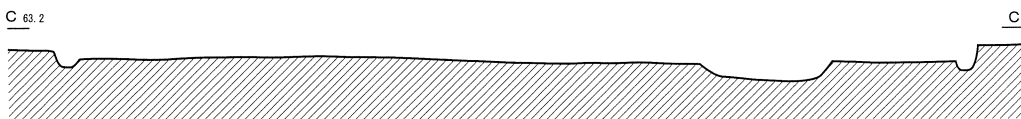
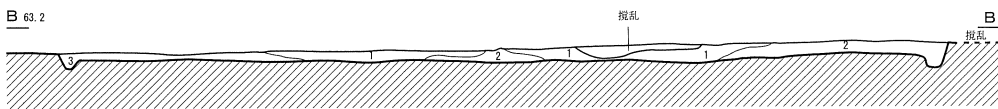
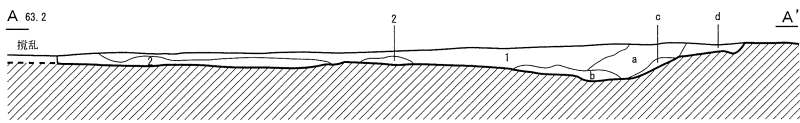
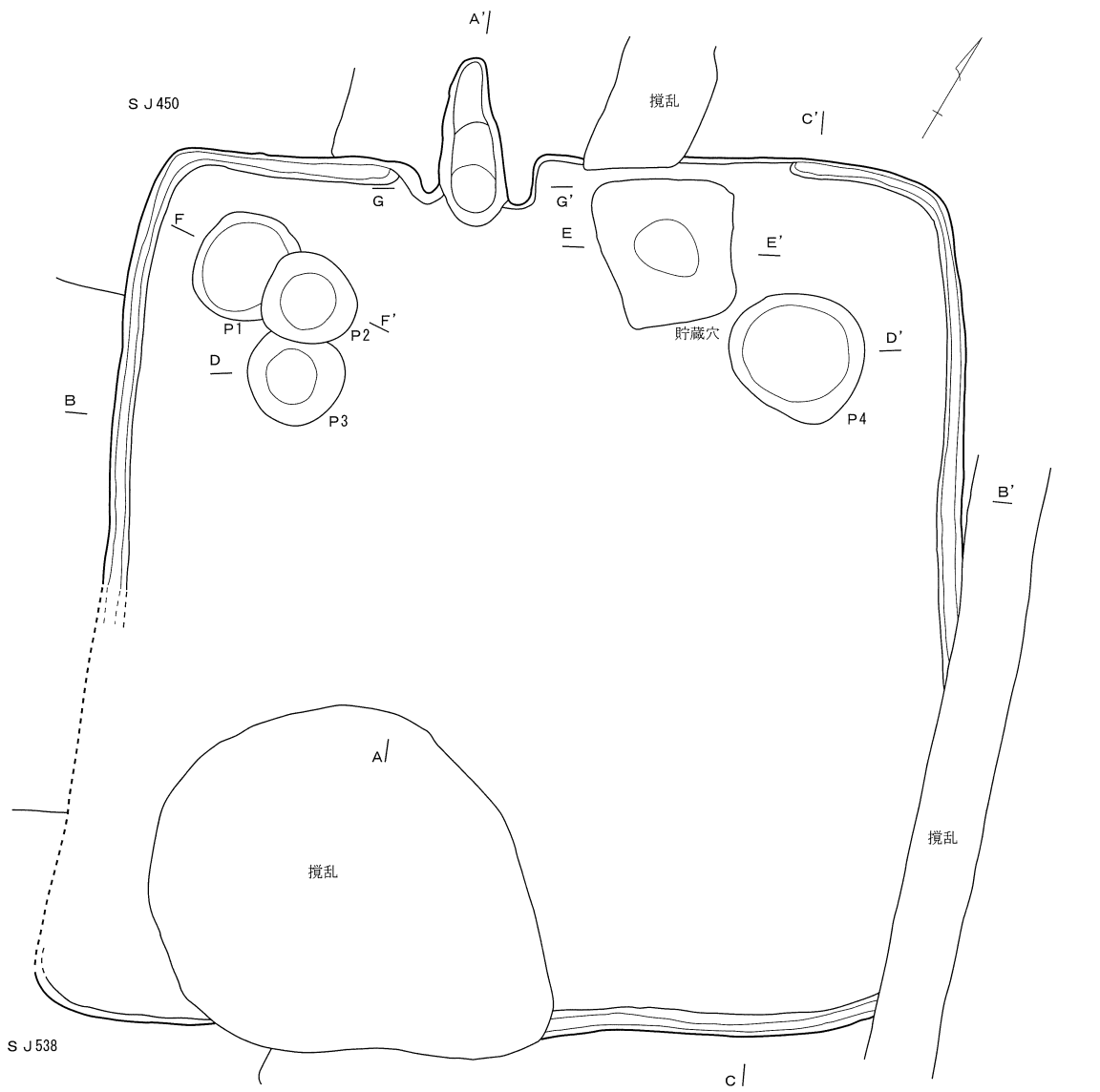
図示可能な遺物は、土師器坏5・甕2・甌1、須恵器坏2・蓋1、石製紡錘車1、棒状鉄製品1、土錘24点であった。



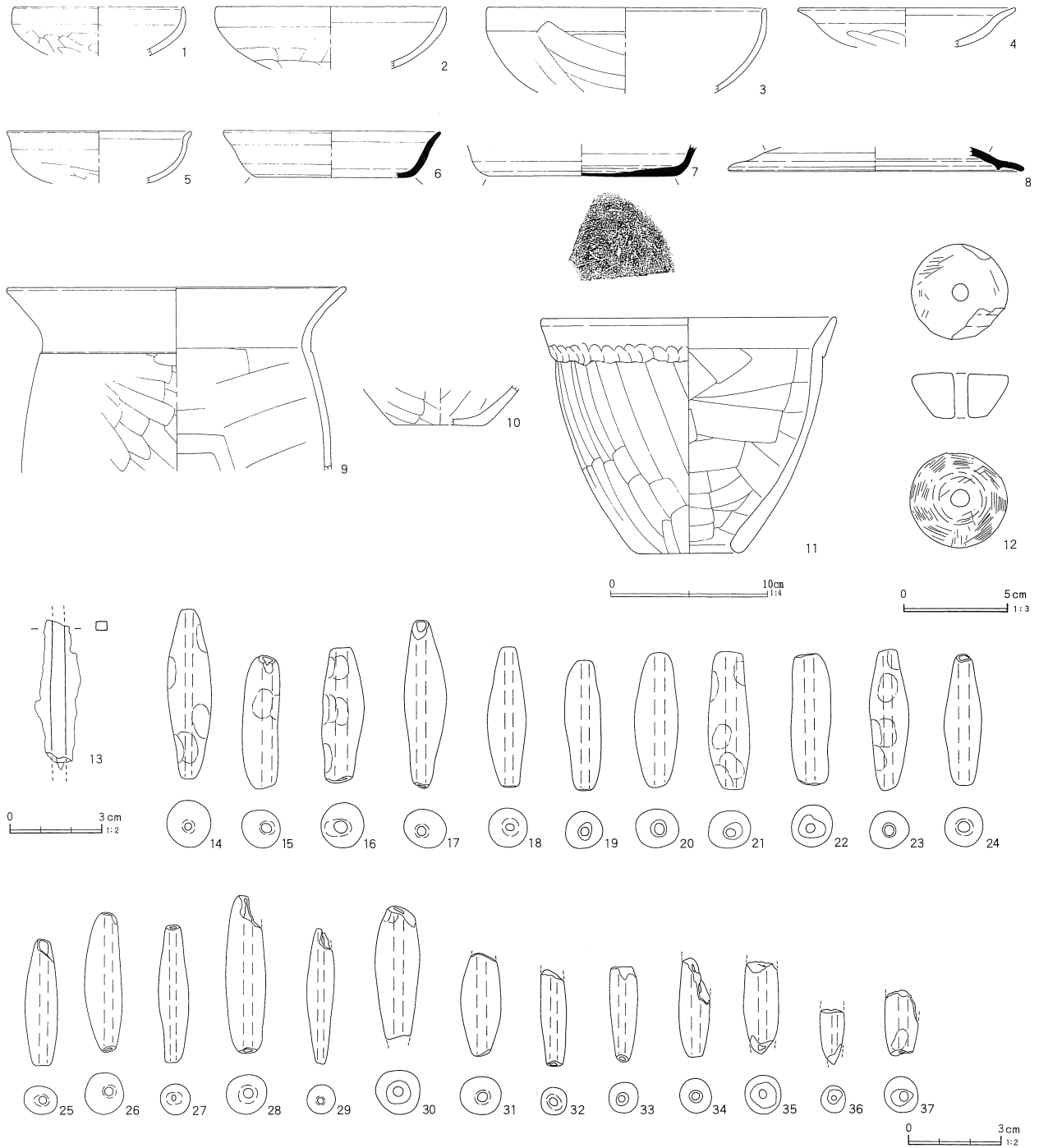
- S J 4 5 2
 1 黒褐色 (10YR3/1) 地山ブロック 炭化粒子多
 2 黒褐色 (10YR3/2) 地山ブロック少 炭化粒子
 3 黒褐色 (10YR3/2) 地山ブロック 炭化粒子多

- カマド
 a 黒褐色 (10YR3/1) 焼土ブロック・炭化粒子多
 b 褐灰色 (10YR4/1) 灰層 炭化粒子・焼土ブロック多
 c 褐色 (10YR4/4) 地山ブロック多
 d 黒褐色 (10YR3/2) 地山ブロック・焼土粒多

第248図 第452号住居跡（1）



第249图 第452号住居迹 (2)



第250図 第452号住居跡出土遺物

第452号住居跡出土遺物観察表（第250図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(10.8)	3.1		ABG	良好	灰黄褐	20	覆土	
2	土師坏	(14.8)	4.0		BDEFL	良好	明赤褐	30	覆土	
3	土師坏	(17.8)	5.5		BEF	普通	橙	20	カマド	
4	土師坏	(13.8)	2.5		ABDG	良好	橙	15	覆土	
5	土師坏	(11.8)	3.3		BG	良好	明赤褐	10	覆土	
6	須恵坏	(13.8)	3.0	(9.5)	BFJ	良好	灰	10	覆土	末野産 手持ヘラケズリか?
7	須恵坏		2.1	(12.2)	ABEHJ	不良	にぶい橙	20	覆土	末野産 底部全面ヘラケズリ?

第452号住居跡出土遺物観察表（第250図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
8	須恵蓋	(18.6)	1.6		B F	良好	褐灰	10	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ 重さ60.55 g
9	土師甕	(21.8)	11.8		B C D E F G J	良好	橙	20	カマド	
10	土師甕		2.6	(5.8)	B D E F G J	良好	橙	40	覆土	
11	土師甕	(18.8)	15.0	(6.0)	A B E J L	良好	明赤褐	40	覆土	
12	石製紡錘車	長径4.60cm 短径2.55cm 厚さ2.15cm 孔径0.90cm						90	覆土	
13	棒状鉄製品	現存長4.52cm 幅0.50cm 厚さ0.30cm 重さ9.64 g							覆土	

第452号住居跡出土土錘観察表（第250図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
14	8.10	2.25	0.35	31.43	C a II	C	にぶい橙	100	
15	6.35	1.90	0.50	20.55	A a IV	C	灰黄褐	95	
16	6.40	2.10	0.65	23.16	C b IV	C	にぶい黄褐	100	
17	8.00	2.05	0.45	23.01	C a II	C	褐灰	100	
18	6.70	1.90	0.40	20.97	C b III	A	灰黄褐	100	
19	6.20	1.85	0.40	19.47	B b IV	A	黒褐	100	
20	6.40	2.00	0.55	20.32	B a IV	A	橙	100	
21	6.60	2.05	0.50	22.65	B b III	A	橙	100	
22	6.25	2.10	0.50	23.83	B b IV	A	黒褐	100	
23	6.70	1.95	0.50	18.57	C a III	C	にぶい黄褐	100	
24	6.25	1.85	0.50	15.98	C a IV	A	黒褐	95	
25	6.05	1.60	0.40	11.37	B a IV	C	にぶい褐	100	
26	6.70	2.00	0.45	21.17	B a III	A	黒褐	100	
27	6.55	1.45	0.30	12.24	B a III	A	黒褐	100	
28	7.50	1.95	0.45	24.40	B b II	A	にぶい黄橙	95	
29	6.45	1.40	0.30	9.02	B a IV	C	黒褐	95	
30	(6.35)	2.20	0.50	26.60	B a IV	A	にぶい黄橙	90	
31	(4.85)	1.90	0.50	15.02	C a V	C	灰黄褐	90	
32	(4.60)	1.30	0.45	7.33	B b IV	C	褐灰	85	
33	4.50	1.50	0.35	7.64	B b V	C	黒褐	100	
34	(4.70)	1.65	0.40	10.15	B a IV	A	にぶい橙	70	
35	(4.40)	1.85	0.45	12.57	—	A	褐灰	—	
36	(2.65)	1.30	0.25	3.32	—	C	黒褐	—	
37	(3.15)	1.80	0.50	7.53	—	C	にぶい黄褐	—	

第453号住居跡（第251・252図）

I-22・23グリッドに位置する。第471号住居跡に切られ、第454・457・465号住居跡を切る。北壁と南壁、床面中央近くを攪乱で壊されていた。平面形は正方形に近く、南北6.20m、東西5.84m、深さは0.21～0.29mである。主軸方位はN-9°-Wを指す。

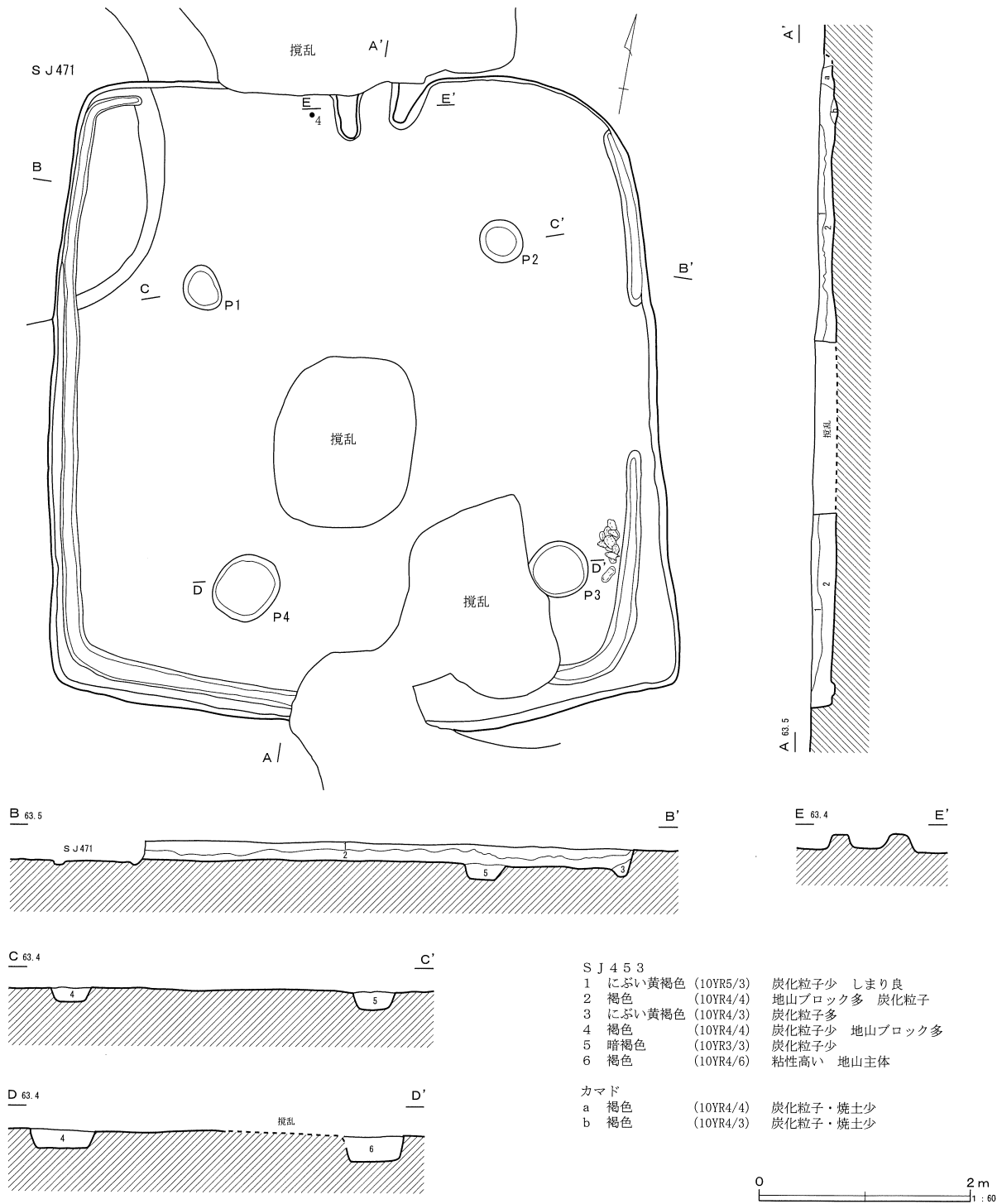
床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは北壁に設置される。燃焼部の掘り込みはなく、先端は攪乱で壊されていた。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北壁以外で検出され、幅8～23

cm、深さ3～7cmである。壁から離れて検出された部分が多い。ピットは4本検出され、P1～P4の深さは12cm、19cm、24cm、18cmである。何れも主柱穴と考えられるが、住居跡の平面形からやや西に傾く。南東コーナー近くで編物石が12個まとまって出土した。

遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器の破片が出土した。特に土師器甕の破片は多かったが、胴部片が多く、しかも磨滅が著しく、接合しなかった。

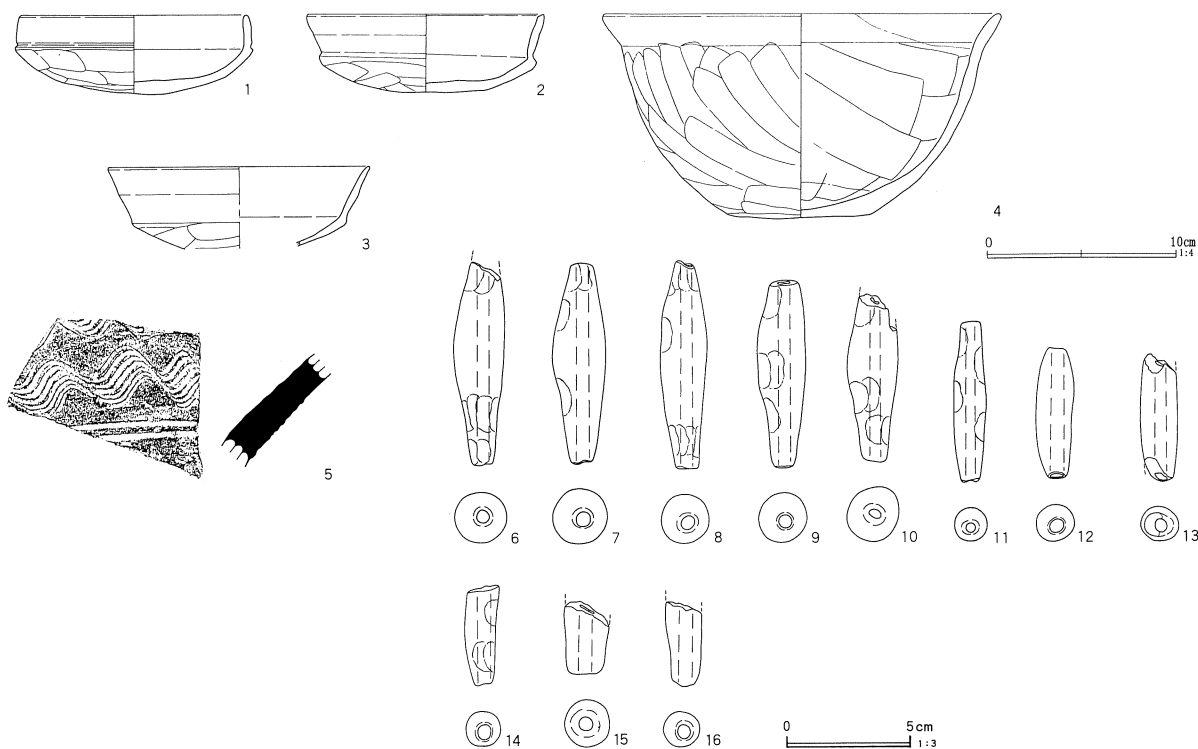
図示可能な遺物は、土師器坏3・鉢1、須恵器甕1、土錘11点であった。



第251図 第453号住居跡

第453号住居跡出土遺物観察表 (第252図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.0	4.2		ABDEG	不良	明赤褐	90	A区	内面煤付着 末野産
2	土師坏	12.6	4.1		ABCDEG	普通	赤褐	90	A区	
3	土師坏	(13.8)	4.3		ABDEGJ	普通	橙	25	B区	
4	土師鉢	20.9	10.7	7.7	ABDEGJL	普通	明赤褐	70	床	
5	須恵甕				AHJL	良好	暗灰		A区	



第252図 第453号住居跡出土遺物

第453号住居跡出土土錘観察表 (第252図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	(7.95)	2.05	0.50	24.53	C a I	A	にぶい黄橙	95	A区
7	7.90	2.15	0.60	25.84	C a II	A	橙	100	A区
8	8.20	1.95	0.60	20.89	C a II	A	橙	100	B区
9	7.30	2.00	0.50	21.14	C a III	A	にぶい黄橙	100	B区
10	(6.60)	2.20	0.50	22.49	C b II	C	にぶい黄橙	85	A区
11	6.30	1.35	0.35	9.23	B b IV	C	橙	100	A区
12	5.15	1.50	0.60	8.60	B a V	A	橙	100	
13	5.05	1.50	0.55	8.53	A a V	A	明赤褐	90	A区
14	3.95	1.40	0.60	6.08	B a VI	A	橙	100	B区
15	(2.85)	1.40	0.50	8.30	—	C	灰黄褐	—	B区
16	(3.30)	1.40	0.60	4.99	—	A	にぶい黄橙	40	B区

第454号住居跡 (第253・254図)

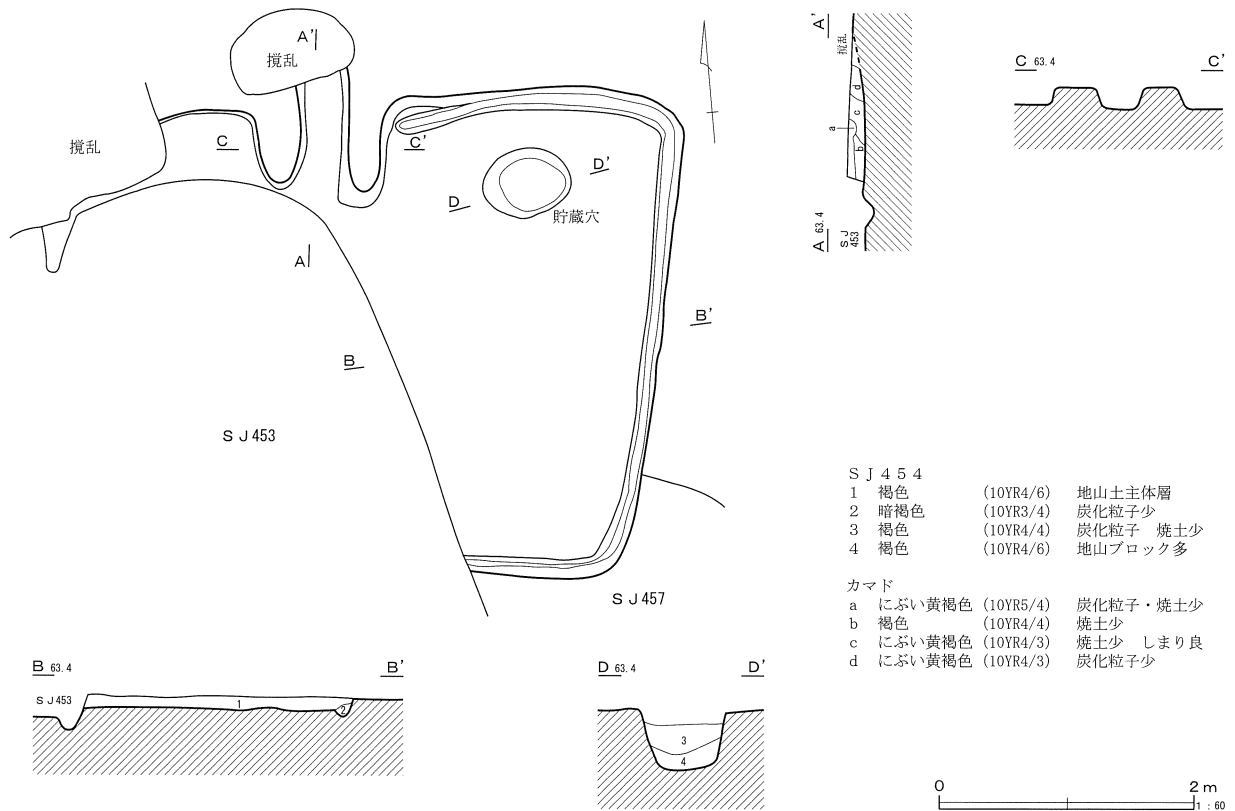
I-23グリッドに位置する。第453・457号住居跡に切れ、第465号住居跡を切る。概ね住居跡の東半が検出され、平面形は東西に長い長方形と考えられる。検出した規模は、東西4.10m、南北3.79mで、深さは0.07~0.10mである。主軸方位はN-8°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

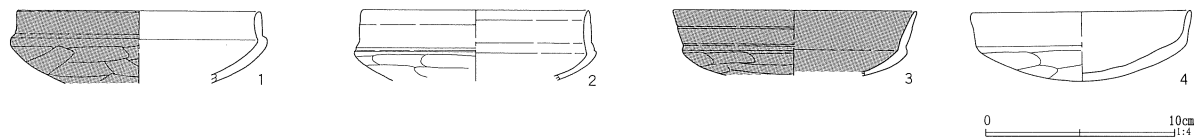
カマドは北壁に設置される。先端は攪乱で壊されていた。燃烧部の掘り込みはなく緩やかに立ち上がる。貯蔵穴はカマド右に設けられ、70×52cmの楕円形で、深さは42cmである。壁溝は東半部で検出され、幅12~20cm、深さ4~10cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土した。殆ど坏の破片で、接合率は悪かった。

図示可能な遺物は土師器坏4点であった。



第253図 第454号住居跡



第254図 第454号住居跡出土遺物

第454号住居跡出土遺物観察表 (第254図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.8)	3.7		ABDEG	普通	にぶい橙	20	覆土	外面黒色処理
2	土師坏	(12.0)	3.7		BDFGJL	良好	赤褐	10	覆土	
3	土師坏	(12.9)	3.4		BDEFGJ	普通	灰褐	20	覆土	内外面黒色処理
4	土師坏	(11.6)	3.7		ABDEFJL	良好	浅黄橙	30	P1	

第455号住居跡 (第255・256図)

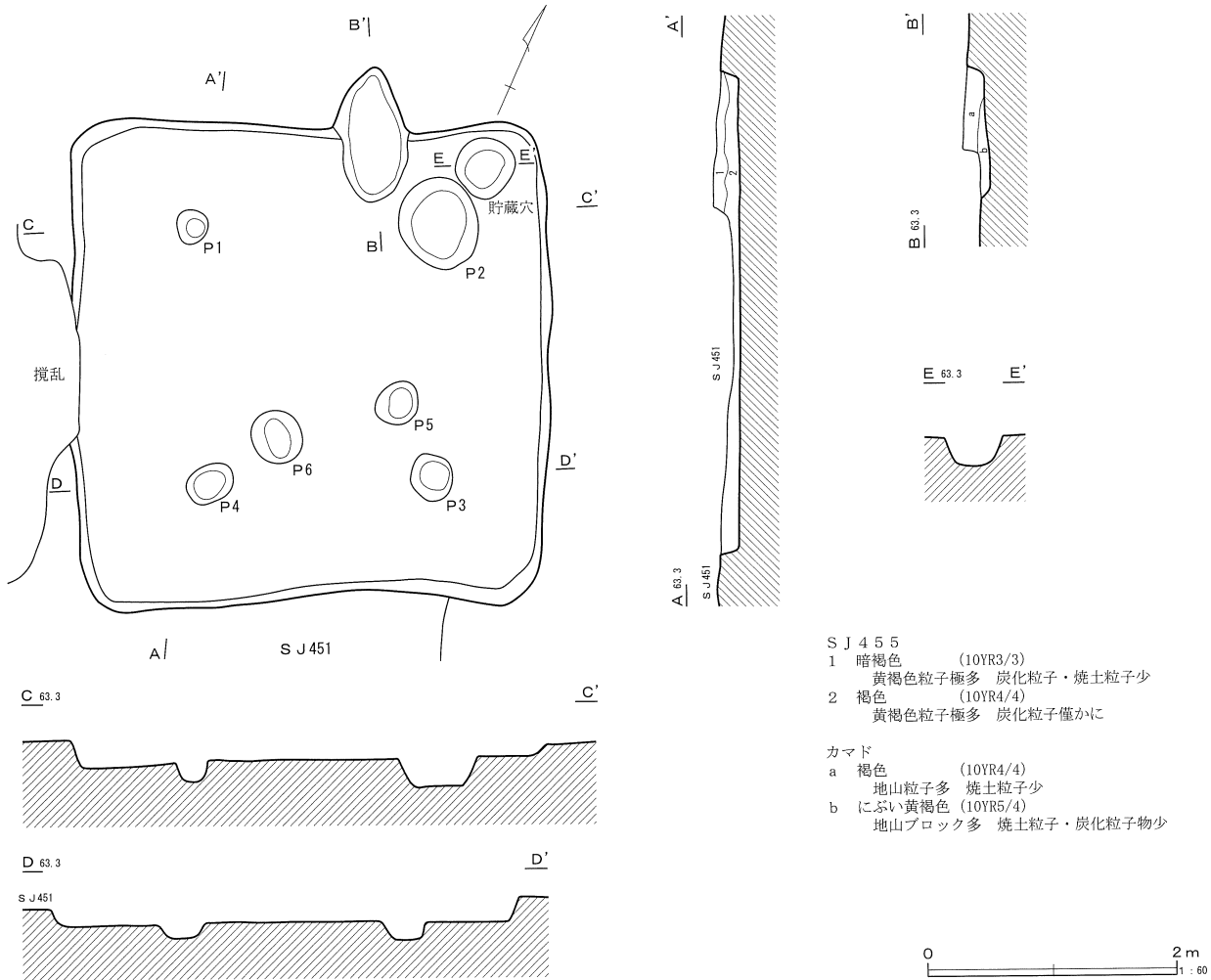
H-23グリッドに位置する。第451号と重複し、本住居跡が古い。西壁中央は攪乱で壊されていた。平面形は正方形で、東西3.92m、南北3.88m、深さは0.14~0.19mである。主軸方位はN-21°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは北壁中央より東寄りに設置される。燃燒部は10cm程掘り込み急激に立ち上がる。貯蔵穴はカマド右の北東コーナー近くに設けられ、径50cmの円形で、深さは24cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは6本検出され、P1~P6の深さは16cm、25cm、14cm、10cm、13cm、12cmである。P1~P4は支柱穴と考えられる。

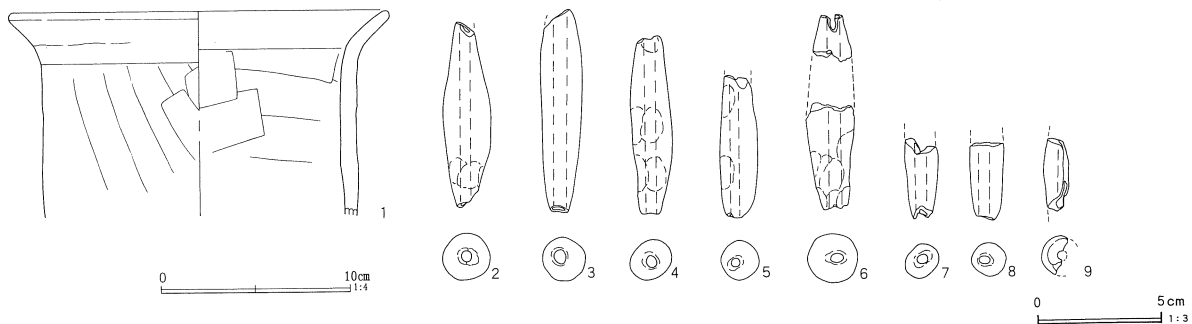
遺物は、古墳時代後期の土師器片が多量に出土したものの、胴部の小片が多く、磨滅も著しいため殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器甕1、土錘8点であった。



- S J 4 5 5
 1 暗褐色 (10YR3/3)
 黄褐色粒子極多 炭化粒子・焼土粒子少
 2 褐色 (10YR4/4)
 黄褐色粒子極多 炭化粒子僅かに
 カマド
 a 褐色 (10YR4/4)
 地山粒子多 焼土粒子少
 b にぶい黄褐色 (10YR5/4)
 地山ブロック多 焼土粒子・炭化粒子物少

0 2m
1:60



第455号住居跡出土遺物観察表 (第256図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師甕	(19.9)	10.8		A B G J	良好	橙	15	B区	

第455号住居跡出土土錘観察表 (第256図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	7.25	1.90	0.40	20.91	C a III	A	にぶい橙	95	A区
3	7.90	1.70	0.55	20.56	B a II	A	明赤褐	95	B区
4	7.00	1.70	0.50	15.56	B a III	A	にぶい黄橙	95	B区
5	5.60	1.55	0.35	14.08	B a IV	B	黒褐	90	B区
6	(4.20)	1.95	0.50	13.26	—	A	黒	50	A区
7	(3.20)	1.40	0.40	3.92	B a IV	A	にぶい褐	40	B区
8	(3.05)	1.35	0.40	5.44	B a IV	B	黒褐	45	B区
9	(2.80)	(1.55)	0.35	3.60	—	B	にぶい黄橙	25	A区

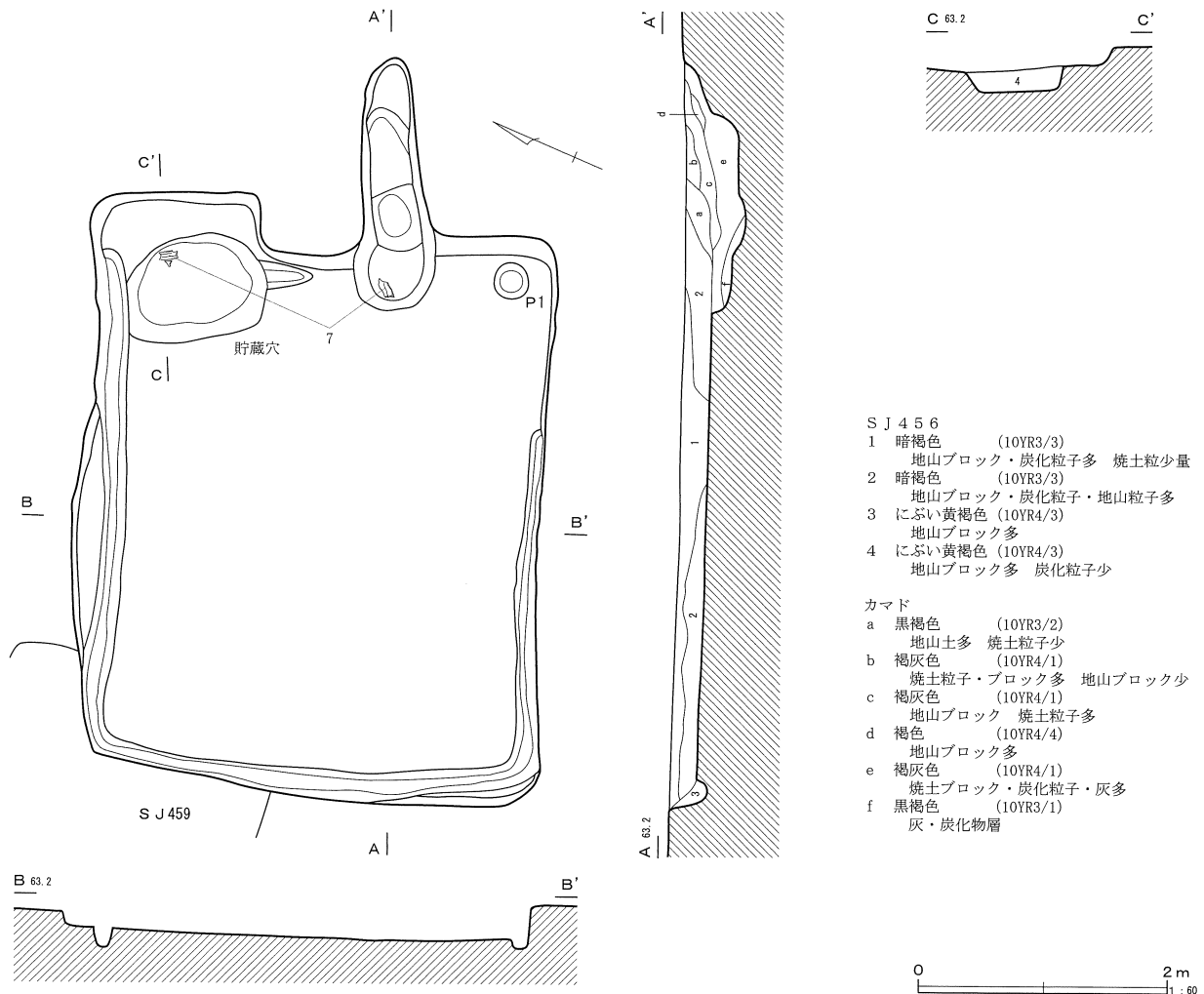
第456号住居跡 (第257・258図)

J-25・26グリッドに位置する。第458号住居跡に切られ、第462・497・539号住居跡を切る。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.61m、短軸3.82m、深さは0.21~0.26mである。主軸方位はN-67°-Eを

指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。北壁の北東コーナー近くは東に張り出していた。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部は30cm近く掘り込み、煙道部で段を持つ。貯蔵穴



第257図 第456号住居跡

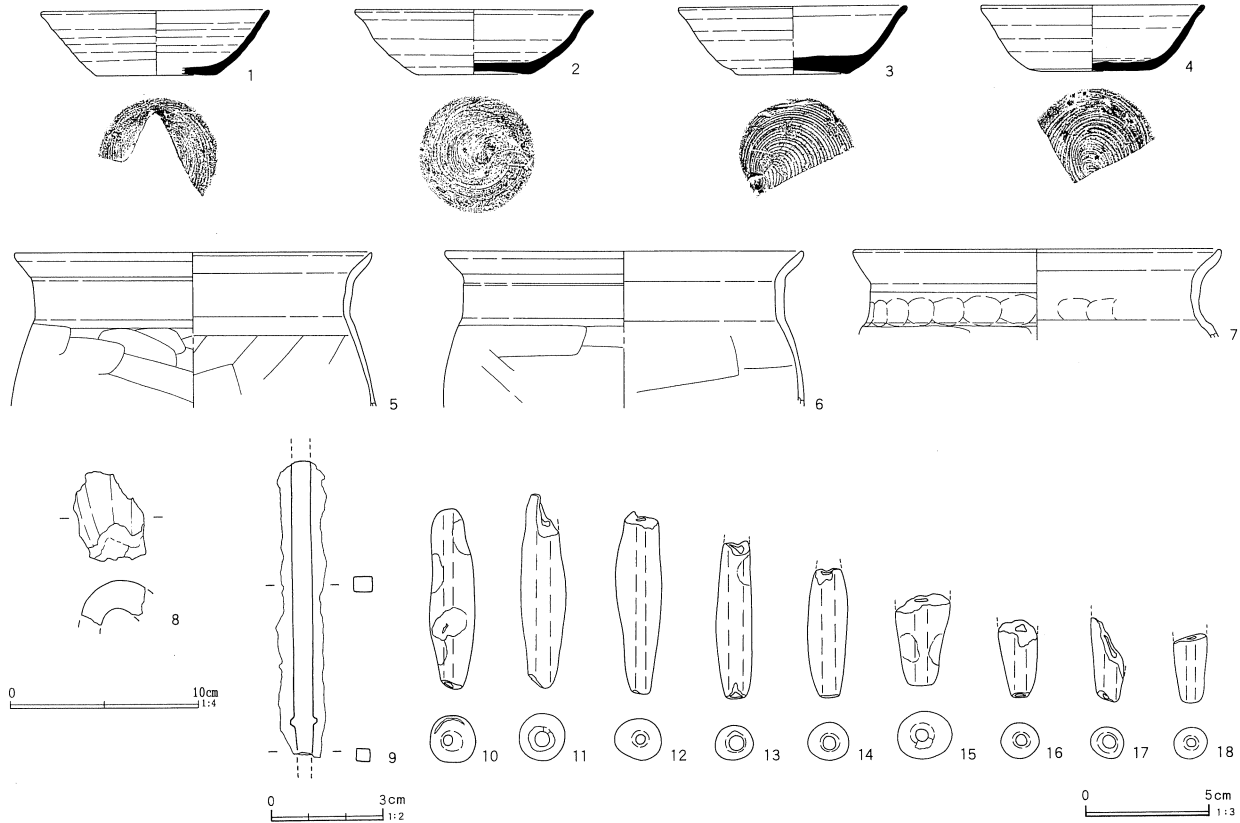
は北東コーナーの張り出し部に設けられ、116×86 cmの楕円形で、深さは71cmである。壁溝は各壁で検出され、幅12~25cm、深さ4~16cmである。ピットは1本検出され、深さは11cmである。

遺物は、覆土から平安時代の土師器・須恵器の破片がやや多く出土したが、小片が多く、殆ど接合し

なかった。

図示可能な遺物は、土師器甕3、須恵器坏4、羽口1、鉄鍬1、土錘9点出土した。

図示した須恵器坏は全て末野産であったが、掲載できなかった坏類には南比企産のものが僅かに含まれていた。



第258図 第456号住居跡出土遺物

第456号住居跡出土遺物観察表 (第258図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	12.1	3.4	(6.4)	A F H J L	良好	灰	60	覆土	末野産 底部回転糸切
2	須恵坏	(12.7)	3.5	6.2	A B E F J	良好	灰	30	覆土	末野産 底部回転糸切
3	須恵坏	(12.1)	3.6	(6.1)	A B F H	良好	暗青灰	40	覆土	末野産 底部回転糸切
4	須恵坏	(11.8)	3.5	(6.6)	C D F	良好	暗青灰	30	覆土	末野産 底部回転糸切
5	土師甕	(19.0)	8.2		B D E F G J	良好	橙	25	覆土	
6	土師甕	(19.0)	8.3		B D E G	良好	橙	30	覆土	
7	土師甕	19.3	4.8		B D E F G	良好	橙	70	カマド	
8	羽口	残存長4.70cm 幅3.80cm 厚さ1.55cm					褐灰色		覆土	重さ25.66g
9	鉄鍬	現存長7.80cm 幅0.50cm 厚さ0.40cm					重さ17.61g		覆土	棘状の関を有する

第456号住居跡出土土錘観察表（第258図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
10	7.10	1.95	0.45	21.00	B b III	C	にぶい橙	95	カマド
11	7.65	1.85	0.60	18.09	B a II	A	浅黄橙	95	
12	(7.15)	1.85	0.40	17.89	C a III	C	黒褐	90	
13	(6.15)	1.50	0.60	10.38	A a IV	A	橙	90	
14	(5.05)	1.60	0.55	10.18	B a V	A	にぶい橙	90	
15	(3.55)	2.15	0.55	11.13	—	A	にぶい橙	40	
16	(3.00)	1.60	0.50	5.24	—	C	にぶい黄橙	30	
17	(3.30)	1.30	0.50	3.22	—	A	黒褐	30	
18	(2.70)	1.30	0.35	3.56	—	A	明赤褐	20	

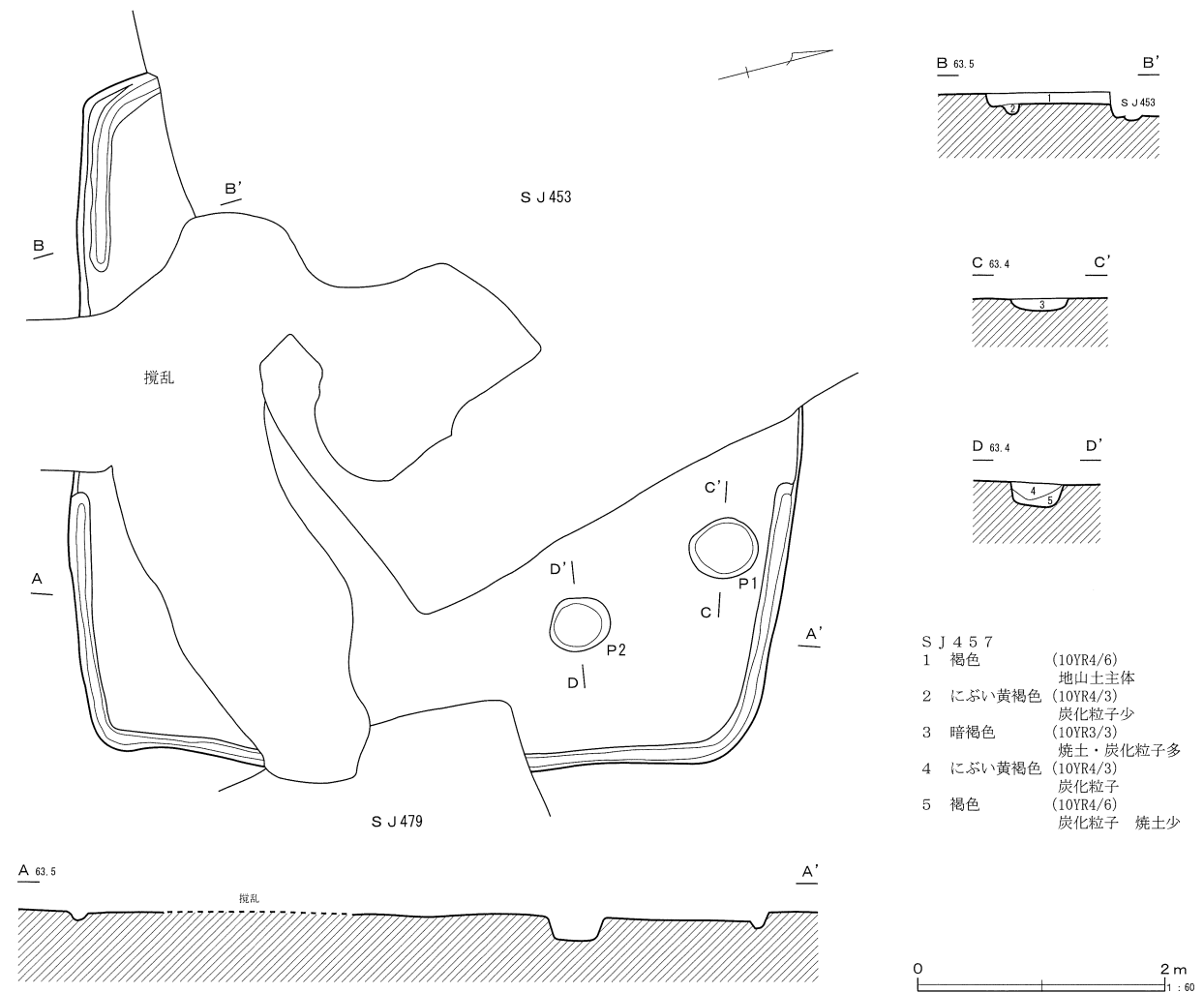
第457号住居跡（第259・260図）

I-23グリッドに位置する。第453・479号住居跡に切られ、第454号住居跡を切る。南壁から床面中央までを大きく攪乱で壊される。平面形は正方形に近いと考えられ、南北5.93m、東西5.51mで、深さは

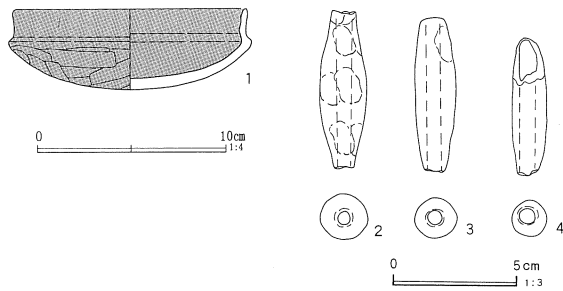
0.01~0.04mと浅い。主軸方位はN-17°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁の状態は不明瞭である。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は各壁



第259図 第457号住居跡



第260図 第457号住居跡出土遺物

で検出され、幅10~18cm、深さ1~6cmである。北壁と南壁の中央では途切れるようである。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは10cm、18cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土した。図示可能な遺物は、土師器片1、土錘3点であった。

第457号住居跡出土遺物観察表 (第260図)

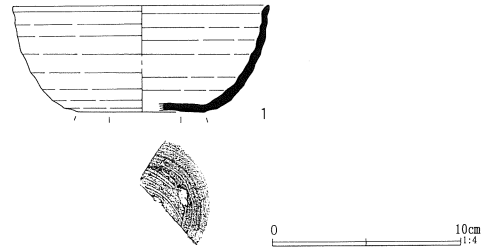
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	12.2	4.3		BDEJ	良好	橙	80	覆土	内外面黒色処理

第457号住居跡出土土錘観察表 (第260図)

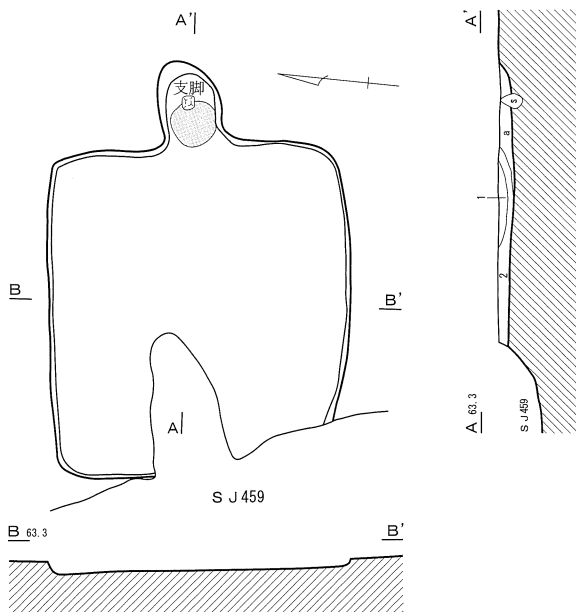
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	6.20	1.90	0.50	17.44	CaIV	A	にぶい黄橙	100	
3	6.10	1.70	0.60	13.55	BaIV	A	にぶい黄橙	100	
4	5.40	1.45	0.60	8.70	BaV	A	にぶい褐	85	

第458号住居跡 (第261・2621図)

J-25グリッドに位置する。第459号住居跡に切られ、第456・462号住居跡を切る。平面形は東西に僅かに長い長方形で、長軸2.58m、短軸2.42m、深さは0.07~0.11mである。主軸方位はN-84°-Eを



第261図 第458号住居跡出土遺物



第262図 第458号住居跡

- S J 4 5 8
 1 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子微
 2 黒褐色 (10YR3/2) 地山ブロックやや多 焼土ブロック少
 カマド
 a 黒褐色 (10YR3/2) 焼土ブロック・炭化粒子やや多

指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央に設置される。燃烧部の掘り込みはなく、火床面が検出された。川原石利用の支脚が立位で出土した。貯蔵穴、壁溝は検出されなかつ

た。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が少量出土した。何れも小片が多く、図示可能な遺物は、須恵器坏1点のみであった。

第458号住居跡出土遺物観察表 (第261図)

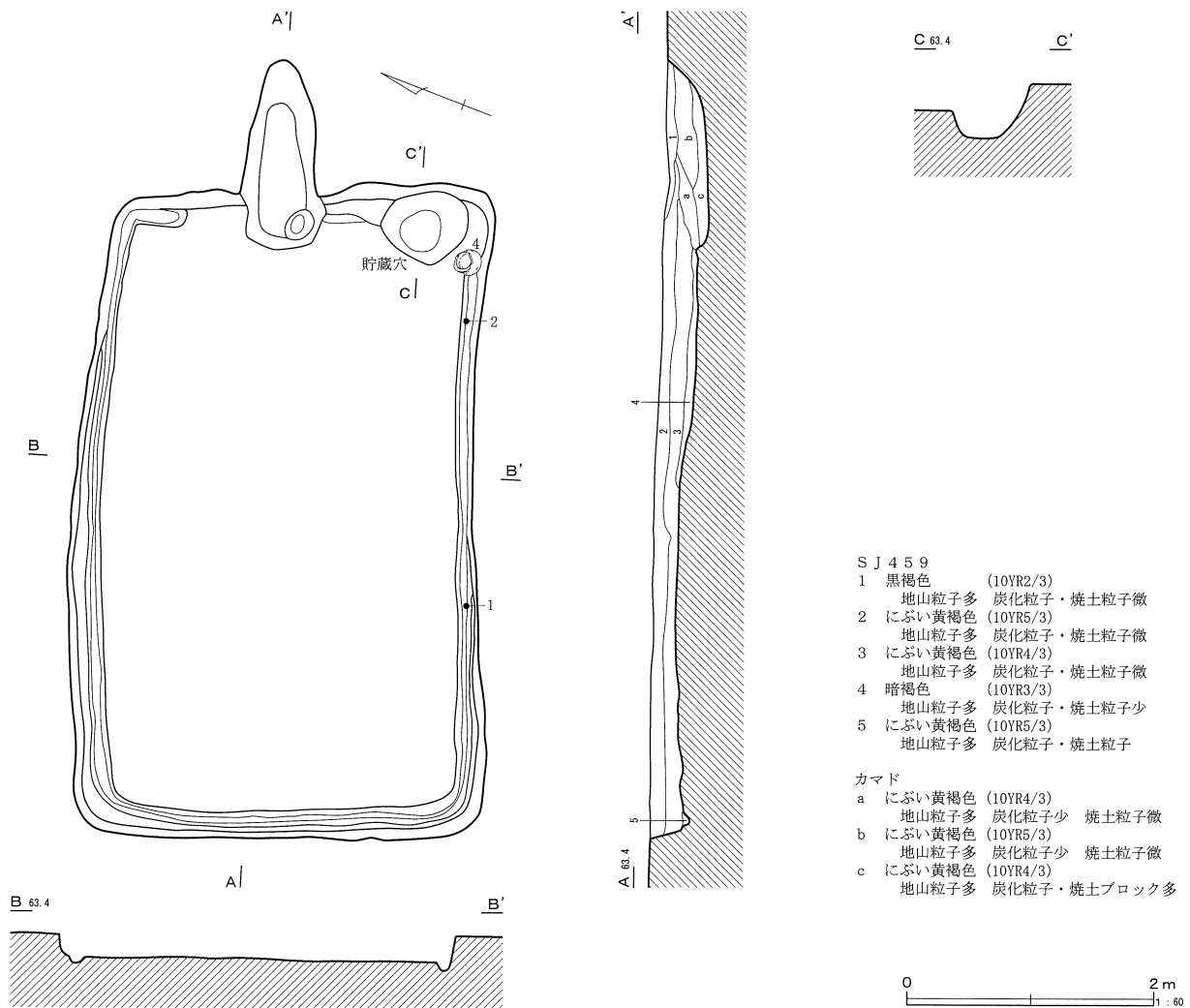
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	(13.5)	5.6	(6.8)	B E F H I	普通	灰	25	覆土	南比企産 底部回転糸切後周辺部ヘラケズリ

第459号住居跡 (第263・264図)

J-24・25グリッドに位置する。第458・470号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は東西に長

い長方形で、長軸5.21m、短軸3.40m、深さは0.16~0.20mである。主軸方位はN-70°-Eを指す。

床面は起伏があり、東半が低くなっている。壁は



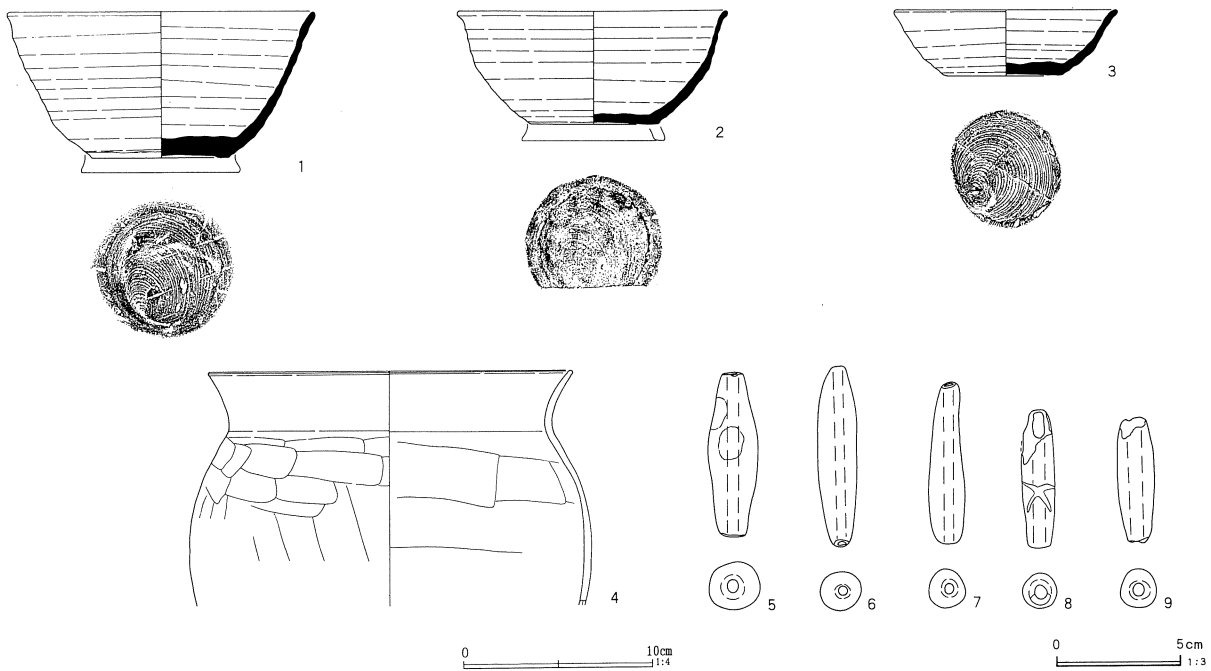
第263図 第459号住居跡

開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央よりやや北に設置される。燃烧部は10cm程掘り込み急激に立ち上がる。貯蔵穴は南東コーナー近くに設けられ、72×55cmの楕円形で、深さは20cmである。壁溝はほぼ全周し、幅10～23cm、深さ3～8cmである。西半では壁から僅かに離れて検出された。

遺物は、覆土から奈良～平安時代にかけての土師器・須恵器片が多く出土したが、小片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、須恵器坏1・高台付碗2、土師器甕1、土錘5点であった。



第264図 第459号住居跡出土遺物

第459号住居跡出土遺物観察表 (第264図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵高台碗	16.1	7.7	7.2	B F H L	普通	灰白	70	-3cm	末野産 底部回転糸切 内面底部墨痕か?
2	須恵高台碗	14.4	6.0	7.0	B C E F H J L	不良	灰黄	60	-9cm	末野産 高台剥離
3	須恵坏	11.8	3.5	6.1	A B E I	普通	褐灰	70	覆土	南比企産 回転糸切
4	土師甕	19.2	12.4		B E G H J	良好	橙	75	-10cm	

第459号住居跡出土土錘観察表 (第264図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	6.45	2.10	0.50	20.10	C b IV	B	灰黄褐	95	カマド
6	7.10	1.55	0.40	13.03	B a III	A	にぶい赤褐	100	
7	6.40	1.55	0.40	11.50	B a IV	A	橙	100	
8	5.45	1.40	0.60	7.67	B a V	B	灰黄褐	80	カマド
9	4.95	1.55	0.50	9.41	B a V	C	にぶい黄橙	95	

第460号住居跡（第265・266図）

I・J-25・26グリッドに位置する。第450・461号住居跡に切られ、第462・535・537号住居跡を切る。平面形は東西に長い長方形で、長軸3.82m、短軸3.02m、深さは0.20～0.25mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは東壁中央に設置される。燃烧部は10cm程ピット状に掘り下げ、緩やかに立ち上がって煙道部へ続く。煙道部の底面から壁面の一部は焼土化していた。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝はほぼ全周し、幅が30～54cmと広く、深さは8～20cmである。

遺物は、覆土から奈良時代を中心とした土師器・須恵器の破片が少量出土した。何れも小破片で、殆

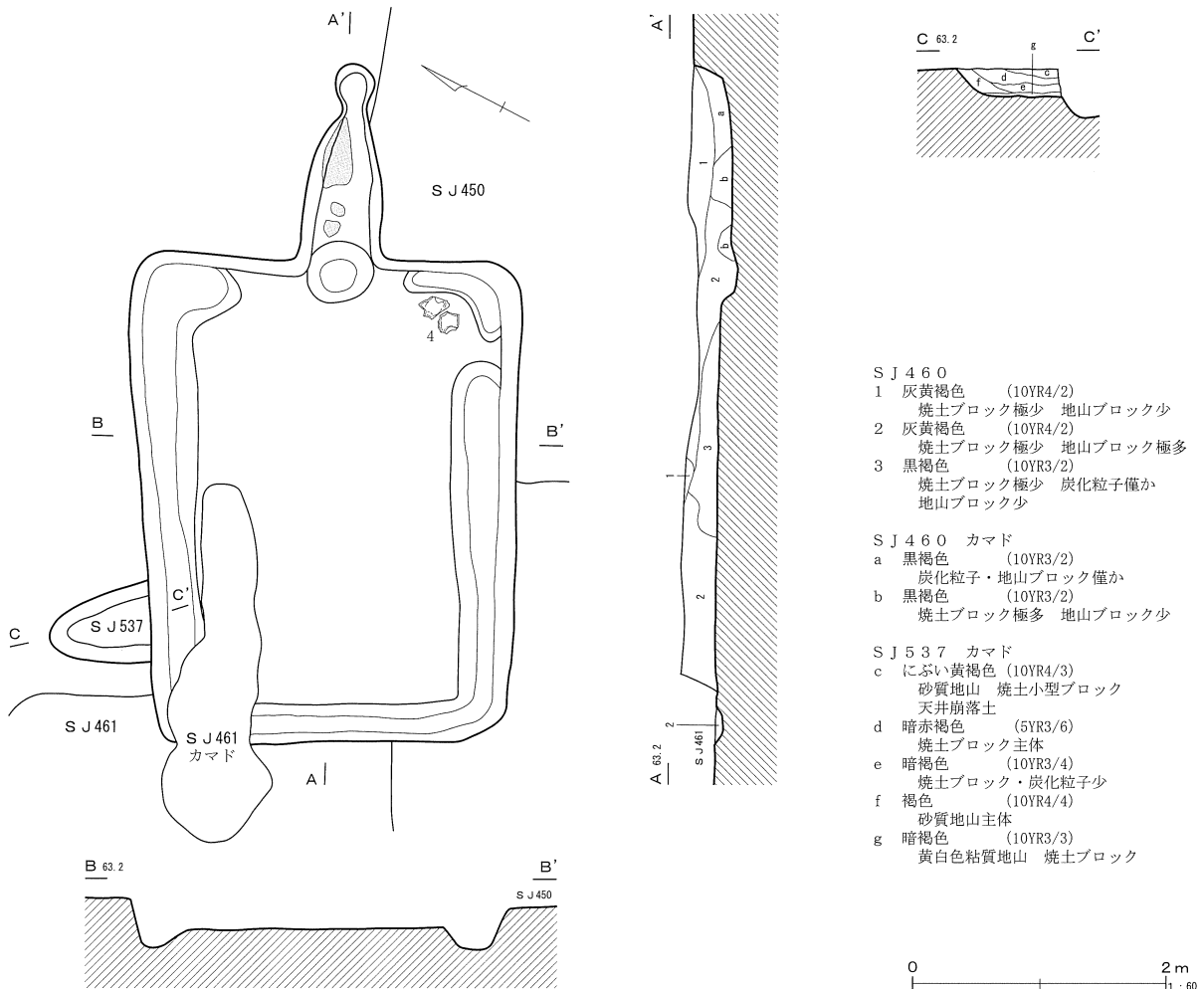
ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏2、須恵器蓋1・甕1、土錘9点であった。

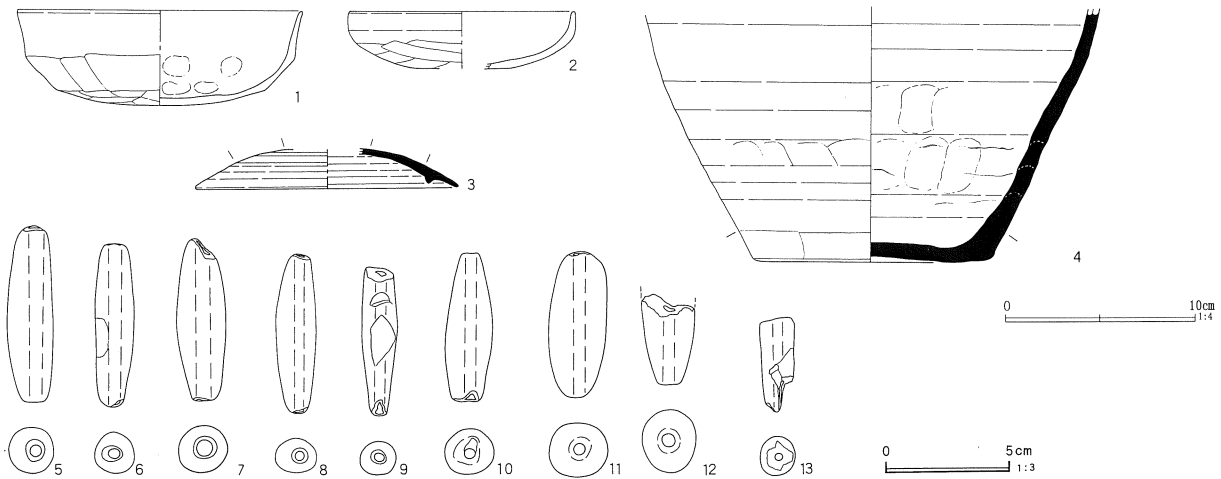
第537号住居跡（第265図）

I-26グリッドに位置する。第460号住居跡に切られ、第535号住居跡を切る。カマド煙道部が検出されたのみである。残存する長さは0.82m、幅0.50m、深さは0.22mである。主軸方位はN-35°-Wを指す。カマドは住居跡の北壁に設置されていたと考えられる。

遺物は、出土しなかった。



第265図 第460・537号住居跡



第266図 第460号住居跡出土遺物

第460号住居跡出土遺物観察表 (第266図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(15.1)	5.0		B D E F J	良好	橙	60	覆土	
2	土師坏	(12.0)	3.1		B D J	良好	橙	10	覆土	
3	須恵蓋	(13.7)	2.1		A B D E F J	良好	褐灰	20	覆土	末野産 天井部回転ヘラケズリ
4	須恵甕		13.5	12.7	B E G H L	良好	にぶい褐	80	床	末野産 底部、体部下端ヘラケズリ

第460号住居跡出土土錘観察表 (第266図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	6.90	1.80	0.45	19.01	B a III	A	橙	100	
6	6.40	1.60	0.45	13.81	B a IV	A	橙	95	
7	6.40	2.00	0.60	19.25	C a IV	A	灰白	95	
8	6.30	1.65	0.35	11.43	B b IV	A	にぶい橙	100	
9	5.85	1.45	0.40	8.94	B a IV	C	黒褐	100	
10	5.80	1.90	0.40	17.24	C b IV	A	黒褐	100	
11	5.70	2.30	0.45	27.72	B a IV	A	にぶい橙	100	
12	(3.55)	2.50	0.50	14.08	—	A	明赤褐	30	
13	(3.70)	1.50	0.30	6.60	—	C	黒褐	40	

第461号住居跡 (第267・268図)

I・J-25グリッドに位置する。北西コーナーを第259号土坑に切られ、第460・462・535号住居跡を切る。平面形は東西に長い長方形で、長軸4.50m、短軸3.43m、深さは0.21~0.26mである。主軸方位はN-64°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

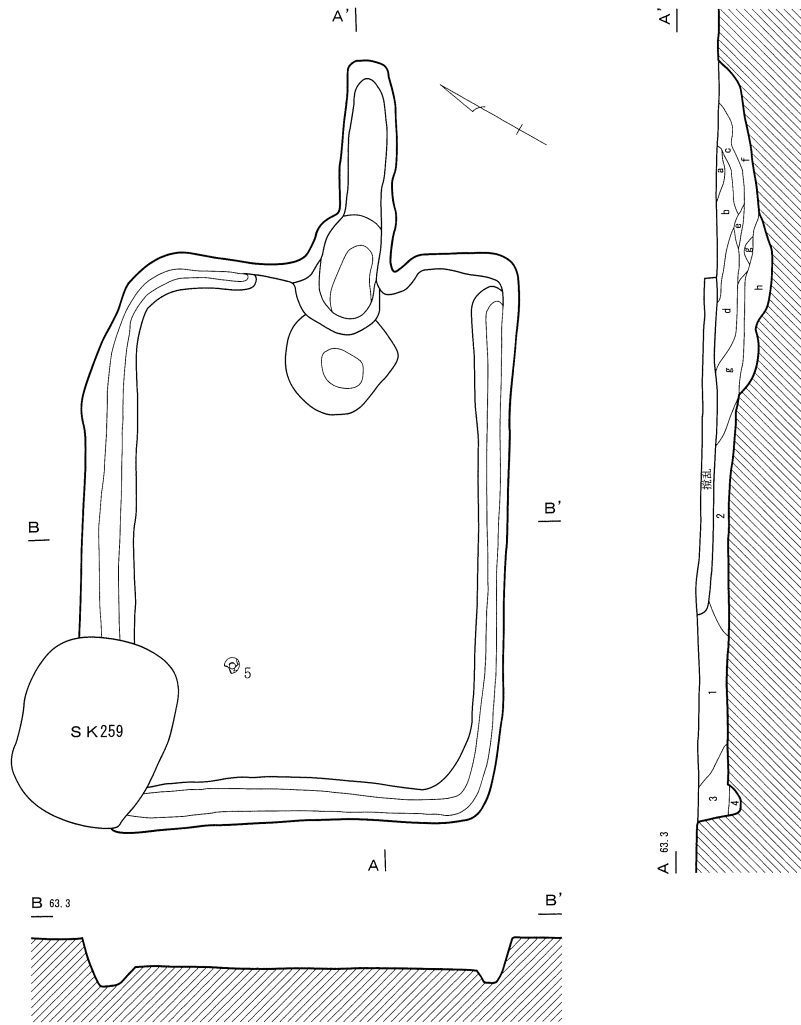
カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃焼部は30cm近く掘り込まれ、緩やかな段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝はほぼ

全周し、幅24~45cm、深さ10~16cmである。

遺物は、覆土から、奈良~平安時代の土師器・須恵器片が出土した。特に土師器甕類が多かったが、小破片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏4・甕3、須恵器坏2・蓋1、土錘6点であった。

出土遺物には時期差があるが、5・6・8・10が本住居跡に伴っていたものと考えられる。他の遺物は、重複する第460号住居跡からの混入と思われる。



- S J 4 6 1
- 1 黒褐色 (10YR3/2)
地山土やや多 焼土ブロック・炭化粒子僅か
 - 2 黒褐色 (10YR3/2)
地山土・焼土ブロック・炭化粒子僅か
 - 3 黒褐色 (10YR3/2)
地山土僅か 焼土ブロック少量
 - 4 暗褐色 (10YR3/3)
地山土僅か
- カマド
- a 黒褐色 (10YR3/2)
焼土ブロック多 煙道天井崩落土
 - b 黒褐色 (10YR3/2)
焼土ブロック・炭化粒子僅か
 - c 黒褐色 (10YR3/2)
焼土ブロック多 煙道天井崩落土
 - d 暗褐色 (10YR3/3)
焼土ブロックやや多 炭化粒子僅か
 - e 黒褐色 (10YR3/2)
炭化粒子・灰多
 - f 黒褐色 (10YR3/2)
焼土ブロックやや多 炭化粒子 天井崩落土
 - g 黒褐色 (10YR3/2)
地山土極多 炭化粒子僅か
 - h 黒褐色 (10YR3/2)
炭化粒子・灰多量 焼土ブロック僅か

0 2 m
1 : 60

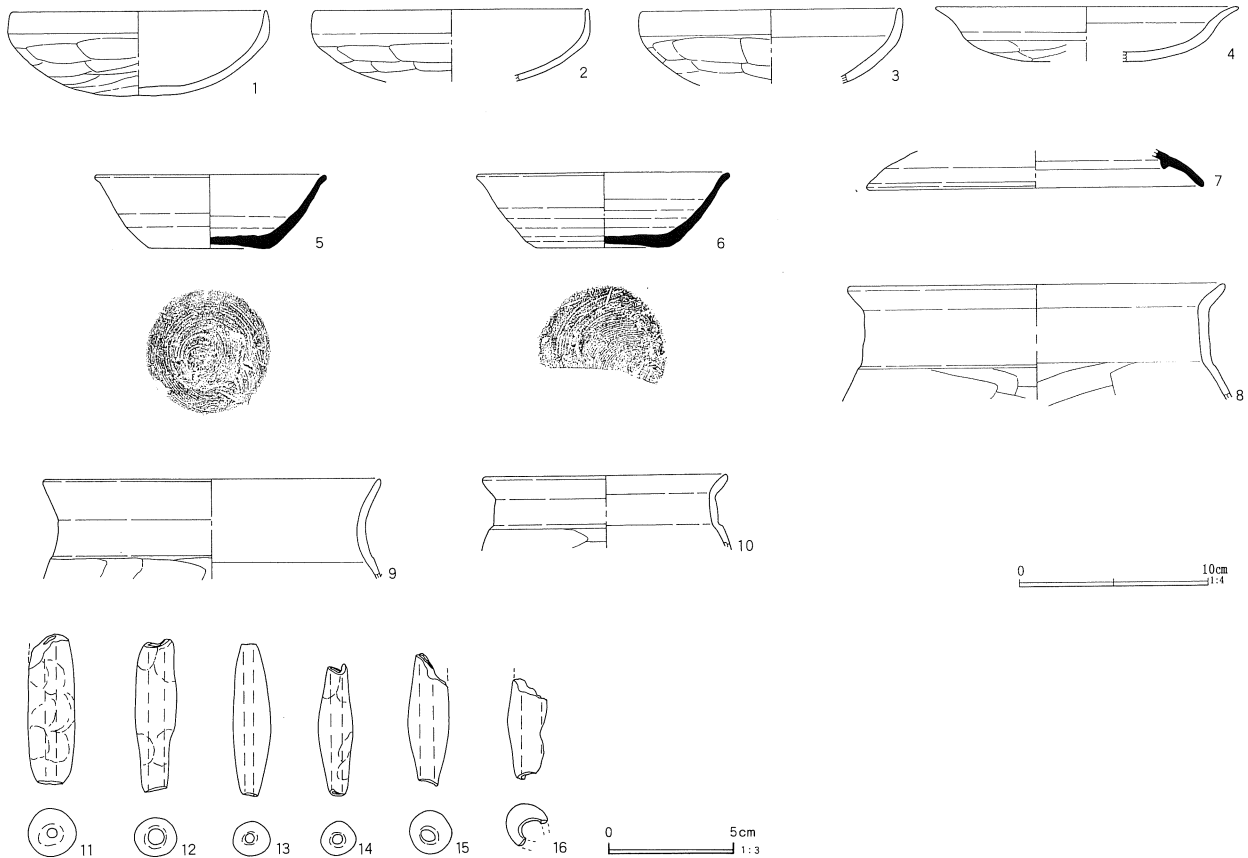
第267図 第461号住居跡

第461号住居跡出土遺物観察表 (第268図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(13.6)	4.5		BDEFGJL	良好	橙	40	覆土	口縁部に煤付着 末野産 底部回転糸切 末野産 底部回転糸切 末野産
2	土師坏	(14.5)	3.8		BDEFG	良好	橙	30	覆土	
3	土師坏	(13.6)	3.9		BDFG	良好	にぶい橙	20	覆土	
4	土師坏	16.2	2.9		BDFGL	良好	にぶい赤褐	20	覆土	
5	須恵坏	12.2	3.9	6.4	CEGH	良好	灰	80	+4cm	
6	須恵坏	(13.4)	3.9	6.8	CEFH	良好	灰	30	覆土	
7	須恵蓋	(18.0)	2.0		BHJL	良好	灰	10	カマド	
8	土師甕	(19.8)	6.1		ABDEGL	良好	明赤褐	20	カマド	
9	土師甕	(17.8)	5.3		ABGJ	普通	橙	30	カマド	
10	土師甕	(12.8)	3.9		BEGHL	普通	明赤褐	25	カマド	

第461号住居跡出土土錘観察表 (第268図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
11	5.90	1.90	0.40	22.24	B b IV	C	橙	—	
12	6.00	1.70	0.65	14.18	B a IV	C	橙	100	
13	6.00	1.50	0.40	11.99	B a IV	C	黒褐	100	



第268図 第461号住居跡出土遺物

第461号住居跡出土土錘観察表 (第268図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
14	5.20	1.35	0.40	8.47	B a V	A	黒褐	100	
15	5.20	1.70	0.60	12.07	C a V	A	にぶい褐	95	
16	(3.95)	1.65	0.85	6.50	—	C	明赤褐	35	

第462号住居跡 (第269・270図)

I・J-25グリッドに位置する。第449・456・458・460・461号住居跡・第259号土坑に切られ、第445号住居跡を切る。第444・497号住居跡との関係は不明である。周辺の住居跡と同時に調査を進めたため北壁の一部は検出できなかった。平面形は正方形に近く、東西6.79m、南北6.50m、深さは0.23~0.35mである。主軸方位はN-30°-Wを指す。

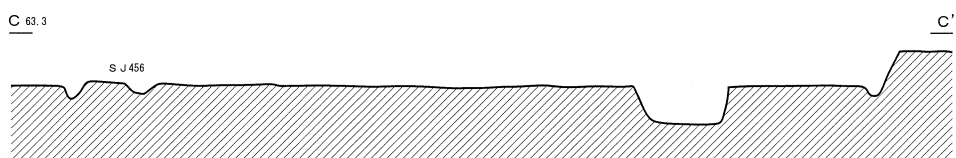
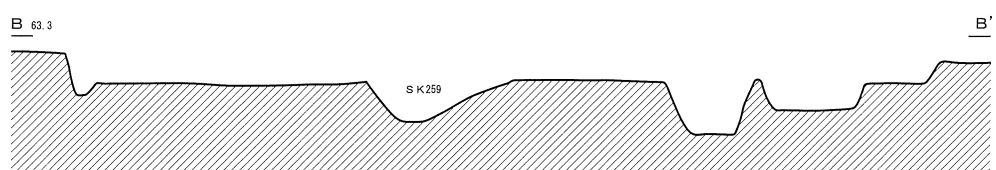
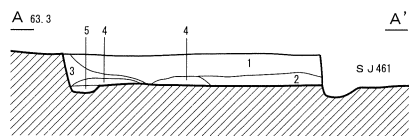
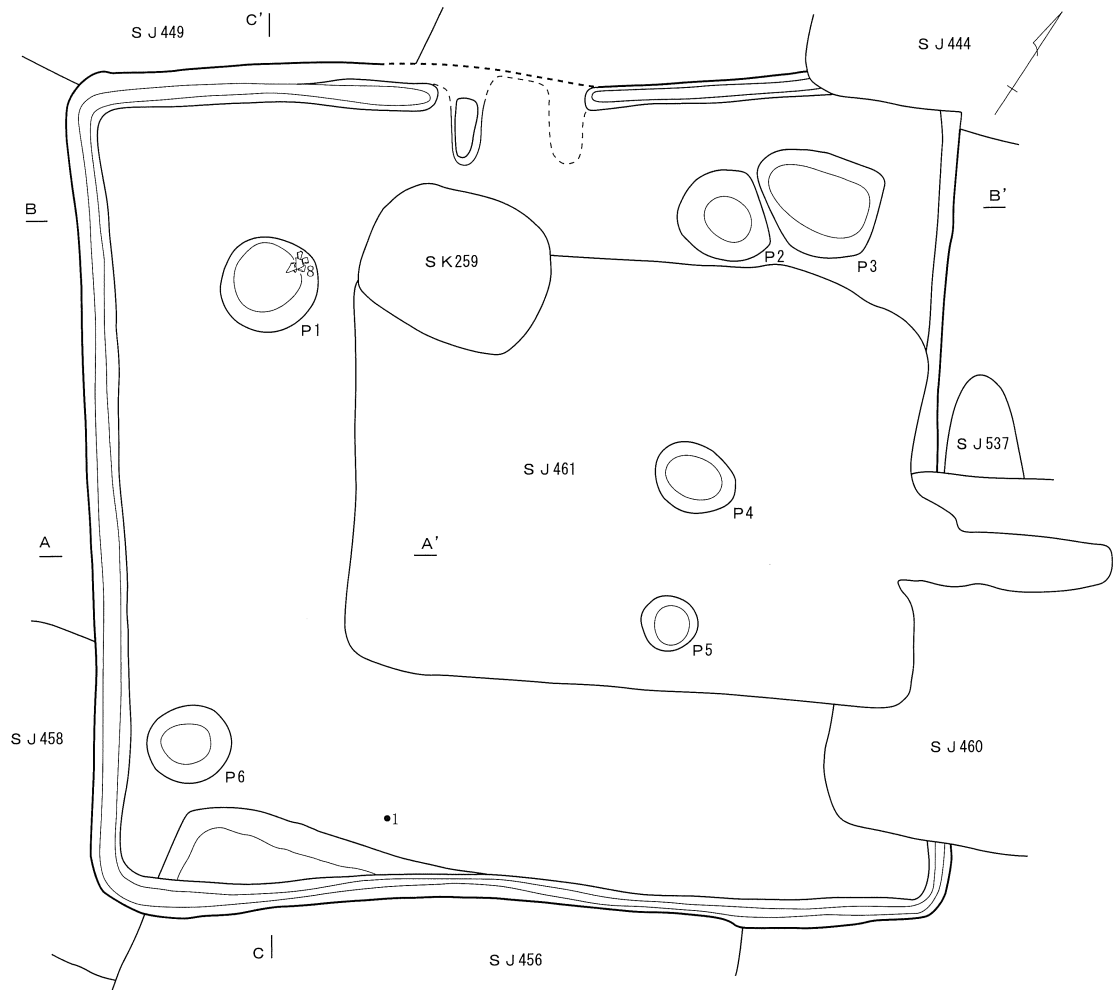
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは北壁中央に設置されるが、明確に検出できなかった。左袖を検出し、カマドの位置が確認で

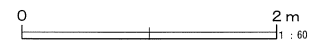
きた。貯蔵穴は検出されなかったが、P 3は可能性がある。壁溝は東壁以外で検出され、幅14~32cm、深さ9~18cmである。ピットは6本検出され、P 1~P 6の深さは30cm、40cm、22cm、30cm、6cm、33cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器が多く出土した。特に土師器坏・甕の破片が多かったが、甕は胴部の破片が多く、摩滅も著しいため、殆ど接合しなかった。また、第460号住居跡と同時に調査したため、時期差のある遺物の混入もあった。

図示可能な遺物は、土師器坏5・甕2、須恵器坏1、棒状鉄製品2、土錘13点であった。

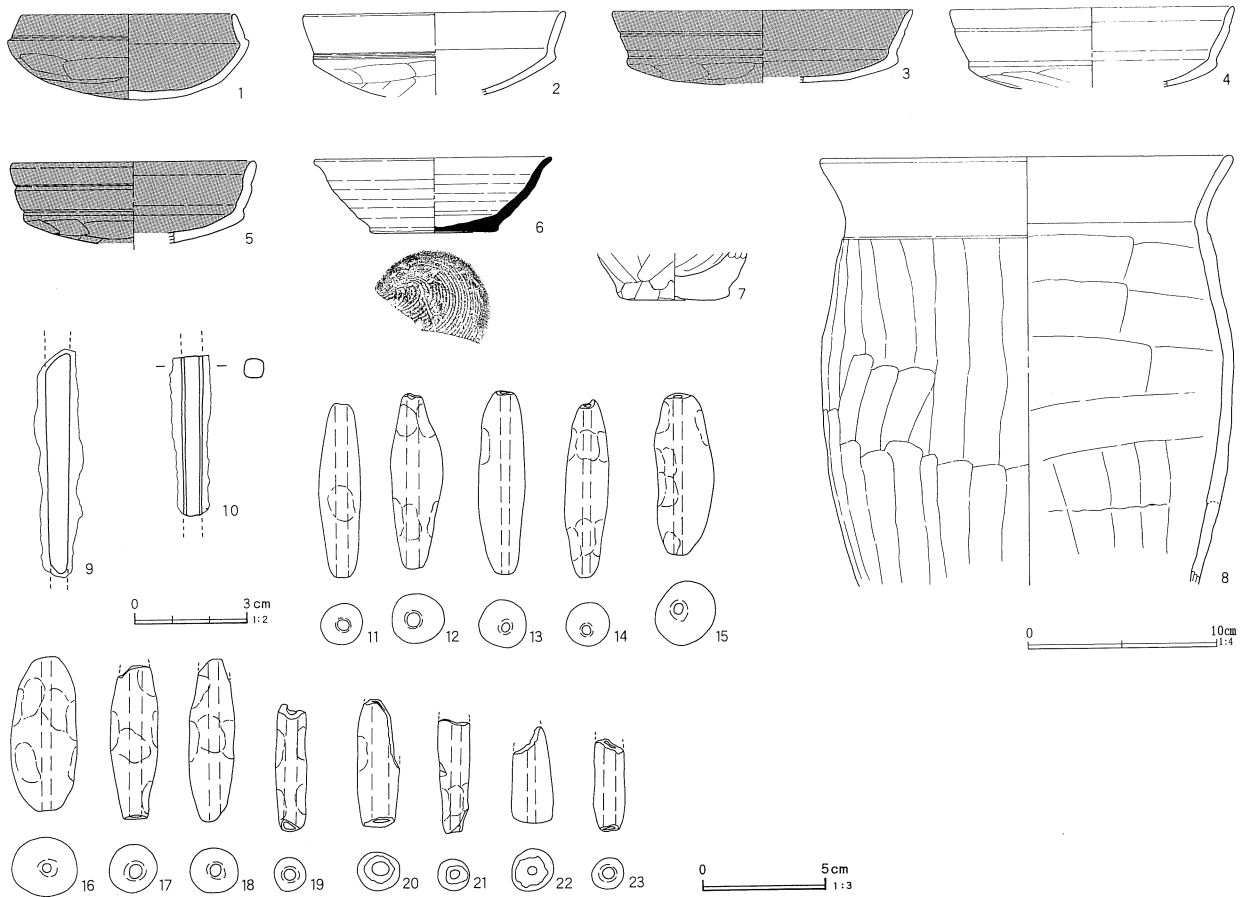


- S J 4 6 2
- 1 黒褐色 (10YR3/1) 地山シルト僅か 炭化粒子少
 - 2 黒褐色 (10YR3/1) 地山シルト多 炭化粒子少 焼土ブロック極少
 - 3 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子極多 焼土ブロック極少
 - 4 暗褐色 (10YR3/3) 地山シルト多 炭化粒子少
 - 5 黒褐色 (10YR3/2) 地山シルト極多 炭化粒子僅か



第269図 第462号住居跡

このうち、6の須恵器環は、第460号住居跡の遺物であったと考えられる。



第270図 第462号住居跡出土遺物

第462号住居跡出土遺物観察表（第270図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	11.3	4.5		BDEJ	良好	明赤褐	90	+4cm	内外面黒色処理
2	土師環	(13.8)	4.4		BDEFGJ	良好	橙	30	P1	
3	土師環	(15.8)	3.8		BDEFJL	良好	にぶい橙	40	覆土	内外面黒色処理
4	土師環	(14.9)	4.2		BDEFG	良好	黒褐	20	覆土	
5	土師環	(12.7)	4.3		BDEFGL	良好	黒	30	覆土	内外面黒色処理
6	須恵環	(12.4)	3.9	(6.8)	BEFIL	良好	灰	30	覆土	南比企産 底部回転糸切
7	土師甕		2.5	6.8	BEHL	普通	橙	70	覆土	
8	土師甕	(21.8)	22.6		ABCDEJ	良好	橙	25	+3.5cm	
9	棒状鉄製品	現存長4.30cm 幅0.53cm 厚さ0.52cm 重さ10.10g							覆土	
10	棒状鉄製品	現存長5.90cm 幅0.66cm 重さ5.84g							覆土	

第462号住居跡出土土錘観察表（第270図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
11	6.90	1.70	0.50	16.99	B a III	C	にぶい黄橙	100	
12	6.90	2.10	0.50	21.99	C a III	C	にぶい黄橙	100	
13	7.25	1.90	0.40	24.94	B a III	C	にぶい褐	100	
14	7.00	1.70	0.40	16.98	C a III	B	黒	100	
15	6.40	2.10	0.40	35.78	B b IV	C	にぶい赤褐	100	

第462号住居跡出土土錘観察表（第270図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
16	6.10	2.10	0.35	34.48	B b IV	C	黒褐	95	
17	(6.00)	1.90	0.55	18.39	B a IV	C	にぶい黄橙	85	
18	(6.45)	1.80	0.50	18.84	B a III	C	浅黄橙	90	
19	5.00	1.35	0.45	6.97	A a V	A	橙	100	
20	(5.05)	1.70	0.65	11.28	—	C	灰黄褐	70	
21	(4.50)	1.30	0.40	6.95	—	C	浅黄橙	70	
22	(3.85)	1.80	0.40	8.57	B a V	C	褐	75	
23	(3.65)	1.35	0.45	4.76	A a V	A	橙	75	

第463号住居跡（第271・272図）

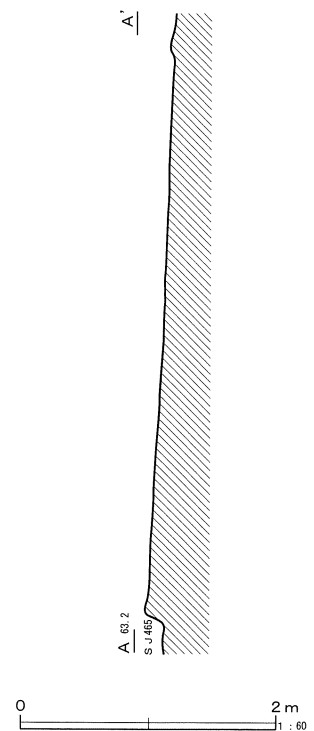
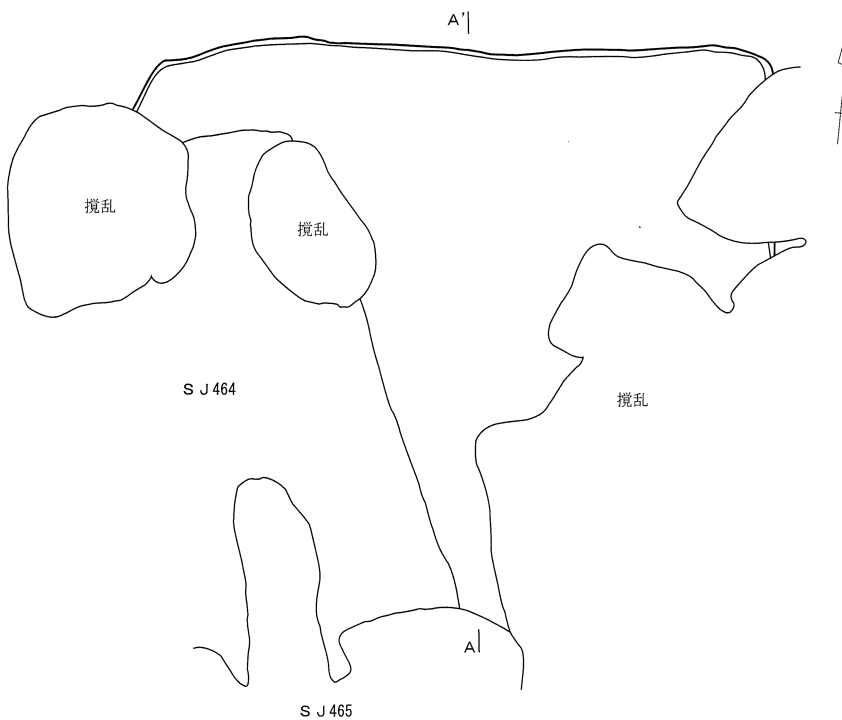
H-23グリッドに位置する。第464・465号住居跡と重複し、本住居跡が古い。東壁の大半は攪乱に壊され、北壁と東壁のごく一部が検出されたのみである。検出された規模は東西5.10m、南北4.40mで、深さは0.01~0.04mと極めて浅い。主軸方位は北壁でN-87°-Eを指す。

床面は平坦で、壁の状態は不明瞭である。カマド、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が少量出土したが、図示可能な遺物は土錘1点であった。



第271図 第463号住居跡出土遺物



第272図 第463号住居跡

第463号住居跡出土土錘観察表（第271図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	(6.00)	1.80	0.35	12.92	C a III	B	灰黄褐	85	

第464号住居跡 (第273・274図)

H-22・23グリッドに位置する。南半を第465号住居跡に、西壁を第468号住居跡に切られ、第463号住居跡を切る。検出された規模は、東西5.18m、南北4.92m、深さは0.04~0.12mである。主軸方位はN-112°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

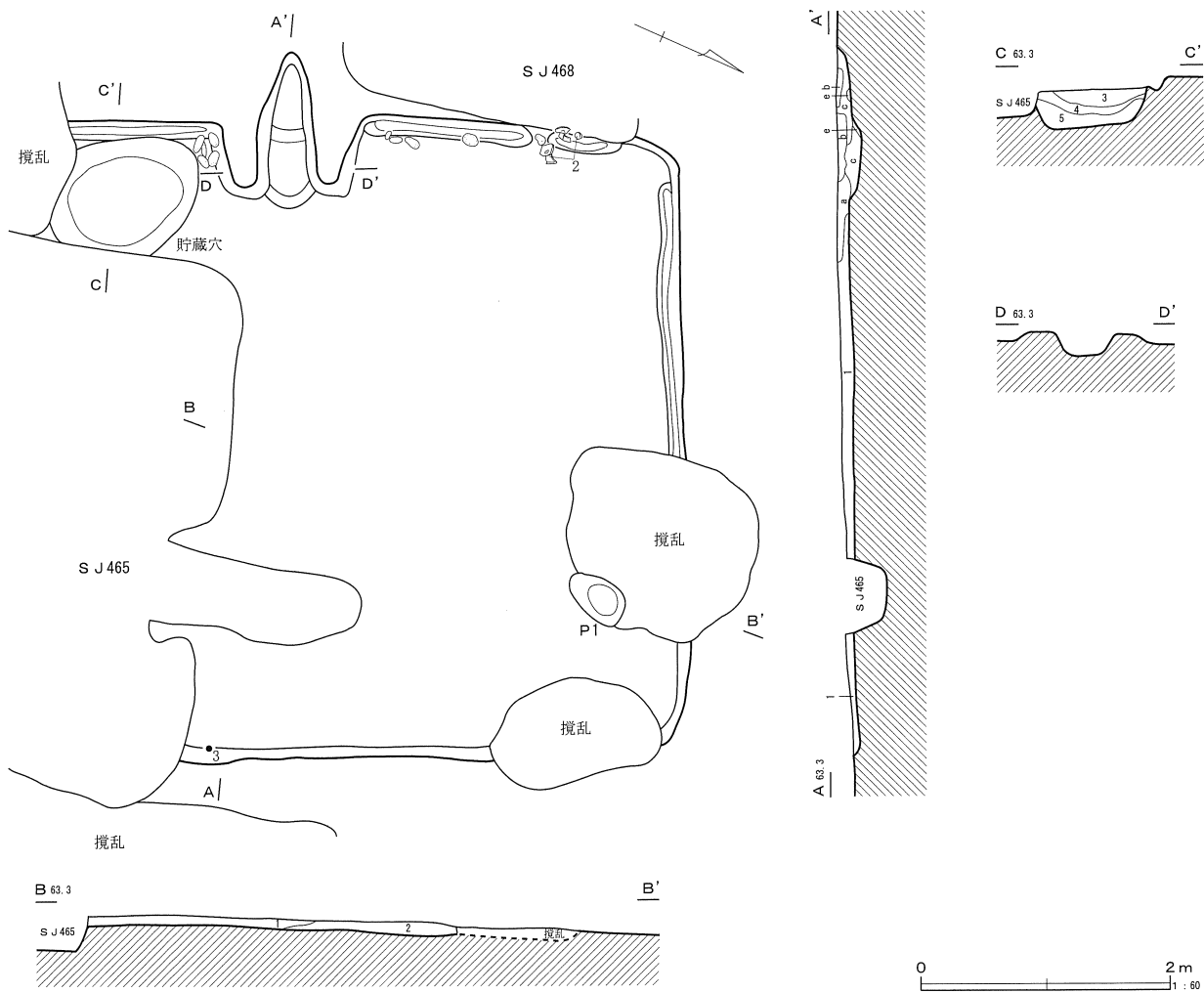
カマドは西壁に設置される。燃焼部は10cm程掘り込み、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴はカマド左

に設けられ、108×96cmの楕円形で、深さは31cmである。壁溝は北壁と西壁で検出され、幅14~20cm、深さ2~4cmである。カマドの左右から編物石が10個出土した。

遺物は、土師器・須恵器の破片が少量出土した。何れも小破片で、図示できたものは少なかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1、須恵器長頸瓶1、石製紡錘車1、土錘7点であった。

3の長頸瓶は、胴部が球形となるいわゆるフラスコ型長頸瓶である。湖西産と考えられる。住居跡西



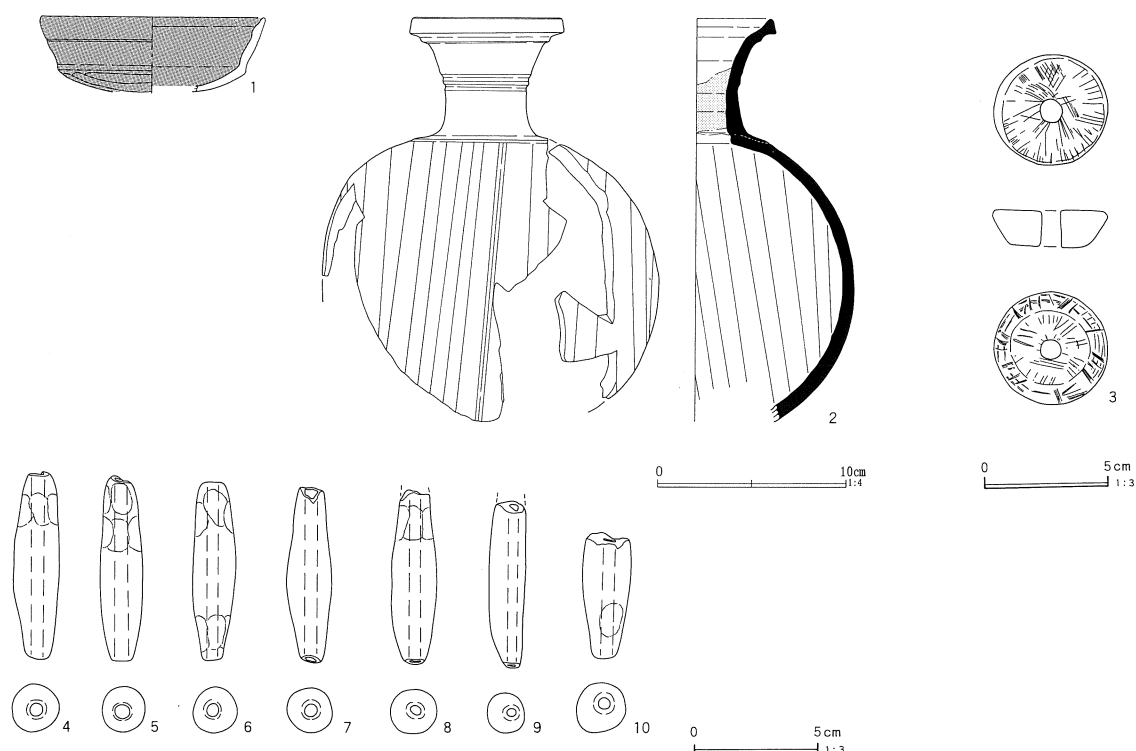
- S J 4 6 4
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 砂質地山 灰色地山ブロック
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 地山ブロック多
 - 3 暗褐色 (10YR3/4) 全体に砂質地山溶泥
 - 4 暗褐色 (10YR3/3) 砂質地山ブロック多
 - 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 暗灰色粘質地山 概ね単一層

- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/4) 砂質地山多
 - b 暗褐色 (10YR3/3) 焼土 地山ブロック 天井崩落土
 - c 暗褐色 (10YR3/4) 地山ブロック多 焼土少 炭化粒子
 - d 暗褐色 (10YR3/4) 灰層 焼土・炭化粒子多
 - e 暗褐色 (10YR3/3) 地山極多

第273図 第464号住居跡

壁沿いで出土した。胴部は幾つかの破片となっていたものを復元した。器面は内外面とも風化により著

しく荒れ、内面頸部にわずかに自然釉の痕跡が認められた。頸部には二条の沈線が認められた。



第274図 第464号住居跡出土遺物

第464号住居跡出土遺物観察表（第274図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.9)	4.0		B D E G L	良好	橙	30	覆土	内外面黒色処理
2	須恵長頸瓶	8.0	21.2		A F J	良好	灰白	50	+9.6cm	湖西産 自然釉痕跡 フラスコ型
3	石製紡錘車	長径4.50cm 短径3.15cm		厚さ1.45cm	孔径0.80cm				+3cm	重さ45.35g 滑石製

第464号住居跡出土土錘観察表（第274図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	7.35	1.85	0.50	19.90	C a III	A	浅黄橙	100	貯蔵穴
5	7.30	1.80	0.60	18.71	C a III	A	にぶい橙	100	
6	7.05	1.80	0.50	18.17	B b III	C	にぶい黄橙	100	
7	6.90	1.85	0.50	17.37	C a III	A	灰黄褐	100	
8	(6.80)	1.85	0.45	19.39	C a III	A	橙	95	
9	(6.55)	1.60	0.40	14.65	B a III	A	褐灰	90	
10	(4.95)	2.10	0.50	15.63	C a III	A	暗褐	60	

第465号住居跡（第275・276図）

H-22・23グリッドに位置する。第453・454号住居跡に切れ、第463・464号住居跡を切る。東壁と西壁は攪乱で大きく壊されていた。平面形は正方形に近く、東西4.48m、南北4.16m、深さは0.15~0.25m

である。主軸方位はN-18°-Wを指す。

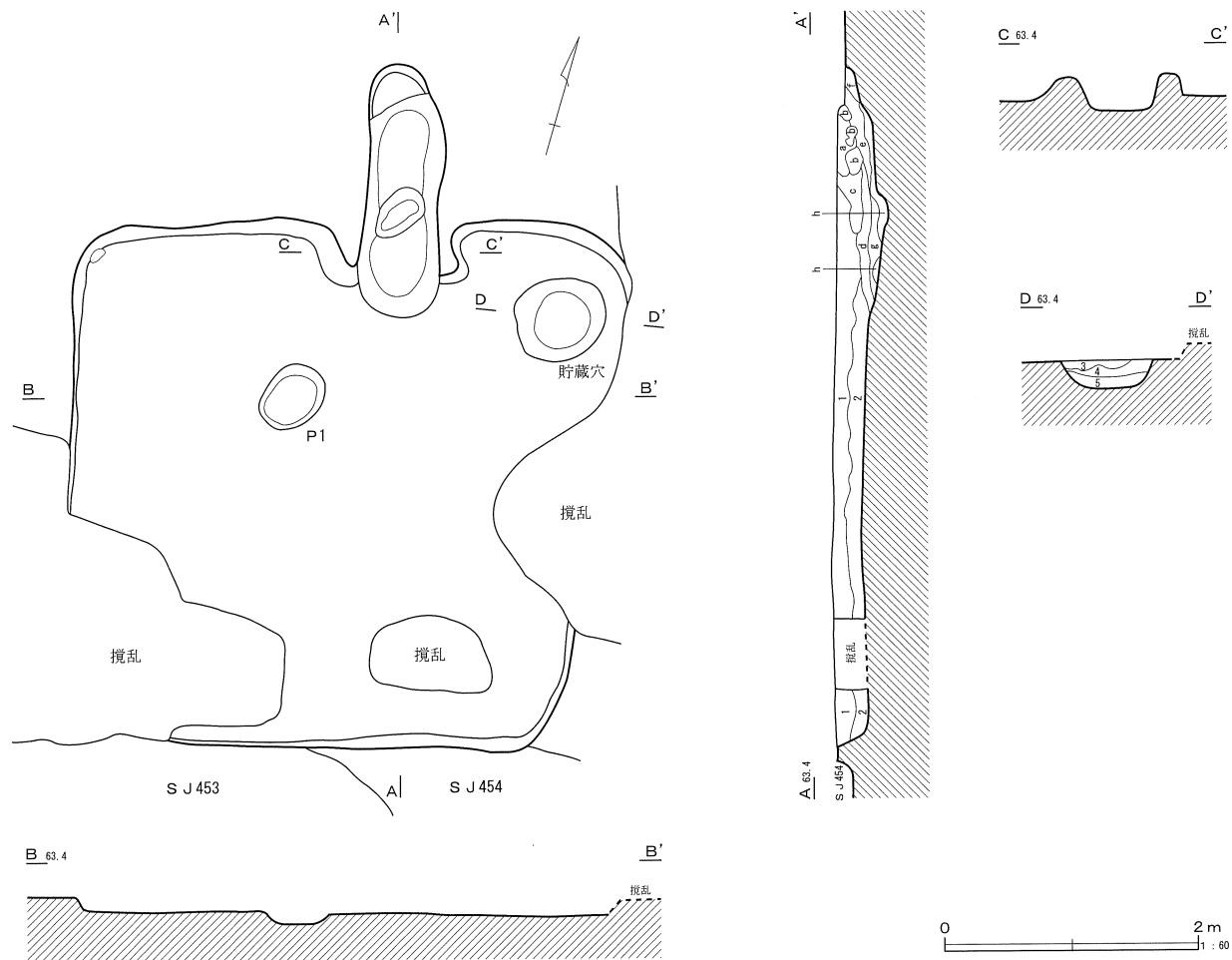
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは北壁ほぼ中央に設置される。燃烧部は10cm程掘り込み、中心部をピット状に下げた後煙道

部へ続く煙道部先端近くに段を持つ。貯蔵穴はカマド右に設けられ、径70cmの円形で、深さは20cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは1本検出され、深さは6cmである。北東コーナーで編物石が1個出土した。

遺物は、覆土から土師器・須恵器片が少量出土した。何れも小破片で、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器環1・甕2・台付甕1、須恵器蓋1、土鍾16点であった。



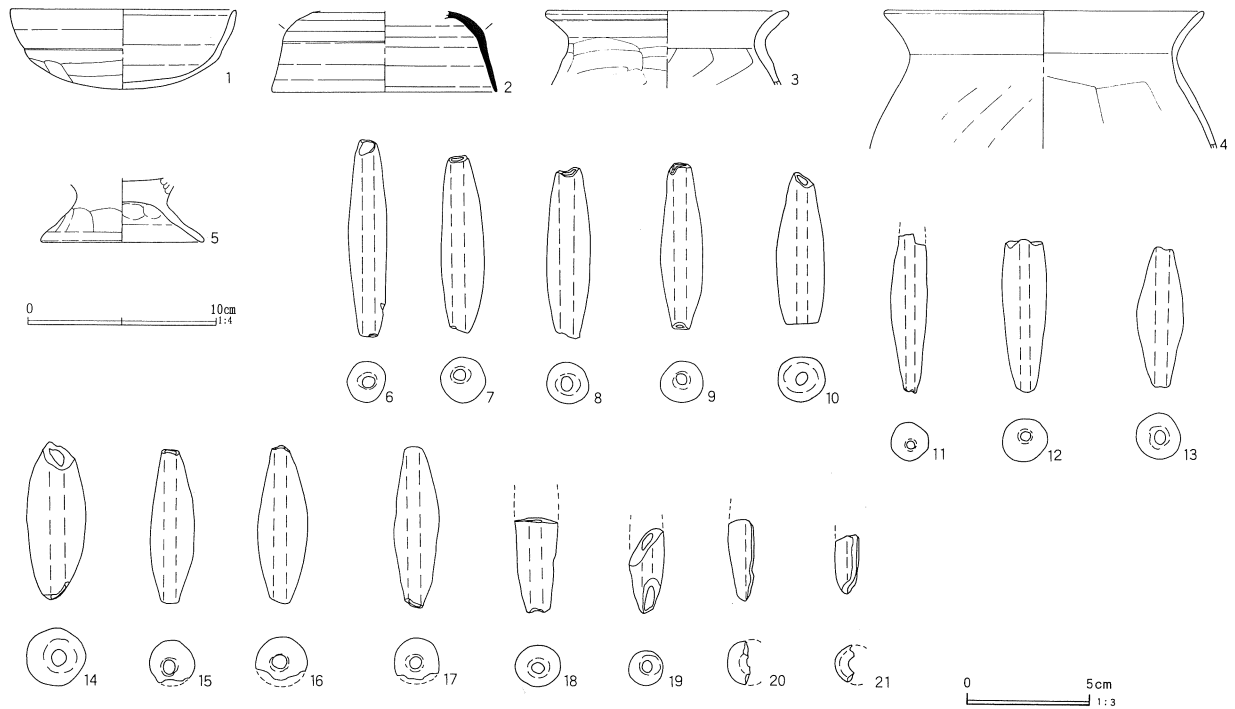
- S J 4 6 5
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 溶化進行砂質地山ブロック多
 - 2 暗褐色 (10YR3/3) 基本は1層 炭化材多
 - 3 黒褐色 (10YR3/2) 砂質地山ブロック多
 - 4 にぶい黄褐色 (10YR3/2) 地山ブロック・焼土・炭化粒子多
 - 5 灰黄褐色 (10YR3/2) 淡灰色粘質地山主体

- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/4) 砂質地山主体 天井崩落土
 - b 褐色 (10YR4/4) a層の焼土化 天井崩落土
 - c 暗褐色 (10YR3/3) 砂質地山粒・ブロック多
 - d 暗褐色 (10YR3/4) 焼土・被加熱地山ブロック多
 - e にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質被加熱地山ブロック主体 天井崩落前堆積
 - f にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質地山土多
 - g 黒褐色 (10YR3/2) 灰層 焼土・炭化粒子多
 - h 褐色 (10YR4/4) 砂質地山極多 貼床及び床溶軟化層

第275図 第465号住居跡

第465号住居跡出土遺物観察表 (第276図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	11.9	4.3		B D F L	良好	にぶい黄橙	40	覆土	
2	須恵蓋	(12.0)	4.2		B F J	良好	灰	10	貯蔵穴	産地不明 天井部回転ヘラケズリ
3	土師甕	(12.6)	4.1		A B D G H J	良好	明赤褐	30	覆土	
4	土師甕	(16.7)	7.3		A B D E G J	不良	橙	30	貯蔵穴	
5	土師台付甕		3.4	8.6	B E G H	普通	赤褐	80	覆土	



第276図 第465号住居跡出土遺物

第465号住居跡出土土錘観察表（第276図）

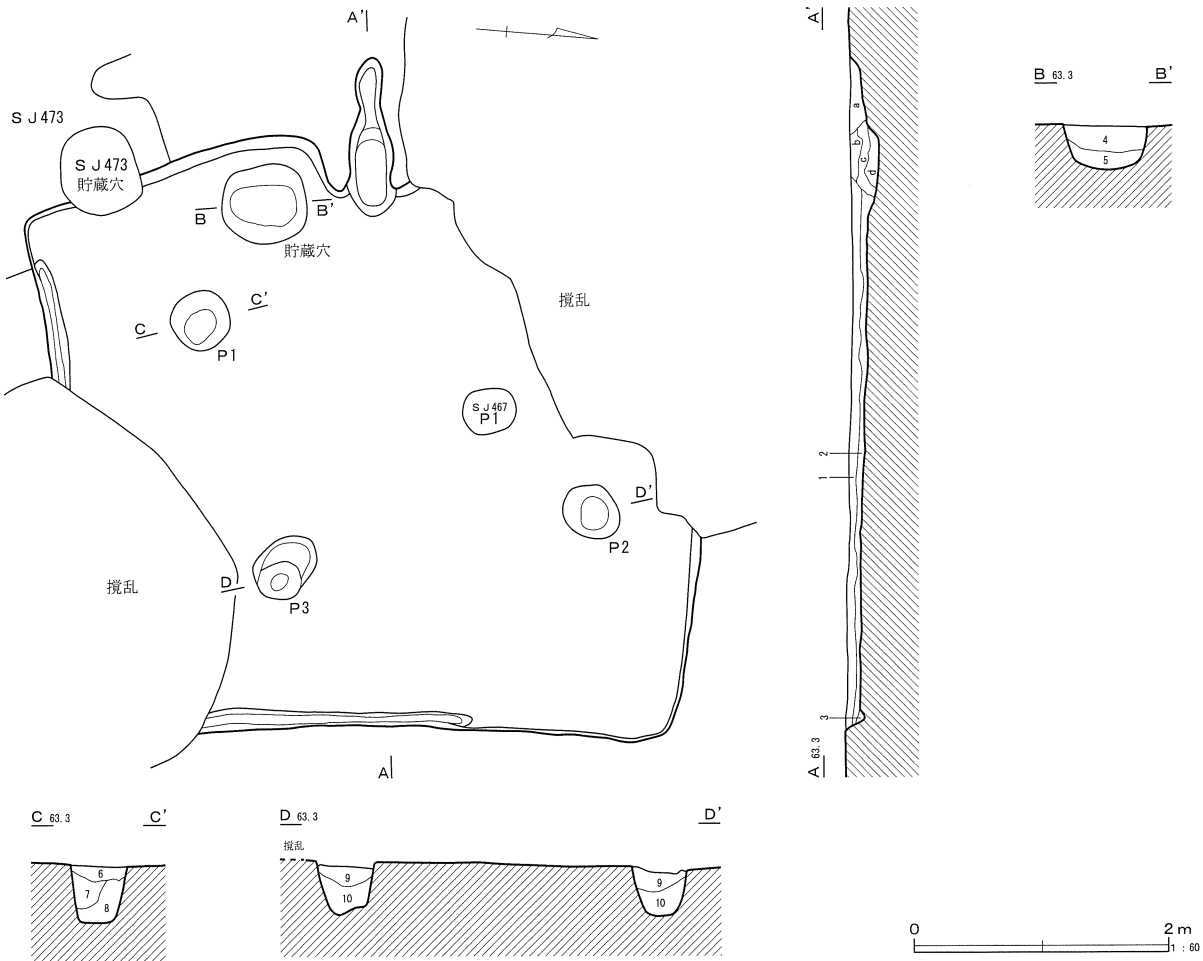
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
6	7.70	1.60	0.50	16.01	B b III	A	灰黄褐	95	
7	6.90	1.80	0.50	16.39	B a III	A	灰白	100	
8	6.80	1.70	0.60	14.18	B a III	A	灰黄褐	100	
9	7.00	1.70	0.45	14.83	B a III	A	にぶい黄褐	100	
10	5.90	1.30	0.50	16.12	B b IV	A	浅黄橙	95	
11	(6.20)	0.55	0.40	11.43	B a IV	A	にぶい黄橙	90	
12	(5.70)	1.75	0.40	15.59	B a IV	A	褐灰	80	
13	5.55	1.85	0.60	13.34	C a IV	A	褐灰	100	
14	6.15	2.40	0.65	24.49	B a IV	A	明褐	80	
15	6.00	1.80	0.60	12.76	B a IV	A	にぶい黄橙	80	
16	6.20	2.00	0.55	12.71	B a IV	A	明黄褐	60	
17	6.30	1.80	0.50	10.93	B a IV	A	にぶい黄橙	70	
18	(3.60)	1.75	0.50	7.73	B a	A	にぶい黄橙	50	
19	(3.30)	1.40	0.50	3.55	B a	A	黄橙	40	
20	(3.20)	(1.80)	(0.40)	3.77	B a	A	褐灰	25	
21	(2.30)	(1.50)	(0.65)	2.36	—	A	にぶい黄褐	25	

第466号住居跡（第277・278図）

H-21・22グリッドに位置する。第468・473号住居跡に切られ、第467号住居跡を切る。北西コーナー周辺と南東コーナー周辺を攪乱で壊される。平面形は南北に長い長方形で、東西4.66m、南北は5.3m前後と考えられる。深さは0.10~0.12mである。主軸方位はN-96°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは西壁に設置される。燃烧部は10cm程掘り込み、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴はカマド左に設けられ、70×62cmの楕円形で、深さは34cmである。壁溝は東壁と南壁で検出され、幅10~18cm、深さ2~18cmである。ピットは3本検出され、P1~



S J 4 6 6

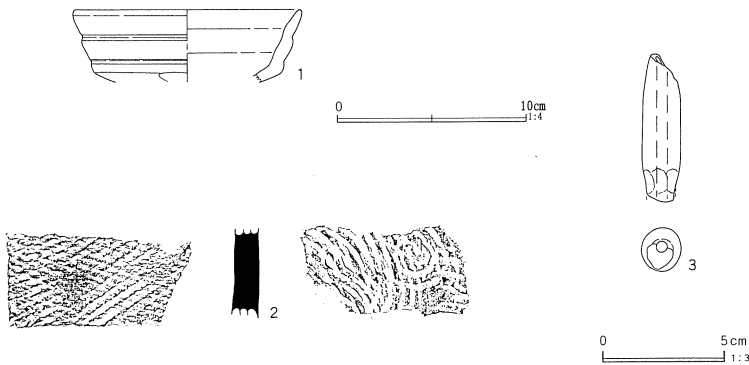
- | | | | |
|---|--------|-----------|----------|
| 1 | 黄褐色 | (10YR5/6) | 炭化粒子少 |
| 2 | 褐色 | (10YR4/6) | 砂質 炭化粒子少 |
| 3 | 褐色 | (10YR4/6) | 地山土主体 |
| 4 | にぶい黄褐色 | (10YR5/3) | 炭化粒子 |
| 5 | にぶい黄褐色 | (10YR5/4) | 炭化粒子少 |
| 6 | にぶい黄褐色 | (10YR5/3) | 灰少 |
| 7 | にぶい黄褐色 | (10YR5/4) | 地山ブロック |
| 8 | 褐色 | (10YR4/4) | 炭化粒子少 |

- | | | | |
|----|--------|-----------|-------|
| 9 | にぶい黄褐色 | (10YR5/3) | 炭化粒子 |
| 10 | にぶい黄褐色 | (10YR5/4) | 炭化粒子少 |

カマド

- | | | | |
|---|--------|-----------|--------------|
| a | 灰黄褐色 | (10YR4/2) | 砂質土 炭化粒子・鉄分多 |
| b | にぶい黄褐色 | (10YR5/3) | 焼土多 |
| c | 褐色 | (10YR4/6) | 地山土主体 焼土 |
| d | 褐色 | (10YR4/4) | 炭化粒子 |

第277図 第466号住居跡



第278図 第466号住居跡出土遺物

P 3の深さは44cm、38cm、41cmである。位置的に主
柱穴と考えられる。

ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1、須恵器甕1、土

遺物は、土師器・須恵器の小片が出土したが、殆

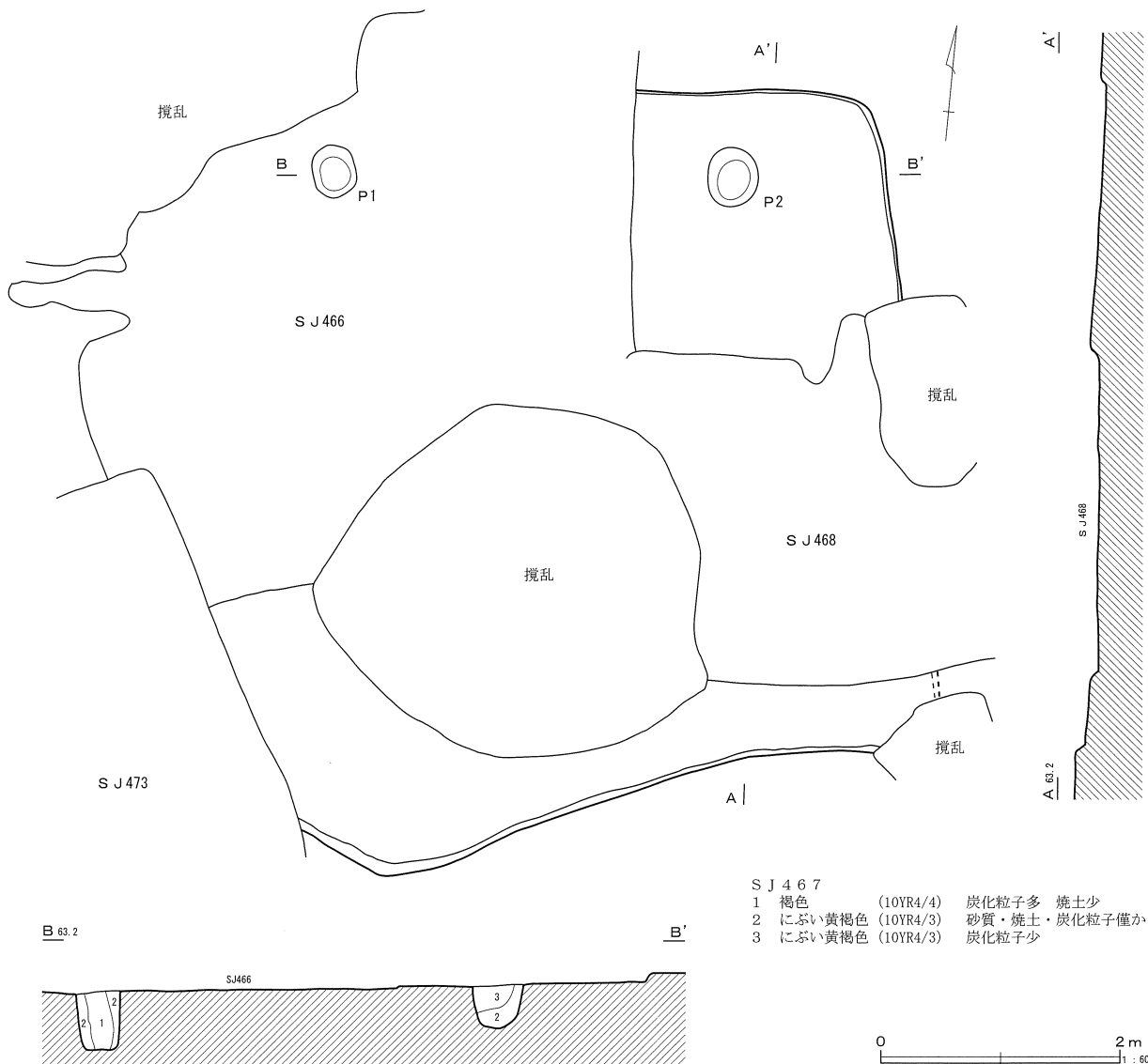
ど接合しなかった。

第466号住居跡出土遺物観察表（第278図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.8		BDEFGJ	良好	明赤褐	5	B区	末野産
2	須恵甕				ABGJL	良好	灰		A区	

第466号住居跡出土土錘観察表（第278図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	5.85	1.70	0.45	11.68	B a IV	A	浅黄橙	90	B区



第279図 第467号住居跡

第467号住居跡 (第279・280図)

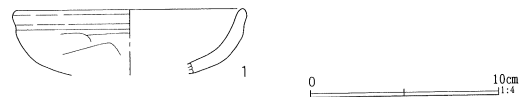
H-22グリッドに位置する。第466・468・473号住居跡と重複し、本住居跡が最も旧く、部分的に攪乱に壊される。北東コーナー周辺と南壁から南西コーナーを検出したのみである。平面形は東西に僅かに長い長方形で、短軸5.88mで、長軸が6.2m前後と考えられる。南西コーナーはやや西に開いている。深さは0.01~0.09mである。主軸方位は南壁でN-75°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開きながら立ちあがる。覆土

の観察は出来なかった。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。ピットは2本検出され、P1・P2の深さは48cm、37cmである。P2は第466号住居跡床面で検出された。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が微量出土したが、図示可能な遺物は、土師器片1点のみであった。



第280図 第467号住居跡出土遺物

第467号住居跡出土遺物観察表 (第280図)

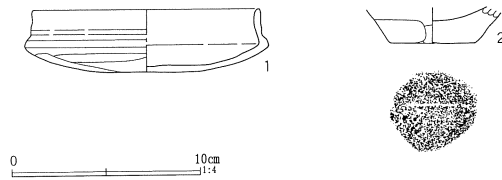
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師片	(12.0)	3.4		BDEFGIJL	良好	橙	5	覆土	

第468号住居跡 (第281・282図)

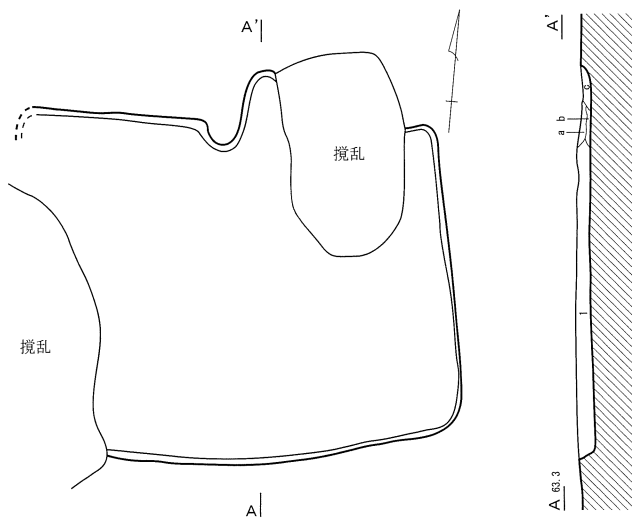
H-22グリッドに位置する。第464・466・467号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。周辺住居跡と同時に調査を進めたこと、攪乱に壊されていたため西壁は検出できなかった。平面形は東西に長い長方形で、長軸は3.5m前後で、短軸2.74mと考えられる。深さは0.10~0.14mである。主軸方位はN-7°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは北壁に設置される。カマド右は攪乱で壊されていた。燃烧部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。



第281図 第468号住居跡出土遺物



SJ468
 1 褐色 (10YR4/4) 地山土主体 焼土多
 カマド
 a 褐色 (10YR4/6) 焼土多
 b 褐色 (10YR4/4) 焼土多 地山ブロック少
 c 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子少



第282図 第468号住居跡

遺物は、古墳時代後期の土師器・甕の破片が少量出土したが、図示可能な遺物は、土師器・甕 1 点であった。

第468号住居跡出土遺物観察表 (第281図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.3		B D E F G L	良好	にぶい黄褐色	30	B区	
2	土師甕		1.9	4.4	A B E G H	良好	明赤褐色	70	B区	底部木葉痕

第469号住居跡 (第283・284図)

J・K-24グリッドに位置する。第470・536号住居跡・第16号掘立柱建物跡・第260号土坑と重複し、その何れよりも新しい。平面形は東西に長い長方形で、長軸3.30m、短軸2.50m、深さは0.20~0.24mである。主軸方位はN-74°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

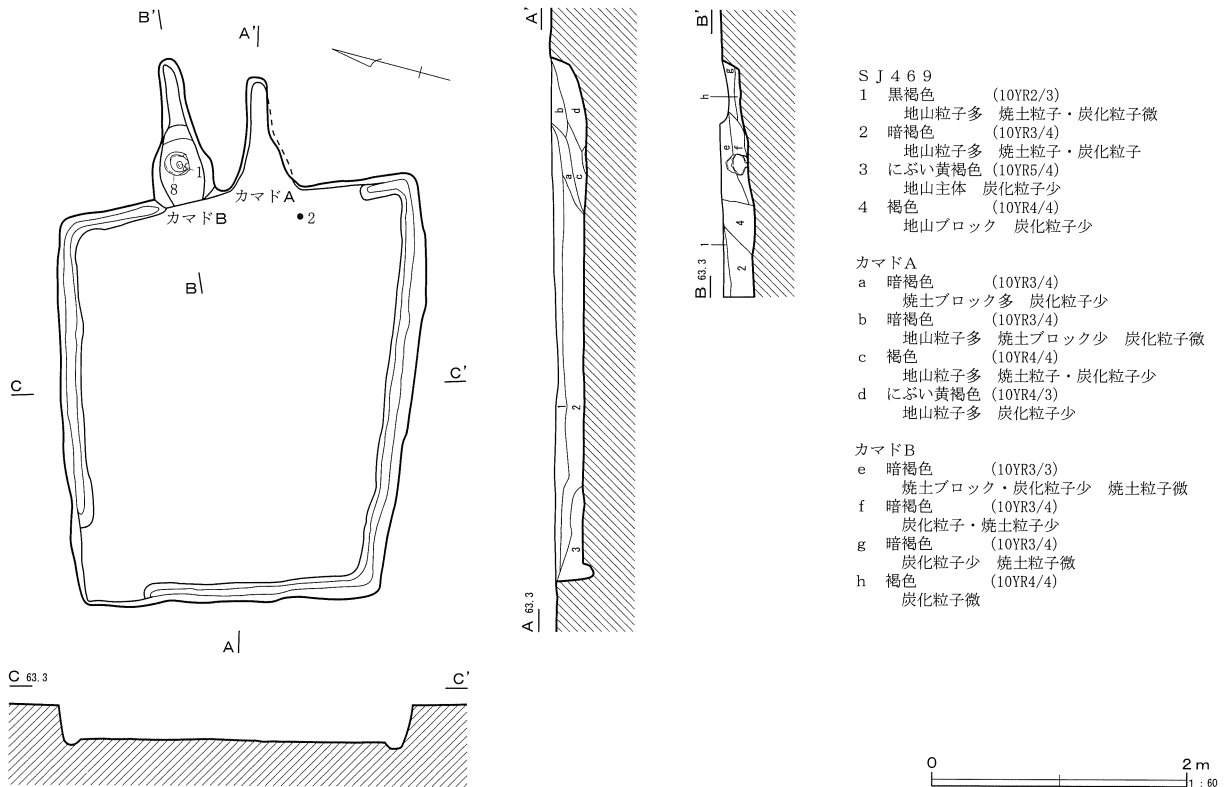
カマドは2基検出された。カマドAは東壁中央よりやや南に設置される。燃烧部の掘り込みはなく、そのまま煙道部となる。覆土最下層に明瞭な焼土が観察された。カマドBはカマドAの北側に位置し、

覆土は埋め戻されていた。燃烧部の掘り込みなく、小さな段で煙道部へ続く。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北西コーナーで途切れるがほぼ全周し、幅14~24cm、深さ4~8cmである。

調査時には確認できなかったが、住居跡の平面形が歪むのは、カマド付け替えの際に南西コーナーを起点として南壁を張り出させ拡張した可能性がある。

遺物は、平安時代の土師器・須恵器が多量に出土したが、小破片で摩滅が著しく、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・台付甕1、須恵



第283図 第469号住居跡

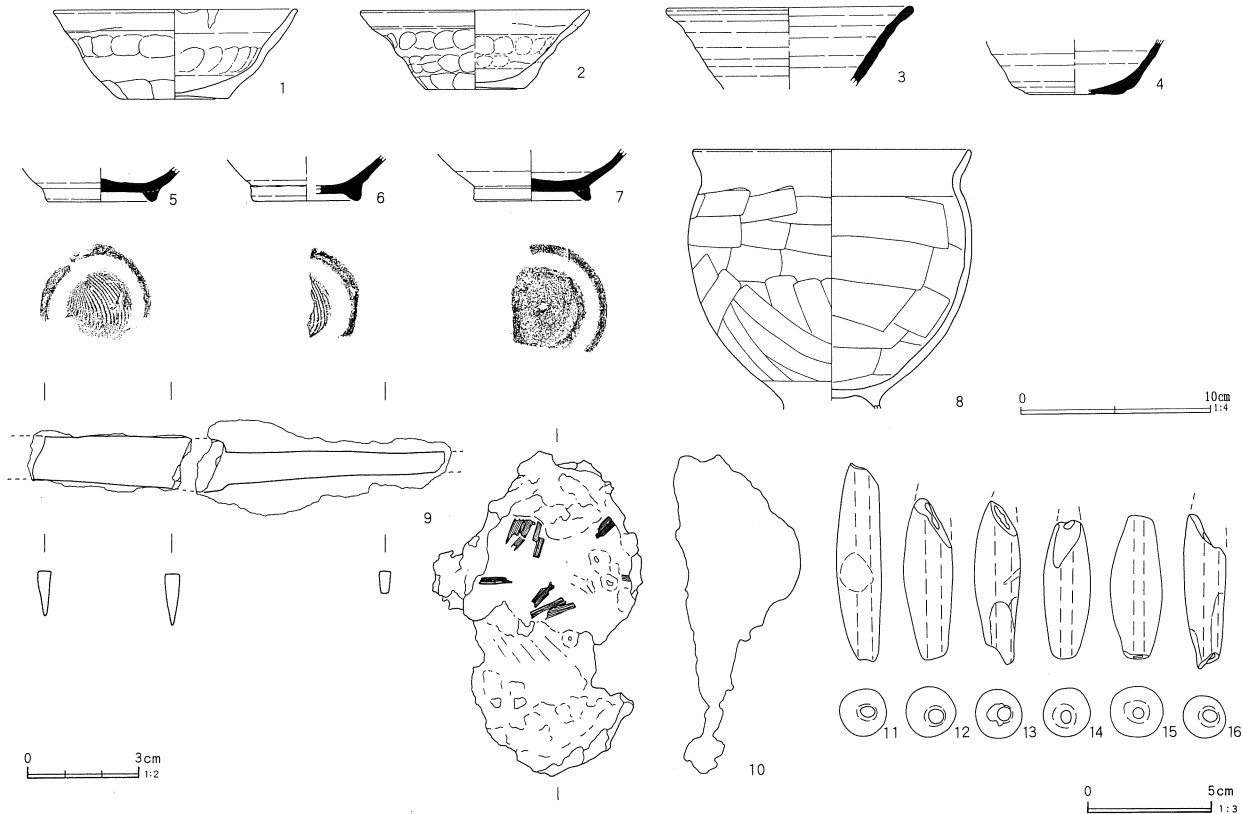
器坏2・高台付椀3、椀形滓1、刀子1、土鍾6点であった。

1・2は、土師器坏である。1はカマドBから、2はカマドA手前の床面からやや浮いた状態で出土した。2点とも平底で、体部下端部をヘラケズりする。体部は内外面とも指頭による押さえ痕が顕著で、

このため、体部は凹凸が顕著である。

3・4は、須恵器坏としたが、底部を欠いており、高台付椀であった可能性がある。

8は台付甕で、脚部を欠損していた。カマドBから出土した。



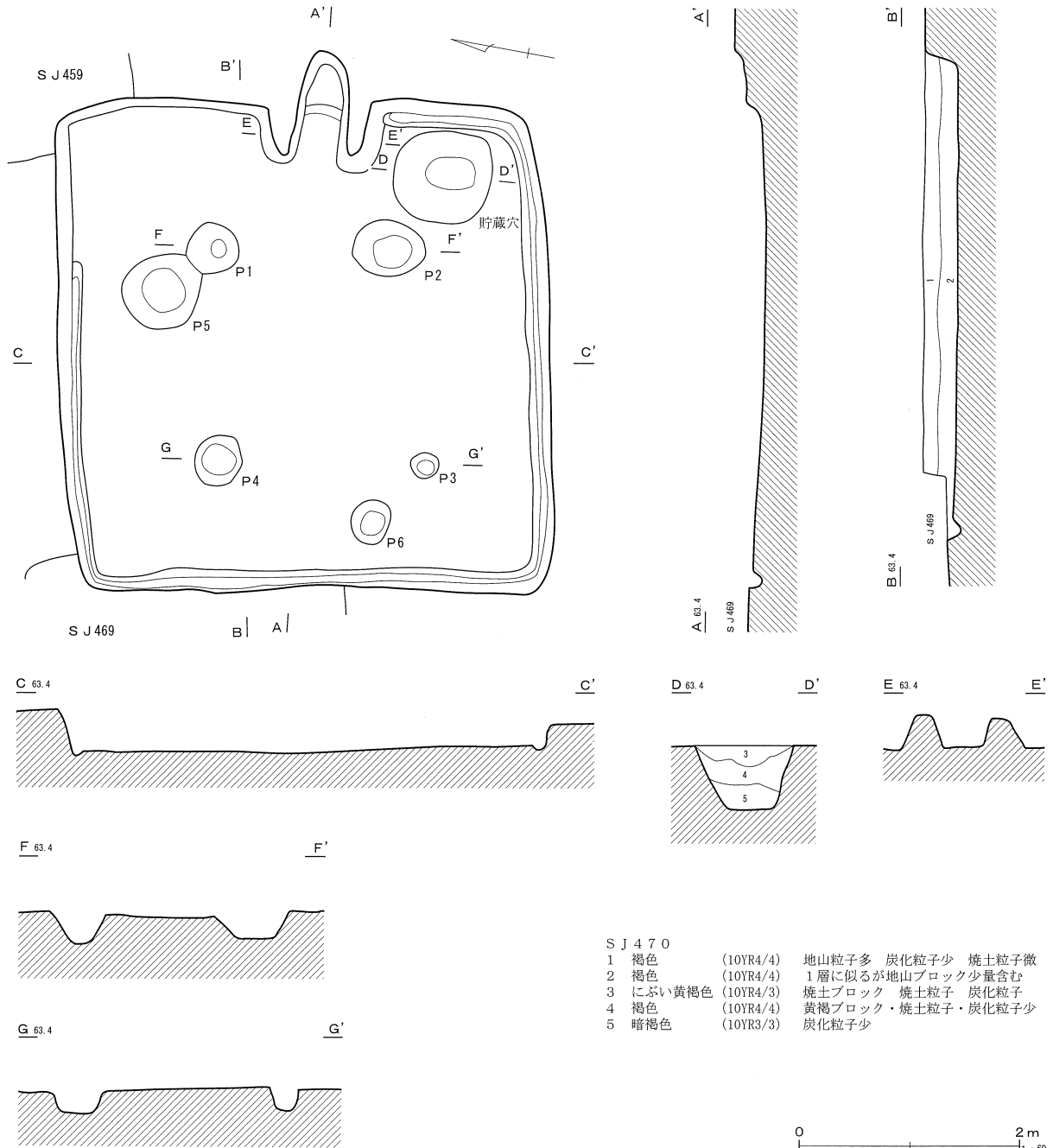
第284図 第469号住居跡出土遺物

第469号住居跡出土遺物観察表 (第284図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.9	4.8	5.7	BDEFG	良好	にぶい橙	90	カマド	油煙? 煤状付着物 灯明皿の可能性あり
2	土師坏	(12.1)	4.2	5.3	BDEFG	良好	浅黄橙	50	+4cm	
3	須恵坏	(13.0)	4.3		BDEFG	不良	灰白	20	覆土	末野産か?
4	須恵坏		2.8	(5.3)	BDFGH	不良	灰白	40	カマド・B区	末野産 底部回転糸切
5	須恵高台椀		1.8	5.6	BCEFL	不良	灰白	70	覆土	末野産 底部回転糸切後高台貼付
6	須恵高台椀		2.4	(5.6)	ADEG	不良	灰白	20	覆土	末野産 底部回転糸切後高台貼付
7	須恵高台椀		2.7	(6.0)	ABDEGH	不良	にぶい黄褐	25	カマド・B区	末野産 底部回転糸切後高台貼付
8	土師台付甕	14.6	13.7		ABDEGJ	良好	明黄褐	70	カマド	
9	椀形鉄滓	長さ12.80cm 幅8.30cm 厚さ5.00cm 重さ403.89g							覆土	
10	刀子	残存長11.0cm 背幅0.40cm 刃幅1.30cm 重さ31.83g							覆土	身部から筥部にかけての部材

第469号住居跡出土土錘観察表 (第284図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
11	7.80	1.90	0.60	22.89	B a II	A	灰黄	100	
12	(6.30)	1.90	0.50	20.07	B a III	A	灰黄褐	80	
13	(6.50)	1.90	0.50	17.57	—	A	にぶい黄橙	—	
14	(6.00)	1.60	0.50	12.75	B a III	A	にぶい黄橙	80	
15	5.60	2.00	0.40	20.12	B b IV	A	にぶい黄橙	100	
16	(5.60)	1.90	4.00	17.33	B a IV	A	明赤褐	90	



第285図 第470号住居跡

第470号住居跡（第285・286図）

J・K-24グリッドに位置する。第459・469号住居跡に切られ、第16号掘立柱建物跡を切る。平面形は正方形で、南北4.56m、東西4.49m、深さは0.16～0.23mである。主軸方位はN-79°-Eを指す。

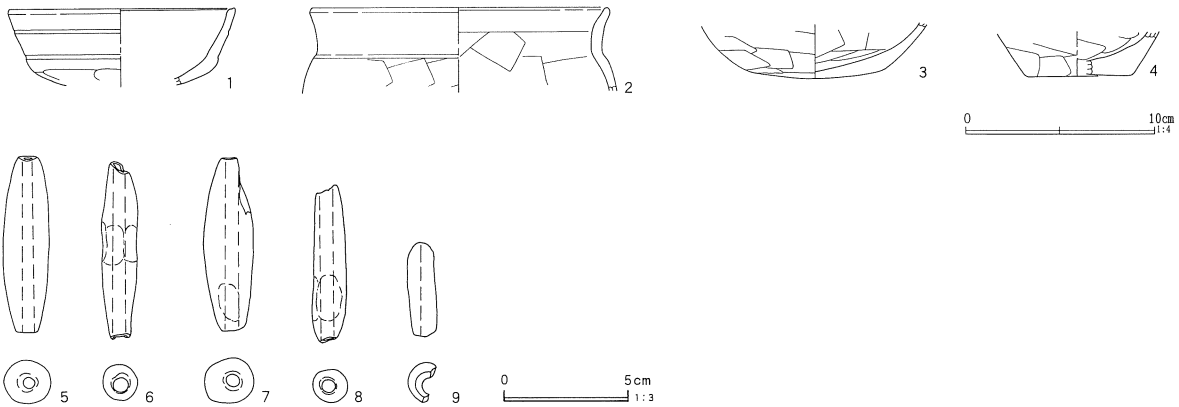
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながらは立ちあがる。

カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃焼部の掘り込みはなく、段を持って煙道部へ続く。覆土の観察は出来なかった。貯蔵穴はカマド右に設けられ、88×82cmの隅丸方形で、深さは59cmである。

壁溝は北東コーナー周辺以外で検出され、幅16～32cm、深さ2～6cmである。ピットは6本検出され、P1～P6の深さは26cm、24cm、21cm、19cm、28cm、17cmである。P1～P4は支柱穴と考えられる。

遺物は、古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器片が出土した。土師器は坏・甕、須恵器は蓋・甕片が出土したが、小破片が多く、殆ど図示できなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1・甕3、土錘5点であった。



第286図 第470号住居跡出土遺物

第470号住居跡出土遺物観察表（第286図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	4.1		ABDEFJL	良好	橙	20	覆土	
2	土師甕	(15.6)	4.5		ABDEGJ	良好	にぶい黄橙	10	覆土	
3	土師甕		2.8	7.2	ABEGHJ	良好	明赤褐	80	覆土	
4	土師甕		2.4	(5.6)	ADJ	良好	にぶい黄褐	50	カマド	

第470号住居跡出土土錘観察表（第286図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	6.90	1.80	0.45	20.83	B a III	C	にぶい橙	100	
6	7.00	1.40	0.60	12.66	B a III	A	にぶい黄橙	100	
7	6.80	2.00	0.50	21.91	B a III	A	灰黄褐	80	
8	6.20	1.30	0.50	9.15	A a IV	A	浅黄橙	100	
9	(3.70)	1.80	0.60	4.47	B a	C	灰黄褐	—	

第471号住居跡（第287・288図）

H・I-22グリッドに位置する。第482号住居跡に切られ、第453・494・495号住居跡を切る。北東コーナーと床面の一部を攪乱で壊される。平面形は東西

に長い長方形で、長軸6.56m、短軸5.76m、深さは0.16～0.22mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。

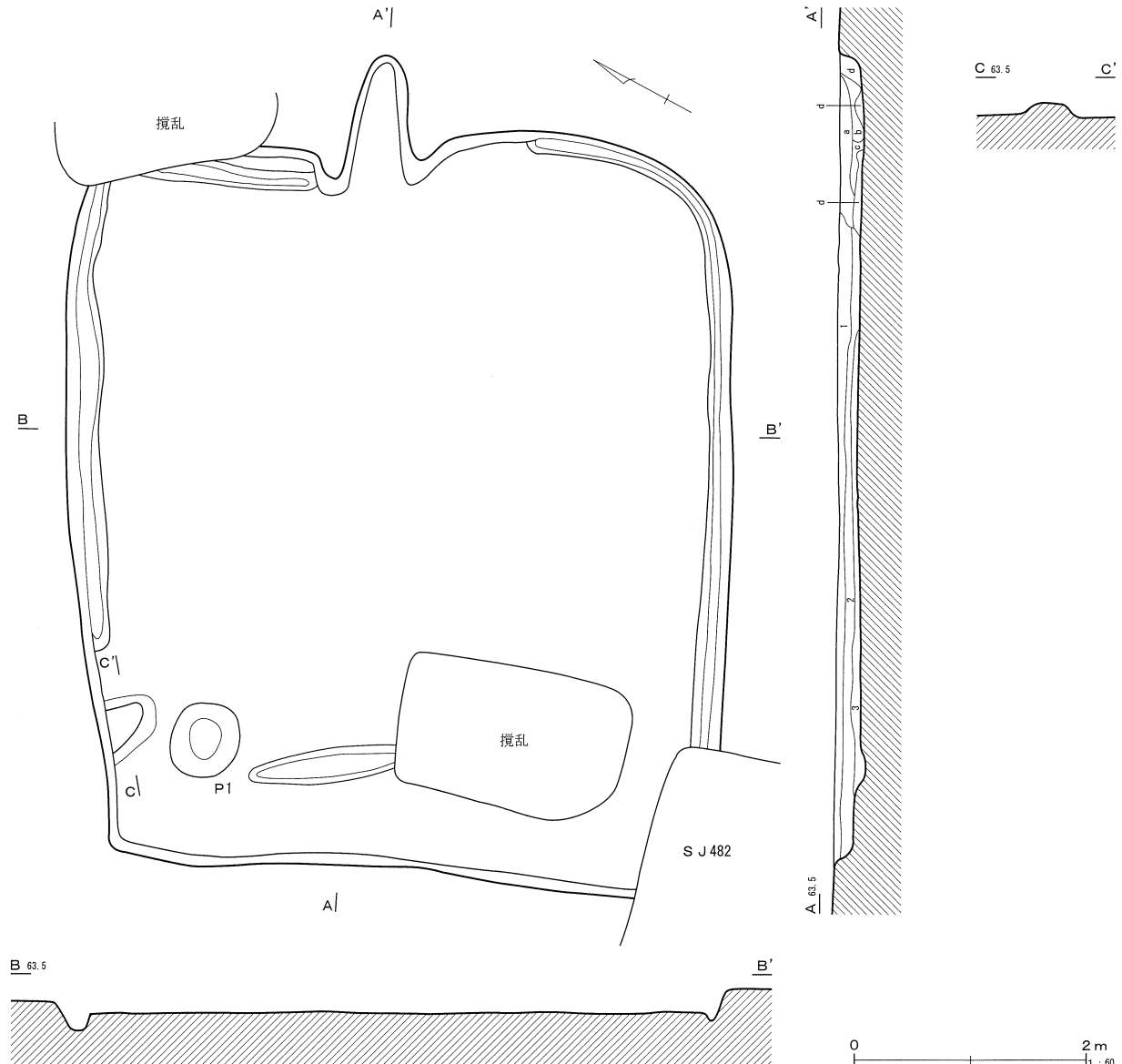
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは東壁に設置される。燃烧部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西壁以外で検出され、幅18~32cm、深さ7~15cmである。西壁では壁から約60cm離れて壁と並行する溝が検出された。壁溝とするにはやや離れ過ぎる。ピットは1本検出され、深さは19cmである。北

西コーナー近くの北壁が台状に南に飛び出していた。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が多く出土した。特に土師器甕の破片が多かったが、胴部の破片が多く、殆ど接合しなかった。

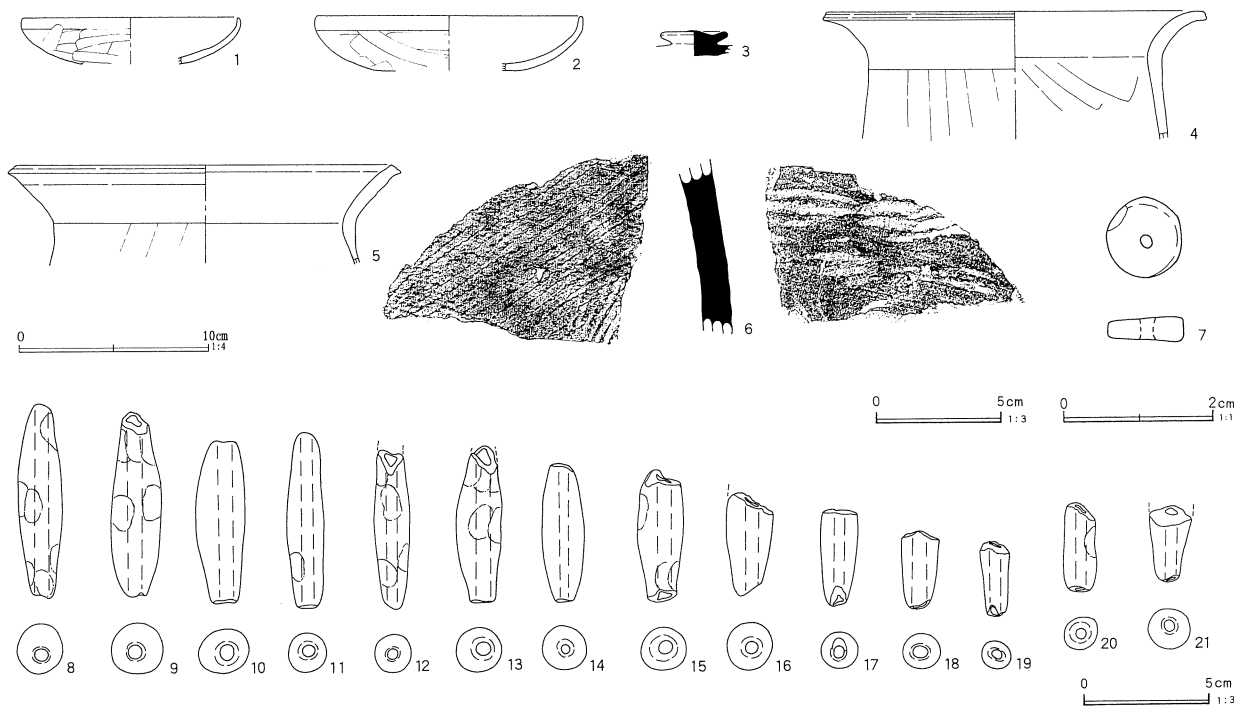
図示可能な遺物は、土師器坏2・甕2、須恵器蓋1・甕1、滑石製白玉1、土錘14点であった。



- S J 4 7 1
 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質地山を全体に溶混 焼土 炭化粒子
 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 1に似るが、地山多ブロック状
 3 褐色 (10YR4/4) 砂質地山ブロック主体

- カマド
 a にぶい黄褐色 (10YR5/3) 焼土 砂質ブロック 天井崩落土
 b にぶい黄褐色 (10YR4/3) a層に似るが地山ブロック主体
 c 暗褐色 (10YR3/4) 焼土・炭化粒子多 灰層に相当
 d 褐色 (10YR4/4) 地山主体・焼土面

第287図 第471号住居跡



第288図 第471号住居跡出土遺物

第471号住居跡出土遺物観察表（第288図）

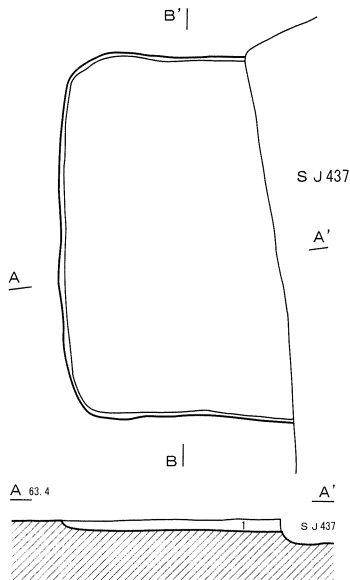
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.6)	2.5		ABDEJL	良好	橙	5	覆土	末野産 滑石製 欠損有り
2	土師坏	(14.0)	3.4		BDEFGL	良好	橙	10	カマド	
3	須恵蓋		1.4		BCF	良好	灰白	90	覆土	
4	土師甕	(19.8)	6.7		A EFGJL	良好	浅黄橙	25	覆土	
5	土師甕	(19.8)	5.3		A B E J	良好	橙	20	覆土	
6	須恵甕				H J L	良好	暗灰		覆土	
7	白玉	直径1.05cm 厚さ0.35cm 孔径0.20cm 重さ0.61g							覆土	

第471号住居跡出土土錘観察表（第288図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
8	7.65	2.00	0.50	18.95	C a II	A	にぶい黄橙	100	
9	7.30	2.00	0.55	22.02	C a III	A	橙	100	
10	6.40	2.05	0.60	19.64	B a IV	A	浅黄橙	95	
11	6.90	1.60	0.45	13.77	B a III	B	灰黄褐	100	
12	(6.25)	1.50	0.45	11.08	B a IV	B	にぶい黄褐	95	
13	(6.15)	1.25	0.60	15.49	C b IV	A	橙	95	
14	5.45	1.75	0.35	14.13	B b V	A	橙	100	
15	5.20	2.30	0.55	13.70	B a V	A	にぶい黄橙	95	
16	(4.05)	1.90	0.45	11.14	—	A	にぶい橙	50	
17	3.80	1.45	0.45	7.65	B a VI	A	橙	100	
18	(3.05)	1.50	0.60	4.29	—	A	黄橙	—	
19	(2.95)	1.20	0.40	2.76	—	B	黒褐	—	
20	3.50	1.40	0.40	5.26	A a VI	A	赤褐	100	
21	(3.00)	1.65	0.45	5.34	—	B	黒褐	—	

第472号住居跡（第289図）

I-24グリッドに位置する。東半を第437号住居跡に切られていた。検出された規模は、南北2.87m、東西1.80mで、深さは0.06~0.10mである。主軸方位は西壁でN-6°-Wを指す。



床面はやや起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕片が少量出土した、坏片には、有段口縁坏が含まれていたが、図示可能な遺物はなかった。



S J 4 7 2
1 褐色 (10YR4/4)
地山粒子多 炭化粒子少



第289図 第472号住居跡

第473号住居跡（第290・291図）

H・I-21・22グリッドに位置する。第466・467号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は正方形で、東西4.07m、南北3.86m、深さは0.10~0.16mである。主軸方位はN-21°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、カマド周辺がやや低くなる。壁は開きながら立ちあがる。覆土の観察は出来なかった。

カマドは北壁中央よりやや東に設置される。燃焼部は10cm程掘り込み緩やかに立ち上がる。貯蔵穴は

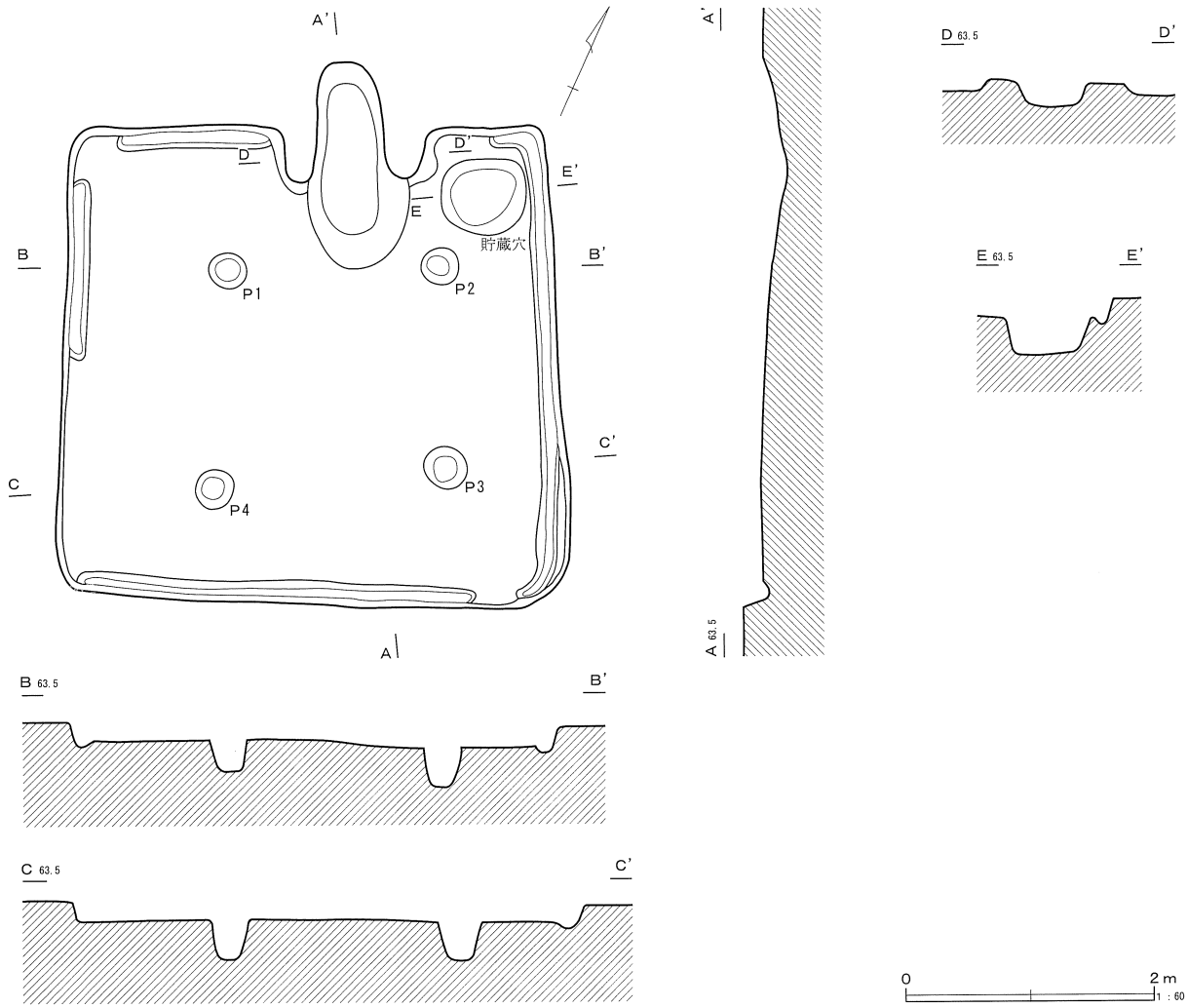
カマド右に設けられ、70×60cmの楕円形で、深さは32cmである。壁溝は断続的に検出され、幅16~22cm、深さ2~5cmである。ピットは4本検出され、P1~P4の深さは26cm、32cm、29cm、33cmである。何れも支柱穴と考えられる。

遺物は、覆土から土師器坏・甕の破片が出土したが、小破片が多かった。

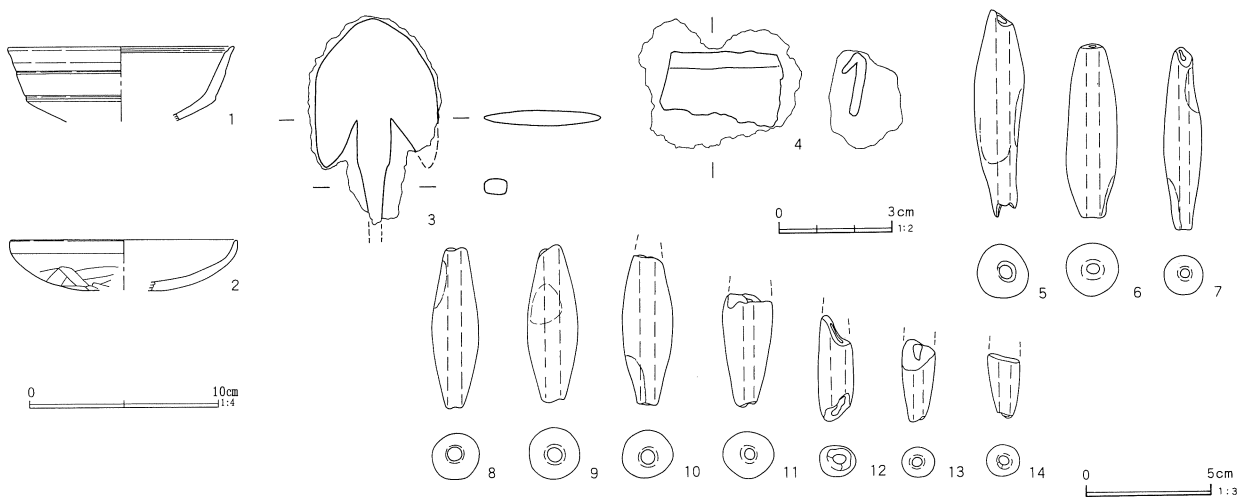
図示可能な遺物は、土師器坏2、鉄製品2、土錘10点であった。

第473号住居跡出土遺物観察表（第291図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.9		B D E F J	良好	橙	10	覆土	
2	土師坏	(11.9)	2.7		B D F G J	良好	橙	20	覆土	
3	鉄鏃	現存長5.50cm 幅3.10cm 厚さ0.40cm 重さ22.98g							覆土	
4	不明鉄製品	現存長3.30cm 幅2.00cm 重さ31.97g							覆土	



第290图 第473号住居跡



第291图 第473号住居跡出土遺物

第473号住居跡出土土錘観察表（第291図）

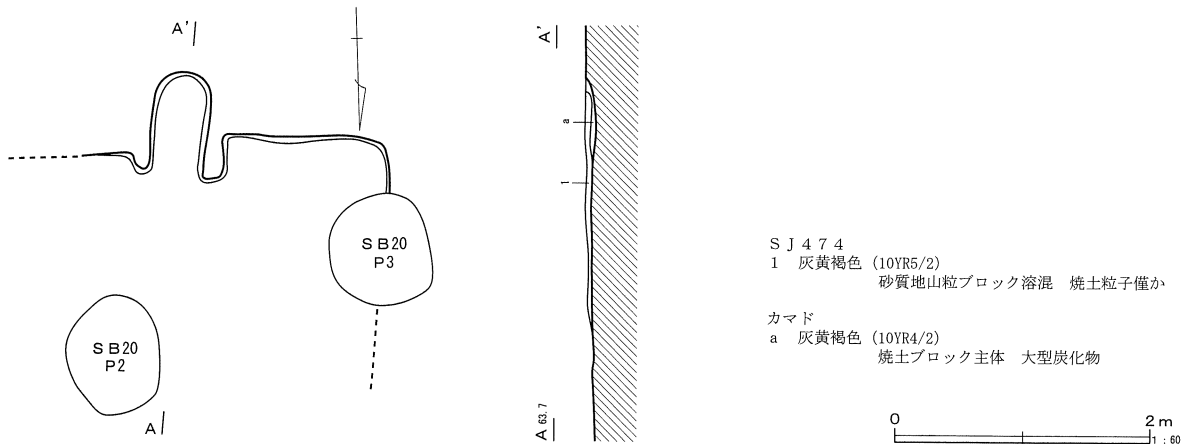
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	8.10	2.10	0.50	22.97	B a II	A	にぶい橙	90	P3
5	6.80	2.10	0.50	27.56	B b II	A	灰黄褐	100	
6	7.20	1.55	0.35	13.76	B a III	A	にぶい黄橙	95	
7	6.30	1.90	0.55	18.09	B a IV	A	にぶい黄橙	100	
8	6.20	2.00	0.60	19.74	B a IV	A	にぶい赤褐	100	
9	(5.90)	2.00	0.60	19.68	B a III	A	にぶい黄橙	80	
10	(4.50)	2.00	0.40	12.59	B a IV	A	灰黄褐	90	
11	(4.20)	1.40	0.50	6.33	—	A	明赤褐	—	
12	(3.20)	1.30	0.40	3.99	—	A	にぶい橙	—	
13	(2.50)	1.30	0.40	3.44	—	A	灰白	—	

第474号住居跡（第292図）

I-21グリッドに位置する。第20号掘立柱建物跡と重複し本住居跡が古い。南西コーナーからカマドにかけて検出されたのみで、他は消失していた。検出された規模は、東西2.40m、南北1.50mで、深さは0~0.07mである。主軸方位はN-177°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁の状態は不明瞭である。カマドは南壁に設置される。燃烧部の掘り込みはなく急激に立ち上がる。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、土師器坏・甕、須恵器蓋・甕の破片が微量出土したが、図示可能な遺物はなかった。



第292図 第474号住居跡

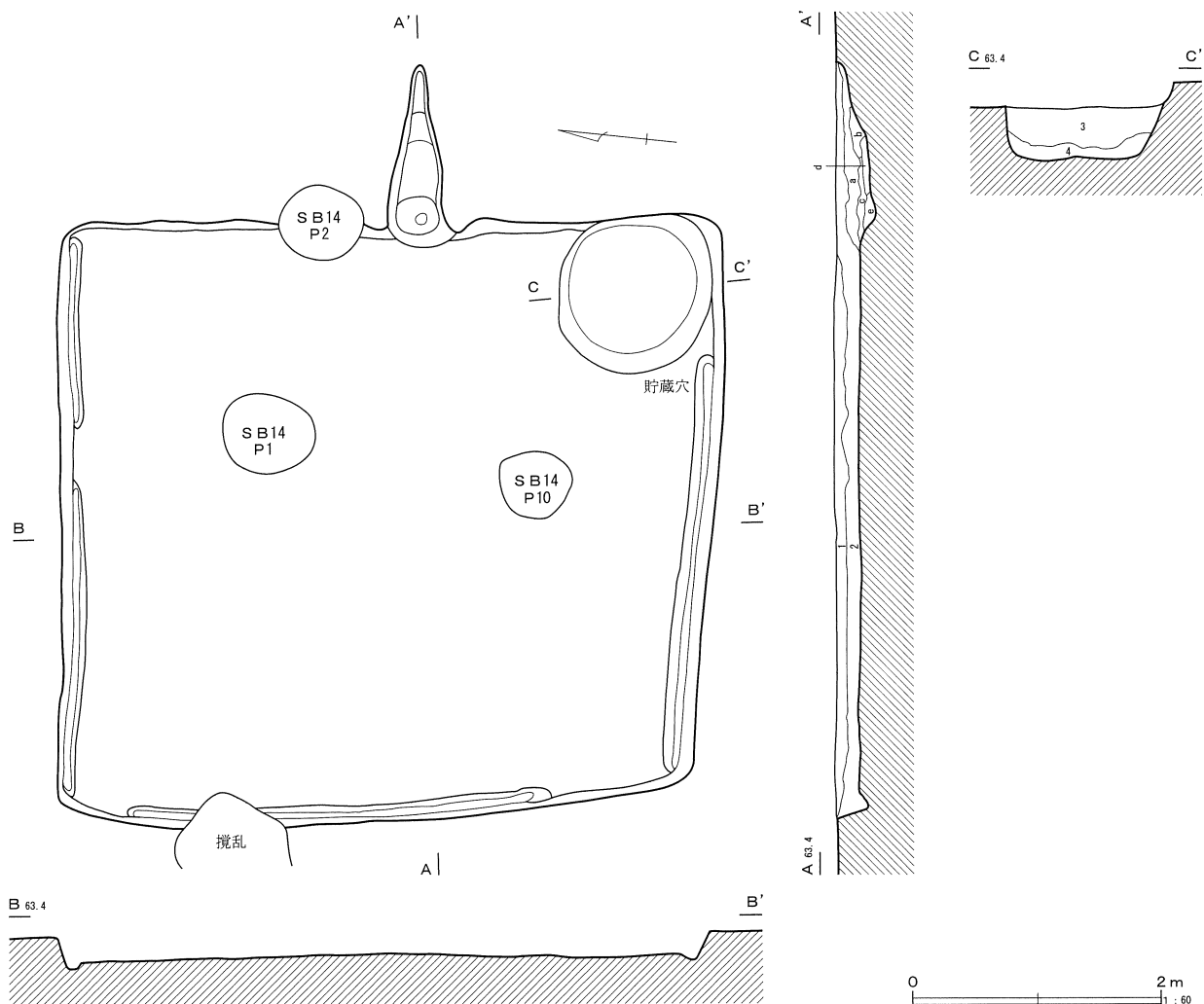
第479号住居跡（第293・294図）

I・J-23グリッドに位置する。第14号掘立柱建物跡に切られ、第457号住居跡を切る。西壁の一部は攪乱で壊されていた。平面形は南北に僅かに長い長方形で、長軸5.35m、短軸4.92m、深さは0.12~0.22mである。主軸方位はN-86°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

カマドは東壁中央に設置される。燃烧部は15cm程掘り込み、緩やかな段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴は南東コーナーの壁に接して設けられ、径126cmの円形で、深さは47cmである。壁溝は断続的に検出され、幅14~24cm、深さ3~8cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器の破片が出土した。何れも小破片が多く、図示できた遺物は、須恵器坏1・甕1、刀子1・板状鉄製品1、土錘1点



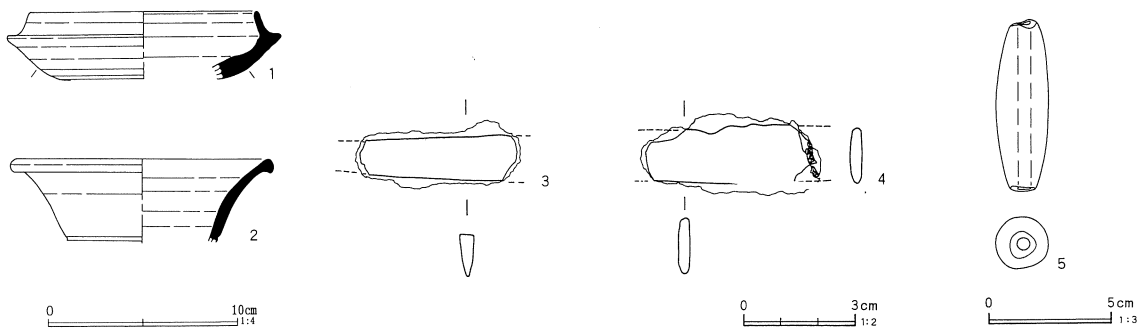
S J 4 7 9

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 白色粒子多 炭化粒子少 やや砂質
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 1層に似るが灰黄褐色粘土ブロック多
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山極多 炭化粒子・焼土粒子少
- 4 褐色 (10YR4/4) 地山粒子極多 炭化粒子僅か

カマド

- a 暗褐色 (10YR3/3) 1層に似るが白色粒子の混入少
- b 褐色 (10YR4/4) 砂質 地山と同様だが焼土粒子・炭化粒子少
- c 暗褐色 (10YR3/4) 焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少
- d 黒褐色 (10YR3/2) やや砂質 焼土粒子・炭化粒子やや多
- e 褐色 (7.5YR4/4) 砂質 焼土粒子多

第293図 第479号住居跡



第294図 第479号住居跡出土遺物

であった。

1は須恵器坏である。口縁部の破片である。表面は、内外面とも黒色処理を施したような光沢感がある。産地は不明である。

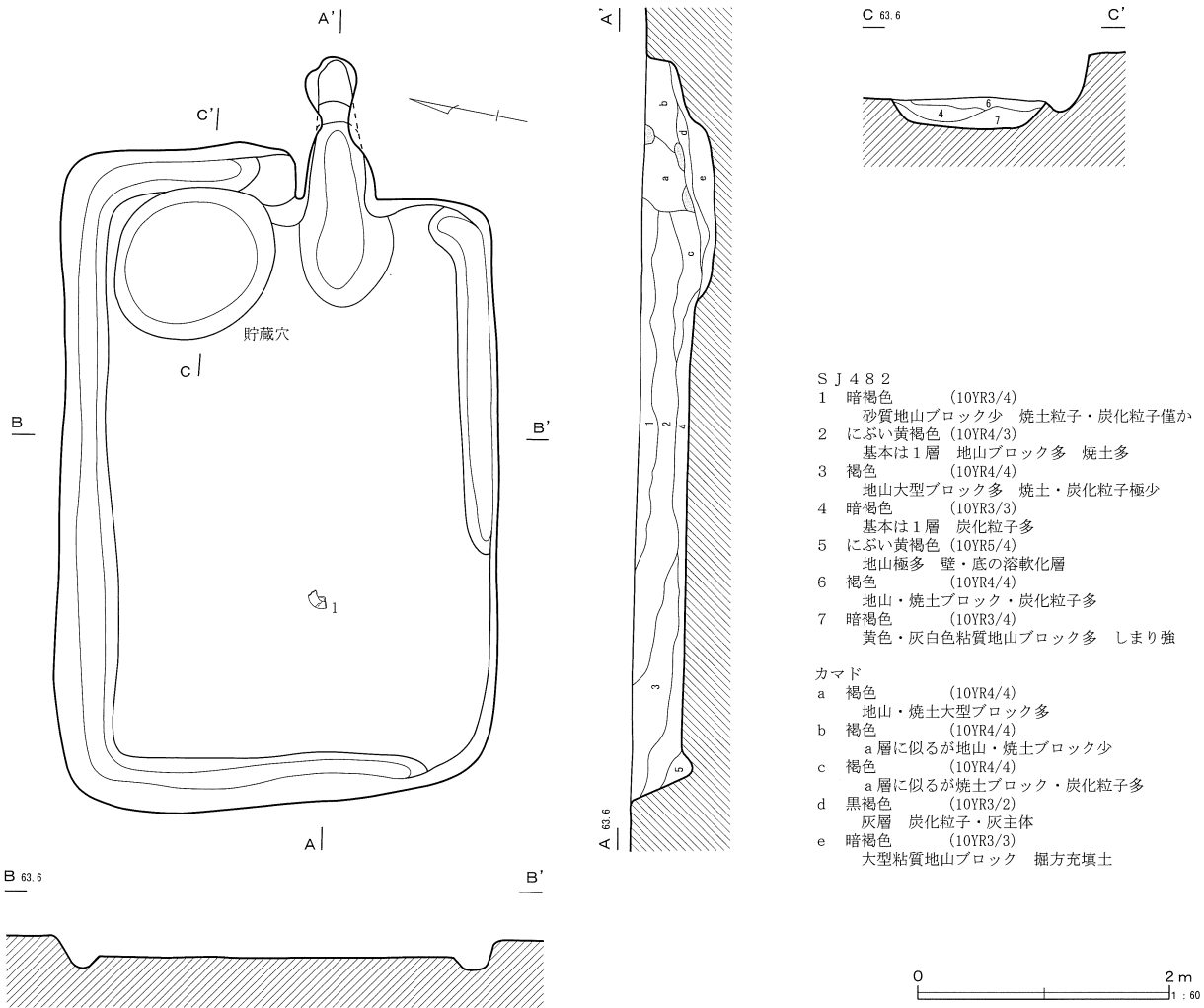
2は、甕の口縁部としたが、頸部に沈線を有し、口縁端部はやや丸みを持っており、高坏の脚部であった可能性もある。口縁部の10%の破片であったため、明らかにできなかった。

第479号住居跡出土遺物観察表（第294図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	(12.0)	3.6		B I J L	良好	黒	25	B区	産地不明 底部回転ヘラケズリ 末野産か？
2	須恵甕	(13.4)	4.5		B J	良好	褐灰	10	B区	
3	刀子	現存長4.20cm 背幅0.40cm 刃幅1.15cm 重さ10.16g							覆土	
4	板状鉄製品	現存長4.60cm 幅1.50cm 厚さ0.30cm 重さ16.14g							覆土	

第479号住居跡出土土鍾観察表（第294図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
5	6.75	2.10	0.50	27.95	B a III	A	橙	100	B区



第295図 第482号住居跡

第482号住居跡（第295・296図）

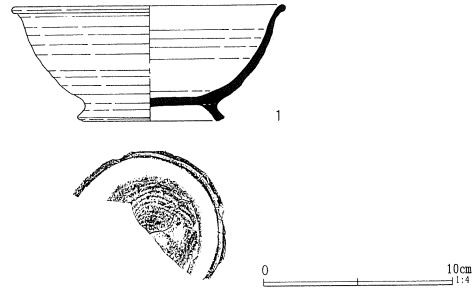
I-21・22グリッドに位置する。第20号掘立柱建物跡に切られ、第471・494・495号住居跡・第21・23号掘立柱建物跡を切る。平面形は東西に長い長方形で、長軸5.32m、短軸3.54m、深さは0.24～0.39mである。主軸方位はN-78°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ちあがる。カマドより北の東壁は張り出している。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部は20cm程掘り込んで埋め戻した上に見られ、灰層が形成されていた。貯蔵穴はカマド左に設けられ、径126cmの円形で、深さは24cmである。壁溝は南西

コーナー以外で検出され、幅24～50cm、深さ9～12cmである。

遺物は、図示した須恵器高台付椀以外は出土しなかった。



第296図 第482号住居跡出土遺物

第482号住居跡出土遺物観察表（第296図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵高台椀	(14.3)	6.1	(7.1)	ABFHJL	良好	灰オリーブ	45	+7cm	末野産 底部回転糸切後高台貼付

第485号住居跡（第297・298図）

J・K-23・24グリッドに位置する。第536号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。平面形は正方形で、東西3.99m、南北3.84m、深さは0.27～0.31mである。主軸方位はN-116°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

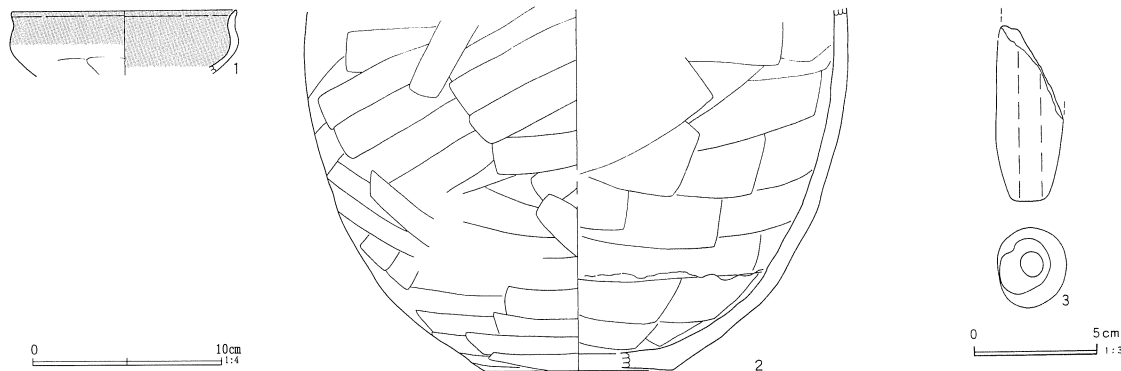
カマドは西壁中央より僅かに北に設置される。燃焼部の掘り込みはなく、断面に焼土層が確認された。煙道部手前は10cm程掘り下げ、段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴はカマド左に設けられ、90×70cmの楕

円形で、深さは45cmである。壁溝は全周し、幅14～26cm、深さ2～6cmである。

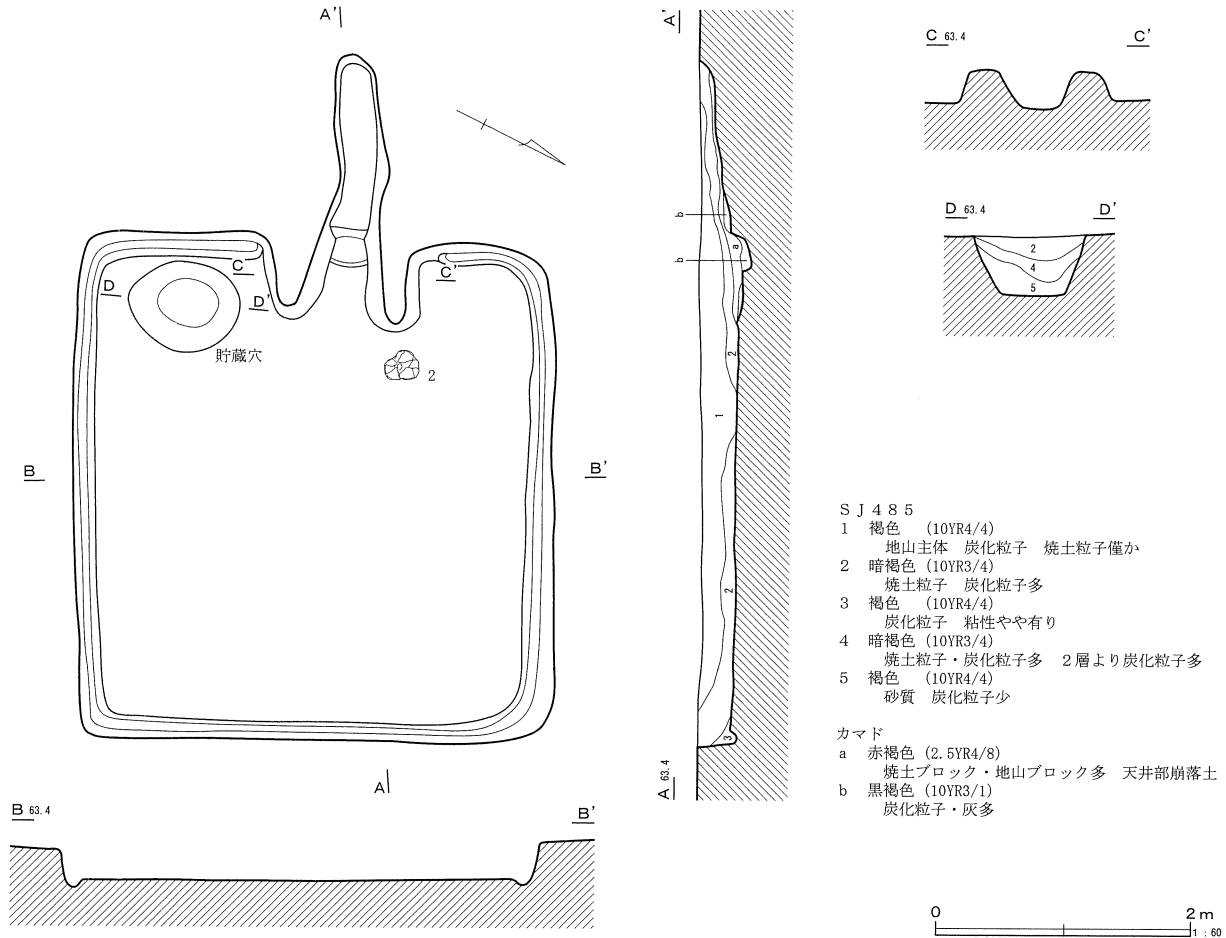
遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片がやや多く出土したが、小片が多く、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏1・甕1、土錘1点が出土した。

1の土師器坏は、比企型坏で、内面全面と、外面口縁部に赤彩が認められた。



第297図 第485号住居跡出土遺物



第298図 第485号住居跡

第485号住居跡出土遺物観察表 (第297図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.4		B E F L	良好	暗赤	5	覆土	内外面赤彩
2	土師甕		14.2	(10.0)	B D E H J L	普通	明褐	30	+4cm	

第485号住居跡出土土錘観察表 (第297図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	(6.90)	3.20	1.00	42.35	—	A	にぶい黄橙	50	

第488号住居跡 (第299・300図)

J-24グリッドに位置する。第16号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡が古い。カマド前面と東壁の一部を攪乱で壊される。平面形は東西に長い長方形で、長軸3.90m、短軸3.08mで、深さは0.03~0.08mと浅い。主軸方位はN-0°である。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち

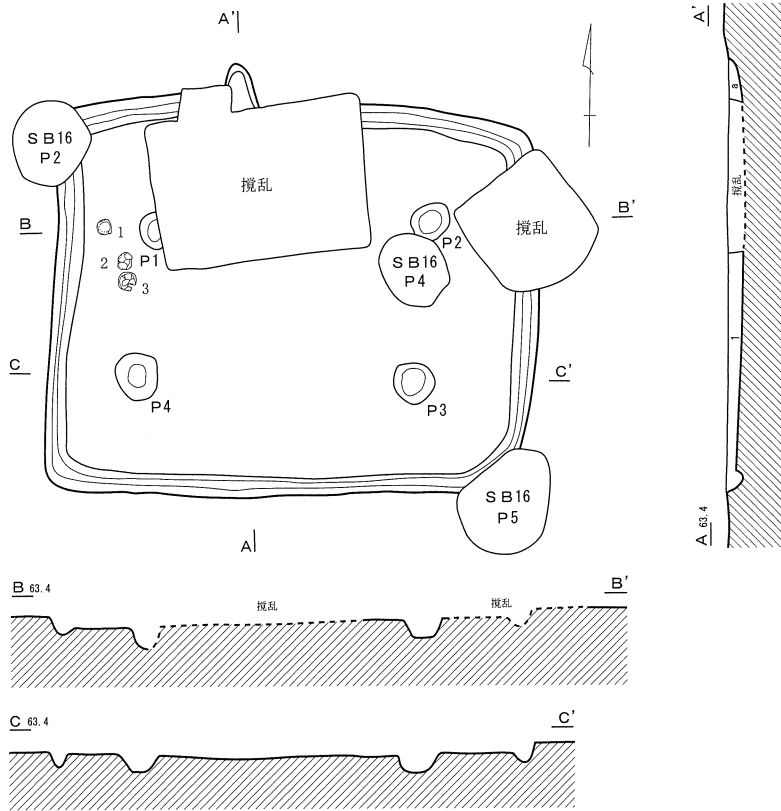
あがる。カマド左の北壁は、僅かに張り出すようである。

カマドは北壁に設置されるが、大半を攪乱で壊されていた。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は全周し、幅6~10cm、深さ6~10cmである。ピットは4本検出され、P1~P4の深さは14cm、14cm、15cm、12cmである。何れも主柱穴と考えられる。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が出土した。特に坏が多かったが、図示した個体以外は接合しな

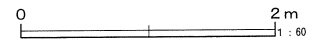
った。

図示可能な遺物は、土師器坏4点であった。

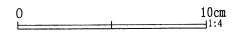
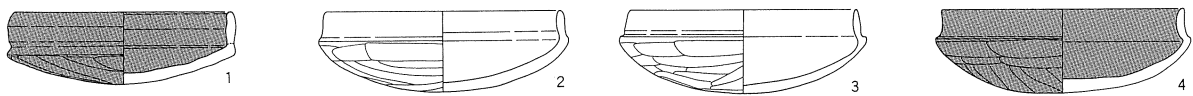


S J 4 8 8
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
地山粒子多 炭化粒子・白色ブロック少

カマド
a にぶい黄褐色 (10YR4/3)
地山ブロック・焼土ブロック多



第299図 第488号住居跡



第300図 第488号住居跡出土遺物

第488号住居跡出土遺物観察表 (第300図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	11.6	3.8		ABDEJ	良好	橙	95	床	内外面黒色処理
2	土師坏	12.5	4.3		BDEFJ	良好	明赤褐	80	+4cm	
3	土師坏	12.1	4.4		BDEFJ	良好	橙	70	+7cm	
4	土師坏	12.8	4.5		ABDEFHJ	良好	橙	80	覆土	内外面黒色処理

第494号住居跡（第301・302図）

I・J-21・22グリッドに位置する。北半を第471・482号住居跡に切られ、第21号掘立柱建物跡を切る。床面の一部は攪乱で壊されていた。検出された規模は、東西6.14m、南北4.12mで、深さは0.20～0.34mである。主軸方位は東壁でN-39°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

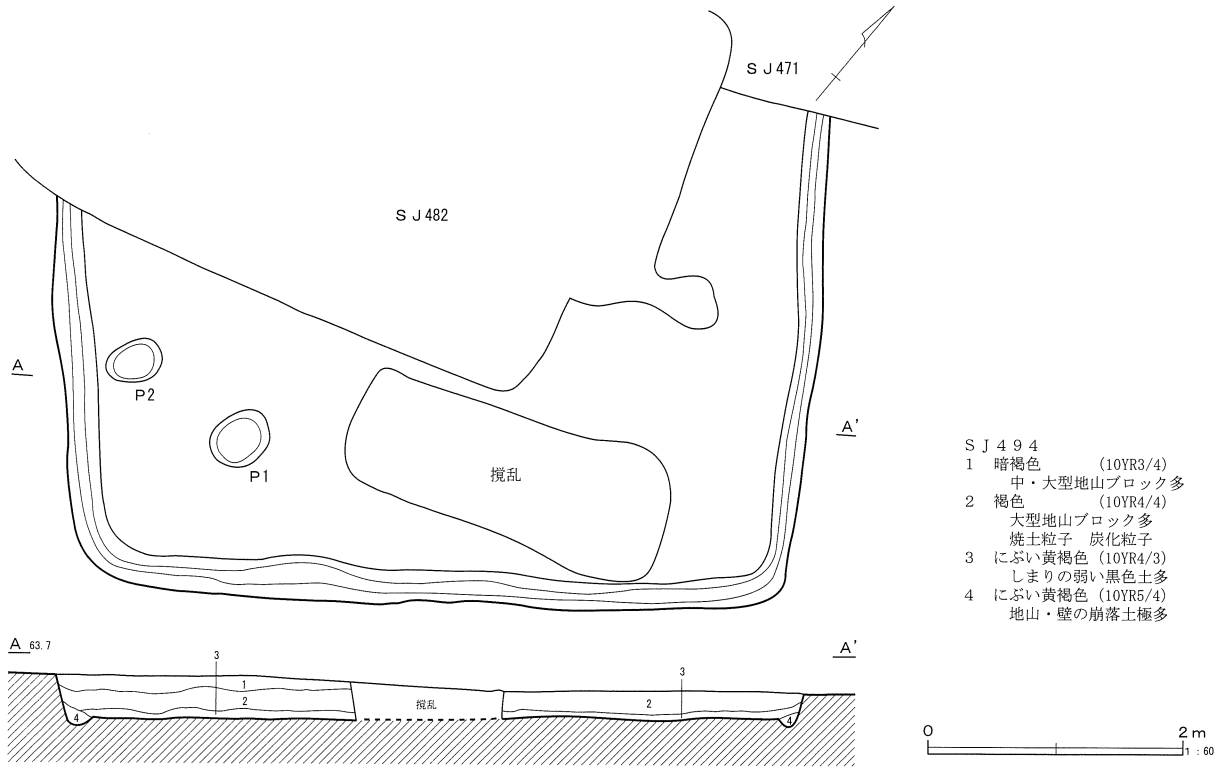
カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は検出された部分で全周し、幅18～36cm、深さ3～7cmで

ある。ピットは2本検出され、P1、P2の深さは3cm、6cmである。

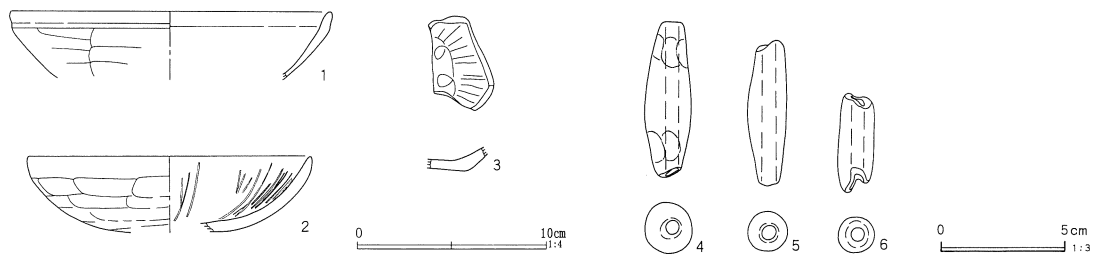
遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が出土した。須恵器の中には、南比企産の須恵器環が含まれていたが、図示できなかった。

図示可能な遺物は、土師器環1・暗文環2、土錘3点であった。

2は、ヘラミガキ状の放射状暗文、3は底部の破片であったが、螺旋状暗文が施されていた。



第301図 第494号住居跡



第302図 第494号住居跡出土遺物

第494号住居跡出土遺物観察表（第302図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(17.0)	3.6		ABDEFGJL	良好	浅黄橙	20	覆土	
2	土師暗文坏	(15.0)	4.0		BDEFGJL	良好	橙	30	覆土	内面放射暗文
3	土師暗文坏		1.3		BDEFGJ	良好	にぶい赤褐		覆土	内面放射+螺旋暗文

第494号住居跡出土土錘観察表（第302図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	6.10	2.05	0.55	17.22	C a IV	C	にぶい黄橙	100	
5	5.70	1.60	0.55	10.69	C a IV	A	浅黄橙	100	
6	3.90	1.40	0.50	6.34	A a VI	A	橙	100	

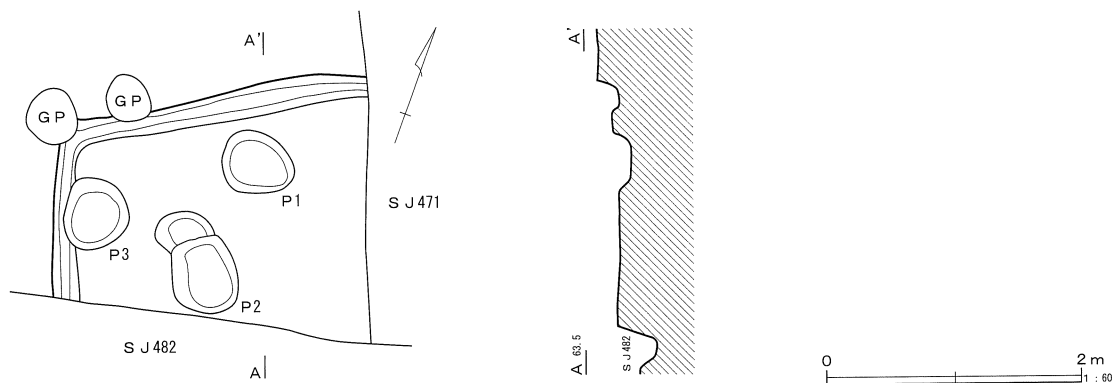
第495号住居跡（第303・304図）

I-21・22グリッドに位置する。第471・482号住居跡と重複し、本住居跡が古い。北西コーナー周辺を検出したのみである。検出された規模は、北壁2.46m、西壁1.46mで、深さは0.13m前後である。主軸方位は北壁でN-60°-Eを指す。

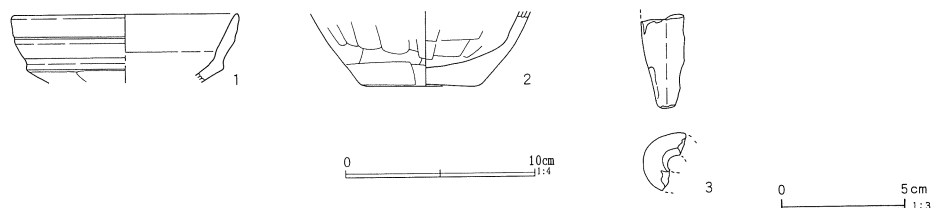
床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。覆土の観察は出来なかった。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は検出された壁では全周し、幅14~24cm、深さ3~5cmである。ピットは3本検出され、P1~P3の深さは13cm、32cm、27cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が少量出土したが、図示可能な遺物は、土師器坏1・甕1、土錘1点であった。



第303図 第495号住居跡



第304図 第495号住居跡出土遺物

第495号住居跡出土遺物観察表（第304図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.6		B E F J L	良好	灰黄褐	5	覆土	
2	土師甕		4.0	6.3	A E G H J	良好	橙	60	覆土	

第495号住居跡出土土錘観察表（第304図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	(3.65)	(2.40)	(0.70)	7.36	—	C	橙	20	

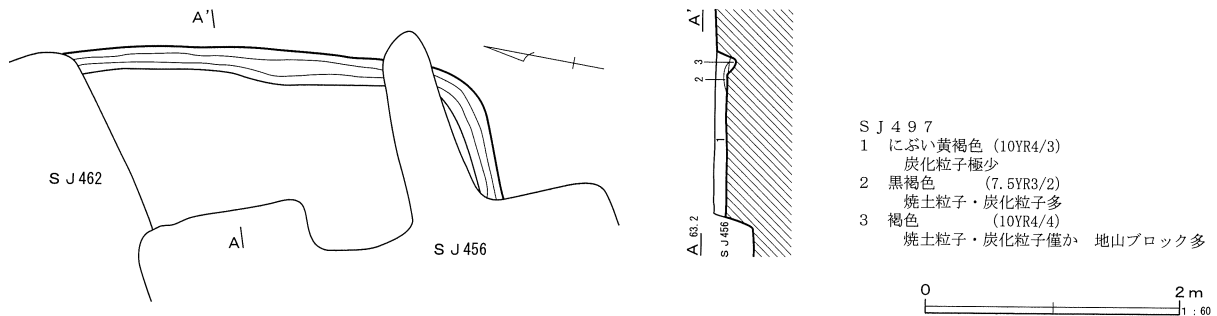
第497号住居跡（第305図）

J-25グリッドに位置する。第456号住居跡と重複し、本住居跡が古い。第462号住居跡との関係は不明である。東壁と南壁の一部を検出したのみである。検出された規模は、東壁3.28m、南壁0.92mで、深さは0.06~0.10mである。主軸方位は東壁でN-6°-Wを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は検出された壁では全周し、幅18~28cm、深さ3~7cmである。

遺物は、覆土から古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が出土したが、小破片で、図示可能な遺物はなかった。土師器坏には、有段口縁坏が含まれていた。



第305図 第497号住居跡

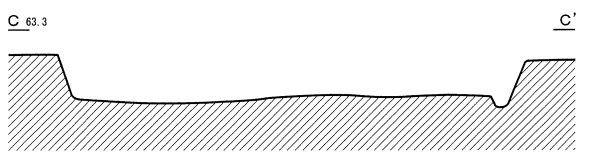
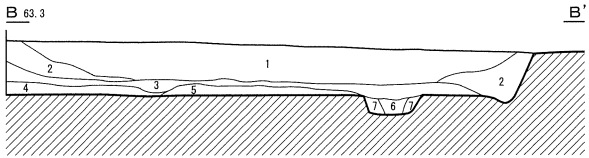
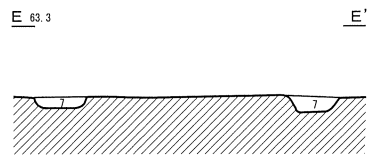
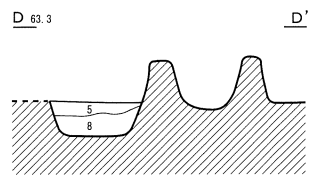
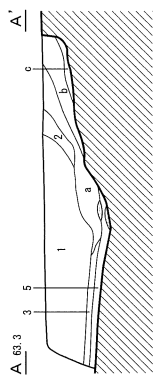
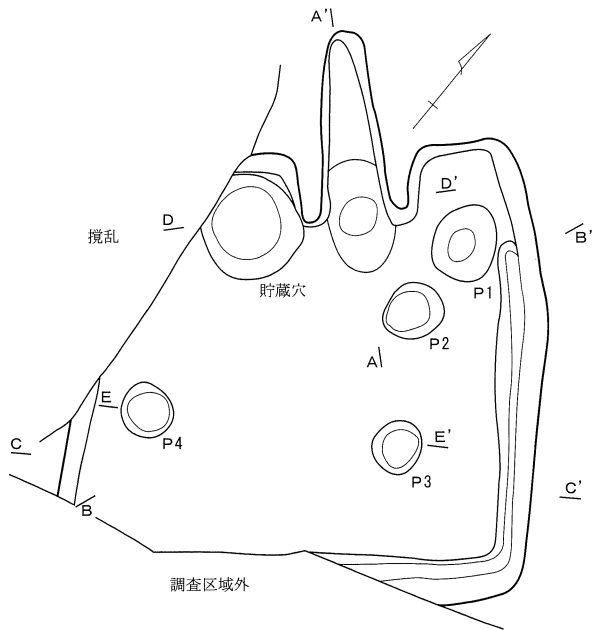
第505号住居跡（第306・307図）

K-23・24グリッドに位置する。西コーナーは攪乱に壊され、南西側は調査区域外にある。平面形は正方形で、北東から南西が3.73m、北西から南東が3.64m、深さは0.33~0.45mである。主軸方位はN-39°-Wを指す。

カマドは北西壁に設置される。燃烧部の断面には床面の張替えに伴うものと考えられる火床面が2面検出された。段を持って煙道部へ続く。貯蔵穴はカマド左に設けられ、径83cmの円形で、深さは28cmである。壁溝は北東壁と南東壁で検出され、幅26~36cm、深さ4~8cmである。ピットは4本検出され、P1~P4の深さは29cm、13cm、14cm、8cmである。

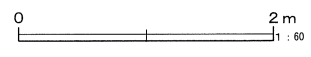
土層断面から床面は2面観察された。1次の床面は第4・5層下で、2次の床面は第3層下に見られた。床の張替えが行われたと考えられる。このことから覆土第4・5層人為的に埋めた層と考えられる。壁は開きながら立ちあがる。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が少量出土した。何れも小片で、図示可能な遺物は、土師器坏2、土錘4点であった。

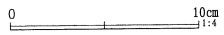
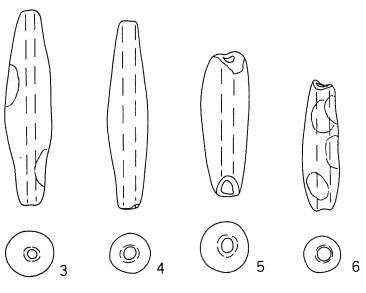
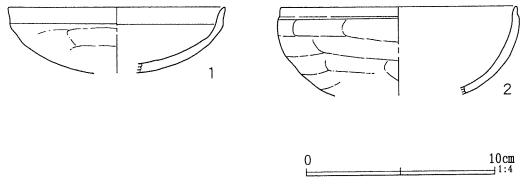


- SJ505
- 1 褐色 (10YR4/4) 地山主体灰褐粘質土ブロック・炭化粒子僅か
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 未風化地山ブロック多 炭化粒子
 - 3 黒褐色 (10YR3/1) 炭化粒子層 焼土粒子
 - 4 褐色 (10YR4/4) 灰褐粘質土ブロック 焼土粒子
 - 5 褐色 (10YR4/4) 地山ブロック 灰褐粘質土ブロック 炭化粒子
 - 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子多 焼土粒子少
 - 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少
 - 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) やや砂質 炭化粒子

- カマド
- a 暗褐色 (10YR3/4) 焼土ブロック多 天井崩落土
 - b 暗褐色 (10YR3/3) 焼土ブロック多
 - c 暗褐色 (10YR3/3) 焼土ブロック・炭化粒子僅か



第306図 第505号住居跡



第307図 第505号住居跡出土遺物

第505号住居跡出土遺物観察表 (第307図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.5)	3.5		BDEFGJ	不良	橙	10	覆土	磨耗著しい
2	土師坏	(12.5)	4.7		BDEFGJL	普通	橙	20	覆土	

第505号住居跡出土土錘観察表（第307図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	7.70	1.90	0.40	22.34	C a II	A	にぶい黄橙	100	
4	7.40	1.60	0.50	14.08	B a III	A	灰白	100	
5	5.65	2.00	0.55	19.15	B a IV	A	灰黄褐	100	カマド
6	5.15	1.40	0.55	7.81	B a V	A	灰白	100	カマド

第535号住居跡（第308・309図）

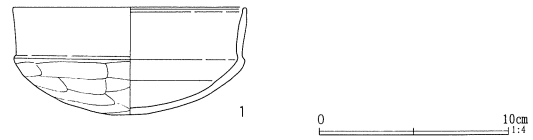
I-25・26グリッドに位置する。第444・447・460・461・537号住居跡と重複し、その何れよりも古い。東壁の壁溝と一部貼り床を検出したため住居跡と確認できた。検出された規模は、東西2.90m、南北2.58m、深さは0～0.03mと極めて浅い。主軸方位は東壁でN-25°-Wを指す。

西半の床面上には褐色土が薄く広がっており、その下には張り床が残存していた。東半の床面は既に消失していたと考えられる。

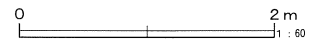
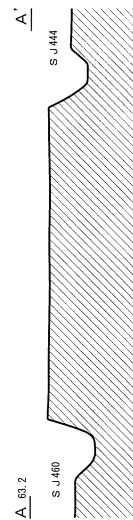
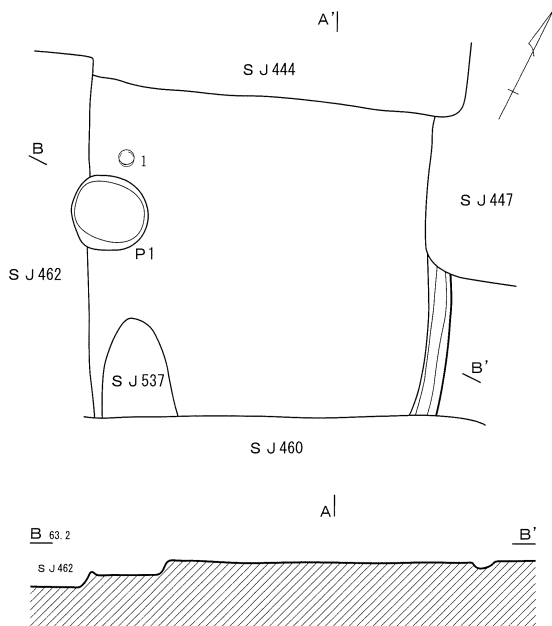
カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は幅8

～10cm、深さ4～6cmである。ピットは1本検出され、深さは10cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が出土したが、何れも小片で、図示可能な遺物は、土師器坏1点であった。



第308図 第535号住居跡出土遺物



第309図 第535号住居跡

第535号住居跡出土遺物観察表（第308図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.3	5.7		A B E F G	良好	橙	100	-5cm	

第536号住居跡（第310・311図）

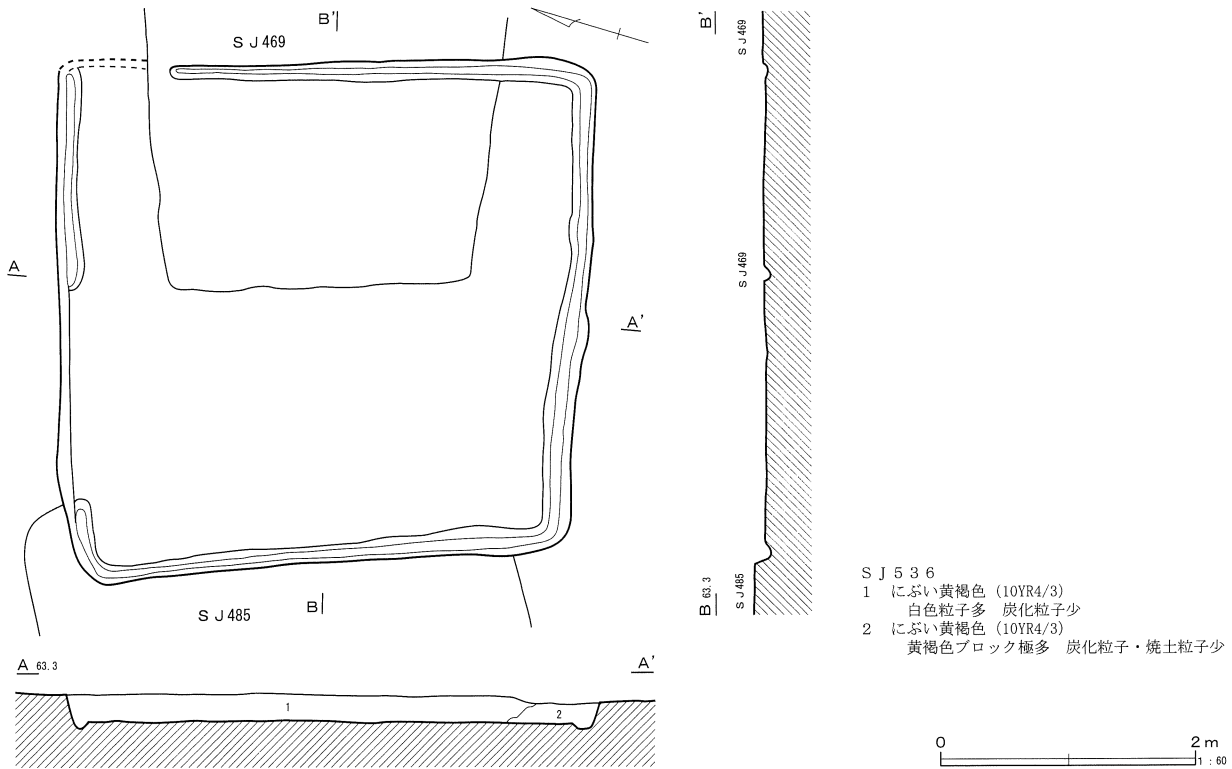
J・K-23・24グリッドに位置する。第469・485号住居跡に切られ、第260号土坑を切る。平面形は正方形に近く、南北4.19m、東西3.96m、深さは0.16～0.22mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ち

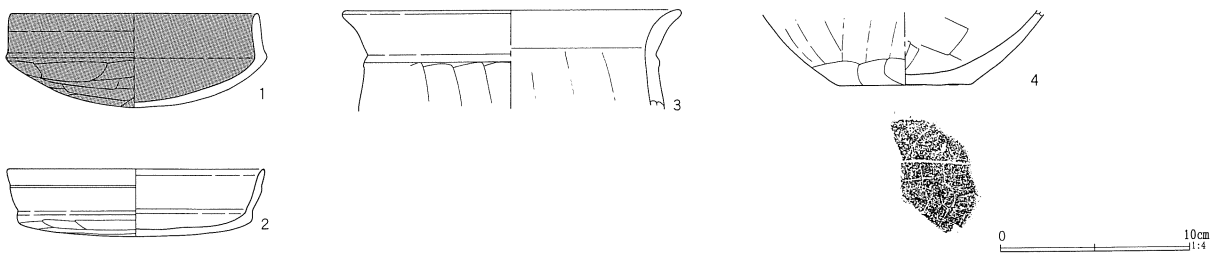
あがる。東壁の壁溝は第469号住居跡の床面で検出された。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北壁と東壁で途切れていた。幅10～25cm、深さ2～6cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器杯・甕の破片が出



第310図 第536号住居跡



第311図 第536号住居跡出土遺物

第536号住居跡出土遺物観察表（第311図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師杯	13.1	5.0		ABDEFGJL	良好	にぶい黄橙	100	覆土	内外面黒色処理
2	土師杯	13.7	3.6		ABDEFGJ	良好	にぶい橙	95	覆土	
3	土師甕	(17.7)	5.2		ABEGJL	普通	明黄褐	30	覆土	
4	土師壺		3.9	(7.0)	ABEGHJ	良好	橙	40	覆土	底部木葉痕

土した。何れも小破片で、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器 2・甕 1・壺 1 点であった。

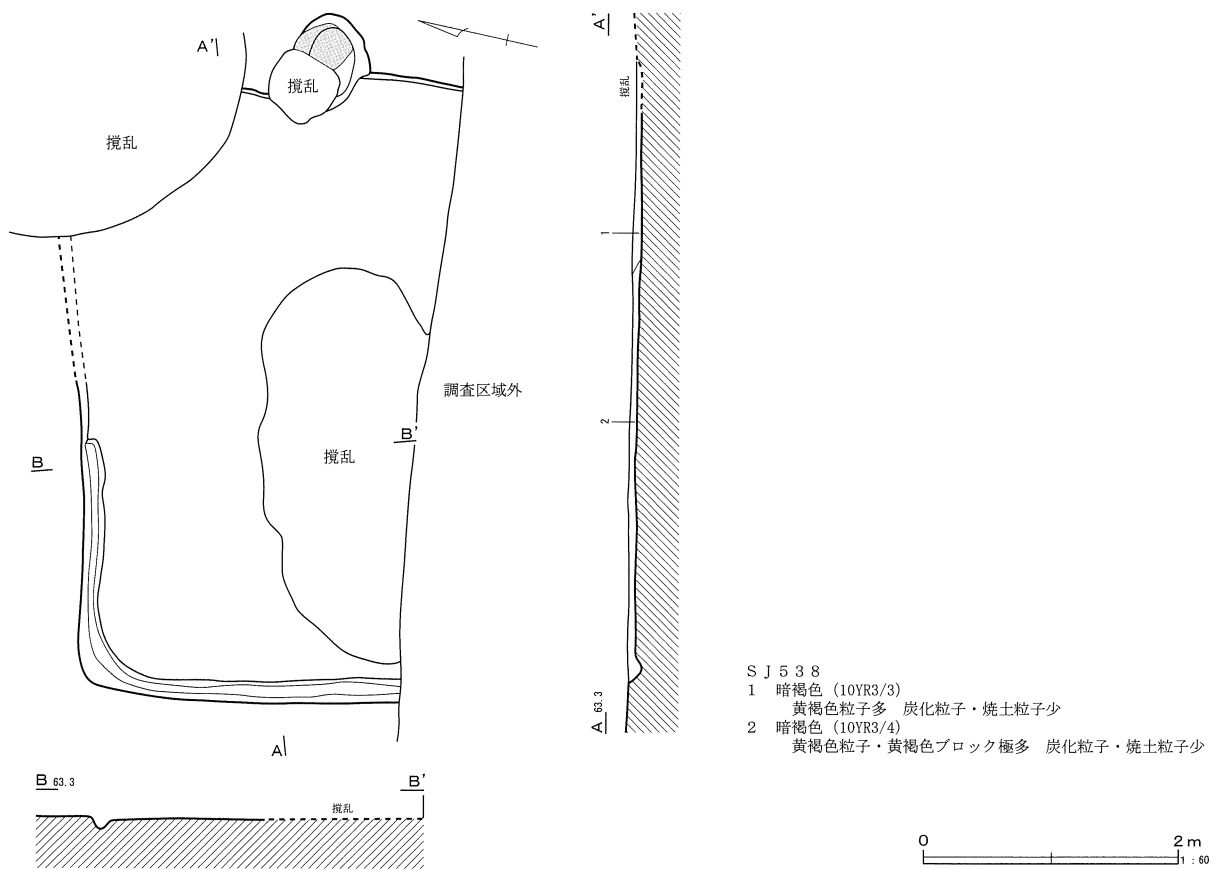
第538号住居跡 (第312・313図)

J-26グリッドに位置する。第452・557号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。第557号住居跡と同時に調査したため北壁の一部は検出できなかった。用地の関係で2回に分けて調査された。北東コーナ

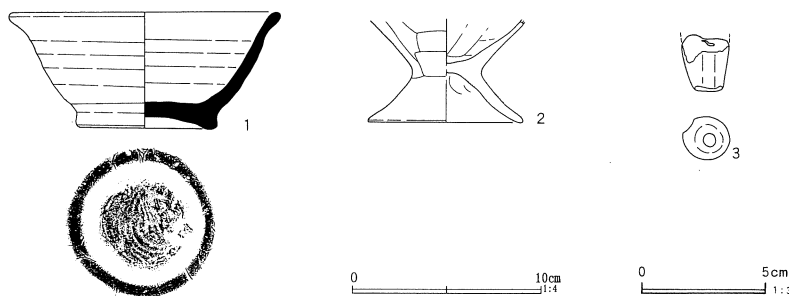
ー、カマド、床面を攪乱に壊されており、南側は調査区域外にある。平面形は、東西に長い長方形と考えられる。検出された規模は、東西4.98mで、南北は2.56mである。深さは0.04~0.08mと浅い。主軸方位はN-80°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは東壁に設置される。燃焼部の掘り込みはごく僅かで、底面と壁面の一部が焼土化していた。



第312図 第538号住居跡



第313図 第538号住居跡出土遺物

貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は西壁から北壁にかけて検出され、幅14~20cm、深さ4~10cmである。遺物は、平安時代の土師器・須恵器が少量出土し

た。

図示可能な遺物は、須恵器高台付椀1、土師器台付甕1、土錘1点であった。

第538号住居跡出土遺物観察表 (第313図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵高台椀	14.1	6.1	6.9	D F G H J	良好	暗灰・灰白	70	覆土	末野産? 底部回転糸切後高台貼付
2	土師台付甕		5.4	(8.1)	B D E G J	良好	明赤褐	40	覆土	

第538号住居跡出土土錘観察表 (第313図)

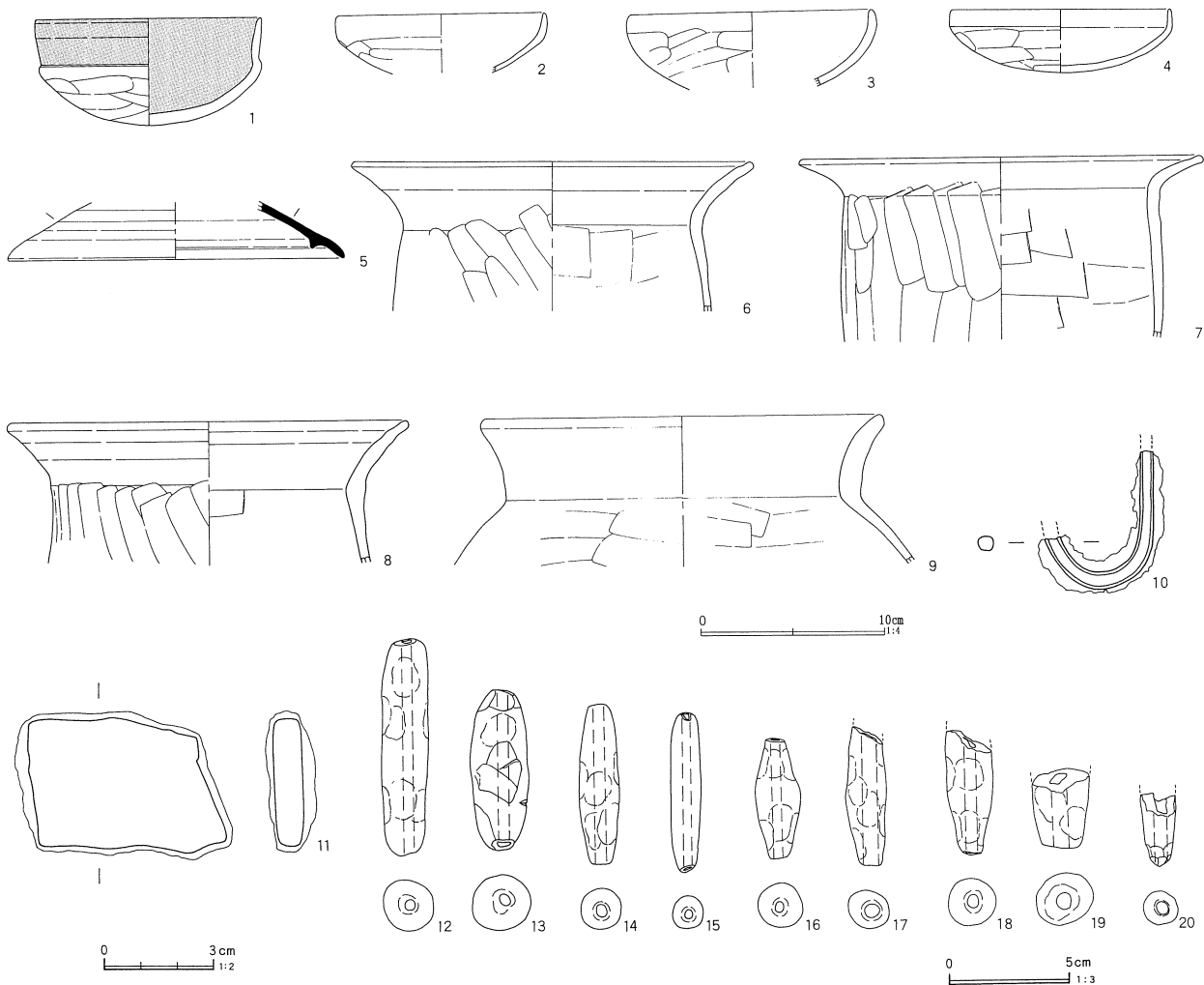
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	(2.20)	1.90	0.55	5.43	—	A	にぶい橙	—	

第539号住居跡 (第314・315図)

J・K-25グリッドに位置する。第456号住居跡と

重複し、本住居跡が古い。南半は調査区域外にある。

検出された規模は、東西4.48mで、南北は3.24mで



第314図 第539号住居跡出土遺物

ある。深さは0.46～0.54mである。主軸方位はN-53°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。

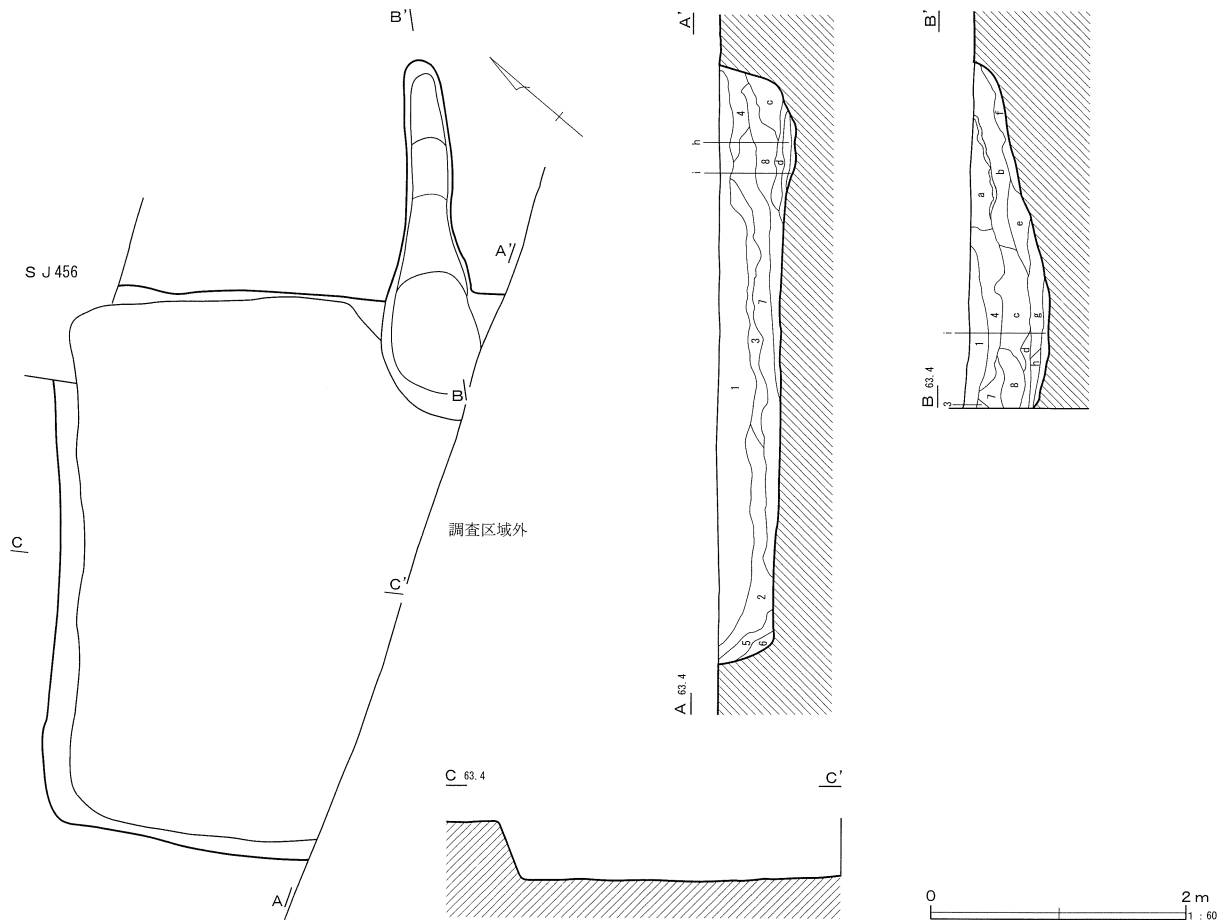
カマドは東壁に設置される。燃烧部は10cm程掘り込み、緩やかに立ち上がって煙道部へ続く。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

遺物は、覆土から土師器・須恵器の破片が多く出

土した。特に土師器甕の破片が多かったが、摩滅が著しい破片が多く、接合率は悪かった。

図示可能な遺物は、土師器坏4・甕3・壺1、須恵器蓋1、鉄製品2、土錘9点であった。

土師器坏には時期差があり、特に1は、他の3点と時期が異なるものと思われる。1は残存率が最もよかったが、本住居跡に伴うものとは考えにくい。



S J 539		
1	褐色 (10YR4/4)	黄褐色粒子極多 炭化粒子・焼土粒子少
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	炭化粒子・焼土粒子少
3	暗褐色 (10YR3/3)	黄褐色粒子多 炭化粒子・焼土粒子少
4	暗褐色 (10YR3/4)	黄褐色粒子多 炭化粒子
5	褐色 (10YR4/4)	暗褐色粒子多 炭化粒子僅か
6	褐色 (10YR4/4)	ほとんど地山 暗褐色粒子少 壁の崩落土か
7	褐色 (10YR4/4)	炭化粒子・焼土粒子やや多
8	暗褐色 (10YR3/3)	黄褐色粒子多 炭化粒子・焼土粒子僅か

カマド		
a	褐色 (10YR4/4)	焼土ブロック僅か 煙道天井部
b	暗褐色 (10YR3/3)	黄褐色粒子・焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子
c	暗褐色 (10YR3/4)	黄褐色粒子極多 炭化粒子・焼土粒子僅か
d	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	焼土粒子・炭化粒子多
e	暗褐色 (10YR3/3)	焼土粒子・焼土ブロック・灰粒子・炭化粒子多
f	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	焼土粒子・炭化粒子・灰粒子少
g	暗褐色 (10YR3/3)	焼土・灰粒子極多 炭化粒子少
h	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	灰粒子少 焼土粒子僅か
i	褐色 (10YR4/6)	焼土粒子・炭化粒子僅か

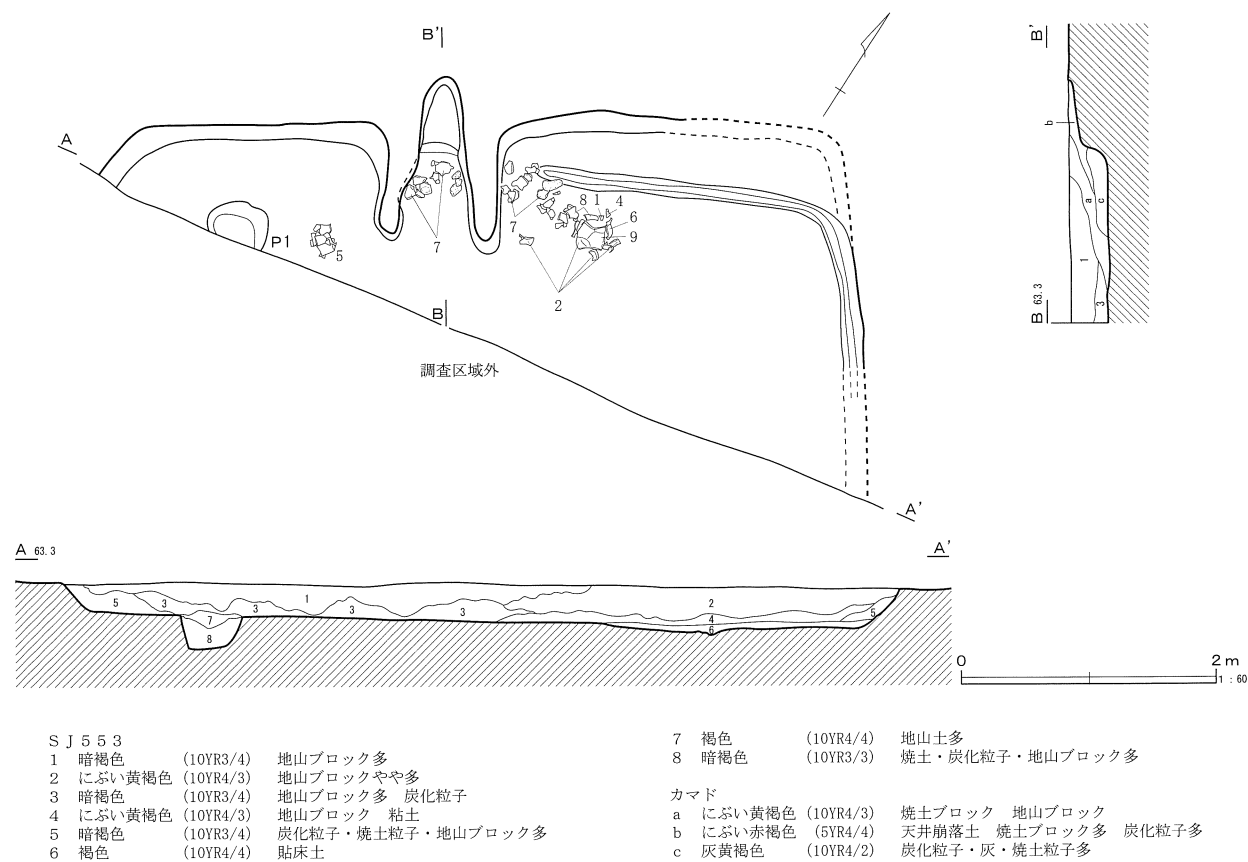
第315図 第539号住居跡

第539号住居跡出土遺物観察表（第314図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.3	5.8		ABDEFGJ	良好	橙	60	覆土	内外面赤彩 産地不明 天井部回転ヘラケズリ
2	土師坏	(11.3)	3.2		BDFJ	良好	橙	10	覆土	
3	土師坏	(13.0)	4.1		ABDFGJL	良好	橙	10	覆土	
4	土師坏	(11.8)	3.4		ABDEGJ	普通	明赤褐	30	覆土	
5	須恵蓋	(18.3)	3.1		ABEJ	普通	灰白	30	覆土	
6	土師甕	(21.7)	6.1		ABFG	良好	橙	20	カマド	
7	土師甕	(21.6)	9.8		ABDEGJL	良好	にぶい褐	20	カマド	
8	土師甕	(21.4)	7.7		ABDEFGJ	良好	明赤褐	15	カマド	
9	土師壺	(21.5)	8.1		BDEGHJ	良好	橙	20	カマド	
10	板状鉄製品	現存長5.40cm 幅3.70cm 厚さ0.82cm 重さ52.53g							覆土	
11	棒状鉄製品	現存長3.75cm 幅0.50cm 厚さ0.40cm 重さ7.48g							覆土	

第539号住居跡出土土錘観察表（第314図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
12	8.75	2.20	0.45	37.70	A a II	A	にぶい褐	100	
13	6.50	2.35	0.50	32.83	B b III	A	にぶい橙	100	
14	6.50	1.70	0.50	17.20	B a III	A	にぶい黄橙	100	
15	6.50	1.35	0.40	10.26	A a III	A	橙	100	
16	4.90	1.80	0.45	13.21	C b V	A	灰白	100	
17	(5.65)	1.75	0.60	12.93	B a III	C	にぶい黄橙	75	
18	(5.05)	1.95	0.55	17.42	B a III	A	にぶい黄橙	65	
19	(3.30)	2.45	0.70	14.02	—	C	にぶい黄橙	25	
20	(3.00)	1.45	(0.55)	4.32	—	A	にぶい黄橙	25	



第316図 第553号住居跡

第553号住居跡（第316・317図）

J-27グリッドに位置する。第418号住居跡に切られ、第558号住居跡を切る。周辺の住居跡と同時に調査したため検出できなかった部分がある。南側大半は調査区域外にある。検出された規模は、東西5.90m、南北2.48mで、深さは0.19～0.32mである。主軸方位はN-33°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

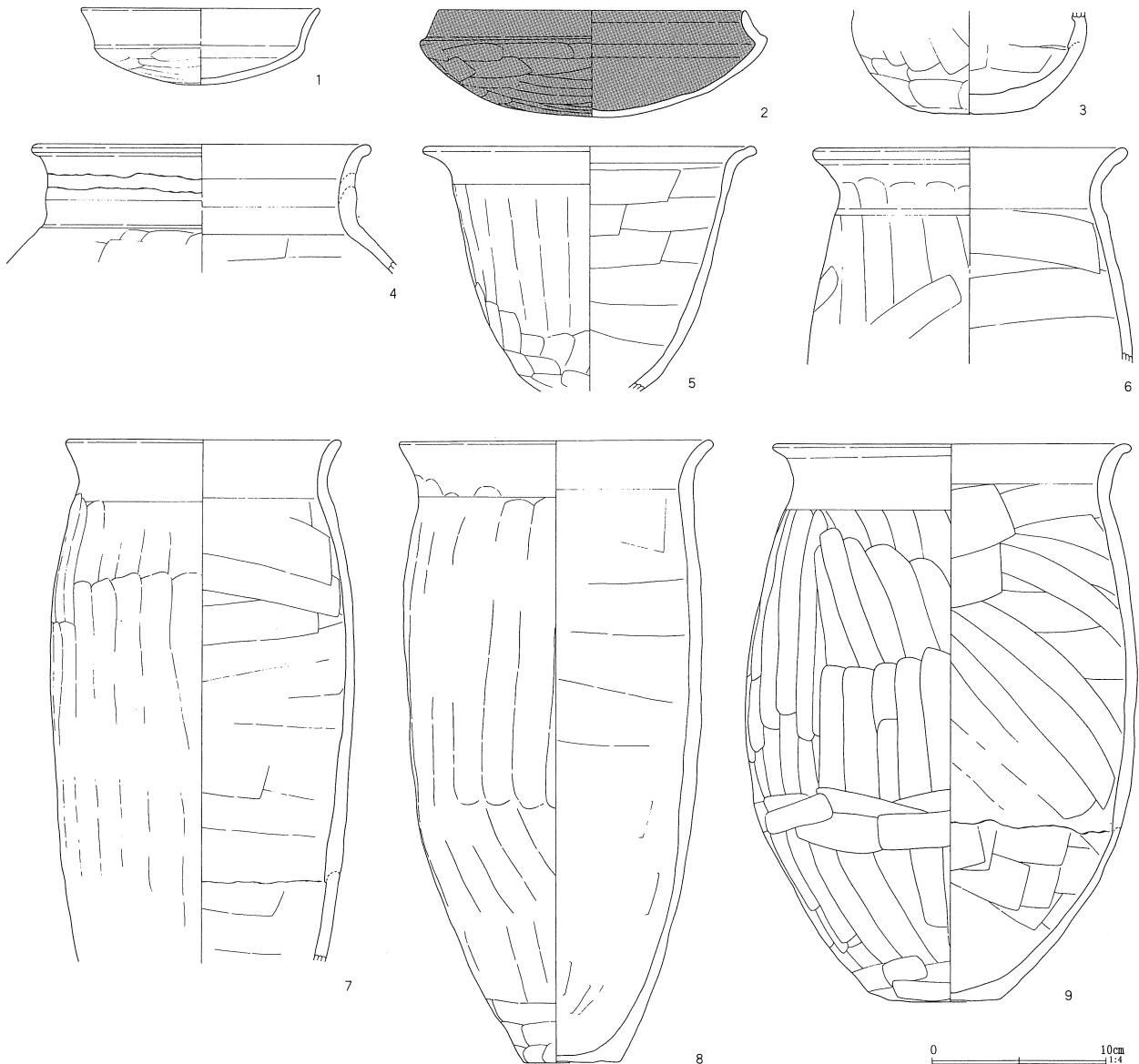
カマドは北壁中央より西寄りに設置される。燃烧部の掘り込みはなく、段を持って煙道部へ続く。貯

蔵穴は検出されなかった。壁溝はカマド右から東壁にかけて検出された。カマド右の壁溝は壁から40cm程離れて検出された。幅12～20cm、深さ4～6cmである。ピットは1本検出され、深さは27cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器が出土した。特に甕の胴部片が多かったが、大半の破片は接合した。

図示可能な遺物は、土師器坏2・壺2・甕1・甗4点であった。

2の土師器坏は、須恵器身模倣坏であるが、口径が17.7cmと大型の坏である。



第317図 第553号住居跡出土遺物

第553号住居跡出土遺物観察表 (第317図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考	
1	土師坏	(13.7)	4.4		B E G	普通	橙	25	-9.5cm	内外面黒色処理	
2	土師坏	17.7	6.2		B E F J	良好	明赤褐	80	床		
3	土師壺		5.9	7.3	B E F J	不良	橙	40	覆土		
4	土師壺	(19.0)	7.4		A B G J L	普通	橙	50	-9.5cm		
5	土師甌	18.8	14.1		B E L	普通	橙	70	+2.4cm		
6	土師甕	(17.5)	12.4		E H L	普通	明赤褐	30	-9.5cm		内面煤付着
7	土師甕	(15.6)	30.2		B E J	普通	橙	40	カマド・床		輪積痕明瞭
8	土師甕	17.8	35.8	5.6	A E J L	良好	橙	70	床		
9	土師甕	20.1	32.1	6.3	A E J L	良好	明赤褐	90	-9.5cm		内外面煤付着

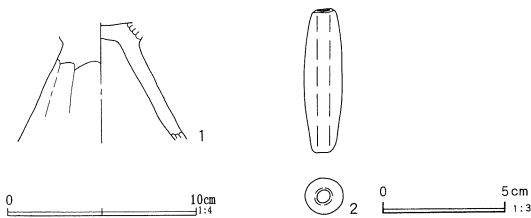
第554号住居跡 (第318・319図)

J-28グリッドに位置する。第309、318・555・560号住居跡と重複し、その何れよりも新しい。用地の

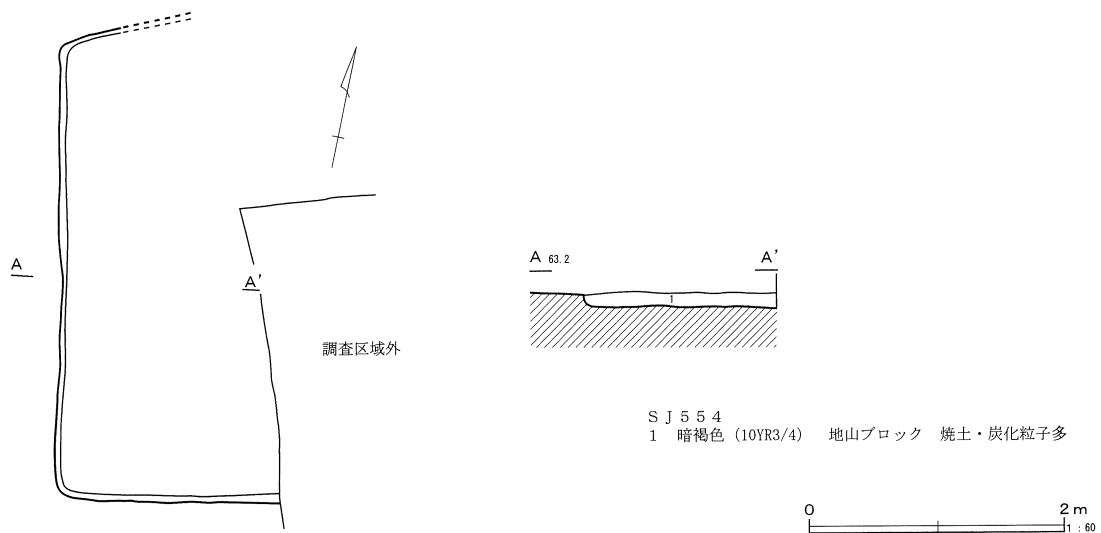
関係で2回に分けて調査された。北東部は検出できず、南東側は調査区域外にある。検出された規模は、南北3.72mで、東西は1.78mである。深さは0.10~0.12mである。主軸方位は西壁でN-10°-Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。カマド、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は、土師器の破片が少量出土した。小破片が多く、図示可能な遺物は土師器高坏1、土錘1点であった。



第318図 第554号住居跡出土遺物



第319図 第554号住居跡

第554号住居跡出土遺物観察表 (第318図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師高坏		6.2		B E H J L	良好	明赤褐	45	覆土	

第554号住居跡出土土錘観察表（第318図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	5.65	1.50	0.55	10.25	B a IV	A	にぶい黄橙	100	

第555号住居跡（第320図）

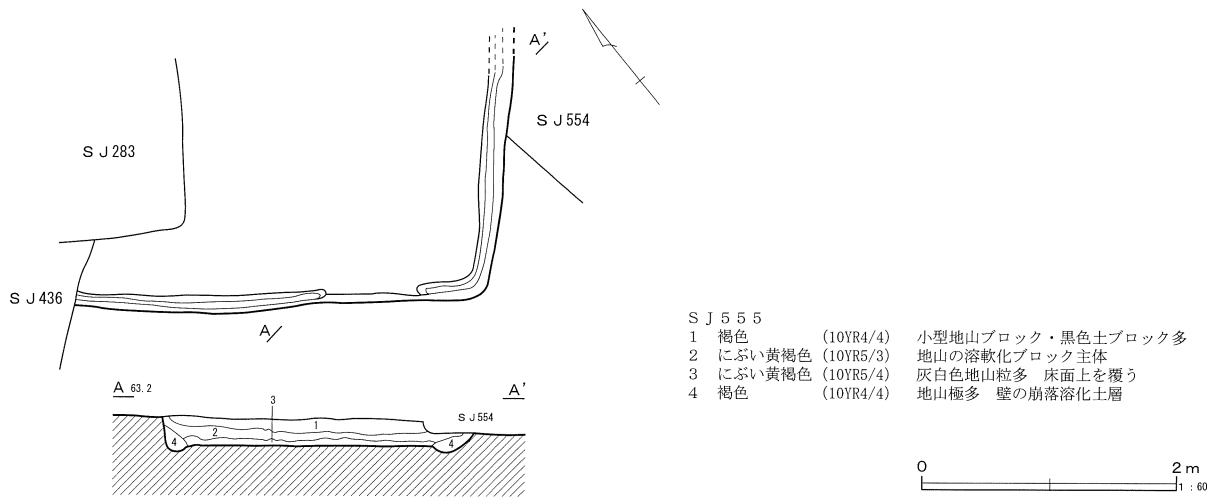
J-28グリッドに位置する。第436・554号住居跡に切れ、第309・560号住居跡を切る。用地の関係で2回に分けて調査された。北半は検出できなかった。検出された規模は、東西3.26m、南北1.88mで、深さは0.20~0.22mである。主軸方位は南壁でN-

51°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は一部途切れるが、幅12~22cm、深さ10~22cmである。

遺物は、古墳時代後期の甕の破片が10点出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。



第320図 第555号住居跡

第556号住居跡（第321・322図）

J-26・27グリッドに位置する。第557号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北西壁と北東壁を攪乱に壊され、南半は調査区域外にある。検出された規模は、北東壁から南西壁が3.78m、北西から南東が3.17mである。深さは0.16~0.18mである。主軸方

位はN-45°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

カマドは北東壁に設置される。燃烧部の掘り込みはなく、緩やかに立ち上がる。火床面が明瞭に検出された。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は各壁で

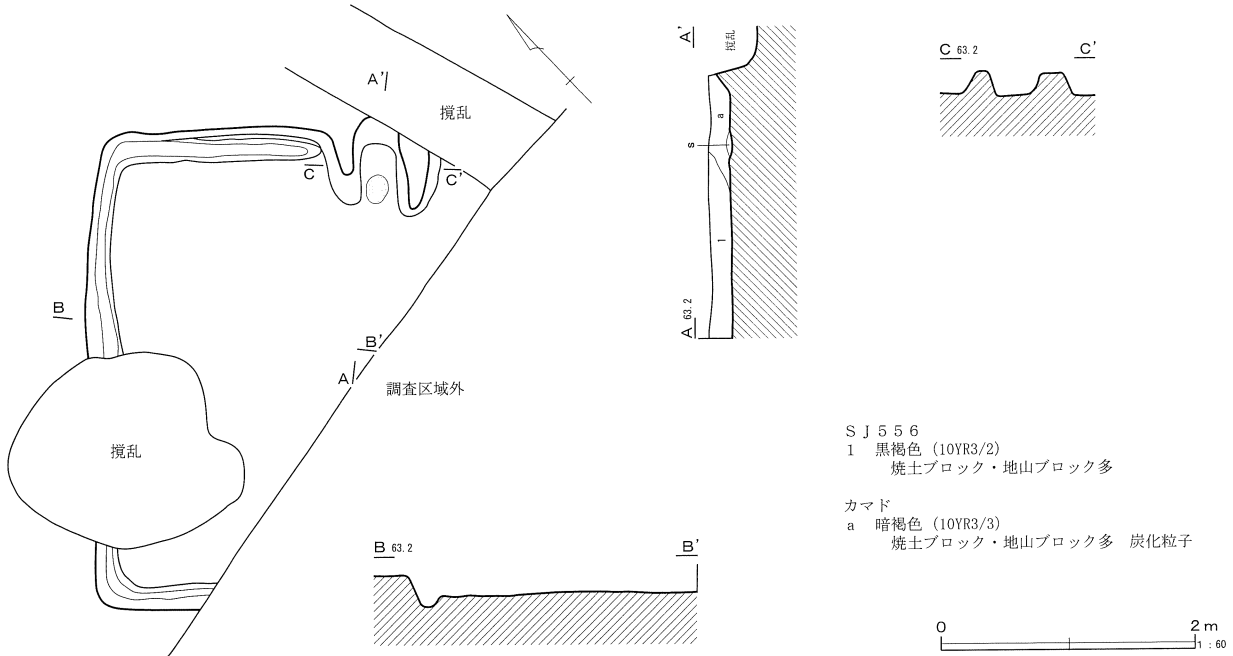
第556号住居跡出土遺物観察表（第322図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	11.6	4.8		BDEGJ	良好	橙	80	覆土	
2	土師坏	(14.0)	3.3		BDEFGJL	良好	灰黄褐	20	覆土	外面黒色処理
3	土師坏	(13.0)	3.7		D	良好	灰褐	20	覆土	内外面黒色処理
4	土師坏	(15.0)	4.6		BDEFJ	良好	褐	10	覆土	
5	土師坏	(16.0)	4.0		ABDEFJL	良好	橙	30	覆土	
6	土師高坏		7.7		ABDEGJ	良好	橙	70	覆土	内外面2次焼成
7	土師甕	(16.0)	7.4		ABDEFGJ	良好	にぶい黄橙	30	覆土	

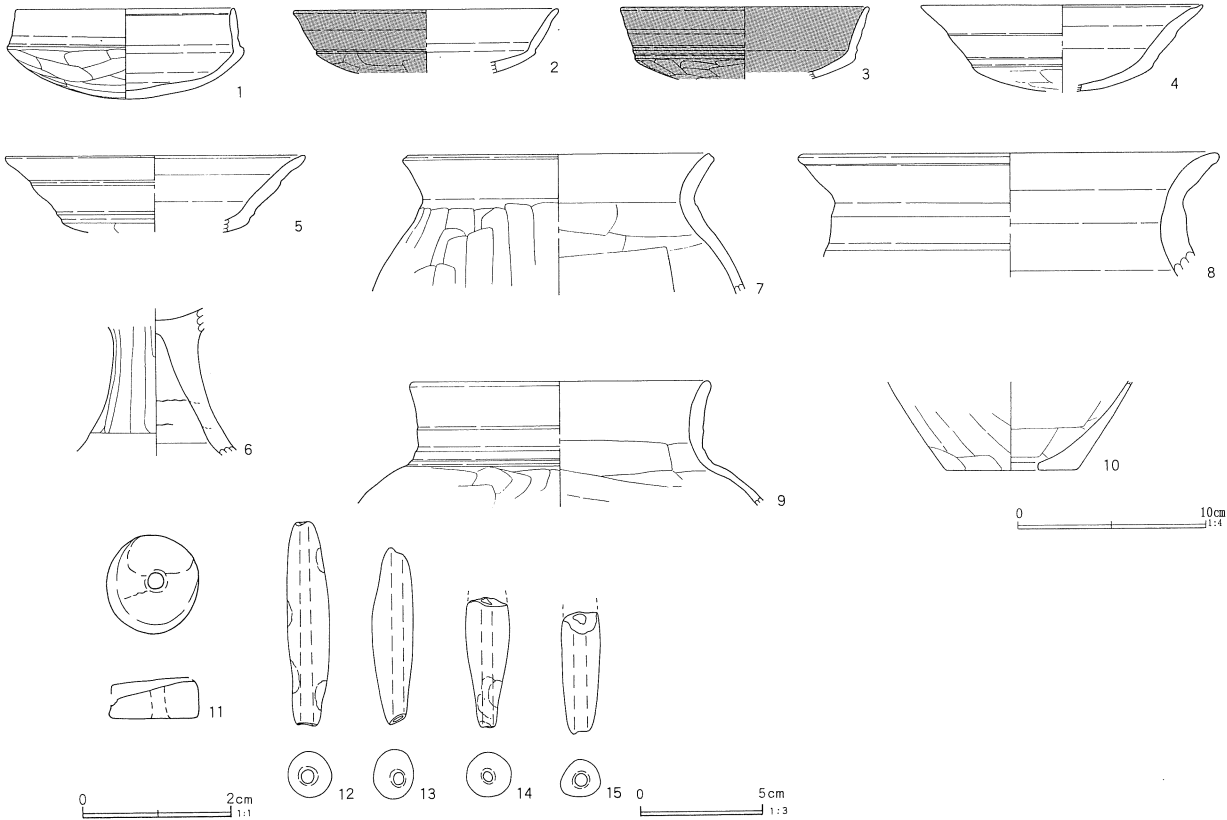
検出され、幅16~28cm、深さ4~8cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器片が多量に出土した。何れも小破片で、殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏5・高坏1・甕2・壺1・甌1、滑石製白玉1、土錘4点であった。



第321図 第556号住居跡



第322図 第556号住居跡出土遺物

第556号住居跡出土遺物観察表（第322図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
8	土師甕	(22.0)	6.5		ABEFGH	良好	橙	20	覆土	滑石製 欠損有り
9	土師壺	(15.8)	6.5		BDEGHJ	良好	にぶい黄褐	15	覆土	
10	土師甕		4.7	6.9	ABEFGHJL	良好	にぶい褐	70	覆土	
11	白玉	直径1.30cm 厚さ0.50cm 孔径0.20cm 重さ1.06g						80	覆土	

第556号住居跡出土土錘観察表（第322図）

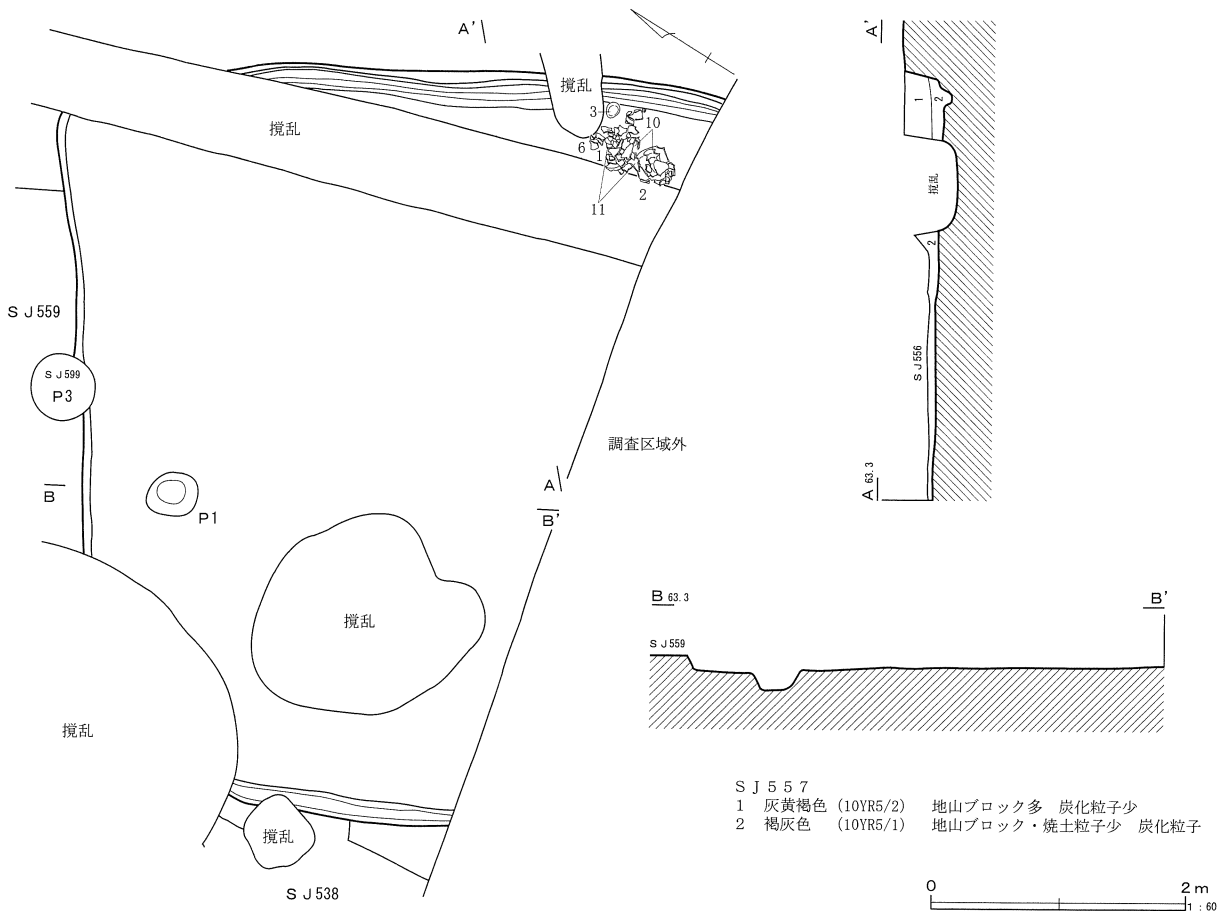
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
12	8.10	1.80	0.50	25.12	B a II	B	にぶい黄橙	100	
13	6.90	1.95	0.50	20.65	B a III	A	明赤褐	100	
14	(5.10)	1.75	0.40	12.57	C a III	B	灰黄褐	70	
15	(4.80)	1.60	0.50	10.53	B a III	—	にぶい橙	65	

第557号住居跡（第323・324図）

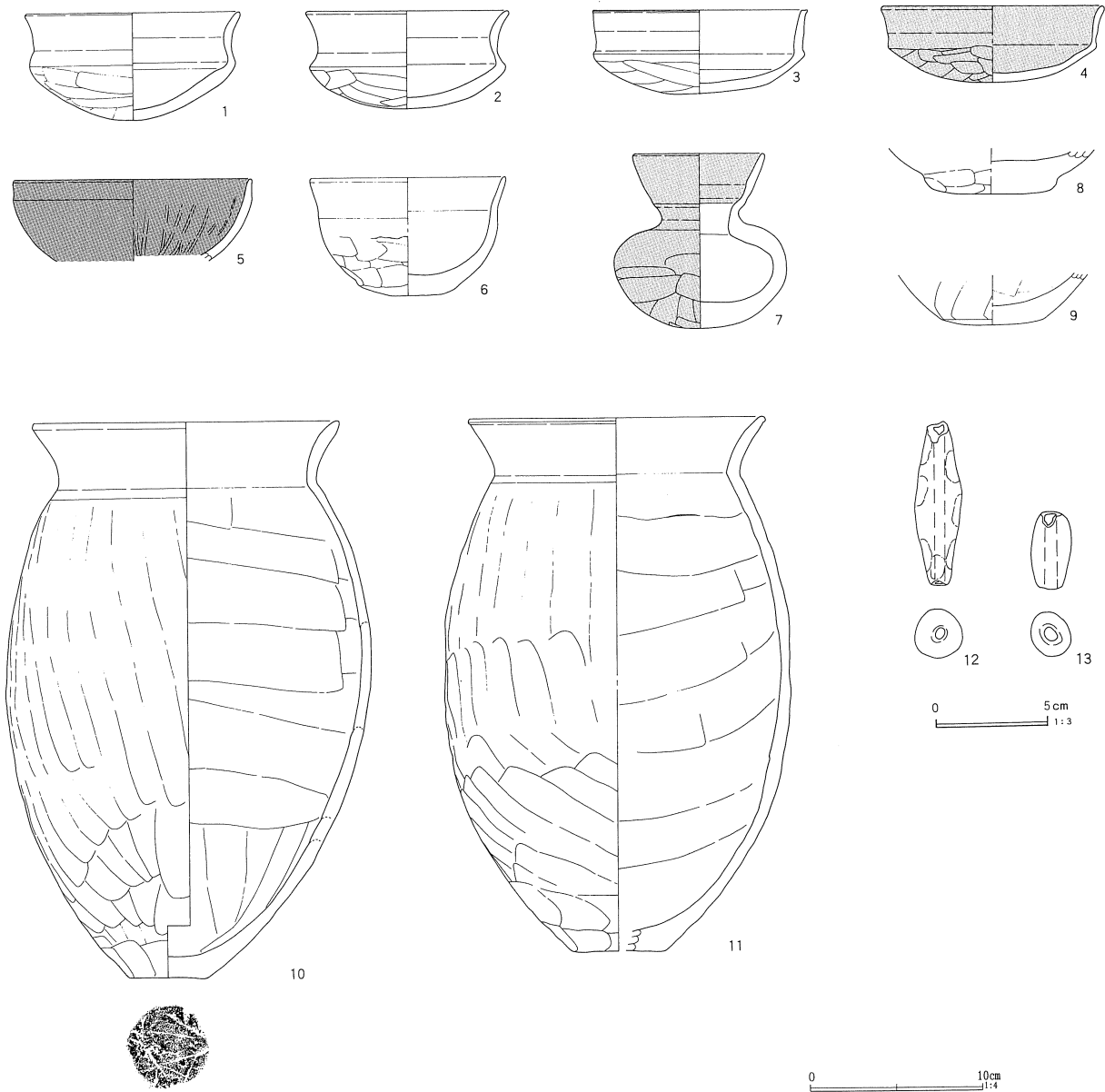
J-26グリッドに位置する。第452・538・556号と重複し、その何れよりも古い。第559号住居跡との関係は不明である。用地の関係で2回に分けて調査された。多くの攪乱に壊されており、南側は調査区

域外にある。検出された規模は、東西5.96mで、南北は5.21mである。深さは0.12~0.17mである。主軸方位は東壁でN-58°-Eを指す。

床面はやや起伏があり、壁は開き気味に立ちあがる。



第323図 第557号住居跡



第324図 第557号住居跡出土遺物

第557号住居跡出土遺物観察表 (第324図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	12.4	6.2		ABDEGJ	普通	明赤褐	80	床	
2	土師坏	11.5	5.6		BEGHJL	普通	明赤褐	80	床	
3	土師坏	12.4	4.8		ABDEFGJ	良好	明赤褐	80	床	
4	土師坏	(12.6)	4.4		ABEGJ	良好	橙	30	覆土	内外面赤彩
5	土師碗	(13.8)	4.7		BEG	不良	明黄褐	25	覆土	内外面黑色处理 内面放射暗文
6	土師碗	(11.2)	6.8	5.6	ABEGJ	普通	橙	50	床	
7	土師罏	7.3	10.1		BEG	良好	明赤褐	80	覆土	内外面赤彩
8	土師壺		2.6	(7.0)	BEGJ	良好	明黄褐	60	覆土	内面煤付着
9	土師甕		2.9	(5.9)	ABDGJ	普通	明赤褐	30	覆土	
10	土師甕	17.1	30.7	5.5	ABHJL	良好	浅黄橙	65	床	
11	土師甕	17.6	32.0	4.6	ABEJL	良好	暗灰黄	80	床	底部木葉痕

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は東壁で検出され、幅12~21cm、深さ2~10cmである。ピットは1本検出され、深さは16cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が多

量に出土した。特に住居跡南東部に集中する傾向にあった。

図示可能な遺物は、土師器坏4・椀2・埴1・壺1・甕3、土錘2点であった。

第557号住居跡出土土錘観察表 (第324図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
12	7.05	2.10	0.50	23.52	C a III	C	橙	95	
13	3.35	2.00	0.60	9.47	B a VI	C	にぶい黄褐	100	

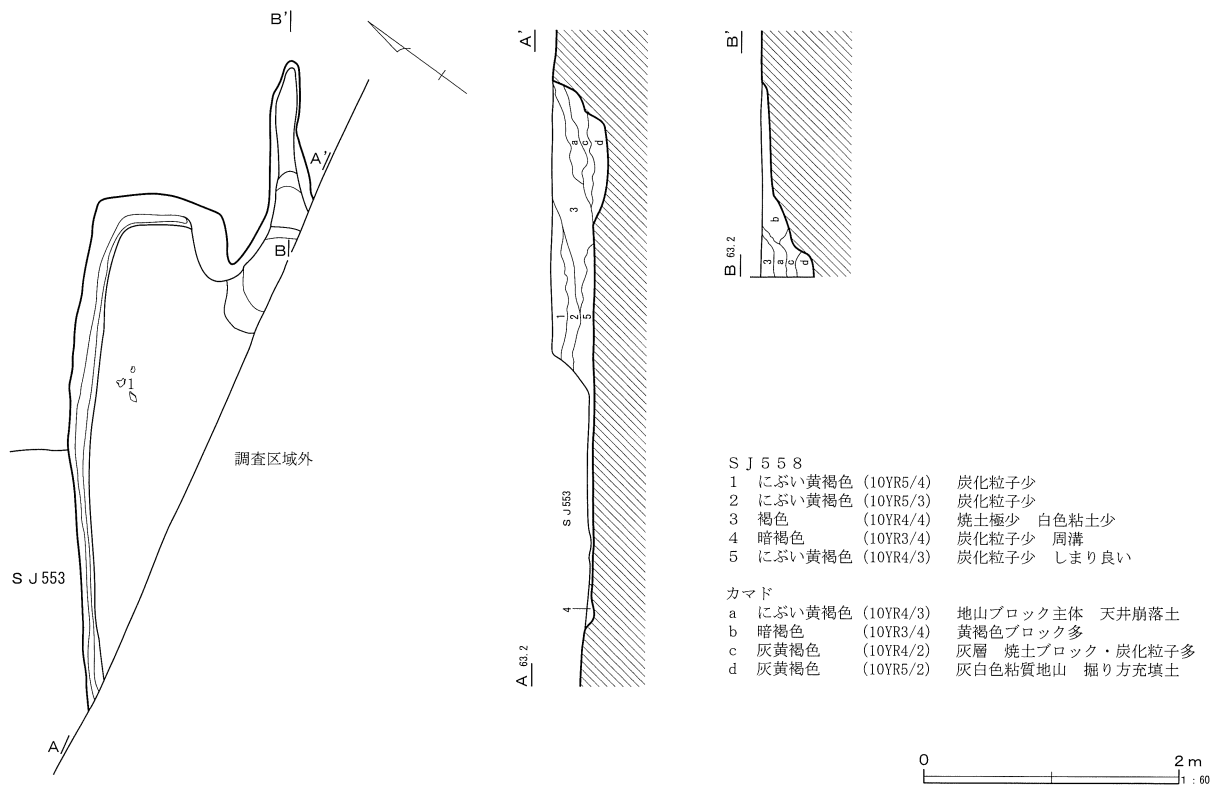
第558号住居跡 (第325・326図)

J-27・28グリッドに位置する。第553号住居跡に切られ、第560号住居跡を切る。南側は調査区域外にあり、検出されたのは北側1/3程度である。平面形は東西に長い長方形と考えられる。検出された規模は、東西4.08m、南北1.61m、深さは0.29~0.35mである。主軸方位はN-57°-Eを指す。

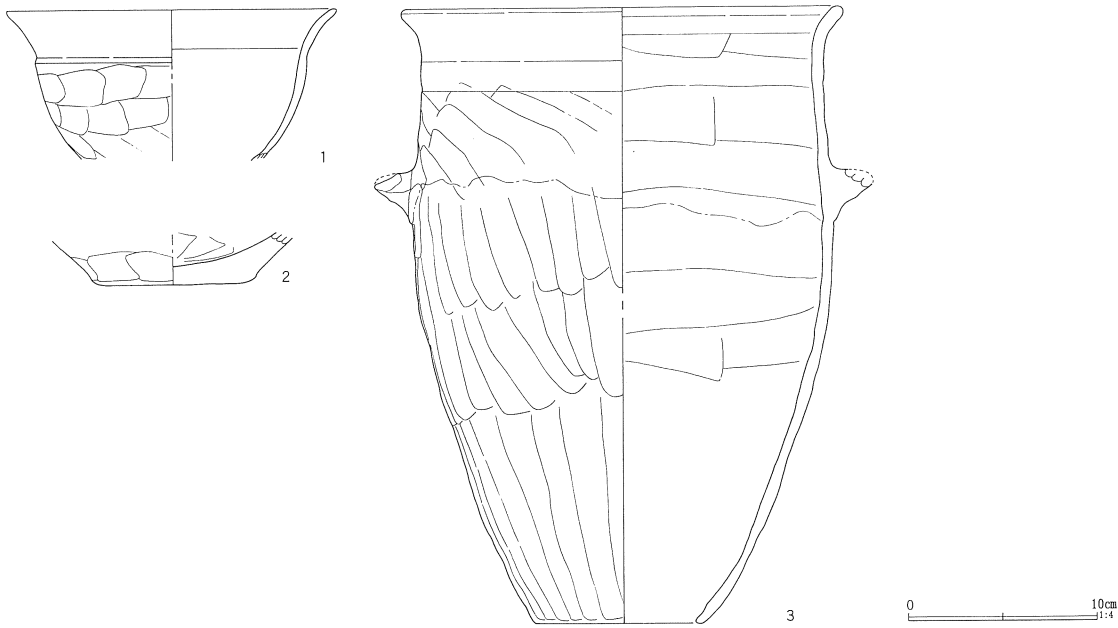
床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは東壁に設置される。右袖と燃烧部の一部は調査区域外である。燃烧部の掘り込みはなく灰層が形成されていた。灰層下には掘り方が検出された(d層)。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北壁で検出され、幅10~24cm、深さ4~7cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器・須恵器が出土した。小片が多く、図示可能な遺物は、土師器鉢1・甕1・甌1点であった。



第325図 第558号住居跡



第326図 第558号住居跡出土遺物

第558号住居跡出土遺物観察表（第326図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師鉢	(17.6)	8.0		A B E J	普通	橙	30	床	
2	土師甕		2.7	8.7	B D E J L	良好	黒褐	40	覆土	
3	土師甕	22.8	32.5	9.0	A B E J L	良好	橙	65	カマド	

第559号住居跡（第327・328図）

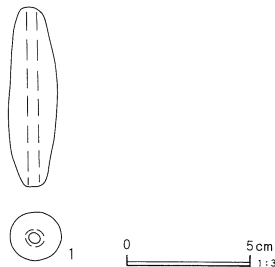
I-26・J-26・27グリッドに位置する。第452号住居跡と重複し、本住居跡が古い。第557号住居跡との関係は不明である。第452号住居跡の床面に検

出され、南壁の一部は攪乱に壊されていた。平面形は正方形で、東西6.30m、南北6.20mで、深さは0～0.06mと浅い。主軸方位はN-26°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁の状態は不明である。覆土の観察は出来なかった。

カマドは北壁中央より東寄りに設置される。燃焼部の掘り込みは10cm以下で急激に立ち上がるようである。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは6本検出され、P1～P6の深さは17cm、17cm、20cm、15cm、31cm、45cmである。

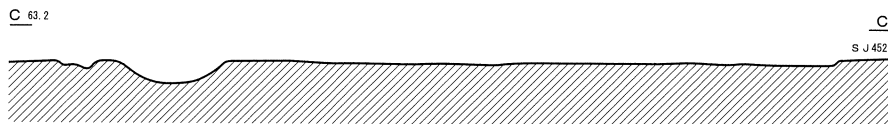
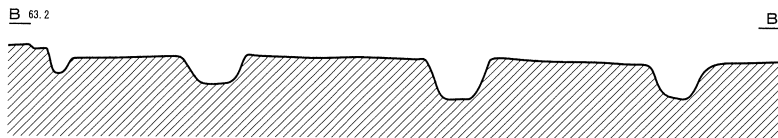
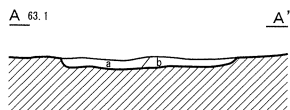
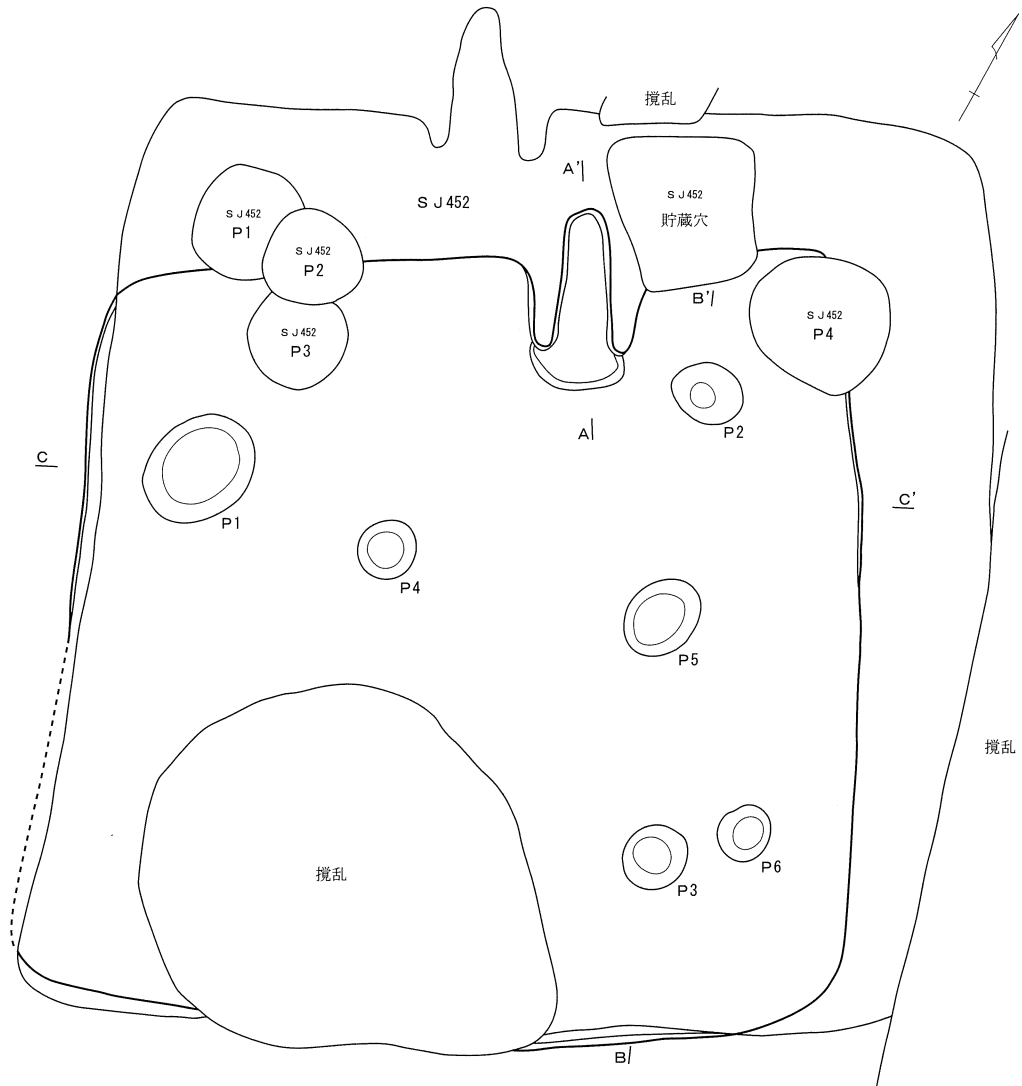
遺物は、古墳時代後期の土師器片が少量出土したが、図示可能な遺物は土錘1点のみであった。



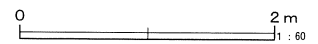
第327図 第559号住居跡出土遺物

第559号住居跡出土土錘観察表（第327図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	7.10	2.05	0.50	25.32	B a III	A	にぶい黄褐	100	



S J 5 5 9 カマド
 a にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土・炭化粒子多
 b 灰黄褐色 (10YR4/2) 焼土・炭化粒子多

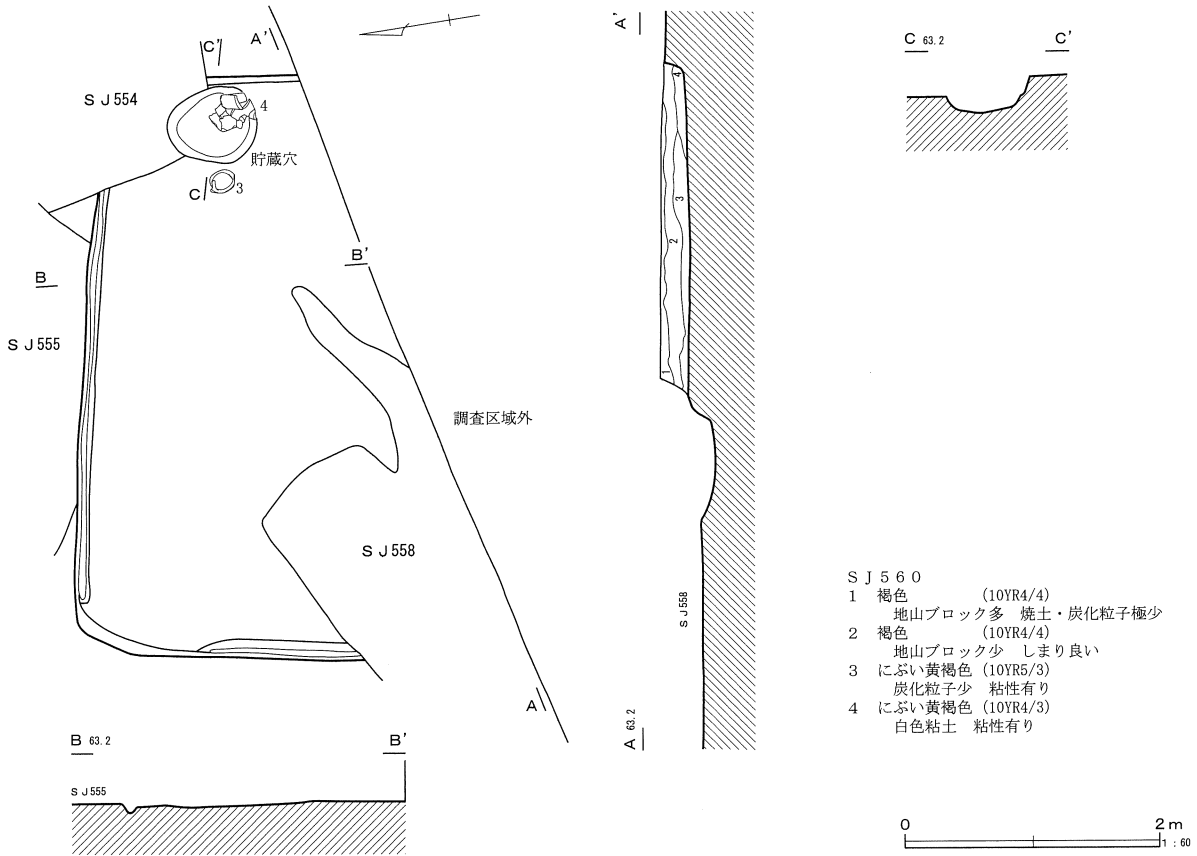


第328図 第559号住居跡

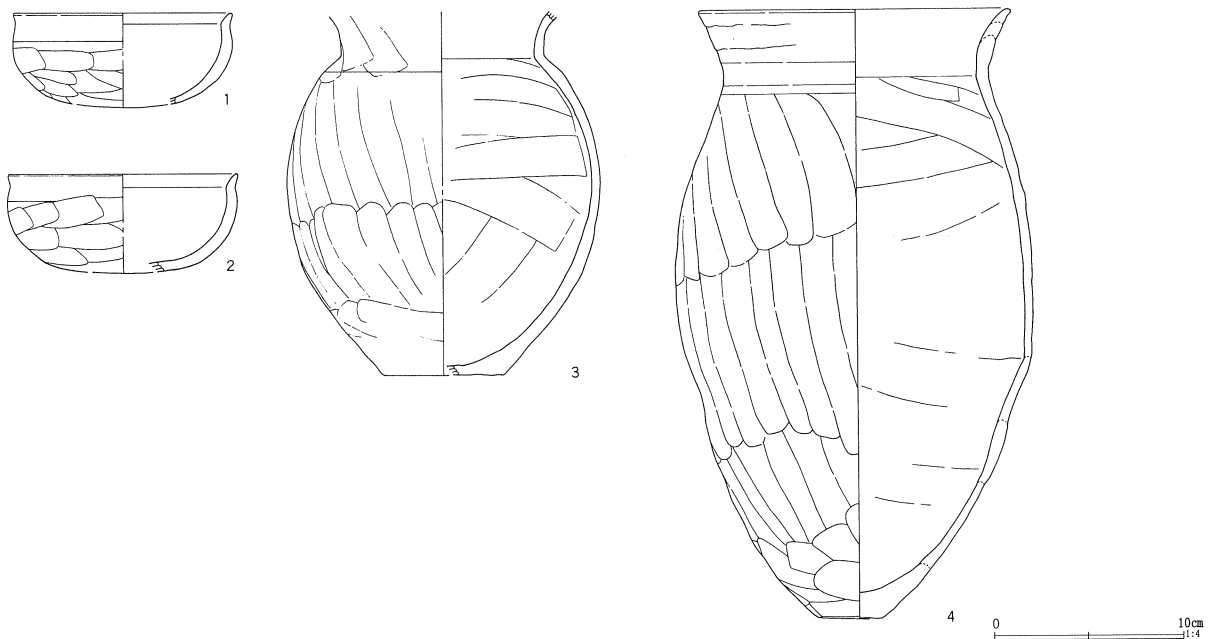
第560号住居跡 (第329・330図)

J-28グリッドに位置する。第554・555・558号住居跡に切れ、第309号住居跡を切る。南半は調査

区域外にある。検出された規模は、東西4.60m、南北2.52mで、深さは0.19~0.22mである。主軸方位は北壁でN-78°-Wを指す。



第329図 第560号住居跡



第330図 第560号住居跡出土遺物

床面は緩やかな起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

カマドは検出されなかった。貯蔵穴は北東コーナー近くに設けられ、72×60cmの楕円形で、深さは9cmである。壁溝は北壁と西壁で検出され、幅10～16

cm、深さ3～8cmである。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が出土した。特に甕の破片が多かったが、小片が多く殆ど接合しなかった。

図示可能な遺物は、土師器坏2・甕2点であった。

第560号住居跡出土遺物観察表（第330図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(11.5)	4.8		ABEGJL	普通	橙	40	覆土	
2	土師坏	(12.1)	5.2		ABEGJL	普通	橙	30	覆土	
3	土師甕		19.2	6.5	BGJL	普通	明赤褐	70	+7.7cm	
4	土師甕	16.3	32.1	3.5	BEHJL	普通	明黄褐	90	床	外面煤付着

2. 掘立柱建物跡

第13号掘立柱建物跡（第331図）

H・I-26・27グリッドに位置する。第414・417・419・423・427・439号住居跡と重複し、その何れよりも新しい。規模は3×2間で、桁行6.02m、梁行5.06mである。柱間は桁行1.96～2.10m、梁行2.46～2.60mである。主軸方位はN-87°-Eを指す。

柱穴は円形または楕円形で、径47～86cm、深さ17～32cmである。柱痕は10本中7本で観察された。

遺物は、器種の特定できない土師器片が数点出土したが、図示可能な遺物はなかった。

また、本遺構は、他の9世紀後半以降の掘立柱建物跡と主軸方向が同一であるため、概ねこの段階に構築された可能性がある。

第14号掘立柱建物跡（第332・333図）

I・J-23・24グリッドに位置する。第479号住居跡と重複し、本掘立柱建物跡が新しい。規模は3×2間で、桁行6.28m、梁行3.80mである。柱間は桁行1.93～2.22m、梁行1.84～2.02mである。主軸方位はN-4°-Eを指す。南東コーナーの柱穴は攪乱で壊されていた。

柱穴は円形または楕円形で、径61～90cm、深さ13～45cmである。柱痕は検出された全ての柱穴で観察され、内2本では底面に小穴が検出された。

遺物は、土師器坏2・壺1、土錘1点が出土した。

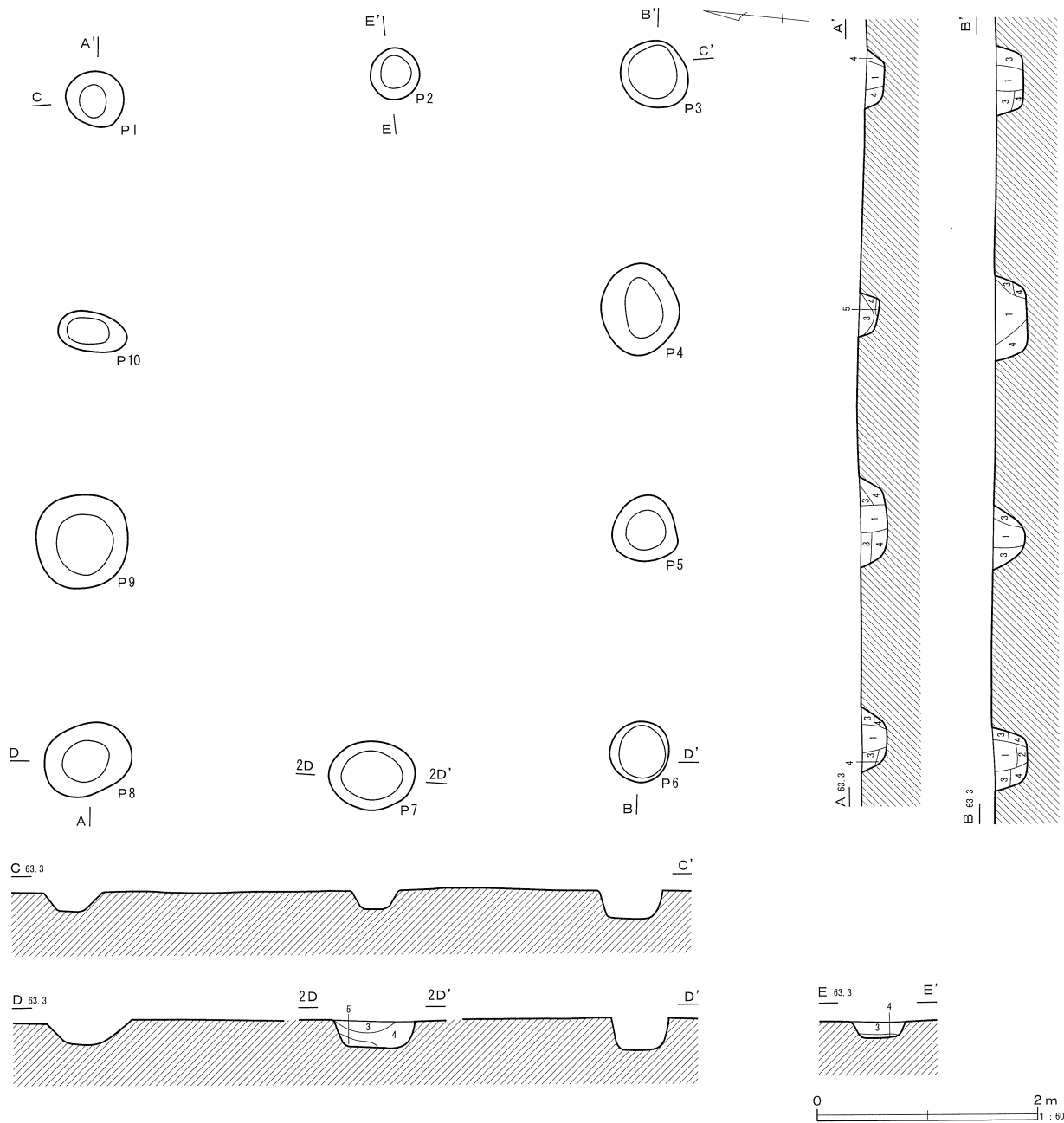
1はP10掘方から、2はP9掘方から、3はP3掘方からそれぞれ出土した。図示した他に、須恵器坏・蓋の破片が出土した。

第14号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第333図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.0)	3.0		ABDJ	普通	赤橙	5	P10	
2	土師坏	(13.0)	4.5		BDEFG	良好	浅黄橙	10	P9	
3	土師壺	14.0	2.7		BJ	良好	にぶい褐	90	P3	内外面黒色処理

第14号掘立柱建物跡出土土錘観察表（第333図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	(4.45)	1.90	0.45	10.49	BaIV	A	黒褐	60	P5



SB 13

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 砂質 地山粒子
- 2 褐灰色 (10YR5/1) 地山ブロック 粘性ややあり

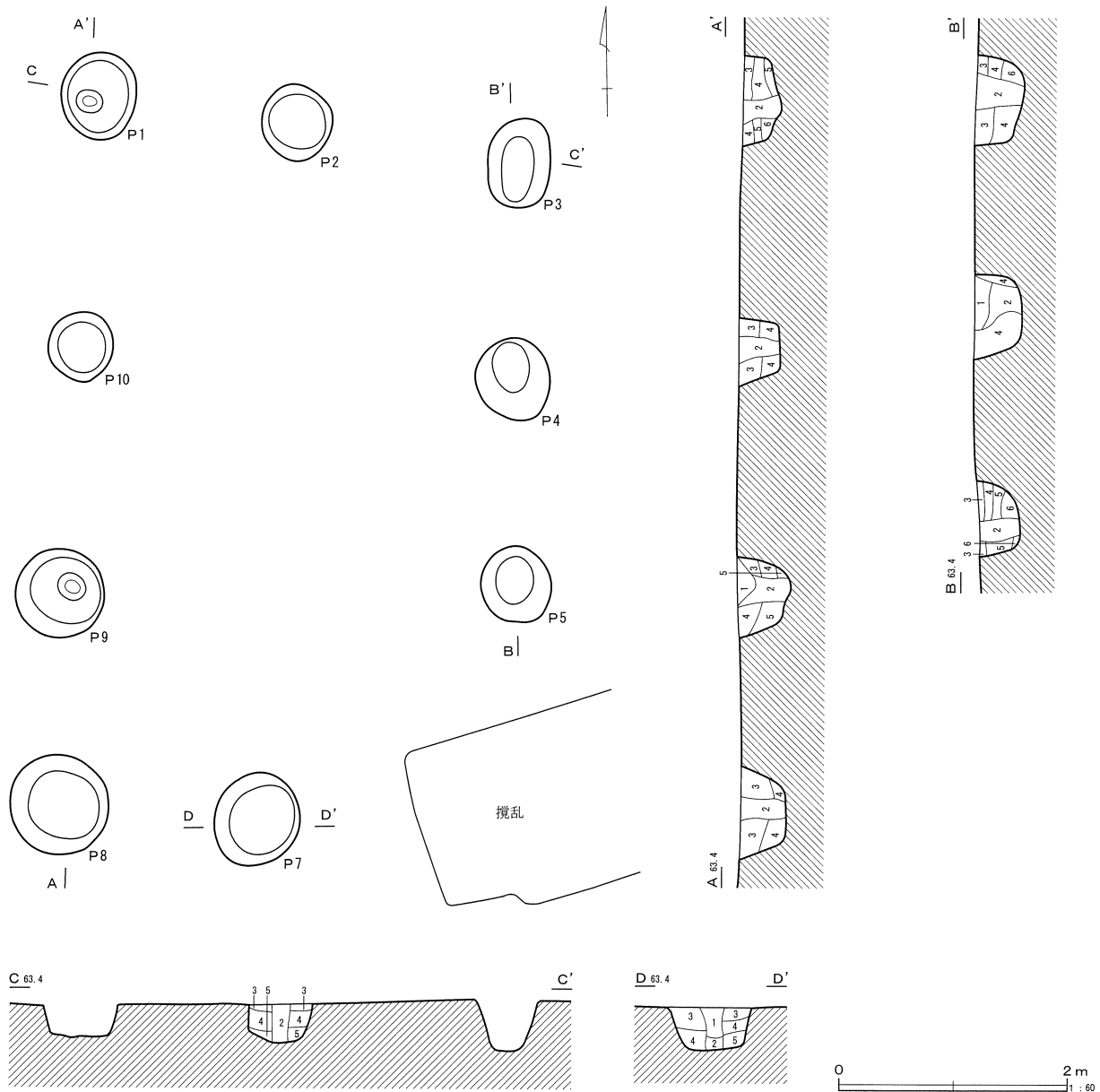
3 暗褐色 (10YR3/3)

4 褐色 (10YR4/4)

5 暗褐色 (10YR3/3)

- 地山粒子 粘性ややあり
- 砂質 焼土粒子 地山ブロック
- 砂質 焼土粒子 炭化粒子少

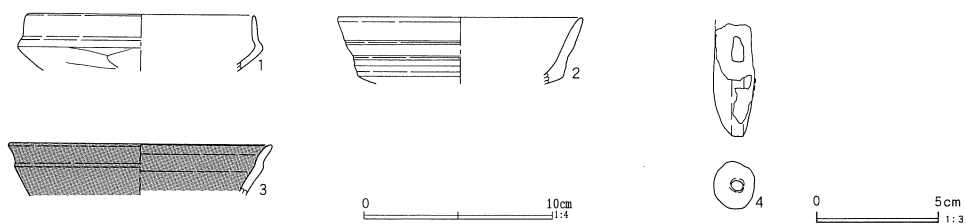
第331図 第13号堀立柱建物跡



S B 1 4

- | | | | | | | | | | |
|---|------------------|--------------|----------|----|---|---------------|--------------|---------|------|
| 1 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山ブロック・炭化粒子多 | しまりあり | 柱痕 | 4 | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック多 | 焼土粒子 | しまり強 |
| 2 | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック多 | 炭化粒子僅か | 柱痕 | 5 | 褐色 (10YR4/4) | 地山ブロック・炭化粒子多 | しまり強 | |
| 3 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山ブロック多量 | 炭化粒子ごく僅か | | 6 | 暗褐色 (10YR3/4) | やや砂質 | 地山ブロック多 | 炭化粒子 |

第332図 第14号掘立柱建物跡



第333図 第14号掘立柱建物跡出土遺物

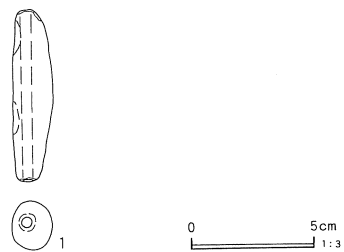
第15号掘立柱建物跡（第334・335図）

I・J-24グリッドに位置する。第449号住居跡より新しく、第448号住居跡より古い。規模は3×2間で、桁行5.84m、梁行4.27mである。柱間は桁行1.92~1.96m、梁行2.16~2.22mである。主軸方位は西側柱でN-11°-Wを指す。北東側の3本は第448号住居跡に壊されたと思われる。

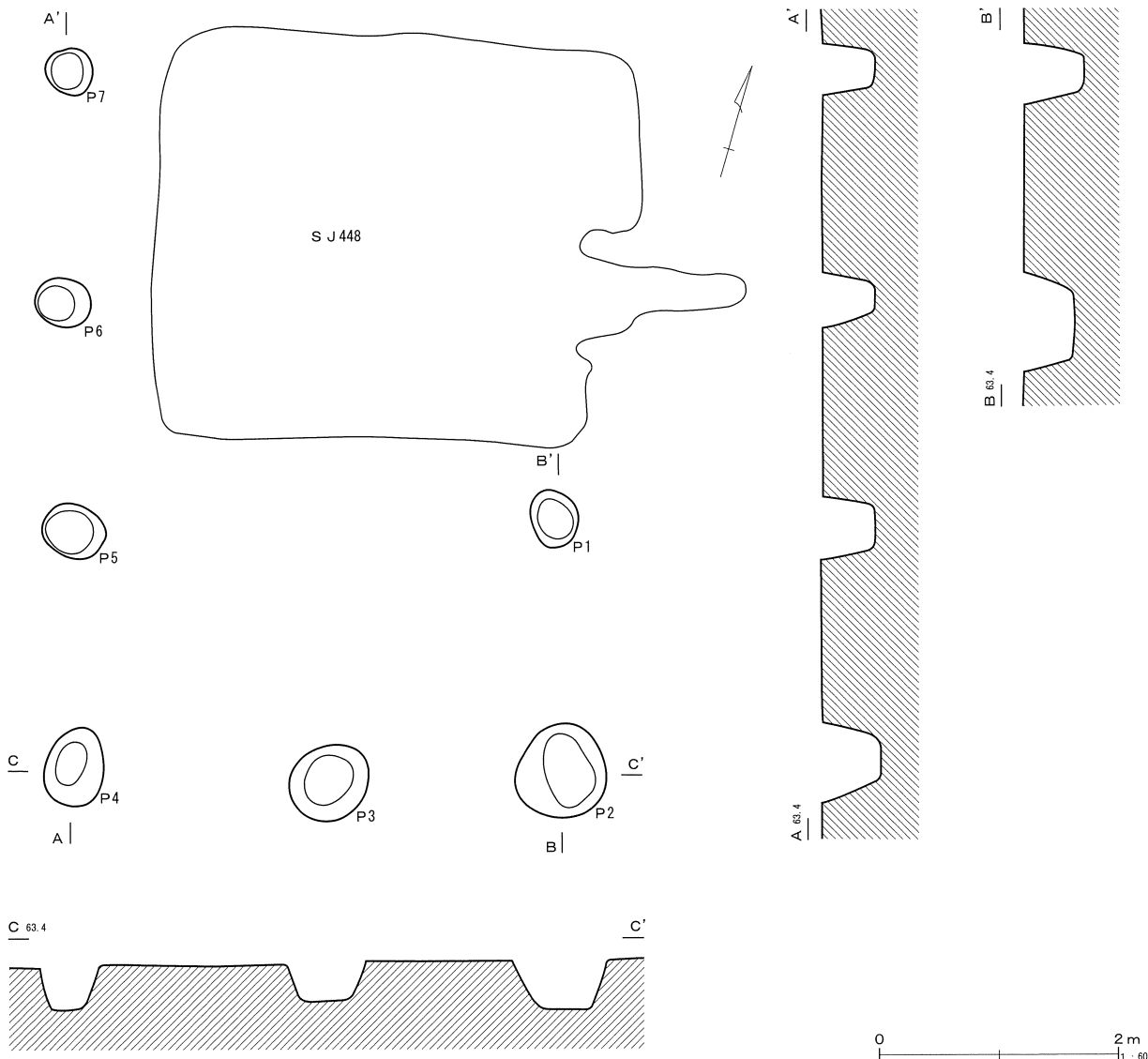
柱穴は円形または楕円形で、径40~76cm、深さ41~50cmである。土層の観察は出来なかった。

遺物は、器種の特定できない土師器の小片が出土

したが、図示可能な遺物は、P5掘方から出土した土錘1点であった。



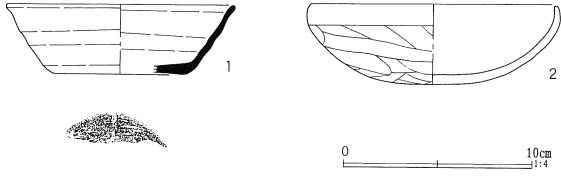
第334図 第15号掘立柱建物跡出土遺物



第335図 第15号掘立柱建物跡

第16号掘立柱建物跡（第336・337図）

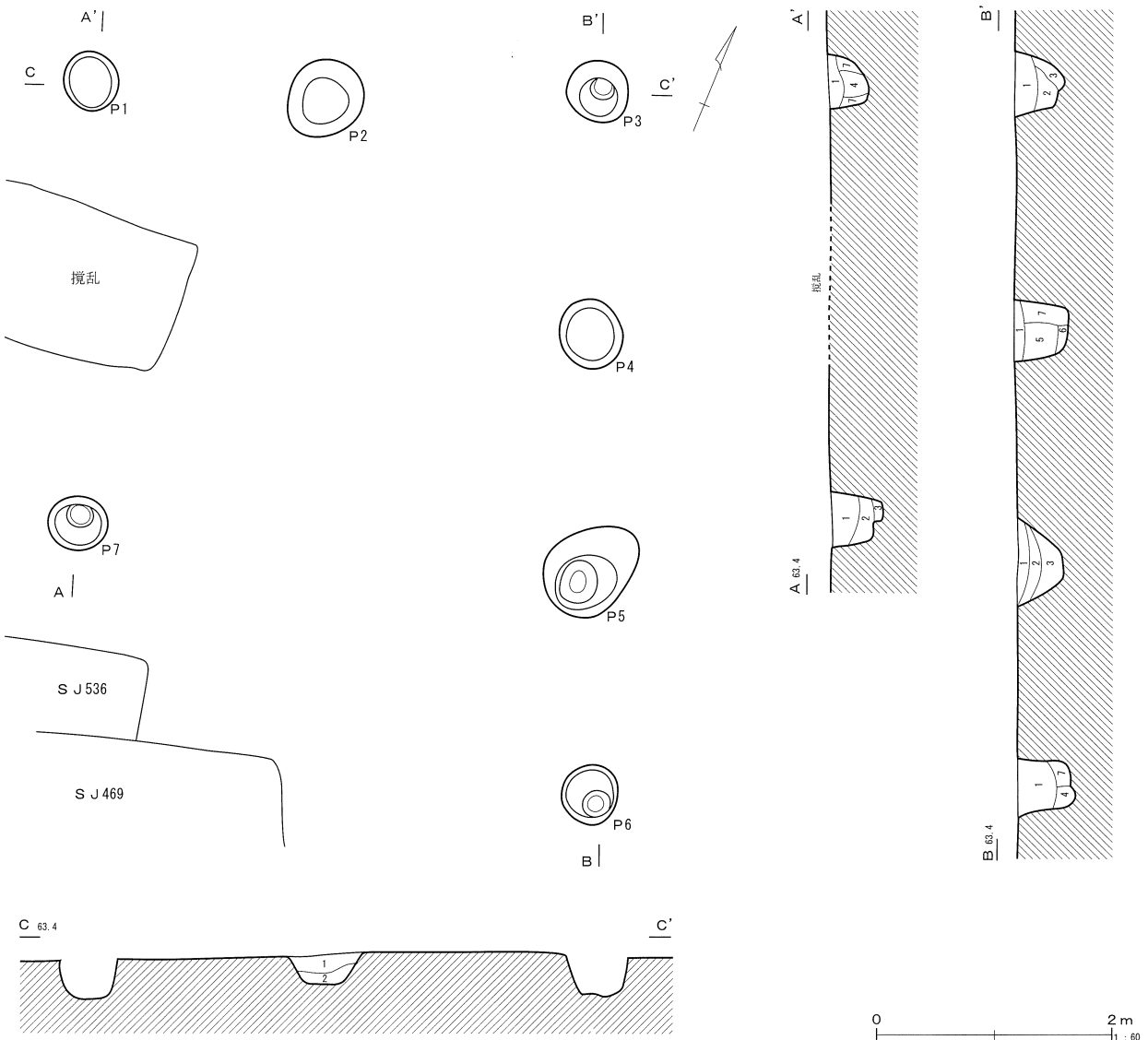
J-24グリッドに位置する。第488号住居跡より新しく、第469・470号住居跡より古い。検出された規模は3×2間で、桁行6.04m、梁行4.44mである。



第336図 第16号掘立柱建物跡出土遺物

但し、P6の西に柱穴が検出されなかったことから南に1間程度延びる可能性も考えられる。柱間は桁行1.82~2.08m、梁行2.04~2.40mである。主軸方位は東側柱でN-22°-Wを指す。一部は他の遺構や攪乱で壊されていた。

柱穴は円形で、径48~90cm、深さ34~46cmである。柱痕は検出された7本中3本で観察され、底面の小穴は4本で検出された。覆土3層の底面には白色粘土ブロックが観察された。



- | | | | | | |
|--------------------|-------------|--|--|--------------------|------------------|
| SB 16 | | | | 4 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック少 炭化粒子微 柱痕 |
| 1 暗褐色 (10YR3/3) | 地山土多 炭化粒子少 | | | 5 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック 暗褐色土 |
| 2 褐色 (10YR4/4) | 地山粒子多 炭化粒子少 | | | 6 暗褐色 (10YR3/3) | 地山粒子多 |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山粒子多 炭化粒子微 | | | 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 地山粒子多 炭化粒子微 |

第337図 第16号掘立柱建物跡

遺物は、P1掘方から土師器坏1、須恵器坏1点 が出土した。

第15号掘立柱建物跡出土土錘観察表（第334図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	6.75	1.90	0.40	17.76	C a III	A	赤褐	100	P5

第16号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第336図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵坏	(12.0)	3.5	7.2	A J L	普通	灰白	40	P1	末野産 底部回転糸切
2	土師坏	13.0	4.2		ABDEFJL	良好	橙	40	P1	

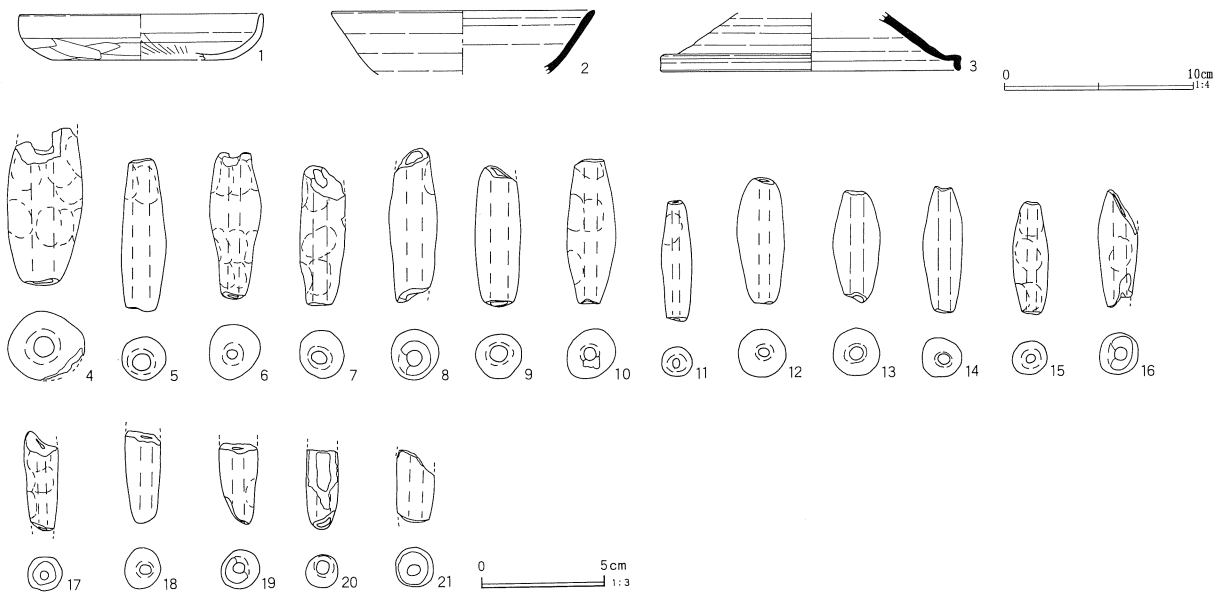
第18号掘立柱建物跡（第338・339図）

I・J-20・21グリッドに位置する。第476・477・493号住居跡・第23号掘立柱建物跡より新しい。規模は3×2間で、桁行6.84m、梁行4.54mである。柱間は桁行2.14~2.40m、梁行2.18~2.38mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

柱穴は円形または楕円形で、径74~120cm、深さ

62~73cmである。柱痕は10本中6本で観察され、底面の小穴は7本で検出された。覆土9層はP7掘り方の下層で観察され、柱建替え前の柱痕の可能性も考えられる。

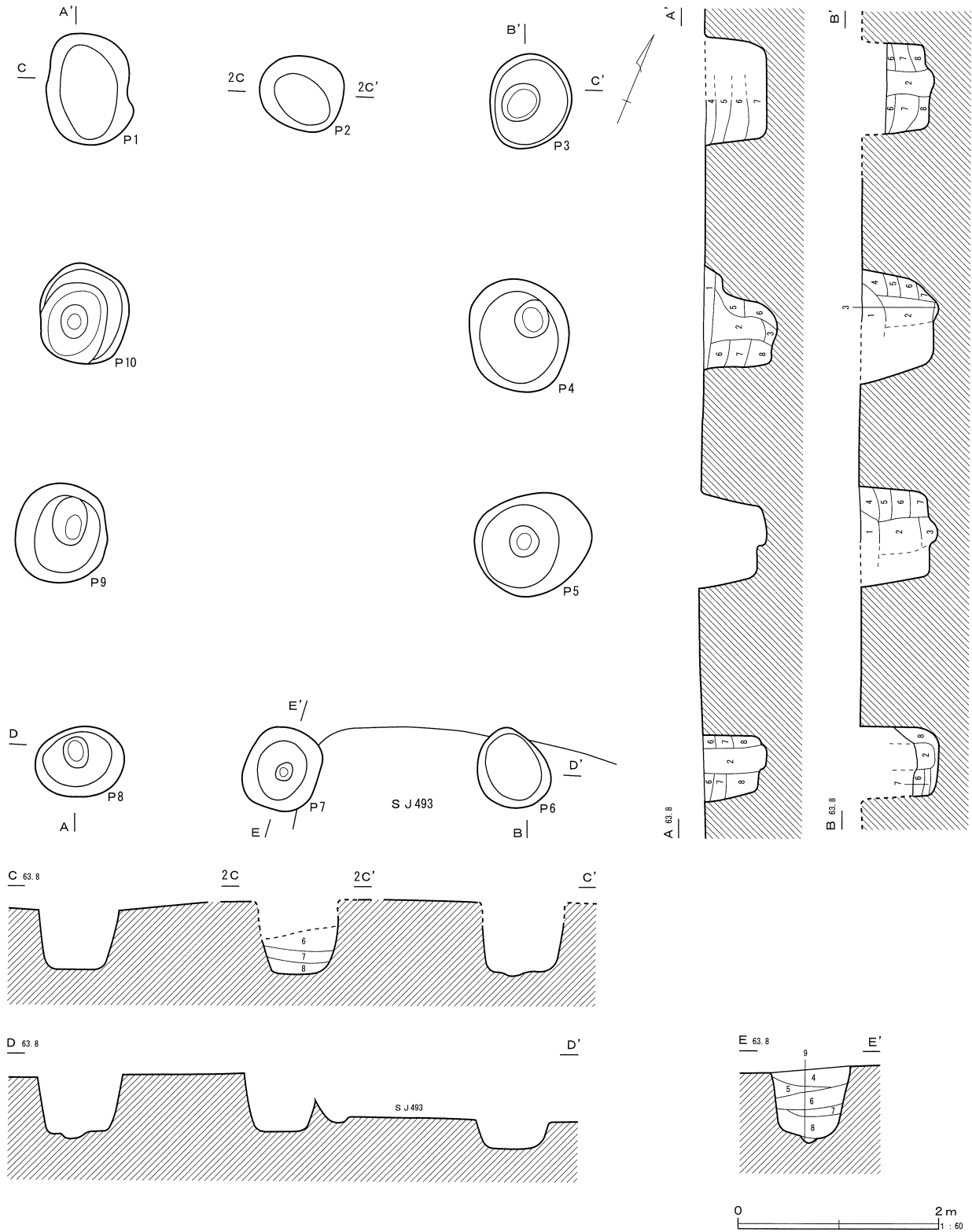
遺物は、柱穴掘方から、奈良・平安時代の土師器・須恵器片が出土した。図示可能な遺物は、土師器坏1、須恵器坏1・蓋1、土錘18点であった。



第338図 第18号掘立柱建物跡出土遺物

第18号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第338図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	(12.8)	2.4	(9.7)	B D E G J	良好	明赤褐	40	P1	内面放射暗文
2	須恵坏	(13.8)	3.4		ABEFIJL	良好	灰	10	P10	南比企産
3	須恵蓋	(15.8)	3.1		A I J	良好	青灰	15	P9	南比企産



- | | | | | | | | |
|---------|-----|-----------|---|--------|-----------|---------|---------------|
| S B 1 8 | | | 5 | 褐色 | (10YR4/4) | 地山ブロック多 | 炭化粒子 |
| 1 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 6 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 地山ブロック多 | 炭化粒子少 |
| 2 | 黒褐色 | (10YR3/2) | 7 | 褐色 | (10YR4/4) | 砂質 | 地山粒子・炭化粒子多 |
| 3 | 褐灰色 | (10YR6/1) | 8 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 砂質 | 地山ブロック多・炭化粒子含 |
| 4 | 暗褐色 | (10YR3/3) | 9 | 褐灰色 | (10YR6/1) | 3層に似る | 堀方下層 |

第339図 第18号掘立柱建物跡

第18号掘立柱建物跡出土土錘観察表（第338図）

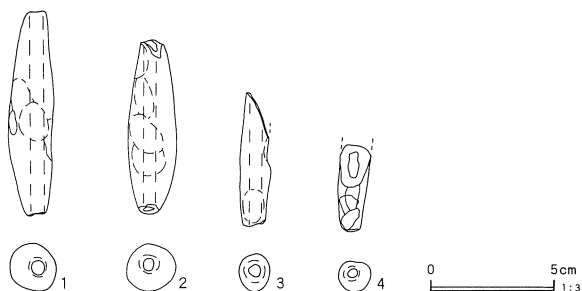
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
4	6.20	3.10	0.80	34.58	B b IV	B	浅黄橙	75	P9
5	6.00	1.70	0.70	14.82	B a IV	A	黒褐	95	P9
6	5.80	2.20	0.45	19.32	C a IV	C	にぶい黄橙	95	P4
7	5.50	1.90	0.60	15.29	C b IV	C	暗褐	85	P10
8	6.05	2.00	0.65	17.79	B a IV	A	にぶい黄橙	95	P4
9	5.60	1.75	0.70	16.59	A a IV	A	黒褐	95	P9
10	5.70	2.10	0.50	18.71	C a IV	A	にぶい橙	95	P9
11	4.80	1.15	0.45	5.89	B b V	C	にぶい褐	100	P4
12	5.00	1.90	0.45	15.81	B a V	A	灰白	100	P9
13	4.40	1.90	0.55	11.28	B a V	A	灰黄褐	100	P10
14	5.00	1.65	0.45	9.96	B a V	A	灰黄褐	100	P10
15	4.45	1.45	0.40	7.17	B a V	C	にぶい褐	100	P4
16	4.65	1.70	0.55	8.70	—	C	黒褐	—	P7
17	(4.00)	1.40	0.35	6.63	—	C	橙	—	P4
18	(3.65)	1.65	0.50	6.57	B a IV	C	褐灰	60	P5
19	(3.20)	1.60	0.50	5.82	—	C	褐	40	P5
20	(3.15)	1.30	0.55	3.15	—	A	明赤褐	—	P5
21	(2.80)	1.60	0.60	5.59	—	C	橙	—	P4

第19号掘立柱建物跡（第340・341図）

I・J-20・21グリッドに位置する。第477・493号住居跡・第20号掘立柱建物跡を切る。規模は3×2間で、桁行6.66m、梁行4.46mである。柱間は桁行、梁行共に2.12~2.32mである。主軸方位はN-74°-Eを指す。

柱穴は円形で、径44~70cm、深さ30~47cmである。柱痕は10本中8本で観察された。

遺物は、P3・P5・P7掘方から土錘4点が出土したのみである。



第340図 第19号掘立柱建物跡出土遺物

第19号掘立柱建物跡出土土錘観察表（第340図）

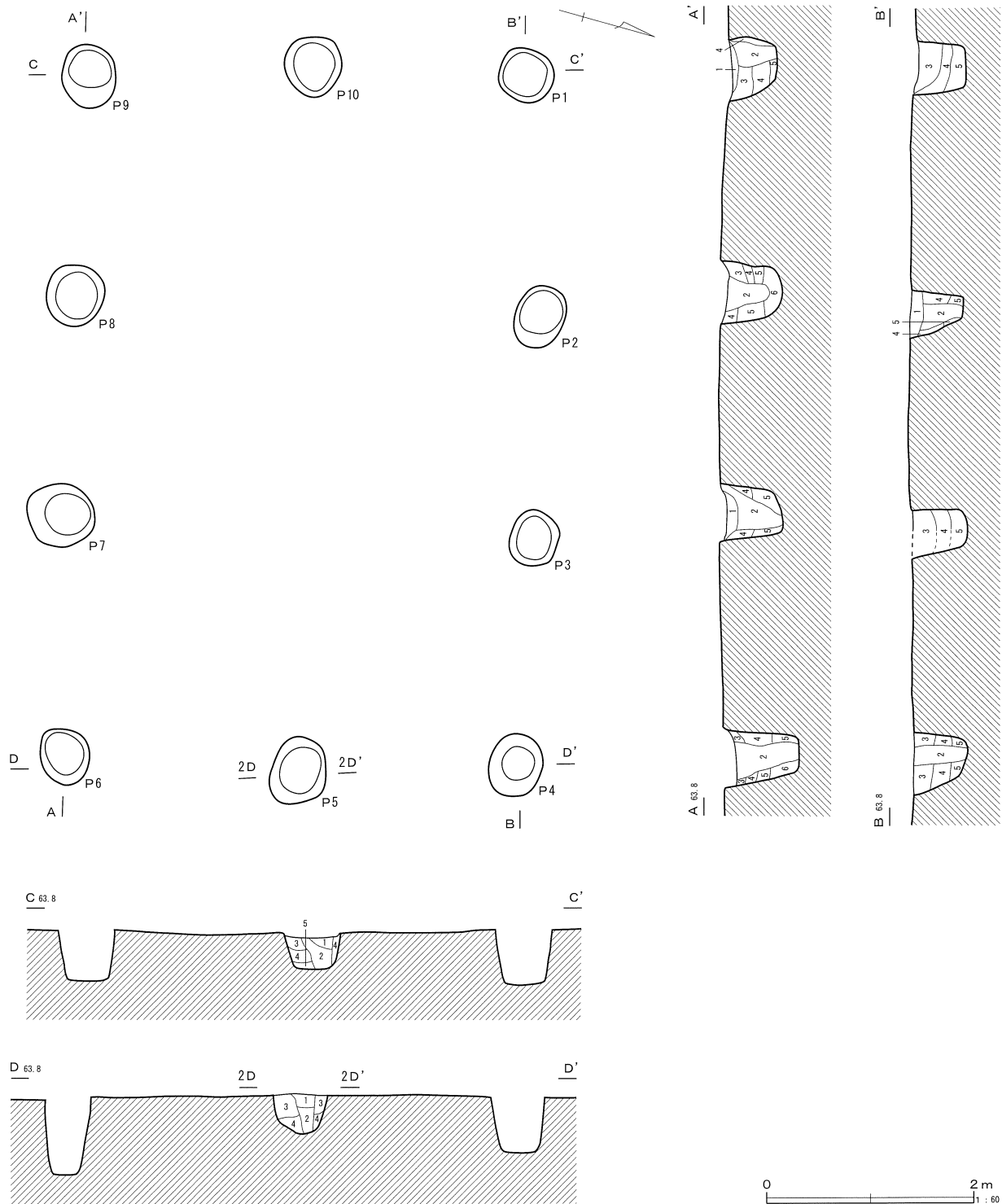
番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	8.10	1.90	0.55	19.48	B a II	A	にぶい黄橙	100	P5
2	6.90	1.90	0.50	21.29	B a III	A	にぶい赤褐	100	P3
3	(5.30)	1.45	0.50	7.39	B a IV	A	橙	90	P7
4	(3.50)	1.30	0.30	4.02	—	A	—	—	P3

第20号掘立柱建物跡（第342・343図）

I・J-21グリッドに位置する。第474・477・482・493号住居跡・第21号掘立柱建物跡を切り、第19号掘立柱建物跡に切られる。規模は3×2間で、桁行6.18m、梁行4.48mである。柱間は桁行2.06~2.42m、梁行2.20~2.30mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

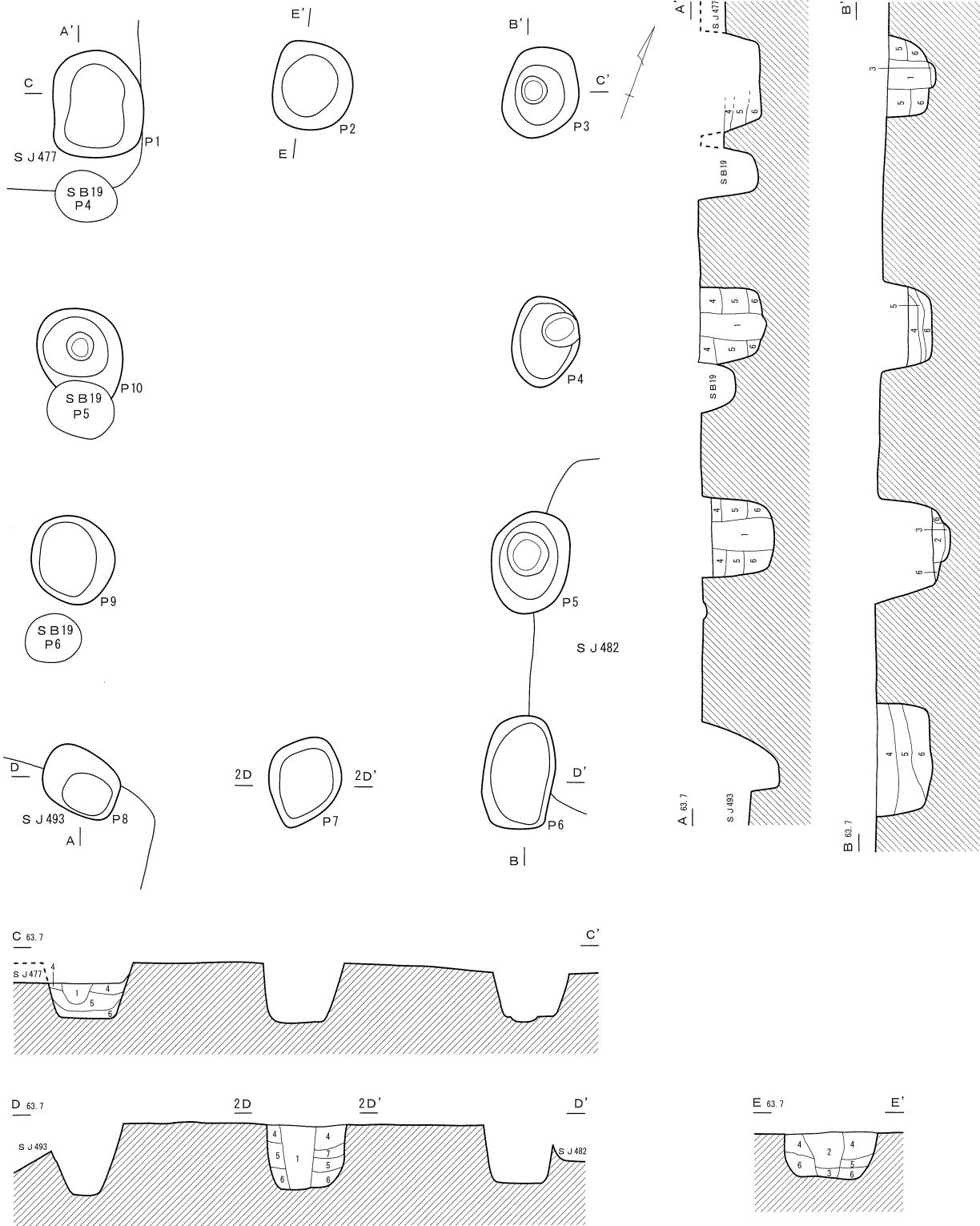
柱穴は円形または楕円形で、径60~112cm、深さ57~72cmである。他の遺構と同時に調査を進めたり、土層観察が十分に出来なかった柱穴もあったが、柱痕は10本中6本で観察された。底面の小穴は4本で検出された。

遺物は、P1掘方から土師器坏1、P3掘方から須恵器坏1点、P5・6・9・10から土錘9点が出土した。



- S B 1 9
- 1 褐色 (10YR4/4) 地山粒子多
 - 2 黒褐色 (10YR3/2) 地山粒子 地山ブロック 炭化粒子 柱痕
 - 3 暗褐色 (10YR3/3) 地山粒子多 粘性ややあり
 - 4 褐色 (10YR4/4) 地山ブロック多 砂質で固くしまる
 - 5 暗褐色 (10YR3/4) 地山ブロック多 炭化粒子 粘性ややあり
 - 6 褐色 (10YR4/4) 地山ブロック多 炭化粒子 砂質で固くしまる

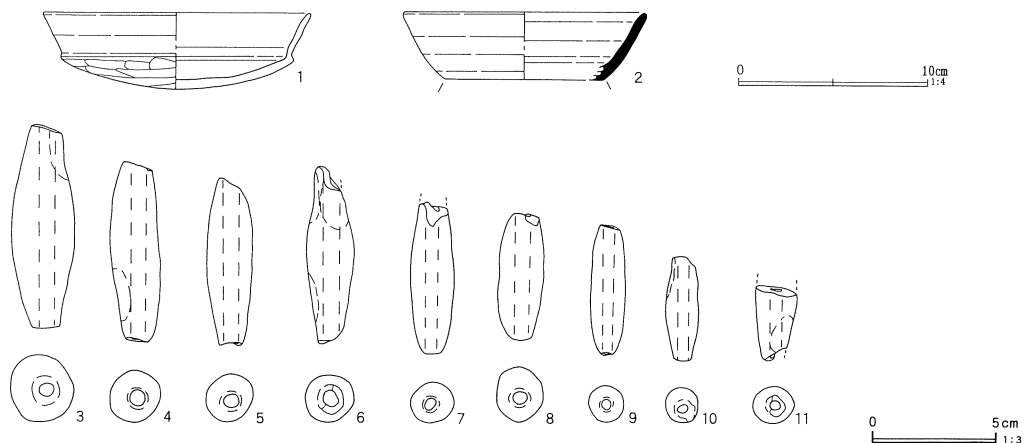
第341図 第19号堀立柱建物跡



- SB 20
- | | | | |
|---|---------------|------------|---------|
| 1 | 暗褐色 (10YR3/4) | 地山粒子・炭化粒子 | しまりややあり |
| 2 | 黒褐色 (10YR3/2) | 地山粒子 | しまりややあり |
| 3 | 灰褐色 (10YR6/1) | シルト質 | 柱痕底面 |
| 4 | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック多 | |
| 5 | 褐色 (10YR4/4) | 砂質 | 地山ブロック多 |
| 6 | 暗褐色 (10YR3/3) | 地山ブロック多 | |
| 7 | 暗褐色 (10YR3/3) | 4層に似るがしまり弱 | |

0 2 m
1 60

第342図 第20号掘立柱建物跡



第343図 第20号掘立柱建物跡出土遺物

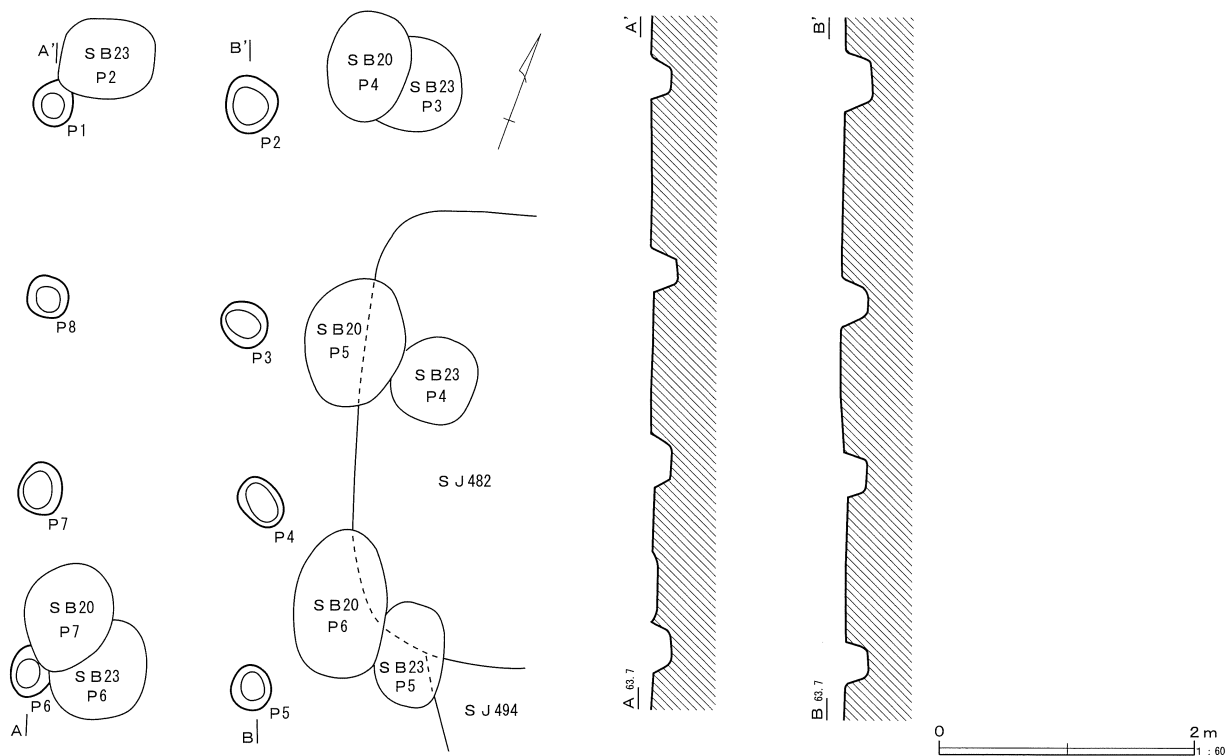
第21号掘立柱建物跡（第344図）

I・J-21グリッドに位置する。第482・494号住居跡・第20号掘立柱建物跡と重複し、その何れよりも古い。検出された規模は3×1間で、桁行4.50m、梁行1.82mであるが、東に1間延びて3×2間の総柱になる可能性も考えられる。柱間は桁行1.46～

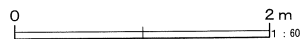
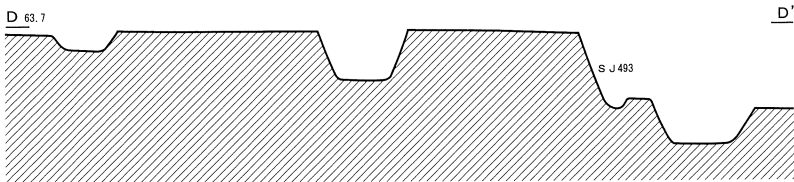
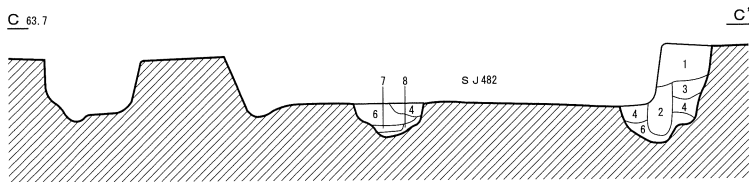
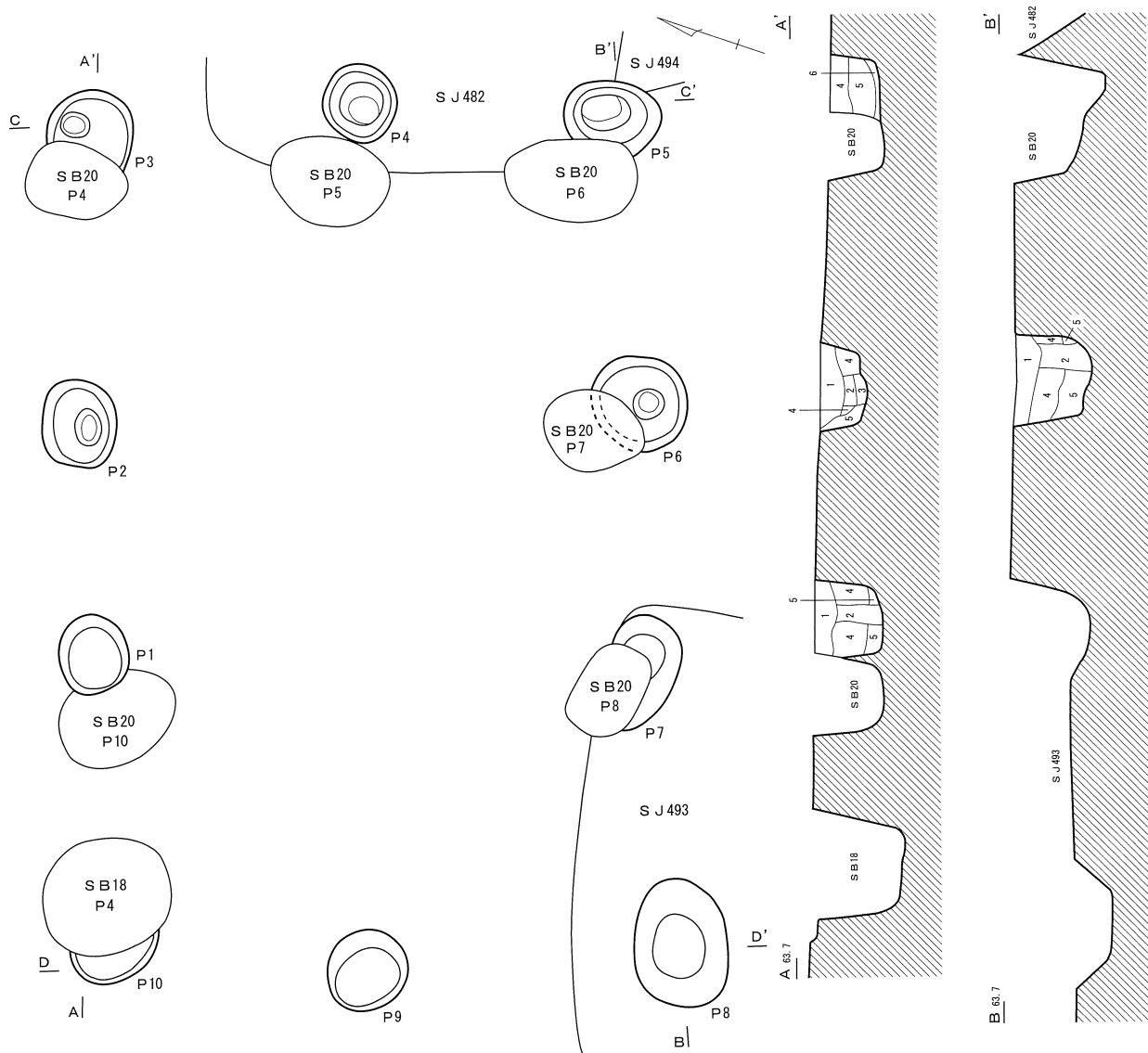
1.50m、梁行1.44～1.82である。主軸方位はN-22°-Wを指す。

柱穴は円形または楕円形で、径32～42cm、深さ13～20cmである。土層の観察は出来なかった。

遺物は、出土しなかった。



第344図 第21号掘立柱建物跡



- | | | |
|--------|-----------------------------------|---------------------------------|
| SB 2 3 | 1 暗褐色 (10YR3/4) 地山ブロック 炭化粒子多 | 5 褐色 (10YR4/4) 地山ブロック多 |
| | 2 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子多 柱痕 | 6 暗褐色 (10YR3/4) 地山ブロック 暗褐色ブロック多 |
| | 3 褐灰色 (10YR6/1) 炭化粒子 | 7 褐灰色 (10YR6/2) 粘性ややあり |
| | 4 暗褐色 (10YR3/3) 地山ブロック多 焼土粒子 炭化粒子 | 8 褐灰色 (10YR6/2) 酸化鉄 |

第345図 第23号堀立柱建物跡

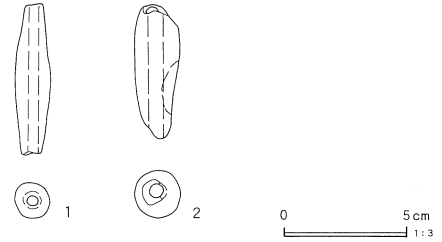
第23号掘立柱建物跡（第345・346図）

I・J-21グリッドに位置する。第482・494号住居跡・第18号掘立柱建物跡と重複し、本掘立柱建物跡が最も古い。規模は3×2間で、桁行7.14m、梁行4.58mである。柱間は桁行2.20～2.50m、梁行2.10～2.50mである。主軸方位はN-73°-Eを指す。

柱穴は円形または楕円形で、径60～110cm、深さ27～64cmである。他の遺構と同時に調査を進めたり、土層観察が十分に出来なかった柱穴もあったが、柱痕は10本中3本で観察された。底面の小穴は5本で

検出された。

遺物は、P6から土錘が2点出土した。



第346図 第23号掘立柱建物跡出土遺物

第20号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第343図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師坏	14.1	4.0		B D G	良好	明赤褐	70	P1	外面黒色処理
2	須恵坏	(12.8)	3.6		B F H J	普通	灰白	25	P3	末野産 底部回転ヘラケズリ

第20号掘立柱建物跡出土土錘観察表（第343図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
3	8.00	2.60	0.60	43.51	C b II	A	灰黄褐	100	P10
4	7.10	2.00	0.65	26.35	B a III	A	にぶい橙	100	P6
5	6.60	1.90	0.60	19.06	B a III	A	明赤褐	100	P5
6	8.00	1.90	0.65	18.75	B a II	A	にぶい黄橙	80	P5
7	6.00	1.80	0.50	14.80	B a IV	A	灰白	90	P9
8	5.00	2.20	0.60	17.69	B a V	A	にぶい赤褐	100	P9
9	5.10	1.40	0.45	9.05	B a V	A	にぶい赤褐	100	P5
10	4.10	1.40	0.40	6.31	B b VI	A	黒褐	70	P9
11	(3.00)	1.60	0.40	5.11	—	A	灰黄褐	—	P9

第23号掘立柱建物跡出土土錘観察表（第346図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
1	5.90	1.40	0.40	9.44	B b IV	A	にぶい黄褐	100	P6
2	5.20	1.80	0.60	15.28	B a V	A	褐灰	80	P6

3. 土坑

第88号土坑（第347図）

F-25グリッドに位置する。第14号性格不明遺構を切る。平面形は不整形で、長さ0.96m、幅0.58m、深さ0.21mである。北西コーナー近くに深さ0.14mのピットが検出された。主軸方位はN-78°-Eを指す。遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片

が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第89号土坑（第347図）

F・G-25グリッドに位置する。第14号性格不明遺構を切る。平面形は楕円形で、長径1.44m、短径1.08m、深さ0.20mである。中央付近に深さ0.16m

のピットが検出された。主軸方位はN-59°-Eを指す。遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第90号土坑（第347・349図）

F-24グリッドに位置する。第180号住居跡を切る。平面形は径1.14mの円形で、途中に段を持つ。深さは0.67mである。遺物は、土師器甕2点が出土した。

第91号土坑（第347図）

F-23グリッドに位置する。第181号住居跡を切る。平面形は楕円形で、長径1.52m、短径1.12m、深さ0.12mである。中央付近に深さ0.26mのピットが検出された。主軸方位はN-16°-Wを指す。遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第92号土坑（第347・349・351図）

F-23グリッドに位置する。第181号住居跡を切る。平面形は長方形で、長さ2.40m、幅2.10m、深さ0.28mである。主軸方位はN-79°-Eを指す。遺物は、土師器坏1、須恵器甕1、土錘2点が出土した。

第93号土坑（第347・349・351図）

G-21グリッドに位置する。第2号溝跡を切る。平面形は不整形で、長さ1.82m、幅1.10m、深さ0.14mである。主軸方位はN-0°である。遺物は、土師器坏1・高坏2・甕2、土製支脚1、土錘1点が出土した。

第94号土坑（第347図）

F-24グリッドに位置する。第16号性格不明遺構を切る。平面形は歪んだ隅丸方形で、長さ0.80m、幅は0.75m程か。深さは0.23mである。主軸方位は

南辺でN-39°-Eを指す。遺物は、器種不明の土師器片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第95号土坑（第347図）

G-22グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.34m、短径0.72m、深さ0.20mである。主軸方位はN-13°-Wを指す。遺物は、土師器・須恵器の破片が少量出土したが、図示可能な遺物はなかった。須恵器の中には、南比企産の瓶類の破片が出土した。

第248号土坑（第347図）

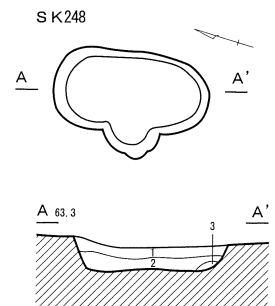
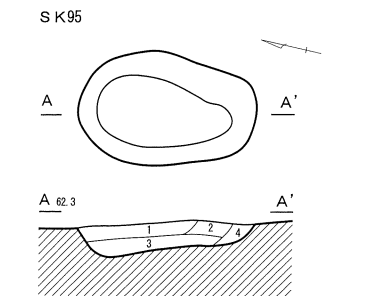
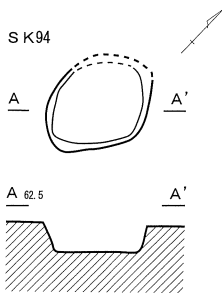
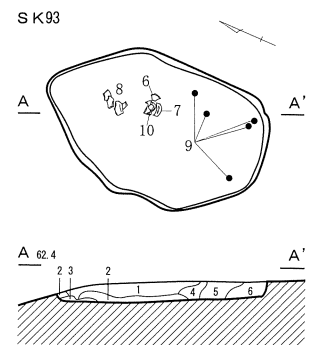
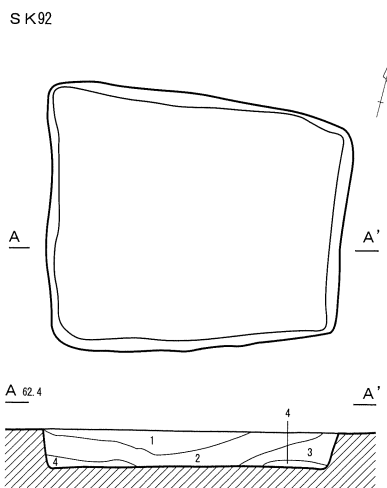
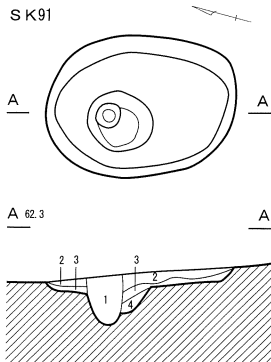
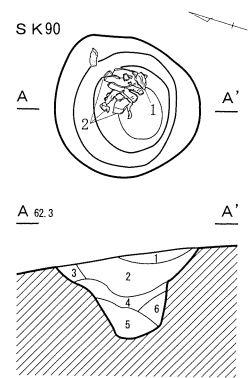
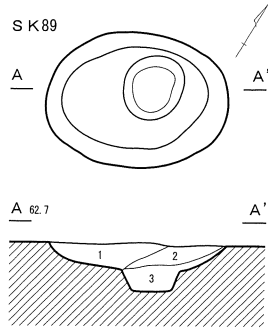
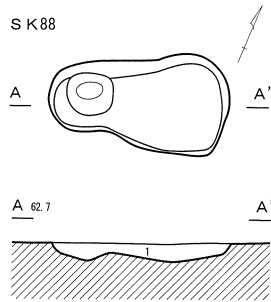
H-27グリッドに位置する。第417号住居跡を切る。平面形は楕円形で、長さ1.24m、幅0.64m、深さ0.22mである。西辺の一部が飛び出している。主軸方位はN-18°-Wを指す。遺物は、土師器甕類の破片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。甕類には、羽釜と思われる甕の胴部の小片が出土している。

第249号土坑（第348・349図）

H・I-26グリッドに位置する。第447号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ1.20m、幅0.82m、深さ0.19mである。主軸方位は北辺でN-13°-Wを指す。遺物は、古墳時代～平安時代の土師器・須恵器片が出土した。図示可能な遺物は、土師器甕1点のみであったが、須恵器には高台付椀の破片が出土している。

第250号土坑（第348・349図）

H・I-25・26グリッドに位置する。第251号土坑に切られ、第447号住居跡を切る。平面形はやや歪んだ正方形で、長さ0.88m、幅0.76m、深さ0.08mである。主軸方位はN-26°-Wを指す。遺物は、土師器甕1点が出土した。



S K 88
1 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子 小礫 (φ2cm)

S K 89
1 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子 小礫 (φ2~3cm)
2 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子 小礫多 (φ2cm以下)
3 黒褐色 (10YR3/2) 砂粒子多 (2mm以下)

S K 90
1 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質 焼土僅か
2 黒褐色 (10YR3/1) 炭化粒子僅か
3 黒褐色 (10YR3/2) 砂質 炭化粒子僅か
4 にぶい黄褐色 (10YR5/4)
5 暗褐色 (10YR3/2)
6 黒褐色 (10YR3/2) 砂質

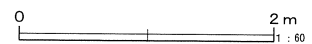
S K 93
1 灰黄褐色 (10YR4/2) 焼土粒子多
2 にぶい黄褐色 (10YR5/3)
3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 灰白色粘土
4 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 焼土ブロック多
5 黄灰色 (2.5Y6/2)
6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質 白色微粒子僅か

S K 91
1 暗褐色 (10YR3/4) 地山粒子多 炭化粒子
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山ブロック多 炭化粒子
3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 地山ブロック多 炭化粒子少
4 褐色 (10YR4/4) やや砂質 地山ブロック多

S K 95
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
2 黒褐色 (10YR3/2)
3 黒色 (10YR2/1) 炭化粒子
4 黒褐色 (10YR3/2) 灰粒子

S K 92
1 暗褐色 (10YR3/4) 地山ブロック 焼土粒子・炭化粒子微
2 暗褐色 (10YR3/3) 地山ブロック多 炭化粒子
3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 地山ブロック多 炭化粒子
4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 地山ブロック多

S K 248
1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質 地山ブロック多 炭化粒子
2 暗褐色 (10YR3/4) 砂質 地山粒子 炭化粒子
3 褐色 (10YR4/4) 地山粒子多



第251号土坑（第348～351図）

I-25・26グリッドに位置する。第447号住居跡・第250号土坑を切る。平面形は楕円形で、長径2.10m、短径1.08m、深さ0.39mである。主軸方位はN-8°-Wを指す。遺物は、平安時代の土師器・須恵器片が出土した。図示可能な遺物は、須恵器坏1・高台付椀1、鉄製紡錘車1・棒状鉄製品2、土錘4点が出土した。

第252号土坑（第348・351図）

H-25グリッドに位置する。第447号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ1.56m、幅0.96m、深さ0.30mである。主軸方位はN-84°-Eを指す。遺物は、須恵器高台付椀、灰釉椀の小破片が出土したが、図示できなかった。図示可能な遺物は、土錘1点のみであった。

第253号土坑（第348図）

H・I-25グリッドに位置する。第447号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ1.02m、幅0.84m、深さ0.22mである。主軸方位はN-77°-Eを指す。遺物は、須恵器蓋、灰釉椀の小破片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第254号土坑（第348～351図）

I-25グリッドに位置する。第444・445号住居跡を切る。平面形は楕円形で、長径1.14m、短径0.94m、深さ0.17mである。主軸方位はN-11°-Wを指す。遺物は、土師器坏、須恵器坏・甕、灰釉皿1、刀子1・棒状鉄製品1、土錘13点が出土した。

このうち、須恵器坏とした第349図-16は、底部を欠いていたが、高台椀であった可能性もある。

第255号土坑（第348・351図）

H-25グリッドに位置する。第433号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ2.16m、幅1.10m、深さ0.47mである。主軸方位はN-74°-Eを指す。遺物は、須恵器高台椀の小片が出土したが、図示できなかった。図示可能な遺物は、土錘1点のみであった。

第258号土坑（第348・350図）

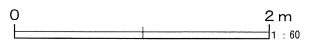
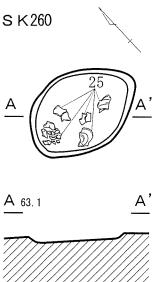
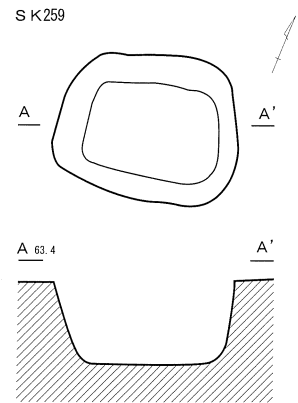
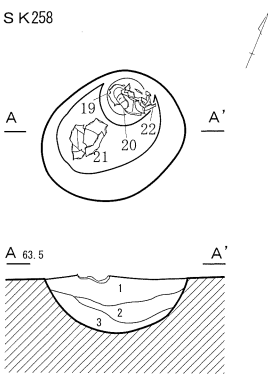
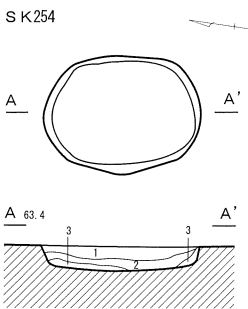
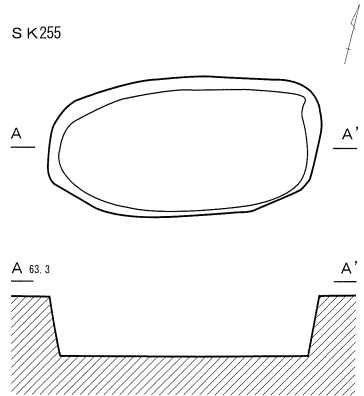
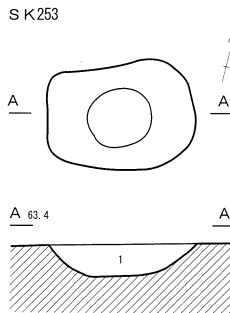
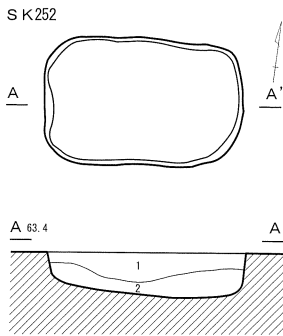
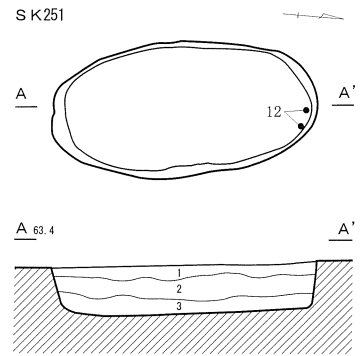
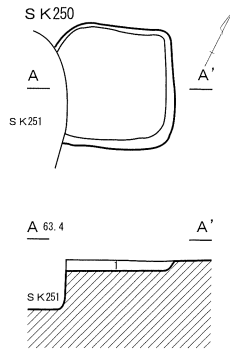
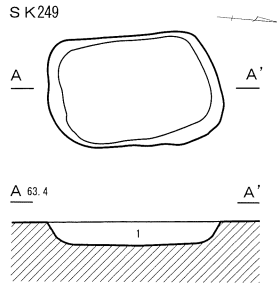
H-24グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.14m、短径1.02m、深さ0.44mである。底面北端に深さ0.09mのピットが検出された。主軸方位はN-27°-Eを指す。遺物は、土師器坏2・甕1・甑1点が出土した。

第259号土坑（第348・350図）

I-25グリッドに位置する。第461・462号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、長さ1.46m、幅1.18m、深さ0.63mである。主軸方位はN-74°-Eを指す。遺物は、古墳時代後期の土師器片が出土したが、図示可能な遺物は、土師器坏1点のみであった。

第260号土坑（第348・350図）

J・K-24グリッドに位置する。第469・536号住居跡に切られる。平面形は歪んだ隅丸長方形で、長さ0.78m、幅0.64m、深さ0.06mである。主軸方位はN-50°-Wを指す。遺物は、古墳時代後期の土師器坏・甕の破片が出土したが、図示可能な遺物は、土師器坏1・甑1点であった。



S K249
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 白色粒子多 焼土粒子・炭化粒子少

S K250
1 灰黄褐色 (10YR4/2) 炭化粒子・焼土粒子少

S K251
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子多 炭化粒子やや多
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色小ブロック多 炭化粒子やや多
3 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色土多 炭化粒子やや多

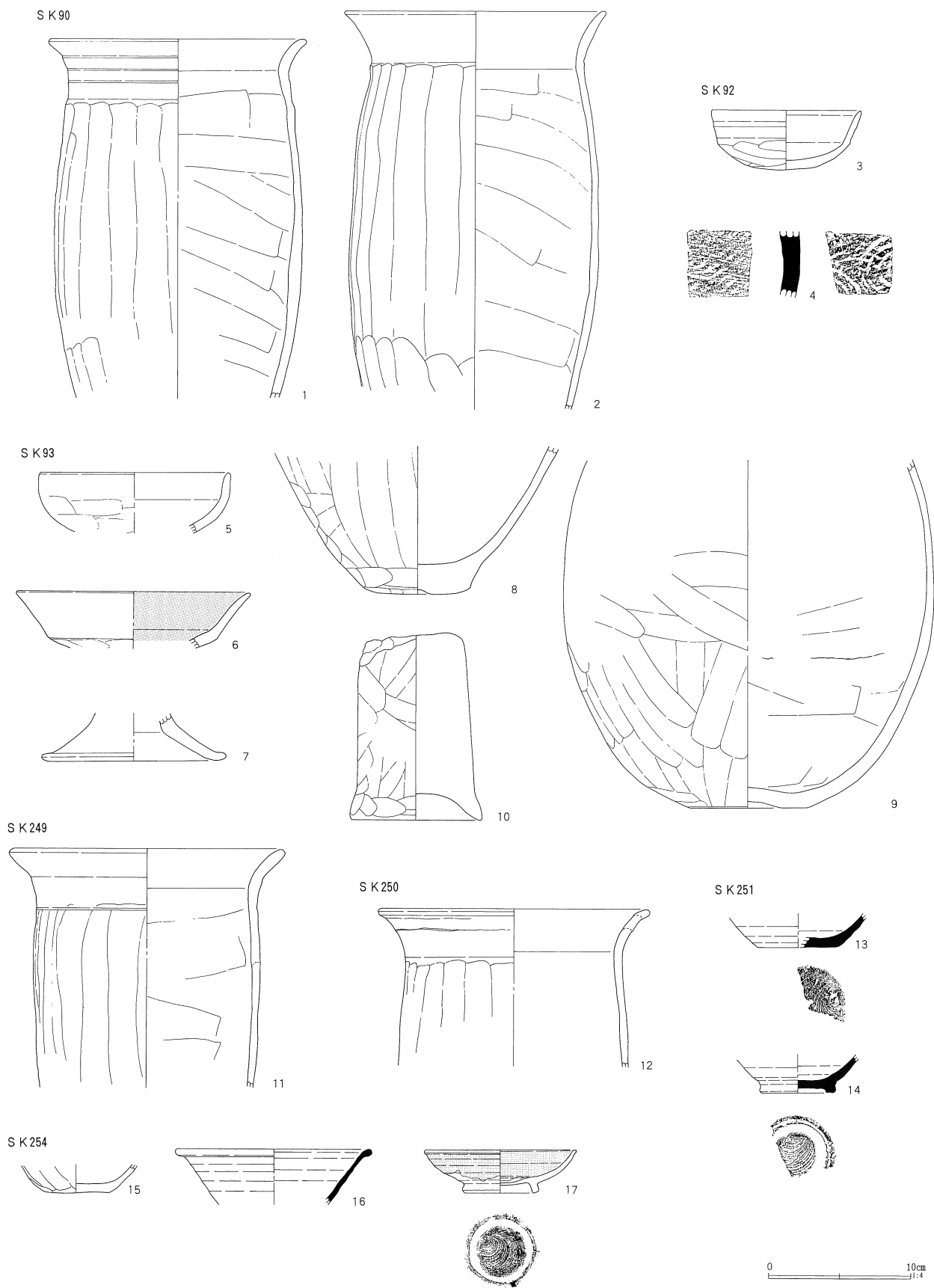
S K252
1 暗褐 (10YR3/3) 黄褐色粒子・白色粒子多 焼土粒子・炭化粒子少
2 暗褐色 (10YR3/3) 1層に似るが黄褐色粒子少 炭化粒子多

S K253
1 灰黄褐色 (10YR4/2) 黄褐色粒子多 焼土粒子・炭化粒子少

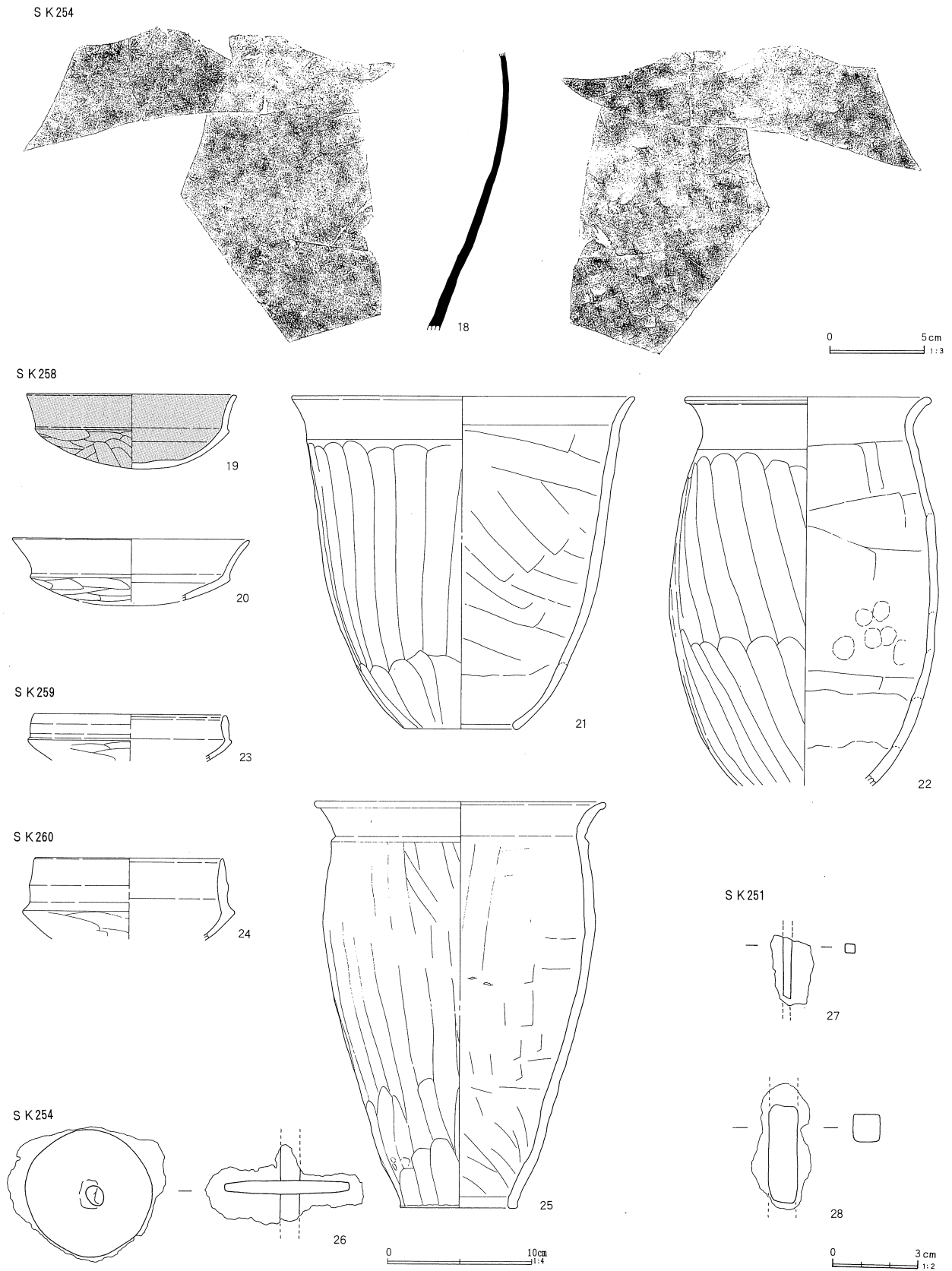
S K254
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 白色粒子多 焼土粒子・炭化粒子少
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子多 焼土粒子少
3 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子・焼土粒子少

S K258
1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 炭化粒子少 焼土粒子僅か
2 暗褐色 (10YR3/3) 黄褐色粒子極多 炭化粒子僅か
3 褐色 (10YR4/4) 炭化粒子僅か

第348図 第249～255・258～260号土坑

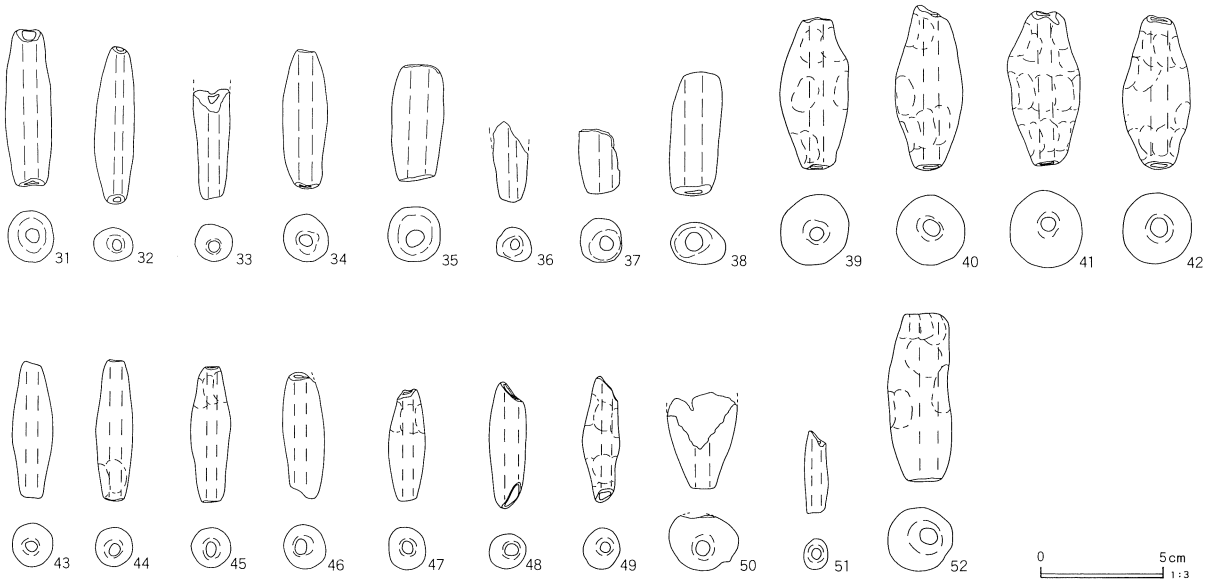
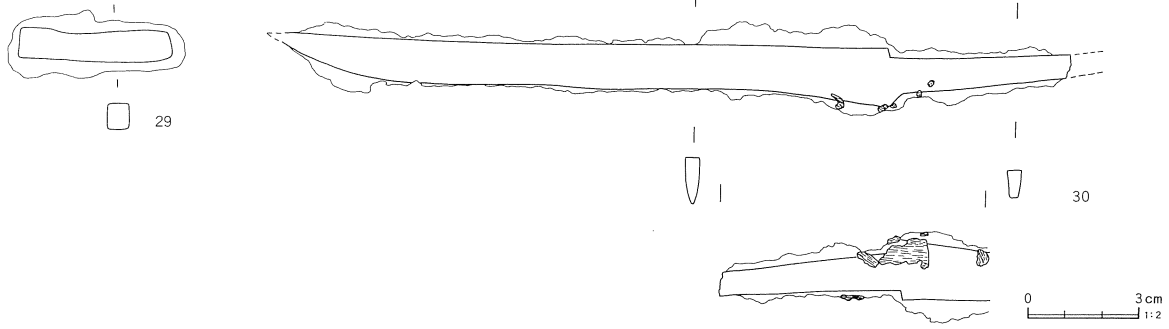


第349图 土坑出土遺物 (1)



第350图 土坑出土遺物 (2)

S K 254



第351図 土坑出土遺物 (3)

土坑出土遺物観察表 (第349・350図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師甕	18.2	27.9		A D E J	良好	浅黄	80	S K 90	十20.5cm
2	土師甕	17.9	25.1		A H J L	良好	にぶい橙	70	S K 90	十45.5cm
3	土師坏	10.5	4.2		B G J	普通	橙	80	S K 92	
4	須恵甕				B J	良好	暗灰黄		S K 92	末野産
5	土製支脚	7.4	13.0	9.0	B E J	普通	明赤褐	80	S K 93	一2.5cm
6	土師高坏	(16.4)	4.0		B E J	普通	橙	30	S K 93	十6cm 赤彩
7	土師高坏		3.3	(13.0)	B E J	普通	橙	25	S K 93	十6cm
8	土師甕		24.3	(8.8)	C J L	普通	橙	40	S K 93	
9	土師甕		5.4	7.4	J L	普通	橙	70	S K 93	十3cm
10	土師坏	(13.2)	3.3		B E G	普通	橙	20	S K 93	
11	土師甕	(18.8)	16.7		B D J	良好	灰黄褐	35	S K 249	
12	土師甕	(18.8)	11.0		A B J	不良	浅黄	20	S K 250	
13	須恵坏		2.4	(5.8)	A B D H	不良	にぶい黄橙	25	S K 251	末野産 底部回転糸切
14	須恵高台椀		2.7	5.0	A B D H	普通	黄灰	40	S K 251	末野産 底部回転糸切後高台貼付
15	土師坏		2.0	4.6	A B E G	普通	浅黄橙	75	S K 254	
16	須恵坏	(13.8)	3.9		A B	不良	灰白	20	S K 254	末野産
17	灰釉皿	10.6	3.1	4.8	B	良好	灰白	75	S K 254	浜北産 東山72平行 施釉 ツケガケ
18	須恵甕				A B H J L	良好	灰		S K 254	末野産

土坑出土遺物観察表（第350・351図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
19	土師坏	14.5	5.1		B E	良好	橙	100	S K 258	+41.4cm 内外面赤彩
20	土師坏	16.4	4.3		B E	普通	橙	60	S K 258	+7cm
21	土師甕	16.8	26.8		A B E J L	良好	明赤褐	70	S K 258	+37.1cm 指頭痕
22	土師甕	(23.7)	23.0	(7.6)	A B D E F	普通	にぶい黄橙	55	S K 258	+45cm
23	土師坏	(13.2)	3.2		A B E	良好	橙	10	S K 259	
24	土師坏	(13.0)	5.6		A B E	良好	橙	25	S K 260	内面煤付着
25	土師甕	(20.0)	28.1	10.0	A B E J	普通	にぶい橙	20	S K 260	外面煤付着
26	鉄製紡錘車	直径4.40cm 孔径0.75cm 重さ37.61 g							S K 251	軸棒の両端部を欠く
27	棒状鉄製品	現存長2.13cm 幅0.35cm 厚さ0.30cm 重さ4.43 g							S K 251	
28	棒状鉄製品	現存長4.30cm 幅2.10cm 重さ17.98 g							S K 251	
29	棒状鉄製品	現存長4.12cm 幅0.58cm 厚さ0.70cm 重さ19.26 g							S K 254	
30	刀子	現存長20.90cm 背幅0.40cm 刃幅1.20cm 重さ53.12 g							S K 254	

土坑出土土錘観察表（第351図）

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
31	6.10	2.05	0.60	19.93	B a IV	C	黄橙	100	S K 92
32	6.15	1.55	0.45	10.67	B a IV	A	にぶい褐	100	S K 92
33	(4.30)	1.45	0.45	7.00	B a III	A	浅黄橙	60	S K 93
34	5.45	1.90	0.55	15.46	B a V	B	黒褐	100	S K 251
35	4.55	2.15	0.75	17.01	E b V	A	明赤褐	100	S K 251
36	(3.15)	1.45	0.40	4.29	—	A	灰白	—	S K 251
37	(2.55)	1.80	0.60	5.59	—	A	にぶい赤褐	—	S K 251
38	4.80	2.20	0.70	13.95	A b V	A	にぶい褐	100	S K 252
39	5.95	2.90	0.55	37.67	C a IV	A	にぶい赤褐	100	S K 254
40	6.50	2.75	0.70	34.18	C a IV	A	にぶい赤褐	100	S K 254
41	6.10	3.05	0.55	43.40	C a IV	A	にぶい赤褐	100	S K 254
42	6.00	2.75	0.80	33.72	C a IV	A	にぶい黄橙	100	S K 254
43	5.40	1.70	0.50	9.93	C a V	C	にぶい黄橙	100	S K 254
44	5.55	1.60	0.50	10.54	B a V	C	灰黄褐	100	S K 254
45	5.35	1.60	0.60	9.48	B a V	C	浅黄橙	100	S K 254
46	5.00	1.75	0.60	10.46	C a V	C	灰白	95	S K 254
47	4.40	1.70	0.55	34.61	C a V	B	黒褐	100	S K 254
48	4.95	1.50	0.60	7.37	B a V	C	にぶい黄橙	100	S K 254
49	4.95	1.60	0.40	6.69	C a V	C	にぶい黄橙	100	S K 254
50	(3.80)	2.80	0.60	6.97	—	A	暗褐	—	S K 254
51	3.25	1.25	0.40	15.13	A a VI	C	灰黄褐	100	S K 254
52	6.65	2.10	0.75	2.92	B b III	A	明赤褐	100	S K 255

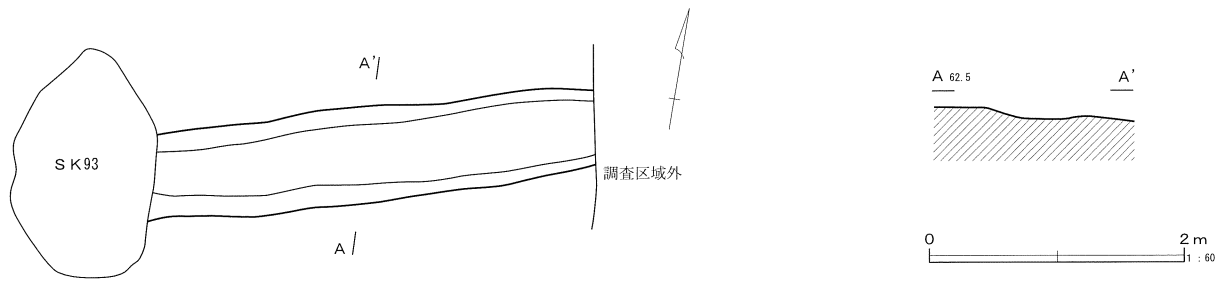
4. 溝跡

第2号溝跡（第352図）

G-21グリッドに位置する。東端は用地の関係で調査できなかった。西端は第93号土坑で切られ、その先は検出されなかった。検出された規模は、長さ

3.52m、幅0.78m、深さ0.05～0.12mである。底面は東から西に向かって低くなっている。

遺物は、須恵器坏、土師器甕、陶磁器類が合計7片出土したが、何れも小片である。



第352図 第2号溝跡

5. 性格不明遺構

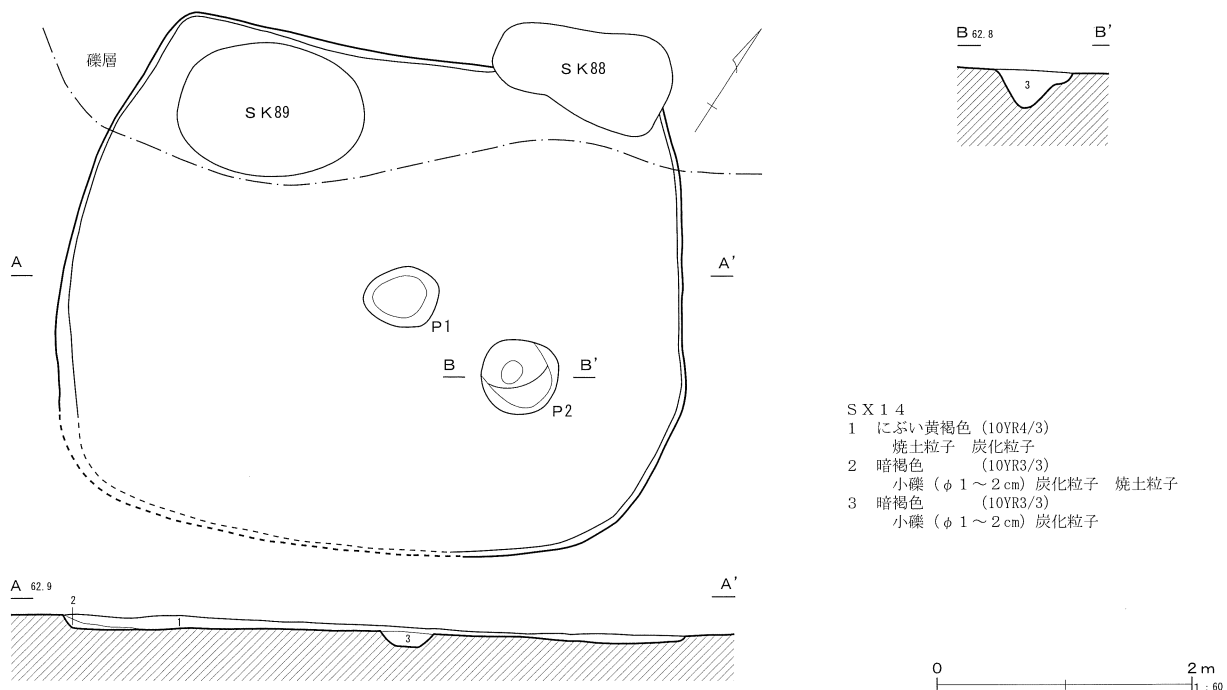
第14号性格不明遺構 (第353・357図)

F・G-25グリッドに位置する。第88・89号土坑に切られる。用地の関係で2回に分けて調査され、南壁の一部は検出できなかった。平面形は隅丸長方形で、長軸4.24m、短軸3.90m、深さは0.08m前後である。主軸方位はN-58°-Eを指す。北端は礫層

を切り込んで構築されていた。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ちあがる。ピットが2本検出された。

遺物は、土師器坏・甕の小片が出土したが、図示可能な遺物は、土師器暗文坏1点のみである。



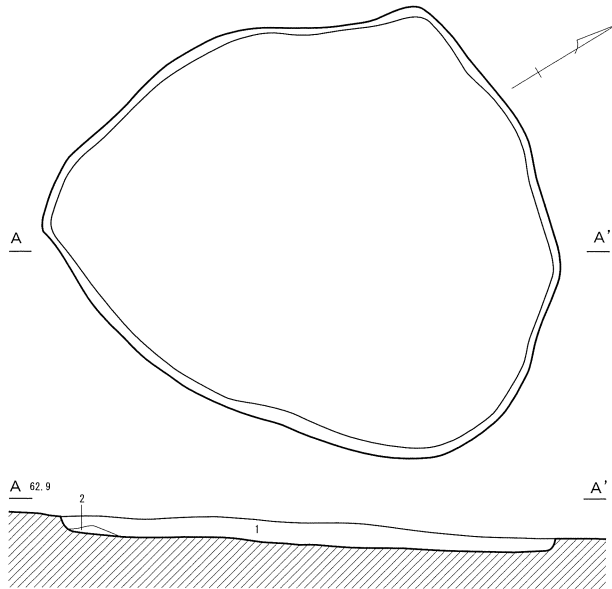
第353図 第14号性格不明遺構

第15号性格不明遺構（第354・357図）

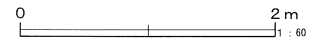
G-24グリッドに位置する。平面形は歪んだ楕円形で、長径4.12m、短径3.20m、深さは0.18mである。主軸方位はN-11°-Eを指す。

床面はやや起伏があり、壁は垂直に立ちあがる。

遺物は、器種の判別が困難な土師器の小片が少量出土したが、図示可能な遺物は土錘1点のみであった。



- S X 1 5
 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 焼土粒子 炭化粒子
 2 暗褐色 (10YR3/3) 小礫 (φ 1~2cm) 焼土粒子



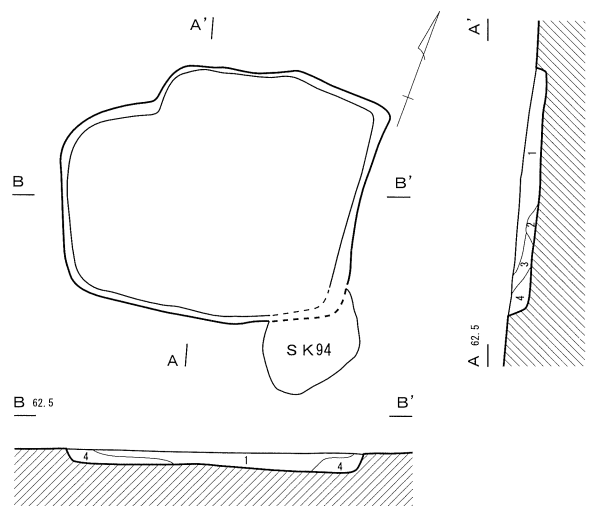
第354図 第15号性格不明遺構

第16号性格不明遺構（第355図）

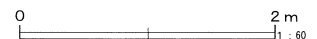
F-24グリッドに位置する。第94号土坑に切られる。平面形は北西隅の欠けた長方形で、長軸2.44m、短軸1.98m、深さは0.17mである。主軸方位はN-76°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ちあがる。

遺物は、土師器坏・甕の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。



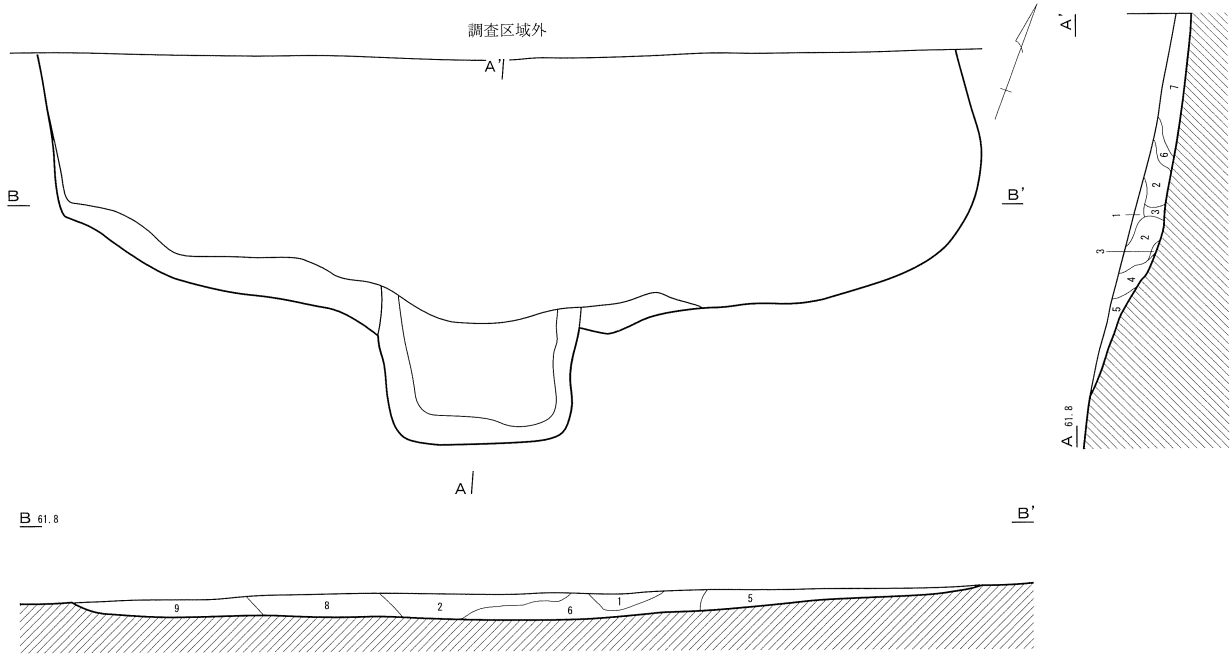
- S X 1 6
 1 黒褐色 (10YR3/2) 褐色粒子
 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) (10YR3/2)
 3 黒褐色 (10YR3/2) にぶい黄褐色シルト
 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3)



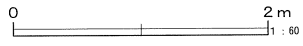
第355図 第16号性格不明遺構

第17号性格不明遺構（第356・357図）

E・F-25グリッドに位置する。調査区北側の荒川に向って落ちる斜面で検出された。北半は調査区域外にある。検出された規模は、東西7.38m、南北2.07m、深さは0.20m前後である。南壁中央には1.50×0.96、深さ0.12mの張り出しが検出された。



- | | | |
|-----------------------|--|--------------------|
| S X 17 | | 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) |
| 1 黒褐色 (10YR3/2) | | 6 暗褐色 (10YR3/3) |
| 2 黒褐色 (10YR2/2) 炭化材極多 | | 7 暗褐色 (10YR3/4) |
| 3 灰黄褐色 (10YR4/2) | | 8 暗褐色 (10YR3/3) |
| 4 黒褐色 (10YR3/2) 炭化粒子多 | | 9 暗褐色 (10YR3/3) 砂質 |

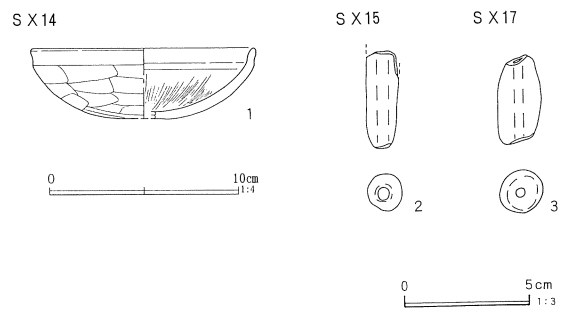


第356図 第17号性格不明遺構

主軸方位は張り出しの方向でN-160°-Eを指す。

床面は斜面と同様に下がり、壁は緩やかに立ちあがる。

遺物は、土師器・甕の破片が少量出土したが、何れも小破片で、図示可能な遺物は、土錘1点のみであった。



第357図 性格不明遺構出土遺物

性格不明遺構出土遺物観察表 (第357図)

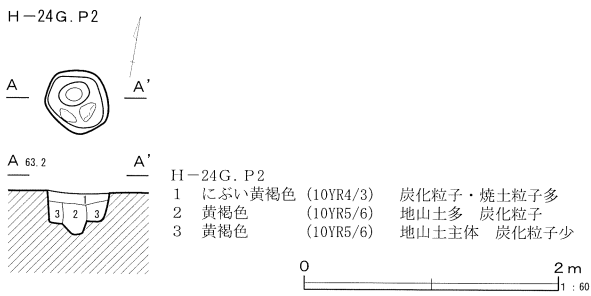
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師環	(11.7)	3.7		B D E G J	良好	明赤褐	25	S X 14	

性格不明遺構出土土錘観察表 (第357図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	(3.80)	1.50	0.50	6.44	B a IV	A	にぶい黄橙	55	S X 15
3	3.50	1.80	0.40	9.32	B a VI	A	浅黄橙	100	S X 17

6. ピット

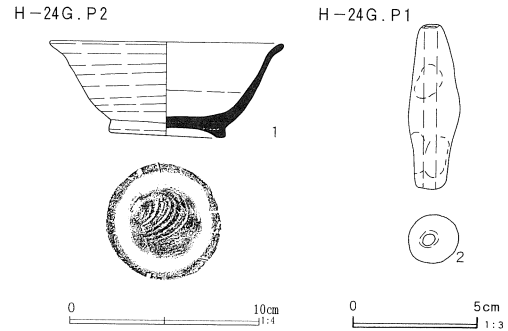
F区では約30本のグリッドピットが調査されたが、E区同様、図示できた遺物を出土したピットのみ記述する。



第358図 グリッドピット

H-24グリッド ピット 2 (第358・359図)

平面形はいびつな円形で、径は0.49m、深さは0.32mである。土層断面では柱穴の可能性が高いが、周辺に続くピットは見られない。遺物は、須恵器高台付椀1、土錘1点が出土した。



第359図 グリッドピット出土遺物

グリッドピット出土遺物観察表 (第359図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	須恵椀	(12.3)	5.0	5.9	A B F	1	灰	80	H-24G.P2	末野産 底部回転糸切後高台貼付

グリッドピット出土土錘観察表 (第359図)

番号	長さ	径	孔径	重さ(g)	分類	胎土	色調	残存	備考
2	6.50	2.10	0.55	19.97	C a III	A	にぶい橙	100	H-24G.P1

報 告 書 抄 録

ふりがな	によいせきⅣ							
書名	如意遺跡Ⅳ							
副書名	大里農地防災事業六堰頭首工建設工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ<第1分冊>							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第285集							
著者氏名	岩瀬 謙・大谷 徹・栗岡 潤							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里町船木台4-4-1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦 2003 (平成15) 年 3 月 24 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
によいせき 如意遺跡	さいたまけんおおさとぐんかわ 埼玉県大里郡川 もとまちおおさざはたけやまあざ 本町大字畠山字 によい ほか 如意395他	11406	004	36° 7' 43"	139° 16' 10"	19971001~ 20001130	7,784	六堰頭首工 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
如意遺跡	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居跡	155軒	縄文土器・石器		遺跡全体で 総数3,200 点以上の土 錘が出土	
		奈良時代	掘立柱建物跡	4棟	土師器・須恵器			
		平安時代	竪穴住居跡	34軒	灰釉陶器・土錘			
			掘立柱建物跡	2棟	白玉・石製模造品			
		古墳~平安時代	竪穴住居跡	43軒	鉄製品			
			掘立柱建物跡	5棟				
		時期不明	竪穴住居跡	23軒				
			土坑	88基				
			性格不明遺構	4基				
			溝跡	1条				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第285集

大里郡川本町

如意遺跡Ⅳ

大里農地防災事業六堰頭首工建設工事関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅲ—

<第1分冊>

平成15年3月14日 印刷

平成15年3月24日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里町船木台4-4-1

電話 0493 (39) 3955

印刷／巧和工芸印刷株式会社